THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十二月號

昭和五年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

第四十五年 第十二號 第五百十五號

Agfa

モウベックス、カメラ

十六ミリ活動寫眞機（四十呎）

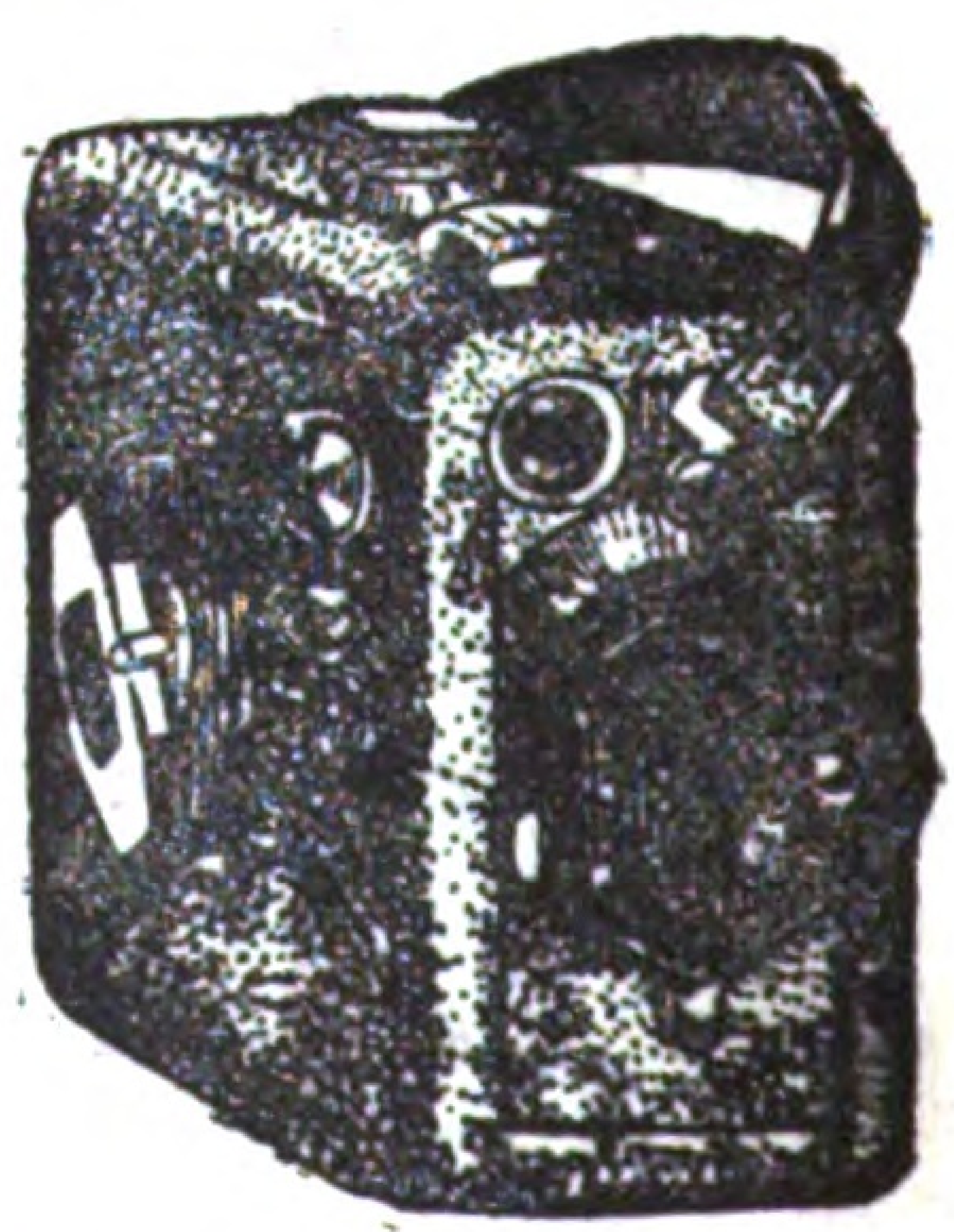
最も新しくて、最も廉價です

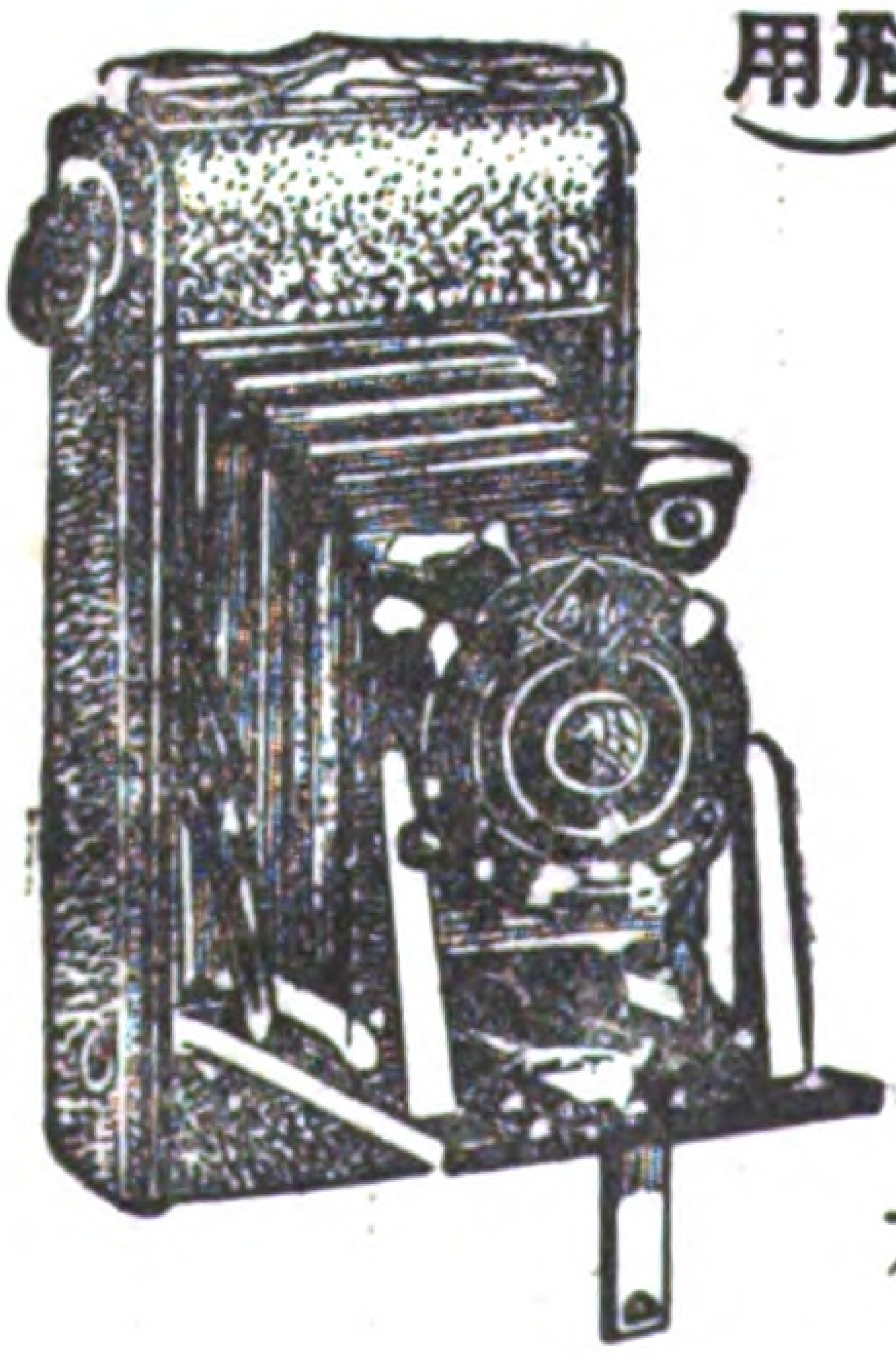
ビリー、カメラ

（ブローニー形ロールフイルム用）

全く初めての方でも

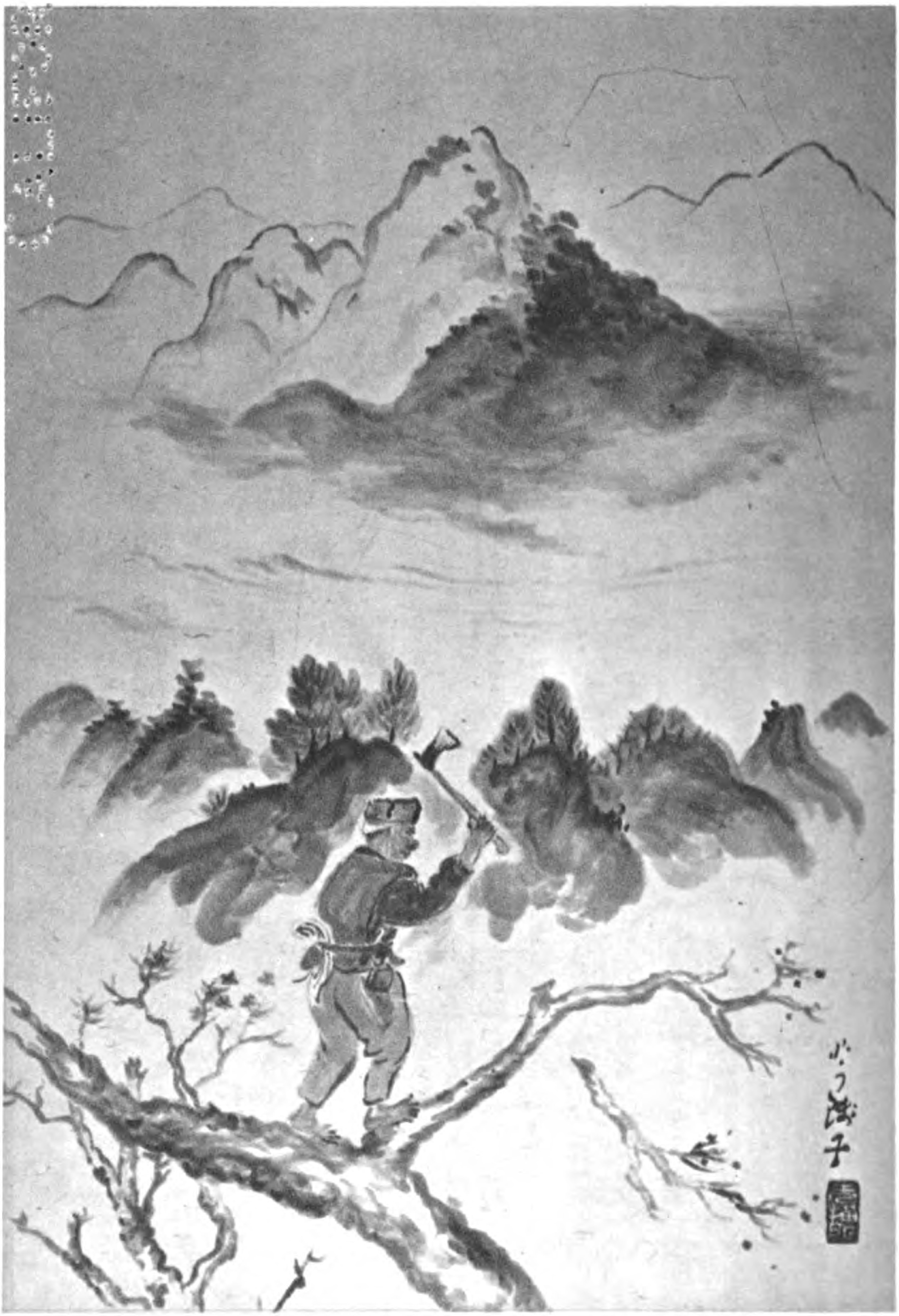
文句なしに好く寫せます





アグフア合名會社

東京　大阪



眠山働人　　小川芋銭筆

罌粟はなぜ紅い

宇野千代

◇鮮血淋漓・怖るべき愛慾の血書

死情・人殺・愛戀

宇野千代は日本在來の女流作家とは一寸ちがふ。その作家的手腕については今更喋々する必要はない。何よりも愛すべく怖るべきは彼女の彈力だ。またあの月光に踊る人魚にも比すべき妖しき美くしさである。またその青空に唄ふ雲雀のやうな朗らかさである。あゝ、なぜ罌粟は紅いか？自由に歌ひ大膽に愛する彼女の赤裸な姿がこゝにある。愛慾の聖典・青春の泉である。

裝幀は彼女をして「私は彼の巨大な楕にまつはりまつはり、夏は花咲き秋は紅葉して私の唄を唄はう」と叫ばしめた彼東鄉青兒の熱愛溢るゝ傑作。澁さとモダン性の諧調に鮮血色の飾函

四六判四六〇頁　定價一圓二十錢

中央公論社　東京驛前丸ビル　振替東京二四番

高橋亀吉著

日本財閥の解剖

好評廿版

菊版三六二頁
總布金文字入
定價二・五〇
送料〇・一八

小說「眞理の春」が藝術を武器とした資本閥の暴露なら、本書は正攻法によるそれだ。一書並讀せば妙。

財閥の五臟六腑

を抉る名醫のメス

一、日本財閥の總體的解剖
二、三井王國の解剖
三、三菱王國の解剖
四、住友王國の解剖
五、安田王國の解剖
六、淺野財閥の解剖
七、大倉財閥の解剖
八、古河財閥の解剖
九、川崎財閥の解剖
十、大川事業閥の解剖

日本經濟に於ける少數財閥の支配力は世界に比を見ぬほどに甚大だ。街上に氾濫する失業群も、豐作に泣く農村の受難者も凡ては財閥に運命を握られてゐるのだ。無產大衆を繰る支配網・資本網を知ることは刻下の急務だ。

東京驛前丸ビル　中央公論社發行　振替東京三四番

猶太人ジユス

フオイヒトワンゲル著・谷讓次譯

革命的大衆文學の世界的王座

果して!!熱讃絶讃遂に六十五版を突破す!

「ジユス」一巻現れてアマゾンの如く悠々とヒマラヤの如く巍然と、群小讀物を一蹴して今し大衆文藝の王座に就く。身分賤しく智慧豐かなる絶世の美男彼ジユスを廻つて狂亂痴愚の限りを盡す皇帝貴族騎士美姫妖婦僧侶の一大レビユウ。雄大艶麗古今に比なく、肉臭咽ぶ許りのエロチシズムと華かなる反逆兒の面影、新しきスリルは毎頁に滿つ!!

ジユスを用心しろ!!

こんな言葉が流行り出したカフエで、ダンスホールで、盛り場の一隅で或は又ビルデイングの片隅で、例へば、こんな風に……

「歸りに一ぱいつきあはないか?」

「ホツホ、大さう、くらしむきがよろしいやうですな。」と、横合から、一人がいとも輕く、

「おい、ジユスを用心しろ!」

或は又退社後の化粧室で、

「あら、あなたのヴアニチイ・ケイス、とてもすてき、こんなのないわ。」

「フフ、ヤに風向きがいゝわれ。」と、第三者のダッチ・カツトが、いともかろやかにそして朗らかに

「だから、ジユスを用心しろッてんぢやアないの。」等々

等々。

四六判七百頁送料十二錢
定價一圓五十錢

東京驛前丸ビル
振替東京三四番

中央公論社發行

財閥を震撼せしめ　大衆を狂喜せしめた名作

眞理の春

細田民樹著

◆サラリーマンは讀め！　諸君の階級的立場は一讀瞭然、

◆若き學徒は讀め！　諸君のマルクス理論を檢討する絶好資料。

◆不況に惱む小中商工業者は讀め！　魔の手大資本の正體完膚なし。

◆風紀頽廢を慨する憂國の士は讀め！　淫風蕩々たる財閥の私生活を何と見る？

◆失業者は乞ふ、圖書館に就いて讀め！　諸君の膏血は誰のために搾られたのだ。而も職を奪つたのは誰だ！

◆サラリーマンの細君は讀め！　君は夫と共同の敵を感じねば嘘だ。

◆ブルジョア夫人も讀め！　あなた方の夫は糟糠の妻を差措いて何をしてゐるか？

◆職業婦人は讀め！　新時代の戀愛の指針が茲にある。

四六判五百頁・定價一圓五十錢
函入特製美本　送料十二錢

中央公論社出版部

財閥を震撼せしめ大衆を狂喜せしめた名作

眞理の春

細田民樹著

◆サラリーマンは讀め！　諸君の階級的立場は一讀瞭然。

◆若き學徒は讀め！　諸君のマルクス理論を檢討する絶好資料。

◆不況に惱む小中商工業者は讀め！　魔の手大資本の正體完膚なし。

◆風紀頽廢を慨する憂國の士は讀め！　淫風蕩々たる財閥の私生活を何と見る？

◆失業者は乞ふ、圖書館に就いて讀め！　諸君の膏血は誰のために搾られたのだ。而も職を奪つたのは誰だ！

◆サラリーマンの細君は讀め！　君は夫と共同の敵を感じねば嘘だ。

◆ブルジヨア夫人も讀め！　あなた方の夫は糟糠の妻を差措いて何をしてゐるか？

◆職業婦人は讀め！　新時代の戀愛の指針が茲にある。

四六判五百頁・定價一圓五十錢
函入特製美本　送料十二錢

中央公論社出版部

威力・魅力・迫力
類を絶す

四十年
第一部

ゴールキー著・大宅壯一譯

世界的文豪の名に値する唯一の存在であり世界プロレタリアの父なるゴールキーが現在執筆中の三部作の第一部。人類最大の苦惱・試錬・歡喜だつたプロレタリア革命は如何にして闘ひ取られたか？　ロシヤのプロレタリヤと進歩的なインテリとが搾取の鐵鎖を斷ち切るに至る迄の惡戰苦闘は、四十年に亙る作家生活によつて獲得した文學的技術と經驗を通して活寫されて遺憾がない。

本書は主人公クリム・サムギンの生涯を通じて見た**近世ロシア革命史**である。帝政末期に於ける青年インテリゲンチヤが如何に苦悶したか、バクウニン、クロポトキンから如何にしてマルクスに轉化したかの敍述は現代日本に痛烈に訴へずには措かない。一面最も要領よき**近代文學史**であり**近代思想史**だ。

四六判布製一千頁
定價二圓稅十八錢

中央公論社發行

東京驛前丸ビル
振替東京三四番

兇蠻暴虐の教訓

——(卷　頭　言)——

臺灣兇蠻の暴虐は眞に昭代の一大不祥事。その日々の報道は我々の心をいたましむること夥しい。

内地人と見れば頑是なき子供をまでも殺戮すると云ふ、その虐殺の跡を弔つた人の話を聞いてさへ我々は身の毛のよだつを覺へずには居れぬ。何の咎めありて我々は斯の慘虐を受けねばならぬのか。頑強に凶蠻の手をゆるめぬと云ふ彼等兇蠻の暴狀に關する日々の報道に接し、人々が切齒扼腕して憤激の情を洩らすも無理はない。

警察隊だけでは追つ付かず軍隊が出動した。討伐令には「邦國の施政に叛逆する兇蕃を殲滅すべし」とある。殲滅を期して帝國の軍隊は彼等を奥地に逐ひやり、部落を焼き、居るに處なからしめつゝ、袋の鼠の窮地に陥れて完全に掃蕩の效を擧げるのだと云ふ。單に内地人なるが故に内地人を殺すと云ふ彼等の暴虐から同胞を保護するためには、成る程この外に方法がないのかも知れぬ。

我々内地人の安全は彼等の剿滅に依て完全に購ひ得る、併し乍ら斯くして我々の良心は果して能く安ずるを得るだらうか。蕃人はもと我々の生れ乍らの敵ではない。この可憐なる半開人の撫育を托せられてから既に三十餘年になる。而して今次の暴動に於てあれ程の組織的活動を示せる點だけに就て觀ても、この多年にわたる我が撫育の努力は一面に於て著しく功果を擧げたと謂はなければならない。但だあれだけ智能を進歩させながら、獨り日本人に對する情感に於て遂に何等の融解をもたらし得なかつたのは、日本人の理蕃能力のために深く悲まざるを得ざる事實ではないか。今次の暴動が徒らに血に渇く蕃人の兇暴性に基くものに非るは、全然本島人に手を觸れぬことに觀ても分る。内地人のみを敵視する彼等の兇暴を嘆くと共に、這の事態に直面して我々は一面亦痛切に世界の公義の前に羞辱を感ぜずには居られぬ。

福澤諭吉は幕末の海外旅行の見聞の一節として自傳の中に語つて居る。「龍動に居るとき、或る社中の人が社名を以て議院に建言したと云ふて其草稿を日本使節に送て來た。建言の趣意は在日本英國の公使アールコックが新開國たる日本に居て亂暴無狀恰も武力を以て征服したる國民に臨むが如し云々とて、種々樣々の證據を擧げて公使の罪を責る其證據の一つに公使アールコックが日本國民の靈場として尊拜する芝の山内に騎馬にて乗り込みたるが如き言語に絶えたる無禮なりと痛論せる節もある」。かくてその公明正大に驚いたのだが、顧みれば七十年の昔である。而して蕃地は我々に取て外國ではない。福澤先生をして今日に在らしめば最近の形情を何と云ふだらうか。

内地人の安全は飽くまでも保護したい。併し蕃人の住居を焼き掃ひ更に彼等の鏖殺を期すること、恰かも震災當時朝鮮人を誤り取扱つたと同じ樣な方策を繰返していゝのだらうか。目前の急務に忙殺されて理蕃大計の根本的反省を怠つてはならないと考へる。

中央公論



第四十五年第十二號
十二月號
第五百十五號

一九三〇年世界經濟總觀

——世界情勢展望(1)——

世界經濟批判會

目次

一　世界恐慌の歷史的地位

一九三〇年は遂に世界經濟恐慌の年となつた。沒落資本主義は玆に愈〻第二の回轉期に突入せんとしつゝある。來るべき三十年代は正にこの期を形成するであらう。その回轉期の先驅として、現在の世界恐慌の占める歷史的地位は、決定的に重大である。

恐慌は資本主義發展の必然的な一環である。近代產業は、例へばイギリスにおいては、一八二五年の恐慌をもつて、その循環の第一步を踏み出したと云はれる。爾後產業の循環は、既にマルクスの指摘してゐる如く、靜止狀態、活氣の增進、產業の繁榮、過剩生產、恐慌、產業沈衰、靜止狀態等の景氣局面の周期的回轉をもつて進展した。勿論、恐慌は生產力の瞬

間的强行的破壞を惹き起したが、だが資本主義は全體として上昇的であり、たゞに生產力の發展のみならず社會的消費力の擴大をさへ作つた。ところが戰後においては、產業循環とその周期との、戰前までの正常な型は殆んど消滅し、それに代つて熱病の發作的な景氣曲線が現はれた。好景氣局面は著しく短期間となり、ともすれば崩れがちであり、之に反して恐慌は瞬間的經過の代りに、期間的となり、沈滯期は動もすれば慢性的となつた。『資本制生產方法の歷史的任務は人間勞働の生產力をば、顧慮する所なく、幾何級數的の速度を以て發展せしめるにあるが』、戰後の景氣運動における局面推移の狀況は、既に『資本制生產方法が、それ自身老朽して益々無用の餘生を送りつゝあることを』（マルクス）明瞭に示した。

レーニンはその天才的な慧眼をもつて、帝國主義をば資本主義發展の最高の段階と規定し、その經濟的基礎を獨占に見出した。凡そ獨占は、不可避的に、停滯と解體との傾向を作り出す。だから彼は、帝國主義を過渡期にある資本主義或はもつと正確に言へば、死滅しつゝある資本主義として特徴づけた。だが『この解體の傾向が資本主義の急激なる發達と相容れないと考へるのは、誤りであらう。決してさうではない。個々の產業部門、個々のブルジョア層、個々の國々は、帝國主義の時代には明に、多かれ少かれ强く、これらの傾向の或は一を、或は他を示すのである。全體として資本主義は以前よりも著しく急速に發達してゐるが、だがこの發達は、たゞに一般的に益々不均等となるばかりではなく、この不均等はまた特に、最も資本力の强い國々（イギリス）の解體に現はれる』（レーニン）。一般的には個々の產業部門、個々のブルジョア層、個々の國々における發展の不均等、特には最も資本力の强い國々における解體の傾向は、『特に露骨な、激しい矛盾軋轢、衝突を醸し出してゐる。『獨占資本が資本主義のあらゆる矛盾を如何に甚しく激成させたかといふことは、周知の事實である。戰後における景氣運動の混亂は、この激成された矛盾の一表現であり、『獨占資本主義における解體傾向が支配的となつた『死滅しつゝある資本主義』の景氣運動の××であらねばならぬ。

帝國主義が過渡期にある資本主義たることの歷史的證明は、大戰中におけるロシャ革命から續いて戰爭直後の二三年間に亙る第一の回轉期によつて與へられた。ロシャにおいては一擧にしてツァー資本主義が崩壞した。續く二三年間、帝國主義的戰爭の破壞的作用と戰爭經濟に基く飢餓恐慌とは、全ヨーロッパをして資本主義の一般的危機に直面せしめた。地

球の六分の一の土地は、資本主義的世界から解放され、そこには別個の制度の社會が建設された。爾後サヴエート同盟の強化發展は目醒しいものがある。それだけをもつても我々は既に充分に資本主義の一般的危機について確認することが出來る。

なるほど中部及び西部ヨーロッパにおいては、ブルジョアジーは大仕掛の退却の戰略と社會民主々義者の反階級的協力とによつて、差し迫れる一般的危機を一時的ではあつたが、ともかくも克服し、相對的安定を實現することに成功した。合理化はこの時期を特徵づける方策であり、勞働の生產力の發展、特には勞働强度の增進による際限なき搾取の强化がその本質であつた。生產力は再び回復された。だが裏のないメタルはないのだ! それは反面において國內市場の甚しい狹隘化を惹き起した。『合理化は直接的に生產過剩へと導く。』(ラピンスキー)だから合理化による生產力の發展、從つて景氣の亢進は既に甚しく狹小なる範圍に局限されてゐた。この狹小なる範圍はたゞ海外市場の獲得によつてのみ擴張されえた。だから國境にはカルテル關稅の高い障壁が設けられ、國內には獨占の形成が進んだ。外にはダンピングが入り亂れ、商品輸出の特別の形態たる資本輸出が相爭ひ、市場獲得のための鬪爭が激化した。第二次の帝國主義××の危險が增大した。

こゝに我々は、戰後益々顯著となつて現はれた發展の不均等を顧慮すべきである。ヨーロッパの先進資本主義諸國に停滯と解體の傾向がはつきりと窺はれる時に、北アメリカには尙上昇がつゞいた。一九二〇——二一年の恐慌後、アメリカは豐富な資本力をもつて大規模な合理化を行つた。二四年と二七年と二度の逆轉を經驗しはしたが、全體として景氣は躍進に躍進を重ねた。面白いことには、戰前の、特には上昇的資本主義時代における經驗を忘却し、戰後のヨーロッパにおける景氣運動を見馴れた人々は、景氣の展開が稍正常的に十年も續くと、そこに何んらかの魔術的祕法が伏在してゐるかの如くに大騷ぎして叫ぶやうになつた。『アメリカには萬年繁榮がある!』

今では單に、世界經濟の中心がアメリカに在るといふだけではない。世界の資本的支配權がアメリカの、しかも十三の金融資本團の掌中に歸した。英米の激しい對立が、最も一般的な最も中心的な對立として、歷史の舞臺に登場してきた。

かくて發展の著しい不均等のうちに、資本主義のあらゆる矛盾を激成しつゝ、一九二八年頃には生產力は既に戰前の水

準を突破した。だがそれと共に矛盾の重壓は愈ゝ加はつた。相對的安定の基礎がぐらつき始め、解體の作用は强まつた。第三期の樣相は種々なる部面に顯著に現はれ始めた。もはや經濟恐慌の襲來は避くべからざる時點に達した。だがこの恐慌は單なる經濟恐慌以上に進展する××性を包藏してをり、しかも、資本主義の一般的危機の重大なるモメントたり得る。なんとなれば、前の一般的危機の克服の過程は、畢竟、一般的危機のモメントの擴張再生產の過程にほかならなかつたから。一九三〇年の世界恐慌の歷史的地位は、このやうに規定され、またかゝるものとして評價さるべきである。

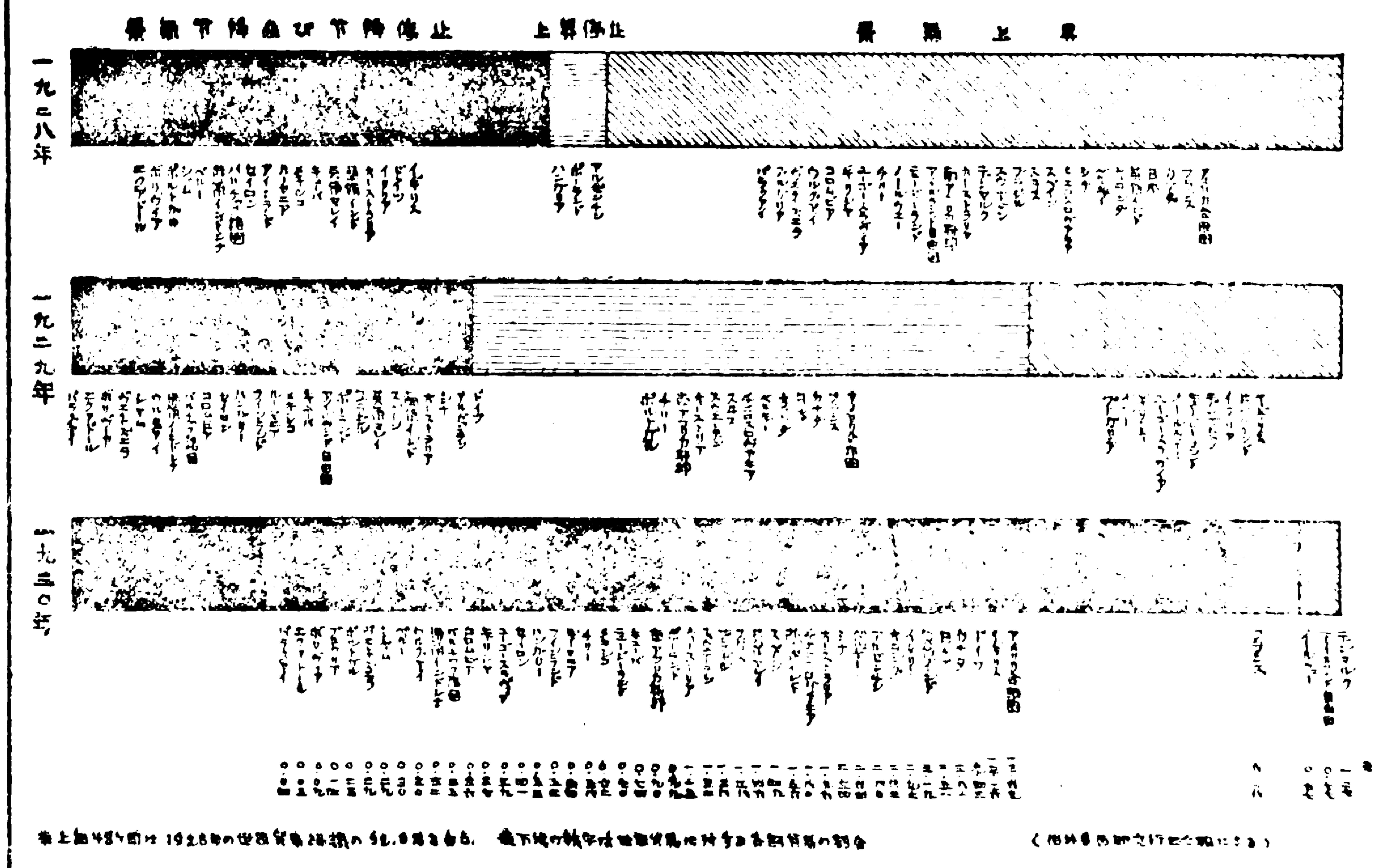
二　世界恐慌の現勢

A　世界恐慌の地理的分布とその深度

一九二九年秋アメリカ合衆國を襲つた經濟恐慌は、多くの景氣觀測所の豫報に拘らず、颶風の如く今や殆んどすべての先進資本主義諸國竝びに植民地半植民地諸國を席捲し、絶間なき不安な情勢を招來した。

ベルリン景氣研究所は一九三〇年中頃の情勢に基き次頁にかゝげる如き興味ある世界景氣圖を發表した。我々はその後入手し得た諸材料を參照しつゝ各國の景氣（寧ろ恐慌）の現勢を簡單に說明しよう。

本年前半期に『景氣の島』として恐慌波動の襲來を受けなかつたノールウェー、デンマルク、フランス、アイルランド等においては既に世界恐慌によりその發展を阻まれ、豫期せらるゝ如き景氣亢進もなく或は部分的には恐慌狀態に陷れるものさへ存する。特にフランスに就きて見るに生產は二八年に急速なる發達をなして二九年にはその指數一三九（二八年には一二七）であつたが二九年末より一四四の高度を持續して、重工業、纖維工業、建築業においては既に一般的停滯が、自動車工業では減退さへ認められる。一般的大衆失業といふべきものは未だないが、しかし失業增加の傾向がある。卸賣物價指數は殆んど世界水準に追ひつき、株式相場は前年初より漸次軟弱となり（前年七月より一年間に一一%の下落）、利子の著しき低下にかゝはらず資本發行は本年第二四半期には四六億八千萬フラン（第一四半期の七一%）に減少したが未だ



第一圖　世界の景氣（各年度中間の狀態）

一般的には恐慌が現はれてゐない。しかし他方農村の窮状は他の諸國と同じく生産過剩、價格の崩落（殊に小麥、葡萄酒等の）によつて激化されてゐる。貿易は世界恐慌の影響により本年初八ヶ月には前年同期の一一%（約八十億フラン）の減少をみた（殊に原料輸入及び完成品輸出において）。フランス資本主義は從つて國內市場及びその廣大なる植民地市場の商品消化力の擴張に努力してゐるが（所謂『タルヂュー五ヶ年計畫』）、それは結局フランス資本主義內部に含まれる諸矛盾の尖銳化に導くであらう。現下の諸事情を見るとき從來の如き例外的地位の維持は不可能であらう。恐慌局面の進展による資本主義危機の切迫はブリアンをして反サヴエート・ブロックの強固化（ヨーロッパ經濟聯盟）の主唱者たらしめた。

現在恐慌局面の端初にあるオランダ、スヰス、スウェーデン等、ならびに植民地ニュージーランドにおいては景氣下向運動は未だ個別的で、主要生産は部分的には未だ減少せざるものもあるが、それ等の産業が著しく海外輸出に依存する故、貿易の不振はこれ等の諸國にとつて極めて不安な前途を與へてゐる。

殘る世界の資本主義諸國は何れも恐慌の底知れぬ泥沼に沒入してゐる。その內で世界恐慌の進展に最も決定的な意義を持つのは**アメリカ合衆國**である。茲においては本年春下向運動は一時停頓の樣相を示したが、その後恐慌は一層深化し物價、株價の下落は止まず（フィッシャーの指數によれば前年九月末より一年間に夫々一三%、四一%の下落）、フーヴァーの大掛りな組織的恐慌撲滅策にも拘らず生産（アナリスト生産指數によれば前年八月より一ヶ年に一〇六・八より八一・四に）及び建築註文（本年九月は前年九月の三三%減の一千二百四十二萬ドル、フーヴァー計畫の一綱領は土木建築業の振興にあるを思ひ起されよ）は激減した。他方操業短縮、賃銀の切下、失業の增大（詳細は後述）は、農産物殊に穀物及び棉花の價格崩落による中小農民經濟の窮乏化と共に國內市場を狹隘化する。かくて合衆國資本主義は關稅其他の障壁の增大によつて（新關稅率は消費者にとつて約十億弗の負擔！）外國商品輸入の制限を增大し、他方、恐慌よりの血路を輸出強行に求めて、海外における市場獲得競爭を尖銳化し、恐慌のヨリ高度への發展を促進しつゝある。

世界市場における覇權獲得鬪爭のためのアメリカ合衆國との對立を恐慌によつて激化せられた**イギリス**においては、戰後アメリカにおける如き目覺しき景氣亢進を經驗することなく、慢性的不況より恐慌への途を辿つた。生産は本年第二四

半期には二四年の水準に低下し、重工業における註文は減少を續け、鐵鋼業、造船業、金屬加工業、特に炭礦業及び東洋市場より不斷に驅逐されてゐる木綿工業における生產及び就業者數の減退（木綿工業においては操短五〇%を超ゆるものさへある）は殊に著しい。從つて失業者の增大は季節的變化を越へ、保險加入失業者は本年十月初には既に二百十六萬（一ケ年間に約二倍）に達し、冬季には總失業者は三百萬に達するであらう。物價下落は產業資本を著しく壓迫し、合理化が强行されるに拘らず好轉の見込なく、貿易は不振を極め保護貿易への方向轉換が有力金融資本家によつて主張され、十月の英帝國會議においては英帝國國內市場の確保が重要をなすに至つた。

このイギリスと同樣に戰後景氣亢進を經驗しなかつた諸國の一は日本である。二七年春における金融恐慌の整理未だ完了せざる內に襲來せる世界恐慌は三〇年初における金解禁と共に恐慌を尖銳化した。鐵鋼業は世界市場價格低下と一般的不況殊に軍備縮少によつて著大な打擊を蒙つた。棉花崩落、內亂及び銀價暴落による支那市場の動搖、印度綿布關稅引上等は世界恐慌と共に日本木綿工業の恐慌を激化する。最も不良な狀態にあるのは製絲業である。生絲、絹織物等は日本の輸出の殆んど半を占め、その約八〇%はアメリカ合衆國に輸出される。從つて合衆國の恐慌が直ちに生絲消費の減退を招來し、これがために輸出は極めて不利な影響を受けてゐる。かゝる事情の下において木綿工業、製絲業を初めとして生產制限が盛に行はれ、勞働者の解雇、賃銀の切下が隨所に行はれつゝある。更に生絲價格の下落はその原料繭價の暴落を惹起し、米價の下落と共に、さらでだに窮乏を極めた農村は益ゝ危殆に瀕するに至つた。

ドイツにおいても生產の發展は合理化完成後殆んど停滯し、本年六、七月には既に二九年水準以下約一七%に下つた。石炭、鐵、鋼、機械、造船等の重工業を初め電氣、建築、車輛製造等の生產手段工業全般に亙り著しき生產減退である。纖維工業も思はしくなく、工業品農產物間の鋏狀價格差は益ゝ著しく、政府の諸方策に拘はらず、農業の不況は益ゝ增大する。他方被扶助失業者は二九年十月以後一ケ年に約二倍（二一六萬但し總失業は本年七月末には二七六萬同じく約二倍）に增加したが、失業扶助支給狀態は益ゝ惡化するのみである。さらに賃銀切下、勞働時間延長、勞働强度化等の資本家の攻擊に對して勞働者の不斷の鬪爭が深刻化しつゝある。本年五月より實施せられたヤング案の賠償負擔と、恐慌發展と共

に加重する社會的諸施設の支出とは、最近幾多の財政案と内閣とを厭殺した。かゝる情勢の下に行はれた九月の總選擧とその結果は獨逸ブルジョアジーのファシズム化、ブルジョア陣營内の動搖を暴露し、階級鬪爭の激化とKPDの輝かしき勝利とが齎された。

ファシスト獨裁の國イタリーにおいても、ファシスト政府の樂觀的報告に拘らず、生産(殊に人絹を除く蠶絲、木棉、羊毛等の纖維工業及び自動車工業において)著しく減少し、殊に最近において甚だしく、その一方には軍需品工業が保護されてゐる。しかも失業は七月には三四萬(一ヶ年に一・七倍)に及び、勞働者の生活は歐洲の最貧諸國以下である(國際勞働局統計によつてさへイタリー勞働者の實質賃銀はイギリスのそれの四三%)。農業においては、生産物暴落の結果、農業恐慌が起り、金融市場においては不渡手形が激増し、破産續出、意識的に金融資本の勢力伸長が圖られ、中小ブルジョア層は大衆的に破滅せしめられた。これらの諸事情は既にファシスト内部においてさへ多くの不滿を醸成し、ファシスト政權の基礎は動搖し始めた。

ポーランドを初めとしチェコスロヴァキア、オーストリヤ、ハンガリー、其他バルカン諸國等、東ヨーロッパに於ては既にアメリカ恐慌以前よりその工業及び農業は危機に瀕してゐたが、世界恐慌の反作用によつて一層惡化した。工業生産の激減(ポーランド紡績業は本年第二四半期には二九年の七六%、チェコの鐵工業は同じく約八〇%)、失業の增大(二九年七月以後一年間に約一・五――二倍)。他方此等諸國の重要產業なる農業における生産物(殊に穀物の)價格崩落は農民殊に中小農民の一層の窮乏化を促し、都會勞働者階級の貧困化と共に大衆運動は益々急進化してこれ等諸國のファシスト政權は今や多大の不安を感ずるに至つた。これ等危機克服のために十月五日アテネに開かれたバルカン平和會議は今や反ソヴエート・ブロック結成より一歩を進めて攻勢に轉じつゝある。

さらに轉じて半植民地及び植民地に移らう。これらの諸地方は帝國主義諸國にとつては重要原料及び食料品の供給地であり、他方多額の完成商品の市場でありると共に、重要投資市場である。

ラテン・アメリカ諸國においても合衆國恐慌の遙か以前より經濟恐慌が始つてゐた。殊に最近における植民地商品の價

性的過剩生產(ブラジルの珈琲、キューバの蔗糖、エクアドルのココア、ボリヴィア、ブラジルのゴム等)は、これら商品の主要顧客が合衆國なることとその生產が主として單一耕作によることゝにより、これら諸國の農業恐慌を激化する(ブラジルにおいては農業勞働者の失業增大し、賃銀の半減さへ實現されてゐる)。他方鑛產物の過剩生產(メキシコの銀、チリーの硝石及び銅、ヴェネズエラ、ペルーの石油等)と、それに基く價格崩落とはラテン・アメリカを一層の苦境に陷れ、さらには信用恐慌をさへ惹き起した。さらにこれら諸國の產業が專ら英米兩帝國主義と密接に結合する結果、これら市場の完全なる獨占を目的とする英米資本の鬪爭は世界恐慌によりて一層尖銳化して戰爭への危機を孕み、これとプロレタリアートの不滿轉換の意識的努力とは相結合して、支配階級間の涯なき政權爭奪に導く。

戰後漸次イギリスより經濟的にも離れたカナダの重要產業なる木材、製紙等の工業がアメリカ恐慌の影響を最も直接的に受けるのは當然であるが、他方小麥の世界的生產過剩とその暴落とは農村を著しく窮乏化し、政府及び當事者の統制策も完全に水泡に歸した。オーストラリヤに於ては事情はさらに惡化し、その輸出の大部分を占める小麥、小麥粉及び畜產物(殊に羊毛)等の世界的大暴落はこの國の經濟を全く破綻せしめた。

英帝國主義の飽くことなき利潤搾取に隷屬するエヂプトの恐慌は住民の購買力低下により益ゝ深刻化し、商工業者の多數の破產を伴つた。棉花の世界的恐慌、殊にはスダン棉花との競爭によりエヂプト棉花は海港に滯貨となつた。棉花救濟によつて涸渴せる國庫を關稅によつて充滿せんとする政府の政策は物價(殊に食料品の)を騰貴せしめ、たゞさへ最低生活費に滿たざる賃銀を受ける勞働者は一層困窮を極める一方である。英帝國主義の傀儡なるエヂプト政府は全く無力で、エヂプト各地に反英氣運が漲り、暴動が勃發してゐる。

エヂプトと同樣の事情にある印度においては、世界恐慌による棉花、黃麻の暴落がその農村經濟に大なる打擊を與へた。綿布關稅の引上、イギリス綿製品に對する特惠關稅は三月より實行せられたが、反英運動の熾烈を加ふると共に、外貨排斥國產自給運動が高調せられ、ために一般商取引不振を極め、一時盛況を呈した印度紡績會社も終に休業するものもあり、各種商店工場の閉鎖するもの相繼ぐに至つた。

しかし印度經濟は英帝國主義により徹底的に搾取せられ、國民運動の形態をとる反抗運動が一層急進化しないとは誰が保證出來ようか。

マレイ、蘭領インドネシヤ等においてはゴム、蔗糖、錫の生産過剩により中小經營者は危殆に瀕し、土民及び農業勞働者は飢餓線下に墜落し、各地に反亂が繰返されてゐる。

最後に世界における唯一の未開發のしかも開放せられた市場支那においては二九年末より銀價暴落により多數の錢莊、商賈の倒閉を見た、さらに貿易の澁滯は悉いては財政に惡影響を與へ、一月中旬海關稅の金建徵收を發表し、五月には金輸出及び銀貨輸入を禁じた。幾多の工場は危殆に瀕し、操業休止又は短縮を行ひ、上海武漢の工業地帶では失業者が增加した。他方北支那における年來の農業恐慌は一層深刻化し幾百萬の農民が文字通り飢餓線を彷徨してゐる。南支那の情勢はそれ程ではないが、長年の兵亂、租稅の誅求、階級鬪爭によつて困窮を極めてゐる。

B 世界諸市場の不況

1、價格の變動

世界經濟の個々の領域における景氣狀態は合して深刻な世界經濟的不況の樣相を現出してゐる。一般的な物價低落は、景氣が殆んど到るところ大部分今までの最低點まで下向したことを鋭く、總括的に表現してゐる。

a 商品諸市場における物價の下落

世界恐慌開始以來今日に至る約一ケ年間殆んど世界の重要諸國においては例外なく物價下落の現象が續いてゐる。本年上半期にはたとへ不齊一ではあつたがさらに一層急激なる下落が起つた。七八月において二三の國々では物價下落の勢はやゝ停止したり、中には僅少ながら騰貴したものもあつたが、九月に入つては農產物價格の終局的瓦解のため再び下落した。南半球における歷史はじまつて以來の豐作とサヴェート同盟のヨーロッパ諸國への輸出に脅かされて九月下旬シカゴ取引所における小麥期近物相場は一九〇六年九月以來の最低値であつた。リヴァプールでも一九一〇年以來の最低値が

現はれた。十月日本においては未曾有の收穫豫想の發表の結果、米穀取引所の立會中止となり、米價はつるべ落しに下向した。米價の下向はさらに肥料その他の農村消費物價格の下落を伴つた。かくて一九三〇年も殆んど終らんとする今日において尙物價下向運動は停止せず、進行中であると考へなければならぬ。

主要六ヶ國における一九二九年八月から一ヶ年間における物價下落率は大體第一表より窺ふことが出來るであらう。

第一表　物價下落比較表 1)

	1928年	1929年8月	1930年8月	一年間下落ポイント
ドイツ	100	98.6	89.1	9.5
イギリス	100	96.9	84.0	12.9
フランス	100	96.1	85.8	10.3
イタリー	100	96.5	82.0	14.5
アメリカ合衆國	100	100.1	86.1	14.0
日本	100	96.6	77.1	19.5

1) 日本以外は「經濟雜誌」Okt. 3.1930. S.1880 により算出,日本は三菱卸賣物價幾何平均指數より算出.

即ち過去一年間における下落ポイントは前年の約三ポイントに對し一三・五ポイントといふ大なる數に上り、下落率は一三・八パーセントにあたる。もつて今次の恐慌における價格低下のいかに急テンポなるかを示唆してゐる。そして下落率の最も大なるは、昨秋來デフレーション政策をとり本年一月金輸出解禁を行へる日本であつて、イタリーこれに次ぎ、さらにアメリカこれに續くは特に注意に値する。反對に下落率の最も少きはドイツで、フランスこれに次ぐ。

若しも我々がこれらの國々の物價指數の詳細について檢討を試みるならば、今次の物價下落中に現はれた諸特質を見出すことが出來る。こゝにこれらの一々に就いて詳述することは紙面が許さないが、次の諸點だけは指摘しておかねばならぬ。

（一）植物性食料品の破局的價格下落（小麥、米）
（二）植物性原料品の價格暴落（棉花、ゴム、蔗糖）
（三）獨占的でない金屬及び工業原料品の價格暴落
（四）獨占商品の價格下落少なし
（五）完成商品指數の僅かな下向

b　株式價格の破綻

第二表　ニューヨーク株式取引所上場株式 1)

	上場株式總數(百萬)	總價格(1億弗)	一株當り價格(弗)
1929年10月1日	1048	87.0	83.06
11 〃	1110	71.7	64.62
12 〃	1117	63.5	56.92
1930年1月1日	1127	64.7	57.38
2 〃	1164	69.0	59.25
3 〃	1170	70.8	60 52
4 〃	1178	76.0	64.54
5 〃	1199	75.3	62.79
6 〃	1220	75·0	61.46
7 〃	1231	63.8	51.89
8 〃	1269	67.2	52.94
9 〃	1282	67,7	52.81
10 〃	1284	60.1	46.84

1) 昭和五年十月十一日ニューヨーク聯合通信社發電による

昨秋以來世界のあらゆる大株式取引所は一齊に恐慌の眞只中に立つてゐる。ニューヨークの株式取引所においては本年のはじめ二三ヶ月は新たな活氣を示し昨年十月十一月破綻せる株式投機が復活せるものゝ樣であつた。しかしそれは昨秋の崩壞に際し多額の資金を投じて防戰買ひを試みた金融團に賣逃けの良き機會を與へたにとゞまつた。眞の景氣恢復が容易に起りさうにもないといふ事實がだん／＼に分つて來たことと、鐵道及び工業會社の收益の激減とは新たな株式相場の暴落を導き、この暴落は何囘も震動を起しながら五月と六月との間續いた。當時再たび株式相場は一九二九年秋の大混亂後よりも下廻つた。ドイツ、オランダ等々の國々における急激なる崩壞もあつたがアメリカ、イギリス、フランス、日本等においては夏二ヶ月間は相場に大なる動搖はなかつた。此の現象は人々に多少の安心を與へた。九月バブソンはじめ多くの人々は不況底入、囘復遠からずとの豫報を發表した。かゝる豫報の發表と同時に、農產物市場における終局的破綻による新たなる減退、總選擧後におけるドイツ政界及びそれに伴ふ賠償問題の不安定、サヴエート同盟の輸出の脅威等々を契機として九月中旬から十月にかけ、諸株式取引所は大なる崩壞をした。ニューヨークの取引所においては昨年の最低レコードを突破した。株式仲買店の破綻も現はれた。十一月初頭さらに動搖が起つて、囘復の望みは全く失はれた。上表は昨秋以後一ヶ年間におけるニューヨーク取引所上場株式價格の變動を示す。ドイツの取引所における破綻は特に外國資本の撤退が重要な役割をなした。ド

イツ政界が安定して、外國資本の流入を見ざる限り、ドイツの株式市場の回復は全く望みがない。我が國五十種主要產業株平均相場は九月において一〇・八パーセントといふ暴落を示した。

これを要するに昨秋ニューヨーク株式投機崩壞後諸國における株式市場の動搖は戰後はじめて一つの密接なる關係に結びつけられた。そして一齊に崩壞をつゞけて、最近一ヶ月の間には、最下點に到達した。第二圖表は重要諸國における近年の株式價格運動を概觀せるものである。この下落せる相場狀態の判斷にあたつては、昨秋來、各國における銀行利率の低下があつて株式相場を高める方に作用する有力なる材料が存在してゐることを考慮に入れなければならない。まだ何處においても回復の曙光が見出だされない。

2、外國貿易の減退

世界貿易は價格の點においても、量の點においても、ともに著しく減退した。ヨーロッパでは、輸入が輸出よりも減退してゐるが、ヨーロッパ外の諸國においては正にその反對である。しかしこれらの國々からの原料の販賣困難を考慮するとき、さらに激しい輸入(即ちヨーロッパの輸出)の減退が豫測せられる。

商品價格の減退並びにこれに伴ふ購買額の減退は外國貿易の萎縮となつてあらはれた。しかし同時に量的減退もあらはれてゐるから、これは價格の減退に由來するよりも以上に萎縮した。

一九二九年の景氣の轉向は貿易においてはまづ原料品にあらはれた。次に大ていのヨーロッパの諸國では收穫の良好であつた結果、食料品の輸入の需要が減退した。工業完成品の供給は增大したが、不況による需要の減退は、この流出の增加を妨げた。かくて一九三〇年の初頭以降、世界貿易の著しい萎縮が觀察し得らるゝ。ベルリン景氣研究所の調査によれば主要四十八ヶ國の貿易額は(世界貿易額の八分の七に當る)一九三〇年の前半年中において百七十一億マルク即ち十三・六パーセント前年同期よりも減退した。

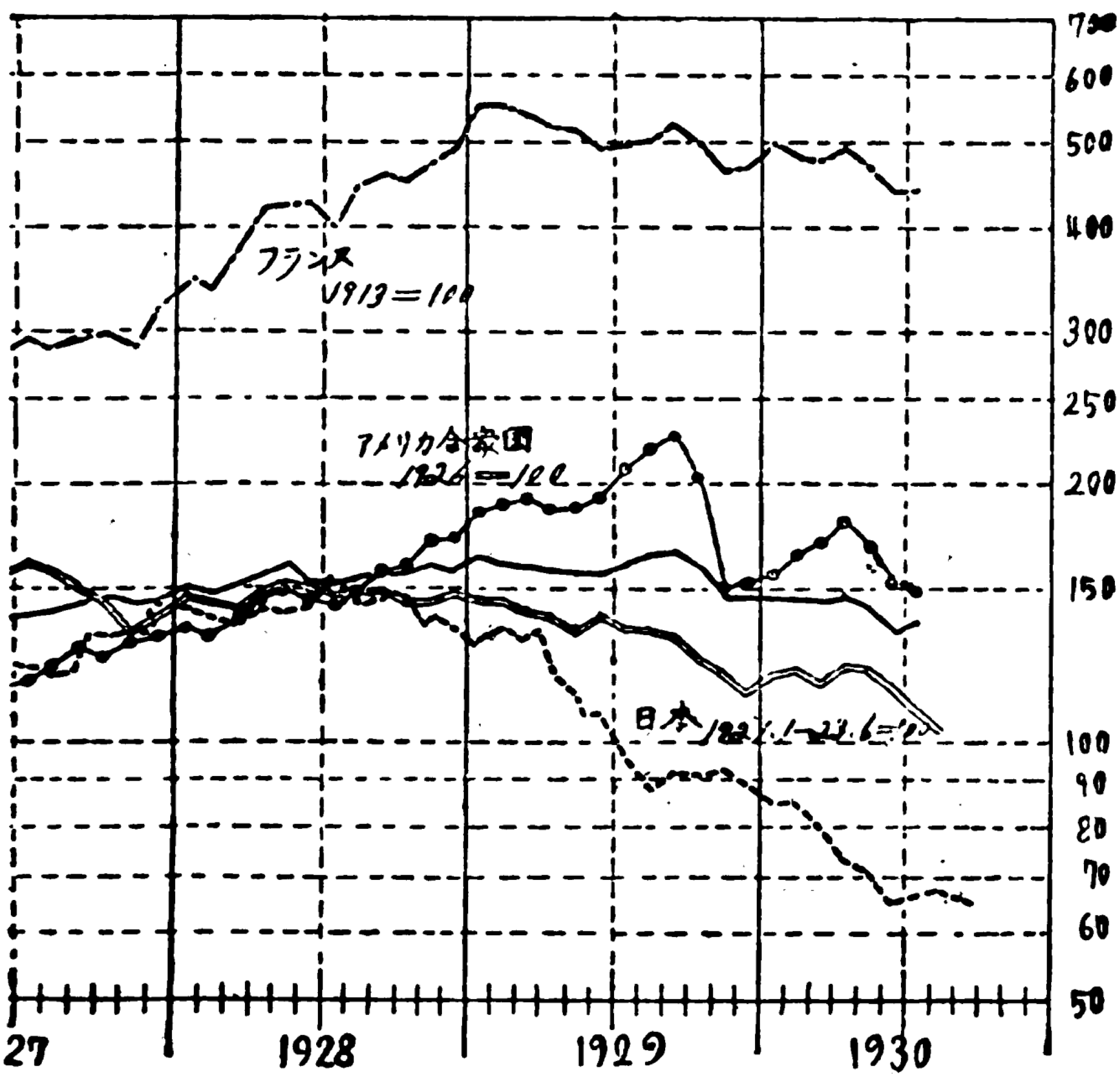
ヨーロッパ外諸國　輸出は一九二九年末以來未曾有の減退で、一九三〇年前半年は前年同期より五十七億マルク即ち二〇

パーセントの減退である。

打撃の最も大なりしは、全輸出の四分の三を占める食糧品、原料等である。輸入においては一九三〇年前半年は四十四億マルク、即ち十七パーセント前年より減じた。減退の特に甚だしかつたのは高度資本主義諸國でアメリカ合衆國は最も多く、カナダ、日本これに次ぐ。

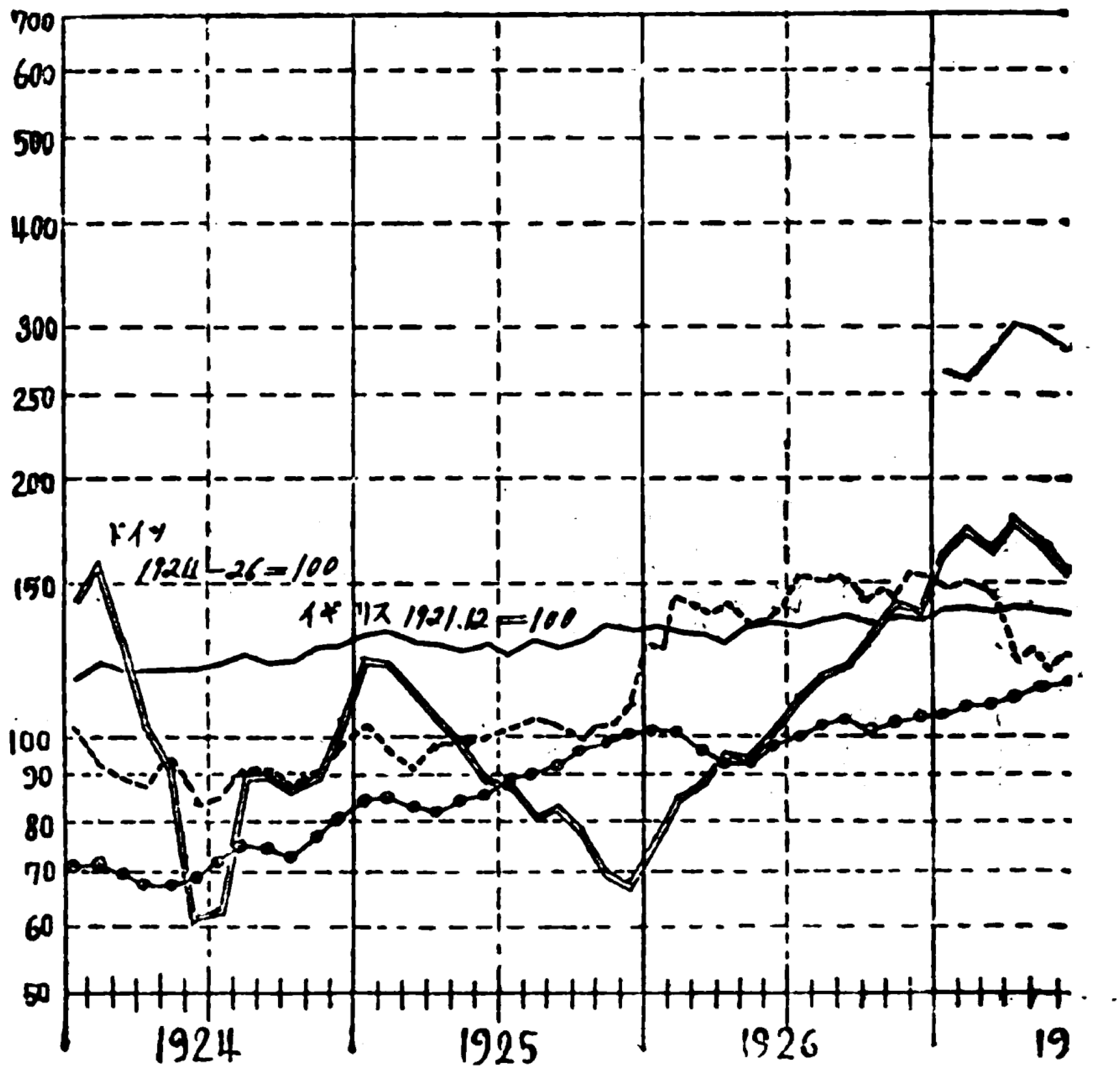
日本の一月以降九ケ月累計貿易額は輸出十一億八百萬圓、輸入十二億四千九百萬圓で差引入超一億四千百萬圓を示した。

株式價格の變動



これを前年同期と比較すると輸出において五億五百萬圓（三七・五パーセント）、輸入五億一千萬圓（二九パーセント）、而して入超においては僅かに四百三十六萬圓（三パーセント）の減少である。輸出減退の主要原因はアメリカ向け生絲（四七・八パーセント）、支那、印度東洋諸市場への綿織物（三三・三パーセント）であつて銀價格の下落は我が輸出貿易に大なる打撃を與へた。輸入にあつては重要品棉花以下二十種中前年同期に比し多少とも增加せるは燐と原油及び重油であつて、棉花（三八・三パーセント）、鐵（三四・五パーセント）、木材（四五パーセント）、小麥（四三・一パーセント）等は著しき減退を示してゐる。銀價格暴落の結果多大の購買力を失へる對支貿易について見るに一月以降九ケ月の累計は輸出は前年の四億九百萬圓に對し

第二圖



て二億九千八百萬圓、輸入は二億七千六百萬圓に對して二億二千七百萬圓に減少してゐて、販賣市場としての支那市場の大なる萎縮を示してゐる。

ヨーロッパ諸國　ヨーロッパの外國貿易における減退はやゝ遅れて一九三〇年第二四半期において特に顯著となつた。輸入額は一九三〇年前半年に四十三億マルクを、即ち一〇・七パーセントを前年より減少した。こゝでも巨大な減退の部分が價格下落に歸し得られる。食料品以外に原料輸入の著しき減退があつた。ヨーロッパ諸國からの輸出は輸入よりも遙かに減退が少ない。一九三〇年前半年の減退は二十七億マルク、即ち八・六パーセントであつて、輸出の減退は、價格の下落餘り著しくない完成品において甚だしい。減退の第一位を占めるはイギリス（減退額九億千萬マルク、一六%）で極東及び南米輸出（特に綿製品）において打撃をうけた。イタリー（一四%）、フランス（八%）、オランダ（八%）、これに次ぐ。

ヨーロッパ外諸國の農産物、原料價格下落が繼續し、工業國が原料の需要を減少する限り、農業、原料國の工業完成品購買能力はさらに減少狀態をつゞけるか、さらに減退するであらう。しかも工業國でも工業完成品への需要はより一層減

退し、國内市場の萎縮はいたる所、輸出へと驅り立てるであらう。そこで合衆國、カナダ、エジプト、英領印度、オーストラリヤ、ニュージーランド、スペイン、最後に大ブリテンにおいてさへも、自國の市場を自國生産品のために、確保しようとする試みが、その地盤を獲得した。この意味においてアメリカ合衆國工業完成品關稅（本年六月實施）、イギリス帝國會議（同、十月開催）は重要なる意義をもつ。即ちアメリカ外交政策協會の調査によれば（ニューヨークタイムス、一九三〇年九月二十九日）本年一月以降九ケ月間にアメリカよりの輸入に對抗し、またはアメリカ關稅の改正に報復するため關稅を改正し乃至はその改正に着手せるもの十一ケ國――カナダ、キューバ、スペイン、オーストラリア及びニュージーランドの五ケ國は一般的改正を行ふ。フランス、イタリー、スヰス、メキシコ、ウルグアイ及びアルゼンチンは部分的改正を行ひまたは行はんとしてゐる――の多數に上り、國際關稅戰は益々尖鋭化する。

3、滯貨の堆積

農業生産物及び原料諸市場における滯貨は本年半ばにおいて一ケ年前よりも凡そ六〇パーセントも高い。

滯貨の期間及び範圍は個々の原料市場で種々の增加ぶりを示してゐる。

農業生産物――小麥、砂糖、コーヒー、カヽオ、茶――及び鉛、錫、亞鉛、棉花等の一聯の商品にあつては、數年前から世界滯貨は構成的に增加した。一九二九年には世界經濟の消費の減退の結果、滯貨は異常に增大し、遂にはこれまで抵抗力を示してゐた生産手段工業の原料市場（石炭、鐵）まで包含されるにいたつた。一九三〇年の前半年には原料市場にして滯貨の增加を逃れ得たものはなかつた。しかも現在、多數の世界原料諸市場における滯貨は、充分ならずとはいへ生産制限の行はれてゐるにも拘らず、日々になほ增大する。

第三表は一九三〇年六月末における滯貨を前年と比較せるものであつて、いかに最近數ケ月滯貨激增せるかを窺ふことが出來るであらう。

これによつて見るに滯貨の堆積が激增したのは石炭、銅、生絲、亞鉛の諸市場であつて、主要生産國におけるこれら滯貨は少くとも倍加し、中には四倍近くも增加せるものがあつた。完成加工工業品市場には未だ大なる滯貨を見ない。

第三表　滯貨の變動

	各年7月初の滯貨(單位千噸) 1928	1929	1930	1928=100 1929	1930	1929=100 1930
小麥(アメリカ,オーストラリア,アルゼンチン,イギリス)	6 655,6	9 559,1	10 313,7	144	155	108
砂糖(世界)	5 259,8	6 136,5	7 022,7	117	134	114
コーヒー(ブラジル,合衆國,ヨーロツパ)	1 114.9	855,5	1 705,4	77	153	199
石炭(ドイツ,ザール,ベルギー,東オーベルシュレシア)	5 075,0	2 126,0	9 350,0	42	184	440
銅(北,南アメリカ)	53,4	75,4	287,6	141	539	382
鉛(合衆國,メキシコ)	148,5	157,5	131,0	106	88	83
亞鉛(合衆國)	40,3	33,5	99,4	83	247	297
棉花(世界)	1 126,4	1 016,1	1 350,9	90	120	133
錫(世界)	16,7	24.3	42,8	146	256	176
生絲(日本)	9,2	8,2	29,9	86	325	365
ゴム(合衆國,大ブリテン,シンガポール,ペナン)	214,2	251,9	383,1	116	179	152
生皮(アメリカ)	111,0	113,3	122,3	102	110	108
チリ硝石(世界)	1 164,5	1 627,0	2 269,0	140	195	139

ベルリン景氣研究所週報　9月1日

4、失業の増大

世界の失業は、前年に比べて二倍に増加し、いまや二千萬を突破した。例年の季節的増加は早くも初夏から現はれはじめた。

現在の恐慌以前においてすら、大多數の資本主義國において、慢性的大衆失業があつたが、景氣の惡化と共に、更に多數の失業者がこれに結合されて恐慌失業をつくり出し、資本主義史上未曾有の大量的失業をもたらした。殊に、獨占資本の生産制限による滯貨處分=價格維持政策は、恐慌時において持久的な失業増加を惹きおこしてゐる。諸重要工業國では、何れも本年夏において前年同期に對し、約二倍の失業者を數へ、しかもその增大傾向は、例年の季節的減少によつては、殆んど影響をうけなかつた。例へば、ドイツの失業は例年ならば春から九月頃まで季節的に減少するにも拘はらず、一九三〇年には三月から五月にかけて極く僅かの減退を示したのみで、既に六月には例年よりも二ケ月も早く增加の傾向をあらはし、同八月には、これまでこの時期に例を見ないほどの多數に上つた。イギリスの如きは、一九二九年八月から徐々に增大の線をたどり、殊に今年に入つてからは、著しいテムポで、ひたすら增加しつゞけた。大衆失業の存在はひとり工業國のみではない、世界農業恐慌は南米、アジア、オーストラリア等の農業諸國においてもそれぞれ五十萬を下らない大失業群をつく

り出した。

資本家階級のもつ最良の調査機關と稱せられるベルリン景氣研究所は、本年七月における全世界の失業者數を一千百萬人と推定し、昨年同期から二倍以上に增加したと述べてゐる。同研究所の各國別失業推定數は第四表の如し。

第四表 世界失業者數推定(單位一千人) (景氣研究所四半期報五年二號より)

	1929年				1930年		
	3月	7月	9月	12月	3月	6月	7月
I. 大量失業國							
合衆國		2000	2500			5000	
ドイツ	2484	1260	1324	2851	3041	2641	2765
イギリス	1264	1164	1203	1344	1694	1912	2070
イタリー	293	193	229	409	385	322	342
ポーランド	170	165	82	185	289	205	199
オーストリア	225	110	105	227	239	150	153
ノールエイ	24	15	16	22	23	14	
オーストラリア	39	41	52	57	63	65	
合計		4888	5511			10309	10608
II. 中量失業國							
チエコ	50	24	34	53	88	73	
ベルギー	28	14	20	45	42	35	
デンマーク	60	27	24	62	44	32	
スエーデン	44	24	22	54	42	27	
オランダ	51	10	12	48	34	25	
ルーマニア	58	7	5	7	13	25	
アイルランド	31	24	22	26	26	24	
ハンガリー	17	15	15	20	22	19	
ユーゴ・スラヴイア	12	9	7	6	10	10	
スヰス	7	4	5	13	10	9	
カナダ	12	6	8	24	23	20	
合計	370	174	174	358	354	299.	
III. 少量失業國							
フランス	11	9	9	11	13	10	
ニウジーランド	5	5	5	3	4	6	
バルト海沿岸諸國	16	3	5	23	20	7	
合計	32	17	19	37	37	23	
IV. 全世界總計		5041	5704			10631	10930

他方において、我々は、世界經濟恐慌の發展の當初においてすら全世界(支那、印度、インドネシア等を除く)の失業者を一千七百萬とする細密な計算をもつてゐる。失業の程度を完全に數字的につかむことは、官廳統計の欺瞞性と不備とから到底不可能であるが。ベルリン景氣研究所の推定數に洩れた南米、アジア諸國の失業者を加へ、また、部分的失業者や失業保險給付の範圍から脫落せしめられた失業者を合算するならば、現在における世界の失業群は、二千萬を突破する勢

くべき巨大な數字に達するであらう。失業と短操勞働による勞働者階級の損失がいかに大きいかは、クチンスキーの計算がこれを示してゐる。すなはちドイツ勞働者の賃銀損失は、一九二九年には平均一週六・九四マルクだつたのが、失業及び短操勞働の增大の結果、一九三〇年九月には平均一週一二・五三マルクに增加してゐる。かくの如き勞働者階級の條件惡化が、また逆に恐慌に反作用し、恐慌をさらに激化せしめてゐることはいふまでもない。

かくて、最近における各國勞働市場の發展は、冬季の近づくと共に、益々失業の加速度的な增大傾向をとり、何ら好轉の兆候を示してゐない。ドイツの如きは十月の最初二週間だけで、實に十萬人の失業增加をもたらした。

恐慌局面における世界諸市場は、以上に示した如く、商品流通部面においても、勞働市場においても、すべて破局的な破綻を示してゐる。これらの破綻がいかにして招來されたか、いかなる意義を有するか、そしていかにして克服されうるか、又は克服されえないか。これらの問題は、恐慌の原因を分析檢討することによつて、初めて答へられるであらう。

三　世界恐慌の原因

A　農業恐慌とその過程

一九三〇年の世界の農業は、過剩生產に基く、激しき恐慌狀態を呈した。此の如き過剩生產は、一九二四―二五年ころから始まつた農業の合理化、卽ち農業技術の進步をその根本的原因としてゐる。農業に於ける過剩生產の結果、その價格は著しく低落した。然もそれは一般物價以下に低落し、世界の農業は極度に窮迫してゐる。然し今次の農業恐慌は中小生產者殊に植民地に於ける農業に特に激しい打擊をあたへてゐる。農業恐慌を克服せんとするブルジョアジーの對策はすべて失敗に歸し、今の所農業恐慌が何時終るかの見込みは全然たたない。

歐洲大戰終了後、一九二〇年以來農產物の價格は急激に、然も一般物價指數以下に低落した爲に、世界の農業は一時深刻なる恐慌に陷つたのであつた。此の世界的農業恐慌は、相對的過剩生產が原因ではあつたけれども、生產の增大に基く

第五表　世界におけを重要農産物の推定作付面積
(單位 1000 エーカー)*

	1909/13 平均	1921/25 平均	1626	1927	1928	1929
小麥	204,200	226,100	232,500	239,700	244,700	245,000
馬鈴薯	30,800	31,200	31,480	32,350	33,200	34,958
棉花	62,500	69,000	80,900	73,800	81,800	——
甜菜糖	5,819	6,170	6,197	7,059	7,286	7,421

* 農業年鑑1930年度及び1927年度による

と言ふよりはむしろ中部及東部ヨーロッパに於ける消費力の減退に基いて勃發したものであつた。此の世界的農業恐慌は一九二五年頃から一時克服せられたかに見えた。それはヨーロッパ外諸國(アメリカ、カナダ、アルゼンチン、オーストラリア等)に於ける耕地面積の縮少、農業における合理化の進展に伴ふ生産費の低下、カナダに於ける小麥プール成立の結果たる世界小麥價格の騰貴、米獨等における合理化景氣に伴ふ購買力の一時的增進等に基くものであつた。だが然し、一時克服せられたかに見えた世界的農業恐慌は、世界的不景氣の襲來に應じて再び尖銳化するに至つたのである。然もそれは、未曾有の深刻なる恐慌であり、今の所何等恢復の曙光をさへ見ない。

世界的農業恐慌の原因としての生産の增大　今次の世界的農業恐慌は、大戰後のそれと異り農産物生産の世界的增大に原因してゐる。然も此の如き生産の增大は、天候その他の單なる偶然的原因に基くものではなく、農業合理化に伴ふ生産技術の發達、農業の構成上の變革の必然的結果なのである。世界の農業に此の如き構成的變革をもたらした合理化は、先進資本主義諸國家においては大戰後における資本主義の一般的危機、特に農業の恐慌的狀態を克服することを目的として起つた運動であつた。植民地及び半植民地においては、それは帝國主義諸國家の原料生産に對する獨占的支配の確保、本國金融資本の支配の擴大、その結果なる資本輸出の增大及び植民地における資本主義の急速なる發展、此等に伴つて起つた運動であつたのである。

此の如き合理化は、農業機械化の增大、農業化學、農業學の進步等をその主たる內容とする。

農業の機械化は植付、耕作及び耕耘、收穫打穀及び唐箕農業機械の牽引農産物の運搬等あらゆる方面に亙つて行はれた。

此等各種機械の發達は一般的には農業に於ける生産力を高め、生産費を減少せしめるが、特にはその使用さるべき作業部面を異にするに從つてその影響をも異にする。耕作、耕耘機械の發達は一單位耕地面積當りの生産を增大せしめ、收穫、

打穀、唐箕等に關する機械殊に牽引機械の發達は新しき土地の開墾を容易ならしめ、從つて耕地面積を增大せしめるのである。後者に屬する機械で特に最近著しく發達したのはトラクター及びコムバインである。コムバインとはその走行中に自働的、連續的に、穀物を刈り取り、打禾、脫穀、唐箕する機械をいふ。此の如き農業機械の發達に應じて、戰後世界における重要農產物の作付面積は第五表に見得る如く、何れも例外なく增大してゐる。耕耘、耕作機械の發達以上に、一單位耕作面積當りの生產額を增大せしめるのは、農業化學殊に肥料の進步である。最近における肥料の發達は人造肥料殊に窒素肥料の普及を主としてゐる。肥料の利用が普及したことは、耕作耕耘機械の發達と相俟つて一エーカー當りの生產額を第六表の如く增大せしめた。農業機械、農業化學の發達のみならず、農業學上の進步、卽ち品種、採種用地の改良、害蟲驅除法の改善等も、天候その他の自然的原因に基く災害を防禦し、農產物の生產額を增加せしめる。ここでは此等に關するこまごまとした事實及び數字をかかげる事は、紙面が許さない故に此れを省略することとする。

以上述べた如き農業技術の發達の結果はいふ迄もなく農產物生產額の驚くべき增大である。重要農產物の世界的生產額は戰後第七表に示す如く增大してゐる。

農業技術の進步、農業における構成的變革、その結果たる農產物生產額の驚くべき增加此等は單に歐米諸國においてのみ見られる現象ではない。世界經濟と密接な關連を有つてゐる日本資本主義における農業も、歐米諸國におけるそれと全く同樣に歐洲大戰後構成的變革を遂げたのである。最近數年間殊に今年度における米の生產額の增大は天候その他の自然的出來事のみの結果ではなく、むしろ我國農業の構成的變革に基くものと言はざるを得ないであらう。その「主因は優良品種の普及栽植、肥培法の改良所謂栽培技術の進步」(安藤博士)、卽ち農業の構成的變革の結果であると言はねばならぬのである。日本內地における反當り米收獲高は大正十年の一石七斗六升より昭和五年の二石六升に約十七%の增加を

第六表　1エーカー當り重要農產物生產額の世界的平均 *

	1906/13 平均	1921/25 平均	1926	1927	1928	1629 1)
小麥	15,7	14,9	15,0	15,5	16,2	15,8
馬鈴薯 2)	151,9	153,2	144,5	170,1	164,0	174,3
棉花	211,0	200,0	221,1	217,9	216,2	—
甘蔗糖	10,8	10,0 3	10,5	9,8	10,0	9,9

* 農業年鑑 1)暫定額(球諸 2) 北半國のみ 3) 1925年

第七表 重要農產物世界生產額推定表 *

	1909/13 平均	1921/25 平均	1926	1927	1928	1929
小麥 (1000ブッシエル)	3,041,000	3,305,000	3,420,000	3,605,000	3,943,000 1)	3,415,000
馬鈴薯 (1000ブッシエル)	4,723,000	4,786,000	4,444,000	5,245,000	5,211,600	—
棉花 (1000ベール)	20,900	21,500	28,300	23,800	25,900	—
砂糖 (1000ショートトン)	19,363	27,834 2)	26,531	28,286	30,224	29,269

* 農業年鑑 1) チリー及びオーストラリアを含まず 2) 1925/26

示してゐる。此の如き反當り收穫量の增大は、第一に肥料の消費の增大に基く。稻作一反步當り肥料消費額は大正元年の六圓二十八錢より、同十三年の七圓七十三錢に更に昭和元年の九圓九十七錢に增大してゐる。更に土地の改良、即ち耕地整理、排水灌漑等も驚くべき進步を遂げてゐる。耕地整理工事完了面積は大正九年の廿五萬八千町步より昭和三年の四十二萬九千町步に、用排水幹線改良事業に依る受益面積は昭和元年の八萬六千町步より同四年の十八萬九千町步に激增してゐる。以上の如き耕作技術の發達のみならず品種の改良をも考慮に入れる時は最近我國農業における構成的變革が如何に甚しかつたかを知るを得るであらう。更に朝鮮、臺灣における米作も同樣に最近構成的變革をとげ、その結果此等の地方よりの米の移入額も大正十年の三百九十三萬九千石から昭和四年の七百六十三萬一千石に增大してゐる。朝鮮及び臺灣については特に品種の改良に依り內地の需要に適する米が生產されるやうになつた事に注意すべきであらう。

消費の停滯乃至減退 農產物の上述せる如き世界的增產にもかかはらず、農產物に對する消費力は戰後殆んど增進して居ないのみならずむしろ減退的傾向を辿つて居る。重要資本主義諸國家に於ける小麥、棉花、砂糖、コーヒー等の人口一人當り消費額を示せば第八表及び第九表の如くである。これ等の表に揭げた農產物のみならずその他の種類の農產物消費も最近は殆んど增して居らない。此の如き

第八表 人口一人當り小麥消費高（單位キログラム）*

	英國	獨逸 1)
1905/08	164.1	253.7
1909/13	164.7	254.7
1921/23	151.1	163.0
1924/26	153.3	149.0
1927/28	148.3	209.0

	米國
1905/08	178.6
1909/13	174.4
1916/20	176.3
1921/23	152.5
1924/27	151.3

* M. Sering の計算に依る。E. Varga, Die internationale Agrarkrise. (Kommunis. Internationale 1930. Heft 12/13)の引用せる所に依る。

農產物消費額の減退乃至停滯は次の如き諸原因に基づいて居るものと思はれる。

(一)產業合理化の進轉に伴ひ失業者は增大し、所謂慢性的失業を現出するに至つた、のみならず就業勞働者もその貸銀を著しく切り下げられた。此等の事實は何れも消費者大衆の生活水準を低下せしめ、その消費力を減退せしめる。

(二)穀物に對する需要の減退に關しては更に混合食の採用をあげる事が出來る。混合食の採用は果物、野菜等に對する消費を增大せしめ、パンの消費を減退せしめる。

(三)特殊の農產物、卽ち繭、大豆等に對する需要は人絹、人造肥料、鑛物性油の使用の結果停頓減少した。

(四)家畜の飼料穀物に對する需要は最近特に著しく減退した。これはトラクターの如き牽引機械使用の增大に伴ひ家畜殊に馬騾馬の飼養數が減退した事に基いてゐる。

農產物の市場關係の變化　農業における構成的變革は農產物の生產を著く增大せしめた。之に反し農產物に對する消費は殆んど增大して居らない。その結果はいふ迄もなく農業における世界的過剩生產である。此の如き世界的過剩生產を激化せしめた原因として更に農業における市場關係の變化を數へなければならない。卽ち戰前には半封建的土地關係を有つて居た諸國(ロシア、印度、ルーマニヤ、ハンガリー)が穀物世界市場において決定的役割を勤めて居たのが、戰後には農業の技術的發展が進んで居る諸國(アメリカ、アルゼンチン、カナダ、オーストラリア)が穀物世界市場で決定的重要さを有つやうになつた事である。此の事は穀物の世界市場への供給を著く增大せしめ、市場における供給を過剩ならしめた重要なる原因の一つをなしてゐる。農產物の生產及び供給の此の

第九表　棉花、コーヒー及び砂糖一口一人當り消費 *

	英國	獨乙	米國
棉花(ベール)			
1913年	118.49	26.44	61.78
1924年	70.15	19.27	49.39
1925年	83.18	18.04	53.10
1926年	77.35	23.09	54.59
1927年	76.78	24.61	60.14
1928年	72,55	21.28	56.41
1929年	70.64	—	—
コーヒー(ドッペルツントナー)			
1909年/13年	3.6	27.6	4.2
1924年	4.1	8.8	5.5
1925年	4.1	14.3	4.9
1926年	4.0	16.5	5.6
1927年	4.3	19.4	5.6
1928年	4.0	21.0	5.4
砂糖(キログラム)			
[illegible]年	38.4	14.6	49.2
1924年	40.6	22.2	52.5
1925年	41.2	22.6	52.2
1926年	41.1	23.9	51.3
1927年	44.8	25.4	49.6
1928年	—	—	—

＊ドイツ統計年鑑より算出

如き過剩は最近に於ける滯貨の驚くべき增大に現はれてゐる。（前掲第三表參照）。

農産物價格の低落　農産物の世界的過剩生産、滯貨の激增は必然に農産物價格の低落を結果する。此の如き價格の低落は農産物價格の景氣變動への依存性が增大した事に依つて一層激化せられたのである。農産物殊に食料品に對する需要は彈力性に乏しく、從つてその價格は景氣の變動に影響せられる事が少いと一般常識的に考へられてゐる。如何にも不景氣に際して食料品に對する需要が激減する事はあるまい。然しながら食料品に對する需要の減退が比較的僅かであるが故にその價格も比較的安定性を有するものであると結論する事は誤りである。なんとなれば農業においては、生産を制限する事は著く困難であり、從つて需要の僅なる減退も直ちに相對的過剩生産を結果し、價格を壓迫する事が甚しいからである。農業においては獨立生産者が壓倒的多數を占めて居る事、その生産期間が特に長い事、固定的費用（利子の支拂ひ、建物機械等の償却、租稅の支拂ひ等）の生産費中に占める部分が大である事等は何れも生産制限を困難ならしめる原因となる。更に、農業經營に於いては家族の勞働を使用する事大であり、從つてその耕作面積は家族の勞働力を規準として決定するが故に、不景氣時に際して耕地面積を縮少する事は著く困難となる。なんとなれば、不景氣に際しては、家族の勞働力を農業以外の方面に使用する事が困難となると共に、歸農者の增加に依り家族の勞働力は益々豐富となるからである。農産物の貯藏が比較的困難である事も亦不景氣に際して農産物價格が激落する一つの原因となる。上述せる如き事情は最近における農業技術の進步の結果更に尖銳化した。農業技術の進步は第一に農業の金融市場との關係を、又農産物の商品性を增大せしめる事に依り商品市場との關係を深からしめるのみならず、農業の機械化は農業における勞働力を過剩ならしめ、農村離村者を激增せしめたが、不景氣の襲來と共に都市及び工業地帶の人口包擁力は減退し、農村における過剩勞働力は激增し、耕地面積の縮少を益々困難ならしめたのである。

農産物の價格はその生産過剩、滯貨の增大に依り根底的に壓迫せられて居たのみならず農産物は景氣の變動に對して著しく敏感となつて居たのであるから、昨年秋以來世界金融を襲ふに至つた世界恐慌をきつかけとして、激しき價格の低落を經驗するに至つたのは必然であつたのである。恐慌が勃發して以來の重要農産物の價格は第十表に見得る如く低落して

ゐる。(關稅に依つて影響せられる事少い英國市場に於ける價格をとつた)

農業に於ける窮迫狀態　農產物價格の此の如き急激なる低落は、それのみを以つてしても、工業におけるとは異つた農業の窮迫的狀態を作り出す。農業に對して特に重要なる影響を及ぼす地代なるものは、決して毎年々々の生產期間が終つた後に、その年度の收益を基礎として決定せられるものではない。反對に地代は借地契約の締結又は土地買入れに際して、それ以前の諸年度の成績に基づいて將來に向つて固定されるのである。

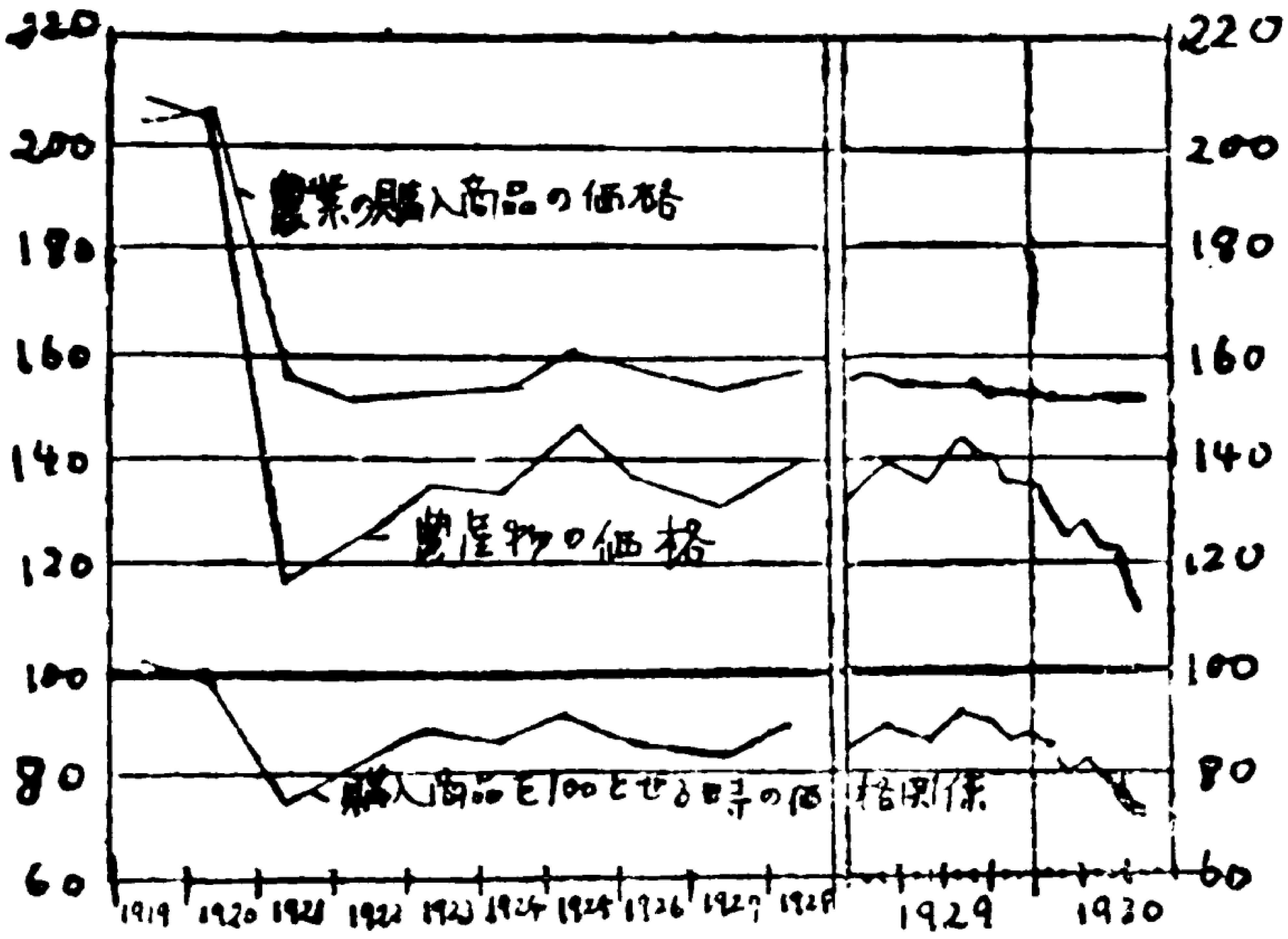
第十表　重要農產物の價格

	小麥		砂糖		コーヒー		棉花
	ロンドン 各種平均 112封度當り		ロンドン ジアヴア白糖 112封度當り		ロンドン サントス 112封度當り		マンチエスター アメリカ棉 1封度當り
	S	D	S	D	S	D	P
1913年平均	7	4 3/4	11	0 1/4	16	1 1/2	7.01
1928年 〃	10	0 3/4	13	4 1/8	26	8 3/4	10.89
1929年 〃	9	10 5/8	12	0 1/8	22	8 3/4	10.29
1929年 9月	10	0 1/2	12	2 3/4	22	5 1/4	10.38
〃 10月	9	6	12	3 1/8	22	7 3/4	10.14
〃 11月	9	5 1/4	11	8 1/2	22	3 3/4	9.58
〃 12月	9	4 3/4	11	2 3/8	22	4 1/2	9.49
1930年 1月	9	6 3/8	11	1 3/4	22	2 1/2	9.42
〃 2月	9	0 3/4	10	10 5/8	21	7 1/8	8.60
〃 3月	8	4 1/4	10	8 7/8	21	5 3/4	8.29
〃 4月	8	7 1/4	10	7 5/8	21	7 1/2	8.61
〃 5月	8	9 3/4	9	5 1/2	21	7 1/2	8.56
〃 6月	8	6 3/4	8	5 7/8	21	7 1/2	7.87
〃 7月	8	0 1/4	8	2 7/8	21	7 1/8	7.66
〃 8月	8	0 1/4	8	5 1/8	21	1 3/8	6.88

＊ドイツ統計年鑑及び「經濟と統計」による

生產費が變らないにかかはらず農業生產物の價格が下落すると、借地農若しくは負債を負つた土地占有者は非常に高く固定してゐる借地料或は抵當利子を支拂ふことが出來なくなる。昨年の九月より今年の八月に至る僅か一年のうちに小麥は約二〇%、砂糖は約三〇%、コーヒーは約四六%、棉花は約三四%の價格下落を示してゐる。現在の農業の狀態こそ、地代の負擔の增大により著く窮迫して居る時なのである。

第三圖　農業品及び工業品價格の鋏狀較差*



*「農業情報」の各月號による

農業の窮迫的狀態は、農產物の價格の下落率が彼等の購入すべき工業品價格のそれ以上のテムポを以て下落せるとき更に激化する。なんとなれば彼等の收入は支出以上の速度を以て減退するからである。非常に多數の獨立生產者よりなつて居り、殆んど何等の獨占組織をも有しない農業における生產物の價格は、獨占の支配してゐる工業の生產物の價格以下に低落する事は必然である。第三圖に見らるる如くアメリカにおける兩者の開きは昨年十月以來著しく增大し、今日も尙ほ益々甚しくなる傾向を呈してゐる。アメリカ以外の國々においても、英國を除き農產物價格は一般物價以上のテムポを以て下落しつつある。（第十一表）農業が世界的に如何に窮迫しつつあるかを知るを得るであらう。

第十一表　一般物價指數を100とせる時の農產物の價格指數

	1929年9月	1930年7月
獨乙 (1913=100)	95	91
英國 (1924=100)	103	109
佛國 (1913=100)	91	90
カナダ	100	92

此の如き世界的農業恐慌に際して特に注意すべきは、農業生產者の個々の階級或は層によつて、恐慌により受ける壓迫を異にしてゐるといふことである。第一に借地農及び負債を負つて居る土地所有者等の如きヨリ貧しい農業生產者の受ける打擊は特に甚しい。なんとなれば地代又は負債に對する利子を支拂ふ必要のない土地所有者は、農產物價格と彼等の購入すべき工業品價格との開きに基く打擊のみを受けるのであつて、地代の割高に依る壓迫を受けることがないからであ

る。第二に、大經營においては農業の機械化による生産費の減少により恐慌の打擊を緩からしめることが可能である、これに反し小經營は生産費を切り下げることは殆んど不可能である。なんとなれば農業機械の利用は、資本に豐かな、相當大なる耕作面積を有する大經營においてのみ可能であるからである。トラクター、コムバイン等の新式農業機械を使用する大經營は、生産費の切り下げによりこの恐慌を切り拔けえても、此等の機械を使用し得ざる中小經營は沒落の運命を辿らざるを得ない。かくて今次の世界的農業恐慌は、中小農業生産者の恐慌として現れ、大經營による中小經營の驅逐を一層速かならしむるのである。

世界的農業恐慌は更に植民地の農業に對して特に激しく作用する。帝國主義諸國家の原料生産に對する獨占的支配、本國金融資本の制覇の確立は、植民地農業に投下される資本を增大せしめ、その農業の資本主義化を促進せしめると同時に、單一耕作への傾向を激化せしめるのである。ブラジルのコーヒー、ジャヴァの砂糖、マレイのゴム、エヂプトの棉花等はその典型的實例である。單一耕作はその農産物の商品性を著しく增大し、全農業の運命を僅か一二種類の商品の運命にかゝらしめる。各植民地の主要農産物は、殆んど例外なく世界的農業恐慌の渦中に捲き込まれ、その商品と共に植民地の農業は極度に危機的狀態を呈してゐるのである。世界的農業恐慌は更に植民地の農業のみならず植民地の經濟全體に對して破壞的作用を及ぼすのである。植民地は農産物を主として輸出し、工業品を主として輸入する。然るに上述せる如く農産物の價格は世界的に工業品の價格より速に下落しつゝあるのだから、植民地の輸出入貿易は極度に惡化し、金、爲替等の流出は激增し、貨幣制度の混亂、金融の逼迫等を惹起せしめるのである。最近南米に勃發した内亂の基礎的原因はたしかにこれ等の點に存したものと思はれる。

農業恐慌に對する對策の失敗　以上述べた如き世界的農業恐慌は次に述べる如き工業の過剩生産と合して、未曾有の世界的恐慌を結果し、世界資本主義の一般的危機の決定的なる一モメントをなしてゐる。すべての國のブルジョアジーは、此の危機に當面して、農産物價格の續落を喰ひ止めんと努力するに至つた。此の如き努力は又ブルジョアジーとブロックを結び易い農民階級を救濟するといふ政治的意味をも有つてゐるのである。

農產物價格引上げの政策に比較的成功したのは穀物の輸入國においてゞある。此等の國々においては國內價格を世界市場價格より高からしむる爲に關稅の引上げを企てた。ドイツ、フランス、イタリー等においては數度の農產物關稅の引上げを見た。然し此の如き政策は、農業恐慌を救濟する根本策では決してない。なんとなれば、それは農業恐慌の根本的原因である農產物の過剩生產には何等手を觸れないのみならず、農產物關稅の引上げは工業の生產費を高め、その國の競爭力を低下せしむるが故に、引上げには一定の限度が存するからである。此等の諸國におけるとは全く異つた方策即ち輸出の制限により世界價格を釣り上げ從つて國內價格をも釣り上げる政策に從來成功したものにカナダの小麥プールがある。農業における唯一の獨占組織とも稱せられる此の小麥プールも、最近の小麥生產の激增に壓し潰されんとしてゐる。今年二月、二三の州知事の盡力により金融的破綻より一時的に免かれた小麥プールは七月に至つて極度の金融逼迫に當面するに至つた。なんとなれば政府は一九三〇年度の小麥に對しては補償をせざる氣配を示し、その結果各銀行も小麥プールに對する金融を拒絕するに至つたからである。かくてプールは今やその存在の意義を全く喪失し、その組合員は如何にして契約を破棄すべきかを研究中であるといふ。カナダ小麥プールは小麥價格の統制に完全に失敗したのである。アメリカにおいては昨年六月に設立せられた聯邦農務局(Federal Farm Board)によつて農產物殊に小麥及び棉花の價格引上げが試みられた。農務局の行つた政策は產業組合に巨額の資金を貸し付けて、農產物の販賣を制限せしめ、或ひは市場より買ひ取らしめたのであつた。農務局の買ひ占めた農產物の數量は一億ブッシェルに上り、一億七千萬ドルの資金を固定せしめるに至つた。此の如き犧牲を拂つたにかゝはらず農產物價格の落勢は止まず、今年七月末には、將來買上げを中止し、新しく收穫される農產物は自然に放任せざるを得ないと聲明するに至つた。我國における米穀法による米價格の釣り上げ及び絲價補償法による絲價維持政策も、農務局の政策と全く同樣に何等の效果をも表して居ない。その他砂糖、コーヒー等の生產制限による價格の釣り上げ政策も全部失敗に終つてゐる。獨立生產者が壓倒的多數を占めてゐる農業にあつては價格引上げの爲の唯一の血路である生產制限は不可能に近いのである。

農產物の價格は益々急テムポを以て下落しつゝある。農產物の過剩生產及びストックは何時消滅するのか、今の所全く

見込はない。市場の擴張に際して常に重大なる領域を提供してきた農業の方面から景氣恢復の曙光がさしそむる望みは全然ない。

B、帝國主義時代における工業過剩生産とその過程

飛躍的なテムポをもつて一九二七、八年に戰前の生産水準を突破した工業は一九二七、八年以後早くも停滯的傾向をあらはした。この停滯は同時に生産裝置の慢性的な操業不充分となつて示される。これらの現象を説明するものは生産手段工業部門と消費資料生産部門間の不均衡であり、消費の限界を越えた生産の擴大である。しかし他方戰後の生産力の發達は腐爛的性質によつて特色づけられる。それは消費を制限し、しかも生産、特に生産能力を擴大することによつて一般商品生産の矛盾を獨占資本主義時代の矛盾にまで深刻化する。その矛盾は如何に克服せられるか？

我々は世界恐慌の更らに重要なる決定要因として工業の過剩生産の過程を分析せねばならぬ。

「最近數十年間の生活資料の生産發展をば遙かに凌ぐものは工業生産の増大である。半資本主義的並びに新興資本主義的領域の工業化、及び高度資本主義諸國における諸工業組織の不斷の完成と裝置換へとは、工業生産物の需要、財貨の生産、就中生産能力をば馬鹿々々しく増大した。」(ベルリン景氣研究所四半期報。一九三〇年第二册)

世界經濟は一九二七、八年に入つて明かに全部面に亙つて戰前の生産水準を突破した。しかしこの生産の上向は同時に不均等性と商品生産社會發展の暗影たる過剩生産によつて伴はれたことを確認せねばならぬ。景氣研究所の發表にかゝる、資本主義諸國とサヴェート同盟との鑛業、製造工業生産指數發展テムポの比較は明かにこの現象を確證する。

第十二表　鑛業及び製造工業指數の比較。(各前年を一〇〇とす)

	サヴェート聯盟	アメリカ合衆國	イギリス	ドイツ	フランス	ポーランド
一九二七年	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
一九二八年	一二一・〇	一〇四・七	九四・七	一〇〇・〇	一一五・四	一一二・九
一九二九年	一二三・五	一〇六・三	一〇七・九	一〇〇・〇	一〇九・四	九九・八
一九三〇年(第一四半期)	一二五・九	八九・八	一〇〇・〇	九二・六	一〇三・三	八四・七

(スターリン)

この重要資本主義諸國における工業生産力發展テムポの停滯性を裏書きするものは既に世界恐慌以前にあらはれたこれら資本主義諸國の生産裝置利用の不充分である。ドイツにおいて、合衆國において工業生産裝置は第十三表の示す如くに完全能力をもつて操業するを得ず、不生産的な操業狀態を續け休息資本量の増大を招來したのである。（合衆國は一九二九年に至つて漸く九〇％以上の操業狀態をつゞけた。）

第十三表　工業操業狀態

		ドイツ B	ドイツ A	合衆國 D	合衆國 C
1928年	1月	―	―	81	84
	2月	―	―	82	85
	3月	―	―	83	86
	4月	―	―	83	86
	5月	―	―	84	87
	6月	―	―	84	87
	7月	74.3	77.9	84	87
	8月	72.9	76.5	84	87
	9月	73.2	75.8	87	90
	10月	73.0	75.8	88	90
	11月	69.4	71.7	86	89
	12月	66.0	69.4	87	89
1929年	1月	64.2	67.9	88	91
	2月	61.6	65.7	91	93
	3月	67.0	70.2	90	92
	4月	71.6	73.6	91	93
	5月	73.1	76.3	91	93
	6月	72.4	74.6	91	93
	7月	72.7	76.1	89	92
	8月	73.5	76.1	91	93
	9月	72.9	75.0	91	93
	10月	71.2	73.1	90	92
	11月	68.9	71.0	86	89
	12月	65.5	68.1	84	87
1930年	1月	62.2	65.6	83	87
	2月	60.4	64.2	83	87
	3月	59.7	64.1	83	87
	4月	60.2	64.9	82	87
	5月	60.3	65.0	80	85
	6月	58.3	63.7	78	84
	7月	57.4	63.0		

（ベルリン景氣研究所報告及びアメリカ商務省報告による）

〔註〕ドイツ。――全工業を含む。

A…現實就業勞働者の、勞働就業能力に對する百分率。

B…現實就業時間の、最大限就業時間に對する百分率。

合衆國。――工場生産のみを含む。

C…現實作業能力の、全作業能力に對する百分率。

D…現實就業時間の、最大限就業時間に對する百分率。

この商品生産社會の新陳代謝機能にあらはれた停滯又は混亂現象の説明は、我々をして社會的總資本の再生産過程の分析に向はしめる。『こゝに分析を要するものは、年生産物の左の流通樣式である。』（マルクス）（商品資本の回轉樣式の分析）

W'(商品)――┬G(貨幣)―W(商品)……P(生産行程)……W'(加工生産物)……(社會的再生産過程に入る部分)
　　　　　　└g(貨幣)―w(商品)……(私的消費に入る部分)

かくて社會的總資本の再生産の問題は社會資本の二大部門たる生産手段の生産部門と消費資料の生産部門との間の價値代置及び素材代置の均衡の問題となることは最早や説明を要すまい。この均衡の先述の如き破綻を示すものこそは先に述

べた在庫商品量の増大生産裝置の利用の不充分等々にあらはれた過剰生産の過程これである。

それでは如何にして過剰生産の過程は成熟したか？　先づ我々は生産手段生産工業部門と消費資料生産工業部門との生産の發展の間に著しいテムポ差異の存在することを見逃すことは出來ぬ。合衆國を執らう。其處には如何にこの矛盾が典型的となつて居ることであるか？

第十四表　合衆國工業生産量の發展（勞働日當り、一九二三―二五年を一〇〇とす）。

	消費資料工業		生産手段工業			
	食糧品	纖維生産物	自動車	油精製	其他金屬	鐵及び鋼
1919	94	92	50	54	67	82
1920	84	84	58	64	78	99
1921	83	87	41	64	39	46
1922	94	99	66	74	69	82
1923	99	105	102	86	94	105
1924	103	91	91	99	99	89
1925	98	104	107	115	107	106
1926	97	104	108	127	112	113
1927	96	113	86	136	109	104
1928	98	107	110	152	115	119
1929	97	115	135	168	125	129
1月	103	116	150	159	124	118
2月	101	113	148	160	122	126
3月	96	116	159	160	129	133
4月	103	120	153	165	138	136
5月	97	121	148	168	137	145
6月	96	121	162	170	126	155
7月	96	118	142	171	127	152
8月	100	120	143	176	122	143
9月	98	116	133	173	125	140
10月	96	118	113	178	122	124
11月	96	108	81	171	110	100
12月	95	96	49	166	113	90
1930 1月	96	103	103	163	105	99
2月	94	99	110	168	101	119
3月	90	98	109	168	104	113
4月	97	96	109	174	105	114
5月	100	91	104	173	101	111
6月	93	86	98	118	98	110

（聯邦準備局指數）

同一のことが、ドイツ、フランス、日本についても典型的にあてはまる。ドイツにおいては、石炭生産量指數は一九二七年の一〇二より一九二九年の一〇八に、銑鐵は一一一より一一三に、銅は一九二八年の一〇〇より一九二九年の一一六に夫々増大したが、綿絲は一九二七年の一一〇より一九二九年の九〇に、麻絲は一六二より八八に夫々減退し（いづれも一九二八年を一〇〇とす）、フランスにおいては金屬加工工業生産指數は一九二七年の一一四より一九二九年の一五七に、自動車は五二四より六五七に夫々増大したが、纖維工業は八九より九二に増大したに過ぎぬ（一九一三年を一〇〇とす）。日本においては鋼鐵の生産量指數は大正十一年の八五・八二より昭和三年の二二〇・九六、昭和四年の二四四・二六、昭和五年上半期の二五七・四九に増大したが、清酒の生産は大正十一年の九六・八九より昭和一―二年の八九・四三、二―三年の八四・一四に減退し、精製糖の生産は大正十年の八二・六八より昭和二年の一二六・一六、三年の一三四・三八に増大したのにすぎない。

（各々大正十年―十四年の生産平均を一〇〇とす。）

斯様な不均等な發展は如何にして可能であらうか？　我々はこゝで理論に立ち歸らねばならぬ。

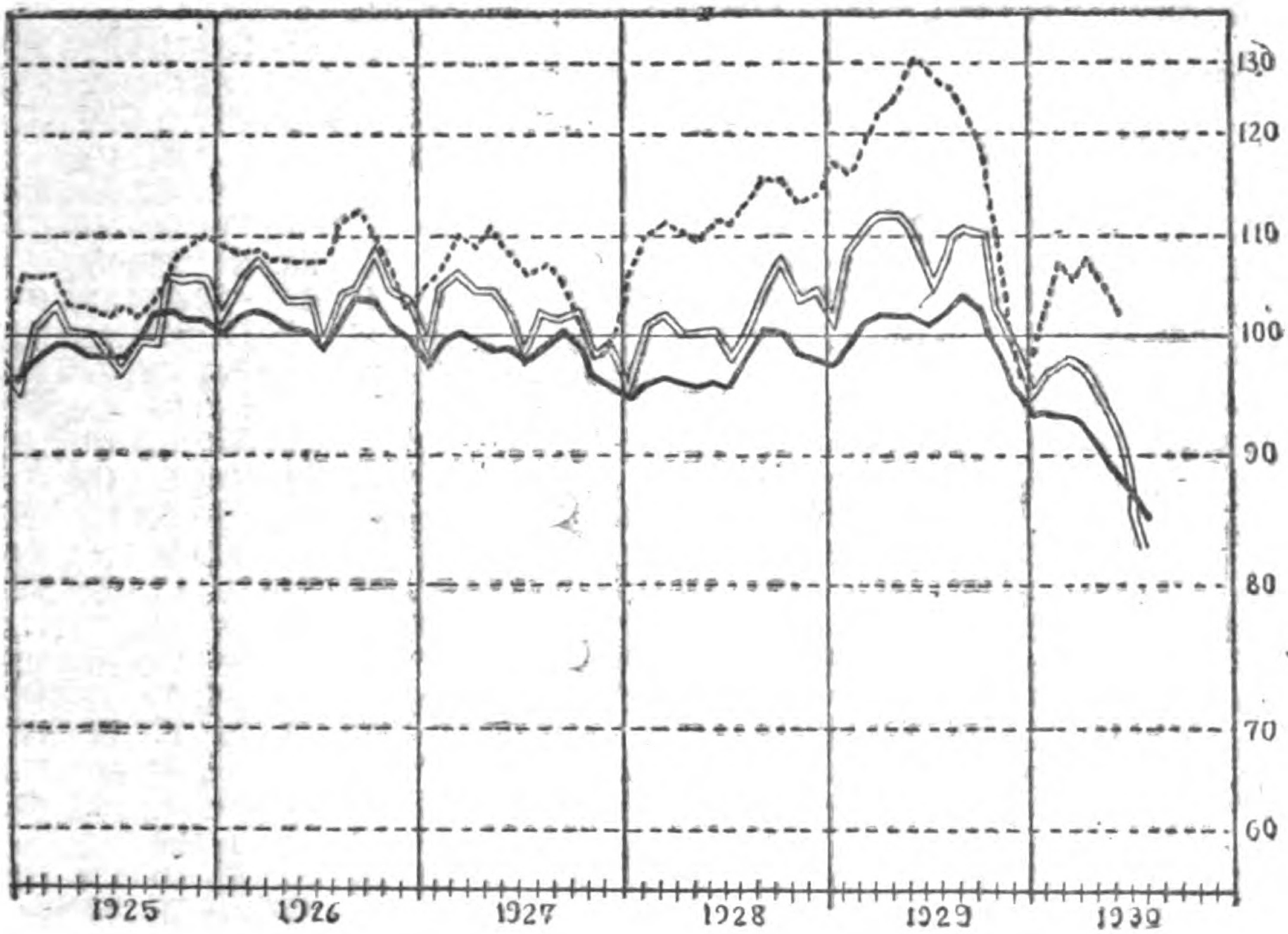
『消費資料の形を執つた第二部門（消費資料生産部門）の不變資本は生産手段の形を執つた第一部門の可變資本並びに剰餘價値と交換せられる。ところで資本主義的生産の一般法則に從へば不變資本は可變資本よりも急速に増大する。その結果消費資料の形を執つた第二部門の不變資本はその可變資本と剰餘價値との和よりも急速に成長しなければならないが、生産手段の形を執つた第一部門（生産手段工業部門）の不變資本は最も急速に増大せねばならず、その部門の可變資本（と剰餘價値との和）は勿論、消費資料の形を執つた第二部門の不變資本の増大をも凌駕しなければならぬ。生産手段を生産する社會的生産部門はその結果消費資料を生産する部門より急速に増大する。』（レーニン）しかしこの不均等は如何にして不均衡にまで導かれたか？

不變資本と可變資本との間には一の間斷なき流通が行はれねばならぬ。『この流通は決して個人的消費に入らないと云ふ限りで差當りは個人的消費からは獨立して居る。けれどもそれは終局的には個人的消費によつて限界を與へられる。蓋し不變資本の生産は決して不變資本それ自身のために行はれるものではなく、個人的消費に歸する諸生産物を供給するところの生産諸部面において不變資本のヨリ多くを使用するが故にのみ行はれるのである。だが右の流通は、將來における需要の見込みに刺戟されて、或期間平穩に進んで行くことが出來る。而してこれらの部門においては、商人及び産業資本家の營業は極めて景氣よく進む。遠地に販賣するか、又は内地にも在庫品を滯積して居る諸商人の資本回轉が緩慢となり、貧弱となつて、銀行が支拂を督促したり、又は購買商品に對する手形が、再販賣の行はれる以前に滿期となつたりすれば、茲に恐慌が生ずる。斯くして強制販賣が、支拂をなさんがための販賣が開始される。茲において、外觀的繁榮を俄然潰滅せしむるところの崩壞が與へられる。』（マルクス）

しかし戰後の景氣循環のカーヴによつて明かである如く、現段階を特徴づける生産手段生産部門の消費資料生産部門に對する加速度的膨脹は前述の如く戰前のそれに比して稍相を異にする。この非正常的な景氣の發展は生産手段工業部門と

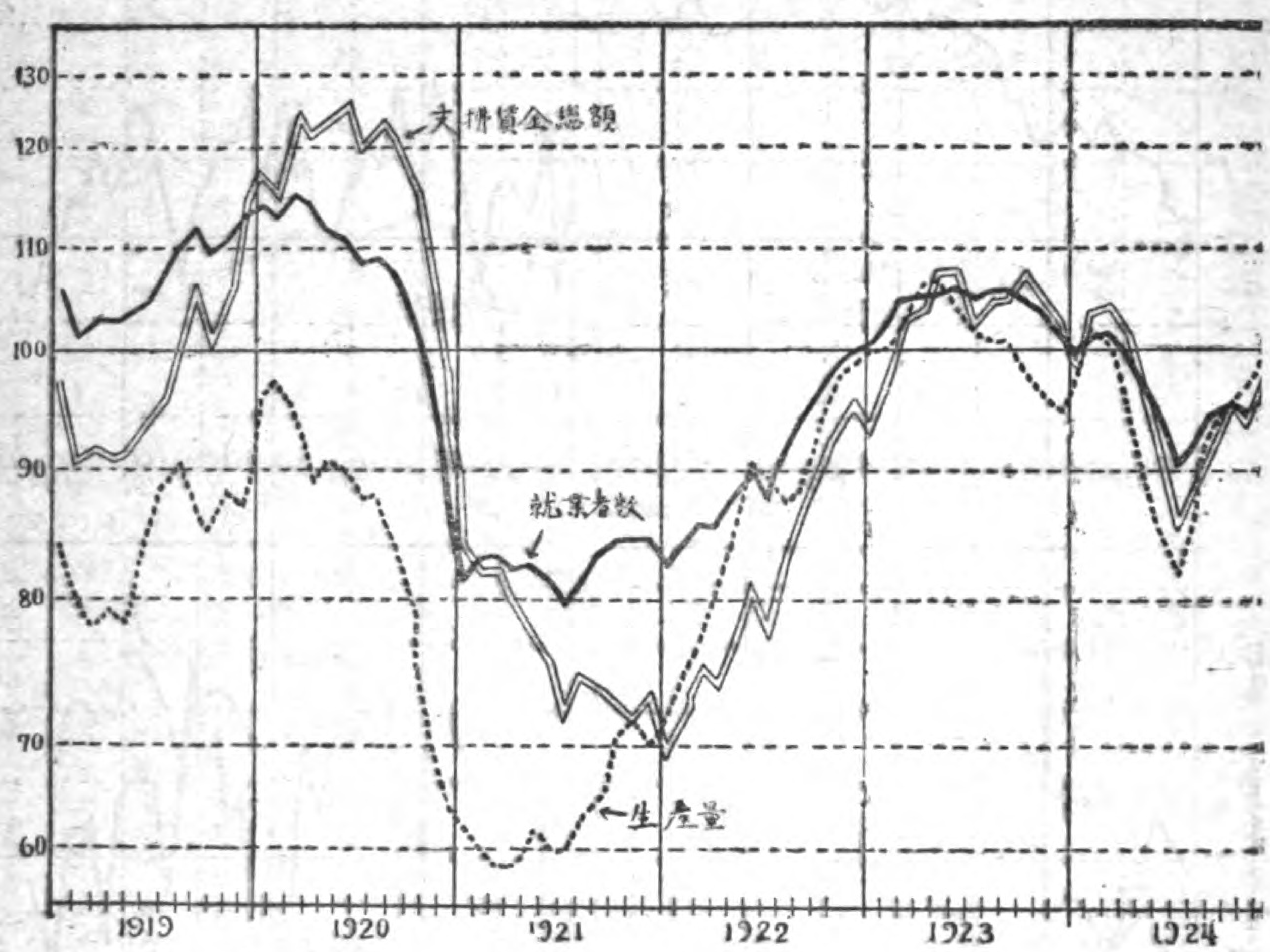
消費資料工業部門との間の發達の不均衡に如何樣にあらはれてゐるか？　この問題の探究は當然我々を驅つて、戰後資本主義的發展の基本方向たる合理化による生產力發達のもつ特質の究明に赴かしめる。いはゆる產業合理化は如何なる意味において資本主義の正常的發展を示す生產力の發展と異るか？

戰後合理化を特徵づける技術の發展は最早や個々の小資本家によつて行はれるものではなくして、近世的設備と永年に亙る研究とに堪へ得る、巨大な獨占資本體によつて行はれる。(例へばI・G・染料會社、合同鋼鐵トラスト、又は國立カイゼル・ウィルヘルム・インスティテュート等々)。唯に生產行程のみに止らず、發明作業も亦集中せられ、「社會化」せられて居る。かくて、「カルテルがその本質上保守的であり、既存物の維持を心懸けて居る」(一九二八年一月、ドイツ工業全國同盟のカルテル政策より。)以上この性質は當然技術の發展の方向の制約となる。「停滯と解體。一時的にもせよ獨占價格が採用せらるゝならば、その程度に應じて或る程度まで技術的な、從つてその他のあらゆる進步への刺戟が、前進への刺戟が消滅する、これに應じて技術的發展を人工的に阻止する經濟的可能性も亦生ずるのである。」(レーニン)がそれにも拘らず何故技術の發展は停止しないのであるか？　ドイツに例をとらう。一九二九年に重工業のカルテル契約が更新せられた。いかなるトラストも來るべき十ケ年間には粗鋼割當て契約を破棄するを得ない。しかし生產制限は獨占利潤を減少せしめる。そこで個々のカルテル若しくはシンヂケート組合員は生產費の低下によつてその差額利潤を增大しようと謀るのは當然である。かくて生產割當てカルテル又はシンヂケートにあつては割當額の增大のための鬪爭が尖銳化する。生產能力の擴張と技術上の改善とによつて、各獨占資本家達は割當額を增大し、獨占超過利潤の分前を增加せしめようと企てる。そこで、資本の缺乏と生產の制限とが深刻となつたまさにその時期に當つてもなほ生產能力を擴大するための新規投資と工場の新設とがなされると云ふ樣な、それ自身無意味な現象が、組織化の完全を誇る西部ドイツ鐵鋼工業に起つたのである。こゝに注意すべきことは、斯樣な技術的發展は、生產力の正常的發展の場合に見る樣な價格を低下せしめるためでも、生產を增大せしむる目的でもなく、一に割當額を增大することによつて超過利潤を增進せしめようとする寄生的目的に出でたものであつて、生產と消費との間の矛盾を益々擴大するに役立つて居ると云ふことだ。だが「カルテルは常に保守的である。」同



支拂金指數（聯邦準備局指數）

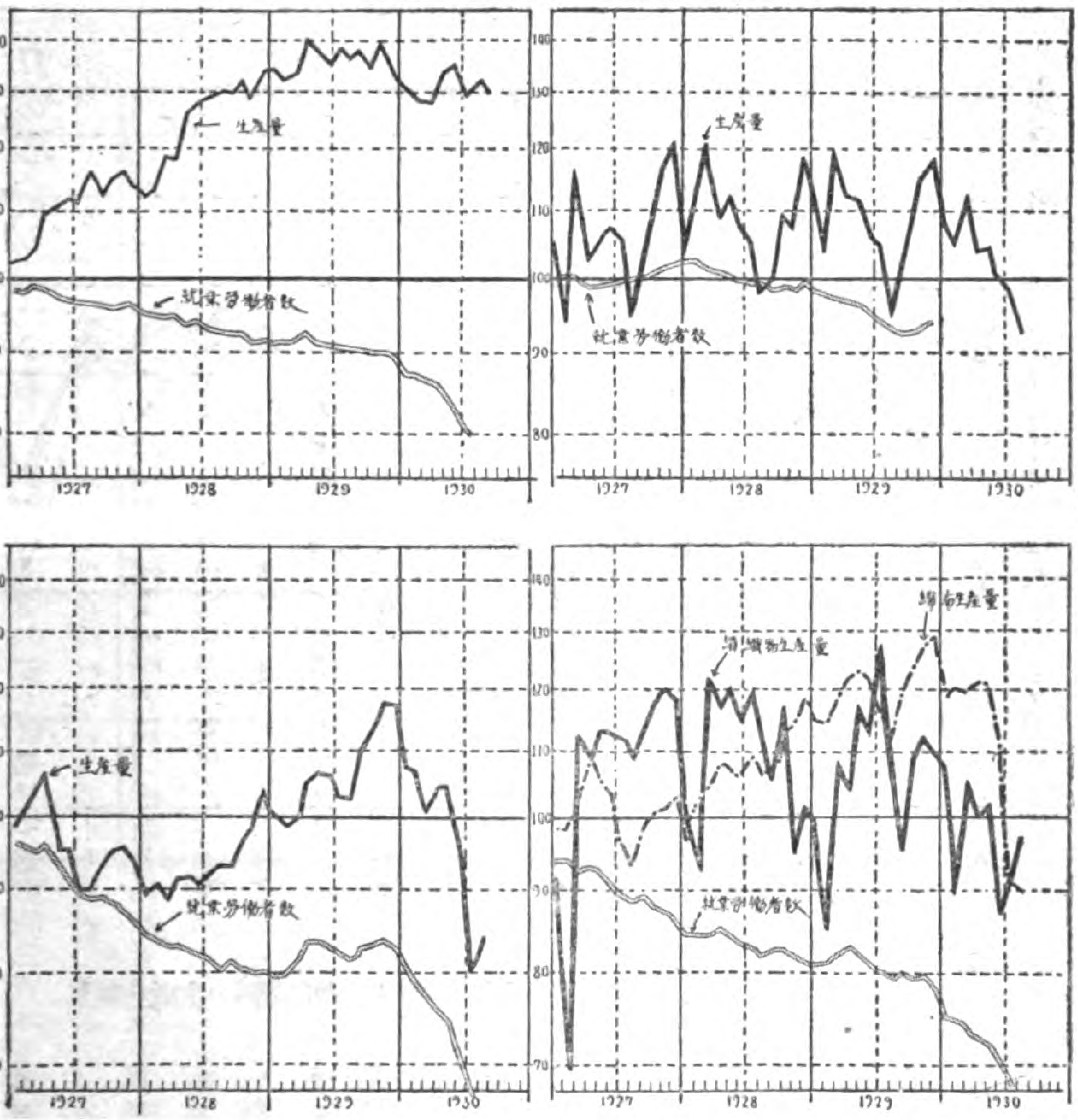
定資本の回轉の緩慢といはゆる『道德的磨損』による失業の增大とは當然統一體として發展せる强固なカルテルをして新しい發明の破棄に、競爭企業の買收に、大獨占體の形成にと驅りたてる。既にドイツ製壜カルテルの例によつてレーニンが示したこの周知の腐爛的現象についてはこれ以上述べることを差し控へよう。しかし一產業內の競爭を完全に排除せる獨占資本體でなほしかも革命的發見を利用せるものがある。我々はI・G・染料會社のハーバー・ボッシュ法による合成窒素生產を想起すればよい。空中窒素固定法はI・G・染料會社がアニリン染料の販路狹隘化によつて、新しい活動分野を開拓した重大な意義を持つものであるが、それは同時にチリ硝石資本に對する挑戰でもあつた。しかしこのチリ硝石資本の敗北は遂にグゲンハイム方法の利用となり、イギリス資本を驅逐してチリ硝石鑛業の支配を獲得したアメリカ資本がI・G・の競爭者としてあらはれた。しかしドイツ國內にもルール工業家の空中窒素固定法がI・G・の獨占を破棄した。そこでこの競爭による過剩生



第四圖　アメリカ合衆國の生產、就業、

產は遂に窒素シンヂケートの成立となり（I・G・はその六十五%を占める）その生產をは、生產能力の七十%に制限した。しかしルールにおいては旣に割當額の增進を目當とする窒素工場の新設が行はれて居る。

技術上の進步が生產費の低廉化に導くとしても、（道德的磨損は別として）生產能力の部分的利用はその增大にと導く。（獨占資本主義の時代には道德的磨損さへもが消費者によつて支拂はれる。）販路の狹隘化を特徵とする戰後資本主義經濟にはこゝに解き難き矛盾がある。そしてこれこそは獨占資本主義の矛盾をば、資本家的獨占より成長した鬪爭をば尖銳化した。生產能力をば平均以上に利用し得るカルテル外企業は同一の技術條件の下では競爭能力に富むこととなる。こゝに又獨占を普遍化し、競爭を止揚せんとする無限の刺戟がある。カルテルのいはゆる『生產促進的』役割りは競爭が國內的規模に、國際的規模に排除せられると共に消滅する。それは國際的に技術の發展を停止すべく組織せられるであらう。利潤の追究を窮極



第五圖　日本の生産就業指數

（日銀、三菱資料による）

の目的とする獨占は又新しい技術の發展による權力關係の推移によつて決裂するであらう。こゝに又技術の進歩への刺戟がある。

斯様に生産性の增大を目的とする技術の發展がそれ自身としては剩餘價値の生産に役立つことが困難であるとすれば後に來る方法は何であるか？　勞働强度の增大による剩餘價値の占有これである！（勞働時間の延長、賃銀の直接引下げを間接に行ふ手段として）フリースバンド（流動傳送帶）の特徴づくる合理化こそはこの意味において戰後合理化の特殊性と、その腐爛性を現はすものと云ひ得よう。我々は勞働强度を高めるための素晴しい技術の發展を見て來た。工場は今やこのフリースバンドを中心として編成せられて居る。連續生産が、規格化が、標準化が勞働の間隙を節約する。生理的限界をさへ越えた勞働强度の支出は、剩餘價値の增大と反比例して、就業勞働者數を著しく減少せしめた。就業者數は

今や相對的にも絕對的にも減少した。「失業者は產業豫備軍より失業常備軍に轉形した。」（スターリン第十六回、K・P・S・U・の演說より）。二千萬人に及ぶ失業者の多くは最早や絕對的に資本主義制經濟組織の中に收容せられ得ないと云ふ意味において、資本主義によつては永久に救はれない人間となり終つて居る。

かくて我々は見る、益々激化する就業勞働者數の減退と勞働者階級の地位の惡化——加ふるに販路の狹隘化、世界市場不況の增大は益々資本を驅つて、勞働者階級を犧牲とする資本の利益の死守へと向はしめる。それに伴ふ消費資料生產部門の停滯的傾向（それは消費資料生產の停滯にも拘らぬ操業率の不足にあらはれて居る）、だが他面それに無頓着に發展した生產手段工業部門の生產規模の擴大と生產量の增大、これは現段階の世界恐慌を不可避的たらしめ、この恐慌をして繁榮期資本主義の恐慌には見るを得ない深刻なものとした重要な因子でなければならぬ。

繁榮期の資本主義は常に增大する消費をば更らに凌駕して擴大する生產によつて特徵づけられた。しかし現段階の資本主義は消費を制限する生產の發展をその特色とする。こゝに沒落期資本主義の解き難き矛盾がある。

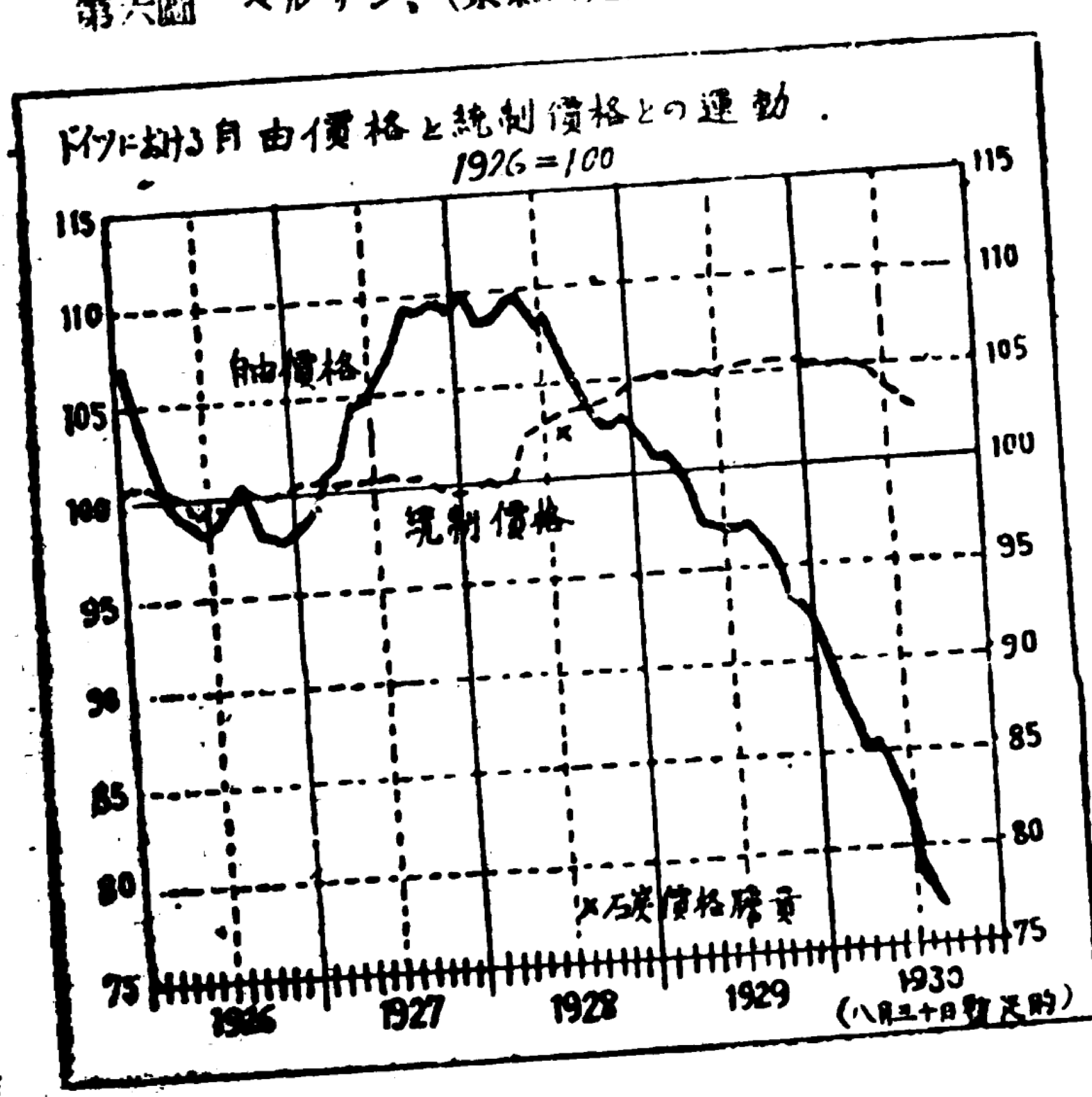
しかし現段階の恐慌を特徵づける要素は生產行程のみに止らない。獨占は價格政策において農業を、中小企業を搾取して來た。これら諸層における破產數の增大はこれを確證するであらう。しかし今や世界恐慌に當面して、獨占體の諸政策は更らに深刻な矛盾を展開して居る。我々は先に滯貨について論じたが、その際最も滯貨に惱む產業部門は鑛山業、原料生產部門であつて、强大な獨占の支配する加工工業部門ではないことを知つた。獨占は生產制限によつて恐慌の犧牲を勞働者階級以外に更らに非獨占部門にも轉化してゐるのである。價格の下落は非獨占部門のいはゆる自由價格において滅亡的なカーヴを示して居るが、獨占部門においてはその價格下落は停滯的若しくは漸落的傾向を示して居る。價格下落による損失を負擔するものは（農業は別としても）中小工業であり、この矛盾は又この恐慌を永びかせる要因ともなり、「獨占とこれと並存する自由競爭との間に存在する帝國主義時代の最も深刻な矛盾」を形成して居るのである。

最後に我々は、この世界恐慌の樣相を一層矛盾に滿ちたものたらしめたところの、不均等を極めた世界金融資本の發達を考慮せねばならない。合衆國は今や全世界の搾取者として金融資本の覇權を握り、ドイツを最後の負擔者とする賠償金、

聯合國間債務の償却金、利子は勿論、剩餘價値の著しい部分が資本投下の利子として合衆國に吸收せられてゆく。(一九二四——二九年の合衆國のドイツへの長期貸付のみで四十一億二千一百萬マルクに上る。)世界のかくの如き債權者と債務者とへの二大分裂は遂に一九二九年に至つて債務國の信用恐慌を惹き起した。「世界金融業者」による勞働者階級と獨立生産者階級とへのこの二重の搾取は、債務國の景氣をより早く轉向せしめたことは疑ひがない。一九二九年の合衆國取引所投機こそはこの世界恐慌の除夜の鐘である。合衆國の海外投資は激減した。ドイツへの長期貸附は一九二八年の十億千七百萬マルクより一九二九年の一億六千五百萬マルクのへと未曾有の減少を示した。かくて信用恐慌は、合衆國にはまだ遙かに及ばないドイツの過剩生産をば恐慌に導くに充分であつたのだ。一九二九年の合衆國の繁榮こそは、其の他の資本主義諸國、植民地を犧牲とする、寄生的な繁榮であつた。

かやうな、恰も沒落期資本主義の袋路を示すこの恐慌狀態をば再び組織化されたる資本主義の力によつて人工的に、資本主義的に、彌縫せんとする試みが如何に無力なるかを如實に示したものは、合衆國金融資本の代辯者フーヴァーの對策であつた。その恐慌對策たる聯邦準備局金利引下政策、土木事業奬勵政策、産業平和政策の三位一體の公式も徒らに恐慌を永びかせ、その深度を深めて居るに過ぎない。スムート・ホーレー關税は世界關税戰を深刻化し、帝國主義諸國間、帝國主義諸國對植民地の關係を激化すると共に他方國內の對立を尖鋭化するに役立つて居る。そこにはこの恐慌を解決すべき何等の希望を持ち得ない。

第六圖　ベルリン、(景氣研究所四半期報による)



しかも資本家側の對策が窮極において、勞働者階級の××と、獨立生產者階級のプロレタリア化とをその依りどころとするものであることはフーヴァーの產業平和會議乃至關稅政策、イギリス勞働組合總會議及び帝國會議、乃至はドイツ工業全國同盟の昨年の大會がこれを裏書する。今やドイツにおいては資本蓄積のために第二段の合理化が、社會政策的失費の節約が大衆消費稅の增徵が三百萬人の失業者（それは勞働者一人當り週賃銀の四分の一に及ぶ犧牲である）を擁する勞働者階級に宣告せられ、イギリスにおいては社會主義の放棄が、自由貿易の破棄と保護關稅の採用による生活費の騰貴が、そして植民地の假借なき收奪が、「產業と貿易との機能の促進」や「大英帝國自給案」の名の下に宣傳せられ、合衆國ではフーヴァーの政策を辯護するために、フォードの惡辣な勞働者解雇法や賃銀切り下げ法を陰蔽するために、或は農業における產業革命――それは農民の沒落を美化せんとする試みである――が說かれ、或は勞働價値說を棄てゝ今更らしくクラーク等アメリカ限界效用學者の限界生產力說がアメリカ勞働總同盟のグリーンによつて採用せられた。

だがこれらの對策はかくては斷じて恐慌の根本的解決に役立つものではあり得ない。否それは益々この恐慌にあらはれた矛盾を尖銳化し、資本主義そのものをも震撼せしむるに至るであらう。

四 經濟恐慌とサヴェート經濟

經濟恐慌と失業の增大とに襲はれてゐる資本主義諸國とは反對に、サヴエート同盟の國內情勢は、國民經濟の增進と失業の漸進的減少とを示してゐる（スターリン）。

既にその第二年を終へたサヴェート國民經濟五ヶ年計畫は、サヴェート全產業の大部分を、社會主義的基礎の上に、歷史的なテンポで發展させ、いまや社會主義的建設の成果は直接に資本主義世界の脅威とまでなつた。かくて現下の世界經濟恐慌は、帝國主義における一切の對立關係をますます深めたと同時に、全資本主義的體系とサヴェート同盟に建設されつゝある新らしい經濟體系との超ゆるべからざる對立をさらに尖銳化せしめてゐる。

五ヶ年計畫第二年度は社會主義工業の偉大なる成果の年であつた。最初の十ヶ月間（一九二九年十月から一九三〇年七

月まで）に、大工業の總生產額は百二十八億五千七百萬ルーブルに達し、前年同期より二九・五%增大した。これは、資本主義世界についてはいふまでもなく、サヴェート經濟建設時代を通じての增大テムポの新記錄であり、五ケ年計畫に比べて約一〇%も凌駕してゐる。しかもかくの如き發展は、工業の社會主義的形態が個人的及び資本家的經營工業に對して益益壓倒的に優勢を確保しつゝある工業化であることを注意しなければならぬ。例へば、社會主義化された工業部面への投資は最近三年間に三三五%に增加したのに反し、個人經營及び資本家セクターへの投資は八一%に減少した。また、工業の社會主義セクターにおける總生產額は僅か三年間に二〇六・二%に增大したのに對し、個人經營及び資本家セクターでは一八・九%だけ減少してゐる。

五ケ年計畫の基礎的プログラムたる重工業生產の飛躍的發展に作つて、それの金屬原料基礎をなす冶金工業の强化と、一般消費力の增大に應ずべき輕工業部門の擴大とは、特に重要な課題となつた。前者については、來年度から操業をはじめ、或は建設に着手せられる多數の大冶金工場及び綜合工業がこれを果さうとしてゐるし、後者については、重工業自體の發展と、本年度における工業原料用植物耕作地の社會化の進展及びその收穫高の增大により、輕工業生產の促進、從つて商品缺乏の緩和を更に進めるべき前提條件は確立せられた。

五ケ年計畫は、サヴェート經濟の全體系における工業の比重を增加し、この國を農業國から工業國へ轉化せしめるといふ目標に進んでゐる。本年すでに、サヴェート經濟總生產において工業の占める割合は、農業のそれを追ひこしはじめた。だが、農業生產においても、たゞ一九二七――二八年における減少（サヴェート同盟各作全體の二割にわたる凶作のため）を除けば、比較的緩慢ながらも絕えず增加してをり、本年度には戰前の水準を突破するに至つた。いま、一九一三年の水準を一〇〇として、最近數年間における穀物生產の發展を示せば第十五表の如くになる。

市場に提供される穀物の數量のみは、今年においてさへ、戰前の水準より二五%も劣つてゐる。こゝにサヴェート同盟における穀物問題の本質があるのだ。けれども他方において、この問題を克服すべき新らしい力が、すなはちサヴェート農場及び集合農場といふ社會主義的セクターが、次第にサヴェート農業の中心的勢力となりつゝあることに注意しなけれ

第十五表

	耕地面積	總生産高	市場供給高
一九二六―二七年	九六・九	九一・九	三七
一九二七―二八年	九四・七	九〇・八	三六
一九二八―二九年	九八・二	九四・四	五八
一九二九―三〇年	一〇五・一	一一〇・〇	七三

ばならぬ。農業機械の生産、トラクター・コムバイン工場の新設擴張及び化學的肥料生産の完全な實現は、か丶る轉向への物質的基礎を與へるものであり、階級としての富農(クラーク)の解消、集合耕作の優越に對する中小農民の確信の増大と共に、穀物問題も本質的には解決されつ丶ある。

サヴェート農場及び集合農場の穀物總生産高と市場供給高とに關する成績を、將來の推定と共に示せば第十六表の如くである（單位百萬ハンドレッド・ウェイト)。

第十六表

	(サヴェート農場) 總生産高	市場供給高	(集合農場) 總生産高	市場供給高
一九二七―二八年	九五〇	六四〇	四・九	二・〇
一九二八―二九年	一、二八〇	七九〇	八・四	三・六
一九二九―三〇年	二、八二〇	一、八〇〇	二九・一	一二・七
一九三〇―三一年(推定)	七、一一〇	六、一〇〇	二五六・〇	八二・〇

かくて、一九三〇年の新作から推定すれば、約二割五分かた集合化された農場は、サヴェート農場と共に、穀物總生産の三四%を、そして市場へ提供される穀物總額の約六〇%を齎らすものと見られる。

かくの如く、市場へ供給せられる穀物の大部分が富農の手から農業内の社會主義的分子の手に集中せられたことは、私商人の販賣高の著しい減退と共に、勤勞大衆に對する組織的なパンの給與を充分に確保せしめたのみか、サヴェート同盟をして久しぶりに穀物輸出國として世界市場へ再現せしめること丶なつた。

サヴェート經濟の飛躍的な發展の背後には、この社會主義的經濟建設を心から支持するプロレタリア大衆が控へてゐる。彼らこそは、今日の世界において、彼ら自身の物質的生活條件の改善を享受しつ丶ある唯一の勞働者階級である。五日勞働日、七時間勞働制（本年七月において、前者は全工業勞働者の六八%に、後者は四一・二%に適用）による勞働時間の短縮、實質賃銀の騰貴(戰前水準より一六七%の増加)はいふまでもなく、特に資本主義諸國と著しい對照を呈するものは、就業人員の増加、從つて失業の減少である。本年四月における失業者總數は百十五萬三千人、六月には約九十萬人であつた。だが、か丶る失業者の大部分は不熟練勞働者であり、他方、熟練勞働者の缺乏が大いに唱へられてゐることを思へば

彼らは、決して産業豫備軍たるものではなく、況んや失業常備軍を形成するものではない。だから、サヴェート經濟の發展と共に、失業數は昨年から今年にかけて七十萬人以上も、すなはち約四二%も減少した。殊に、最近サヴェート政府は失業の減少及び勞働力不足の見地から、職業紹介所に登錄を許可される失業者の範圍を本來の工業勞働者以外にまで擴張した。失業保險の給付條件がますます嚴重になりつゝある資本主義諸國の現狀とは、まさに正反對の現象である。

これらプロレタリア大衆は、彼ら自身のイニシァティーヴの下に、進んで五ヶ年計畫の遂行に協力する。社會主義的競爭、突擊隊運動、及び職場全員の經驗を基礎として五ヶ年計畫の促進をはかるところの、「修正案」提出の運動等は、かゝる大衆的イニシアティーヴの現はれであり、「五ヶ年計畫を四年で」のスローガンは、かくして益々その現實性を與へられてくる。

かくの如き社會主義的經濟建設の發展は、世界經濟恐慌の進行と共に、全資本主義世界との恒常的對立の未曾有な激化をもたらした。

かつて我々は五ヶ年計畫第一年の結果が判明した直後に、クーチェボフ事件、宗教「迫害」反對十字軍、富農淸算政策反對カムパニヤ等、一聯の反サヴェート煽動が資本主義世界に高まつたことを見た。最近、新聞紙上を賑はしてゐるサヴェート同盟の「ダンピング」問題もまた、新らしい、そして恐慌局面にふさわしい煽動手段にほかならぬ。

いかにもサヴェート同盟は久しぶりに穀物輸出國として再現した。だが、帝政ロシアが世界小麥輸出額の二五%を占めてゐたことに比すれば、未だなほサヴェートの輸出額は極めて少ない。しかし一たびサヴェート商品が外國市場に出現するや、國内の農業恐慌に苦しむ諸國は一齊にうごき始めた。ワルシヨウ、シナヤ、ブカレストにおける東・中歐諸國の農業會議、ポーランド、ルーマニア、チェコスロヴァキア等の相互通商融資協定、國際聯盟總會第二委員會におけるダンピング對策問題、其他、佛・獨・英・米・カナダ以下、殆んど全資本主義諸國をあげての「ロシアの市場攪亂」事件、等々。こゝで特に注意すべきは、これらすべてのサヴェート輸出反對カムパニヤを最も熱心に支持するものは、サヴェート同盟と極めて少額の貿易をしか營んでゐないフランス、汎歐洲聯盟案の主唱者フランスだといふことである（最近、日本の鮭・鱒罐詰のマーク

をサヴェート同盟が僞造貼付して輸出してゐる、と通告してくれたのも、この親切なフランスであつた！）。

だが、サヴェートの外國註文及びその輸出原料に對する資本家間の利害の對立は、や、もすればこの反サヴェート戰線の歩調を攪亂せしめる。我々は、さる八月、米國政府の發したサヴェート木材陸上げ禁止令とその解除とにおいて、その最もよい實例を見るであらう。更に滑稽なのは九月中旬シカゴ取引所に起つた『ロシアの小麥ダンピング』事件である。當時、シカゴ取引所の小麥相場が一九一七年以來の安値に低落したとき、米國農務卿ハイドはこれを『ロシアの投資』に歸したが、數日後、却つてそのために、更に廿數年來の低値に暴落したのに狼狽して、結局、彼は米國下院の常設機關たるサヴェート・ロシア宣傳調査委員會(!)をして、サヴェート同盟には市場攪亂の意圖なしと聲明せしめるのやむなきに至つたのであつた。

サヴェート同盟の對外關係は、一方において、資本主義諸國とのサヴェート經濟關係を顚覆させようとする公然ないし隱然たる準備、他方において、資本主義諸國内における勤勞大衆のサヴェート同盟への支持とサヴェート同盟自體の力の增大、この二系列の相異つたモメントの抗爭によつて決定されてゐる。五ケ年計畫の發展は後者の力を增大する。だが、それと共に、また世界經濟恐慌の進展と共に、他方の要素も益々昂められてゆくであらう。

五　世界恐慌の展望

我々は結論へと急がう。

上述の如く今度の恐慌は資本主義的世界を短期間のうちに蔽ひ盡したばかりでなく、先進資本主義諸國にも植民地及び半植民地にも激しい××を與へ、工業過剩生産と農業過剩生産とが重り合つて起つてきた。しかもその際、これらの過剩生産が、價値恐慌の克服のための方策たる合理化、語を換へていへば市場の狹隘化を犧牲とした生産力の急速なる發展（賃銀の切下げ、構成的失業者群の出現、勞働者階級の一層の貧窮化を想起せよ）の結果であつたことは留意さるべきである。『恐慌には唯一つの救濟手段しかない。即ち新市場の獲得によるにせよ、將た又舊市場の徹底的搾取によるにせよ、兎

もかくも、市場の搾取の外に道はない」(エンゲルス)。世界市場の隅々にまで深刻化したこの世界恐慌の中において、新市場を何處に獲得し得るか。又、既に合理化によつて國內市場の狹隘化を顧慮するところなく犠牲とした今日、如何にして更に一層徹底した搾取を敢行しうるか。それらはいづれも謂はゞ物理的不可能といひえやう。かく觀察してくる時、現在の世界恐慌の壓力が如何に××であるかを知り得ると共に、その恐慌克服が如何に近代社會にとつて至難であるかを推定するに足る。ブルジョア學者がかゝる恐慌の壓力に狼狽して唱導し始めた一連の恐慌對策、曰く偏在せる世界の金貯藏の不平等分配、曰く管理通貨の創設、曰く金輸出の再禁止、金本位の廢棄等々は、いづれも『貨幣の錯覺』から生ずるところの恐慌激成策たるに他ならない。勿論、貨幣は商品流通を媒介する。だが商品流通の停頓は貨幣の稀少なるがためではない。商品流通は歸するところ、商品の生産的消費、特には個人的消費に到達するまでの段階である。流通界に存在する貨幣量が如何に多からうとも、社會の消費力が過小であれば、商品流通は減退せざるをえない。だから流通法則が流通界の貨幣量を決定するのであり、過小なるものは貨幣量ではなくて、社會の消費力である。過剩生産はそこに現はれる。從つて生産と消費との分離對立が再び恐慌によつて統一されるまでは、現存矛盾は解決されえない。現に世界恐慌は、社會のあらゆる部面に狂暴なる破壞力を逞しうしつゝあるにも拘はらず、尚未だ底を突かず、諸物價は段階的に崩落に崩落を重ねつゝある。上半期に一千七百萬と稱せられた世界の失業は、下半期に入ると共に早くも二千萬を突破したと報ぜられ、冬季には三千萬に達すべしとの豫想も略々確實といつてよい。景氣恢復の兆候は本論の各所に見た如く未だ世界の何處にも現はれず、資本主義的世界を蔽ふた暗澹たる情勢の深刻化のうちに、恐慌は冬季を持ち越すであらう。

特に今日の資本主義が獨占資本主義であるといふことは、『過剩生産にも拘はらず貨物に對して高き獨占價格を維持するための資本家聯合の努力の不可避性をもたらす。貨物に對する主要消費者を形成してゐる人民大衆に對して恐慌を特に苦惱なるものたらしめ、以つてこれらの大衆を缺乏と貧窮に導くところの、この事情は、必然的に恐慌を永びかしその解消を妨げる』(スターリン)。二千萬以上の失業者と共にますます地位の××しつゝある勞働者階級は前途暗澹たる恐慌の進行を、何時まで××うるであらうか。

恐慌は永びくであらう。だが、各國、特に資本的强國は少なくとも自らだけはこの恐慌から脱出せんと試みるであらう。その方策は第二の合理化の强行か、若しくは、或はこれと同時の、海外市場の强力的獲得である。第二の合理化の强行が矛盾を更に決定的に尖銳ならしめることは言ふまでもない。だが、從來その巨大なる生產物の比較的少い部分しか輸出してゐなかつたアメリカ合衆國が、今後海外市場の獲得に狂奔することは疑ひを容れない。今までのところでは合衆國の輸出の上には絕對的には勿論、相對的にもかゝる傾向は數字的には明瞭に窺ひえないが、だが恐慌の進行と共に、愈々必然的となるであらう。ヤング案のもつ矛盾と共に、この事實は市場獲得鬪爭を廻つて現在の基本的對立たる英米の對立を一層現實的なものたらしめるであらう。恐慌が持續する間、××危險が×××する可能性は常に至るところ成熟しつゝあるのだ。

沈鬱な資本主義的世界の狀態に引き換へ、既に見た如く、サヴェート同盟では『五ケ年計畫を四年で』といふ素晴しいテンポで發展しつゝある。これは沒落資本主義の沒落のテンポを語る歷史的證明である。サヴェート同盟の存在、その發展は轉形期における決定的モメントとなつた。サヴェートに對する資本主義的諸國のブロック、十字軍の結成は、かゝる危機の征服としてのみならず、廣大なるロシヤの資本家的解放、新市場の開拓としての意義を有する。そしてこれらは今や資本制一般の存續のために絕對的必要となりつゝあるのだ。ダンピング問題さへ帝國主義的ブロックの形成へと働いた。對サヴェートの帝國主義的××の危險は愈々增大するだらう。

フリードリヒ・エンゲルスは既に約八十年前にイギリス資本主義の發展に關して次の如き結論を下した。『イギリスの工業家たち——彼等の生產手段はその販路とは比較にならぬほど大なる膨脹力を有してゐる——が、彼等の救濟手段が盡き果てゝしまひ、現在では尙あらゆる恐慌と次の恐慌との間を仕切つてゐる繁榮期が、過度に增大した壓迫的な生產力の重さに堪へかねて、全く消え失せて、もはや恐慌と恐慌との間を仕切るものが、單に短期間の弱り切つた半睡的な工業的活氣にすぎなくなり、若しこの畸形的な狀態がそれ自身の救濟手段を自己のうちに宿してゐなければ、そして同時に工業的發展が、その時社會の指導を單獨に引き受けることができる階級、即ち×××××××を造り出さなければ、工業も商業も一切の近代××が、一方には用ひえない生活力の過剩と、他方には精根共に盡きた消耗とのために、滅亡しなければ

ならぬといつた點に向つて、急速度をもつて進んでゐることは、明々白々である。××××××××はその×こそ不可避的であり、その勝利は確實である。『エンゲルスの豫言は、たゞにイギリスについて××したばかりではない。世界經濟の過程はこれを自ら××しつゝある。一九三〇年の世界恐慌は更に一層急速にそれを歴史的××たらしめるであらう。

一九三〇・一一・五

後記

世界經濟の分析＝批判が今日ほど必要にせまられてゐるときはない。中央公論社は時代のこの要求をいちはやく取りあげ、世界經濟批判會にその研究發表の機會をあたへた。

世界經濟批判會は、原則として、號を逐つて、各國經濟の情勢に客觀的展望を與へるであらう。この展望に際しては、經濟を基礎的對象とするも、なほその集中的表現である、政治的社會的諸過程にも觸れるであらう。

第一回は、恐慌に襲はれつゝある一九三〇年の世界經濟を檢討した。もとより資料の整備はなほ不充分であつたが、『世界情勢の展望』のためには、幾分役立ちうるかと思ふ。本社のこの企ての今後における發展は一にかゝつて讀者のよき支持とよき批判とにある。

世界經濟批判會
中央公論編輯部

選擧革正と政治教育

美濃部達吉

一

今年春政府の諮問機關として設置せられた衆議院議員選擧革正審議會は、設置以來今日まで各委員の非常な努力を以て、審議を續けて來て居る。五月以後、八月の夏期休暇を除くの外は毎週少くとも一回、時としては二回以上、委員會を開かないことは無く、各委員は殆ど全部が無缺席で、熱心に討議を行つた。委員の多數は、現在の我が選擧界の主たる情弊が、第一には、投票の買收が多くの地方に於いて盛に行はるることの事實が歴然たること、第二に、各候補者の要する選擧運動の費用が頗る巨額に上り、法律の定むる費用の制限高が全く空文に歸して居ること、第三には、官憲殊に地方長官及び地方警察官の不正の勢力が、選擧に影響を及ぼすこと、の三點に在ることを認むるに於いて一致した。如何にして此等の弊を除き得べきかに就いては、思考せられ得べきあらゆる方策が、各委員から提案せられ、或は深く其の原因に溯り、或はイギリス、アメリカ其の他の諸國の事例を參酌し、或は現下の情弊に對する一時の對策を講ずる等、論議甚だ多端に亙つたが、事、政黨政治の根本に關する問題であるだけに、其の解決を得ることは極めて困難で、今日まで未だ眞に此等の情弊を除き得べき有效なる方策を求むることに於いて、意見の一致を得るに至らない。

唯一つ、今日までに決し得たことは、選擧革正の實を擧ぐる爲には「政治教育」の普及を必要とするといふことで、選擧界の情弊の多い主たる原因は、一般國民の間に健全なる立憲思想の缺乏して居ることに在りと爲し、其の弊を救ふ爲には、立憲思想を涵養することが最も必要であり、而してそれが爲には、

政府は政治教育を普及する爲の適當なる施設を爲すことを要すといふに在る。

革正審議會が、政治教育普及の手段として、政府に實施を要求したものは、左の三種に分れて居る。

一、政治教育調査會に關するもの
二、學校教育に關するもの
三、社會教育に關するもの

第一の點は、政治教育に關する事項を調査審議する爲に、文部省の下に政治教育調査會を設置すべしといふのであり、第二の點は、主として各種の學校に於いて政治教育に關する科目を加へようとするのであり、第三の點は、主としては政治教育に關する民間の團體に政府より補助金を與へ、及び政府の手に依つて政治的な社會教育を行はうとするのである。當局者の談話として傳へらるるところに據ると、政府が此等の施設を行ふに就いて必要なる費用として豫想して居る金高は年額凡そ七十萬圓であるといふことである。

革正審議會は、大多數の一致を以て、此の案を可決し、これを以て政府に答申することに決した。本文の筆者は審議會の席末に連る一人として、不幸にして、此の問題に關して、多數の委員と意見を異にし、獨りこれに反對する意見を述べたのであつたが、それは多數委員の顧みるところとならなかつた。

自分は政府の手に依つて行はるる此の如き手段が選擧革正の上に於いて、及び一般に立憲思想を涵養する點に於いて、大なる效果を奏し得べきことを信じ得ないもので、今日の如き財政窮乏の最も甚しく、必要避くべからざる經費をすらも、尙繰り延べ又は節約するの已むを得ざるに至つて居る時期に當つて、此の如き效果の甚だ疑はしい手段の爲に、少からざる經費を投ぜんとするのは、國家の爲に甚だ取らないところであるのみならず、政府の手に依つて此の如き施設の行はるることは、却つて反對に、弊害を生ずるの源となることを恐るるものである。

中央公論社から一文を求められたのを機會として、玆に少しく所謂「政治教育」の本質を論じ、私が政府の手に依つて此の如き「政治教育」を行はんとすることに反對する理由を明かにし以て江湖の批判を得たいと思ふ。

二

所謂「政治教育」とは果して如何なる教育を意味するのであるか。

それには、凡そ三の事柄を思考することが出來る。其の一は立憲政治、地方自治制、陪審制度等現代の政治上の各種の制度

に付いての知識を授けることであり、其の二は、今日の實際の政治を理解し、これに對する公正なる批判力を養成することであり、其の三は、立憲國の公民として必要なる政治道德及び政治的信念を涵養することである。

此等の三點の中で、比較的に最も效果を擧げ易いのは、其の第一の點、卽ち制度に就いての知識を授けることである。しかし、これは今日に於いても、相當の程度にまで、學校教育に於いて、及び社會教育に於いて、既に行はれて居るところで、學校教育に於いては、國語教育、修身教育、歷史及び地理の教育等に於いて、それ等の知識が授けらるるのみならず、中等學校に於いては、特に法制經濟の科目をすら設けられて居る。此等の諸科目に用ひられて居る教科書や、その教授の方法、擔任教員の素養等に就いては、改善の餘地は尙甚だ廣いであらうが、此等の外に、尙新に政治教育の爲に科目を增設し、授業時間を增課することは頗る考慮を要することで、容易に贊成し難い。自分は、今日の中等學校に於いて、法制經濟の科目を必修せしめて居ることに就いてすらも、頗る疑惑を抱いて居るもので、此の如き特別な科目を中等學校で教授することは、やゝもすれば淺薄な表面的形式的の知識を授くることにのみ流れ易く、眞に健全な政治的常識を養ふ所以ではないと思ふ。寧ろ、國語や、修身や、歷史地理などの科目中に於いて、併せてこれを授くる方が、一層適當な結果を得る所以ではないかと考へて居る。

それは兎に角、單に制度の知識を授けることだけであれば、學校教育に依つても、相當の程度にまでは、目的を達し得ることは疑ないであらう。しかしながら、それが果して選擧界を廓淸する上に、如何なる效果を奏するであらうかと言へば、私はそれに依つては、何等の效果をも期待し得ないことを信ずるものである。

今日の政界殊に選擧界の情弊の基づくところは、決して知識の缺乏に在るのではない。單に知識の上から言へば、憲政實施の當初に比べて、今日の方が、憲政に就いての一般民衆の知識が遙かに普及し向上して居ることは、更に疑を容れないところである。しかも憲政實施の當初に於いては、選擧は比較的淸淨に行はれたのであつて、投票の買收は極めて稀にしか行はれなかつた。明治二十五年の有名な政府の大干涉の行はれた時にすらも、民黨の大勝利に終つたのであつて、それは一般の選擧民が、干涉や買收に依つて投票を左右せられなかつたことを證明するものである。それが、選擧に就いての經驗を重ね、國民の政治知識が漸次一般に普及し向上するに隨つて、選擧の腐敗が漸次益々甚しくなつたのであつて、其の腐敗の原因が決して知

識の缺乏に在るのでないことは、それだけでも明瞭であらうと思ふ。朝鮮の統治に深き經驗を有する某委員の明言せられたところに依れば、朝鮮に始めて地方自治制の端緒を開き、協議會の議員の選擧を行つた時には、一の投票買收もなく、棄權者も極めて少く、殆ど理想的の選擧が行はれたといふことである。しかし、それが朝鮮に於いて內地の現在よりも、政治知識が進步して居る爲であるとは、何人が思考するものがあらうか。

今日の選擧界の主たる情弊が、（イ）投票買收の行はるること（ロ）選擧費用の巨額を要すること、（ハ）官憲の干渉の行はるることに在ることは、多く異論の無いところである。しかし此等の何れの一にしても、一般選擧民の政治知識の缺乏に其の原因を有して居るとは、何人が斷言し得られようか。官憲の干渉や選擧費用の巨額に上ることが、知識の不足に基づいて居るのでないことは勿論であるのみならず、投票買收の行はるることも其の主たる責任は、買收者即ち候補者及び其の運動員に在るのであつて、被買收者に在るのではない。勿論、買收に應ずる者が有るからこそ、買收が行はるるのであつて、被買收者も亦其の責任の一半を負擔せねばならぬことは、言ふまでもないが、しかし、被買收者が買收に應ずるのも、決して知識の缺乏が其の原因を爲して居るのではない。責を臺閣の重きに負うて居る者すらも、時としては、金錢を以て其の職權を賣らんとする者を生ずる今日の時勢である。上の好む所下これに從ふ。如何に國民教育に依つて、國民に制度上の知識を授けたとしても、それに依つて、選擧廓淸の目的を達することは、全く望み得ないところである。

三

それであるから、所謂「政治教育」の主眼とするところは、決して單に制度上の知識を授くることに在つてはならぬ。若し選擧廓淸の爲に政治教育の普及が必要であるとすれば、その所謂政治教育は、知識を授くることではなくして、前に擧げた第二及び第三の點、即ち現代政治の理解及び批判並に政治道德及び政治信念の養成を主眼とするものでなければならぬ。

しかしながら、此等の目的を達する爲には、普通に「教育」と稱せられて居るやうな手段を以ては、效果を擧ぐることは不可能であり、殊に政府の手に依つて行はるることは危險である。

先づ第二の點に就いて言ふと、現代の政治は、國際政治は暫く別として、少くとも國內政治に就いては、明に政黨政治であつて、政府黨と反對黨とが相對立し、政府の行ふ政治に對しては、反對黨はこれを非難し攻擊することを通常として居る。故

に、學校教育に於いて現代の實際政治に就いての理解力と批判力とを養成しようとすることは、即ち學生をして、政府黨と反對黨との何れを是とするかを、理解し批判せしめようとすることに歸する。しかしながら、實際に於ける政治の運用は、極めて複雜な國內及び國外の情勢に依つて定まるもので、單純にはこれを理解し得べきものではなく、況んやこれを批判することは一層困難である。學校教育に於いて、斯の如き趣意を以て政治教育を行はうとするのは、甚だ危險であり、學校生活をまでも、政爭の渦中に陷いらしめようとするものである。それは全然從來の教育の方針と背馳するもので、從來の學校教育は、嚴格に教育と政治とを分離することを主義として居る。私は必ずしも此の從來の方針を絕對に正當であるとするものではなく、少くとも、現代の政黨政治の實際の事情と各政黨の政綱ぐらゐの知識を、學校に於いて授くることは、或は適當と考へるけれども、進んで現代の政治を論議し、これを批判することは、學校教育に於いては、避けねばならぬことと信ずる。治安警察法が學校の學生生徒は勿論、教員すらも政事上の結社に加入することの出來ないものとして居るのは、其の主義の善惡は暫く別問題として、學校教育と實際政治とを分離せしめんとする趣意に出て居ることは明瞭であり、隨つて此の規定を存置しながら學校教育に於いて、現代政治の可否を論議し批判せしめようとすることは、明かに矛盾と謂はねばならぬ。

立憲國の公民として、一般民衆が現代の政治に就いての健全且つ公正なる批判力を有することは、極めて必要であり、それが立憲政治の根柢を爲すものであることは、疑を容れないところである。しかしながら、此の目的を達する爲には、政府の手に依つてではなく、眞に政治上の眼識を有する識者の努力に待つ外は無い。廣く言論の自由及び集會結社の自由を認むることは其の最も必要なる條件である。學校教育は唯其の理解力、批判力の基礎となるべき一般的の準備知識と常識的の判斷力とを養成するを以て滿足すべきもので、直接に現代の政治に就いて論議し批判することは、學校は決して其の適當の場所ではない。

以上は專ら學校教育に就いて述べたのであるが、社會教育はこれとは全く趣を異にする。社會教育は、既に學校教育を終へたもの又は學校と關係の無い一般成人に對する教育であつて、それには現代政治の批判といふ意味に於いての政治教育を躊躇すべき理由は無い。けれども、此の意味に於いての社會教育は全然政府とは獨立に、政府の保護の下に立たない獨立なる機關に依つてのみ行はれねばならぬもので、新聞紙は殊にその最も有力なる機關である。政府が國庫の費用を以て自らこれを行ひ

又は政府の保護の下に立ち國庫の補助金を受くるやうな團體に依つて行はるることは、寧ろ有害である、何となれば、それは政府それ自身の批判であつて、唯政府から完全に獨立な地位に在る者に依つてのみ、行はれ得べきものであるからである。

更に第三に、政治道徳及び政治信念の養成に至つては、所謂政治教育に依つて、これを達することは、一層望み難い。政治道徳と謂ひ、政治信念と謂ふも、政治にのみ特有な道徳や信念が存するのではなく、それは唯一般の道徳、一般の信念の政治に關する應用に外ならない。これを養成するの途は、唯一般の道徳及び感情教育に在るべきであつて、政治に特別な道徳教育や感情教育の存すべきではない。

四

私が所謂「政治教育」を以て、選擧廓清の上に殆ど何等の效果をも期待し得ず、却つて其の方法の如何に依つては、有害の結果を生ずる虞ありとする所以は、略以上述ぶる如くである。

しかしながら私は決して眞の意味に於いての政治教育を不必要なりとするのではなく、その意味に於いての政治教育に就いては、私は其の必要を認むることに於いて、決して人後に落ちないものである。眞の意味に於いての政治教育とは何を謂ふか。それは一般民衆をして、單に知識の上に於いてのみならず、中心の感情に於いて、議會及び其の議員並に議會の最も重要な機關である政黨に對する信頼尊敬の念を抱かしめ、隨つて又選擧が公民としての最も大切な職務であることを自覺せしむることに在る。

此の目的を達することは、學校教育に於いて政治關係の科目を加へたり、民間の團體に補助金を與へるなどの方法に依つては、全く不可能であつて、それには、第一に、議會及び政黨それ自身の品格を高めることが必要である。議會政治それ自身を清く正しくすることが、政治教育の最も有效な手段であり、それが殆ど唯一の方法である。今日の選擧界の腐敗は、決して一朝一夕の原因に基づいたのではなく、その因つて來るところは頗る深いが、しかし、主として其の責に任ずべきものは、過去及び現在に於ける政治家であつて、人民ではない。此の腐敗の廓清策を講ぜんとするに當つて、最も必要なものは、政治家自身の反省であり、政府も政黨も、深く自ら顧みるところが無ければならぬ。しかるに、其の原因を國民教育の缺陷に歸し、所謂「政治教育」を以て廓清の手段と爲さんとするが如きは、徒に責任を他に轉嫁するもので、自分は其の可なる所以を知らない。（十一月十日稿）

勞働價値說の擁護難

高田保馬

一、はしがき

中央公論十月號に於て櫛田民藏氏は『マルクス勞働價値說の擁護』と題する一論を公にせられた。それは私の勞働價値說の批判(經濟論叢本年一月號、改造本年八月號)の批判である。私の拙い議論が、マルクス經濟學の最高權威と稱せらるる櫛田氏によりて、分析討究の對象とせられ、長篇の敎示を與へられたることは、深く感謝するところである。

明治四十四年の秋であつたかと思ふ。瀧正雄氏の下宿で櫛田氏と私とが落合つては度々經濟に關する議論をした、論じて疲れると五七の文句を出し合せて、何の合作をもやつたと記憶する。大正にいつてからは、集會所の二階で石龍子の人相講演をきゝながら、私の手帖に交る代る歌や何をかきつけたこともあつた。

私が廣島にたつ前は同じ田中村に住居を近くした關係から、時々マルクスに關する話をも伺つた。私の櫛田氏についてもつ追憶と印象とは、久し振に此木屋の匂ふ京都の秋の夜を、しみじみと更くるまで昔話をしたいと云ふ氣持にひたらせる。此氣持から云ふと、議論の筋にたいした相違、分岐がないならば、たゞ敎示を感謝するだけにしたい。けれども遺憾なることには理論的の距離が餘りに大きい。云ふべきを云はざれば、私の學問的立場が守られない。而も苟も筆をとつて敎を乞ふとなれば、理論の運びは飽まで冷且つ嚴ならざるを得ぬ。願はくば此事を諒とせられよ。

櫛田氏は私が批判の對象を十分に理解せざるが爲に誤謬に陷るとせられた。これに關して豫め述べたいことが一つだけある。批判の對象を十分に認識せざる時、その批判が誤謬に陷ると云

ふのは尤のことである。ところで櫛田氏は果して、私見を十分に認識して批判を下してゐられるであらうか。私は云ふ、櫛田氏の私見についての認識は過誤に充ちみちてゐる。これで、私見に加へられたる批判が誤らざる理由はない。次に、櫛田氏は私が批判の對象を理解してゐないと繰返し述べられてゐる。而も、自ら理解せらるる所を述べて私に敎へらるる所を見れば、それは私の理解してゐるところである。極めて多くの場合、私の述べたる內容と同一の內容を述べられてゐる。これで、私が批判の對象を理解せずと云はれるのは、餘りに當らない。此二點のうち、まづ前の點、卽ち、櫛田氏が私見を如何に誤りて認識せられてゐるかを述べる。後の點については、櫛田氏の反批判の內容を一々問題とする場合に、それの證據をあげたいと思ふ。

二、「マルクス批判者の批判」の批判

櫛田氏が私見を理解せられざることの如何に甚だしきかを、その論文の末尾「七、マルクス批判者の批判」から數多の證據をあげて之を示したい。

私見、詳言すれば價値及び價格の理論に關する私の見解は、別の機會に於て示したるが如く(『價格の理論』と云ふ拙著の全卷がこれを示してゐる)、全然限界原理の上に立つ。勿論、これは今日最も有力なる流派に從つてゐるのに過ぎぬ。かゝる事情にあるが故に、限界原理を理解せずして私見を理解することは、全然不可能である。然るに櫛田氏は云はれる。『敎授に從へば今日、經濟學は一轉機を劃してゐる。所謂自らを實現してゆくものは、絕對的に、平均的なるものでなくして限界的のものである、と云ふことであるが、これは今日は獨占資本の時代で自由競爭と云ふものがないから、自由競爭にもとづく經濟學は一轉機を劃すると云ふ意か』(四〇、四一頁)。而して限界的なるものの支配を獨占價格の形成と解してゐられる(としか私には解せられぬ)。これは餘りに極端なる見當違である、問題として吟味する必要もないことと思ふ。私見に對する櫛田氏の理解の如何なるものであるかは、これだけによりて既に明にせられてゐるが、なほ一二のことを附記する。

櫛田氏は價格に關する私見を批評してまづ云はれる。『しかし、貨幣とは何か、貨幣の一定量としての消費者の所得とは何か。價値に關する敎授の主張から判斷すれば貨幣は一般に好愛せられる便利な商品だと云ふ外はない。だがそれは、或る商品は便利なる商品たるが故に商品所有者達が天氣晴朗なる一日之を貨幣として使用することを盟約するによりて發生すると云ふことにならないか。それで滿足できるだらうか』(三九頁)。答へて

云ふ、私見はまさにその反對である。貨幣は商品と對極的地位に立つもの、貨幣は貨幣たる限り、毫厘といへども商品の要素を含まない。これは拙著『貨幣の理論』一卷によりて證明せられる。

次に剩餘價値に關する私見を批判して次の如くに云はれてゐる『マルクスの勞働價値說においてはそれ（利潤）は勞働者が勞賃としての必要勞働時間以上の勞働としての剩餘勞働にもとづき、詳言すれば、剩餘勞働が利子企業利潤商業利潤及び地代に分割せられると云ふのだ。國民所得の限界をなすものは生產に支出せる人間勞働である。勞働價値說を否定する教授はむろんこれを否定する。否、之を否定せんがために勞働價値說を否定する。これを否定して如何なる答ありや。恐らくは、產業利潤は資本家が任意につけ加へる割增しだと云ふより外あるまい。假りに利子企業の利潤及地代は皆割增しだとすれば、一方的な割增しは結局強力を伴ふであらう。武裝による割增し、これが唯一の答であらう。だが如何に武裝せる割增しでも無い袖は振られぬ。如何に武裝しても奪ふ對象物が無くて何を奪ふか』（四〇頁）。これもまた甚だしく、誤れる解釋である、と云ふよりも推測である。利潤は武力、强制によりて附け加へる割增しであると云ふことは、私が主張せむと夢にだも企てざるところである。拙著『價格の理論』はすべてこれを說明する。武力による割增しと云ふのは六七十年の前にあらはれたるデューリングの見解である。私見とは全く別物である。かう云ふ批判を下されるのは、赤の他人のやつた泥棒を汝がしたのだと責められる位に迷惑を感ずる、と云ふ外はない。

經濟理論の根本をなすと見る限界學理について、貨幣について、利潤の性質について、私見として述べられてゐる項目のすべては甚だしく私見から異なる。櫛田氏は私見をかくまで完全に誤認せられてゐる。かゝる誤謬の上に正しき批判の與へ得られやう譯はない。

三、內在的批判の要點

櫛田氏の批判は、私のマルクス價値說批判が二段に分れてゐたのに應じて、亦二段に分れてゐる。一は私の論文『マルクス價値論の價値論』に於ける內在的批判の批判であり、他は『勞働價値說は支持し得らるるや』に於ける超越的批判の批判である。而して私の議論のたて方から云へば內在的批判は第一陣であり、超越的批判は第二陣である。前者にして破壞せられずとすれば、既にそれだけでも、マルクス勞働價値說の支持せられがたき事は明白となる。だからまづ、內在的批判に對する櫛田

氏の批判を吟味せむとする。

茲に於て、理解を容易ならしめむ爲に、一應、私の內在的批判の要點を述べる。

(一)再生産の不可能。 資本主義社會に於ける單純再生産、擴張再生産が進行し得るのは、マルクスによれば、各生産部門間に一定の比例が保たれてゐるからであり、此比例の保たるる限り、それが進行し得る。然るに、マルクスに於ける再生産の數式に於て示されたる比例的關係は、生産物がすべて平均利潤に於て、云はゞ生産價格に於て賣買せらるる限り、到底維持せられがたい。從ひて、それはかの比例の維持せらるる限り、再生産は圓滑に進行し得ずと云ふことにならねばならぬ。第一部門(生産手段産業)の生産物のうち、一定部分は第二部門(消費資料産業)に賣られねばならぬ。而も第二部門の資本家はその生産物の賣上によりて買取り得る。然るに、二の部門は必然的に資本構成を異にする。從ひて、平均利潤率が成立する限り、第二部門の生産物は價値よりも低く賣れる。此安い賣上げを以て、第一部門の生産物の價値に於て等しい大さだけを、價値よりも高い價格に於て買取りうるはずがない。二の部門間に、價値の點から見て一定の比例が保たれてゐる限り、第一部門の生産物は賣れ殘る。

(二)價値と價格との無限なる背離。 平均利潤率が成立する以上、數多の生産部門の生産物は價値よりも高く又は安く賣られる。利潤が資本に對して計算せらるる以上、而して、生産手段が價値以上に賣らるる傾向(これは前段に說明した)の存する以上、資本構成の高く不變資本の割合に大なる部門の生産物は、資本の回轉がすゝむごとに益ゝ價値より高く賣られる。加之、價値よりも安く賣られる傾向のある消費資料は大抵消耗せられ、從ひて同一價値の資本も益ゝ大なる價格を有するに及び、生産物全體の價値と價格とは愈ゝ離れてゆく。平均利潤の成立によりて、價値と價格は個々の商品について離るるのみならず、又商品總體についても無限に背離してゆく。

(三)價値ではない差額地代。 農業生産物については「最劣等地の生産價格が常に調節的の市場價格となつてゐる」。從ひて差額地代だけは(農業資本の低位構成、從ひて餘剩價値が平均利潤の形成の爲に農業部門から流出することをはなれて見る、これを取入れて考へても結論には何の變化もないが)、價値以上の價格、價値を伴はざる價格である。これだけ、社會の總生産物の價値と價格との間に開きがある。勞働價値說は之によりて破壞せられる。

(四)平均原理による差額地代の否定。 交換の比例が生産のた

めに平均的に必要なる勞働數量によりて決定せられるとするならば、云はゞ自己を貫徹するものが平均的なるものであるとするならば、社會全體を通じて差額地代は全然存在しないはずである。

此うち(三)と(四)との二は根本に於て共通なる基礎を有せずとせぬ、然れども、明確に區別し得べき二の論點である。而して櫛田氏はこれらのうち、初めの三の論點のみを取扱つてゐられる。而して第四の論點については何等觸れらるるところがない。取扱はれた三の論點について、順次に私見を述べる。

四、平均利潤に關して

第一の論點については次の如く述べられてゐる。『第一の再生産の表示に關する批判は、單に社會總資本の問題である所のものを個人資本のそれにすり換へるに依て成立つ。各種生産部門間に於ける均衡條件を示すところのかの再生産の表示は、それによつて現實の市場關係の內的關聯を明にすることを目的とするものであり、生産資料及び消費資料の二大部門間の關係は社會總資本の問題として提起せられ、また兩者の交換は價値交換たることが假定せられてゐる。然るに、批判者はかの表示を以て個人資本のそれとすりかへ、價値交換に代ゆるに生産價格の交換を以てする。かくて二大部門の均衡條件は得られざる再生産は單純再生産でも擴張再生産でも共に不可能だと結論してゐるのである。』(六頁)。

再生産の數式に關して、それが二大部門間の交換を價値交換と假定してゐること、現實市場の內的關聯を明にすることを目的とすることを、私とても、明白に之を認める。たゞ問題は此數式の示すが如き交換が現實に於て、從ひて、價格交換として行はれ得るかと云ふのである。而して、利潤率が平均する限り、行はれ得ずとするのである。櫛田氏はこれを否認すべき論據を示されぬ、然る限り、私の主張はそのまゝ、肯定せられねばならぬ。

櫛田氏は此點に關する私見を以て、社會總資本の問題である所のものを個人資本とすりかへると云はれる、而も此すりかへると云ふ表現は、價値交換に代ふるに價格交換を以てすることである。これでは私見が全く理解せられてゐない。價値交換に價格交換をすりかへるのではない、再生産の進行は、一定比例の價値交換を必要とすると共に、價格交換を必要とすると云ふのである、すりかへるのでない、價値交換の外に價格交換を考へるのである。此價格交換の考察を以て個人資本の考察とする、その論據いづこにありとせらるるか。價格交換は個人資本について考ふる限り、個人資本の考察である。社會總資本について

考ふる限り、それは社會總資本の考察ではないか。現に、私の價格交換を考へたる表示にあらはれたる資本は何れの個人の資本であるか。それはたゞ二部門の社會的資本に外ならぬ筈である。要するに、此第一論點に關する批判は何等私見の要點にふれてゐない、否、私見の目的がつかまれてゐないとすら思ふ。而してその主張せられてゐる所自體に誤謬がある。此誤謬は第二論點の吟味に於て之を明にする。

第二の論點については、私がマルクスの意見として論駁を加へたるものをそのまゝに述べてゐらるゝに過ぎぬ。これを如何にして批判と見うべきか、何故にこれを述べて批判を加へたりとせらるるか、私には不可解と云ふ外はない。

『教授はこの點（費用價格と價値との關係――筆者）を問題とし、費用價格としての資本を生產價格において買入れたるものとして計算し、價値と價格との無限の離反を指摘しようとする。その示された數式は、資本の有機的構成の最も高いものであり、從つてそこでは、生產價格は常に價値以上であり、しかも資本が何囘廻轉せられても價値には變化のないものとして計算し、かくて如何に價値と生產價格とが離反するかを見よと云ふ。だがマルクスの假定は個々の商品についてではない。原料や機械や勞働力やその他資本に入りこむ個々の商品の價格は或は價値以下であり以上であるが、一產業の資本としてはこの差異は互に相殺せられ大體において（こゝに差異の生ずることはマルクス自ら認むるところ）價格の總計は價値の總計に等しく、しかも一產業部門の資本でなく社會總資本を問題とする限り此差異は生產價格相互の相殺によりて無視し得るものとなる』（七頁）。

個々の商品の價格は或は價値以下であり或は價値以上であるが、資本の中に入りこむ『商品の價値に對する生產價格の過不足は互に相殺される』と見るマルクスの主張は私は之を『四、マルクスは氣付きながら結論を引出さず』（八九頁以下）と云ふ項目に於て詳論してゐる。櫛田氏をまちて始めて知るわけではない。而も私は、各產業の資本構成が異なる以上、ことに生產手段產業と消費手段產業とに於てさうである以上、私の結論がさけがたしとするのである。生產手段產業の資本構成の高級であることは、マルクスの再生產の數式に於て屢ゝ示されてゐるところであり、今日マルクス主義者の――ことに資本蓄積理論を取扱ふ人たちの――すべて承認するところである。さうである以上、生產手段の價格は大體に於て價値以上であり、消費資料のそれは大體に於て價値以下である。生產手段はすべて資本の中に入りこみ、消費資料は一部資本家によりて消費せられ殘のみが資本の中に入りこむ。此當然の結果として、社會の總資本に於て

も、その價格は價値より當然に大である。而して、この差異は資本の廻轉毎に益ゝ大とならざるを得ぬ。かくして、生産物の價値と價格とは各商品について離反するのみならず、總生産物についてもまた離反する。これが私のマルクスに加へたる批判である。櫛田氏は此論據に對して何等の抗言をも提出せられぬ。而してたゞ商品總體について見れば總價値は總價格に等しいと反覆せられてゐるだけである。それは批判ではない、それは說教である。

五、差額地代に關して

第三の論點について櫛田氏は私見を『價値法則と差額地代に關する批判は單に誤讀に立脚するものでないか』（八頁）と評してゐられる。誤讀は私の側にあらずしてむしろ櫛田氏の側にあることを次に論證しようと思ふ。此誤讀は一方に於て私見を誤讀せられたのであり、他方に於てマルクス地代理論を誤讀せられたのである。櫛田氏の主張はかうである。『教授の說によれば』マルクスはその差額地代論によりて『生産價格の總額は價値の總額に等しいと云ふ價値法則支配の根據をマルクス自ら破壞するものだと云ふ。』私見はかくの如くに解釋せられてゐる。

而してこれに對する批評を次の如くに述べられてゐる。『生産價格の總額＝價値總額と云ふことは、産業の特殊利潤が凡て平均利潤に參加することを前提とする。もし有利な生産條件に於ける生産者の特殊利潤が何等かの制限により平均利潤に轉化せられないならば、そこには超過利潤が成立する。差額地代はその一場合である。差額地代が剩餘價値の一部分たることは、一定條件の下に發生する工業の特殊利潤と異なるところがない。差額地代あるところにおいては、市場價値は生産價格總計より大であり、利潤總額＝剩餘價値の代りに平均利潤＋地代＝餘剩價値となる』（八頁）。

第一に櫛田氏は私見を理解せられてゐない。私は差額地代の存在は、利潤の總額をして餘剩價値の總額に等しからしめず、又市場價格の總額をして價値總額に等しからしめぬと述べてゐる。生産價格の總額が價値總額に等しからざるが故を以て、マルクスの差額地代理論を斥けようとするのではない。櫛田氏の私に對する論難は甚だしい見當違ひである。私は櫛田氏の果して私見を通讀せられたりやを疑はざるを得ぬ。

加之、櫛田氏の批評そのものの中には、マルクス地代理論の解釋上、理解し難きものがあると思ふ。生産價格の總額＝價値總額と云ふことは、産業の特殊利潤が凡て平均利潤に參加することを前提としてゐると云ふ、誠に然り。私とても、絕對地代

を除いて考ふる限り、生產價格の總額＝價値總額であることを否定せぬ。たゞ市場價格の總額が價値總額に等しからざること(利潤總額の價値總額に等しからざること)を問題とするのである。產業の特殊利潤がすべて平均利潤に參加すると云ふ前提が除かれ、有利なる生產條件に於ける生產者の特殊利潤が何等かの制限によりて平均利潤に轉化せられずと云ふことは、絕對地代を成立せしむるものではあらうが、差額地代を成立せしむるものではない。差額地代の成立の爲に何等のかゝる制限を必要とせざるはずである。否、差額地代は有利なる生產條件に於ける生產者の特殊利潤が平均利潤に轉化するところにこそ成立する。『相異つた諸價値が生產價格に均衡化して行く事なく、相異つた個別的の諸生產價格が一の一般的なる市場調節的な生產價格に均衡化して行くことがないとすれば、落流の使用に依つて、勞働生產力が增進せしめられると云ふ單にそれだけの事實は、落流を以て造られる諸商品に含まれるところの利潤部分を大ならしむることとなくして、たゞその價格を小ならしむるに過ぎぬであらう』(資本論第六篇第三十八章)。特殊利潤が平均利潤に轉化せられざることは櫛田氏の云はるる如く、差額地代を可能ならしむるのではなく、その正反對である。

櫛田氏は差額地代あるところには利潤總額＝剩餘價値の代りに、平均利潤＋地代＝餘剩價値と云はれる。けれどもマルクスの差額地代に關する見解は之を許すや如何。その數表を分析されるならば直に明白となるはずである。

土地種類	生產物 クオタア	生產物 志	資本前貸	平均利潤	利潤 クオタア	利潤 志	地代 クオタア	地代 志
A	1	60	50	10	1/6	10	0	0
B	2	120	50	10	1 1/6	70	1	60
C	3	180	50	10	2 1/6	130	2	120
D	4	240	50	10	3 1/6	190	3	180
合計	10	600	200	40		400	6	360

今、絕對地代を離れて考ふるに、此場合の平均利潤の總額は四〇であり、地代の總額は三六〇である。平均利潤と地代との總計は四〇〇である。然るに餘剩價値の總額は幾何なるか。それは勿論此表には示されてゐない。それは平均利潤を去ること、それほど遠くもないと思はれる。農業に於ける資本構成が如何に低値に置かれてあるにしても、例へば、餘剩價値の大さは平均利潤の四倍を越えずとする。此の如きはマルクスのあげたる數多の表から推して合理的なる假定である。さうして見たところで、餘剩價値の總額一六〇は四〇〇よりも遙に少い。平均利潤と地代との總計は餘剩價値に等しいと云ふこと、全くのそらご

とである。特に櫛田氏は差額地代あるところに於ては利潤總額＝剩餘價値の代りに平均利潤＋地代＝餘剩價値であると述べられてゐるが、前表の示す如く利潤總額四〇〇こそは正しく平均利潤と地代との和四〇〇に外ならぬではないか。前者と後者とは全く同一物であり、一方の方程式が成立する代りに他方の方程式が成立するのではない。ともに、400＝160. と云ふことを示してゐる。

櫛田氏の造詣を以てして、何故にかゝる意味不可解のことを述べられてゐるか。實際私の第三論點について述べられてゐることは、その所說、少くも私にとりて辻褄が合はぬ、數字の上で分析を加ふれば、全く譯の分らぬことである。かゝる結果に陷られたのは、差額地代と絶對地代とを全くとりちがへられてゐるからであらう。その差額地代と云ふ文字に絶對地代の文字を入れかふれば、理義極めて明白となる。けれどもさう見直せば私見に對する何の論駁ともならぬ。而してマルクス地代論の誤讀は之を私に責めらるゝよりも自ら責めらるべきである。

次に述べられてゐる文句もまた全く論證を缺く。「虛僞の社會的價値は餘剩價値に非ざる價値と云ふ意味では毫もなく、むしろ反對だ。餘剩價値の一部でありながら、それでないやうな外觀をもつところの社會的價値と云ふ意味だ。同種產業部門に於ける競爭は（一物一價の法則）價格を價値に一致せしめる。この場合、その生產條件を異にするに從つてそれぞれ異なつた特殊利潤が發生する。」「農業においては土地所有の存在によつて此部分は地主に歸する。」「地代として地主に歸する超過利潤は有利な生產條件に、從つてまた勞賃の利潤に對する比較的低下に關係なく、恰かも市場の競爭によりて產み出された價値其たる外觀を呈する。」（九、一〇頁）

これがマルクス價値論の支持の爲に要求せらるる差額地代論の解釋の仕方である。けれども、此見方に就いては既に十分なる論駁を加へてゐるのに櫛田氏は何等それに對する論據をもち出すことなく、私の論駁してゐるところをそのまゝ主張してゐられる。批判に非ずして說教であると云ふ所以である。而も、此救助の試みはやはりマルクスの差額地代論を見殺しにしてゐるに過ぎぬ。今の場合、價値と價格とが一致してゐる、有利なる條件に作ふ特殊利潤が差額地代となる、故に差額地代は餘剩價値の一部であると云ふのである。而も最も不利なる條件に於ける生產價格が市場調節價格であつて如何にして價値と價格とが一致するか。二者の一致はたゞ、市場調節價格が平均的なる生產價格（資本構成の差異から離れて云ふ）であるときにのみ可能であるはずである。從ひて此場合にありては、價値より適

に多くの價格がある。前例について云へば、價格は六〇〇、價値は二四〇である（前の場合にありては、資本構成の差異を考慮に入れたるが故に、餘剩價値を四〇以上のものと見た）。若し、差額地代にして櫛田氏の分析せられたるが如きものであるならば、結局差額地代と云ふものは社會全體を通じてないことになる。これ私がマルクスの差額地代論は差額地代のないことを論證すると云へる所以である。而して櫛田氏の所論もまた畢竟、差額地代抹殺論に外ならぬ。『マルクス價格理論を貫き通す限り、リカルド的差額地代はその存立をさへ否認しなければならぬ筈である。』『此困難は何れより生じたるか。それはマルクス價値論に存するところの平均原理である。リカルド的差額地代はたゞ限界原理によりてのみ説明せらるべきものである。然るにマルクスはあくまで、平均原理にたつ、これによりて地代は本來説明し得られざる性質のものである』（『マルクス價値論の價値論』の一節）。要するに此點に關する櫛田氏の批判も批判の形をなしてゐない、相手の論據の吟味を忘れたるものであるから。

序に、此點に關する他の救助の試みを吟味してみる。それは猪俣津南雄氏が中央公論二月號に於て述べられたるものである。これは、差額地代を以て價値なき價格ではない、その正體は、農業資本の低位構成のゆゑに、平均利潤の形成に際し、農業以外の（此場合、鑛業をはなれて述べる）産業の利潤として流れ出でたる部分の餘剩價値に外ならぬと見る。此見解は全然支持し得られざるのみならず、マルクス的でもない。氏の見解の如しとすれば、利潤率の平均化と云ふことが無意味にならざるを得まい。これマルクス的でないと云ふ所以である。それはともあれ、此見解の支持し得られざる第一の證據は次の點にある。農業資本の構成が低位であり、餘剩價値が大であるとしても、即ち利潤率が割合に大であるにしても、それからまづ、絶對地代から取去られねばならぬ。次に、平均利潤だけの利潤が拂はれねばならぬ。その殘餘が差額地代に等しいだけの餘剩價値であると云ふ論證はどこからも出て來ない。而して、その等しくあり得ぬと云ふことを論證するのは餘りに容易である。此問題としてゐる殘餘の餘剩價値、即ち農業部門について云へば利潤率平均の爲に流出する餘剩價値の大さは、餘剩價値率と、他の産業部門對農業間に於ける資本構成の差異によりて決定せられる。然るに差額地代の大さは土地の差等の大小により決定せられる。土地の差等極めて乏しくても、かの殘餘は極めて大でありうるし、逆の場合も亦可能である。唯此殘餘と差額地代とは本來等しくあり得ざるはずである。これだけを以てすでに、かの見解は支持しがたい。况やなほ次の事をも考へなけれ

ばならぬ。茲に問題としたる殘餘の餘剩價値は農業以外の產業部門に於ける利潤となり、從ひてその生產物の價格として實現せらるるものである。若しさうでないとしたならば、利潤率の平均化と云ふことの意味が全然失はれるはずである。然るに、差額地代が價値なき價格ではなく、それは其實、今問題としてゐる部分の餘剩價値に外ならずとすれば、それは農業生產物の價格の中にまた實現せられてゐることとなる。同一の餘剩價値部分が農業に於ても、又農業以外の部門に於ても、生產物價格の中に實現せられると云ふことは、勞働價値說の本質から見て、到底許され得ざるところの背理である。

六、複雜勞働の還元に關して

さて、私の內在的批判に對する櫛田氏の批判の吟味はこれを以て終る。第一第二の論點について、マルクスに關する理解不足を責めらるる部分は、すでに私のマルクス的見方として述べたるものに過ぎぬ。私がこれに批判を加へてゐるのに拘らず、與へられたる反批判は何等此論據を吟味することなく、マルクスの見解をくりかへし說かれたるのみ、批判に非ずして說敎なりとは此點を云ふのである。第三の論點については、マルクス差額地代論の誤讀の責は私に存せずして、櫛田氏にあると信ずる。此論點についても櫛田氏は一も私見に於ける論據の吟味に觸れられない、批判の體裁をなさずと云ふ所以である。私の勞働價値說批判の內在的部分、私の見る其主要部分は櫛田氏の權威を以てして、その一論點をも、いなその一節をも、一行をもやぶられてゐないと思ふ。而して、私の批判の目的から云へば、もはやこれだけで仕事は終るといつてもいゝ。けれども、櫛田氏の論駁の主力は超越的批判の部分に注がれてゐる。敎へられて答へざるは禮を缺く所以であらう。たゞ與へられたる紙數は殘すところいくらもない。茲にはまづ、その中の最も主要なる論點、複雜勞働の單純なる勞働への還元の問題のみを取扱ふ。殘りの問題については近き將來に於て其責を果さむことを期する。

勞働還元の問題に關する櫛田氏の所論は二段に分たれてゐる。(一)『敎授はマルクスの立言を以て獨斷であり單なる主張であると云ふが、その何れに獨斷あるか』(二八頁)。『獨斷するものはむしろ敎授ではないか。』(二)マルクスの勞働還元に關する主張の中には、價値論上の循環論が含まれてゐると云ふけれども、さやうのことはない。複雜勞働の生產物の價値に關するヒルファディングの所說の解釋は誤つてゐる。此二段のうち、私にとりては後の方が主要なる論點であるから、まづそれから片づける。

櫛田氏は此點に關する私の主張の理路を理解してゐられな

い。私の主張はかう云ふのである。ヒルファディングによりて勞働換算の尺度又は原理が說明せられてゐる。それによれば、『複雜勞働が單純勞働を含む程度が高ければ高いほど、複雜勞働は益々高度により高い價値を作り出す。何故ならば、實際上では數多の單純勞働が、同時に同一生產物の產出のために消費され、從つて、複雜勞働とは、眞實には倍加された單純勞働であるのだから。』『ある人が十個の蓄電池を有する。彼はそれを以て十個の相異なる機械を運轉してゐる。ところが新なる生產物を生產するために、彼はより大なる動力を發する一の他の機械が必要となつた。そこで彼は、この新機械を運動し得る一個の蓄電池に電流を送る爲に、今や十個の蓄電池を使用する。此場合、個々の蓄電池のもろもろの力は新なる蓄電池においては單一の力として現はれる。此單一の力は單純なる平均力の十倍を表はすものである』(塚本氏譯書第四九頁)。此見方を貫けば、複雜勞働の生產物の價値は複雜勞働の形成のための費用(それだけの單純勞働)に「獨自の價値形成力」を加へたるものである。私は此獨自の價値形成力を單純勞働の形成する價値だけのものと見る。さう見るのでなければ、換算の尺度は與へられぬこととなる。此「獨自の價値形成力」がそれ以上の x であるならば、やはり勞働換算の尺度は再びいづこにも求め得られなくなる。8も10+8もその未定である點に於て全く一である。而も、『複雜勞働は、社會的立場から見れば、從つて經濟的に考察すれば、單純勞働の倍加として現はれる。』『社會が高級勞働の生產物に對して支拂はなければならぬところのものは、單純勞働が直接社會によつて消費される場合に、それが作り出すであらうところの價値に對する等價物である』(同上、四八、四九頁)。此考方を貫ぬけばかの「獨自の價値形成力」は單純勞働だけのものたらざるを得ぬ。而してこのことは、餘剩價値の生產のための追加勞働が單純勞働を意味すると云ふ結論を伴ふのではない。

櫛田氏は此點について述べられてゐる。『熟練者の勞賃としての必要勞働時間がより高い勞賃として現はれるならば、その剩餘勞働時間もまたより高い剩餘價値として現はれざるを得ない。然るに教授は之を解して、』『複雜勞働の生產物の價値は「費用の價値」に「單純勞働の生產物の價値」を加へたものに過ぎない』と云ふ。それなら、熟練勞働者は、自分の勞賃を生產するに必要な勞働時間は複合勞働として機能し、剩餘勞働時間は單純勞働として機能すると云はねばならぬ。さやうの事のあり得ないのは明白である』(三〇頁)。併し私から見れば、此議論は何等の必然性なきものである。熟練者の勞賃としての必要勞働時間がより高い勞賃となりて現はれるならば、その剩餘勞働時間もまたより高い剩餘價値として現はれざるを得ない、と云ふことは、云はゞ「質的には毫も分つ所がない」のは、事實とし

てまた、マルクス理論の解釋として當然のことである。けれども、このことは所謂餘剩勞働時間の大さについては何事も述べない、云はゞ餘剩價値率については何事も述べない。而して此率の如何によりては、餘剩勞働時間も等しく複雜勞働として機能しながら、然も餘剩勞働の形成する價値が（時間に於てみじかくとも）單純勞働一般に於て形成せらるゝ餘剩價値と相等しきことも當然にあり得る。複雜勞働に於ける一時間の餘剩價値が單純勞働に於ける三時間の餘剩價値に等しくありうる事は百パアセントの確實さをもつ、これを否定するのが櫛田氏の論法である。私はこれを可能であると云ふのみではない。ヒルファデイングの註釋とても、さう見なければ、換算の尺度を與へたることにならず、從ひて循環論より免るゝこと能はずとするのである。固有の價値形成勞働として作用すると云ふことを、その大さが單純勞働だけのものであると云ふのが私の意見であるのに、櫛田氏はこれをその作用の仕方が單純勞働としてであると解する、そこに私見の理解がない。

マルクス勞働價値說が勞働の還元に關して循環論を免れ得ぬと云ふ主張に對する私の批評については、次の二點が指摘せられてゐる。私はマルクス勞働價値說にありて、交換比例は勞働數量の比率によりて定まり、勞働數量の比率は交換比例において定まる、これは循環論であると云ふ。

「ＡＢの交換比例は體化せられてゐる勞働ａｂのそれぞれの數量によりて定まる。この數量は何によりて知らるゝか、ＡＢの交換比例によりて。これでは總てが一の循環において動いてゐる。交換比例（從ひて價格もさうである筈であるが）は勞働の比率によりて定まる。勞働量の比率は交換比例において定まる。之だけの理論の形式に於てならば、勞働量と云ふのに何をおきかへても矛盾なく主張し得らるゝであらう」

此點に就て櫛田氏は「價値が交換比例において現はれると云ふことを交換比例によりて定まると解するは亂暴ではないか」と責められる。けれども、交換比例によりて定まるとは、どこにもいつてゐない。交換比例において定まると云ふは、交換比例が認識根據を與ふる意味である。其故にこそ、この數量は何によりて知らるゝかと述べてゐる。然るに、此「おいて定まる」と云ふ文字を勝手に「よりて定まる」と書きかへてそれは亂暴ではないかと云はれる。けれども、さう無斷に書換ることが、私には却つて亂暴に見える。しかし之は小さな事柄である。

櫛田氏は私が勞働の還元の問題に關して勞働價値說が循環論に陷ると云へるを否定せむが爲に、「マルクスは商品の價値はそれの生產に社會的に必要な勞働で定まると云つてゐるが、商品の交換價値又は價格が常に價値の指數だとは何處にも云つてゐない。むしろ反對だ」と云はれる（二九頁）。然れども第一、價格

又は交換比例によりて價値の割合が示され得ずとするならば、複雜なる勞働の還元の割合はどこにも之を求め得べき手がかりがなくなる。如何にして換算せらるるかについては何事も云はれ得ない。而して、所謂價値表示に從ひて價格の決定せらる、とき、そこに還元が行はれたとも云はれ得ない。何となれば、此價格は何等換算の割合を示しうるものとして取扱はれ得ないからである。第二、私といへども、價値と價格の離反を知らぬ事はない、利潤率の平均は生産價格を價値から離れさせる、現實の價格は生産價格から離れる、價値なき商品が成立して價格をもつに至る。然れども問題を單純にする爲には、「交換價値を論ずる際之を(價格を)價値の指數として取扱」はざるを得ないのである、此單純化を行はざれば、價格決定の根本的機構を見るを得ぬ。櫛田氏は現に、價格を價値の指數と見得ずと云ひながら、「交換價値を論ずる際、之を價値の指數として取扱つたのは單に問題を單純化する爲に外ならぬ」と云ふ。私もまた同樣なる單純化の平面に於て問題を取扱ふ、勞働還元の問題は此平面の上に於て、マルクスに於ても取扱はれてゐるからである。此平面に於ては當然に、價格は價値の指數として見られねばならぬ。價格を決定するものが價値の比例であるならば、前者を後者の指數と見ることに、何の背理あるか。

七、價値賦與に關して

第一段の批判にうつる。私が勞働の還元を以て單に主張せられてゐるに過ぎず、還元が行はれてゐることについて何の論證も與へられてゐないと云へるに對し、櫛田氏は私こそ獨斷するものであると云はれる。その根據は、價値表示又は價値賦與の過程が勞働還元を意味すると云ふにある。複雜勞働の生産物も單純勞働のそれも「既に交換に先立つて同じく金若干と云ふ價格をもち、從つて同じ單位に還元せられる」(二七頁)。「複雜勞働の生産物としての商品と單純勞働の生産物としての商品との直接交換において、一方が他方でその價値表示をすることが還元の可能性を示すものであり、現實にそれが交換せらるれば、それで還元せられ、その交換比率は双方の側に於ける競爭によつて定まる。」(二八頁)。「交換の割合を決定するものが單純なる勞働である事は、既に貨幣を價値尺度とすることによつて明かであり、そこでは特殊な使用價値は既に捨象せられる」(二七頁)「多種多樣を極むる諸商品の價値は、到る所において一樣に貨幣で、即ち一定量の金または銀で表現される。たゞこのことだけで、すでにこれらの價値によつて表示されてゐる種々なる勞働の種類は、種々なる割合において、一個同一なる種類の普通の勞働の、金又は銀を生産する勞働の、一定量に還元される」かう云ふ見方をおしつめると、複雜勞働の生産物の價値が貨幣量で金何圓として表現されることが、一方に於て使用價値の捨象

を意味すると共に、他方、その生産のための勞働を企の生産のための單純勞働の一定量に還元してゐる。價値賦與の過程がすでに、異れる商品の同一單位に、人間勞働一般に還元せられてゐることを示す。しかし果してさうであるか。

寶石の價格十圓に定まることは、寶石製作の複雜勞働を單純勞働に還元することだと云ふのは、勞働價値說を根據としてのみ云ひ得ることである。價値の大さが勞働の大さによりて定まると云ふことが前提をせられなければ、さう云ひ得るわけがない。然るに、勞働價値說は此還元の如何にして行はるるかを前提として成立する、此前提とする還元は當然、勞働價値說を前提とせざる還元でなければならぬ、さうでない以上、循環論以外の何ものでもない。此當然の理路を櫛田氏は理解せられぬと思ふ。それ故に、櫛田氏の主張はあくまで論證ではなく一の說教に終つてゐる、而して自ら循環論たることを意識せずして循環論をくりかへさるゝに過ぎぬ。

手近なる例について見る。此寶石十圓と正札をつけると云ふ價値表示はすでに、一定の割合に於ける勞働還元の要求であり、十圓に賣れると還元の割合が定まると云ふ。けれどもそれは、價値の大さは勞働の大さであると云ふことが豫定せられてこそ、云へることである。價値の大さが勞働の大さであることはまづ論證せられねばならぬ。此論證に於て、異質の勞働には如何なる共通の尺度ありやと考へねばならぬ。その場合、一商品の價値を他の商品の價値の尺度として、後者を前者の幾倍と見る、例へば寶石を十圓である、と云ふのは、それ自體ですでに勞働の還元をやつてゐると見らるゝわけはない。勞働の還元をやつてゐると見られるのは、價値の大さが勞働の大さによりて定まる、と云ふことを前提とするからである。然るに今、こゝでは此前提が證明せらるべき問題である。要するに、價値賦與、價値表示を中心とする櫛田氏の說明はたゞ循環理論のくりかへしとより見ることが出來ぬ。マルクスの主張（勞働還元に關する）の何れに獨斷あるか、「獨斷するものはむしろ教授ではないか」と責められるけれども、循環論を循環論と云ふことが何故に獨斷であるであらうか。所謂價値表示の過程をかゝる過程そのものとして見れば、たゞ交換比例の要求に外ならぬ。これを使用價値に關する要求と見るべきであると信ずる。よし一歩をゆづりて、使用價値の捨象がすでに、行はれてゐるものとしても、これを勞働の量化がそこに行はれてゐると見るべき、何の根據もない。使用價値を離れ、從つて勞働の有用性を捨象したのにしたところで、なほそこに勞働の異質性がのこる。單純と複雜、熟練と不熟練）はその一である。而して、苛重と安易、巧と拙など。なほその外にも、有用性から切りはなされたる方面の異質性が殘る。これらの關係、又はそれぞれの重要さを如何に見るか

と云ふことから離れて、たゞ單純複雜の性質のみを見るにしても、次の如く考へ得る。複雜勞働の生產物に單純勞働の生產物の幾倍かの價値を賦與するにしても、それは、それぞれの勞働の性質に一定の重要さを認め、此重要さに應じて所謂價値賦與を行ふと解しうる。此際それを共通の單位に還元したのではない、それぞれの質差を究局まで認めてゆく。かく考へ來れば、使用價値の捨象が直に複雜勞働の還元を意味し、交換比例が勞働數量によりて定まる、と考ふべき必然性は、いづこにも認め得られぬはずである。

重ねて私の云はむとするところを述べる。使用價値の捨象は勞働の有用性を捨象すれども、勞働のその他の質を捨象し得ぬ。從ひて、價値が體化したる勞働であるにしても、價値の大さが勞働の大さであると云ふ論結は必然的に生じ得ない。同種の勞働については、價値の大さが勞働の數量に從つて定まると云ふことは必然的である。けれども、異種の勞働の關係に就ては、それぞれが價値の大さを決定しそれに參與する程度がある事情によりて定まり得る、例へば各種の勞働者の勢力と云ふが如き。マルクスも之を認めてゐる。此場合か〻る程度に應じて決定せらる〻價値の大さは、之を勞働の數量によりて決定せられたるものとは云ひ得ざるはずである。使用價値の捨象から必然に、勞働の還元を認めようとする見解には、一の論理の飛躍がある。

櫛田氏はなほ、所謂天賦の才能の問題に論及し、これに比較的多くの紙數を費してゐられる。けれども、私はこれに深く立入らうとは思はぬ。何となれば、それは私見を全然理解せられてゐないから。私見を引用してのちに曰く『これはヒルフアデイングが天賦の才能を評價してゐないと云ふ事に對する非難である』と(三一頁)。私は何もか〻る非難をしてゐるのではない。又天賦の才能と云ふ文字は天才とときかへられてゐる。而して、醫師、學者、文士などを問題とするものとなし、而してこれらが富の生產者であると主張するものとせられてゐる。全然私見と云ふものを想像の上でこねあげて、自ら作れる案山子に向つて論駁の彈丸を送つてゐられる。私は今天才を問題とするに非ず、產業外の活動に從事するものを論ずるのではない。心を落ちつけて私見を再讀せられたいと云ふ外はない。

私は今、私の取扱はむと企てたる問題のほゞすべてを取扱つた。取扱つた問題のすべてに亙つて、櫛田氏は私見の論據そのものに論難を加ふることを怠つてゐられる。而して自ら勞働價値說そのものを既定の眞理となし、その立場から所信をくりかへし述べらる〻に過ぎぬ。全體が批判と云はれるけれども批判ではない、說教である。そこには論理が失はれてゐる。從つて私見のすべては依然として殘る。(一九三〇・一〇・二八、朝五時半)

勞農黨は何處へ往く？

反動的固定化の一路を急ぐ勞農黨

河上肇

勞農黨本部が去る八月末に立てた勞農黨の發展的解消といふ方針は、これを如何に具體的に實現化すべきかの討論の過程において、勞農黨の戰鬪的解體を主張する一派と勞農黨第一主義を固執する一派との分裂を生むに至つた。かくて二ケ月前の本誌に『勞農黨の發展的解消』と題する一文を載せた私は、今では勞農黨の解體を主張する除名組の一人となつてゐる。しかる限りにおいて、吾々は二ケ月前における大阪の諸君および細迫氏等と同じ見地に到達したのであるが、なぜ今になつて、やつとそのやうな結論に到達したかについては、各地の同志および友人から說明を求められてゐる。私は今それについて委しいことを述べる餘暇と興味とをもたないが、しかし先づその大筋だけを記錄しておくことは、私の義務でもあらう。

吾々は何故、大阪で勞農黨の即時解消論が起つたとき、直ちに之に贊成しなかつたか？

當時吾々は次の如く考へたのであつた。——吾々も勞農黨はいづれ何とかせねばならぬと考へてゐるのだが、しかしこの問題については、今日まで黨內において何等具體的な意見を提出したものもなく、一回の討論ずらまだ行はれてゐず、大阪側の即時解消論は實際のところ足許から鳥の立つやうに起つたのであるから、吾々としては、果してそれより外に行き道はないものであるか否かについて、まだ充分の檢討を經てゐない。吾々は、今日まで勞農黨を維持して來たものとして、その責任上もつと考へて見ねばならぬ色々の問題をもつてゐる。吾々はかく考へたがために、——すでに確乎たる結論に到達してゐた諸君からは、如何にはがゆく思へたにしろ——大阪の即時解消論に對しては、當時直ちに贊同し兼ねたのである。

殊に私は、一旦迷ひ込んだ道へは徹底的に行き詰まるまで進んで見ないと、確信をもつて後へ引き戻ることのできない性質の人間である。その代り、この道はどこへどう進んだところで邪路に陷るの外はないと云ふことが、殘る隈なく檢討された曉には、私はその瞬間に百パアセントの確信をもつて後へ引き返すことを主張しうるやうになる。今度

の問題についても丁度さうなのだ。大阪の諸君および細迫氏が即時解體論の皮切りをされた刹那には、私は百パアセントの確信をもつて直ちにそれに贊同するだけの理論的用意をしてゐなかつた。だから私は即時これらの諸君に追隨することが出來ず、『にはかに贊成しかねる』といふ態度を取るの外なかつたのであり、外見的には、しばらくこれらの諸君と反對の方向に進むかに見えてゐたのである。

大阪の諸君および細迫氏に比すれば、吾々は最後の方向を決定するために約五十日後れたのだが、吾々としてはこの五十日の間に、ありとあらゆる駄目を押したつもりであり、勞農黨を死守せんとする人々の最後の正體を一パアセントの疑問をも殘しえざる程度にまで見屆けたつもりであるから、今こそ吾々は斷乎たる決意をもつて勞農黨の解體——乃至粉碎——を主張しうるのだし、主張せねばならぬと覺悟してゐるのだ。——この五十日の間、吾々は如何なる道を如何やうに經過したか？

◇

八月三十一日の勞農黨常任中央執行委員會は、解消問題に關する本部の聲明書を議定することになつてゐた。ところが、この聲明書については、たゞ勞農黨の擴大强化の必要を高調しようとする說と、少くとも黨自身がその解消を意識してゐると云ふだけのことはこの際是非とも聲明書の中に示しておかねばならぬと主張する說と、この二つの說が對立したのだが、ともかく『發展的解消』といふ言葉で、一應双方のものが一つに纏められたのだ。今から考へると、これは一時の彌縫にすぎなかつた。何故なら、勞農黨それ自身は決して發展的に解消されうるものではなかつたのだから。そこで實際のところは、一應一つに纏められたらしく見えた此の『發展的解消』の中には、全く調和すべからざる二つのものが——すなはちその一は勞農黨の擴大强化論となり、今一つはその解體論となるべき、二つの對立物が——內包されてゐたのである。簡單にいへば、『發展的解消』のうち『發展』のみを眼中においたものと、『解消』こそ固執されねばならぬ主眼點だと考へてゐたものと、この二つのものが暫く『發展的解消』なる言葉によつて纏められたのである。その限りでは、勞農黨第一主義者を吾々が引きずつたとも云へるし、吾々が彼等に引きづられたとも云へる。

すでに『黨の意思』をその發展的解消にあると決定した吾々は、これを如何に具體的に實現化すべきかの問題を議事日程に上ぼさざるをえなかつた。かくて吾々は、勞農黨の組織の根本的改造を本部にせまつた。何故なら、元來、黨の意思なるものは、黨の組織を離れては實現されえないものであるから。

勞農黨の組織改造については、書記局案と河上案との二つが出來た。書記局案のことはしばらくおく。河上案は、勞働農民新聞第百二十號(十月一日發行)に掲載した通りのものであり、それは『極めて不徹底である(これは昨年結黨大會に提出された本部案中の一句だ)と自ら認識してゐる現在の勞農黨の組織を改造して、現實の具體的諸事情が許すかぎり、これを勞働者農民の同盟としての最も完成されたる形に近づかしめること』を目標としたものであつた。序に言つておくが、勞農黨は結黨大會以來最近に至るまで、我黨は勞働者農民の戰鬪的同盟である

と云ふことを標榜し、それをもつて自らを他黨と區別し來つたのである。

吾々の試案を公けにすると、間もなくそれに對して有力なる二三の批判が出た。その結果吾々は、改めて勞農同盟の本質を徹底的に究明して見る必要に迫まられた。かくて私は、勞働農民新聞第百二十一號（十月十一日發行）に『勞農同盟の××的本質』と題する一文を發表するに至つた。この論文において、私は問題を次の如く提起した。『今の吾々にとつての問題は、現在の勞農黨は果して本來の意味における勞働者農民の××的同盟となつてゐるか否かと云ふこと、また、もしさうでないとするなら、現在の勞農黨は果して斯かるものに轉化しうる見込があるか否かと云ふこと、これである。』

私の右の論文は、新聞紙面の約七段を費したのであるが、私は先づ勞農同盟の××的本質を明かにした後、その結論において、前に提起した二つの問題に對して、次の如く答へた。

『第一問に對しては、何人も否と答へざるをえない。そしてこの際吾々の強く反省せねばならぬことは、勞農黨の實體が未だ勞働者農民の同盟となつてゐないにも拘らず、既にかゝるものとなつてゐるかの如く主張することは、勞働者農民の××的同盟の本來の意義を沒却することであり、それは結局において一の欺瞞となると云ふことである。吾々は……かゝる同盟の本來の意義を沒却して之を日常闘爭に關する小ブルジヨア的共同闘爭の意味にまで卑俗化せしめてはならぬ。

『第二問に對しては、問題が殘る。たゞ私は勞農黨の一黨員であるがゆゑに、その資格においては先づこれに向つて肯定的解答を與へうるための考案を練らねばならぬ。前號の本紙に載せて貰つた勞農黨組織改造の一試案は、すなはち斯かる見地と限界とのもとに考案された一つの過渡的組織案である。それは既に一つの過渡的組織案であるがゆゑに、そこには尙ほ少からざる政黨的組織の殘滓が殘されてをり、決して滿足なる組織形態を取つたものと云ふことはできぬ。また勞働者農民の同盟は、現在勞農黨を支持してゐる勞働組合及び農民組合によつてのみ形成されうるものでもない。……更にまた、勞働者農民の××的同盟は、この同盟内における勞働者階級のヘゲモニーの確立なくして存立しうるものでないにも拘はらず、私の試案にはそれらのことも看過されてゐる、等々。要するにみづから意識してゐる欠點は多々ある。問題はたゞかゝる缺點あるにも拘らず、それは滿足なる組織形態への過渡的形態たりうるか否かにある。もしそれが——幾分の修正を加ふるとも——根本的には到底勞働者農民の××的同盟への發展の一段階たりえずとするならば、私の試案は結局において一の欺瞞となるの外なからう。そのことは私の最も恐れるところである。』

吾々の最も恐れたところは欺瞞である。勞農黨の本質ならびに組織改造が吾々の問題となつてゐる際、吾々の最も警戒せねばならぬものは、過去における誤謬の合理化である。吾々は斯かる傾向の如何なる現はれをも徹底的に克服して、たとひそこから如何なる結論が生じようとも、何等恐るゝところなく、最後まで批判的見地を確守しなければならぬ。かくの如きが吾々の立場であつた。そして吾々は、その立場から、改めて露骨に言ひ現せば、實際には、すでに次の如き二個の結論に到達したのであつた。

一、現在の勞農黨は勞働者農民の同盟と言ひうるが如きものでは斷

じてない。

二、現在の勞農黨は、その組織を如何に改造して見たところで、××主義者の見地から必要とされてゐる勞働者農民の同盟に轉化しうるが如きものではありえない。

私の『勞農同盟の××的本質』と題する論文は、勞農黨本部の忌諱に觸れることを辛うじて免れうる限度において、以上の二つの結論を打出したものであつたのだ。

大山郁夫氏は右の論文を見て、もはや河上とは一緒にやつて行けないと云ふことを、直ちに感づかれた由であるが、私もまた右の論文を載せた勞働農民新聞が發行された當日の常任委員會に、吾々はもはや勞農黨解體の一路に向ふ外はないと云ふ結論に到達した旨を正式に屆出た。常時私はまだ同志としての態度を棄てずにゐたのだ。

吾々が勞農黨の『發展的解消』から出發して遂にその『戰鬪的解體』に到達するに至つた理論的過程は、ほゞ以上の如くである。もし吾々が勞農黨の本部内において充分なる討論の相手と機會とをもちえたならば、この五六十日間における吾々の理論的推移は一々外部に發表されることなく、たゞその結論のみが大衆の前に持ち出されるに止まつたであらうが、如何せん委員長を始めとして多くの人々は謂はゆる遊說に忙殺されてをり、重要問題は擧げて書記局のなすがまゝに一任されてあると云ふ狀態のもとでは、問題を最初から大衆討議に移すの外なかつたのであり、そのために無用なる種々の混亂を生じたことは、吾々の深く遺憾とするところである。

後に說明する如く、その後間もなく、十月十五日および十七日の常任委員會を經て、勞農黨本部は確實に反動化への第一步を踏み出した。かくて吾々は（上村、神道、河上の連署をもつて）、もちろん本部の意思を無視しつゝ、『勞農黨の戰鬪的解體』を主張する一文を、十月二十一日發行の勞働農民新聞第百二十二號に發表した。それは新聞紙面の約十段を費したものであるが、吾々は吾々自身の提案を述べる前に、次の如く斷り書きすることを忘れはしなかつたのだ。『吾々は既に（勞農黨の結成において）重大なる誤謬を――從つてまた重大なる階級的犯罪を――犯して來たものであることを十分に自覺してゐる。かゝる吾々の、理論的にまた實踐的にその誤謬を完全に淸算しおへた後でなければ、おそらく政治問題について發言權を有しえないであらう。たゞ今日まで勞農黨を維持して來たものとして、その後始末を果す責任內の發言を許されるものとすれば、吾々は勞農黨の戰鬪的解體を大衆的に討議に上すための一材料として、次の如き提案をなすであらう。』

大山郁夫氏の言ふところによれば、かくの如きは『自分免許的に、前衞中の前衞、指導者中の指導者の如き氣取方をして、盛んに革命的言辭を弄し、もつて己れ自らを高しとしてゐる』ものであり、『現實の日常鬪爭の場面からかけ離れた書齋の中から全無產階級に向つて號令しようとする』ものであるさうだが、幸に同氏が今少し落ちついて吾々の書いた文字を見られる日が來るならば、吾々の態度が如何なるものであつたかが、終始問題なしに氏の眼に映じるやうになるであらう。

◇

吾々が勞農黨の戰鬪的解體論を持ち出すと同時に、他方では、勞農黨第一主義者は、勇敢にも勞農黨の反動的固定化への第一歩を踏み出した。吾々は次にそのことを見よう。

既に述べたやうに、勞農黨の組織を改造して、それを勞農鬪爭同盟への過渡的形態たらしめるための考案が、問題とされてゐる頃までは、勞農黨第一主義者もいや／＼ながら吾々と歩調を合せて來た。何故なれば、それはともかく勞農黨を何等かの形において生き殘さうとする努力の範圍を出でなかつたから。ところが不幸なことには――勞農黨第一主義者にとつて不幸なことには――勞農黨の勞農鬪爭同盟への轉化は全く絕望的だといふことが、爭ふの餘地なきほど明白になつた。最後の手段として試みられたカンフル等々の注射は、いづれも遂に無效に終つたのだ。勞農黨が理論的に死の宣告をされねばならぬ瞬間がせまつた。吾々と一緖に進んで來た勞農黨第一主義者は、氣の毒にも、こゝまで來て不意打を喰つたかの如く感じた。その瞬間に、彼等はいよ／＼一切の理論的討論を打ち切らうと決意した。かくて十月十五日の常任委員會は、電光石火的に『勞農黨の本質の究明云々』と題する本部案の前半を決定し、更に十月十七日の常任委員會は、委員長の外にはたゞ一人の常任が出席しただけの席上で、擴大中央委員會に提案さるべき十餘件の重要議案を一瀉千里に可決した。それと同時に、右の出來事を承知した吾々は、彼等に對し、もはや反動的に固定して動かざるものとの最後の認定を下し、直ちに之を敵として戰ふの決意をなした。彼等が吾々をもつて裏切者といふに至つたのは、それからのことである。(因にいふ『勞農黨の本質の究明云々』の議案の前半が勞働農民新聞第百二十二號に發表された際には、常任中央執行委員會の名において、一つの前書が附せられてゐたが、それにはこの議案をもつて『再三審議の結果決定した』ものだとか、『この議案は書記局の草案に基いたものであるが、その誤謬を徹底的に修正し、その不足を充分に補つたものである』とか言つてある。しかしこれは全くのウソだ。議案の第一項『勞農黨の性質云々』および第二項『勞農黨に對する反對論云々』に相當する部分については、これを可決し去つた委員會の當日まで、如何なる種類の草案も、草案の下書きすらも一度だつて委員會に示されたことはなかつたのだ。

さて斯樣にして決定された本部案が勞農黨の本質について何を言つてゐるかを見よう。

『勞農黨は、獨自の指導部を有する一の勞農政黨である。少くとも現在の勞農黨は、純然たる一の勞農政黨である。この黨は全く疑ひの餘地のない事實である』

『もともと勞農政黨と勞農政治鬪爭同盟とは、全くその組織原則を異にするところの二つの異つた組織であるから、勞農政黨の組織に勞農鬪爭同盟の組織方針を加味することによつて、勞農鬪爭同盟が直に(?)出來上るかの如く考へることは、全く子供じみた自己滿足である。我々も、ついさき頃まではそれを眞面目に考へてゐたが、最近、勞農鬪爭同盟の性質ならびにその組織原則を徹底的に究明するに及んで、漸くその點を明かにしえた。』

一部の人々は吾々の解消論が突如として起つたと云つてゐるが、本部

案もまた實に突如として勞農黨を勞農鬪爭同盟から切り離し、勞農黨をもつて純然たる勞農政黨にすぎずとなすに至つたのだ。

既に前にも一言したことだが、昨年の結黨大會の際に採用された宣言のうちには、『わが陣營の實體は、勞働者農民の强固なる戰鬪的同盟である』とか、『わが黨の綱領および關係文書を見るとき、わが黨が如何に旣勞働農民黨時代以來一貫して變らざる勞働者農民の同盟として立つ者で……あるかを、人は容易に看取しうるであらう』とか言つてある。

また本年四月に開かれた擴大中央執行委員會の決議も、『現在わが國には幾多の勞農政黨が存在してゐるが、その中で眞に勞働者農民の戰鬪的同盟として結成されたものは、たゞ我黨のみである』と言つてゐる。

なほ大阪に解消論が起つてから後の九月十一日の勞働農民新聞には、大山郁夫氏の論文が載つてゐるが、それにはまだ『結黨大會の宣言が、勞働者農民の戰鬪的同盟としての勞農黨は、脈々として窮まりなき發展を遂げやうとしてゐるものである、ことを云つてゐるのは、云々』といふ言葉が見出される。

更に十月十九日（すなはち前記の本部案が決定されてから數日後のこと）には、勞農黨大阪府支部聯合會が大山委員長等を迎へて、勞農黨再建の演說會を開いたが、その折の聲明書は、依然として『わが黨が眞に勞働者農民の强固なる同盟として無產階級解放の光輝ある鬪爭に上ることを聲明する』と結んでゐる。

そしてその翌々日には、吾々の戰鬪的解體論を載せた勞働農民新聞が發行されたのだが、それには同時に、勞農黨を一の純然たる勞農政黨となせる本部案も載つてゐたのだ。だから、一方には吾々の戰鬪的解體論が見て驚いた人もあらうが、また他方では、本部が勇敢にも勞農鬪爭同盟をかなぐり棄ててゐるのを見て驚いた人もあるだらう。――要するに吾々は、勞農黨第一主義者も然らざる者も、共に理論上或る決定的な點に到達した時、その瞬間に、右と左とに分れたのである。そして本部案は、勞農黨を『一の純然たる勞農政黨』として擴大强化することに、その方針を一變したのであつた。

◇

勞農黨第一主義者は、吾々を黨規紊亂の名において片端から除名した。最近に開かれた勞農黨擴大中央執行委員會は、本部の思ふがまゝの資格審査によつて解消論者を排除しつゝ、また會場の入口まで來て警察署に檢束されて行つた吾々をインテリの卑怯者かと嘲りつゝ、筋書通りに議事を進行せしめた後一の聲明書を發して次の如く言つた。

『最近我が黨内の一部のインテリ諸君は突如我黨の解消を叫び黨規をじうりんして我黨の光輝ある戰鬪的傳統に一汚點を印した。我が擴大中央執行委員會はそれらの裏切的敗北主義者を潔く一蹴して、こゝに我黨のいよ〳〵强固なる基礎を確立し戰鬪的發展方向を決定した、云々。』

吾々の見るところによれば、結黨後一ヶ年を經ずして黨の解消を唱ふる者が出た點にこそ、今日までの勞農黨の構成員の中には社會民主主義に凝結することを肯んぜざる人々がゐたと云ふことの證據として、せめてもの誇りとすべきものがあるのだが、勞農黨第一主義者の眼には、それが我黨の光輝ある戰鬪的傳統（？）に一汚點を印した」ものとして映じてゐるのだ。かくて彼等に、勞農黨の存在意義に疑念をはさむ人々を

『嘉く一蹴して』、勞農黨の『いよ〳〵强固なる基礎を確立し戰鬪的發展方向を決定した』と稱してゐるのだ。

ところで、その確立したと稱する『いよ〳〵强固なる基礎』とは、果して如何なる基礎であるか？　その『戰鬪的發展方向』とは、果して如何なる方向を指せるものであるか？――簡單にいへば、今後の勞農黨はどこへ行かうとしてゐるのか？

大山郁夫氏は言ふ、――『河上氏等の戰鬪的解體論も、黨本部の發展的解消論（？）も、共に我々が從來些か（「些か」ではない、「甚だ」だ――河上）漠然と勞働者農民の戰鬪的同盟と言ひ慣らはして來たそれよりも、更に明確に規定されたる勞農政治鬪爭同盟を結成することの絕對的に必要であることを主張し、更に現在の勞農黨がそのまゝでは（否、勞農黨が政黨として將來如何なる變化をなさうとも――河上補）その勞農政治鬪爭同盟に轉化し得ないものであることを說いてゐる點において、全く軌を一にしてゐるのだ。それ故に問題の核心はそこにあるのではない。……問題の核心は、結局それに行き着くまでの手段の上にあるのだ。それに對して、河上氏等の戰鬪的解體論は、單に「勞農黨を卽時解體せよ」とだけ答へてゐるに反し、黨本部の發展的解消論は、「組合の擴大强化および大衆の生活と自由とのための有らゆる現實鬪爭の一層果敢なる遂行を通じて將來における勞農政治鬪爭同盟の結成のための主體的條件および客觀的狀勢の成熟の促進に向つて全力的に貢献し、かくて究極においてその結成の實現の曉には決然その中に解放して行くべきだ」と答へてゐる。そして河上氏等のいふ通りに、道はそこで岐れる。』

吾々は今かゝる空疎なる發展的解消論（？）を眞面目になつて分析する氣にはなれぬが、序だからそれについて一言を費しておくならば、讀者の見られる通り、そこには勞農黨の當面の方針としては、『組合の擴大强化および大衆の生活と自由とのための有らゆる現實鬪爭の層一層果敢なる遂行』といふことがあるばかりだ。

そこで不可避的に次の質問が提起される。――それなら、勞農黨と他の勞農政黨（社會黨、大衆黨）との本質的差異はどこにあるのだ？　組合の擴大强化だとか、大衆の生活と自由とのため現實鬪爭の果敢なる遂行だとか云ふ類のことは、社民黨でも大衆黨でも否定しはしないであらう。それのみでなく、大山氏等が考へてゐるやうな種類の『組合』の擴大强化や、『現實鬪爭』の果敢なる遂行やのためには、社民黨や大衆黨や勞農黨やが互に對立してゐるよりも、むしろ全合同に進んだ方が、遙に有利であるだらう。

大山氏等は何をもつて、勞農黨を社民黨や大衆黨と區別しようとするのであるか？　『究極においてその（勞農鬪爭同盟）結成の實現の曉には決然その中に解散して行く』といふ意圖をもつてゐるといふ點が、勞農黨を他黨と本質的に區別する點だと云ふのであらうか？　それなら、大山氏自身の言葉を借用して更に質問するが、それは『社民黨ですらが平氣で綱領の上に揭げてゐる無產階級の解放といふが如き一般的抽象的表現』と、どれほどの相違があるのだ？

黨の意圖はその組織と離れて現實化されうるものではない。社民黨や大衆黨と原則的には全く同一の組織を有する勞農黨が、たとひ如何なる意圖を黨の機關によつて決議しようとも、それは社民黨と本質的に違

つたものには、どうしたつてなりえないのだ。

吾々は重ねて質問する。すでに自身を『純然たる勞農政黨』にすぎずとなせる勞農黨は、今後何をもつて自身を他黨と分たんとするのであるか勞農黨本部案は『勞農黨の社會民主主義政黨への固定化は、左の諸原因によつて斷じて不可能である』として、『一、大衆の左翼化、二、將來確立されるであらうところのプロレタリアート黨の影響、三、指導者の意識的努力』の三つを掲げてゐるが、そんなことが言へるなら、大衆黨だつて社民黨だつて社會民主主義政黨へ固定化することは『斷じて不可能』であらう。大衆の左翼化にプロレタリアート黨の影響、そんなことは勞農黨の獨占物とはなりえない。たゞ『指導者の意識的努力』こそは我が勞農黨の獨占物だとうぬぼれてゐる人が、或ひは一人や二人あるかも知れないが、その一人二人を除いたら、誰もがそんなバカなことを本氣で信じるものはあるまい。

新聞紙の傳ふるところによれば、勞農黨擴大中央執行委員會の第二日には、新潟の稻村隆一氏から『勞農黨と他の無産黨との本質的差異如何、またその差異があつても合同は可能と思ふが如何』との質問があり、これに對して田部井書記長代理は『他の無産黨との相違は結局は指導精神の相違に外ならない、他黨はこれを社會民主主義の指導下におかんとしてゐるので、我々においてこれを左翼に指導し大衆を左翼化する確信があれば合同すべし』と答へたよし。(東京朝日、十一月三日)――見よ、今や勞農黨は自らを他黨と區別するために、自分はより左翼的であるといふより外に道はなくなつてゐる。しかしヨリ左翼的だといふことは、さう言つてゐる社會民主主義者を、ヨリ左翼的な社會民主主義者から、本質的に區別するものとはなりえない。それのみではなく、左翼社會民主主義者、それこそは勞働者階級にとつての最惡の敵であり、ブルヂョアジーの最も必要とする代理人である。大山郁夫氏は今確信をもつて、吾々を『裏切的敗北主義者』として『一蹴』しつゝ、かゝる道に向つて『果敢なる鬪爭』を進めようとしてゐる。『純眞』な人としての信望があればあるほど、大山氏は今ブルヂョアジーにとつて誂向きのものとなつて來た。たゞブルヂョアジーにとつて殘念なことは、勞農黨の擴大强化が今や全く望みなきものとなつてゐることである。勞農黨の上部機關は今日完全に勞農黨第一主義者によつて占領されたが、(機關を構成してゐる社會民主主義者の幹部たちを、理論によつて說得しようとすることは、望みなきことであり馬鹿げたことである)、各地の大衆は、善き幹部のゐる所では幹部もろともに、惡しき幹部のゐる所では幹部だけを置き去りにしつゝ、來るべき大會をも待たずして、すでに次ぎ〳〵に解體を實行しようとしてゐる。あしたに一城を失ひ、ゆふべに一城を失ふの外なき狀態におかれてゐる勞農黨は、急いで他黨との合同を斷行せざるかぎり、見るうちに萎び果てゝ、たゞ若干の社會民主主義者のみが、口先では社會民主義者を罵りつゝ(それは畢竟自分自身を罵るに等しいから、追々それもやめるに至るか知れないが)、ひとり『孤壘』を守つて立ち腐れするの悲運をなめるに至るであらう。

勞農黨はどこへ行く?――合同か、立ち腐れか、賢明なる『指導者の意識的努力』は、やがてこの二つの何れかを選擇するであらう。

所謂『戰鬪的解體論』の正體暴露

大山郁夫

一

黨員諸君、並に大衆諸君！

今晩のこの演說會は、わが勞農黨の創立一週年を記念するために、その記念日（十一月一日、二日）に持たれたわが黨の第四回擴大中央執行委員會との聯關に於て開かれたものであります。從つて今までにこの演壇から諸君に呼びかけた人々は、主としてその委員會に參加するために各地方から來り集まつた黨中央委員および支部代表者たちで あつたのであります。

諸君はこの演說會に於て、從來わが黨によつてかゝる場合に持たれた記念演說會とは非常に異つた或る空氣を感知されたでありませう。卽ち、從來のわが黨のかゝる場合に於ける記念演說會には、必ず若干の學者・名士が出演して該博なる蘊蓄を傾けるのを例としたのであります。ところが今晩の記念演說會には、さうしたことは少しもなかつた。出る辯士も出る辯士も、殆んど例外なく生粋の勞働者農民出の鬪士であり、その素朴な言葉で語られたところのものは、工場や農村に於ける血みどろの鬪爭の實踐の基礎の上に打ち建てられたものばかりで あつたのであります。無論、プロレタリアートの行進の前途に輝く新社會への展望も鮮やかに掲げられました。だが同時に、それへ行き着くための道は、當然今日無數の勞働者農民が資本家地主とその權力とに對して現實に惡戰苦鬪してゐる工場や農村から開かれるべきものだといふことが明かにせられたのであります。かうして、こゝでは、理論が完全に實踐と固く握手したのであります。

これは何を意味するか？ その答へは簡單であります。——卽ち、今日わが勞農黨が內外から迫り來る樣々の原因のために極度に苦難な步みを運んでゐる時に際して、我々の陣營から脫落して行く人々が少なからずある。さうした人々のすべてが悉くインテリ分子ばかりだといへないのは無論であるが、しかし大衆に責任なきインテリ分子のすべてが革命的言辭を高唱しつゝ一齊に脫落して行つたことは、疑ひもなき現實の事實である。かうして今や、わが黨內には、ブルジョア政府やブルジョア社會が與へた名譽の表象を帶びたやうな人々は一人もなくなつて、戰鬪的な勞働者農民無產市民が全黨の主力となり、その赤裸々な實力によつて黨の旗を守らなければならなくなつた——否、守つてゐるのである。そして、かうした事實が、今晩のこの演壇の上にまざ／＼と反映されたのであります。

二

今度のわが黨擴大中央執行委員會の討論の中心問題となつたものは、いふまでもなく、最近わが黨內に姿を現はした勞農黨卽時解體論——殊に河上氏等のいはゆる『戰鬪的解體論』であります。諸君も知られ

る通りに、數箇月前に大阪で勞農黨解消運動が起り、東京では細迫前書記長がそれに呼應した時に、黨本部は早速それに對する態度を決め、いはゆる『發展的解消論』を提唱したのであります。發展的解消論といふ名はその主張の內容とピッタリ符合したものでないかも知れませんが、それは要するに、將來わが勞農黨が、より高度な、より强大な、より革命的に行動し得るガッシリとした鬪爭體——すなはち勞農政治鬪爭同盟——に發展轉化すべきことを目標として今後の活動方針を定めたものであります。黨本部はかういふ風に態度を一決して、あの數箇月前の勞農黨解消運動を克服したのであります。ところが、最近に至つて、その解消運動の餘燼が再び河上氏等の『戰鬪的解體論』となつて燃えあがつたので、黨本部は前後一貫して同じ發展的解消論の立場からそれに當つてゐましたが、今度の擴大中央執行委員會は滿場一致で黨本部のその方針を支持して、河上氏等の勞農黨卽時解體の主張を一蹴したのであります。

　この問題は、既に他の多くの辯士諸君によつて論議され、私に殘されてゐる論點は最早盡きたかとも思ひますが、しかし萬一重複したら諸君の寬容を乞ふことにして、私もその問題の根本要點について、一言を附け加へさせて頂きたいと思ふのであります。

三

　勞農黨は從來、それ自體を『勞働者農民の戰鬪的同盟』として規定して來ました。それは、勞働者農民を中心勢力として結成され、資本家地主およびその權力と鬪ふ一個の政治的ブロックだといふやうな、些漠然とした意味に於て言はれてゐたのであります。處が、最近にて、わが黨內に於ける討論の結果、勞農政治鬪爭同盟が當然に持つべき本質、役割、組織形體、等々が一應究明されたので（十月二十一日の『勞働農民新聞』參照）、この上わが勞農黨そのものを『勞働者農民の戰鬪的同盟』と呼び續けないことにしようと議決したのであります。それは、勞農黨の本質の變はつたことを意味するのではなく、たゞ單に概念の混亂を防がうとする意圖から出たことにすぎないのであります。

　それで、わが勞農黨は、現在では明かに一個の勞農政黨であるが、しかし同時に、出來るだけ近き將來に於て、黨本部提出議案に規定された通りの勞農政治鬪爭同盟にまで發展轉化すべき目的を意識しつゝ今後の活動を律しようと決意してゐる勞農政黨であります。そして、この根本方針が今度の擴大中央執行委員會で滿場一致で採決された今日、全黨員中、わが勞農黨が未來永劫、今日の組織形態のまゝで固定化するであらうなどと考へてゐるやうな人は、一人もなくなつた譯であります。

　換言すれば、全黨員は今や益々明確にわが勞農黨を發展的に把握するやうになつて來た譯であります。この點を疑ふものはたゞ、舊勞働農民黨時代以來、共に生死を賭つて彈壓の嵐の中を腕を組んで惡戰苦鬪しつゝ、滿身創痍の姿で今日まで黨の旗の下に結集して來た——または一切の苦難を覺悟で新たに我々の陣營に參加して來た——黨內の戰鬪的勞働者農民の立場を理解し信賴することが出來ないやうな、過度に懷疑的な、從つて非實踐的な、そして今から考へると初めから同志意識を缺いてゐた人々だけであります。

四

『戰鬪的解體論』を主張する河上氏等も、それに反對する我々も、勞農政治鬪爭同盟の確立を絕對に必要視する點に於ては一つである。更らに、勞農黨が現存の組織形態のまゝでは勞農政治鬪爭同盟に轉化することが出來ないと考へる點に於ても一つであり、また現在では勞農政治鬪爭同盟の成立および活動の條件が、まだ成熟してゐないと見てゐる點に於ても一つである。從つて、當面の問題の核心は、さういふ處にあるのではない。結局、氏等の步む道と我々の步む道との岐れ目は、その勞農政治鬪爭同盟に行き着くまでの手段の上にあるのであります。

河上氏等は、勞農政治鬪爭同盟――氏等はそれを單に『勞農鬪爭同盟』と呼んでゐるが、實質的には同一物を指すのだ――の確立の必要を前提としてゐるだけで、少くとも今日までのところでは、それへの道を具體的に指し示さないで、たゞ漫然と、『勞農政黨は有害物だから、それの一つである勞農黨を、この際一ト思ひに叩き潰ぶしてしまへ』と咆哮してゐるだけである。かういふ風に、勞農政黨一般を、當面の客觀的狀勢との聯關を一切拔きにして、一律に『有害物』呼ばゝりするやうな物の言ひ方は、明かに非辯證法的であるが、しかしそれは茲で不問に附することにしても、苟くも勞農鬪爭同盟の確立の必要を認めながら、如何にしてそれに到達すべきかの方針を樹立することなくして、たゞこの際その展望を前にして勞農黨を卽時解體してしまへといふが如きは、無責任も甚だしい態度だといはねばならぬ。勞農黨は現在如何に微力とはいへども、その組織の內部には、それを建設した戰鬪的勞働者農民の鬪爭エネルギーが殘りなく蓄積されてゐるのである。しかも氏等は、この際斷然勞農黨を解體することによつてそれを無意義に水泡に歸せしめることが『階級運動全體のために最も意義ある方法』だといふのである。これこそ明かにエセ辯證法の衣を纏うた一場の詭辯であつて、多少なりとも階級的意識にめざめた勞働者農民は、勞農黨の組織の內部に、蓄積されたる大衆の鬪爭エネルギーのかゝる浪費こそは、『階級運動全體のために』許すべからざる犯罪であることを知つてゐるのであります。

さうした主張には、わが勞農黨は斷乎として反對し、そして勞農政治鬪爭同盟の確立が必要であればあるだけ、益々全力的にその成立およびその活動を保證するための一切の條件を作り出すことに貢獻しようと決意してゐるものである。そのためにわが勞農黨は、勞働組合および農民組合の擴大强化に關する從來の鬪爭方針を一層敏活に今後の實踐に移し、更らに大衆の日常鬪爭の激發と指導とを益々廣汎に、益々決死的に遂行し、そしてすべての鬪爭を全被壓迫大衆の政治的自由獲得の全線的鬪爭にまで高潮せしめ、かくて資本家地主の政治的權力に對する突擊を無限に效果的ならしめようとしてゐるのであります。

いふまでもなく、勞農政治鬪爭同盟は、天から降つて來るものでもなければ、地から湧いて來るものでもなく、それはあくまで、今いつたやうな様々の、勞働者農民大衆の常住不斷の鬪爭の過程に於て築きあげられるものなのであります。無論さうした鬪爭はわが勞農黨だけの手によつて行はれるものではないが、しかしわが勞農黨も全黨の力を擧げてその一部署を擔當しようといふのであります。そして、我々が今

目指してゐるやうな強大なる勞農政治闘爭同盟がガッシリと形成された時こそは、わが勞農黨が勞農黨として持つ使命が一應果たされた時であり、從つてその曉には、わが勞農黨員は一齊に決然として自黨を解體し、その勞農政治闘爭同盟の中に沒して行つて、年來のあらゆる闘爭經驗を新たにその組織の内部で活かすであらう。これこそが、現在勞農黨の組織の内部に蓄積されたる大衆の闘爭エネルギーを全階級運動全體のために最も有意義に發展轉化せしめる唯一の道である。この意味に於て我々は、初めから『發展的解消』といふ慣用の表現よりも、寧ろ『發展轉化』といふ表現を喜んだのであり、そして今からでもさういふ風に改めることが決して晩くはないと信じてゐるのであります。

ところが、河上氏等は、獨斷的にも勞農黨にさうした一切の發展轉化を拒み、その根據から出發して、この際故意に是が非でも勞農黨を解體に導くことによつて、勞農黨員をして、さうした一切の闘爭を放棄せしめようとしてゐるのであります。それかと言つて、氏等は自ら率先して即刻勞農闘爭同盟の確立に着手しようと努つてゐる譯でもなく、ではこれから全無產階級の唯一の統一的指導部であるプロレタリアートの黨に入らうとしてゐるのかといへば、無論さうではなく、そのプロレタリアート黨の指導下の活動に入らうとしてゐるのですらないのであります。結局、物々しくも『戰闘的解體論』を提げて立つた氏等の落ち行く先は、一體何處であらうか？　多分氏等は、氏等が自ら正直に告白してゐる通りに、『有害なことをするよりも無害な（從つて結局は何程か有益な）陣地に身を秘さうとしてゐるのであらうし、そしてそれは少くとも河上氏にとつては、氏の永遠の書齋であらう。何といふ實踐意志に缺けた主張であるか！　それを『戰闘的解體論』と呼ぶのは、明かに名稱錯誤であります。それは、正當には『戰闘回避的解體論』と呼ばれるべきであり、更らに適切には『敗北主義的解體論』と銘を打たれるべきであります。我々は斷じて、さうしたものに耳を傾けることが出來ない。それは氏等には到底把握が出來ないわが勞農黨の戰闘的傳統が許さないのであります。

五

河上氏等は、前に言つたやうに、勞農政黨一般を、個々の黨そのものの本質の如何に拘らず、また時と處とを問はず、一律に有害物だと斷定されてゐるのであります。そして、その論據とするところは、氏等の署名のしてある聲明書と、河上氏單獨署名の『有害物としての勞農政黨』と題した論文とを突き合はせると、かういふことになるのであります。——即ち、勞農政黨が如何に善良な意圖の下に日常闘爭を遂行してゐる場合と雖も、その指導下に行はれる日常闘爭は決して改良主義的日常闘爭の縄張を出るのでないから、いづれも皆『反革命的』のものであり、『反動的』のものであるのだ。從つてそれは必然に、『勞働者農民の窮極的解放のための妨害物』である。だからかゝる日常闘爭は、『勞働爭議に、小作爭議に、寢食を忘れ一身の利害を棄てゝ闘爭をつゞけてゐる眞面目なる闘士たち』の『憤激を冒して』までも、斷然排撃されなければならないものだ。——云々と、かういふのがその要旨であります。我々から見れば、それこそ實に稀代の謬論といふべきであります。

河上氏は以上の論旨をいふために、レーニンの名著『何を爲すべき

か？』の中の『大衆の自然成長性と黨の目的意識』に關する部分から長々と引用を試みてゐられるが、しかも悲慘なる滑稽ともいふべきは、レーニンが折角啓示した眞理も、河上氏の手にかゝつて、とんでもない場處錯誤の地點におかれて、戸惑ひをしてゐる恰好になつてゐるのであります。

レーニンの『何を爲すべきか？』は一九〇二年に書かれたものであるが、現今でも階級鬪爭の中に身を投じてゐるものの熟讀しなければならない書物であることは事實である。この書物は、ロシアに於て第一次革命（一九〇五年）前までノサばつてゐた一聯の『經濟主義者』たちの主張に向つて巨彈を投じたものである。それらの經濟主義者たちは、『ロシアに於ける獨立の勞働者黨の必要性を拒否し、ツァーの權力の顚覆のための勞働者階級の革命的鬪爭に反對し、運動の內部に於ける組合主義的政治行動を傳道し、一般に勞働運動を自由主義的ブルジョアジーの手に引き渡さうとしてゐた』ものであり、そしてかゝる立場から、勞働者黨が大衆の自然成長的な、單純に端緒的な要求に根ざす運動を計畫的に指導しつゝそれを意識的行動の水準にまで高めるやうなことをするのを無用有害なお節介だと說いてゐたのである。經濟主義者たちのかゝる自然成長性禮讚論に向つて、レーニンはこの書物を通じて、痛快にも致命的な一擊を與へたのであります。

かうした事實を念頭において、レーニンがその書物の中で極度に黨の目的意識的指導の必要を強調してゐるところを讀むと、我々は今日でもそこに溌剌たる生命の躍動を感じることができるのであります。だが、一たびそこから眼を轉じて、河上氏が勝手氣儘に『日本の現在に於ける勞農政黨の擁護者たち』を一律に『日常鬪爭主義者たち』に仕立てゝしまつて、更らに一層勝手氣儘にも、それらの『日常鬪爭主義者たち』を『ロシアの經濟主義者たち』の仲間に引き入れてしまつてゐられる段になると、全く苦笑しないでは居られません。それは横から見ても縱から見ても、餘りにも無理無態な、そして丸つ切り無意味な對比論法だからであります。書齋の中で、聲明書にもある通りに『思索』に耽つてゐられる河上氏としては當然のことであるかも知れませんが——。

六

『何を爲すべきか？』のうち、河上氏が引用された部分の前後でレーニンが力說してゐるのは、大衆の中から盛り上がつて來るところの自然發生的な、單純に端緒的な要求に根ざす日常鬪爭は、その儘に放任しておけば、それがいくら高潮しても、必然に改良主義的鬪爭の繩張りを出るものでないから、黨はどこまでもそれをマルクス主義的に指導しなければならぬ、といふ一要點であります。それはレーニン自身の輝かしき言葉でいへば、『大衆の自然成長性は、我々黨員の、多大の目的意識性を必要とする』ものであり、『大衆の自然發生的な昂まりが強ければ強いほど、運動が益々廣汎なものになるであらうし、從つて、黨の理論上の、ならびに政治上および組織上の仕事には、益々多分の目的意識性が必要になつて來る』といふのであります。

レーニンのこの言葉は、たしかに階級運動に於ける極めて貴重な實踐的眞理を喝破したものであります。それだけに、それは早くから我々に知られてゐたものであります。河上氏には初耳かも知れないが、少

くとも勞農黨内で活動してゐる闘士たちの中には、それを幾度となく聞かされた覺えのないものは一人もないのであります。ところが河上氏はそこへ出シャバつて來て、全く善良なる學校敎師の口調そのまゝで、『日常闘爭主義者〔河上氏が勝手氣儘にその意味をつけたところの〕は、謂はゆる日常闘爭をやつてさへゐれば、自然に革命的な勢力が結成されるものゝやうに考へてゐる』と述べてゐられる！どうか、もう笑はせるのはいゝ加減にして貰ひたいものであります！

だが、我々の當面の問題の中心點は、實はそこにあるのでなくて、河上氏が『勞農政黨の指導する日常闘爭は、畢竟改良主義的日常闘爭の繩張を出ないものであり、從つて反革命的な、反動的な役割を演じつゝあるものであり、勞働者農民の窮極的解放のための妨害物である』といふ意味をいはれてゐる點にあるのであります。それに對して、わが勞農黨の今度の擴大中央執行委員會の席上で、多くの人々が、『東洋モスや、大島製鋼所や、新潟の王番田や、大浦原で行はれた爭議の上に見られたやうな、あの勞働者農民のすばらしい決死的闘爭はどうだ！それが反革命的反動的な闘爭だといへるか？』といつて憤慨してゐましたが、それはあまりにも當然な非難の叫びであります。

だが河上氏は、氏の右の論點をレーニンの權威によつて證明するために『何を爲すべきか？』から長々と引用されたのであるが、生憎にもレーニンはさうしたことを言つてはゐないのであります。否、レーニンはそれとは全く逆に、『大衆の自然發生的な、端緒的な要求に根ざす運動――河上氏のいふ意味に於ける改良主義的闘爭――の波が全土の上に廣汎に捲き起る時こそ、まさにマルクス主義的指導が痛切に必要になつて來る時であり、革命的闘爭の起るには又とない好機會である』といふ意味を述べてゐるのであります。

河上氏が愛好されてゐるレーニンの他の著書である『左翼小兒病』の中には『下層階級」が今まで通りに生活することを欲せず、「上層階級」が今まで通りに生活し得ない時にのみ、その時にのみ革命は勝利し得るのである』と書いてある。無論、レーニンはその直ぐあとに前衛の指導任務のことに觸れてゐるが、とにかくさう明かに書いてゐるのであります。で、ウノルガはその言葉が含まれてある部分を引用した上で、例の有名なる世界史的事實ともいふべき一九二六年のイギリスの總罷業、わけても鑛山勞働者の同盟罷業の革命的意義について、かう言つてゐます。『イギリスの總罷業、わけても鑛山勞働者の同盟罷業が我々に與へた最も重要な認識は、數百萬のイギリスの勞働大衆が「今まで通りに生活することを欲しない」といふことである。鑛山勞働者が最も甚だしく困難缺乏に堪へなければならぬにも拘らず闘爭を續けてゐるところの忍耐、數百萬の他の勞働者が鑛山勞働者を支持しようと急いだあの熱烈さ、他の勞働者大衆の連帶的同盟罷業への嵐の如き促迫、總罷業中止に對する大衆の憤激――すべてこれらのことは、レーニンが六年前に書いたその言葉――「イギリスに於ては‥‥明かに無產階級××成就のための諸條件が‥‥成熟しつゝある」――の正しいことを證明したものである。』

にも拘らず、河上氏は、よし『勞農政黨の指導する』との斷り書きをしての上のことにせよ、端的に大衆の自然發生的な、端緒的要求に根ざす日常闘爭すなはち河上氏のいふ改良主義的日常闘爭は、『勞働者農民の窮極的解放のための妨害物である』と斷定し、しかもその點を御丁寧

にも態々氏の論文の小見出しの上に大きな活字を用ひてまでも強調して居られる。それは明かに、現實の事實の前に於ける氏の理論のあまりにも悲慘なる全破產を物語るものでなくて何でありませう！

河上氏等の考へ方の混亂は何處から來たのでありませうか？ それは明かに氏等が、自然發生的な日常闘爭への改良主義的指導——現在の慣用語で適切にいへば社會民主主義的指導——とマルクス主義的指導との間の區別を どうかした拍子に、改良主義的日常闘爭と革命主義的日常闘爭との間の區別と履き違へられたところから來てゐるのであります。成るほどマルクス主義的指導と社會民主主義的指導との間には、雲泥萬里の差があります。だが、これに反して、一つの現實具體的の日常闘爭を見て、『これは改良主義的のものだ』とか、『あれは革命主義的のものだ』とかいふ風に實際上區別できるものでもなく、また區別する要もないことであります。無論、自然發生的な日常闘爭に社會民主主義指導が加へられただけで、それに少しもマルクス主義的指導が加へられなければ、それは決して革命主義的日常闘爭に轉化するものでないことは事實でありますが、しかしそれとこれとは、全然問題が別なのであります。

七

さきに述べた通りに、河上氏は勞農政黨一般は、個々の黨そのもの〻本質の如何に拘らず、また時と處とを問はず、一律に有害物だと斷定されてゐるが、しかし氏が我々と共に最大級に尊敬してゐられるレーニンは、その全生涯を通じて、決してそんなことを考へては居なかつたやうであります。それは例へば『左翼小兒病』の第九章の始めを讀んだゞけでも、直ぐに解ります。レーニンは、勞農政黨ではないが、矢張りそれと同じ種類のものとして見られるべき、共產黨でない合法的無產黨としてのイギリスの社會主義黨、社會主義勞働黨、等々を指して、ちつとも有害物だとはいつてゐないばかりでなく、寧ろ共產黨への轉向を辿りつ〻あるものとしてではあるが、推稱的に聞える言葉をそれらに向けてさへゐます。また河上氏はその自說の正しさを證明するために、いつもコミンターン第六回大會の植民地半植民地に於ける××運動に關するテーゼ中の一句を引用してゐられるが、しかしそこには『勞農政黨は或る時期に於ては、如何に革命的な性質を持つことがあらうとも、それは餘りにも容易に通常の小ブルジョア政黨に轉化する』とあつて、その勞農政黨は或る時期に於て革命的であり得ることを言つてゐる言葉が、明かに氏が說明しようとしてゐることとは反對の方向を指してゐます。

わが勞農黨は、勞農政黨の一つとして、自己が『餘りにも容易に通常の小ブルジョア政黨に轉化』し得る地位にあることを自覺してゐるところから、なるべく近き將來にガッシリとした強大な勞農同盟に入り込むことを目標として、それの成立と活動とを保證し得べき一切の條件の促進のために意識的に努力することを誓つて、刻々闘爭から闘爭へと進みつ〻あるのであります。

かくてわが勞農黨は、勞働組合農民組合の擴大強化のための闘爭、ならびに大衆の生活と自由の擁護伸展のための日常闘爭を今後益〻強力に全國的に展開し、且つそれに全被壓迫大衆の政治的自由獲得の本線

的闘争を目指した意識的計畫的指導を與へて行かうとしてゐるのであります。これは、勞農黨の創立以來、一貫して變らぬ方針であります。河上氏等は、勞農黨のさうした指導が必然に社會民主的指導になる——否、現にさうなつてゐると言はれるが、しかしそれは事實を見ざるもの、獨斷であります。現在勞農黨の旗を守つてゐる闘士たちの中には、舊勞働農民黨以來マルクス主義的闘争の實踐に嚴格に訓練されて來たものが多く殘存してゐて、その强健なる影響力を全黨の上に投げかけてゐます。舊勞働農民黨の時代以來の我々の陣營の戰闘的傳統は、かくして立派に維持され、發展せしめられて行くのであります。また事實上、勞農黨員が現實に指導してゐる工場および農村に於ける爭議の場面を見ても、かゝる日常闘争は、經濟闘争の範圍のうちにも、更らにまた組合主義的政治闘争の範圍のうちにも閉ぢ籠められてゐるやうなことは、斷じてないのであります。それは出來得る限り、マルクス主義的指導の下に、意識的な政治行動の水準にまで高められ行つてゐるのであります。

もとより我々は、マルクス主義的指導は、プロレタリアート黨の手によつてでなければ完全に遂行し得られるものでないことを知つてゐます。我々は刻々、勞農政黨の限界を明かに見てゐます。無論、その限界は果敢なる闘争の過程に於て不斷に前方に押し進められてゐるものであり又現實に押し進められて居るものでもあるが、しかしそれにしても、窮極に於て勞農黨には、それが勞農政黨として必然に持つ限界があります。それを我々は、誰れよりもよく知つてゐます。だから、若し現在プロレタリアート黨が現實の大衆的日常闘争を十分效果的に指導し得るまでに確立してゐるならば、勞農黨のマルクス主義的指導などは、頭から全然問題にならないし、それどころか勞農黨の存立までが肯定され得る餘地がないのです。だが我々の當面の問題は、プロレタリアート黨がさういふ風に確立されるであらう日まで、我々が手を拱いて大衆の日常闘争を廣汎に激發し、政治的に指導することを怠つていゝか？どうか？といふことの上にあるのです。我々は確信を以て『斷じて否！』と答へるものであります。我々はわが勞農黨が行ひ得る政治的指導が、プロレタリアート黨が行ひ得るやうな完全なマルクス主義的指導であり得ないことを疑はないが、しかし同時に、それがプロレタリアート黨が行ひ得るやうな完全なマルクス主義的指導の方向を指すものであつて、斷じてそれに背反するものでないことを確信するものであります。それ故に諸君！我々はその確信の下に、この際あくまで勞農政治闘争同盟の確立に向つて猛進し、そして將來その同盟が大衆の前にその巨大な姿を現はした曉には、その時こそ潔よくわが勞農黨を解體して、一擧にその中に躍進して行き、そこで全大衆と共に胸も張り裂けるばかりに歡呼の聲をあげて、無産階級の窮極の解放の日が間近に迫つて來たことを祝しませう。だがその日までは、同志諸君！我々はお互ひにあくまで勞農黨の旗の下に結集して、その擴大强化のために、決死的に闘争から闘争へと、不斷に戰ひ進みませう。それこそが、わが黨の組織の内部に蓄積されてゐる戰闘的勞働者農民の闘争エネルギーを、無産階級運動全體のために最も有意義に發展轉化せしめ得る道であり、從つてそれこそが、當面我々の上に課せられた最大の任務に外ならないのであります。

「學生思想問題」の社會的考察

森戸辰男

『思想善導』の正體

資本主義社會の根本矛盾は、この社會の發展につれて、色々な形で色々な方面にだんだん目立つて現はれる。吾々の問題に即していへば、わが國における支配階級の政治の最近の傾向が、利潤の追求を意識的に內治外交の最高基準となすに至つたといふ意味において、益々露骨に物質化し來つたと相列んで、學問・思想・教育の領域において彼等の尊ぶ政策（以下單に思想政策と略稱す）は愈々顯著に觀念化しつつある。しかも極めて逆說的ではあるが、甚しく觀念化せる思想政策によつて、彼等は政治における極度に物質的な目的の實現を助成しようと志してゐるのである。

民政黨內閣はその成立以來、自黨の政策と政友會の政策との相違・對立を强調し來つた。しかし、事態の冷靜なる觀察者は、氷炭相容れざるかに見えるこれら兩政黨の間にも、相互に共通せる二三の、しかも重要な政策の存在してゐることを看過しなかつたであらう。さうして思想政策はまさにその適例の一つだ。すなはち田中內閣が若槻內閣における岡田文相の反動的思想政策の要旨を受繼ぎ、さらに之を超反動化したやうに、自由主義的だと謂はれる濱口內閣はかの『教化總動員』において象徴された思想政策によつて、田中內閣の超反動的な『思想善導』政策の精髓を踏襲してゐるではないか。

だが、それは何も不思議なことではない。といふのは、この外觀上の不思議は人々が『思想善導』の正體をさへ捉へうれば、すぐにも解ける底のものであるから。ところで、今日、無批判にも『思想善導』を字義通りに受けとつて、それが思想を善いやうに導くことであるかに考へる者はよほどの魯鈍者以外にはもう存在しない。吾々は知つてゐる、いかなる人々がいかなる必要からいかなる人々の思想をいかなる人々のために導かうとしてゐるかを具體的に突きとめないでは、とうてい『思想善導』の本質をつかみえないといふことを。さうして、實際『思想善導』の標語によつて代表されてゐる思想政策は、その社會的內容においては、支配階級——それは我國の現狀では有產階級にほかならぬ——の實踐的・觀念的・當事者(エゼント)たちが階級鬪爭激化の趨勢に當面して、被支配大衆の思想を支配者の階級利益に副ふやう導かうとする努力以外のなに

ものでもなく、したがつてこの政策の眞の目標が、屢〻私の指摘し來つたやうに、有産階級的思想の擁護、無產階級的思想の排擊に存することは、今日ではもう一個の公然の秘密になつてゐるのである。

ところで、民政・政友の二大政黨は、有産政黨として、一方では、有産階級的國家内における政權への競爭者であるところから、互に犬猿もただならぬ間柄ではあるが、他方では、彼等の大政黨としての存在と、結局、盥廻し的な彼等の政權への競爭とを可能ならしめてゐる有產階級的な政治及社會秩序を防衛することにおいてもまた、これらの秩序の改革を追求する無產階級の運動を、實踐上におけるとおなじく思想上においてもまた、排擊することにおいては、全然同一の利害關係をもち、したがつて同一の行動をとらざるをえないのだ。長い間、我國の陸海軍は國外の敵に對する戰鬪手段として、有產政黨の政爭の圏外におかれ來つたものだが、最近にいたつては、無產階級・前進的諸運動の排擊・彈壓を目的とする諸〻の政策・機關もまた、有產階級にとつての國内の仲威者に對する鬪爭手段として、後者の勢力の增大に比例して、ます〳〵有產政黨間の黨爭の埒内から押出されて――裁判が現にさうであるやうに――所謂る超黨派的事項たらんとしてゐるがごとくである。

思想は思想をもつて(?)

この見地からみると、先頃、文部省主催の「學生思想問題協議會」において思想對策に關して開陳されたと傳へられてゐる意見は思想問題の取扱に對してなんらの新味を附加するものではない。それは學校教育・學生思想に適用された「思想善導」政策の特殊の場合にほかならぬ。だが、同時に注意すべきは、この協議會がそれ自身によつて、また彼處で開陳された意見を通じて、「思想善導」の其後の經過に關する二三の重要なる事實を吾々に暗示してゐることである。

民政黨内閣は自由主義的だといはれてゐる。そして自由主義政策が最も有效に實現しえられる部面は、なによりもまづ思想の世界であらう。このことのためか、現内閣は思想には思想を以て對抗すべしといふことを思想政策の方針としてゐるかに傳へられてゐるし、現に文相はしばしば公然とこの意味のことを聲明してもゐる。此の如き世評と聲明とを背景としつつ、例へば「思想文獻協議會」「學生思想問題協議會」等々の開催を耳にするとき、ひとは往々にして、文政當局の思想政策が眞に自由主義的であり、「思想は思想をもつて」を信條としてゐるかの幻覺をいだかぬとも限らぬのである。

事實はけれどもどうか。かの協議會の出席者中には、吉田・河合兩帝大教授等の如き當局の信任する思想家教授、校長主事の如き學校當事者、文部省の關係吏僚のほかになほ、警保局長、保安課長、刑事局長、思想係檢事の名前が見出される。もちろんこれらの思想の代表者と强力の代表者との會同には幾多の尤もらしい理由があげられえようが、歸するところ、それは思想問題における官許思想家・文政當局と警察官・司法關係者の協同戰線を示唆するものでなくて何であらう。

所謂自由主義的思想政策の强力手段へのこの接近は、文政當局の最近の實踐によつても裏書されるかに見える。といふのは文部及學校當局は近頃所謂左傾學生に對しては理論的說得と道德的感化の方法を一擲し、專ら强壓手段を以て彼等に臨み、文政當局の聲明したやうに、「一部

不羅分子はこれを一掃するの方針をもつて斷然停學・放校の處分をなすに至つてゐるから。のみならずこの强力手段の運用は、所謂左傾學生に對しても所謂左傾教授に對しても、屢々校外における强權の代表者たちとの完全なる諒解と協働との下に行はれつつあるといはれてゐる。學問と訓育とを中心任務とする學校當局が理論的說得と道德的感化との手段を斷念して最も非教育的な强力手段にひたすら依賴するに至つたことは、そのこと自體において我國學校教育頽落・破綻の一面を示すものではないかと考へられるが、それはともかく、ここでもまた吾々は學生思想の領域において思想と强力との實踐上の協同戰線に際會するのである。

まことに、資本主義社會の現段階における支配階級の實踐にとつては、思想を以て思想に對抗せよとの自由主義的思想政策は明白なる時代錯誤だ。したがつて、よしんば有産階級的政府者が幾度口先でこのお題目を繰返したとしても、彼等はその行動においては斷じて之を實行することはないだらう。だから、吾々も亦『學生思想協議會』其他を問題とする場合には、まづ之に纏はる自由主義的幻影をぶち壞してかかる必要があるのである。

反マルクス主義の宣明

『學生思想問題協議會』は學生思想の問題に關する根本的に新たななんらの見解をも啓示しないが、しかし、學生思想善導策の基調とその最近の成績とについて注意すべき若干の告白をなしてゐる。

第一に、『協議會』は、學生思想善導策の基調がマルクス主義の克服、反マルクス主義の確立に存することを明白に宣明して「最も根本的・唯一的な思想問題對策としては、結局、マルキシズム思想體系に對抗するだけの構造を持つ思想體系を樹立せねばならぬ」といふてゐる。これは支配階級の立場からすれば、まことに當然すぎるほど當然な認識である。といふのは彼等に對して振はれてゐる最も恐ろしい「批判の武器」は今日マルキシズムをおいてほかには存在しないから。それだのに、文政當局および官許思想家は、臆病からか良心からか、屢々「マルキシズムの理論的研究」とか「思想問題の嚴正批判」とかいふ中立的言辭を用ひて、その眞の意圖を隱蔽して來た。しかるにいま彼等は明白・直截にその意圖を聲明するに至つた。これはたしかに一段の進歩だといへよう。

だが、この聲明によつて彼等のイデオロギー的隱蔽が悉く消失したのではない。支配階級の思想的當事者はなほ少くとも次の二點においてその思想的隱蔽をつづけてゐる。即ち彼等は、一方では、マルキシズムの排擊によつて彼等が排擊しようと志してゐるものが無産階級的思想にほかならぬこと、他方では、マルキシズムに對抗して彼等の樹立しようとする思想體系が、結局、有産階級的思想體系にほかならぬこと、の言明を回避することにおいて。もちろん、マルキシズムは數多ある體系中の一つに過ぎぬのだが、支配階級がこれらの中から排擊の對象として特にマルキシズムを選び出したのは、偶然からでもなければ、それが外來思想であるからでも、また最も誤謬に充ちた、したがつて有害な體系であるからでもない。その理由は一にかかつてマルキシズムが有産階級の支配的地位を脅かす無産階級運動の指導理論であり、かつそのことのために、そしてその理論の犀利・透徹のために、青年學徒に對して逸大

の魅力を有してゐるといふ點にある。

次に、マルキシズムに對抗する思想體系についても、それに、色々ある。しかし彼等は、いかにそれがマルキシズムに對立してゐやうとも、例へば無政府主義を、フエビヤン主義でさへを樹立しようとは決して考へない。彼等の要望は極めて具體的である。すなはちその要求するものは有産階級的社會秩序の思想的補足であり、これが擁護の思想的武器であるところの有産階級的思想體系なのだ。尤も、その際、彼等は屢々この思想體系の階級性を看過または隱蔽して、之を超階級的・全人類的であると信じ、または信ずるかのやうに振舞ふ。支配階級およびその思想的當事者は、彼等が實生活において痛切に體驗してゐる階級の對立・闘爭をば學問・敎育・思想の世界に移植しようと焦慮してゐながら、その必然の歸結であるべき思想・學問の階級性の曝露を恐れて、ひたすら之が隱蔽に努力する、といふ極めて滑稽な矛盾を、平氣でやつてゐるのである。

學生思想善導の不成績

第二に、「協議會」に現はれた意見から吾々の學びうるところは、學生思想善導の今日までの成績がすこぶる不良であり、その原因が、就中、指導の地位にある敎職員の思想問題、わけてもマルキシズムに關する認識不足と大學敎職員の思想問題に對する無關心とに求められてゐるといふことだ。學生に對する思想善導が遲々として捗らぬのは、一部分は、學生大衆の反抗のためなのだが、この學生大衆の反抗のうち、集團的な行動上の反抗は同盟休校においてそのクライマックスに達する。そして最近頻發する、とりわけ高等學校の、同盟休校の大部分は、その誘因が何であれ、根本的には時代錯誤の支配階級的思想善導策に對する彼等の反抗に起因してゐる。尤もこの種の反抗は社會的には極めて重大な事件であるが、まさにそのことのために、屢々非敎育的な、すなはち強力的な解決手段の適用を正當化する辭柄を求めやすくもある。ところが個人的な理論上の反抗はさう簡單に強力的に解決することはできない。それは敎育者にとつてはまさに苦手である。といふのは、彼等は指導者として學生を理論上にも啓發・誘導して行かねばならぬ筈だのに、彼等の多くはその能力を缺いでゐるから。實際、社會問題・思想問題、わけてもマルキシズムに關する限り、平均的には、進歩的學生の方が指導の地位にある敎職員よりもヨリ高い知識水準に立つてゐるといはれてゐる。したがつて思想の世界で相交渉するかぎり、指導敎職員は指導を要する學生を說得・誘導しうるどころか、却つて逆に後者によつて說破されるといふことさへが稀有ではないらしい。これでは思想善導の實があがらうはずはない。さればこそ、最近學校當局はしきりに強力手段を用ひ、でなければ、校外の官權と通謀して學生の家庭に壓迫を加へ、俗道德によつて歪められた肉身の自然的感情を利用して卑劣な「泣き落し戰術」に訴へるに至つたとさへ傳へられてゐる。

大學敎授の「思想問題に對する無關心」——一部分は彼等の消極的反抗でもあるところのこの無關心は、たしかに思想善導の一障碍である。だが、そのためにそれは果して非難さるべきであらうか。なるほど、大學敎授には思想問題に對して無關心な者がかなり多くある。けれどもそれは全面的な人格ではなく、局部的な專門家をその地位に招き、その

上、彼等を一切の政治的・社會的・思想的諸問題から隔離することを方針として來た文政當局の蒔いた種子の收穫ではないか。他方、當局のかやうな態度に抗して、少からぬ大學教授は眞面目に社會・思想の問題に關心して來た（ただし支配階級の期待するのとは正反對の方向において）。ところが大學教授の無關心を歎息する當局は、大學教授のこの關心を歡ぶどころか、それが積極的に表示せられるや、ただちに事を構へて彼等を校門の外に放逐し來つたし、現にさうしようと待ち構へてゐる。かやうな事情の下に、學內に留りえた眞面目な學者たちに所謂「思想問題に對する無關心」が見出されるとせば、それが思想問題に對する眞實の無關心ではなくて、文政當局の押賣する有產階級的思想對策に對する理由ある無關心にほかならぬことは餘りにも明瞭ではないか。支配階級の觀念的從僕に身を墮すことをいさぎよしとせぬほどの獨立性と學的良心を保持する大學教授のこの「無關心」は、彼等の名譽でこそあれ、決して不名譽ではないのである。

かく、眞に思想問題に關して誠意と熱意とをもつ眞面目な教職者は文政當局の思想善導に對して反對または無關心の態度を表してその戰列に加らず、當局の對策に追從する大多數者——學的確信からでも理想的熱意からでもなく、單に生活上の配慮から指導者たるべくよぎなくされた者には、指導者に不可分の資格である人格的壓力と理論的說得力とが缺けてゐる。かかる事態の下に行はれる學生の思想善導の不成績なのはむしろ當然である。

反マルクス主義體系の樹立

學生思想の善導における不成績・停頓が文政當局をして『學生思想問題協議會』を催せしめた根本動機であると思はれるが、では、同會で提唱せられた諸〻の思想問題對策は果してこの停頓を打開しうるであらうか。吾々はまづ、かくの如き思想對策がそれ自身有效に成立しうる基礎を持つてゐるか否かを考へてみたい。

『協議會』が「最も根本的・唯一的な思想問題對策」として「マルキシズムに對抗するだけの構造を持つ思想體系の樹立」を言うたのは全く正しい。それはかの古典の飜刻や反マルクス主義洋本の飜譯に比してはたしかに根本的である。だが、根本的であるといふことは必ずしもそれが可能であることを意味しない。昨年末、文部省主催の『思想文獻協議會』は古事記・十七條憲法・四書五經等々を飜刻することによつて思想善導を期さうとして、識者の憫笑を買つたことがある。此の如きは思想の社會的被規定性を知らざる者のみが耽りうる妄想であるが、しかし、そのこと自身は十分實行可能の事柄である。續いて、何よりも外來思想を嫌惡するかに見える文政當局は、皮肉にも、思想善導の援兵を外來思想に求めて反マルクス主義洋書の飜譯を計畫し、飜譯豫定書目をまで發表した。その多くについてはマルクス主義者の反批判がつとにその眞價を曝露してゐるのだから、かやうな洋書を今更飜譯したとて、それはわが反マルクス學者のマルクス主義排擊論の種あかし位に役立つ以外には、たいした效果を期待しえないであらうが、それでも實行不能のことではもちろんない。ただひとりマルキシズムに對抗するだけの構造を持つ思想體系の樹立に至つては、吾々の論陣に現はれたマルクス排擊者のお手並みから推せば、少くとも近き將來にはとうてい之を望みがた

い（ただし、さように名乘るドンキホーテの輩出はこの限りでないが）。しかも思想善導の急務は呑氣にこの大體系の樹立を待つてゐるわけには行かぬ。したがつて吾々は、當分、反マルクス主義理論においては古事記・十七憲法・四書五經的、カント、シエーラア、グリーン的、ツガン、マン的雜炊を以て滿足せざるをえないであらう。がさて、この雜炊は果して指導敎職員の思想問題研究を健全に育成させうるだけの理論的滋養分を持つてゐるかどうか。

指導敎職員の研究奬勵

指導敎職員の側における思想問題、わけてもマルキシズムに關する認識不足が思想善導の有力なる障碍であるとすれば、彼等における此の方面の研究奬勵はたしかに有効なる思想對策の一つに數へられうる。さうしてかやうな研究を奬勵する諸施設を造ることもまた必ずしも難事ではなからう。が、しかし、眞實の問題はそこにあるのではなく、かやうな奬勵施設によつて果して進歩的學生を有効に指導しうる程度にまで、彼等の理論的能力及識見を向上せしめうるか否かにある。

あへて思想問題とは限らぬが、研究が研究者を理論的に成長せしめるためには、少くとも研究者における研究への熱意と研究の自由とが必要とされる。ところが、指導敎職員の大多數は止みがたき內心の要求に從うて、思想問題を研究しようとするのではなく、彼等の地位・職務の必要上から、更に云へば、生活上の配慮から、已むなくこの問題を研究せざるをえないのであり、したがつて彼等において研究を鼓舞する原動力たる感激と熱意との見出されないのはむしろ當然であらう。

一方、『協議會』は指導敎職員が「思想問題に對する十分なる研究を爲す必要」「マルキシズムの理論的研究をなす必要」について語つてゐるだが、ここに言はれてゐる研究は、人々が普通に考へるやうな研究ではないのだ。なぜなら、吾々が普通に研究といふ場合には、研究者は對象たる學說の眞僞を豫斷することなしに、卽ち囚はれざる態度を以て之を討査することを意味する。しかるにこの場合の研究は、研究の後に下さるべきはずの判斷を研究以前に豫定することを、具體的には、かくして豫斷せられたマルキシズムの誤謬を論證し、之が克服の方法を研究することを意味してゐるから。しかもその際、絕對命令として彼等にこの豫斷を與へるものは、學問および敎育の內的要求ではなくて、階級的利益の基礎に立つところの强權の命令なのである。さうしてこのことは、奬勵さるべき敎育・研究の目的が、恰も宗派の傳道學校における傳道者養成のための敎育・研究におけると同じく、眞實の學徒の養成にではなくて、思想的警察官または思想的僧侶の養成にあることからの當然の歸結である。

私はかつてスチルネルが有產階級の保護的權力を「警察」と呼び、之を註解して「警察には軍人、あらゆる種類の例へば司法官憲・敎育者等々の如き役人、つまり全『國家機關』が之に屬する」と書いてゐるのを讀んで奇異の感を懷いたことがある。しかるに、今日、わが國の敎育者が徒らに警察化し、國家機關化し行くのを目のあたりに見て、いまでは却つて彼れの達見に推服してゐるのである。さらに私は誰かが官許の敎育家を現代の僧侶だと言つてゐるのを同感を以て讀んだことを記憶してゐる。まことに彼等は一週一日の代りに一週六日、全國一千萬の青少年

男女に、資本宗と國家宗を說法しつつある長裳俗衣の僧侶である。それ故に非宗教的な現代において、たゞ緊要な宗教批判がありとすれば、それは恐らく新なる批判を待つまでもなく頽落の途上にある既成宗教ではなしに、益々增大する俗的僧侶の大軍と愈々完備せる敎化網とをもつて、全國民に向つて强制的にさへ說法されてゐる現代の俗的宗教ではなからうか。それはともかく、思想問題の理論的研究の促進を、標榜する『協議會』の研究奬勵の眞の意圖は、此の如き思想的警察官と思想的僧侶との養成にある。そして强權と獨斷とが、最後の言葉であるところのこれらの所謂研究施設から、指導者に望ましき理論的能力及識見の涵養を期待するのは、まことに木に椽つて魚を求めるの類ひであらう。なぜなら、かやうな所謂る研究においては——私は敢て言ひ切ることができる——かつてマルクスが經濟學について指摘したやうに、「もはやこの學理が正しいかあの學理が正しいかが問題ではなくて、そが資本のために役立つか害になるかが、好都合であるか不都合であるかが、警察の忌諱にふれるかどうかが、問題で」あり、「利害を超越した研究の代りに、御用的な論難攻擊が現はれ、囚はれざる科學的考察の代りに、辯護のための疚しき心と惡しき意圖とが現はれ」るに極まつてゐるから。

大學教授の動員

大學教授の思想問題に對する無關心を以て思想善導の他の障碍と認めた『協議會』がこの問題に對して「今少し關心を持ち、學生の思想善導に當るやう」彼等に期待するのは理由あることだ。しかし、これは果してできることか。ことに、普通に考へられてゐる『大學の使命』と矛盾することなしに。

大學教職員間には、少數ながら、文政當局の思想善導に對する明白なる贊成者と反對者とがある。前者はたいてい門地・出身・閨閥・交友・利害關係等によつて支配階級と近い關係にある人々であり、後者に多く前者と反對の生活關係から、無產階級の實踐的思想的立場に共鳴する人々である。之に反して、大學教職員の大部分はむしろ無關心者であるが、それも決して一色ではない。それは純粹の專門沒頭者もあり、當局の思想對策の消極的不信任者もあり、中間理論の確信からの中立者もあり、さらに單なる日和見的無關心者もある。これらのうち、文政及學校當局の對策によつて關心を喚起しうるのは、恐らく主に最後の部類の人々であり、そして當局は研究費の給與、地位の約束等を通して彼等に働きかけうるし、現にさうしてゐる。

從來、わが國の大學教授の詮衡においても、主として試驗成績に表はれた複製的能力と有力教授との個人關係が主な役割を演じ、候補者の學才、獨創性等は輕視され、社會科學研究上、特に重視さるべき學問的良心は殆ど之を無視して來た。したがつて大學教職者の間には、學問的無性格者が、學問を喋る幇間にすぎない學問的性格破產者さへがある。かやうな人々に對しては、上記の誘惑が全然無效果であるとは言ひきれぬが、私は大學の名譽のために、かくして支配階級的思想對策に動員される人々は極めて少ないと假定しておかう。

無關心教授の動員にかかる限界があるとすれば、當局者に殘された方法は反對教職員の陶汰と支持教職員の新採用とであらう。そして、これは當局が夙にとりきたつた方針であつて、河合教授の大學自由論

笑ひつつ、此の如き對策は着々として實行されつつある。しかも極めて陰猾な協同作戰によつて。といふのは、最近しきりに吾々の周圍に行はれつつあるやうに、警察當局による本人又は知人の檢束は屢ゝ不採用または辭職强要の實質上の理由となり、檢事の起訴は官立大學では休職の法定の理由となるから。

なほ、數年來、文政及學校當局がマルクス主義者の不採用を方針として來つたことは公然の秘密である。ところが、彼等は最近の事態に當面して、この消極方針をさらに積極化し、所謂る思想善導への共鳴を採用の一要件に加へようと企ててゐはしないか。マルクス主義者不採用は、でなくとも不合理きはまる在來の敎授詮衡方法を、一層不合理なものとしたが、思想善導の支持者採用の方針はこの不合理を極度にまで高めることにならう。

しかし、日和見敎授の動員と同じく、この方法も亦かやうな露骨な形では、さしあたり大規模にはまさか實現されえまい。が、將來萬一にもかやうな方針が徹底し、かくて大學敎授の思想善導への動員が完全に行れる日が來るならば、その時こそ『大學の顚落』過程の結了した時であり、大學が「最高學府」としての機能を停めたばかりではなく、一般に眞實の「學問の研究及び敎育の機關」たることを止めたことを示すのである。

唯物論的敎育からの轉換

「精神的な」支配階級にとつて唯物論は不倶戴天の敵であるらしい。そこで『協議會』においてもまた「唯物論的敎育の偏重」からの轉換が强調されてゐる。この場合、唯物論的偏向の批難は皮肉にも支配階級の文政自身に向けられたものであることを注意せねばならぬ。といふのは「在來の敎育」を決定したのはマルクス主義者ではなくて、彼等の思想的當事者であるから。之に反して彼等がいま「唯物論的」と規定した在來の敎育を最も勇敢に批判し鬪爭したのは誰か。ほかならぬマルクス主義者である。では、この點において『協議會』はマルキシズムと提携しようとするのか。まさに反對である。彼等は呪はれたる唯物論の故に、このマルキシズムの克服を誓うてゐるのだ。

唯物論的敎育からの轉換方法として『協議會』は「高等學校などにおける基礎學としての哲學・倫理・歷史を徹底的に敎授する必要がある」と考へる。だが、これらの學科はいづれも現に諸學校で敎授されてゐるではないか、それも支配階級にお誂へ向きの觀念的立場から。しかるにこれらの學問は、多くの場合、學生にとつて感激・興味の中心であるどころか、却つて最も退屈・空虛な敎課の内に數へられてゐる現狀である。恰もこの時、哲學・歷史・倫理等を徹底的に取扱ひ、かくて學生の感激と興味とを喚起したのは、かの唯物論的なマルキシズムではなかつたか。

そのほか、『協議會』によれば、高等學校などでは「社會を如何に批判すべきかといふことが敎へられてゐないから、これらの點も改める必要がある」のださうだ。だが、この點においても亦『協議會』の期待を裏切つて社會的批判力の涵養を怠つたのは文政及學校當局自身である。彼等の缺陷を補足して、學生に社會批判の正しき方法を敎へたのは、これまた、唯物論的なマルキシズムの運動ではなかつたか。かくて、それは高等學校の荒涼たる學問的沙漠における綠滴るオアシスであつたのである。

かかる事態を全く與かり知らざるもののごとく、『協議會』は高等學校における哲學・歷史・倫理から興味と感激とを奪ひ、學生の社會批判力を痲痺せしめたところの支配階級的觀念論を非難する代りにその徹底を、無產階級的唯物論に感謝する代りにその排擊を企圖するといふ不可解な態度を示した。しかし、この一見不可解な態度は、彼等にとつて問題の核心が抽象的な唯物論か觀念論かにあるのではなくて、有產階級的思想か無產階級的思想かに存することを看破するとき、ただちに釋然として首肯されうる。と同時に、吾々は豫め斷言することができる、所謂唯物論的教育からの轉換は、結局、在來の有產階級的教育の擴張生產に終らざるをえないであらうことを。

校風の作興

『協議會』は、最後に、各學校において「校風を作興し」社會教育において「社會的理想信念を作興せし」むべきを推奬してゐる。けだし、在來の學校が特有の理想を失ひ、今日の社會が社會的理想信念を喪ふに至つたことが、思想惡化の一大原因であると考へたからであらう。なるほど、一國の靑年を感奮蹶起せしめるやうな理想信念が存在するといふことは最も望ましいことに違ひない。けれども所謂る校風が果してかやうな理想またはその代替物でありうるであらうか。さらに所謂る校風は今日なほかつてのやうな意義を以て學生界に復興しうるであらうか。

先づ吾々は伺ひたい。彼等がいまその復興を望んでゐる校風を破壞した者はいつたい誰れか。マルクス主義者か、文政當局か。かつて一高はその特色ある校風によつて有名であり、筆者の在學してゐた頃には、いまだその若干の名殘を存してゐた。しかるに、二十年後の今日、そこに何が殘つてゐるか。だが、考へて見ればそれは當然のことである。といふのは一高の校風は寄宿寮の自治生活に根ざしてゐたのに、引續く一高の官僚化はこの學生の自治を扼殺して校風の溫床を荒廢させて了つたから。丁度、資本主義の浸蝕が地方地方のローカル・カラアを單調の一色に塗りつぶさずにはおかぬやうに、教育への官僚主義の浸蝕、教育家の俗化は、その淵源を涸竭せしめることによつて、學校の地方色たる校風の凋落を不可避ならしめたのである。

なほ、學校の理想としての校風はその時代の社會理想と離しては考へがたい。「榮華の巷をよそに見て向ケ岡にそゝり立つ五寮」に立籠ることを誇りとした超然主義の一高においてすら、その校風の一特徵は日清・日露の兩戰爭期におけるショーヴィニズムの反映にほかならなかつた。故に、校風が眞に學生の感激・發奮の原動力であるやう作興されうるためには、それは活きた時代の理想と連絡あるものでなければならず、でない限り、人爲的に復興されたる校風は、學生に對してなんらの魅力も權威も持ちえないであらう。といふのは、雜誌・圓本氾濫の現代では、學生層は著しく社會化されてゐ、したがつて彼等はもはや校風を媒介として時代の社會理想を呼吸することを必要としない。彼等は時代錯誤の校風を捨て、直接に校外の社會に脈動してゐる理想に趨き、そこから希望と感激と力とを獲るであらうから。

だが、かゝる時代の社會理想は現に存在してゐるか。然り。それは今日、公然と世界人類の大多數の胸裡に燃えてゐるところの「搾取なく壓制なき社會」の理想である。支配階級とその思想的當事者はこの炳乎た

る社會理想に背を向けて、校風と理想信念の作興を闇中に模索する。それは白日の前に眼を蔽うて闇黑を歎くの愚ではないか。

現代青年學徒の物質と無産階級的立場

『協議會』に現はれた思想問題對策は、それが有效に成立しうる根據を缺いでゐることはほぼ既述の通りであるが、さらにこれら對策の對象である青年學徒の特質を考料すると、その成功は益々覺束なくなる。

　今日の學生大衆は色々な社會層から出て居り。また色々の社會層に接觸してゐるから、その傾向は決して單一ではない。にもかかはらず彼等は、多かれ少かれ、青年學徒としての共通の特質を持つてゐる。私はこの特質を假りに純眞性と呼んでおかう。すなはち學生は外部的諸事情の拘束を斥け内的要求に從うて、純情的に感じ、純理的に思惟し、理想的に意欲する傾向を持つてゐる。だから彼等は、その本性を歪められざる限り、この惠まれた青年期においては多かれ、少かれ、悲しむ者と悲しみ、歡ぶ者と歡び、虐げられたる者に同情し、驕れる者に憤激するところの人道的感情によつて感激せられ、利益の誘惑、權力の壓迫を斥けてひたすら眞理を求め藝術を追ふところの學問的・藝術的精神に動かされ、生きがひある最善の理想を探ねて、之に全身全靈を打ち込まうとする實踐的理想主義に支配されるのである。これはまことに青年者の特權であり、往々空想的に戲畫化されはするものの、一面からいへば各人の全生涯を通じての精神生活の最高峰である場合が屢々ある。

　進んで、青年學徒のかやうな純眞性は、それが有意または無意の歪曲をうけない限り、今日の社會では具體的にどんな姿をとるであらうか。

産業合理化の美名の下に一握の大資本家の援護・强化が國家的に遂行せられつゝある傍らにおいて、國民の大多數をなす勞働者・農民・中小商工業者はその犧牲として失業と窮乏のどん底につき落され、しかも資本家は勞働大衆の合法的自救手段の公認(進歩的組合法の制定)をさへ拒否し、官權は巷衢田園における彼等の生活苦の平和的表示をすら强力的に彈壓しようと用意してゐるのを見るとき、純眞なる青年の人道的感情はいづれの側に向ふであらうか。

　金力と權力の持主である少數支配者の側にか、それとも解放を喘ぎ求めてゐる苦惱せる大衆の側にか。また、退屈な有産階級的學問は、それが支配階級の利益に奉仕することのために、その内的價値とは無關係に學園内に繁榮し、之に反して何ものにも畏伏せられざる批判の精神に充ちた無産階級的學問は、その理論的缺陥の故にではなく、單に學問的要求とは沒交渉な支配階級的利害のために學園より追放され、學園外においてもその設備と研究と發表の上に幾多の不當なる壓迫を受けつつあるのを見るときに、學問の獨立、眞理の自由討究に關心する青年學徒の心は、有産階級的思想と無産階級的思想とのいづれに牽きつけられるであらうか。さらに、今日、聰明・純眞なる青年に最も強く訴へる理想は何か。それは最早内面生活を無視した外面的な個人的または國家的榮達でも、大衆の苦惱悶鬪から逃避した個人主義的な自己完成でもありえない。各人の内面的成長をも含むところの萬民共樂の新社會の建設がそれである。そして現代の階級社會はこの新社會の形態を、階級なき、したがつて搾取なく壓制なき社會と規定する。ところで、この社會理想こそは、校門の彼方にあつて全世界の被壓・被搾取大衆が、本能的

にまた反省的に、それに向つて不斷の闘爭を續けてゐるところのものではないか。

かく、現代の青年學徒はその特質たる純眞性を失はぬ限り、無產大衆の苦腦に同情し、その闘爭に關心し、その思想に共鳴し、その理想に感激しうる傾向を持つものといへよう。しかもそれは、少數ながら富豪・貴族・大官の子弟でさへが、この學生時代においてのみは、たとへ少時であり、多く仇花に終るとはいへ、無產階級的立場への強い誘惑を感ぜざるをえないほどにまで著しいのである。

精神的「勞働者」の階級的覺醒

學生の純眞性は、現代の社會的環境のもとでは、彼等の心意を無產階級の側に押しやらずにはおかぬのだが、同時に注意すべき事は彼等のこの心理乃至イデオロギイが極めて不安定であり、したがつて往々彼等自らでさへが後に至つてその「若げの誤り」を自認するほどにたよりない場合すらあるといふことだ。それは今日の學生大衆の社會的地位のしからしめるところで反動的思想對策の乘じうる餘地もまた、そこに存するのである。

學生大衆の階級的地位は二重に不鮮明・不安定である。といふのは、第一に學生の地位は一個の經過的・未分解的な地位であり、本來の意味では何らの階級をも構成してゐない。第二に、我國の現狀では學生大衆の大部分は中產層の、卽ち、所謂る小市民の子弟であるとともに、彼等の前途もまた同じく小市民的な知識階級的境涯である、そして中間階級としてのこれら小市民の階級的立場は、屢々指摘されてゐるやうに、極めて不安定・不鮮明なものであるから。それゆゑにもし在來の事態が今後もなほ依然として繼續するならば、支配階級の反動的思想對策もまた相當の效果を收めうる社會的根據を持つものといふことができよう。

ところが、これらの事態は現に急速に變轉しつゝある。なるほど、第一の、學生の地位が經過的・未分解的であるといふことは、當分の間大體變りあるまい。(ただし就職運動が一年も在學年限に喰込んでゐる今日ではそれもかなりの割引を必要とするが。)しかて第二の點について小・中產者を沒落させないではおかぬ資本主義發展の鐵則は、就中、最近の恐慌期を通じて、少からぬ學生の家庭を零落せしめ、その經濟的地位を著しく無產者に近づけしめた。例へば昨年十月東大共濟部の行うた生計調査によると、學生四千四百餘人中の約四分ノ一は「父兄より學資支給困難なるもの」であるといふことだ。不景氣が益々深刻化して來た今日では、この割合は一層增大してゐる。と推定しうる十分の理由がある。

かくの如く學生大衆の背景は漸次暗くなつてゐるが、その前景はどうか。中央職業紹介所事務所の『全國大學・專門學校卒業生就職狀況調査』によれば、次表の示すやうに、最近、卒業生數が益々增加するに反比例して、彼等の就職率は年と共に減退してゐる。

	卒業者數	就職者數	就職率(%)
昭和二年	一二、七九四	八、三〇一	六四・七
同三年	一七、〇一八	九、一七一	五三・九
同四年	二二、九五九	一一、五二四	五〇・二
同五年	二四、〇〇二	一一、四八八	四七・八

幸に、この激しい競爭を切拔けて、やつと職にありついた彼等の大部分にとつても、かつてのやうに、官廳會社の幹部級に昇進しうる機會は、從つてその合理的な希望は今日絶無となつて了つたと言つてよい。さらに、同じ事務局の『會社銀行定期採用調査』は採用卒業生の報酬が(例へば大學卒業生の平均初任給は昭和二、三、四年間に八〇圓、六九圓六六圓と)年々激減してゐる。事實を物語つてゐる。かやうな知識的勞働に對する報酬の相對的減少は、單に我國における獨特の現象ではなく、今秋の國際統計會議での國際賃銀統計に關する報告においてツァーン教授の論證してゐるやうに、まことに世界的の現象なのである。

よしんば彼等が國家と資本への直接奉仕を拒んで、所謂る自由職業者として獨立するとしても、學生大衆の前途がより明るくなるわけではない。なぜならば、彼等が非凡の技能か相當な資産の持主でないならば、間接に資本に依屬しない限り結局、有識無產者の境涯に陥ち込むよりほかに道はないのだから。

學生大衆にとつては、その後景のみならず、前景も亦頗る暗澹としてゐる。しかしそれは彼等の個人的不運であるのみではなく、實に學生大衆の社會的運命なのだ。そしてそれは現段階における一般小市民階級の特に所謂る知識階級の運命の問題に關聯してゐる。といふて、私はいま此處で高度資本主義下における知識階級の問題を取扱ふつもりはない。しかし私は次のことを確言してもよい、即ち、資本家社會の發展は益々「所有」と「知識」とを分離して、知識的活動を「盡忠報國」的な奉仕から單なる雇傭勞働と變じ、かくて支配階級の一翼たる社會層にすぎなかつた知識階級を斷續的「勞働者」の階級として轉醒せしめんとする。動向を採つてゐる。そして、知識階級の社會的地位におけるかやうな變動は必然に學生大衆の意識に反映し、社會事實によつて、根據づけられたこの意識は必ずや、青年學徒の純眞性から生れたところのいまだ不安定な無產階級的傾向を固定化・深化するやう作用する事に違ひない。

反動的思想對策の歸結

今日、わが國の社會發展の傾向は、その「見えざる手」によつて學生大衆を無產階級の方へ導いてゐる。この客觀的情勢のあればこそ、學生大衆の心臟は無產階級的運動・學問理想に向つて高鳴るのである。(もちろん私は總ての偉大なるものに對する感激を失ひ、身邊の功利的配慮にのみ汲々たる學生が、かなりに、あることを忘れてはゐないが同時に彼等が現社會の不合理によつて青年の若々しさと純眞性とを蝕ばまれた憐れな人だちであることをも知つてゐる。) しかるに支配階級の思想對策はこの社會發展の趨勢に逆行して、學生大衆を有產階・級の側へと結付けようとするのであつて、ここに彼等の反動性・反社會性が存するのである。

學生大衆をして社會的な「見えざる手」の導くまゝに、無產階級と共に奮發し、無產階級と共に思想し、無產階級的理想に感激してきうべくんば、無產階級と共に行動せしめよ。しかるとき人々は、屢々傳へられる學生の不氣力・遊惰にもかゝはらず、社會には、更生への理想的努力の新醱酵が現はれ、眞摯なる青年學徒の胸には、久しくそれを嘆いでゐた憂鬱の代りに再び清麗な朗らかさの蘇るのを見るであらう」だがこのことを絶對に好まぬ支配階級はその反動政策を以てかへつてこの社會更新

の醗酵を默殺しようと懸命に努力するのだ。けれども、彼等の退屈空虚の理論と非人道的實踐とは決して「智惠の樹の實」を味うた學生大衆を吸引し、感激せしめることはできない、かくて青年學徒は若人の全精力をあげて傾倒するにたる社會更新の理想を與へられず、ためにその正當たる放出路を失うた彼等の横溢せる精力は、いきほひ非社會的なはけ口に向つて奔流せざるをえない。今日、滔々たる風潮をなしてゐるスポーツ狂によつて代表される硬派的頽廢とエロテシズムによつて代表される軟派的頽廢とは、まさにそれだ。支配階級の不自然な思想對策は、青年學徒の胸に潜む次代創造のエネルギイを人類更生の一社會力として動員する代りに、それの無益な、のみならず反社會的な浪費にほかならぬところの硬・軟兩頽廢の泥沼に導かうとしてゐるそれは次代と青年とを重殺することでないか。しかもそれは彼等の反動的思想對策の必然の歸結なのである。

本稿はもと某新聞紙に掲載する目的で書かれたものであり、その前半はすでに同紙上に發表されたのであるが、しかし、本稿の主眼はむしろその後半に存して居り、かつ既知未知の人々からたびたびその續篇について質問を受けるし、さらに、文政當局の『學生思想問題』對策は私のやうな立場よりする批評をますます必要とすると信ずるので、玆に本誌の紙面を假りて舊形のまま全稿を發表することにした。本來なれば、未掲載部分のみを掲載すべきであらうが、それでは體をなさず、それかといつつて改稿の閑も持たないので、遺憾ながら、重複を顧みず、全稿を掲げることにした。讀者の諒恕を乞ふ次第である。

農業恐慌型態論

――世界農業恐慌に於ける三つの型――

河西太一郎

一

今資本主義全世界に吹き荒れてゐる經濟恐慌の嵐は、時を同じうして起れる世界的の農業恐慌と交錯することによつて、一層その破局面を擴大し、深刻化しつゝあることは既に周知の事實であらう。元來、恐慌が資本主義經濟に必然的の現象たること、而してその窮極的原因が資本主義の根本的矛盾たる生産力と消費力との不均衡の發展に存することは今改めて云ふまでもあるまい。而し、農業も亦資本主義的社會經濟の一環を爲して居る限りに於て、かゝる矛盾の法則の支配の外にあるにあらざるものなることは明かであるから、農業恐慌の必然的到來も亦敢て異とすべきではない。唯農業に於ては、資本主義的發展の樣相が所によつては工業と同じからざるものあり、且つ例へば未開地の開拓とか、天候の具合とか、或は又地代（小作料）の如き工業には存在せざるものが農業においては恐慌の重要なるモメントたり得るが故に、その恐慌の現象形態就中周期の如きものは工業に於けるそれと同一でないことは勿論であるから、特に農業恐慌に就ての一般的、總括的研究を必要とするのであるが、筆者は別の機會にそれに就て一應の考察を試みたことがある（「商學論叢」第二號所載拙稿「農業恐慌論」）から、玆では進んで特に現時の世界的農業恐慌に就て一の分析的研究を試みて見たいと思ふのである。

蓋し、現時の農業恐慌が決して世界的に一樣の、同一性質のものにあらざることは既にヴァルガの指摘せるが如くである。

即ちヴァルガは『資本主義諸國に於ける一般的過剩生産の形式を採つた農業恐慌』の外に、それと同時に、資本主義の未發展なる諸國に『農業の頽廢、不充分な生産、慢性的飢餓、及び數百萬の人間の餓死の切迫』を特色とする農業恐慌の存することを指摘してゐる（『世界經濟年報(9)』第二部『國際農業恐慌』）のであるが、此の分類は今一つ、云はゞ以上兩者の中間的地位に立つ型態の農業恐慌の存在を逸してゐる點に於て未だ充分ではないのではないかと筆者は考へるのである。筆者の見るところによれば現時の世界的農業恐慌には次の如き三種の型態が並存する。一、農業に於て資本主義的生産方法の支配的なる諸國に於ける農業恐慌、二、前資本主義的農業生産方法の支配的なる資本主義諸國に於ける農業恐慌、三、資本主義的に未發展なる諸國に於ける農業恐慌、即ち之れである。此の三者は夫々特異性を有する農業恐慌にあり、唯後に述ぶるが如き一點に於て共通性を有し、以て資本主義第三期の特徴の構成に參加してゐると筆者は考へるのである。

農業恐慌に關するかゝる分析的研究の必要に就ては特に多言を要しないであらう。蓋し農業恐慌にして苟くもその性質を異にするものある以上、その經濟的乃至社會的結果に於ても異なるものあるべきは必然であり、又從つて之れが對策乃至見透しに就ても夫々別個の觀察を必要とするからである。ところでかゝる分析的研究の基礎たるべきものは何よりも先づ事實に關する統計資料の類である。利用し得る限りの適確なる統計資料に基づいて個々の農業恐慌の特異性と共通性とが具體的に指摘せられ、論證されなければならぬことは云ふまでもない。だがかゝる意味で充全を期することはもとより此の小論のよくするところではない。玆ではなによりも紙面が甚しく限定されてゐる。從つてこゝでは唯問題の輪廓を示す程度に終る外なかるべきことを豫めお斷りして置き、詳論は之れを他日に期したいと思ふ。

二

問題をはつきりさせるために、先づ最初に、現時の世界的農業恐慌に關する筆者の三型態分類の標準と、各型態の特徴とを概念的に一通り述べ、然る後現實の農業恐慌に於ける各型態の代表的なるものに就て之れが實證的、具體的觀察を展開することにする。

先づ筆者の三型態分類論は、各國に於ける農業發展の現段階の特異相を出發點とする。即ち現在の農業の發展段階が國によつて違つてゐるから、從つて農業恐慌の現象型態も亦國によつ

て異なるものであると云ふ考へ方である。ところで農業に於ける現段階の特異性なるものは、大體に於て各國に於ける資本主義と農業との關係、或は之れを換言すれば各國の農業に於ける資本主義的發展の様相を基準として之れを區別し得ると考へられる。かゝる見地に立つて現時に於ける世界各國の農業を大別すれば、一、農業に於て資本主義生產方法の發展しつゝある諸國、二、其國の經濟が高度に資本主義化しつゝあるに拘らず、尙農業に於ては前資本主義的生產方法の支配的なる諸國、三、資本主義的に未發展なる諸國に於ける農業、の三者に大きく分類し得るかに考へられる。而して筆者の主張する農業恐慌三型態分類論の基礎は玆にあるのである。即ち資本主義と農業との關係の特異性に基づくかゝる現段階の相違は直ちにそれに基づく特殊なる型態の農業恐慌現象を導くに至ると云ふのである。然らば各型態の農業恐慌の現象形態就中その特殊性は果して如何。

第一の型態、農業に於て資本主義は、生產方法の發展しつゝある諸國に出現する農業恐慌である。かゝる諸國に於ては資本は積極的に農業に進出し、舊來の生產方法を驅逐し、資本主義獨特の生產衝動に促されて、絕えず新技術を採用しつゝ、農業の生產力を異常に發展せしめる。かくして農業技術の革命的發展期に於ては結局不可避的に過剩生產の運命に逢着し、工業生產品との間に鋏狀價格差を實現し、かくして恐慌を導くに至る。ヴァルガの所謂『資本主義諸國に於ける一般的過剩生產の形式を採つた農業恐慌』、即ち之れであつて、これは云はゞ正統的なる資本主義的恐慌の農業に於ける現象型態である。而して現時國際農業恐慌の本流を存すものは即ち此種の恐慌に外ならないのである。

尙此の型態の農業恐慌の特徵は以上に止まらない。此種の農業恐慌は現實には主として新技術に適應し得ない舊式小經營に對する恐慌のみを意味する點に第二の重要なる特徵が存するのである。蓋し新技術の採用に依て生產費の低下を實現し得る大經營においては、恐慌時の穀價の低落にも大體に於てよく堪え得るからである。從つて此種の恐慌の結果は明瞭に大農經營の優勝と小農經營の劣敗とを齎らす。かくしてマルクスの所謂資本主義發展法則は此種の農業に於ては典型的な形で實現する。

次に第二の型態の農業恐慌とは、前資本主義的生產方法の尙支配的なる資本主義諸國に於ける農業恐慌を指稱する。即ちその國の經濟が既に資本主義的に高度な發展を爲しつゝあるにも拘らず、農業に於ては尙未だ資本主義的生產方法が一般に行はるゝに至つてゐない、諸國のことであり、具體的には小土地所

有と小農經營乃至過小經營の支配的なる諸國のことである。之等諸國の農業も、その國の一般資本主義的發達に刺戟せられて、技術的に或る程度の進歩を見せ、生産力を或る程度まで發展せしめるけれども、しかしそれはやがて土地私有制の桎梏に逢着する。かゝる國にありては資本は積極的に農業經營に進出すること少なく、寧ろ主として農業を搾取する役割を演じ、かくして一般に農村の病弊と農民の窮乏とを齎らす。

かゝる諸國の農業に於ても過剩生産恐慌はあり得る。だがそれは、第一型態の場合と異なり、主として技術的進歩によるよりは寧ろ專ら天候の好條件に基づく性質のものである。尙此種の諸國の農業生産物が第一型態の諸國のそれと同種類のものである場合には、後者の過剩生産が直ちに前者の農業恐慌を導くことは云ふまでもない。而して此種の農業恐慌は大體に於て、かゝる諸國の農業生産者全體に一樣に打擊を與へる（勿論高利地代に惱める貧農に對して特にその打擊の痛烈なるものあるは云ふまでもないが）是に於ても第一型態の農業恐慌の場合とは異なるのである。即ち此場合に現はるゝものは農民全體の困窮の激化であり、農村全體の破滅的運命である。

最後に第三型態の農業恐慌とは資本主義の未發展なる諸國に見らるゝものであつて、『農業の頽廢、不充分な生産、慢性的飢餓、及び數百萬の人間の餓死の切迫』とヴァルガの特徴付けてゐるもの即ち之れである。此種の諸國に於ては資本主義は、外國資本主義として侵入し來り、壓迫的な帝國主義獨特の辛辣なる搾取を農業に對して加へる。その上に舊來の徹底なる封建的搾取が尙依然として存續するのであるから、かゝる諸國に於ては農業の發展は不可能である。そこで『舊來の單純再生産の代りに現はれるものは、縮小再生産、農業の頽廢、慢性的飢餓及び周期飢饉……』（ヴァルガ）と云ふことになるのである。從つて茲で見らるゝものは前二者とは甚しく異なつた農業恐慌狀態である。

以上極めて簡單ながら三種の型態の農業及び恐慌の性質と特徴とを一通り述べた。而して筆者の考ふるところによれば現時世界諸國の農業及び農業恐慌は、その近似性に從つて分類すれば、大體に於て以上三型態の何れかに包含せしめ得るものと考へる。そこで現時の世界的農業恐慌の研究に當つては特に以上の三型態を分類し、その各に就てその性質、影響、乃至運命を研究することが便宜でもあり且つ必要でもある。と考へるのである。茲では第一型態の農業恐慌の代表的なるものとしてアメリカ合衆國等を舉げ、第二型態のそれとして我が日本を舉げ、第三型態のそれとして印度を舉げ、その各々に就て聊か具體的の

考察を試みて見たいと思ふ。

三

先づ現時國際農業恐慌の主流に就て觀察して見やう。此の農業恐慌は果して如何なる原因によつて發生するに至つたのであらうか。此問題の考察に當つては我々は何よりも先づ、マギャールの指摘してゐるやうに、「農業生産の方面に世界戰爭以來起つた構造變化」に注目しなければならない。これに就てマギャールは、「一、農業生産中心地の移動、二、農業生産物商業中心地の移動、三、農業に於ける技術的革命の猛烈なテムポ加速化、四、世界戰爭とそれに續いた諸革命との結果として農業關係に生じた社會的、政治的諸變化」の四點を擧げてゐるが、農業恐慌の直接の原因としては就中一と三とを特に重視すべきであらう。

即ち世界戰爭の結果從來の穀物輸出國の多くが戰爭の慘害を蒙りつゝあつた間に、その間惠まれたる地位を占めた合衆國、カナダ、アルゼンチン、オーストラリアの農業が飛躍的の發展を遂げ、啻にその耕地面積を增大したのみならず、深刻なる技術的變革によつて、それ以上に收獲を增大して、世界農業生産の中心地となり、從つて又最重要穀物輸出國として世界市場に決定的の勢力を振ふに至つたのである。即ち「戰前には半封建的土地關係を持つ諸國（ロシア、印度、ルーマニア、ハンガリー）が穀物世界市場で決定的役割を勤めてゐたのに、戰後には農業の技術的發展の進んでゐる諸國が穀物世界市場で決定的な重要さを持つてゐるのである」（マギャール『農業恐慌と一般恐慌』經濟批判會譯「世界經濟年報(8)」所載）

今少しく具體的の數字によつてこれを見て見やう。

まづ小麥の作付面積を見るに、上述の新興四國では、戰前に比して非常な增大を示してゐること左表の如くである。（單位百萬エーカア）

	一九〇九―一三年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
合衆國	四七・一	五二・三	五五・三	五八・七	五八・二	六一・二
カナダ	一一・四	二〇・七	二二・九	二二・四	二四・一	二五・二
アルゼンチン	一四・八	一七・六	一八・二	一八・五	二〇・九	一六・二
オーストラリア	七・六	一〇・二	一一・六	一二・二	一四・八	一四・五

だが小麥の收獲高に至つては一般により速いテムポで激增してゐること左表の示すが如くである。（單位百萬ブッシェル）

	一九〇九―一三年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
合衆國	六九〇	六七六	八三二	八七八	九一四	八〇九
カナダ	一九七	三九五	四〇七	四七九	五六六	三〇〇
アルゼンチン	一四七	一九一	二二〇	二三九	三〇七	一四三
オーストラリア	九〇	一一四	一六〇	一一八	一五九	一二五

右の中一九二九年度の收獲高が激減を示してゐるのは同年に

右の四ヶ國を同時に襲つた旱魃の影響による。

かくて右の四ヶ國が戰後に於ける小麥の國際貿易の上に、斷然輸出諸國を驅逐して、決定的地位を占むるに至つたことは「左記主要諸國に於ける小麥純輸出額表」の明瞭に示すところである。(單位百萬ブッシェル)

	一九〇九—一四年 五ヶ年平均	一九二三—一六年 五ヶ年平均	一九二八—一九年
合衆國	一一〇	一七〇	一四九
カナダ	九五	二六〇	四〇六
アルゼンチン	八四	一四三	二二四
オーストラリア	五五	九二	一〇八
ロシア	一六四	—	—
ルーマニア	五四	八	一
インド	四九	一七	二四
ハンガリー	四三	一八	一八

而も一方ヨーロッパの農業も、緩漫ながら回復の步調を辿り、最近に於てほゞ戰前の水準に達するに至つたこと左表の示すが如くである。

年次	作付面積 (百万エーカア)	生産高 (百万ブッシェル)
一九〇九—一三	七三・八	一、三二七
一九二六	六九・七	一、二〇九
一九二七	七〇・九	一、二七五
一九二八	七一・二	一、四〇七
一九二九	—	一、四三二

以上の四表(「世界經濟(總觀)」六二—六三頁より引用)により、戰後に於ける合衆國、カナダ、アルゼンチン、オーストラリアに於ける農業の飛躍的發展の實相を知り得ると共に、又ヨーロッパの農業も漸次的回復の途を辿り來つたことを知り得るのである。一方に於てかくの如き生産の激增あり、而も他方に於て人口の增加速度は之れに伴はず且つ産業の合理化竝にその結果としての一般經濟恐慌の爲めに大衆の購買力の減少を來してゐる以上、過剩生産の運命は必至的でなければならぬ。既に小麥の年々の持越高は左表の如くに增大し來つたのである。(單位百萬ブッシェル)

自一九二五年 至一九二六年	自一九二六年 至一九二七年	自一九二七年 至一九二八年	自一九二八年 至一九二九年
一三二	一九八	二六八	四二三

かくの如き過剩生産の存する以上茲に價格の暴落を招き、遂に恐慌を導くに至つたことは當然でなければならぬ。かくして今回の國際農業恐慌は起り、それが一般經濟恐慌の影響を受けて一層尖銳化され、以て今日の如き狀勢を展開するに至つたものと見るを妥當とするであらう。

かくして此の恐慌は明かに第一型態の農業恐慌であり、その直接の原因はアメリカ合衆國を始め資本主義的農業經營の行はる、諸國に於ける主に技術的變革に因る生産の激增にあること

を知ることが出來る。而して此の農業技術の變革的進歩の中、特に擧ぐべきものは動力機の方面に於てはトラクター、作業機の方面に於てはコムバインの普及である。それに就ての詳細なる統計的説明は省き、茲では簡單にスッデンスキイをしてその様相を語らしめるに止める。『合衆國に於てはトラクターの使用數は一九二五年には 506,745 一九二八年には 763,825 に達し、更に一九三〇年には一百萬臺に達するであらう。かくの如き發達は要するにトラクターが生産費を著しく低め、收益性を高めるものであるからに外ならない。‥‥而もトラクターの使用に既に變革が始まり、内燃發動機による農業の技術的革命が既に始まつてゐる。卽ち内燃發動機はアメリカの如き近代的農業に於てはその全農具を變革しつゝあるものであつて、就中コムバインの普及に注目しなければならぬ。コムバインは束禾機及び固定打禾機に比して一エーカア當り勞働の必要を五分の一に減じ、收穫費を少くとも半分に低下する。之れを小麥に就て見るにその全生産費の一五乃至二〇%を節約するのである。かくの如き偉大なる勞働の生産力の增大によつてコムバインは向後五年間に舊式の農具類を完全に驅逐するに至るであらう。(スッデンスキイ『世界農業生産の發達方向』)

かくの如き技術的變革の結果はどうなるか。ヴァルガは之れに就て云ふ、『地味が同一の場合、近代的技術の全成果を應用する大經營の生産費は小經營の生産費よりも低い! だから小經營が大衆的に破産するにも拘らず、大經營は同じ地代負擔を負ひながら最近數年間の價格でも尚平均利潤を實現し得たのだ! 農業への新機械の採用が最近數年間に非常な急テムポで行はれてゐるが、このことは農業耕作に於ける小經營に比しての大經營の優越を增大させる。粗放的大經營が最近の穀物價格の下落に經濟的に堪え得るためには、コムバインの採用による節約だけで十分だ。‥‥だから農業恐慌の社會的結果は、資本主義内部に進行してゐる分化過程、小農及び小自作農、負債を負つてゐる農民及び小借地農の大衆的沒落なのだ!』(ヴァルガ前掲書六八、六九、七二頁)

かくして此種の農業恐慌の經濟的乃至社會的意義は明かである。嘗てレーニンは合衆國の一九〇〇年と一九一〇年の農業統計を鋭く分析利用して、『合衆國の農業に於ては、單に大生産による小生産の驅逐が行はれてゐるのみならず、それは工業に於けるよりもより合法則的に或はより正確に、行はれてゐることを論證したのであるが(直井武夫氏譯『農業に於ける資本主義』)、現在の農業恐慌の結果は、之等の諸國に於ては、恐らくはブルジョア統計そのものゝ上に赤裸々にかやうな法則的發展の跡を示す

に至るであらう。

次に此の型態の農業恐慌の運命は果して如何。此點に關するヴァルガの見解は甚だ傾聽に値するものがあるから、玆にやゝ長きに亙る引用を爲すことを許されたい。ヴァルガは此の農業恐慌を以て、資本主義の一般的危機の一部を構成する慢性的過剩生産恐慌と看做してゐるのであるが、かゝる見解の根據を次の如くに示してゐる。「なぜならば戰前と同じやうな方法、卽ち食料品消費の擴大によつて解決する見込がないからだ。これについては主要モメントは次の通りだ。

(a) 資本主義諸國の人口增加は絕えず減少してゐる。人口停滯の明かな傾向がある。

(b) 人口一人當りのパン用穀物の消費は減少の傾向を示してゐる。

(c) 慢性的失業があり、プロレタリアートの生計は惡化し行く際だから、肉及び脂肪の消費の增加程度——前の農業恐慌の時にはイギリスやデンマークではこれで解決されたのだが——は、全資本主義世界にとつて農業恐慌を解決する程度には達しない。

(d) 他方に於て農業への資本流入は今後も繼續し、だから穀物、棉花、砂糖等々の生産增加も續くことは明かだ。資本は過剩であるのに、大工業は益々獨占に支配されて行つて、これに新資本を投下することは不可能になる。その結果どこよりも先づ海外諸國の農業に流入する資本が增加するだらう。なぜならば現在の價値狀態は——殊に地代の低い國々では近代の資本主義は大經營のためにまだ利益ある投資を許すからだ。

(e) 世界市場のサヴェート同盟が再び農業生産輸出國として立ち現はれゝば、過剩生産と價格下落はもつと激しくなるだらう。

(f) 工業の供給する生産手段の價格下落によつて現在の農業恐慌の解決が出來るだらうといふ見込みはない。工業的生産裝置が一部分しか利用されてゐないことは、資本主義沒落の特徵をなすのだが、これによつて生産資本は高くなる。このことゝ大工業(鑛業、交通、商業)內の强力な獨占形成とは工業生産物の價格下落に反對の作用をする。工業商品の價格下による鋏狀價格差の生産といふことはありさうにもない。

(g) 上等の食料品の大衆消費が著しく增加するといふ事はありさうもない。なぜならば農業生産物の卸賣價格が下つても、借地農と消費者との間に介在してゐる金融資本(鐵道、穀物商業、製粉場、肉工業等々)が勢力を持つてゐる結果、一般に小賣價格を下げさせないか、或は下つても僅かな程度に過ぎないからだ。だから生産費の低下も解決にはならないだらう。十九世紀農業恐慌を資本主義の範圍內で克服した諸方途は今日は通行止めだ！　個々の食料品輸入國にとつては關稅引上げは恐慌緩和の作用をすることが出來る。だが全世界に亙る過剩生産にとつては關稅引上げは少しも解決にはならないのだ。」(ヴァルガ前揭書五九—六一頁)

以上のヴァルガの所說の中(g)の上等食料品の大衆消費云々は(c)と重複する氣味があり、なくもがなであるが、全體としては此の農業恐慌の今後の見透しの上に貴重なる指針を與へてゐることは疑ひない。

四

進んで第二型態の農業恐慌に就てはその代表的なるものとして特に日本を舉げることにする。我が農業及び農村が今日慘憺たる恐慌狀態に沈淪しつゝあることは改めて說くまでもない所であり、且つ此の恐慌の直接の原因が今春來の一般農産物價の暴落に存することも亦周知の事實である。そこで問題は寧ろ此の農産物價の暴落の原因がどこにあるかの點にある。此點に就ては第一に我が二大農産物たる米(及び其他の農作物)と繭とを區別して考へる必要がある。米が純粹に國內を消費地とするに反し、繭を原料とする生絲が從來我が輸出の大宗を爲し來つたことは今更云ふまでもない。從つて繭の價格は生絲の最大需要國たるアメリカの景氣の變動によつて直接に左右されざるを得ないのである。從來養蠶戶數も產繭高も累年增加し來つたにも拘はらず、其間產繭價格には年によつて著しい變動があつた。かくの如き變動はその原因が供給の方面にあらず、專ら需要方面の變動に基づくことを語るものであることは今更事新らしく述べるまでもないことである。從つて今春來の繭價の慘落も全くアメリカの經濟恐慌、それに基づく生絲需要の激減にその主因を有することは勿論である。從つて又繭價回復の可能性如何の問題も全くアメリカの景氣回復の可能性如何に懸つてゐるのである。

然るに米の場合はこれと全然異なる。米は小麥の如き國際的商品ではないから、その價格も亦專ら國內に於ける需給關係殊に主として供給の變動に應じて變動する。卽ち豐作は米價の下落を齎らし、不作は米價の騰貴を惹起するのである。ところで米の作付反別は累年漸增の傾向にあり、而してその反當り收穫高は近年やゝ漸減の傾向に入つたけれども、その勢さまで顯著ならず、且つ他方朝鮮及び臺灣の產米增殖計畫の成功に伴ふ內地移入米激增の傾向があるのであるから、一朝豐年萬作とあれば所謂生產過剩を來たし、米價の暴落を來たすべきは必然である。現に今年は正しくそれに當り、九月二十日現在に於ける第一回豫想收穫高は六千六百八十六萬七千五百三十石に達し、前五ヶ年平均收穫高に比し七百四十一萬六千三百二十八石(一割二分五厘)の增加を示し、來るべき米穀年度に於ける過剩米が七百萬石乃至一千萬石の多きに及ぶことが推定せられ、かくして今日旣に米價の慘落を招來しつゝあることは周知の事實であり、その結果、今日迄繭を始め蔬菜果實類の價格暴落によつて旣に生色を失ひつゝあつた農村が、今又此の代表的農產物の價格の大崩落に逢つて如何なる境地に陷らんとするかは蓋し思ひ

半ばに過ぎるものあり、現に米價問題が今や朝野の大問題となつてゐる所以である。

　茲ではその當面の對策に關する論議を離れ、何故にかくの如き生産過剰を惹起するに至つたかを見究めなければならぬ。我が米作技術が我國資本主義の發展に促されて進歩し來りたること、而して例へば施肥の増加品種の改良其他一般栽培技術の進歩に伴ふて其産額を増加し來りたることは事實であるが、その勢は早くも我が土地所有關係の桎梏に逢着して鈍り、近年に入つては收穫率の減少を見るに至つてゐる程であるから、今年の大増收の如きも直接技術は進歩に基づくものでないことは毫も疑ひなく、寧ろ主として天候の順調なりしに因るのである。從つて此種の過剰生産は、決して慢性的傾向を有するものではなく、自然が暴威を振ふことによつて逆に過小生産恐慌に轉移することもあり得ないことではないのである。且つかくの如き原因で起るものであるが故に、此種の恐慌の打撃は、程度の差こそあれ、我が全農家の上に及び、一切の農家に對して甚しき收支不償の痛撃を與へる點に於ても、第一型態の場合とはその經濟的乃至社會的常識を異にするのである。

　而も我國農業經營の收支不償はこれを以て始めとするかと云ふに決してそうではないのである。我國に於ける農村疲弊の聲を聞く既に久し。誠に我が大多數の農民階級にとつてはその農業經營は嘗て殆んど採算に合つたことがなかつたと云つていゝのである。農産物價の騰貴する年はあつても、それは少數の地主と富農とをこそ利したれ、粒々辛苦せる大多數の生産者にとつては何の潤にもならなかつたのである。彼等は有利なるが故に農業に從事して來りたるに非らず、生んが爲めの止むを得ざるたつきとして外に仕事がなかつたからに外ならない。現に農林省の發表にかゝる大正十年以來の農家經濟調査によつて見ても、毎年相當多數の收支不償農家あり、殊に農産物價の低落した大正十一年度の如きは調査戸數中不足戸數の割合が四割五分に達し、又最近昭和二年度に於てもその割合が三割三分に及んでゐるのを見るのである。而も此の調査農家たるや平均以上に優良なる農家が選擇されてゐるにも拘らず既に然り、況んや平均以上に位する我が大多數農家たる貧農に於てをやである。かくの如き狀態は畢竟所謂潛在的恐慌狀態にあらずして何であらう！

　そこへ持つて來て今回の大農業恐慌の襲來である。これによつて多年潛在し來りたる恐慌狀態が忽ち尖鋭化して表面に現はれ、以て急性局面を展開するに至つたのである。事態の容易ならざる想察すべきのである。現にその直接の影響として今日ま

でに現はれつゝある最も重要なる二三の現象を指摘するならば、第一には小作爭議中土地返還爭議の激增であり、既に本年一月乃至九月に於ける爭議總件數は一四八六件であつて、昨年同期に比し一八〇件の增加であり、その中地主の小作地返還（之れに對し小作人の小作繼續）要求に關する事件は七七三件（總件數の五割二分）に達し、前年同期に比し一五〇件の激增である。かくの如きは全く農村に於ける階級鬪爭の激化とその性質の深刻化とを語る以外の何ものでもないが、かゝる形勢は今後加速度的に進行して止まるところを知らざんとするものがあるであらう。第二は自作農沒落の顯著なる進行過程である。最近の調査によると我農家の負債總額約五十億圓の巨額に達するのであるが、特に今回の恐慌によつて完全に辨濟能力を失つた自作農の多くが如何なる運命に陷るべきかは多く云はずして明かであらう。が單にそれだけではない、今回の農業恐慌が直接に如何に彼等の運命を脅やかしつゝあるかは左記の記事によつても目のあたり之れを想望するに過るのである。

『繭米の二大農產物をはじめ各種農產物は本春來暴落に暴落を續けてゐるので最近では農家には殆んど現金なしとさへ云はれてゐる窮追振りである。しかも抵當物のない貧農は云ふまでもないが、山林田畑等の不動產を持つ階級も亦最近ではこれを處分せんとするも買手なく、地方銀行はこれを擔保とする貸付を受付けぬ等金融全く硬塞の狀態にあるので、肥料代金其他の年末の決算期と地租の納期の切迫等によつて、農業の現金需要益々急なるものがあるが、この機に乘じて最も安價に土地を獲得せんとする高利貸が最近農村に於て盛んに活躍しつゝある。これがため祖先傳來の田畑山林を殆んどたゞ同然に債鬼に奪ひ去られる悲劇が全國各地に續出し、殊に東北地方にはその被害甚大なるものがある。この高利貸の農地略奪は一面都市に於ける極端なる不況から既に此方面に活躍の餘地が少くなつたことにもよるが、兎に角農村の未曾有の不況は最近彼等をして不動產略奪に又なき好機なりと注目せしむるに至つたことが重大なる原因であつて、此勢を以て進めば堅實なる農村の中堅階級たる自作農乃至自作兼小作階級は絕滅すべき危機に立つものと見られてゐる。』（「東京朝日」十一月六日）

かくして何れにしてもこの恐慌の結果は農民大衆の沒落であり、その實質的プロレタリア化の進化である。かくして我々は茲にも亦「小農の必然的沒落」を見るのである。だがそれは第一型態の場合の如く直接大農經營の競爭による壓迫によるのではなく、茲では別の原因が働いてゐるのである。その第一は半封建的高利地代の搾取であり、第二は資本主義的搾取であつて、これが恐慌の直接の打擊を特に極度に感ぜしめる所以の原因なのである。第一に、我國の小作人がその收穫の半ば以上を小作料として地主に搾取されてゐることは周知の事實であり、而してこれが小作人の生活を窮迫に陷れ、その農業經營を萎靡せしむる主因たることは云ふまでもない。次に第二の資本主義的搾取

とは農工生産品の交換關係（農民の賣る物は安く、買ふものは高い）を通じ、地代、負債利子又は公租負擔等を通じて、農業に加へられる資本の搾取である。かゝる二樣の搾取こそ一般農民殊に小農をして常に潜在的恐慌狀態に沈淪せざるを得ざらしむる元兇である。（但し第二型態にありてはかゝる高利地代は寧ろ例外である。）

かくして第二型態の農業恐慌の解決の容易ならざることは明かであらう。それは結局土地制度及び資本制度そのもの、問題にまで行きつかざるを得ない性質のものであり。かゝる意味に於て資本の支配する限り我々は玆にも亦慢性的恐慌狀態を見る外ないのである。

五

最早餘白が乏しくなつたので、最後に第三型態の農業及び農業恐慌の代表的なるものとしてのインドに就てはヴァルガの記述に從つて簡單な梗概を述べるに止める。

此種の農業にあつては、前二者とは異なりその國の資本主義が未發展なるために、技術的進歩の衝動と便宜とに乏しい上に、外國帝國主義の壓迫と、自國の封建的要素の搾取とを受けてその生産力は進歩するよりも却つて退歩の傾向を採り、かくて實際の耕作農民を最も悲慘な窮境に陥れることを以てその特色とするのである。

例へばインドに就ては農業の收穫に何等進歩のないことは次の收穫統計の示すが如くである。（單位百萬トン）

年次	一九〇〇—一三	一九二四—二六	一九三三	一九三四	一九三五
米	三一・五	三三・三	三五・七	三〇・二	三三・〇
小麥	八・四	九・三	九・九	九・八	九・〇
その他の穀物	二一・八	二三・一	—	—	二二・三
計	六一・七	六五・七			六四・三

そこでヴァルガは云ふ、『これ等の數字は、食料品に關しては印度の農業が絶對的に停滯してゐることを示してゐる。この間に人口は增加してゐるので、現在印度民衆の平均營養は二十年前より尙悪いといふ結論が生ずる。』

更にヴァルガは、『印度の土地に於ては、如何に多大の勞働力を消費して如何に僅少なる收穫を生じてゐるかといふこと』を數字的に證明したる後、結論的に次の如く述べてゐる。

『一ヘクタールにつき、非常に密集せる人口と莫大なる勞働消費とにも拘らず、極めて僅少なる收穫、これが印度農業の基本的特質であると同時に農民の貧窮の基礎でもある。』

總ての國々の歷史によつて我々の知つてゐる如く、この基礎の上にこそ凡ゆる搾取關係は發展する。併し印度に於てはそれ

が尚一層高度である。收穫の五割までも削り取る法外な地代、二割まで、そして尚それ以上に上る法外な負債の利子――農民の半數は苦しい借金をつ負てゐる――商品の暴利、地代、利子、租稅は農民の收益の八割を奪ふ。‥‥

‥‥土地の半分は耕されず、收穫は少なく、且つ人口に比して減少してゆく。農民と農業勞働者は最も悲慘な貧困狀態にある。この貧困によつて封建的領主とイギリスの農園所有者とのみは富裕になつて行くのである。」(ヴァルガ『世界經濟年報』第二輯二一九――二二一頁)

然らばかくの如き事態は何によつて惹起さるゝに至つたか、それに關する重要なるモメントをヴァルガは次の如くに指摘してゐる。

「(a)資本主義は、人口稠密なこれらの諸國で、農民經濟の「自然的補足物」たる農村家內工業を破壞した。

(b)資本主義は、外國資本主義として、卽ち壓迫的な帝國主義として侵入したのだから、ヨーロッパで、成立したやうなその國自身の資本主義的大工業――これは沒落しつゝある農民工業の代りとなり、そこで遊離した勞働力を收容することができる――の發展がない。反對だ。都市手工業さへ、資本主義的に生產された外國商品の競爭の結果沒落する。だから印度では、都市から農村へ、工業から農業への歸還といふ事實が五十年以來の現象となつた。

(c)こゝから土地飢餓が生ずる。その程度は、「土地所有に對する需要か供給を超過することによつて」地價が騰貴し借地料が高利貸地代になる程度に達する。

(d)その結果は、農民大衆の債務負擔、大衆的債務奴隸制だ。‥‥

その上に、前資本主義的社會形態の負擔が加はつてゐる。印度の封建君主、支那の軍閥と土豪劣紳！ 前資本主義的農業制度は、帝國主義の侵入の結果として崩壞する。古い封建的搾取の上へ新らしい資本主義的搾取が加はる。この二重搾取の結果、農民の收穫の中から彼の手に殘るものは、彼の最小限の生產手段を更新し、水利經營を整頓し、失はれた土地の豐度を回復するのに足りない。舊來の單純再生產の代りに現はれるものは、縮小再生產、農業の頽廢慢性的饑餓及び周期的饑饉‥‥」(ヴァルガ『世界經濟年報』(9)「九二―九三頁)

第三型態の特徵は以上の引用によつて極めて明瞭であるからこれに蛇足を加へることはしない。

以上充分に意を盡さないが、世界的農業恐慌に於ける三個の型態の特徵は大體之れを明かにし得たかと思ふ。筆者は先きに此の三個の型態に共通する一點の存することを述べたが、それはこの何れもが最早資本の支配下にその解決對策を見出し得ないと云ふ一點である。

――一九三〇・一一・七――

ブルジョアジーの平和の爲めに

——蠟山政道氏の思想問題對策——

向坂逸郎

蠟山政道氏は『改造』十一月號に、『マキアヴェリズムとレーニニズム』——思想問題對策に就いて——なる一文を公にされた。吾々はこれを讀んで見やう。先づ蠟山氏は、はつきりこう言はれる、今や、『一切の思想が問題なのではない。或る特定の思想のみが問題であるといふことになつた。又その思想の解説とか講義とかゞ問題なのではない。その思想をどうかしなければならぬといふ問題なのである。曾つての如く、興味ある者だけが知つて居ればよいと云ふ丈けでなく、教育そのものに關與する限り、制度の問題として考究しなければならなくなつた』と。つまり、『思想問題對策』の對象になるところの思想は、思想一般ではなくして、マルクシズム又はレーニニズムと名づけられるところの特殊なる思想であつて、而もこの思想の何たるかを知ることでなくして、これに對抗する自己の思想を作り出すと同時に、かゝる思想を原理として背後に有するところの制度を作り出さうとするにあると言はれてゐる。

そして氏によると、『我國の思想問題が、かくの如き教育制度の改革指針の樹立にまで發展され、促進されて來たことは、甚だ注目に値する、それは、確かにマルクシズムやレーニニズムの直接に豫期しなかつた效果であると言はねばならぬ』と。果してかゝる結果をマルクシズムは豫期しなかつたかどうかを爭ふ事は、左程重要な問題ではないが、吾々の見解によるとマルクシズムは、はつきりと、その運動がかゝる支配階級及びその代辯者の間に於ける變化を齎らすであらう事を豫期してゐた。自己の存立の危機を感知したブルジョアジーは、その支配する一切のもの、一切の思想、一切の制度をあげて、マルクシズムの征討に立向ふであらう事を。從つて『教育制度の改革指針』の如き、この點に中心があり、その範圍を出でないであらう事を。更にマルクシズムは、所謂自由主義的教授達の多くの部分が、從つて又蠟山教授に至るまで、如何なる名を以つてするかは別問題として、一定の時期に於て、マルクシズム討伐軍のラッパ手位は力めるであらう事に至るまで豫期してゐた。

倫理と政治

蠟山氏に據るとマルクシズムは一種のマキアヴェリズムである。どうしてそうか？

マキアヴェリズムの特異性の一は倫理と政治（又は法律）との峻別にあるそうである。『政治論は當然に二個の問題を含まねばならぬ。卽ち科學である一面と倫理である他面とを含まねばならぬ。しかるに、その一方のみを意識的に取り上げ、他を表面に現はさない所に、この種の思想の特異性が存する。なぜなら、その思想家個人は價値の問題を意識しないのではない。彼自身個人的には倫理と道徳とを無視してゐない。たゞ政治の現實と倫理とを同列に置かない、別々のものとして見る。從つて多くの場合政治は倫理道徳の拘束を無視して差支へないと云ふ立場に立つ』、從つて又『マキアヴェリズムは、目的の爲めには手段を擇ばず、目的に比すれば手段の問題は倫理的批評の外に立つ、といふ主張である……。この政治的目的の爲めに用ゐられる手段は、倫理的評價の外に立つもので、その手段の評價は、一に政治目的の實現に對する效果からのみ批判されてゐる。その際倫理的批判は政治に對して何等獨立の立場を有しない、極めて第二次的なものと見做されてゐる』（蠟山氏）。

レーニニズム（私はこゝでレーニニズムと云ひ、マルクシズムと云ひ共に同一の意味を有する言葉として用ひる）も亦、一種のかゝるマキアヴェリズムであると蠟山氏は云はれる。更に氏は『恐らく諸國のエピゴーネンの金科玉條とする』であらうところのレーニンやデボーリンの政治的革命と文化とに關する一文を引用せられて、『要旨は政治的手段によつて一般の文化的水準を擧げる事の主張である。その主張の反面には、一般の文化的水準が或る特定の具體的場合に、政治的手段によらなければ上昇せしめ得ないものと云ふ認定がある。この認定の正當なる限りに於いて、政治が獨特の過程に於いて、現存の法律、倫理、道徳の如きもの〻拘束を無視し得る、といふ解釋が橫つてゐる』（蠟山氏）。

蠟山氏はこの最後の一文でよくも『現存の（傍點は向坂）法律、倫理、道徳……』と云はれた。この言葉を記憶において話をすゝめやう。

蠟山氏は、政治が倫理を無視するといふ言葉と政治が現存の倫理、道徳を無視するといふ言葉とを自由に混用される。一切の政治が一切の倫理を無視するものではなくとも、或る政治は或る倫理を無視し得る。直截に云ふならば、プロレタリアートの政治は彼れ自身の倫理と一致し、これに從ふが、ブルジョアジーの倫理を無視する。たゞに倫理ばかりではない、政治といはず、一切のブルジョア的なるもの〻××を企圖する。

そこで所謂『現存の倫理』とは何か？　現代の社會に於て、その政治的機構は無論の事、一切の社會諸制度を支配するものはブルジョアジーである。この支配階級は、その階級的地位の上で思考し、行動する。だからこの思考と行動とは、かゝる階級として、その地位を失はないといふ點にその限度を有してゐる。だから、この階級の倫理も亦この限度内に於てのみ倫理なのである。この限度を出づ可き行動と思考は非倫理的であり、不道徳である。そして『現存の倫理、道徳』は、支配階級のそれでなければならぬ。理由は？　至極簡單である、支配階級は支配せる階級であるからである。支配せる階級が、自階級の限度を越えたる行動と思考とを許すならば、それは自己の危險を意味する。

無産者階級は、現存の支配階級が支配階級であるためには無産者で

なければならぬ。支配階級は無産者の勞働の××の上に於てのみ存立し得る。それが不可能になる事は、支配階級として存在し得ない事でなければならぬ。かゝる××が可能であるためには、被支配者が無産者でなければならぬ。つまり無産者階級が無産者である事は、ブルジョアジーが支配階級であるために××に缺く可からざる要件でなければならぬ。逆に又無産者階級にとりては、かゝる搾取と抑壓とを××××て、支配階級の××を××する事が、無産者階級を自由にし、解放することに外ならない。無産者階級は、そのかゝる階級的地位から、彼等自身の倫理道徳を作り出す。彼等に於ては彼等をしてその無産者としての地位からの××に導く一切の事は倫理的であり、道徳的である。無論、彼等の道徳は現存の支配的の道徳ではない。それは彼等の階級自身が被支配的であるからである。

そこで吾々は知る、ブルジョアジーの支配的現在道徳、倫理とプロレタリアートのそれとは正反對である。プロレタリアートに道徳的であるものは、必ずしもブルジョアジーにとりて道徳的ではない。理窟をぬきにして事實を見たゞけでもこんな事は明白だ。ブルジョアジーの存立を危くする一切の行動は、プロレタリアートにとりて如何に道徳的であつても、ブルジョアジーの政治はこれを××する。ストライキはかくて××される。ブルジョアジーの存立を危險にする一切の思考と行動とは現代の大學では許されてゐない。『自由主義的』教授達が如何に强辯しやうとも、幾多のマルクシスト教授達が、『自由主義的』教授達の賛成の下に追はれた事實はどうにもならない。彼等に非倫理的であつた。

マルクシズムは倫理や道徳についてこう考へてゐる。だから無産者階級の政治は、決してその階級の倫理を無視しない。丁度ブルジョアジーに於て、その現存支配的政治が現存支配的倫理、道徳を無視しない樣に。かくてレーニニズムは、決して『政治は倫理、道徳の約束を無視して差支へないと云ふ立場』には立たない。彼等にとりては眞實に無産者階級的な政治活動は、眞實に無産者階級的に倫理的である。彼等の政治が無視するのは、たゞ彼等の被搾取的、被支配的なる地位を永遠化そうとするところのブルジョア的な倫理、道徳であるのだ。だからマキアヴェリズムはいざ知らず、レーニニズムに於ては、政治と道徳との相反は理論的に存し得ない。蠟山氏が極度に非難されるらしいところのレーニニズムの道徳無視は、畢竟蠟山氏の擁護される道徳が何であるかによりて解決される。即ち、蠟山氏が兎の如く飛躍せる論理ではあるが、七むづかしい理窟を以つて支持されるところの階級が何であるかゞ、決定的である。

『マキアヴェリズムは、目的のためには手段を擇ばず、目的に比すれば手段の問題は倫理的批評の外に立つと云ふ主張である』。マキアヴェリズムの一形態であるところのレーニニズムも亦然りといふにあるらしい。吾々は先に論じた事によりてこの問題も亦解決されてゐると信ずる。この言葉は極めて俗學的な云ひ表はし方であつて、事のすぢみちを甚だしく蔽ふてゐる。レーニニズムは目的のために最もよく手段を擇ぶ。目的自身が倫理的に正しいものであるならば、これを遂行する手段も亦、それが最も合目的的である限り、倫理的に正當でなければならないこの

兩者の間に相反があり得る筈はない。若し手段が非倫理的であれば、それは目的を達成するに最も合目的的ではなかつたのである。『目的に比すれば手段の問題は倫理的批判の外に立つ』といふ場合、この『批判者』は異つた階級の立場に立つてゐるのだ。

一階級が人類解放の目的を達成せんとする事は、この階級自身の倫理的なものである。この際、倫理的、道德的なる目的を目指すに當り、必然的にこれを實現するに最も合目的的である手段をとる事が含まれてゐる。何者、實現されない目的といふが如きは、この階級にとりて何ものをも意味しないからである。かくて目的が倫理的であるならば、これに據る事によりてのみ實現され得る手段も必然的に倫理的でなければならぬ。假りに蠟山氏が、人類の解放は倫理的であるが、これは支配階級に對する闘爭によりて實現す可きではなく(何者、闘爭は非倫理的であるから)、平和なる說得による可く、又これによりてのみ倫理的であり得るとされるとすれば、氏は被支配階級に對して永遠に被支配階級であれと說かれる事を意味するものである(後說參照)。かゝる手段の說教によりて、支配階級の平和を亂さないといふ意味に於て、支配階級から見て倫理的であるにすぎない。氏はこの場合支配階級の立場に立たれる。これを眞實に實現せんとする階級、又事實その力によりてのみ實現し得る階級にとりて少しも倫理的ではない。支配階級の平和を維持する如き、この階級にとりて倫理的に一文の價値もない。目的が倫理的であるかないか、手段が倫理的であるかないか、といふ問題を切離して論ずる事は出來ない。目的が倫理的なのは實現される手段を有つてゐるからである。目的が倫理的であるといふ中には、よりて以つて實現す可き手段が當然に倫理的である事を含むでゐる。

アドヴェンチュアの理論的基礎

マキアヴェリズムに於ける特異性は、又一種の運命的歷史觀にある。そうして注意す可き事は、『この運命論が反つて個人の意識的役割を重要視することになつた理論的連關である』そうである。だが、氏の論文中この節ほどに難解なるものはない。いくら『注意』して讀んでも運命的歷史觀と個人の意識的役割の重視との理論的連關は明かとならない。況や、かゝるマキアヴェリズムの歷史觀とマルクシズムのそれとの共通點に至つておや。これらの事は、しかしながら、大した問題ではない。マキアヴェリが何を說いてゐやうと今直接の問題ではない。たゞマルクシズムが如何に、『アドヴェンチュアへの好尙の理論的基礎』を與へるものであるかを蠟山氏は如何にして立證されるか?

氏は、『發展については二つの概念がある、とレーニンは言つてゐる。その一つの進化概念は發展を增加及び減少として觀察する。この概念は生命のない、死んだ、乾からびたものである。第二の概念は、發展の基礎を對立物の統一と、統一の分裂とに見る。この概念のみがすべてこの存在の自己運動を理解する鍵である』といふ言葉を引かれて、すぐ、『これは、正に大膽なるアドヴェンチュアへの好尙の理論的基礎を與ふるものでなくしてなんであらう』と叫ばれる。だが、吾々には發展を對立物の統一、統一の分裂と見る事から、『すべてその存在の自己運動を理解する鍵』であるといふ事は判つても、それ以外の意味を引出す事は出

來ない。かゝる『理解』が、××家の現實理解の鍵となり、科學者の自然理解の、又社會理解への鍵となる論理的必然性を看取する事は出來る。又現に多くの科學者達が、かゝる理論的基礎の上に、自然と社會の理解へ進んでゐることも判る。だが、何故に、アドヴェンチュアへの好箇の理論的基礎を與ふるものであるかを知らない。鐵山氏も亦かゝる必然性をどこでも立證されて居ない。

平和主義

鐵山氏は平和主義者として現はれる。吾々は今この平和主義者のやさしい面貌の裏に何がかくされてゐるかを見やう。

氏は先づ、『一般に世相風俗が變兆を示し、善惡の評價が衰へ、人々は道義の念を重んぜざるやうになる時は、理論が闘爭形態をとる樣になる。これは甚だ見易い事理である(少しも見易い事理でない――向坂)』と歎げかれ、次いでレーニニズムの『流行』以來、我國に現はれた、ブルジョア機構、制度、人物の暴露文書やブルジョア科學、社會民主々義者に對する闘爭文書の效果は、眞理を闡明した點になくして、純心なる青年や虐げられたる勞働者等々の正義心を一時的に昂奮せしめた丈けで、結局は『その最初の不平、苦惱を除去し、匡正すべき努力に於いて、彼等の攻擊し、非難したと同一の不正義を犯して敢て關せざるに至る』。氏はマクドナルドと共に、社會主義を民衆に宣傳するに當り、憎惡と敵愾心を喚起することの非を教へられる。

氏は云ふ、『マルクシズムとレーニニズムの眞理は或程度迄(或程度迄である――向坂)今日の社會に於ては共有財産である。而かもその「眞理性」は右の如き條件の下に把握され、又されねばならぬものとするならば、そはあく迄マルクシズム又はレーニニズムが他と區別さる可き特異性である。……我々が斷乎として反對せねばならぬのは、必ずしもその眞理性に存しない。寧ろ、その多くは斯の如き特異性を伴つた『眞理性』たる點に存する』。ブルジョアジーはプロレタリアートを××することに依りてのみ、從つてプロレタリアートを永遠に窮乏と苦惱の下に置くことによりてのみ、自己の××を主張し得ると云ふことは、我々の先に述べた所である。從つて、かゝる社會の構成を赤裸々に述べること、又その××を主張することは、彼等自身の存立をあやふくすることに他ならない。從つて、かゝる事柄に對しては、××が加へられると共に、一切のブルジョア的機關が××されるに相違ない又現にそうされてゐる。此の時に當つて、ブルジョア機構、制度、及び人物に對する眞實を述べることは、即ち眞理を述べることは、闘爭的の形態を必然的に取らざるを得ない。此の際闘爭的形態をさけることは、××を闡明することを中止することである。從つて、たとひ、『マルクシズムとレーニニズムの眞理は或程度迄今日の社會に於ては共有財産である』と云ふことを口に唱ふるも、かゝる眞理を闡明する形態に『斷乎として反對』することは、眞理その物に反對することと何等異ならない。それは眞理を被ふことである。それは永久に眞理を『大衆のもの』としたいことである。即ち、それは大衆をして現在社會秩序の彼等自身の爲にする××を不可能にすることである。かくて鐵山氏は常にブルジョアジーの側に立つてその支配を支持せられる。

かくの如くして、理論鬪爭が『眞理を把握せざる又は把握せざる親しき人々を苦惱せしめ』ることを恐れられるやさしい感傷家、蠟山氏は、プロレタリアート及びその他の被壓迫民衆の饑餓、貧困、苦惱を××化し、人間に依る人間の支配、大衆の奴隷制の××の爲に力を致される。眞理を理解するを欲せざる親しき人々の苦惱をさける爲に、無數の大衆の饑餓を顧みられない。これ即ち、マクドナルド及びその『エピゴーネン』の平和主義の正體である。それはプロレタリアートの血と汗に依りて購はれたるブルジョアジーの平和主義である。

氏のかゝる平和主義を最も良く現はすものは氏の次の言葉である。『されば社會主義の實現の機會として、資本主義の行きつまりを説き、帝國主義戰爭による崩壞を説くはよい。而かもそれをその×××遂行の機會の到來と關聯せしめて説く所にマキアヴェリズムが存する。社會主義が資本主義にとつて代る可きより高き道德的意義あることを人々に納得せしむることに依らずして、敵の「危機」を見てその「崩壞」をねらつて之を倒さんとする手段は、明らかにその目的の何たるかを傷つけるものである。かくの如き哲學と戰術とに依らずして社會主義の實現が早晩可能となることを將來の歷史家は語るであらう』。――現在の『歷史家』は語らない、語り得ない!

敵の危機を見て之を倒すことを欲せざる氏の武士道的精神を嘆美せよ! 氏は現代社會の階級的機構を忘れられる。此處に於ては支配階級が強くなると云ふことは當然に被支配階級が弱くなることを意味する。ブルジョアジーは、プロレタリアートの抑壓と搾取に於てのみ存立し得ることは既に説いた。從つて、ブルジョアジーが強くなることはこの社會制度そのものの確立を意味する『危機』とは資本主義內部の矛盾の爲に支配階級がその××力を失ひかけることである。プロレタリアートにとりてはかゝる『危機』以外に於て階級支配を××すべき機會は存しない。高義なる氏の武士道的精神は、かゝるプロレタリアートの唯一の解放手段を拒否して、道德的說法を支配階級に與ふることを勸める。ブルジョアはソファーに、この心地良き道德的說法を聞きながら居眠りするであらう。其處に平和がある。プロレタリアは空き腹をかゝへて『將來の歷史家の語る』ところを待たなければならない。

更に氏は『マキアヴェエリズムの弱點を示した最も有力なる事實は、英國に於ける近世のデモクラシーが、小さき人類の集團に於ける自由なる言論討議の形態より發したことである。各人の意志の表現とその承認とを基礎とした宗教的社會の自治の形式がやがて議會制度として國家統治の形式となつたことである』。と述べて社會主義社會の平和的實現の可能なることを暗示される樣である。政治學者、蠟山教授は此處に於ては近世政治史を忘れられた? 近世デモクラシーが英國に於てのみならず、フランスに於ても、ドイツに於ても到る所に於て、如何に強力なる封建制度に對する鬪爭を通じて、又如何に巨大なる犧牲を拂つて實現せられたかを西洋史敎科書は敎へる。社會制度の××は常に××を通じて行はれた。蠟山教授の欲せられると否とに拘らず。

蠟山氏は云ふ、『それ(レーニニズム)が總ての大衆にとつての利益と厚生への道でない事は、この一文の趣旨の力強く主張せんとするところである』と。然り、確かに『力強く主張』はされた。だが、何處にも立證はされなかつた。

河上博士の戰鬪的解體論を駁擊す

稻村隆一

(一) 無定見なる指導者

日本に於ける輝けるマルクス主義者、河上肇博士は、昨年、大山、細迫、上村氏によつて提唱されたる、新勞農黨の結成當時より紳士的社會主義者小岩井淨氏等と共に、最も有力なる勞農黨の計畫者指導者であつた。

當時博士は合法黨の必要を、レーニンの「左翼小兒病」を抽象的に引用することにより勞農黨の立場を辯護した。博士は今又「有害物としての勞農政黨」なるリーフレットの中にレーニンの「何をなすべきか」を引用しつゝ勞農黨存續論者の意見を駁論してゐる。この輝ける法學博士河上肇氏は「眞理は具體的なり」などと唱へ乍ら、常に事象を、觀念的抽象的、公式的にのみ取扱つてゐる。而して事物を毫も、客觀的、具體的に取り扱つてゐない。博士の勞農黨結黨當時の「左翼小兒病」なるパンフレットを見るも、又去る十月二十一日の「勞働農民新聞」の「勞農黨の發展的解消のために殘された唯一の途としての戰鬪的解體」なる上村、神道兩氏との連名の論文を見るも、それは皆只抽象的に、レーニンを振りまわし、コミンタン及びプロフインタンの文書なるものを引つぱりだして、勞農政黨の問題を漫然と論じてるにすぎない。博士等は、毫も日本の政治經濟の客觀的具體的分析の上に、又日本の現在のプロレタリアート運動の主觀的條件の考慮の下に勞農政黨の問題を取り扱つてゐない。かくの如く、實踐より遊離した御說敎が我々勞働者、農民、實際運動家にとつて一體何の權威があるのか？

豫算編成の樂屋うら

永川俊美

一

政友會が積極政策を濫發した時代にあんな亂暴なやり口で豫算が組めるだらうかと心配するものがあると、紅木屋公爵は事もなげに「あゝ組めるとも、豫算なんてどうせ歳入いくら歳出いくらとつぢつまを合せるだけのものさ。豫算が組めぬなどといふことがあるものか」と片づけ『たゞよいのが出來るか出來ぬかは別問題だよ』とつけ加へた。ムツツリ屋の公爵だけにそしてまた御本人も一度は大藏大臣をやつたことがある公爵だけにこの評言は微苦笑を禁ぜられなかつた。

わが井上藏相ものたうち廻つて漸く六年度豫算をでつち上げた。金が無くて首がまはらぬところに屋臺だけはもと〳〵通りに張つて置かうといふのだから無理算段も當然のことである。これは井上藏相の責任といはんより

博士等は「正直のところ昨年結黨當時に於ける吾々は、一九二八年コミンテルン政治部書記局の名をもつて、勞農黨再建のためあらゆる努力をなすべしとの意見の出てゐるのに重きを置き、その後間もなく勞農政黨一般を否認するコミンテルンの見解が確立されたことを承知せずにゐた。」それがために勞農黨結成に參加したなど、空とぼけた自己辯護をやつてゐるが、しかし勞農黨が結成されるや、「プラウダ誌」が直ちに勞農黨反對の意見を發表したことは周知の事實であり、それは我々の反對派「第二無産者新聞」及び無産青年によつて飜譯された事は誰でも知つてゐることだ。(こんな事すら知らないものが何んで理論的指導者たり得るか)。

だが當時勞農黨の結成に贊成したる大衆は勞農黨の再建が日本の運動の現狀に於いて、絕對に必要であることの確信の下にその結成のためにあらゆる反對派の惡罵中傷と戰ひつゝ勞農黨確立のために努力し來たのだ。然るに結黨後一年も經ない中に先づ細迫、小岩井の諸君によつて、突如勞農黨解消論が捲起され、而してこの解消論に反對し、所謂「サナギが蝶々」に發達するための「發展的解消論」を主張し細迫氏等の解消論を批難した河上博士等が又もや一ケ月も經ない中に今度は戰鬪的解消論を唱へ出したことは、如何に河上博士その人が、動搖常なき、無定見なる小ブルジョア的理論的指導者であるかを證明するものであつて、博士の如き指導者に指導さるゝ大衆は實に禍なるかなである。

(二)俗惡なる合法的マルクス主義者

そして勞農黨を解黨したならば、我々は何處へ行くか?

それに對して河上博士は「勞農政黨の保護の下に存在する樣な組合は結局無意味であり(註、即ち博士によれば、合法政黨の指導者の指導にあるものは鬪爭的な全國勞働組合同盟でも我が全農新潟縣聯の如き戰鬪的な組合も無意味なものである)勞働組合も農民組合も、勞働者、農民の窮極的解放のために眞實の戰ひを戰ひ得る唯一の階級黨の指導の下にたつべきものであることを、我々自身が充分に理解し、それに居いて今後の方針が定めることが必要であらう。云々」と、即ち解黨後は勞

濱口首相の答辯の問題だが、假りに海軍豫算が三分の二に減らすことが出來て居つたならばどうであつたらう。今度の豫算編成にも外務省や司法省といふやうな無けなしの豫算を削らなくても濟んだであらう。また補充計畫を含む海軍豫算に大斧鉞を加へることが出來たならば少しは氣の利いた減稅もやれたであらうし、又時節柄の社會政策も行へたではあるまいか。一般豫算十六億のうち八億の義務費を抱へてこの方には一切手をつけやうと努力もせず(もつとも義務費からはスグには金は浮いて來ぬが)況んや行財政の整理や稅制整理は棚の上へあげて歲入減々々々を觸れまはるのだからなまけ者の紅鳴と聞く外はない

二

井上藏相は五年度の實行豫算を實施するに當つて一千萬圓足らずの赤字が出たので『行政の經濟化』で胡寬化した苦い經驗を持つて居るところから、六年度歲入豫算の編成には從來の型を破つて前年度の實收に重きを置いた。それでも各省の要求が強くて大藏省の査定が鈍つたので、再三關係に歲入の見積り換へをやらせはてはドイツ賠償金の減債基金繰

農黨の大衆を現在の×××に行くべしと說教し、而して×××に行けないものはインターナショナルの六月號のウオイッキェイッツの一文を引用することによつて無害な合法黨團體たる、救援會、啓蒙的敎育團體、スポーツ團體、消費組合の仕事に行けといふのだ。成る程有難い御說敎だ！（博士は僕は×××には行けないが、しかし、勞農政黨は絕對にいかぬから勞農黨をやめると最近の勞農黨の會合で云はれたが）博士の言葉を簡單に要約すれば「俺は×××には行けない、しかし君達は今の××黨に行け、俺は救援會か、啓蒙的敎育團體か、スポーツ團體かの、危險でない仕事に携らう」と云ふ蟲のよいことを云ふのだ。

しかし世の中はそんなにうまく行くものではない。日本の如き反動的政治のひどい所は××黨の力をくみ取る合法團體に於ける活動は牢獄と迫害なしには行けない。河上博士がブルジョアジーの利益のための改良主義的日常鬪爭しか出來ないと侮蔑する、勞農黨指導の大蒲原の爭議すら四十一名の入獄者を出してゐる。その他大衆黨指導の王番田の爭議最近の秋田の爭議その他合法政黨指導の爭議に於いて、反對派からダラ幹などゝ云はれてゐる連中迄が頻々として投獄されてるではないか！

かゝる反動的狀勢の下に於て、合法政黨指導の爭議すら指導し能はざる河上博士等の紳士的マルクス主義者の謎が働くところの階級的な合法團體が一體何處にあるのだ。結局河上博士は「君達は×××に行くべきだ。但し俺は行かない」とタワ言を云つてるにすぎない。

要するに河上博士は「マルクス主義者でありたい。しかし危險な道は步きたくない」と云ふ最も俗惡なるマルクス主義者であり、最新のカウツキー主義者である。

かくの如きは河上博士だけではない。小岩井君をはじめとして解消論の先驅者たる勞農黨のインテリ指導者共に共通するものである。彼等は大衆の前衞となり鬪爭の先頭に立つて、その鬪爭の過程から左翼的勢力の軍隊的結成をなすの勇氣なく、大言壯語と左翼的空論によつて、マルクス主義者たる稱贊を保たんとする笑ふべき紳士諸君である。だから最近の非合法新聞などから、「小岩井等は大衆の間に勞農黨解消論が起

入れ中止や煙草追納金の繰入れをやつて辛じて豫算の辻褄を合せることが出來た。地租の如きは賃貸價格に改めて課税するのであるから、田畑が宅地になつた部分の多い今日では多少國庫の增收になり得るであらうが、其の外にどの稅目に、增收を見積り得るであらうか。資本利子稅や相續稅や兌換券發行稅やトン稅乃至專賣益金等に多分の望みをかけて居たならば算盤が外れはせぬか。相續稅の如きにしても、社會政策的見地から大富豪に高率の累進課稅でも斷行し得れば格別、金滿家の機嫌を損ずることを恐れる政府では、勢ひ中流以下の細かいそして件數の多いところをホジクリまはす位が落ちにならう。

不景氣時代に所得稅が減り營業收益稅が減り、多くの官業收入が減るであらうことは見易いことで、しかもその減收が政府の見積り以上になるとそれこそ苛斂誅求だ。犬養政友會總裁は豫言者のやうな顏をしてこのことを力論して居るが、犬養總裁を待たずとも近年の誅求振りを見るとこの豫言は十中九分九厘まで適中する。

無産大衆からは間接稅の外に直接取り立つる稅もなく、また富豪階級には一指も手を染

ろや逸早くも〇〇×××のスローガンを全農第一主義全協への勞働組合の統一の新らしき看板に乘りかへて、××的勢力の統一を妨害し、大衆を欺瞞せんとするものだ」などと嘲笑されるのだ。

しかもこの戰鬪的解消論者、博學なるマルクス主義者の御歴々は（河上、小岩井、共に）、彼等は眞正なる革命家でありマルクス主義者であるが故に、一切の勞農政黨の解消を天下に呼號し、昨日迄の同志を罵倒するの無恥を敢えてし乍ら、その大言壯語に似ず、卑怯にも「僕は全協や×××には行けない。その同情者として行き度い」などと、一度勞農黨が困難と孤立に陥るや昨日の同志を平氣で捨てゝ解消論を唱へ左翼顔をなし、今度は合法政黨を解消したら共產黨として官憲に、にらまれないであらうかとの心配から「自分は共產黨に行けない」と、いらざる豫防線を張るが如きは、實に笑止千萬と云はなければならぬ。博士等はブルジョアの利益のための改良主義的日常闘爭がどうのと猪口才なことを云ふが、ブルジョアジーに取つて、最も恐るべきものは眞に大衆的組織に於いてブルジョアジーと戰ふものである。だからブルジョアジーは合法政黨の指導者でも、日常闘爭に於いて眞に闘ふものに對して假借なき彈壓をなする。だが河上博士その他今迄の勞農黨の一部インテリ指導者の連中の如く如何に革命的言辭を弄するも、行動せざるものはブルジョアジーにとつて無害有益であるが故に（行動せざるウルトラの革命的言辭は日常闘爭に於いて支配階級のために有効に逆用されつゝあるのを我々は常に經驗してゐる）ブルジョアジーは決して彈圧しないのである。

(三)大衆の自然成長性と×××の目的意識性

次に最も滑稽なるは「勞農政黨の指導する日常闘爭は勞働者農民の積極的解放のためにすべき妨害物である。」との博士の迷論卓說であるが、こんな馬鹿げたことが、實践的に一體何處にあるのだ。即ち河上博士の言說を最も單的に說明するならば、社民黨や、大衆黨や、勞農黨指導の下にある組合は、絶對に日常闘爭をやらぬ方がよい。王番田や大蒲原や東洋モスの爭議をやらぬ方がよい。何故なればそれは積極的解放のための妨害物となるか

め切らぬのであるから、絞りあげられるのは比較的實收の少いそしてその割に世間體を憚る稼働着實な中產階級といふことになる。減税と言つても、この階級が均てんする部分は極めて尠く、帳面づらで取り立てばかりが嚴重になるから物價下落の折柄或る意味では增税にさへなる。

三

六年度の豫算編成に尨大なる陸軍豫算に對しては申譯の査定を加へただけで組閣の聲明を裏切つたことの不都合は前にも言つたが、それよりも驚ろいたのは海軍に對して押しがきかなかつたことである。軍縮をやつた減税をやると鳴物入りの宣傳であつたが、蓋を明けて見ると何の軍縮何の減税ぞと言ひ度くなる。五億あまりの軍縮剩餘金——留保財源——があるなら之を二つに分けて三億が減税二億が補充費といふのが國民の聲である。海軍も海軍で流石に第一案とやらは氣がひけたものか固執しなかつたが第二案といふに四億といふ巨額の數字をつけ出した。正確にいふと三億九千九百七十萬圓とあり、四億に三十萬圓を引つ込ませて居たそうだが、之は正札に

らであるといふのだ。だが實踐はかくの如き馬鹿げた理論をどうして承認出來るか。我々は抽象論は投きにして、實際問題からかゝる愚論を吟味して行かう。

先づ第一に河上博士の駁論の對照となつてゐる山田茂男氏の勞農黨作績論の（小リーフレット）最初の文句「現實の具體的闘爭を、これは改良主義的だ、あれは革命的だといふやうに明確に區別することが出來ない。大衆闘爭はいつでも大低、現實當面の、初歩的、自然發生的、部分的要求から出發する。賃銀値下げ反對、小作料減免電燈料値下、家賃値下等々の日常卑近の經濟主義的要求から發生する。

従つて大衆闘爭は、その出發段階に於いて一應は改良主義的日常闘爭であると言ひ得る。それは改良主義的範圍に止まる場合は改良主義的闘爭であり、これ以上に高度になる（目的意識を注入される、換言すれば、究極的解放の意識を注入される）場合には××的闘爭と言ひ得る。」

以上の山田氏の言は全く正當である。マルクス主義者の結成と成長はレーニンが左翼小兒病の中に反覆して言つてるが如く、徒らに左翼的言辭を弄することでなく——況んや河上氏の如く公式を振りまわすことではなく——大衆闘爭を激發し、その過程よりマルクス的核心を結成することによる闘爭こそ初めて××的階級闘爭たり得るのである。だからレーニンは「何をなすべきか」の「大衆の自然成長性と目的意識性」の中に、マルクシストは大衆の自然成長性を捉へて闘爭を激發し、その過程からマルクス的な目的意識を大衆に與へることによつて、初めてプロレタリアートは究極的解放——即ち政權の獲得をなし得るものであることの意味を述べてゐるのである。だから山田氏が「大衆闘爭は、その出發點に於いて一應は改良主義的闘爭であると言ひ得る……しかしそれにマルクス的な目的意識を注入する場合には××的闘爭に發展轉化し得る」との意味を述べたのは至當である。然るに河上博士は山田氏の所論に對し、見當違ひの解釋をなし、山田氏は大衆の自然成長性の前に屈伏する所の經濟主義者であり、經濟的な日常闘爭でも自然に××的闘爭に發展轉化すると稱する日和見主義であるが如く曲論

二十圓とつけるといかにも高いやうに見えるから十九圓九十九錢として十九圓臺に顧客の眼を奪はんとした作成とも見える。軍縮條約に三大原則の主張が容れられなかつたといふので（一）航空隊の擴張や（二）制限外艦艇の補充や（三）代艦の建造や（四）主力艦の改裝その他に約四億の金が要るといふのであるが、專門家の專門的議論は兎も角として、潜水艦が減つたから飛行機を増すといふのではどこに軍縮の精神があるか。主力艦も製艦休息をやらう。主力艦の制限ばかりでは不充分であるから補助艦も減そうといふのがロンドン會議の目的ではなかつたか、谷口軍令部長や安保海相のやり口は先年陸軍整理に師團を減少して其の代り新兵器に金を使つたのと同じ手である。あんな案ならわざ〱加藤軍令部長が辭めたりまた財部海相が辭めたりしなくてもよかつたらうにと思はれる。

四

しかし一方翻つて考へると專門家が專門的立場から國防の安不安を唱へるのは恕すべしとして、濱口首相や井上藏相外各閣僚は何故減稅に力瘤を入れなかつたか。井上君は恐ら

してゐるかゝることは、如何に博士がレーニンの言葉を知るも、しかもこの偉大なる革命家の敎示を實踐を通じて眞に理解することが出來ないかを證明するものである。河上博士こそ日常鬪爭との交互關係に於いて左翼的勢力の浸透結成を見る能はざる空論家である。で我々はこの日常鬪爭の意義を今一度充分に究明し理解する必要がある。

（四）經濟主義とは何か

以上の日常鬪爭の問題を具體的に說明する便宜のために、河上氏が引用されてゐるレーニンの「何を爲すべきか」の一文を今一度引用するであらう。

『勞働運動の自然成長へのあらゆる屈伏、目的意識的要素の役割——××黨の役割——のあらゆる過小評價は、そのこと自身が既に——彼等が欲すると否とに關らず——勞働者に對するブルジョア・イデオロギーの影響を强めることを意味するといふ事實を證明してゐる。イデオロギーの過重評價を非難し、目的意識的要素の役割の誇張を非難する者は、すべて、勞働者がたゞ彼等の指導者から彼等の運命を彼等自身の手中にさへ握りさへすれば純勞働者運動が獨りでに獨立したイデオロギーを作り上げることが出來ると思つてゐるのは根本的の誤謬だ。』

『勞働大衆が、運動の過程に於いて、ひとりで獨立したイデオロギーを作り上げる能力がないとすれば……××主義イデオロギーのあらゆる過小評價……はそのこと自身がブルジョア・イデオロギーを强めることになる。……それ故にこそ××主義者の任務は自然成長性と戰ふことに存し、ブルジョアジーの翼の下に隱家を求めんとするトレード、ユニオニズムの自然成長的願望から、勞働運動を轉換せしめることに存しまた勞働運動をば××的××黨の翼の下に引き込むことに存するのである』

以上のレーニンの言葉は經濟主義者に對する徹底的な批判であるが、引用文の最初の文句「勞働者運動の自然成長性への屈伏」とは何を意味するか。それは實際的に卑近な例で說明するならば、或指導者が、一圓五十錢の賃銀を二圓にすることを欲する勞働者の要求

〳〵減稅には一億五千萬圓ばかり當てたい考へだと言つた。無論三一年から三六年まで六ヶ年間の總計だ。海軍の鼻息が强くなつて減稅額を一億三千餘萬圓に追ひつめるやうになつたのは無理もない。本稿を書くまでには減稅の內容も判明しなかつたが、傳へられるところによると（一）地租（二）營業稅（三）織物消費稅（四）砂糖稅等を引下げやうといふことである。何れも戰爭によつて新設されまた增稅されて來たもので、戰爭から平和に引き戾さうといふ時代に國庫から國民の手に稅金を還元することは極めて自然の理で結構なことである。これ等の稅目について減稅が行はるれば、それだけ負擔輕減になることはいふまでもないが、併しよく考へて見ると、地租を納めて居る者は農民中でも中以上ではないか。營業稅を納めて居る者もまた商人中の中以上ではないか。地租にも營業稅にも免稅點が設けてあつて、それ等の人々は既に直接稅とは無關係である。また織物消費稅にしても綿織物の方は片づいて今回やらうとして居るのは絹と綿との交ぜ織物である。そんな上等のものを一般無產者が着るであらうか。また砂糖も廣く國民が食ふには食ふが、多年の

或は小作料を三割にしてくれれば、それでよいといふ農民の要求、それ等の勞働者、農民の經濟的要求にのみ、戰つてゐさいすればよいといふ、かくの如き大衆の要求に屈伏し、大衆に對し、マルクス的影響を考へることなしないものを指したのである。だからして日常鬪爭さへやつてゐれば、勞農大衆の經濟的要求のために戰つてゐさへすれば、ひとりでにプロレタリアートの××がやつてくると考へるものは如何に日常鬪爭に於いて、献身的であつても、それは明かに反プロレタリア的である。我々はこの事を常に組合の爭議に於いて經驗する。それは或勞働組合、農民組合に於いて、爭議が比較的順調に、犧牲少なく、要求を貫徹したところは、往々にして却つて右翼的、反動的となるのである。これは如何なる理由であるかと云ふに、その組合の指導者が、組合の青年及先進分子にプロレタリア・イデオロギーを附與しなかつたからである。鬪爭を通じてプロレタリア・イデオロギーを與へざる、勞働組合農民組合は必ずや反動的となるのである。――特に農民組合の場合は少數の貧農及先進青年分子以外はプロレタリア・イデオロギーを與へ組織することすらも困難である。――然し乍らかくの如き勞働者、農民の卑近な要求をとり上げて、戰はなければプロレタリア・イデオロギーを絶對に勞農大衆に與へることが出來ないのである

レーニンが「××××主義者の任務は自然成長性と戰ふことに存し……」云々と云つたのは大衆の自然成長性にプロレタリア・イデオロギーを與へなければ、結局それは大衆にブルジョア・イデオロギー――例へばアメリカのAFCの如く――の影響の下におくものであるから。××的インテリゲンチユア及びプロレタリア先進分子は賃銀の値上げやその他當面の經濟上の要求にのみ滿足してとゞまらんとする大衆の自然成長と戰ひ、之にプロレタリア・イデオロギーを×××べきであることをレーニンは××したのであつて、苟もマルクス主義者と稱する者は、何人もかゝる事を今日まで等しく心がけて來たことであり、知つてゐることである。たゞかくの如きことを今迄知らず、又行はなかつたものは「資本論」の通俗的解説者河上博士とその一黨たる勞農黨のインテリ指導者であつたのであ

習慣もあり世智辛い時節には細民階級にそれほどの需要があるやうには思はれぬ。斯く見て來ると傳へられるやうな減税の種目ではその恩惠にあづかるものは中層又は上層階級で今少し細民階級をうるほすやうな間接税――たとへば酒類、煙草等――の減免が望ましいと思はれる。憲政會内閣時代に交通税や綿織物税や賣藥税等の減免を行つたが一向見榮えがしなかつたから今度は直接税に限るといふのは普選時代に納税資格を思ひ出して居るやうなものではあるまいか。この豫算を通じての最大缺陷は不景氣時代、失業者續出時代に何等社會政策的施設が講ぜられて居ないとである。補充計畫には三億七千餘萬圓も出す政府軍部豫算には陸軍に六百四十萬圓海軍に千三百萬圓の復活要求を認める政府、米價が下落したといつては救濟を講じ、絲價が暴落したといつては救濟資金を融通する政府が、無産大衆に對しては、一厘だも與へやうとせぬ。甚しきに至つては昭和四年四月發布された救護法の如き國庫負擔額僅か年四百萬圓で現在十萬の憐むべき老衰者（六十五以上）、幼者（十四以下）姙産婦、不具癈疾、罹病者、勞務故障を救ひ得るのに、それすら實施しやう

る。而してマルクス・レーニン主義のABCに初めて氣が付いた河上肇博士は「勞農政黨の指導する日常闘爭は悉く窮極目的解放のための妨害物である」と機械的に規定し「勞農黨、社民黨、大衆黨の爭議は悉く官憲に泣き付きその調停によつてなされた。之が果して階級的であるか？　問題は之に對する答辯の如何に決せられるであらう」と大見得を切つてゐる（最近のプロフインテルンの日本勞働運動批判はこの點を批判してゐるのであるが河上博士はプロフインテルの批評をそのまゝ取つて、自己の批評としてゐるのは實に醜慢千萬である。博士の如き俗惡なるマルクス主義が何んでプロフインテルの批評を自己の批評とすることが出來るものか）然し乍ら日本の勞働爭議が時としてかくの如く官憲の調停の下に屈辱的解決をしなければならないのは、必らずしもその悉くが指導者の裏切りによるものではなくして、荒畑寒村氏が、正當に指摘してゐるが如く（最近の論文プロフインテルン日本勞働運動批判參照）實にその組織の不備と勢力の薄弱に歸するものであり、而して我々がかゝの如き敗北的屈辱の下に忍從せざるを得ないストライキの現狀に接するとき、如何にしてか、かゝる屈辱を再びせざらんことを考へると共に勞働組合、農民組合の組織力の擴大、勢力の統一集中のために先づ戰はなければならぬ。「それを知らずして、河上博士等は今日迄獨善主義的左翼理論をふりまわし、無産政治戰線の統一を妨害し、その結果勞働組合運動、農民組合運動の統一をも同じく妨害し、自己の責任を少しも知らず爭議の屈辱的敗北がすべて勞農政黨指導者の罪惡の結果であるが如く批評するは沙汰の限りと言はねばならぬ。

實にストライキの敗北は組合の官僚幹部の指導の罪過のみに非ずして、機械的進出と小兒病政策に依て、左翼勞働組合を破壞し、左翼勢力を分散せしめたる、過れる極左的指導方針の結果である。然るに之等の自己批判の下に立たずに、勞働運動の敗北と屈伏をすべて勞農政黨の指導者に轉嫁し、左翼的言辭によつて大衆を僞瞞せんとする河上博士の如きは到底プロレタリアート運動を指導する能力なきものである。現に日本の左翼勞働組合の勢力が如何に微弱であるかの證據は全協等は爭

とせぬ。僅かに追加豫算として失業公債により道路港灣河川の事業を起さんとして居るやうであるが、安達内相のことであれば、緊縮豫算で削られた土木費を失業救濟の名前で復活し、一面には選擧撒撥の具に供し、他面には失業者救濟の名前を取りつゝ巧に現内閣の公債不公募の看板を塗り代へんとするのではあるまいか。六年度豫算には多少見るべき點もあるが、樂屋裏をのぞいて見ると上に述べたやうに幾多不徹底の點があり、軍閥に氣兼ねし資産家擁護に偏し、無産者階級に冷淡で多分に黨略を含んで居ることが發見される。

（五・一一・九）

議すらなす事が出來ない。彼等が右翼中間派と輕蔑するところの、勞働組合に於てこそ大きなストライキが行はれてゐる。左翼と稱するものの爭議は何一つ出來ず、大衆的鬪爭すら出來ず、何もやれないから官憲の調停どころかその第一步に於いて既に全敗北である。この事實を博士は何んと見るのであるか？

次に博士は勞農政黨指導の爭議は皆官憲の調停による屈辱的敗北であるかの如く云つてゐるが、それは山田英男氏の指摘したるが如く、前田爭議、王番田の爭議をどう見るのか？又我々の指導した、帶織の爭議、大甫原の爭議をどう見るのか？　之等はすべて、勞農政黨指導によつて行はれたが、何時何處に屈辱的敗北があつたか？勿論爭議そのものは完全に勝利ではないかも知れない。しかし乍ら我々の經驗よりすればかくの如き日常鬪爭を通じてのみ、大衆にプロレタリア、イデオロギーを與へることが出來るものである、大衆は鬪爭との交互關係に於いてのみ、それが假令敗北に終るとも、屈辱的妥協に終るとも、勝利の中に終結するも、等しく、經驗によつて、ブルジョアジーのからくりと强壓と、その憎む可きを、そして政權を取るべきを理解することが出來る。大衆は日常鬪爭なきところにプロレタリア・イデオロギーも理解しないし、プロレタリアートの政權××も知らないのである。だからして我々は如何にして日常鬪爭との交互關係に於いて、プロレタリア・イデオロギーを大衆的に××しプロレタリア的××な大衆的に組織するかを考へなければならぬ。その觀點からのみ我々は日本の現狀に於いて、勞働者、農民、無產市民の同盟體の必要を信じ、從つて强力なる日常鬪爭のため各無產政黨の合同を主張する。

(五)右翼社會民主主義か、勞働者農民の同盟か

然し乍らこの無產政黨の合同を右翼社會民主主義への合同と規定し、この合同は大衆を一步右翼へ追ひやるものであると、合法政黨反對派、解消派、勞農黨第一主義的な考え方を持つてる人々は云ふのであるがそれは客觀的に見、又主觀的に見て絕對に過りである。

(一)日本の資本主義それ自身中に於いて、勞働貴族層、農民貴族層を養ふ餘地がない。從つて、協調主義、改良主義の固定的發展の餘地がない。成る程合法政黨の中には社會民

主主義的要素は存在してゐる。しかし乍らそれは合法政黨の合同による闘爭力の激發と鬪爭的組織方針によつて却つて合法政黨内部の社會民主主義的要素は清算される。

(二)次に勞農黨第一主義的な考え方であるが勞農黨のみは、指導理論が社會主義ではない。從つてこの黨のみは組織の改造によつて社會民主主義的方向にすゝまないが、他の政黨は社會民主主義理論によつて、指導されてゐるから、プロレタリア・ヘゲモニーの下にある勞働者農民の同盟體に向つてすゝまない。從つて本質が異るから、合同は不可であると。

然し乍ら勞働者、農民の同盟の確立は、指導理論の確立、××的組織方針の確立と共に、絶對に必要なことは、廣範なる農民大衆を資本家地主の政府との、政治的自由の闘爭に動員することであり、その動員なくしては、現在ブルジョア・ヘゲモニーの下にある(日本は産業組合だけでも全農民の六十三%、その他いろいろで全農民の九割幾分と云ふ農民大衆がブルジョア・ヘゲモニーの下にある)農民大衆を、プロレタリア・ヘゲモニーの下に置くことが出來ない。そのためには當面の任務として、我々は合法政黨を合同せしめ動員力を充實し勞働者、農民の同盟を擴大強化すべきである。

然るに河上博士等の勞農黨指導者は、かゝる合同方針を拒否し遂に無産黨を今日の孤立と混亂に陷れ、勞働組合、農民組合を動搖せしめ、進退兩難に陷るや、突然として、勞農黨の大衆に急角度的轉向を強ひ、解黨論を唱へるに至つた。かくの如き無責任、無能、觀念的なる指導者には、勞農大衆はたゞ呆れるばかりであつて、少數の小ブルインテリを除く外勞農大衆はふり向きもしないであらう。我々は如何なる困難に陷ると雖もかくの如き無責任なる解黨論に絶對に反對し、斷乎として勞農黨の旗を守り、他の無産政黨との全合同のために、邁進するものである。我々が正しいか、反對派が正しいかは今後の歴史的實踐のみが證明するのだ。實踐過程に於いてもし我々の過りが證明されたならば、河上博士の如く一年に五度も六度も指導理論の變る小ブルジョア的マルキストにではなく、最初より大衆的政黨反對論を唱へつゝある、若き我々の反對派の前に屈伏するであらう。

我々は我々の正當なるを斷じて確信するものである。 (一九三〇年十月三十一日)

經濟學方法論の現階的意義

塚本兵七

方法論は學問の上部構造的性格の指標である。方法論が如何なる意味に解せられるかは、學問がその時のその社會の基礎構造に對して立つ關係を表現する。例へば第一に、フランシス・ベーコンにおける如く、それが學問研究の機關と解せられるときには、そこに何か新しい學問が生長しつゝあることが窺はれる。そして間接にはその社會が上昇過程にあることを想像させる。第二に、カントにおけるやうに、それが汎く認識批判として現れるとき、新しき知識原理に依る舊き思考傳統の克服が暗示される。そしてその事は、新社會組織の決定的勝利と安定とを、豫想せしめる所以でもある。第三に、方法が絶對化され、言はゞ學問の魂として自己を實現し貫徹しゆくものと考へられるに至るならば、そのとき學問は社會的基礎構造から游離し徒に自らの影を追ふ存在と化してゐるに相違ない。そしてこの學問の墮落は基礎關係の衰頽の兆候の一つに外ならない。ヘーゲルの思想體系が、多分にかゝる要素を包含してゐることは、否むことができない。新カント派の認識論は、その標榜にも拘らず、この毒素を繼いでカントにおける批判力を減殺した。

社會的基礎關係の生成の過程はその上部構造の一つとしての學問のそれに對應する。そして方法論はその指標を提供する。たゞ斷つておきたいのは、吾々は上部構造の特徴から下部構造の狀態を「想像し」「豫想し」推定する道をとつた。このことは吾々が何らか觀念主義的な社會觀・歷史觀を採つてゐるのではないかといふ誤解を起させる惧があらう。しかし吾々は叙述の便宜として右の道程を選んだに過ぎない。よし認識の順序はどうあらうとも、事物それ自身の秩序はまさにその逆である。だから科學的には、社會的基礎關係の實證的測定から上部構造の特質も說明されなければならぬ。これから

の試みも、現今の社會的情勢に基いて、經濟理論が如何にそれを反映してゐるか、特にこの國の論壇に如何なる形態をとつて現れたかを方法論的に究明しようとするに外ならない。

さういふわけて、こゝに方法論といつてゐるのは、もはや純認識論的範疇ではない、さうかといつて研究方法の技術的方策を指すのでもない、寧ろ一つの社會學的範疇である。いはゆる知識社會學は認識や學問を社會的・歴史的配置の下に觀察することを企てゝゐる。しかしそこでは獨立變數となるべきやうな項目が相對化されてゐるか、或は神への方向に絕對化されてゐる。その意味に於て歴史主義に墮するか、基督教的歴史觀に陷るか、二途を出でないのである。詳論は別の機會に讓るとして、要するに知識社會學はマルクス的社會觀のブルジョア的歪曲に過ぎないであらう。後者は、社會的構造の基底として、また社會的變易の獨立變數として、社會的生産關係をもつてゐる。そしてかゝる物質的基礎關係の人間的表現として階級對立を認めてゐる。吾々が方法論を社會學的範疇として取扱ふとするのは、それを漫然知識社會學的項目の一つとして算へようといふのではなく、階級對立の現實的關係に應じて經濟學上どんな方法論が採用されつゝあるかを明るみに出したいのである。だから經濟學そのものの理念に從て如何なる方法論を選ぶことが適切であるか、といふことではなく(それは經濟學認識論の課題であつた)、誰れがどんな方法論を用ひるか、が問題である。唯だこゝでは「誰れか」は階級として規定されてゐる。個人はその恣意を以てあれこれの方法に附くを得ない、階級的存在の必然性に制せられてどうしても一定の方法論を生み出さざるを得ないのである。そして階級的存在はそれを組成する各人の階級意識の中に成り立つのではない、階級そのものはイデオロギーではない。寧ろ社會的生産關係の人間的表現に外ならないのである。

さて、この様な見地から現在の經濟學における方法論的趨勢を眺めるならば、その主たる傾向は凡そ三つに大別されるであらう。*そしてかく現在の經濟學が三方向の方法論を有してゐることは、現在の階級對立の事實に照して偶然ではないのである。このことを特にわが國最近の論壇の情勢に基いて明にしよう。

*この三つの區分は、近頃ゾムバルトが「三つの國民經濟學」に掲げた「規制的」richtende 或は形而上學的、「組整的」ordnende 或は自然科學的、「理解的」verstehende 或は精神科學的、の區別とは何の係りもない。吾々の區分が階級のそれに照應するに反し、ゾムバルトのそれは依然、認識の方向に基いてゐる。

* * * * * *

現在フランス、イタリーなどの少數の例外を除いて世界の國々は擧げて未曾有の不況に襲はれてゐる。この中にあつて日本は特殊の事情の下にどの國にもまして深刻なる不景氣を經驗しつゝある。この時に方て、資本家と企業者は如何にこの荒波をのりきらうとするか、また減給と解傭に脅さるゝ勞働者は如何にこの情勢を把握するか、そしてこの中間にあつて冷靜にして公平なる理論をもつといふ學者は如何なる勸告を提案せんとす

るか。これらの階級はいづれも彼等の經濟學をもつてゐる。吾々は先づ財産に仕ふる階級のそれから始めよう。

I

有産者階級にとつては經濟界の不況は自己の存立を危くするものとして映ずる。とはいへ、總じて資本家は資本主義自身の運命について自覺と確信を有してゐるわけではない。自己の住む經濟界は、足踏みしてか或ひは螺旋狀にかとにかく同じ道を循環してゐるものと考へる。かゝる思想はいはゆる景氣の概念の中によく表示されてゐる。經濟界の推移は景氣の循環として或は變動として把へられる。變動の過程はいくつかの異つた面樣によつて劃されるけれども、好景氣の極は直ちに來るべき不況に連なつてをり、反對に不景氣の極はまた新なる好況に續いてゐる。結局、一つの圓環運動を描くものと看做される。そして好、不景氣を問はず何れの場合にも一方の極端が究はまつて他の場面に移るに際しては一場のカタストロフが演ぜられる。それが恐慌である。資本家は恐慌を忌避する。しかしそれなくしては自己の存續し得ないことをも知つてゐる。彼等の解釋によれば恐慌は資本主義組織そのものがもつところの警醒作用であり、淨化作用である。恐慌は有産者階級にとつては階級全體を滅すものではなくて寧ろ不良なる組成員を除外し自己を健全ならしめる作用を有する。此の如き恐慌の理解は有産者階級の經濟學にとつて決定的に有效である。蓋し彼らにとつては經濟社會は如何に變動するものであれ、決して資本主義の軌道の外に反れないことが絕對に重要だから。

インフレーション時代のブルジョア經濟學が爲替理論を中心としたやうに、今やそれは景氣變動論の形に於て出現してゐる。このことは現今、彼らが不景氣の受難の眞最中にあることによつて當然である。といふのは好況にして彼らの利潤が十分である場合には、かゝる狀態が一刻も永く續くことは彼らにとつて望ましい事柄である。その結果は景氣變動などといふことには強いて目を閉ぢる方が得策である。わが國の手近な例にみても好景氣の夢の醒めぬ間にはいはゆる經濟學の基本問題が論議されることが多かつたか。經濟學の認識論、經濟生活の目的、價値論といふやうな題目が研究の中心を形作り、魁をした。しかしそれらは「基本的」問題ではなく、寧ろ餘剩的産物であつたことが今や明になつた。

不景氣に呻吟する資本家にとつては景氣の恢復こそ望ましい。ところが自己の編みだした世界は一つの必然的な循環をなすことを知つてゐる。そこでこの組織が動かし難く、それ自身

の運行をもつてゐる以上、現在、自己が如何なる變動の位置に居るかを見究めることが大切である。それはやがて明日に處する方策を決定する所以でもある。この目的のために彼らの經濟學は經濟界、財界の觀測を行はうとする。寧ろ學者的議論はかゝる實際的觀測に役立つ限り有用なのである。この場合に、經濟界は或は病理現象として取扱れることがある。觀測は即ち診察を意味することゝなる。例へば「健全」「不健全」などの語が使用され、また「恐慌は財界の下痢だ」などと言はれるのはかゝる見地から物を言つてゐる證據である。しかしそれよりも多くの場合に、比論されるのは氣象現象である。經濟現象の過程を示すのに氣象現象を說明する用語がそのまゝ轉用されるのは常にみるところである。觀測の道具についても氣象に對するバローメーター、テルモメーター、モノメーターなどの語がそのまゝ襲用されてゐる。資本家の理論的意識にとつては現在の如き組織を有する經濟社會の運行は、宛も明日の天候の如く計り知り得ざるもの、人力に依てどうともすることの不可能なものであると共に、丁度氣象現象が自然科學的方法に從てある程度まで豫測され得るやうに、適當な科學的方法を用ふれば、これを大體豫測し得るものと考へられる。現今のブルジョア經濟學としての景氣變動論の方法論的興味は、豫測とその科學的方法の問題に集中するやうにみえる。

天氣豫報の最後の斷定が、その途に經驗あり習熟ある者の推理と一種の直覺とに據て除されるやうに、景氣の豫測もまた經濟界・財界に苦勞し試練を經た者だけが見透し得るところに相違ない。しかし氣象學の努力が、かゝる具體的推定に適切な材料の供給とその整備とに存するやうに、景氣變動論の科學的目標もまた個々の觀測者に秩序ある資料を提供することに存せねばならぬ。この目的を以て、氣象學は氣象現象を氣壓、風向、濕度、雲の形狀などの氣象要素に解體し、具體的現象の觀測に於ては各地測候所・船舶等からの報知に基き、等壓線、等溫線、風向などを表示した大氣圖を作成し、各要素の配置を一目瞭然たらしむることに努める。この場合に學問的意義は主として、如何なる事象を要素と認むべきかといふ、現象そのものの不可缺な構成分の摘出と選定、各要素の精密にして正確な計算、要素間の相關々係の檢出、その數量的直覺的表示法などに懸つてゐる。この事情は景氣變動論にとつても同一である。先づ何が景氣變動を構成する要素であるかゞ限定されなければならぬ、そしてそれらの數量的測定と相關々係の把握、更にその圖表的表示が問題となる。これらの一切の努力はいはゆる景氣のバローメーター作成の方寸の中に集約されてゐるやうである。

景氣變動論に於てバローメーターといふ語が使用される場合、それは必ずしも一定の意義をもつてゐるわけではない。例へば「金利は景氣のバローメーターだ」と言はれてゐるときには、純然たる比喩を出てゐない。しかし吾々はその意義を、一定の方法に從て計量された景氣要素を圖表に描寫したもの、宛も氣象學における天氣圖の如きものに、限定したい。この意味のバローメーターの作成の方針も人々に依て一定してゐない。詳細なる差異を看過するならば、大體に於て要素の選定を簡單にし且つそれらを綜合的觀點に於て示さうとする一般指數檢出の試みと、現在の經濟社會の複雜性に顧みて、かゝる綜合觀察の技術的不可能と缺陷を指摘して、寧ろ個々の領域について各別の圖表を構成しようとする意圖とに分つことができやう。吾々は景氣要素の分析について成可く數多くまた詳細に知る必要上、後者の主張に聽かうと思ふ。

ドイツ景氣研究所長エルンスト・ワーゲマンは、彼の立場から種々なる領域についての個別的景氣圖表について、それらを一つの體系に組成することを企てゝゐる。しかし彼の言ふところに據れば、體系化の試みは決して、どれか一つの要素の變動に重點を置いて、他のものをこれに從屬させようといふのではない。彼は述べてゐる——「かゝる經濟バローメーターの體系はどのやうにか、靜態に於て經濟的循環を觀察して獲た秩序原理を基礎として、生じたものである」。ワーゲマンはその著「景氣變動論」第一部第一款第二章に於て靜態における經濟流通の秩序を分析して、これを先づ物財と貨幣の二つの側に劃し、更に各〻の側について、前者に於ては(a)消費と生產との關係を全體としてまた比較的大量なる集團として(b)これらの要因と在庫狀態ならびに貿易との關係を究明し、後者に於ては(a)金融、證券、商品各市場間の關係(b)それらと收入の流との關係を闡明してゐる。卽ちそこに述べられた秩序原理が作成さるべきバローメーターの種別とその體系を決定するのである。これに從て同研究所に於ては次の如きバローメーターが制作され取りまとめられてゐる。

1. 生產のバローメーター、それは次の出來事を相互に比較せるものである。
   a. 注文引受
   b. 原料輸入
   c. 製造
   d. 就業
   e. 完成品の輸出
2. 生產用具工業及び消費財工業に對する就業指數
3. 倉庫出入のバローメーター
4. 內國市場のバローメーターとしての外國貿易
5. 商況のバローメーター、それは次の各項を比較す。
   a. 長期信用
   b. 注文引受
   c. 就業
6. 信用のバローメーター、それは發券銀行の信用と手形提出、債務者と預金者、確實利子附の證券及び利益配當附證券の發行を相互に組合せたるもの
7. 證券市場、商品市場、金融市場における價格變動を對照せし三市場のバローメーター
8. 物價のバローメーター。これは左の項目に關係す
   a. 彈力性ある商品の價格

b. 工業用原料及び半製品の價格
c. 工業完成品の卸賣價格
d. 小賣價格

さて、では如何なる根據に基いてかゝる數種のバローメーターは一つの體系を組成することができるのか。それには景氣研究の全般的前提を知らねばならぬ。この點に關して前述のワーゲマンは明に言つてゐる——「研究所の景氣觀測竝びに研究勞作は、有機的・生物學的原理の上に、卽ち經濟は一つの生きた有機體であり、相互に密接に結合せる部分が、內面的に共同作用をなし、相互の機能が錯綜せる點に於て動植物の生活形態に類するといふ根本觀念の上に立つてゐる。加ふるに特に運動の自律と稱し得べき特性が存在する。」(前揭書十頁)こゝで有機的社會觀の批評をなす餘裕はない、それよりも吾々にとつて有要なのは附加されたる特性である。これは、彼に據れば、經濟界の運動を單なる機械的運動と異らしめる契機である。この特質は、外面からの影響を受け入れる際に最もよく表れる。といふのは、外から來る作用は有機體にとつて單に刺戟として感じられ、結局は內部的な運動に解消されて了ふやうに、經濟的運動を有機的・自動的にみるならば、その外部の出來事例へば政治的事件、戰爭、自然的異變などは經濟體內部の運動との間に、決してどのやうにか計量し得る等置關係を作りだし得ない。卽ちワーゲマンの研究の一切は經濟的運動が內生的 endogen であるといふ假說の上に立つてゐる。

此の立場に從へば、右に揭げた外部的な影響は景氣要素ではなく、景氣變動の分析に際しては顧みる必要がない。それらの要素は經濟の構造 Struktur に屬し、構造要素または與料として別個の考察に登るべきである。これは景氣要素が週期的・旋律的運動に服するに反し、何らの運動をしないか若しくは一度限りの運動に從ふか孰れかである。例へば人口、領土、地勢、技術、政體、消費上の慣習、企業形態などがこれに算へられる。であるから景氣分析とバローメーターの作成には、初めから經濟要素の內で構造要素に屬するものは排除されてゐるのである。この事はバローメーターの客觀性と精確性を保持するために是非とも必要である、そしてブルジョア景氣變動論の性科學はまさにこの點に存するのである。構造の分析とその要素の選定は景氣の場合のやうに數量的精確さを以て果すことはできないのである。

ところが今日の經濟社會はかゝる外部的なる影響なしには、一刻も活動することは不可能である。もともと景氣變動は經濟構造の中に組み込れてゐる一つの場面でしかない。そしてかゝ

る全體の構造の中にあつて、それを支へる樞軸となるものは人間、取りも直さず階級關係に外ならない。ブルジョア景氣論がその精確性の故に構造を犧牲にするといふことは、卽ち階級關係を無視する所以である。別項バローメーター中の就業の個係には、勞働組合の調査にかゝる失業者及び勞働時間の短縮を蒙りし者の月々の數が算入されてゐるが、これとても操業率の算定に資するに過ぎない。尤も、吾々が人間關係の無視を非難するのは、人口學的・乃至は道德統計的項目を加味せよと主張するのではない。寧ろブルジョア景氣變動論の科學性そのものの限界をそこにみるのである。資本主義を是認し、その自律的運動を信ずる間は、かかる學問的見地を採らざるを得ないのである。資本主義社會に於ては、旣に統計的材料に於て欺瞞と隱蔽が存し得るであらう。現に日本銀行正貨の保有高は公表されない。しかし、かゝるトリックを無視しても、ブルジョア理論は資本主義を前提する故に、却て無視する結果に陷つてゐる。それ故に恐慌に接しても、それは淨化作用だなどと暢氣に構へながら、而も何故となくその襲來が恐ろしいのである。

ブルジョア景氣變動論の科學性について、基本的な批判は與へられた。それから派生する個々の歸結に對し、裁斷を下すことは容易である。もともと右に述べたことは、現下のわが國における、その方面の代表的理論、例へば野田貞次氏一派の財界分析、高橋龜吉氏の生產費低下の主張に基く諸政黨の政策批判、「東洋經濟」一派の平價切下を豫想する金輸出再禁止說等を檢討することを目的としてゐたのである。しかし紙數を徒に費すことを恐れて、いまは原理的なるものに止めて次の項目に移らう。

II

學問は總じて智識階級のものである。理論が應用を目指すことは第二次的事柄であり、理論は實踐を離れて、獨立な自律的な體系をもつてゐる。あらゆる領域について純粹な學問が可能であるはずである。それこそ學者に相應しい仕事である、それは一切の世俗的利害に對し無記であり、超然たる公平を持してゐる。——かう考へることが昨日までの學者の自負であり、世人が學問の神聖を信じた所以でもあつた。恐らくは、研究の自由と大學の自治も、かゝる前提に於てのみ容認されたのであらう。ところが、これもまた一つの「階級」の學問觀に過ぎないことが、漸く明になりつゝある。

尤も、學者——大學教授を代表者とする職業的學者——もまたその一員に屬するところの智識階級は、言葉の嚴密なる意味では、階級を構成するものではない。吾々の規定によれば、階級は特定の社會的生產關係の人間的表現であつた。然るに智識階級は經濟的意味

に於て何らの生産に與るものではない。敎師、藝術家、醫師、辯護士、僧侶等（政治家、役人、會社員などは多少趣きを異にするであらう）に支拂ろゝ代價、卽ち彼らにとつて收入となるものは、社會的には消費としか影じ得ないものである。そればかりではなく、彼らの各個人の間には、他の階級のそれに擬らへられない限り、卽ちそれらと原理的に異つた利害の共通がなして彼らを結合するといふことは考へ得ない。例へば政府の減俸に抗して官立校の敎師らが擧つて立つたとすれば、國家と自己との間に何らか資本主義的雇傭・被雇傭の關係に比すべきものを認むる限りに於てゞあらう。そこでは被搾取階級の階級結合の原理が役人を偶ゝ結束せしめたに過ぎないのであらう。もしさうでなければ、單なる叛亂に導く行爲となるであらう。だから智識階級と呼ばるゝ人々は、他から結成の原理を借りて來ない以上、團結の理由を缺いてゐる。寧ろ彼らは各人の個性を尊重し、それを掘り下げることを享樂する。いはゆる創造的活動が彼らの本領である。彼らが中世の手工業者に擬へられるのはそれがためである。

しかし智識階級論はその場所ではない。吾々は現下の經濟理論に關する限りで、これを顧みるに止めよう。文人風な藝術理論が、藝術のための藝術の主張に落ちつくやうに、研究室限りの學者の理念は學問の自律的構成である。體系の齊合と完備とが他の關心を犧牲にする。而もその體系は考へられ工夫された體系である。前節にみた景氣變動論に於ては、とにかく物それ自らの秩序に從て要素が排列された。然るに學究的經濟理論に於ては、思考の都合に從て、物の秩序は枉げられる。元來、思考は物の運動に順應する性質をもつべきてあり、反對に物が思考の運動に梨どらるべきではない。この思考の順應性はその所有者が本來なにらの階級に屬してゐない事實に照應してゐる。と言つても、吾々はインテリゲンチアを以て、その事を理由として、階級的偏見に囚はれることなく、時の情勢を觀取し得る者と考へる論者（例へばカール・マンハイム「イデオロギーとウトピイ」）に與みしようといふのではない。却つてそれ故にインテリゲンチャは、自ら獨立的の存立の地盤を持たず、書記として技師として（或は慰安者として又「お抱へ」醫師として）何れかの階級に奉仕する場合にのみ存在の意義をもつと考へる。もしこの關係が逆に考へられるとなれば、その社會は既に衰退しつゝある證據である。

インテリゲンチャ經濟理論の誤謬も全てここに起因してゐる。それは總じて價格中心の經濟學として現れるが、その特殊なる形態は一に極端なる記號主義としての數理學派經濟學、二は誤れる、淺い實證主義を奉ずる限界效用學派の亞流、その三は消費者中心のユートピアを信用の統制に依て達成しようといふグクラスイズム。

A

資本主義經濟組織が數量を以て表し得る價格を目安として活動し統制さるゝ以上、組織が純粹になればなるほど、あらゆる經濟現象が價格關係に還元され、若しくは價格との函數關係に於て表現されるに至り、遂に價格の媒介による一樣化を通じて各要素的現象が相關的にみられるのは想像し難いことではな

い。こゝに函數、相關々係などを表示する數學的公式を利用することの誘惑の生ずるのは自然であらう。吾々はかゝる數式が統計的數理に於てもつ意義については十分評價を惜しむまいと思ふ。そればかりでなく、經濟現象の記述に方ても、多くの曖昧と多義とを除去して思考經濟の上に貢獻するところが多いであらうことを否定しまい。しかし、數式の價値がそのやうな思考の用具以上に、現象そのものの秩序と運行を剰すところなく寫しだすとの考へには疑なきを得ない。自然科學に於てさへ、自然が數の網であると考へることは迷妄である。精密なる數學的規定を具へた現象の理想的なる相は假說としてのみ許さるゝのであらう。數理的自然科學は一方に實驗と他方に假說とを武器として自然を克服した。それはブルジョアジーの實踐の上に咲いた華であつた。(この知識社會學的研究によつて漸次に明らかにされてゐる事實については他日一層詳細な研究を果したいと思つてゐる)ところで、社會的・歷史的學問に對しても丁度、自然科學に於て假說が占めるところの方法的地位が、マックス・ウエーバーによつて意識されて用ひられ始めたところの理想型に與へられてゐる。そこでこの理想型と數式的表現との關係を檢べてみるのに、第一に後者は理想型としても滿足だとは言ひ得まい。といふのは理想型は現象の精密なる形態を表示するといふ論理的理想を意圖すると同時に、何らか現實的な歷史現象の中にその地盤をもつてゐなければならぬ。そこからその特徵的形貌を損せぬやうに且つこれを誇張して作られたものであるからこそ、生き／＼とその現象を直觀させることができるのである。これを私は理想型の生成的性格として規定する。數式はかかる生成的性格を缺いてゐるとしか思へない。數式と現象との表現關係は直觀的ではなくて、記號的に止る。そこでは常に直觀に依る充實が缺けてゐる。(この區別についてはフッセアル「論理研究」第二卷第二册第二章十四節をみよ)第二に、數式が完全に理想型としての役目を果すと假定する。さうしても數式は自然科學におけるやうに有效ではない。といふのは、もと理想型は運動する歷史現象の理解 Verstehen の圖式である。その方法論的價値は言はゞ事後の解釋に懸つてゐる。そこには自然科學におけるやうに「自然に從ふことに依て自然を征服する」といふ風な實踐への連りは全くない。たゞ價値判定を採らざることを科學的として尊重する態度のみが殘されてゐる。吾々はそこに歷史主義の形における學究主義をみるのである。理解的方法と社會的學問との關係は別の機會に讓るとして、何れにしても數式の意義は自然科學におけるほど多產的だとは信じ得ない。

しかし數理派の主張はもつと控目なものであるかも知れない。少くとも靜態における經濟要素の均衡關係だけは精密に且つ矛盾なく數式を以て表示し得ると主張せられるであらう。けれども、さう考へても最初に述べたやうに價格中心主義とも稱し得べき一種の名目論は脫し得ないであらう。例へばクールノーは富の觀念を交換價値にまで抽象し、「理論的計算は唯この抽象的狀態の上にのみ築かれ得るのである」と言ひ、而も「商業の擴張及び商業方法の進步は事實の實際狀態を彌〻此の抽象的槪念の狀態に近づける傾がある。」卽ち「市場を見出す爲めの努力は凝つて仲買の手數料となり、時間の延滯は割引料となり、損失の可能性は保險料となるが如きはこれである」と述べてゐる。此の如き前提の下に交換價値の動きをみるために、その獨立變數を求めて、それ自身の絕對的變動原因の計上によつて「修正されたる貨幣」といふ槪念を導き入れ、その以後は貨幣自身の獨立變動はこれを無視して、他の商品の價値をそれとの比率に於てみようとする。かくして先づ貨幣金屬同士の相對的價値としての爲替、價格の函數としての需要の法則、最も簡單なる價格成立過程としての獨占價格の硏究等々といふやうに進轉してゆくのである。(クールノーの所說については中山伊知郞氏譯「富の理論の數學的原理に關する硏究」をみよ)しかしそこでは著者自身、初頭に述べてゐるやうに「恰も熟練なる技師が磨かれたる表面及び正確なる運轉に依つて摩擦を減少しながら理論的狀態に近づくのと同樣」に次第に理論的抽象の眞空の中につれ込まれるのである。全く摩擦が消え失せた時には技師の手には何も殘つてゐないであらう。同じやうに經濟現象が數式に置き換へ遊された時、恐らくは原の現象の影はどこにも見出せないであらう。もつと硏鑽を重ねてから斷ずべき言葉かも知れないが、經濟現象の把握にとつて、數理經濟學の價値は工學用のポケツト便覽にも及び得ないであらう。資本主義社會は價格を樞軸として均衡する傾向あることは確であらう、しかしレーニンがブハーリンの「均衡の見地」について評したやうに、均衡は常に大約その、偶然的のものであり、運動の一つの契機でしかないのである。(後をみよ)

B

クールノーは前述した通り、社會の發達が益〻價格化の傾向を擴めるといふ信念を表白して後、かう言つてゐる——「吾々はこれに對して辯護しようとも又非難しようとも欲しない」と。この態度は數學派としては當然である。然るに今や價格中心の名目主義はマルクス經濟學排擊の武器として使用さるるに至つてゐる。私は玆に高田保馬博士を引合に出さねばならぬのを遺憾に思ふ。しかし博士が本年八月の「改造」誌上に發表された「勞働價値說は支持し得るや」といふ一文ほどこの種の立場を代表してゐるものはない。これに對しては既に十月の本誌に、櫛田民藏氏の正面からの驅擊が載つてゐるから、私は博士の論文の中で、淺い實證主義が露はに顏をみせてゐる二、三の個所を引用するに止めよう。

博士は、交換價値を以て「ある種の使用價値が他の種の使用價値に對して交換せらるゝ量的關係——比例として、卽ち時と所との變更するにつれて絶えず變更する一の偶然的關係」と規定され、「需要の變動(同一需要價格に於ける需要數量の變化)供給數量の變動(同一供給價格に於ける供給數量の變化)は容易に交換比例を變化せしめる」例へば「一對二の比例に於て交換せられつゝあるものも些細なる需要の變動により二對三となり、一對五となる」「この場合の交換比例が一對五で一對三でないといふのが何故であると云ふに、それはたゞ相互の需要狀況がさう云ふ比例に落ちつかせる風になつて居る故と云へば足りる」從ひて!「同量の共通物がAB何れの商品にも存在するところに交換が行はれるのではなくして、交換の行はるゝことがかゝる共通物として(若しくは共通物の表現として)見ゆるのである。」「畢竟、そこに外見上ありと見らるる共通物は交換能力乃至交換價値そのものにして、これ以外の何物でもあり得ない」——これが、博士が交換せらるゝ商品の共通物としての人間勞働を排斥せられる道筋である。

吾々は先づ、マルクスに對して「共通物の存在が何故に必然であるか、又それがあるにしても何故にそれがかゝる勞働でなければならぬか、と云ふことについては、別にそこに落ちつかねばならぬ論證を與へてゐるわけではなく、たゞさうだと主張してゐるに止まる」と責められる博士が、何故動搖して已まぬ「偶然的關係」に滿足され「たゞ相互の需要狀況がさう云ふ比例に落ちつかせる風になつて居る故と言へば足りる」などと安心してをられるのか、を問はねばならぬ。恐らく博士が一方に論證を强ひ、他方にそれを省略さるゝかにみえるのは、人間勞働といふやうな事柄が、目に映らないものであるに反し、比例的な價格現象は何らか直接に觀取し得ると考へられるからであらう。由來、實證的精神は吾々の經驗に攝取し得るものだけを眞相として、それを越ゆる部分は幻想として排斥する。この精神はどんな經驗科學をも貫いてゐるべき筈のものである。ところが經驗とは何んであるかは一樣に確定し得べき事柄ではない、或は知覺作用と、或は本質直觀と、或は理解と、或は實踐的檢證と同一視することができよう。詳論は他日に讓るとして、博士とマルクスに於ては經驗の意味を異にしてゐるやうに思ふ。博士の實證論は第一の立場をとるところの現象主義(現象學ではない!)に止るやうである。これに反してマルクスに於ては實踐を基調としてあらゆる經驗の要素が統一され、眞の經驗科學的方法が樹立されてゐる。(後段をみよ)それだから彼にとつては博士が捨てゝ顧みないところの人間勞働としての價値は、經濟現象が人間社會の現象であり、而も一定の階級關係、所有關係を前提する歴史的現象である以上、無視することのできない契機なのである。吾々が資本主義的生産組織の中に生活してゐるといふ事から直ちに何らの論證を要せずして、價値として

の人間勞働が導き出されるのであらう。だからこれを消去することは資本主義制を拂拭することであり、そのことはまた價格現象自身をも消失せしめることとならう。博士の態度は影をみて實體を見ざるものと言ふ外はない。これ私が博士を以て淺き實證主義者となす所以である。

C

吾々は最後に消費者としての智識階級の白日夢としてのダグラスイズムの檢討に移らう。實のところ私にはこの思想は、仔細に研究するほどの魅力をもつてゐない。また本國に於ても、フエビアニストもギルド・ソシアリストも勞働黨も全て餘りこれを重要視してゐないやうである。事實、私も土田杏村氏の紹介を通じてその内容を知り、（紹介的研究は一括して同氏著「生産經濟より信用經濟へ」の中にあり）なほ一部の小説家までがこれを擔がねばならないかを不思議に思ふほどである。この事實は恐らくわが國のインテリゲンチャが低級であることを證する以外のものではないのではなからうか。私も、だから、啓蒙的な意味で、これを取り上げるに過ぎない。

ひとはダグラスの經濟理論といふことを口にするが、私は杏村氏の紹介を讀んで何處にも、その名に値ひするものを發見し得なかつた。さしづめその理論的骨子は「A+B定理」に盡きるのであらう。その大様はかうである。

「工場又は他の生産的組織は、貨物生産者としての其の經濟的機能の外に、純粹に財政的「金融的？——筆者」なる側面を持つてゐる」「工場は一面には賃銀、俸給、及び配當の仲介を通ほし、個人へ購買力を分配する爲めの仕組としてみられる」「而して他面には物價——財政的價値——の製造所である」而して「此の立脚點から見れば、工場の支拂は次の二群に分たれる、A群——個人へ爲さるゝすべての支拂（賃銀、俸給、配當）B群——他の組織へ爲さるゝすべての支拂（原料品、銀行決濟、其他の外的費用）。」「さて個人の持つ購買力の流れの割合はAによつて現はされる。併しすべての支拂は物價に變身しなければならぬのであるから、物價の流れの割合は、A+Bより小ではあり得ない」「併しAはA+Bを購買し得ないであらうから、少なくともBに等しいだけの割合の生産品は、先きの記述に於いてAの下に集めらるゝものとして含められなかつた購買力の形式により、分配せられねばならぬ」「この附加購買力は公債信用〔Loan Credit の譯？——筆者〕（銀行當座貸越）若しくは輸出信用によつて供給せられてゐることを示す事が次の段階に於いて必要である」（前掲書七九頁以下をみよ）

これが杏村氏の譯によるダグラス自身の説明である。

この方式は要するに、物價は生産費（A+B）より高くなければならず、そしてそれは生産業から流れだす個人への收入（購買力A）を以ては消化し得ないのであるから、その餘分は銀行からの受信によつて賄はれなければならない。然るに工場の生

產物は「多くの場合に於て、個人の使用の爲めばかりとは限らず、單にそれへ引續く製造業の使用の爲めにだけなる、間接的生產物である。」かくして銀行が生產業の經營に有力なる地位を占めるに至る度合は增大する。即ち現在の經濟組織は信用を中心とする、と言ふのである。この理論は直ちに現行經濟組織の改造案に連なつてゐる。

ダグラスの描く改造策はもちろん資本主義制度を廢さうといふのではない。たゞ前述のA＋B定理の適用として(一)生產者銀行を設立すること(二)公正なる物價の制定をなすことを提議するに止つてゐる。生產者銀行といつても、かの勞働者銀行よりも更に不徹底で、その產業に從事する全員、即ち階級對立をそのまゝにして資本家をも參加せしめようといふのである。更に奇異なのは物價制定論である。その根本格率は「商品の物價は生產に要したる費用よりもより小なる樣に制定せらるべし」といふ命題である。先づ眼目は窮極の消費物である。かゝる貨物に對する減價の割合は、費用：物價＝總生產の貨幣價値：總消費の費用價値といふ比例式を以て表される。こゝにいふ總生產は(1)現實貨物(2)資本貨物(3)生產的に見られたる資本の値上り(4)輸入より成り、總消費は前項(1)、(2)の消費(3)資本の値下り(4)輸出より成ると考へられる。即ち消費者は總消費の總生產に對する割合に於て、生產費以下に物を買ふことができるのである。これに反して生產用の貨物は生產費丁度で賣つてよいし、更に輸出品は市場價格に從ふといふのである。そして第一種物品の賣買による生產者の損失は、これを資本主に對し政府が國庫紙幣を以て補償せよと唱へる。ダグラス案なるものの大要はこれで盡きる。たゞこれに加へて英國人一流の分散主義を加味して、信用の統制をも地方的に行へとか、權力の集中を難じて信用の覇權を民衆の手に收めよといふ樣な、いはゆる經濟的民主々義の主張を述べてゐるが、階級の保持と消費者本位の漸進的改良とを說く點で小ブルジョア趣味を脱しないものである。

吾々は簡單にこの思想を批評しよう。杏村氏はダグラスイズム研究論集を編むに際し、わざ〳〵「草煙小房より(三)」と題する小紙片を挿入して、今年の本誌一月號に匿名マルクシストがそんなことは「そもそもヒルフアーデイングあたりのマルクシストが大いに說いたところで」云々と言つたに對し「ヒルフアーデイングの何處にさうした主張が書かれてゐるか」と駁してゐられるが、確にヒルフアーデングやレーニンはダグラスのやうな愚論は述べてゐない。彼らは資本主義は信用主義だなどといふ表面的な歸結をするには、餘りに資本主義の道程を知り過ぎてゐる。また彼らは信用の勢力增大をみて信用本位論を唱へ

たりはしない。これらの人々にとつては、金融資本の覇權確立は、企業聯合を增進するけれどもそれは昨日の自由競爭を基調とした經濟の廢棄ではなく、却てその延長に外ならないのである。資本主義とは別個な組織ができたのではなく、その歷史的面貌が變つたまでゝある。競爭、交換、市場、恐慌はそのまゝ存續する。信用の力の如何なる增大もこれらの現象を排除し得ず、却てその內部の矛盾を激成するに止つてゐる。信用の勢力の增大は歷史的事實であつて、一片のバランス・シートから歸納される安易な事柄ではない。

私はダグラスの改造案の內、物價制定論については、同じく杏村氏が紹介してをられる、英國勞働黨調査委員の報告批評に委せてをかう。もう一つの生產者銀行論は、たとへこれを勞働者銀行の意に解したとしても、好況のお餘りのお裾分けを受けた勞働貴族たちが「罷業と鬪爭の代りに貯蓄と投資」をなし成上つた姿としか思へず、丁度昨今の不景氣日本に於て、工場管理の美名の下に、無產者が、なまじつか商法を覺えつゝあるのと同じく、窮極における無產者の勝利を遲延しまたは阻止せしむる以外のものではなからう。

III

吾々は以下プロレタリアートの經濟學を語らう。目下の特殊時期に際してもそれが唯物論的辨證法を方法的精神とすることに變りはない。吾々は最初に、マルクスのよく知られた「經濟學批判の序說」について、唯物辨證法の一般的なるものを規定しよう。

A

第一に、それは「概念を論辯的に辻褄を合すこと」(Die dialektische Ausgleichung von Begriffen, XXII)ではない。こゝにディアレクティシュと言つてゐるのは、ヘーゲルによつて限定された意味合においてゞはなからう、希臘におけるその起原が後の論理學的なるものの發生を促したことに基いて、この言葉は屢々「論理的」あるひは「理屈の上の」といふのと同じ意味に用ひられてゐる。この場所での用法はそれに當ると思ふ。概念を物そのものの秩序にではなく、頭の中の順序に從屬せしめる仕方は、また二通の仕方で行はれる。その一はヘーゲルのいはゆる反省的連關(Reflektionszusammenhang, XIX)に於て物をみることである。反省的とは、ヘーゲルによれば思辨的 spekulativ に對する規定であり、形式論理上の矛盾律に服し、辨別的に、固定的にものを考へて、對立物への轉易といふことを顧みない思索である。ヘーゲルはカント哲學をその下に含ませ

てゐたが、マルクスは前記の場所に於て、ブルジョア經濟學者をその例に算へてゐる。その二は歴史上の經過を觀念における推移と混同するものである。これは似而非辨證法である。「序說」では「歴史的運動の影のうすれた表象に過ぎない」「理念における」(„in der Idee“)「系列」としてこれを排斥してゐる。マルクスはこの場合プルードン流の形骸的辨證法を指してゐる。かゝる辨證法の批判は一層詳しく且つ周知の仕方で「哲學の貧困」の中で果されてゐる。

第二に、唯物辯證法は思辨的ではない。吾々は反省的觀方に反して、思辨的考方が對立物の轉位、その結局における同一性を究明することを知つた。かゝる思索はスピノザまで溯ることができる。彼に於てはあらゆる差異は神または自然の中へ解消する。かゝる全體を「限定することは否定することである」。マルクスは、生産と消費との關係に於てこのことを明にしてゐる。生産と消費は先づ何らの媒なく(unmittelbar——このヘーゲル的用語に注意せよ—)同一と考へられる。生産は消費であり、(消費的生産)消費は即ち生産(生産的消費)である。(XXIII) 次に兩者の間には「媒介的運動」(vermittelnde Bewegung)が成立する。生産は消費に材料を、消費は生産に對して主體を提供する。一方は他方の手段として現れる。そればかりではなく、双方は相互にその作用を完成する間柄にある。消費は生産の物體的形式を銷盡することによつて、生産を生産として完結する。また生産は消費の一定の仕方と、消費能力としての欲望を創造して、消費を生産する。かくして、とマルクスは言つてゐる「ヘーゲル學徒にとつて生産と消費とを自同として措定することほど、簡單なことはない。事實このことは社會主義の作家ばかりではなく、政治的經濟學者自身によつて、例へばセイによつて、取り行はれてゐる。」その結果は「社會を個人的主體として觀察する」といふ誤りとなつて現れる。マルクスは、かかる誤れる觀察を、特に思辨的 spekulativ と名づけてゐる。(XXVII) 唯物辯證法は事物の差別を自同の闇の中へ消し去ることをしない、寧ろそれは特殊の抽象を驅使する。では如何なる抽象であるか。

抽象は常に個物の間における共通者の摘出である。それ故にそれは先づ「繰返しの手數を省く」こととして現れる。マルクスはこのことを認めて後に言つてゐる「然るにこの普遍者即ち比較によつて擇りだされた共通者は、それ自ら多様に分岐せるもの、種々なる規定に流れ分れるものである。」(XV) この共通者は自らの内に區別を藏し發展に從ふものである。即ち「統體に於ける肢體、統一の内部における區別」を形成する (XX

XIV）ところでマルクスに據れば「多くの規定の總括、多樣なるものの統一」は「具體者を具體的」たらしむる所以である。(XXXVI) だから、こゝに謂ふ抽象は Contradictio in adjecto のやうであるが、具體的なる抽象でなければならぬ。直接に、無媒介に措かれたるものを、その媒介的な要素にまで還元し、運動にもち來すことでなければならぬ。ヘーゲルは、かゝる運動を以て「具體者そのものの形成過程」と考へた。(XXXVI) しかし唯物辯證法はかゝる具體的なるものの神祕的な自己運動を認めない。

「抽象的なるものから具體的なるものへ經昇る方法は、思惟にとつて、具體的なるものを手におさめる、それを具體的なるものとして精神的に再生する仕方に過ぎない。」マルクスは經濟學が如何なる範疇から始むべきかに就いて、この方法を例示してゐる。「吾々が所與の國を政治經濟的に觀察する場合、吾々はその人口、その階級への、都市、田舍、海洋への、種々なる生産部門への配分、輸出入、年々の生産と消費、物價等々を以て始める。現實的な前提の實在的なもの及び具體的なものを以て、即ち例へば經濟學に於て、全社會的生産行爲の基礎であり主體であるところの人口を以て始めることは、正しいことのやうにみえる。しかし深く考へればこれは誤つてゐることが判る。人口は、例へばそれが構成されてゐる階級を除去するならば、一つの抽象である。更にまたこれらの階級も、それが基く要素、例へば賃勞働、資本等々を知らないならば、一つの空語である。後者は交換、分業、價格等々を想定する。例へば資本に賃勞働、價値、貨幣、價格等々がなくては無意味である。」(XXXV)

だから、現實に實在的にして具體的とみえるもの、言ひ換へれば知覺的に最初なるもの（こゝでは人口）は、單に「全體の混沌たる表象」または「表象されたる具體者」に外ならぬ。知覺的經驗は具體者の所在と輪廓を示すとしても、その詳細なる構成を呈示することができない、即ちそれを抽象的に捉へるに過ぎない。思惟は、具體者を具體的にわがものとするために、かゝる「表象された」全體、具體者から發して、分析を進めて次第々々に單純なる概念、內包の少き抽象者に至り、遂に最も單純なる諸規定に行き着かねばならぬ。かくして見出された要素的規定は、たとへ「表象的」經驗の立場からすれば、最も內容の乏しいものであるとしても、却てそれ故に學問的思惟、方法の見地からすれば、具體者がそれらの總括として成立するところの具體的要素、即ち辯證法的契機である。さうなればこそ「そこから再び旅は引き返さるべきであらう、そして遂ひに再び人口に到達するであらう、しかし今度は全體の混沌たる表象

としてゞはなく、多くの規定と關係の豐な統體としての人口に」と言ふことができる。(XXXV)辯證法からみて全體なるもの、具體的なるものは、知覺に映じたそのまゝのもの、媒介なるものではなく、諸規定のモザイク、多樣の止揚としてのみ存在する、それは出發點にある最初なるものではなく、最後の成果である。このことからヘーゲルは「實在するものは、自らを自らの内に總括し、自らの内に沈潜し、自發的に運動する思惟の成果であると解する幻想に陷つた。」(XXXVI)

しかし唯物論的辯證法はかゝる幻想を許さない。この旅路はいづれも「思惟の途」にある。具體的統體は「思想統體、思想具體者」として「思考と、把握との産物」である。といふことは、決して「直觀と表象との外でまたはそれらを越えて思考し且つ自分自身を産みだしてゆく概念の産物といふのではなく、直觀と表象との概念における加工である。頭腦の中で思想全體として現れるところの全體者は、思考する頭腦の産物である、そして思考する頭腦は世界をわがものとするのに、獨りそれにのみ可能な仕方で・卽ち藝術的・宗教的・實踐的に精神上この世界をわがものとする仕方とは異つたやり方で行ふ。」(XXXVII)だから方法の過程は、絶對的精神の自己實現の軌跡ではなく、「思考する頭腦」の世界領有の獨特な行ひ方なのである。直觀と表象とを豫定することも、その特質に基いてゐるのである。從てマルクスは語を繼いで言つてゐる「實在する主體に終始、頭腦の外部に、その獨立性を保つて存立する——卽ち頭腦が單に思辨的な、理論的な態度をとる限りに於ては。それだからまた「政治經濟學」の理論的方法に於てもまた、主體たる社會は、前提として常に表象に對し眼前に浮べられてならねばならぬ。」

さて、右のマルクスの見解に從て、實在は思惟の運動の成果でないのはもちろん、頭腦に對してありのまゝで把握され得ないとするならば、「思考する頭腦」といふ一個の實在と、それが把へんとする大なる實在、世界との間には如何なる關係が存し得るのであらうか。吾々は、後者の「表象における所與」とその概念における加工」といふ思想を、カント風に解してよいのであらうか。ヘーゲルに於ては素より兩個の實在は、神祕的に相似的な運動を形成した。むろん、そのやうな調和ある契合は唯物辯證法の許すところではない。マルクスは、„Ça depend" (さうだとも言へるし、さうでないとも言へる)と簡單に答へてゐる。(XXXVIII)ではどのやうな根據で「さうだとも言へる」のか。

マルクスは勞働といふ概念を例として次の如く述べてゐる。「現今の經濟學が先頭におき、極めて古く溯り、あらゆる社會

形式に當嵌る關係を表示してをるところの、最も單純な抽象が、かゝる抽象に於ては單に最も現代的な社會の範疇としてのみ實際上眞理として現れる」卽ち「まさにその抽象の故に、あらゆる時代に對して妥當する最も抽象的な範疇は、それにも拘らず、かゝる抽象の規定に於てすら等しく歷史的關係の產物であり、その十分な妥當性をたゞこの關係に對し且つその內部に於てのみ有するものである。」(XLI) ところで「ブルジョア社會は生產の歷史的組織のうち最も進步し且つ最も多樣である。その關係を表示する諸範疇、その分岐の理解は、同時に全ての沒落し去つた社會形式の分岐と生產關係への洞察を與へる。そしてブルジョア的社會は、それらの遺蹟と要素の上に築かれたるものであり、それらのうち一部は未だ克服せられざる殘餘としてブルジョア社會の內に餘命を保ち、一部は單なる暗示に過ぎざりしものが、成熟せる意義にまで發展してゐる。等々。」であるからして、吾々が具體的な經濟現象の觀察をなす時、そこに思ひ浮べるのは、吾々がそこに住む社會であり、それを漠然と表象して、その分析に、卽ちその分岐の理解に進む。そのとき吾々が見出す範疇的諸規定は、この社會のものであると共に、それに達する道程に橫るあらゆる社會形式のものである。寧ろ後者の諸要素はその名殘りとして前者の內に止揚され或は潛在的なりしものの顯在化として實現されてゐる。この意味に於て「最現代的なる社會」は「最も發展せる、最も多樣なる」卽ち最も具體的なる社會である。かくて「思考する頭腦」にとつて具體的なるものが、多くの諸規定の總括、多樣の統一として映ずるやうに、世界に於ても、この場合には社會に於てもその關係は同じであることが判る。實在的にも、方法的にも、具體的なるものが目指される以上、兩者の出發點と到達點とは一致する。それは「最も現代的な」卽ち吾々自身の生活する社會に外ならぬ。唯物辯證法は、現代の社會に於て「思想統體」と歷史的實在的統體とが符合することを承認する。

B

吾々は今や安んじて現代社會から出發することができる。現代の生產組織が資本主義的であることに何の變りもない。たゞ昨今が、マルクスが「自己自らを批判する」と規定した「沒落期」にあることも確である。(XLII) この時期が夙にレーニンによつて金融資本の時代、帝國主義の時代として特徵づけられてゐることは能く知られてゐる。近くコムインテルンは更に最近の段階を第三期として規定した。然るに等しくプロレタリアートの代表者と名乘る社會民主々義者のうちには、金融資本による大單位の產業統制、その國家的あるひは數國家に亙る金融

的結合、更にその政治的表現としての國際聯盟、不戰條約、軍縮會議等々の事實に立脚して、資本主義の安定、平和的手段による國家内部における、或は多數國家の聯合における（例へば歐洲聯邦）社會主義化、經濟的民主々義を提唱するものがある。か丶る主張が、ブルジョアジィとの妥協に依て議會主義的政權を維持するところの勞働貴族を代表するものであるか（英國勞働黨や獨逸社會民主黨の場合）勞働階級の懷柔によるいはゆる共存共榮を以てファシスト的目的を達成せんとする下心か、どちらにしても反動的役割を演ずるに過ぎざることを見ぬいて極力これを斥けたのはコムインテルンの理論家たちであつた。この事は政治的には昨年の秋におけるブハーリンの失脚となつて現れた。

彼の、富農に關する平和的社會主義化の見解、現段階における資本主義的主體としての巨大なる集團組織の出現と產業の無政府狀態の絕滅、從て國家内部の革命的展望の縮少、資本主義發達の不均等の法則に關する認識の缺如等々に基く日常の全面的鬪爭における弱腰の理論的根據が摘發された。この時にブハーリンの「轉形期の經濟學」に書入れしたレーニンの寸評の發表は有力に作用した。經濟理論に關する限りでは批判はブハーリンの「均衡の見地」に向けられてゐる。吾々はその意義を闡明にすることでこの研究を終らう。

ブハーリンはその著「轉形期の經濟學」の中で、マルクス主義經濟學の方法論の三種の特質を擧げて後に附加して言ふ「マルクス的方法の以上の根本的特徵の外に、なほ平衡の公準と名づけ得る一の方法論的のものを擧げなければならぬ」（佐野文夫譯、白揚社版に據る。二一八頁以下をみよ）「全資本主義體系をその平衡の下において考察した結果が、卽ち科學的體系としての理論經濟學を意味する」「資本論の全構成をこの見地から考察するときは、吾々は「資本論」における研究が、鞏固な安定的平衡の體系の解剖を以て始められてゐるのを見る。そして次第に複雜な要素が取り入れられてくる。體系が動搖して可動的なものとなる、だがこの動搖はその合則的な性質を失ふものでなく、激烈な平衡破壞（恐慌）があるにも拘らず、體系が全體として維持されてゐる。平衡の破壞によつて、新な平衡、謂はゞより高級の平衡が現はれるのである。平衡の法則を認めた後に初めて、更に進んで體系の動搖の問題を提起し得る。恐慌そのものは平衡の撤廢でなく平衡の破壞と見做される。この場合マルクスは、平衡を破壞するだけでなくそれを再建するところの此の運動の法則を發見し把握することが必要だとした。恐慌は體系の動搖の限界を超えない。觀察の結果吾々はこの體系が變動し動搖するいを見る。だがこの體系は平衡のあらゆる變動と動搖とをくゞり拔けて、絕えず新たに再建される。價値法則は單純商品生產制度の平衡法則である。生產價格の法則は改修された商品（生產）制度、資本主義的なそれの平衡法則である。市場價格の法則はこの制度の動搖の法則である。競爭の法則は破壞された平衡の間斷なき再建の法則である。恐慌の法則はこの制度の必然的週期的平衡破壞並びにその再建の法則である」（前掲邦譯文に據る）

マルクス的方法の特質をかく考へるブハーリンは、他の論述に於て自らもこの方法を遵守して、おまけにもつとこれを數理派の喜びさうな代數的方程式に形式化し、以て資本主義社會における社會的總生產の種々なる部門及び生產と消費との間の均衡を表示し、それを武器としてローザやツガン・バラノフスキイの蓄積論を批判してゐる。（「帝國主義と資本の蓄積」をみよ）そればかりではなく、最初に掲げた書物はその結論として、均衡組織を世界經濟の領域にまで擴大し、その破壞の要因として戰爭を取り入れることによつて、資本主義の崩壞が世界經濟の連鎖の如何なる輪から始まられねばならぬかを論じてゐる。この見解が前述の政治的意見に連なつてゐることは勿論である。

惟ふにブハーリンの理論的誤謬の第一は、理想型による探究方法と辯證法的抽象法との混同あるひは不十分な截別であらう。彼は「抽象的理說は、現實の認識に對する「鍵」である」と言つてゐるが（帝國主義と資本の蓄積、獨逸版九五頁）、彼の構成する理說は辯證法的分析によつたものでなく、彼のいはゆる「安定的平衡の體系」を想定してそれを要因に分解してみせるだけであり、初め純粹に研究の手段と考へられたものがいつの間にか現實の如く取り扱はれる。理想型が一種の思考技術の用具として解せられる以上、それは辯證法的見地からも、超歷史的抽象の見地からも作り上げ得るであらう。理想型を以て思惟することは直ちに辯證法的に考察することではない。レーニンもブハリーンを評して「著者は經濟過程を十分具體的に論理して研究しない」と言つてゐる。彼に於ては理想型と辯證法的分析との結合が十分でない。

第二にブハーリンの平衡の公準は、それを貫くとき、何らプロレタリア的なるものを產みだし得ない。彼は資本論におけるマルクスの意圖をさへ、「安定的均衡、その一時的破壞、より高き平衡の再建」といふ方式に纏め上げられるものと考へてゐる。「恐慌でさへ均衡の撤廢でなく」その破壞、その動搖を意味するに過ぎない。かく資本主義體系の永遠の均衡を信じ、たゞ一時的にその動搖（それもより高度の平衡の再建の準備として）を認むるに止るとすれば、最初に述べたところの、資本主義體制內における永遠なる景氣の循環を信じ、不景氣の底をつく恐慌を以て寧ろ淨化作用と解し、新なる好景氣を期待するブルジョア的見解と何んの選ぶところがあらうか。また中間的學究の經濟學が靜態における均衡を數式に描きださうと努力してゐることを吾々は知つた。かうしてみると「均衡の公準」はより多くブルジョア經濟學のものゝやうである。資本主義體制は確に均衡への傾向をもつてゐるであらう、しかしそれは、レーニンが言ふ如く「一つの偶然な、大ざつぱな輪廓に於てみられたる、大數的に觀察されたる、即ち停滯せる時期の觀點からの」もの

である。ブルジョア的立場からすれば、安定的均衡とその再建が重要であらうが、プロレタリアートの立場からみれば、均衡の安定の一時性、偶然性こそ大切である。均衡は運動の過程における、一つの數學的切斷として現れるに過ぎないであらう。

第三に、「均衡、破壞、より高度な再建」の方式が辯證法を背後に斥けるばかりではなく、動々もすればそれに取つて代り或は紛交せしめられようとすることは、唯物論の機械論化の傾向と結びついてゐる。即ち唯物辯證法における運動を「別々に向けられた力の敵對」といふやうなメハニズムスの關係に還元することが行れる。（ブハーリン「史的唯物論の理說」獨逸版七十五頁）均衡といふやうな概念も素々かゝる機械論に根をもつてゐる。ブハトリンは機械論の概念を唯物辯證法のそれに改めることをせず、その逆を敢えて試みてゐる。機械論は今や自然の領域に於ても唯物辯證法に克服されようとしてゐる。從て機械論への反駁は自然辯證法の問題に連つてゐる。しかし私はこの問題を割愛してこの論文を〆括ることゝしよう。

* * * *

未曾有の世界恐慌は自ら資本主義の運命に關して疑問を起させないでは置かない。この時に方てブルジョア理論家は少くとも表面上樂觀的である。彼の選びだした景氣諸要素の配合によれば、不景氣も底をつけば早晩恢復すべきものである。この時こそ株を買へば宜いと敎へられる。彼にとつてはいはゆる經濟構造は一回限りの所與であり、理論上如何ともすべからざるものであつた。しかしブルジョア理論家ではなく、ブルジョア自らは實際上この種の要素に對しても決して無策なのではない。各國競つての金輸出解禁への努力が既に金融資本時代の根本方針に基いたものに外ならなかつた。經營上の、作業上の、賣買上の合理化運動、國家による損失補償の嘆願などその消極的現れであらう。積極的には世界市場の分割の協定を議さうといふ世界經濟會議の目論見、そして已むを得なければ××！ ブルジョアジイは一見手を拱いて景氣を待望してゐる如くではあるが、決して退嬰的ではない。機があれば否××組織を××し、プロレタリアートの犧牲の下に、異常なる景氣を創造する方法を知つてゐる。それぱかりかそれを實行することができる。この意味からも彼らは構造の分析を欲しない。

そこへゆくと、中間的學究は實踐力をもつてゐない。景氣の恢復策を問はれても、國立景氣研究所の設立を建議し得る位が關の山だ。もし所長か幹部にでもなれゝば、當然官位が上るのだ。さうでなければ、プロレタリアートの經濟學をつゝいて、

その悪口を言ふことによつて、保守反動的勢力に加擔することを公平だと誇稱してゐる。そのために、素人判りの悪い理論をわざ〳〵作り上げたり、或は反對に誰れにでも早判りのする理想策を紹介したりする。

最後にプロレタリア經濟學は、唯物辯證法を武器とすることによつて、均衡狀態の研究は從として或は理解の單なる方式としてこれを使用し、經濟的・政治的構造の實證的研究を主とする。從てこの世界恐慌は景氣の陰の極としての意義だけを有するに止らない。それは資本主義の歩みにおける一回的な現象である。それは、社會民主々義者のいはゆる「組織された」「安定された」戰後の金融資本の時代が、レーニンの××××××「交換、市場、競爭等々」と共にまさに「恐慌」をも「排除し得ない」ことを證明する。そればかりか、資本主義の諸矛盾は益々複雜に彌々激化されつゝある。恐慌の眞因は單なる生產過剩や、豐作、金の偏在や關稅障壁等々の現象形態に存するのではなく、レーニンの××する如く「獨占と(それと並存せる)自由競爭との間の矛盾、自由市場における金融資本の巨人的な「活動」(及び巨人的な利得)と「實直な」商業との矛盾、一方の側に於てはカルテル及びトラストと、他方の側に於てはカルテル化しない工業との矛盾、等々」の中に潜むのであらう。そしてかかる矛盾の現れとして、現今の恐慌は資本主義××の徵候とみられ、辯證法的に把握することができる。ブハーリンは、「組織された」資本主義の理論を奉ずる結果、社會主義××の可能を、組織單位間の戰爭の際にのみ限らうとした。ところがレーニンはこれを駁して言つた「社會主義××はストライキ又は街頭デモンストレーション又は飢餓反抗又は××の××又は植民地の××によるだけでなく、卽ち寧ろ各々の任意の政治的××から發生し得る」と。

今や吾々はプロレタリア經濟學方法論の頂上に登ることができた。向に引用した「序說」の中で、マルクスが次の如く言ふのをきいた「頭腦が單に思辨的な、理論的な態度をとる限りに於ては——實在する主體は終始、頭腦の外部に、その獨立性を保つて存立する」と。(傍點は筆者)吾々は今までかゝる態度における方法論に限つてきた。然るにマルクス主義經濟學は經濟の機構の內で生產に重點をおき、言はゞそれを獨立變數としてそれとの係りに於て他の要因を觀察した。何故であるか。それは生產が經濟における人間的要素を卽ち階級をその實踐性に於て包括するからである。蓋しマルクスの言へる如く「全ての生產手段のうち最大の生產力は××的階級そのものである」から。プロレタリアートは經濟現象の具體的把握に際して、單に「思考する頭腦」として現れるだけでなく、「最大なる生產力」として登場する。卽ち彼はこの組織への最も有力な矛盾である

のだ。かくしてプロレタリアートの存在と運動は、彼を包む社會のそれと合體する。

このことから吾々は一つの方法論的歸結を導かう。從來の方法の論理は「自然の齊一」といふことをその要請としてゐた。この考は必然性を客觀的、偶然性を主觀的と看做す。實在は客觀的には必然性の網であるに拘らず、人智の制限がこれを主觀的に偶然として映すと考へる。然るに唯物辯證法にとつては、實在は絶對的な偶然、寧ろ偶然と必然との交錯である。エンゲルスはこのことをヘーゲル論理學からの言葉を引いて明にしてゐる「偶然的なものは一つの理由をもつ、蓋しそれは偶然的であるから。全く同樣に、偶然的なものはまた何らの理由をも持たぬ、蓋しそれは偶然的であるから。偶然的なものは必然的である。必然性は自らをば偶然性として規定する。そして他面においてかゝる偶然性はむしろ絶對的必然性である。」偶然性と必然性とは絶對的に對立するものではない、學問にとつて大切なことは等しく客觀的な偶然性がその對立者たる必然性に轉化する法則を發見することである。吾々は、プロレタリアートの實踐を通じて、方法論の最高公準を「自然の齊一」といふ機械的原理から「自然の辯證法」にまで革めねばならぬ。

一九三〇年一〇月

土蜘蛛旅行

堺　利　彦

一　土蜘蛛の子孫

土蜘蛛旅行とは、土蜘蛛の子孫たる私の、土蜘蛛の國に於ける、蜘蛛の遺跡の訪問記である。

自ら稱して『土蜘蛛の子孫』といふ。そこに先づ、私としての、多少の誇りがある。先年來、私の選擧運動の際、その軍費の調達の爲、拙惡な私の『揮毫』をあちこちに押賣するの厚顏を敢てした時、屢ゝ私は、やはりその多少の誇りを以て、横額用の白紙や何かに、『土蜘蛛の子孫』と題した。

私は九州人である。九州は大和民族發祥の地たること勿論だが、同時に又、隼人の國でもあり、熊襲の國でもある。殊に九州の中、私の生れ故郷なる豐前の國は、土蜘蛛の國としても亦た有名である。

尤も、私は、九州人（或は豐前人）としては外來分子である。私の父祖は代々、豐前小倉の藩主小笠原侯の家來であつたが、その小笠原家は大ぶん以前に、信州松本から轉封されて來たのだと云ふ事で私の先祖もやはり信州に逆登つている。そこで私の家の系圖を調べて見ると、元來は千葉の一族であり、千葉は平家の一族として賴朝に屬した者である。そして私の母方は又、蒲の冠者範賴七十世の孫と稱された、立派な源氏の嫡々である。して見ると私は、紛ふ方もなき源平二名族の合の子である。然らばその私たる者が、土蜘蛛の子孫などとは、甚だ不當の樣にも考へられるか知らぬが、然し私としては、豐前人が豐前の土地で數代の生活を送つた間に、少しも土着人の血を交へなかつたとは考へられない。だから私は、どうしてもやはり、豐前の土着人を私の先祖の有力なる一部分と感ぜざるを得ない。そして又、そうである以上、私がその土着人の末孫の一部として、更にその昔の、大昔の、土蜘蛛の國の住民に對しても、總て同じく私の遠い遠い先祖として敬愛の念を抱き、そして遂に私自ら土蜘蛛の子孫と稱するのに、何等の異議も、

疑惑も、抗議もあり得ない筈である。

二　貧賤者の階級的先祖

　更に又、大昔と今日とでは、先祖と子孫との關係に大なる差異が生じている。昔は、先祖と云ひ子孫と云ふ以上、それは皆な血統上の意味であつた。然し今では、それが多く、法律上の意味である。養子制度の如きが卽ちそれだ。そして又、それが法律上の關係を作る爲の基礎は、大抵、その地位であり、身分であり、收入であり、財産である。だから今日、先祖と子孫との關係は、主として財富の相續、維持、結合、分配、爭奪等の關係に過ぎず、從つて富貴階級の內部にのみ發生し繼續する現象に過ぎない。

　從つて今日、我々貧賤階級の者に取つては、血統的先祖と血統的子孫との關係よりも、階級的先祖と階級的子孫との意義が遙かに重要である。現に私は、血統上に於ける源平の子孫たるが故に、大和民族の子孫たるが故に、何等特別の利益を受けて居ない。然し同じ貧賤階級の間に於いては、——卽ち、同じ貧賤階級の先祖から生じた、同じ貧賤階級の子孫同志の間に於いては、——常に同情と、理解と、協力と、團結とから生ずる、多大の具體的利益がある。

　然らば我々貧賤者の階級的先祖とは何か。昔の、大昔の、征服された人種、壓伏された民族、奴隷化された階級、それら皆、後世に於ける、あらゆる貧しき者、賤しき者、虐いたげられる者の階級的先祖でなければならぬ。

　そこで土蜘蛛。彼等は血統上から見て、我々と直接の關係が薄いかも知れない。或は、全く關係の無い場合もあるか知れない。然し階級的に見た時、卽ち社會の組織上から見た時、彼等こそがやはり實に、我々貧賤者の、正當なる階級的先祖たること、明瞭であり確實である。

　かくて、私はいよ〳〵、土蜘蛛の子孫たる光榮に誇るべき理由を有する。そしてこれから以下、土蜘蛛の國に於ける、土蜘蛛の遺跡の訪問記を書きつゞる。

三　久しぶりの天下晴れての旅行

　明治十九年、私が十七歳の時、私は故郷の豐前と別れた。それから以後、四十二年の間、僅かに數囘、故鄕の土を踏んだが、稍〻近來の事としては、明治四十三年、今から凡そ二十年近く以前、十五年振で、甚だ寂しくこの懷かしい山川と接したに過ぎない。

　私は曾てこんな事を書いた覺えがある。「私はこの地方に於いて、一寸一尺の土地をも有して居らぬ。又一錢一厘の財物をも有し居らぬ。私はこの地方から衣食住を與へられて居らぬ。又何

ら生活上の便宜をも與へられて居らぬ。』『然し私はこの土地に生れて、私の生涯の、最初の十六年間をこの土地で育てられた爲に、この土地に對して、深い親しみと懐かしみを持つて居る。』『然し又、この土地は永く安全に、私の父母と私とを養つて呉れなかつた。私は遂に貧しき父母と共にスゴ〱この土地を去らざるを得なかつた。』『斯くて私は、一面に於いては、むしろ故郷に怨みと憎みとを持ちながら、猶ほ一面に於いては、深いアコガレを持つて居る。』

もちろん、誰だつて故郷は懐かしい。私は古く既に、『望郷歌』と題する、故郷の生活の追懐記を書いた事がある。次には右の十五年振の時、更に、『故郷の七日』と題する、稍や長い『印象なり、感想なり、追懐なりを、筆の行くまゝに書き流して、』友人に『報告』した事がある。その時、私は、その前年『までの獄中生活で、又殊に深く故郷の懐かしさを思ひ知つて、今度出たらこそ是非又一度故郷に行つて見たいものだと、切に待ち望んで居たのだが、幸ひにも此の春、丁度善い序があつて、ザット日本の西半分を廻る様な事になつたので、其の間に一週間ばかりの暇を盗んで、焦れ慕うた其の山水の間に悠遊した』のであつた。そしてそれが『實は、幸徳秋水等の大逆事件に連坐した逆徒の遺族を歴訪』する爲の、從つて種々の點に於いて世を憚る、寂しい旅行の『善い序』であつた。

そして今度は又、それからザット二十年振で、この土蜘蛛旅行をやるのである。然し今度は、私の心として甚だにぎやかな何の憚る所もない、天下晴れての旅行である。我が豊津には既に、私の屬する『全國大衆黨』の支部さへも存在して居るのである。

四　土蜘蛛の代議士淺原健三

昭和三年の冬、當時私の屬して居た『無産大衆黨』が九州遊說をやつた時、私もその發起者達から懇切に參加を勸誘されたが、私の健康はどうしてもそれを許さなかつた。そこで私は、その深い遺憾を幾分なりと減ずる爲、『故郷の無産大衆に訴へる』と題したリーフレットを數萬枚印刷して、それを私の妻に持たせて、故郷の野に送つた事もあつた。そしてその文中、初めて大いに土蜘蛛を語つたのであつた。

次に昭和四年の春、福岡縣八幡に於ける市會選擧の時、私は淺原健三氏等に招かれて、その選擧の應援に出かけた。その時、私は初めて演壇から土蜘蛛の話をした。云ふまでもなく、八幡地方は私の故郷の隣地として、やはり昔の土蜘蛛の國である。殊にこの炭坑地に於ける、坑夫出身の衆議院議員淺原健三君の如きは、私の眼中に於いて、最も大なる土蜘蛛の一匹なのである。私はその時、こんな歌のようなものをさへ作つて見た事が

ある。

煤くろい、炭坑の子が、
衆議院の殿上に這ひあがる。
土蜘蛛の代議士、
アサハラ・ケンゾウ。

淺原君は實際、その精悍な、強健な、凄味の深い筋骨風貌に於いて、たしかに土蜘蛛の子孫である。

　この選擧應援旅行の時、私は、今度こそ是非とも、故鄕の地を踏みたいと祈つていた。所が、頻繁の電報が東京から來た。私はとう〳〵、折角の機會を踏みはづして、隣地から故鄕の匂ひを嗅いだばかりで、この父母の國、先祖の國、土蜘蛛の國を直接に見る事が出來ないで、スゴ〳〵と歸つてしまつた。

　そしていよ〳〵今度こそ、――今度こそは、むしろ意外にスラ〳〵と、――土蜘蛛旅行が實現される事になつた。然し、――やはり又然しだ、――私の健康が問題であつた。私は演說を禁ぜられ、會合を封じられた。私は只、單なる休養として、この土蜘蛛旅行を醫士から許されたのである。

五　さびしい故鄕、間のぬけた歸鄕

昭和五年十月二十二日朝、久しぶり私は、關門連絡船の甲板から九州門司の陸地を踏んだ。この時、差當り、私自身以外、誰ひとり此の事實を知る者が無いといふ一事が、私に取つて甚だ寂しい（然しながら頗る愉快な）滿足であつた。

　門司の喫茶店で茶を喫し、柿と葡萄を食つた。それから電車に乘つて小倉に降りた。故鄕の町で道に迷つたりするのも面白かつた。

　それから私は先づ小倉市の圖書館に行つて見た。古語辭典だの、豐前志だの、そんな物で少しばかり、土蜘蛛に關する知識の急仕入をやつた。

　それから兎にかく、私は行橋驛に降り、乘りかへて豐津驛に降りた。いよ〳〵生れ故鄕である。十五年前の歸鄕の時、私はこの豐津驛前の菊の屋といふ小さい宿屋に宿つて、そこのおかみさんと多少の舊知である事を發見した事、從つて種々なる面白い話の出た事などを思ひだして、今度も先づそこに宿る事を樂しみにして居たのだが、惜しいかな、その宿屋が無くなつていた。そして外に宿屋らしい家もなかつた。私の故鄕はそれほど寂れていた。故鄕が急にさびしくなつた。

　仕方がないので、私は小カバンをさげたまゝ、豐津の町と稱せられる痩せ村をザット一とまわりして見たが、宿屋らしいものは遂に見あたらなかつた。（あとで聞けば、一軒だけ兎にかく宿屋があるにはあるのだつた）

いよ／＼仕方がないので、私は又汽車に乘つて行橋まで行きあげた。そして豐津の人に葉書を出しておいて、驛前の知らぬ宿屋で寢た。何といふ間のぬけた、久しぶりの歸郷の仕方だらうと、小腹も立つた。

六　もう寂しい旅人ではない

二十三日朝、面白くもない朝飯を食つて居るところに、落合久生君、高橋延夫君等の四五人が豐津から來てくれた。

落合君は先年、無産大衆黨の支部の代表として、豐津から東京に來て居た事のある、從つて私とは既に親しい間柄の人である。高橋君は初對面だつたが、『文藝戰線』の同人として知られた、そして私とは既に親しい鶴田知也君の弟君である。そしてこの兩君は豐津中學の同期の卒業生であり、從つて兩君共、私と四十年近くを隔てた同中學の同窓生なのである。

私は直ぐにそれから諸君に伴なはれて、乘合自動車で豐津に着き、そのまゝ高橋家の客となつた。私はもう寂しい旅人ではなかつた。

高橋家の主人虎太郎君は前の豐津村長である。私とはほゞ同年の人だが、どうした事情でか、中學は同じでなかつた。そして今度は又、丁度私と行違ひの上京中で、私はその後、今日まで、まだ面會の機會も得て居ない。然し、それで居て、私はむしろ平氣でこの家の客となつた。イヤそれどころではない。先年、私の妻が私のリーフレットを持つて豐津に來た時にも、やはりこの高橋家の客となる不遠慮を敢てしたのだつた。

まだそればかりでない。鶴田知也君はこの高橋家から鶴田家の養子になつて居るのだが、その鶴田家の先代和彥君は、私の小供の時の、少し弟分の友達だつた。そして今度、私が高橋家の客となり、高橋夫人の歡待を受けて、いろ／＼昔の話を聞いて見ると、高橋夫人は即ち昔の鶴田君（和彥君）の妹君であつた。

七　國分寺、御所谷、文化的中心

高橋家の廣い座敷の椽側の籐椅子にもたれて眺望すると、狹い谷間の稻田を隔てた向ふの丘の森の上に、キチンとした姿の五重の塔が立つている。それが國分寺である事は私がよく知つてゐる。その左側にある、片手をさしだした樣な松林の長い丘の景色も甚だいゝ。その松林を一つ向ふに越えた處が、國作村に當り、惣社村に當るとは、延夫君の話である。私にも大體その位置は分つている。それらの村の名や國分寺でも知られる通り、總てこのあたりが昔の國府の地であるらしい。

又、この地點から僅か一二里を隔てた山間に「御所ケ谷」といふ處があつて、それは景行天皇熊襲征伐の際に於ける、行在所の舊跡だと稱されている。そしてその時、この土蜘蛛の國が

大和民族に征服され誅伐されたのである。

して見ると、由來この豐津邊は、歷史を通じて支配力の中心地であつた。反對に又、土蜘蛛、熊襲等の立場からすれば、反抗力の中心地でもあつた。いづれにしても、我々『豐津人』としては、少なからぬ關心を持ち、興味を持ち得る事實である。

明治の新社會以後、豐津は『城下の出來そこなひ』として、開發、養蠶等、新らしい經濟生活の失敗地として、寂れに寂れ、衰へに衰へて居るが、それでも一面には猶ほ昔の士族原として、藩學『育德館』以來の歷史を有する中學校の所在地として、やはり多少の、何程かの、文化的中心たる地位を保持して居るわけだらう。そして今では又、實にこの地點(及びその近傍)に於いて、無產政黨の中心と、農民運動の中心と、水平運動の中心とが、相伴うて發生しかけて居るのである。

八　豐津の產出した無產運動者

全國大衆黨の豐津支部には落合久生君、高橋延夫君等が主として働いて居ること前記の通りだが、間接の支持者としては、(これも前記の通り)『文藝戰線』の鶴田知也君があり、同じく『文戰』の同人葉山嘉樹君がある。葉山君は海員勞働者出身の小說家として有名だが、元を洗へば私共と同じ貧乏士族である。但し彼の父たる人は、大阪の郡長葉山さんとして、昔私共の間に知られた先輩であつた。

私はこゝに今一人の同志川內唯彥君の名を舉げねばならぬ。彼は今、雜誌『プロレタリヤ科學』の主幹格として、左翼無產運動の間に有名である。彼は初、外國語學校の露語科に學んで居たが、古くから私等と共に社會主義運動に加はつて居た。全國大衆黨は今、彼との間に直接の關係を持つて居ないが、私としては、相携へて第一次日本共產黨の被告であつた事、及びその前後に於いて甚だ親しく運動を共にした事等幾多の深い因緣を有している。彼は豐津の隣村祓川の生れである。從つて、彼も葉山君も皆な豐津中學の卒業生である。二十年前、私が寂しく歸鄉した時、遠慮して其の門前を素通りした豐津中學が、その後に於いて如何に多く、續々として、無產運動者、危險人物、社會主義者、共產主義者等を產出した事よ。

事のついでに書きつけておくが、鶴田知也君は數年前から、豐津の歷史を中心とした生活記錄を作らうといふ企てを持つている。私もその事業に大なる期待を寄せている。落合久生、高橋延夫等の諸君はそれの材料の蒐集と調査とに努めている。近來、一種の流行になりかけて居る『共同製作』の小說は、かくて我々の間では、既に數年前から着手されて居たわけである。葉山君の著作中、故鄉に關係のあるもの、及び私の『[illegible]』『堺利彥傳』など、自然に皆その材料となる筈である。

今一ッ、ついでに、半ば落合君から示唆され、半ば私の考へた豐津觀をこゝに書きつける。豐津は歴史的傳統の故を以て、その經濟的基礎から離れた(或は經濟的基礎のない)文化の小中心を作つている。從つて資力の貧しい少年が、多く中學教育を受け(或は受けさせられ)た。昔はそれが主として士族の子であつた。當時、私等の如き貧乏士族と並んで居た農商階級の生徒は、大抵みな富家の子弟であつた。然るに今では、その文化中心地的影響が下層の中流階級に及んで來た。多少とも無理をして(或は半ばミエの爲に)數人の中學生を出した中流下層者の家は、大抵みな衰亡した。落合君自身の如きが即ちその實例の一つである。

斯様な落合君が、その苦しい立場の中からして、今や、この土地に於ける無産運動の一新人物となりかけて居るのは、誠に面白い、意義のある現象だと考へられる。

私は前に淺原健三君の、精悍な、強健な、凄味の深い、筋骨風貌を語つて、『たしかに土蜘蛛の子』だと云つたが、落合君についても正に同じ事を云ひたい。殊に落合君は、その片頬の半面に大きな薄痣を印して居る凄味に於いて、同じく『たしかに土蜘蛛の子』である!。

九　古墳、ゴウ屋、穴居の跡

廿三日、私は落合君等に連れられて少しばかり豐津の原を見まはつた。先づ第一に中學校。思出は無數にある。

その午後、私は落合君と共に『甲塚』と云ふ處を見てあるいた。そこには甲の形をした數個の(或は十數個の)塚が點々として散在して居るので、それが小字の名になつて居るのだが、普通にはそれが皆な古墳の土饅頭だと考へられている。實際そうだらうとも考へられる。カブトがその中から掘り出されたから、カブト塚と云ふのだと語る人もある。骸骨が出たといふ話もあり、曲玉、太刀などの出たといふ話もある。現に金もうけの冒險者が内證でそれの發掘を商賣にして居るのもある。

別にこれらの塚がゴウヤとも呼ばれている。郷屋といふ字を書く人もある。屋の字を宛てたところは、これを家屋の一種と見たものとも思はれる。私自身は、子供の時からこれを見て、その中にはいつて遊んだ事もあるが、どうも穴居の跡といふ感じの方が強かつた。專門學者の説を正式に聞いた事はないが、どちらにも相當の理由がありそうだ。或は古墳の遺跡が穴居の家屋に使用されたといふ場合もあるだらう。或は又、酋長、族長などの雄大な穴居家屋が、その人々の死後、そのまゝ墳墓にされたといふ事もあり得る筈だ。或は又、古墳の跡が後の武士豪族などの新墳に利用されたといふ事も、全く無いとは限らないわけである。

そんな事を考へながら、私は落合君と共にあちこちのゴウヤを訪問したが、中に一つ、訪問といふ言葉の正に適切なのに出くわした。そこには二人の男が住んでいた。二人とも可なりの老人で、一人は盲目だつた。窟内にお大師様をまつり、その兩側に寢床様の物を設け。一人はそこに横たはつて居た。つまりこれは、お遍路さん達の巡つてくる、「八十八個所」の一つであるらしかつた。しばらくする中、婆さんが一人、水の桶をさげて外から戻つて來た。それも盲目であつた。そして十歳ばかりの男の子が、その先に立つて歩いて來た。男の子の帶のうしろから、婆さんの帶の前まで、長さ一間ばかりの紐がついていた。つまりそれが、盲目の婆さんを導く爲の綱であつた。彼等はたしかに穴居の一家族であつた。

これについて、あとで落合君が私に面白い話をして聞かせた。もうよほど前の、落合君が中學生の頃、學生間に試膽會といふがあつて、上級生が下級生の膽だめしをする爲、深夜に下級生を一人づゝ、或る恐ろしい場所に送り、そこで蠟燭をとぼして數學か何かの問題の答案を作らせるのであつた。その時、落合君は上級生として、恐ろしい場所の候補地にこのゴウ屋を選定し、あらかじめその實査をする爲、先づ自ら、相棒の上級生と二人で現場に出張した。所が、どうだらう、先に歩かせた相棒の膽病者が、ゴウ屋の入口をのぞいたばかりで直ぐに引返し、中に何か居ると云ひだした。何も居る筈はない。然し相棒はもうル／＼慄へて、何か居る、何か居ると云ふのである。落合君も氣味がわるくなつたが、勇を鼓して入口に近づき、懷中電燈をパッと點じて中を照した。すると、どうだらう。たしかに何か居る。何かどころではない。たしかに人間（若しくは動物）が居る。落合君の踏んばたかつた足元に横たはつて居る軀體から、ギロリとした大きな黒い目が二つ、落合君をジツト下から見あげて居た。さすがに勇敢な上級生落合君もこれにはギヨツトした。然し、それが實は、移動お大師様の番人としての、ゴウ屋の祕密居住者である事が、初めて發見されたのであつた。

但しそれは、今度私等の見た一家族とは違ふ人物であつた。して見ると、お大師様は時々その住人と住處とを變更して居るものと見える。然し何しろこの話は、ゴウ屋と、古墳と、穴居の跡との關係について、何等か多少暗示を與へる材料にはなるだらう。

十　大衆黨支部の人々

その夜、落合君の家で、私を歡迎してくれる支部の人々の會合があつた。『器用貧乏』と呼ばれた石井留藏（自由勞働者、通稱爲シユウ）君が、色々なナバなどつさり、それこそ置いた物を取つてくる樣に、わけもなく取つて來た。ナバとは菌の方言で、

松茸、白茸、ロウジ(一名黒コウ)など、その中、ロウジが一等の珍品で、これは餘り他地方で聞かない黑い傘の茸で、燒いて橙々酢をかけて、大根おろしと一緒にしてたべると、薄い苦味のあるところが、極めて通な料理である。次に大鯉一疋は、須見豐彥君(湯屋の主人、兼古物商)が何處かで宜しくセシめて來た。この須見君は數年前、無産大衆黨の時、支部代表として東京に來た事もある古參者である。その外、大工さんの竹下弘君、同じく大工さんの家成享君、書籍店の森毅君、自由勞働の宮原敏勝君、荒物屋さんの小梶藤吉君などがあつた。この小梶君の姓には私の古い記憶があつた。君のおとうさんは久五郎さんと云はれたのですねと、私がアテ推量で問うて見ると、イヤそれは僕のおじいさんですといふ。

ついでに、この席には居なかつた人だが、豐津の隣りの行橋町の、字門樋の水平部落の人、田原保次君。これはアメリカ戻りの活潑な運動者で、今は東京本部で、機關紙全國大衆新聞の經營主任を務め、東京淺草方面に於いても、豐前地方に於いても、水平運動を起しかけている。同じく豐津中學の同窓。

私が曾て何かの折に作つた歌のようなもの。「今もなほ蕨生ふるや菲いづや、我が故鄕の痩松原に。」「赤土の痩松原の茸わらび、それに交りて生れにし我。」ナバの御馳走の記事のついでに記す。

十一　舊知舊友の人々

この日、及び翌日、豐津で私が敬意を表するの機會を得た人々。第一、昔の小學校の横山源三郎先生。次に廣木嘉德君、しばしば私の『過激』思想を叱つて下さる二八中學教員の愛國者。次に豐津中學の書記、私と同じ名の吉川利彥君。次に豫備(?)陸軍少將野島貫一君。これは鶴田知也夫人の父君で、私とは中學時代の友人。次に征矢野半彌さんの未亡人。征矢野さんは昔し福岡日々新聞の社長として、私を記者に拾ひあげてくれた事のある先輩だ。次に大堀(昔の加治新太郎)君、奇麗な雜貨店を營んで居る。最後に今一人、豐津村助役生石久間太君。これこそ私に取つて、今の豐津で一番古くからの、一番親しい友人だ。(この一節、行數超過の爲、後に處々削除した。)

十二　土蜘蛛の舊紀傳說

廿四日、私は高橋君と、落合君と、石井君と四人連れで、京都郡等覺寺山の青龍窟(或はセイリユウクツ)を見に行つた。これが今度の旅行の第一目的としてあつた。

私は昔十三四歲の時、一度この岩屋を見た事がある。何しろこゝは土蜘蛛の征伐された處だといふ事だけが、著るしく私の頭に殘つている。先づ舊記傳說等の、土蜘蛛に關するものを少

しばかり紹介する。

『土蜘蛛、この人常に穴中に居る。故に賤號を賜うて土蜘蛛といふ。』『國栖、八束脛、佐伯などいへるも皆土蜘蛛の一種なり。』『土蜘蛛、卽ち蝦夷と同一人種なりしものに似たり。』『佐伯部の祖は蝦夷なり。』『土窟を掘つて常に之に居る。人來るあれば則ち窟に入つて竄れ、其人去れば更に出で、郊に遊ぶ』『狼性梟情』『慰招を被るなし』などともある。

『天孫ニニギの尊、高千穗に降臨の時、大鉏、小鉏なる二人の土蜘蛛あり……』『大和、攝津、常陸、陸奧、越後、紀伊、筑前、筑後、豐前、肥前、肥後、日向等の諸國に散在し、皇化に服せざりし……』

神武天皇が『大和の土蜘蛛を討滅』された事がある。崇神天皇の時、『建借間の命が常陸の土蜘蛛を討伐』された事がある。

景行天皇が『西國の土蜘蛛を親征』された事がある。日本武尊が『東國西國への途すがら土蜘蛛を討』れた事がある。

仲哀天皇の『熊襲親征の時、諸方の土蜘蛛を征伐』された事がある。神功皇后が『山門の縣に至り、土蜘蛛油津媛を誅し』た事がある。同皇后が『肥前の周賀の鄕の海岸で難船』の時、『土蜘蛛ウチオ麿が濟ひ奉つた』事がある。

その後、土蜘蛛は大和民族と『同化したるならん』とも云はれ、『豚呼も亡びたるならん』とも云はれ、或は『大和の山中に遁れ、僅かに其の遺蹟を存し、國栖として奉仕したるならん』とも云はれている。

土蜘蛛の名としては、大和の新城戸畔、居勢の祝、猪の祝。これらは皆女酋であつたらしい。豐後では打媛、國摩侶、靑、白。シヌカオク、シヌカオミ。これらは男女兩酋制であつたらうか。肥前では大耳、小耳。大山田女、狹山田女。八十女。大白、小白。浮穴沫媛、[illegible]。打猴、頸猴。これらは二氏一族制、三氏一族制、或は母家長氏と、父家長氏との一族制なること等、今の臺灣蕃族と似たようなものであつたらうか。右の外、また陸奧には、黑鷲。神衣媛。草野灰、保々吉灰。アヤニナ媛。栲猪。神石萱。狹磯名などがある。種々の點に於いて、當時の蠻族の自然生活、原始生活が想像される。

土蜘蛛といふ言葉については、土雲といふ文字もあるのだから、初から蜘蛛の意味があつたのではあるまい。或は『侏儒の如き小人』と云ひ、『八握脛』の長足人と云ふのも、皆『蜘蛛』といふ言葉から來た、好い加減な附會說だと考へられる。土ごもり、卽ち穴居人の意味だといふ說もある。否、これは、アイヌ語のトンチカムイがトチクムとなり、ツチクモとなつたのだといふ說もある。然しそれにしてもやはり『土中の人』といふ意味になるのだから、土蜘蛛人の穴居風俗には間違ないわけである。

別に一説がある。土蜘蛛のクモだけが先住民族の族名であつて、そのクモ族といふのは、即ち熊襲のクマ族と同じ（或は近いゝものに過ぎないといふ。或は然らん。

又、次の話も、このついでに思ひだしておいてよいと思ふ。昔、源の頼光が深夜に獨り病床に悩んで居る處に、不思議な僧形の者が出で來り、頻りに千筋の絲を投げかけるので、頼光は枕頭の膝丸を抜いて切りかけ、「得たりおう」と罵る聲に、化生の者は消え失せたり。侍ひの武者共が物音を聞いて馳けつけ、直ちに化生の者の血痕を追ひたるに、それは葛城の古塚に達して居た。そこで早速、その塚を取りくづせば、土蜘蛛の精靈現はれ出で、盛んに千筋の絲をくりかけたが、大勢の者ども、それを中に取りこめて、遂に其の首を得て歸つた。これが謠曲土蜘蛛一の作意である。足利時代には、土蜘蛛草紙と題する繪卷物も行はれて居たといふ。

十三　青龍窟征伐の歴史

扨、いよ／＼等覺寺の青龍が窟（一名、鼠の窟、或は鼠龍が窟）の如く記されてある。

冬十月、碩田の國に到ります。その地形廣大にして亦た麗はし。故に於保岐陀と名づく。速見邑に到れば、女人あり速津媛と曰ふ。一處の長たり。天皇の車駕到ると聞き、自ら迎へ奉りて申さく。この山に大きなる石窟あり、鼠の石窟といふ。二大土蜘蛛あり、その石窟に住む。一を青と曰ひ、二を白と曰ふ。又直入の縣の禰疑野に三土蜘蛛あり、一を打猨と曰ひ、二を八田と曰ひ、三を國摩侶と曰ふ。この五人、並びに人と爲り強力、又衆類多し。皆な皇命に徒はずと曰ふ。若し強いて喚ばゝ、兵を興して距らんと。天皇之を惡む、進行するを得ず。即ち來田見の邑に留まり、權りに宮室を興して之に居る。仍つて群臣と議して曰く、今多く兵衆を動かして、以て土蜘蛛を討たば、彼等は我が兵勢を畏れて深く山野に隠れ、必ず後の憂ひを爲さんと。則ち海石榴の樹を採つて椎を作り兵と爲し、因つて猛卒を簡び、兵椎を授け、以て山を穿ち、草を排し、石室の土蜘蛛を襲ひ、稲葉の川上に破り、悉く其の黨を殺す。血流れて踝に至る。故に時の人、その海石榴の椎を作りし處を、海石榴市と曰ふ。又その血の流れたる處を血田と曰ふ。次に打猨をシドニキ山に討たんとする時、賊虜の矢、横さまに山より射られ、官軍の前に流るゝこと雨の如し。天皇、更に城原に返り、卜を水上に卜して更に兵を勒し、先づ八田をニギ野に撃ちて之を破る。爰に打猨、勝つ可らざるを謂ひて降服を請ふ、然れども聽さず。彼等皆澗谷に投じて死す。

青龍が窟については、豐前國志に凡そ次の如く記されてある。

等覺寺の奥の院は青龍大權現の窟で、東面に穴の入口あり。

高さ四間、横八間、入口より上の口に抜け出づるまで百三十間闕然たる打ほげにて、穴の程、高き所十三間、又は十五間の所もあり。窟中に釋迦、久珠、普賢、十六羅漢、四天王等、護法善神の石佛あり。窟内入口の左右岩石の下に底穴あり、いと狹く、これを針の耳戸といふ。その内闇く、松明を燃して入る。三四間ほど行けば次第に地下りにして廣き處あり、左右上下皆岩なり。又狹き處あり、身を横にして通れば、底に川流れ、穴の内、轉曲三十内外あり、深さ二町ばかり。』

笠覺寺は『山口村にあり、天平六年、奈良の東大寺の惠答上人の開基にして、往昔は子院三百許あり、今（と云つても、それも大ぶん古い事だらうか）、四十六坊殘れり、皆妻帶僧也』と記されてある。

十四　現實の靑龍窟

私が昔し靑龍窟を見物したのは、笠覺寺の祭の時の事で、甘干の柿を釣した小串の輪を、丁度坊さんの輪袈が衣のように首にかけて、それを順々に一つ〳〵食ひながら、ロクロ首の娘だの、大蛇だの、何だのの見せ物をあちこち見て歩いた事を覺えている。然し今度はその道を取らず、案内者の敎に從ひ、乘合自動車を降りた白川村の山麓から、云はゞ大體一直線の形で、お寺を餘所にして近道を登つた。

近いだけに道は小いさくて嶮しい。而も雨が少々降つている。足元は兎かくツル〳〵と滑る。多くの場合、私が一ばん先登に立つた。一番弱い奴が一番先登に立たなくちや・おくれて仕様がないからである。私は話上手の案内者の話を聞き〳〵・成るべくユツクリ登つて行つた。と云ひながら、ツイ好い氣になつてサツサと歩いて見たりする。直ぐに息が切れて苦しくなる。しばらく休まうと云ひだすのは、もちろんいつも私だつた。尤も、若い人達の方が元氣のあまり、よく滑つたりした。そして私が休まうと云ひだすのが、あまり迷惑でも無かつたらしい。それから一番先に淸水の小流れを見つけて、それを貪ぼり飮んだのも私だつた。外の人達も皆喜んで飮んだ。

もう半分ぐらい來たかと聞いて見ると、案内者はまだ〳〵と首を振つた。では三分の一ぐらいは來て居るのかと聞いたが、彼はそれには答へないで、只だ山の上の方を見あげて、まだまだ上の方だと云つた。私は可なり悲觀した。年を取つてるくせに、而も病氣もあるくせに、而もこの雨の中に、飛んでもない事をやりかけたものだと思つた。然し嶮岨な山の中腹に立つて、今さら何をどうする事も出來ない。杖をつき、蝙蝠傘をさし、折々は立止まつて汗をふき〳〵、勇を皷して進んで行つた。

道の兩側に、到る處、葛の葉が茂つている。葛かづらといふ蛇である。大和の土蜘蛛征伐の時、皇軍、葛の綱を作つて之を

捕』へたとあるのが、卽ちこれだなと思つた。今日で云ふなら、鐵條網とくるところだらう。

案内者が何かのついでに、アメリカのロッキー山の事を話しだした。高いロッキー山を、自動車が迂回しながら登つて行く話が、この場合、大へん面白く聞えた。『おぢさんはアメリカに行つた事があるのかな』と、誰かゞ尋ねた。『えゝ、あちらに十二年も居りました。』『ヤア、そいつは大したものだ。洋行戻りの、ロッキー山を踏破した事のある案内者さんとは素晴らしい。』道理で人品のいゝ、元氣な老人だつた。

『そこの道の角を曲ると、もう直ぐ上の方に窟の穴が見える。』案内者がそう云つた。皆が勇んで登つて行つた。如何にも、草の生えた岩山の角に黑い穴が見えている。存外、早く來た。聞いて見ると、先きには案内者が我々を激勵する爲に、少しわざと遠く云つて居たのだつた。

十五　水乳の不思議穴居の愉快

窟の入口は中々廣い。天井も高い。大體豐前國志の記したとほり。我々は先づ底の岩角に腰かけて、持つて來た梅干入の握飯を食つた。雨は降りこまないし、そして明るくはあるし、暑くもないし、寒くもないし、腹は出來たし、この安全な、宏壯な洞穴内を自由に占領して居る我々は、正に穴居人の一群たるが如き愉快と滿足を感じた。

景行天皇征伐の時、佛像千體を作れば罪を許すと云はれたので、土蜘蛛等が大急ぎで多數の佛像を作つたといふ傳説に合すべく、そこらに石佛の首の無いのや、手の無いのが幾つも立つたり轉がつたりしている。

窟の天井の眞中程に『水乳』といふ丸い塊まりが一つブラさがつた様になつている。昔はそれから絶えず水の滴が落ちて居た様に私は記憶する。案内者に聞くと、今でも大抵いつでも水が落ちて居るのだが、今日はどうしたものか落ちないといふ。見物人が手を叩くと、不思議に水が餘計落ちるといふ昔の話を、私がフト思ひだした。案内者はそれを知らなかつた。然し私は手を叩いて見た。外の人達も皆續いて叩いた。その音が廣い洞穴内に響きわたつた。『オ、滴が見える！』誰かゞソウ云ひだした。皆が『水乳』を打眺めた。『ほんとだ。滴が光つてる！』誰かゞ又ソウ云つた。『ア、落ちた。滴が落ちた！』ソウ云つて今度は一人が、『水乳』の眞下の、小高い臺の様な處の、こわれた佛像の頭の邊を檢分に行つたが、たしかに一粒の滴の跡がぬれてゐた。皆が又かはる〲手を叩いた。『ヤ！又落ちた！』『ほんとに落ちた！』不思議が遂に實現した。皆が少しく奇異の感に打たれた。

『水乳』が鐘乳石である事、石灰洞内に於ける、溶けた方解石

の再び凝結した氷柱である事は分つて居るが、拍子の響きが果して新たな滴の落ちる原因になり得るかどうかは、我々無學者に分らなかつた。

然し、何しろこれは一つの面白い事實であつた。窟に對する我々の興味は更に一段を加へた。それから我々は更に進んで狹い底穴にはいつた。案内者はタイマツを持つて先導した。底穴内の闇さ、狹さ、物凄さも『國志』の云ふ通りである。ヤットの事で底穴を通りぬけ、更に長い大穴を經て窟の頂上に這ひだした時は、正に生き返つた心地であつた。

十六　青白族、綾族、スオノヲ族

兎にかくこれで、古代の大穴居の遺跡、土蜘蛛族の本陣本營が踏査された。皇軍、官軍があれほど惱まされた所を見ると、土蜘蛛の賊軍は決して弱小な者では無かつたのである。そしてもちろん、この本營以外、近隣地方にまだ多數の穴居地があり、穴居人があつた事が想像される。

一體、豐前地方には、こうした穴居の跡、或は塚、或は古墳が非常に多い。黑田村の綾塚といふのは、『豐前七百の古墳中、最大』のもので、『封土の高さ十餘間、周圍百間、石槨の奥行十間許』『スサノヲの命の女、抓津姫の墳墓』といふ說がある。私は遂にそれを見る機會を得なかつたが、これらが總て古墳のみで片づけられるかどうか。

青龍窟の『土蜘蛛青白族』は、前記の通り、他の（恐らく豐後の）打猨、八田、國摩侶等の諸族と結んで、『强力』の『衆類』を恃み、『皇命に從はな』かつたのであるが、右の綾塚その他の穴居族及びそれらの配下であつたらうかとも想像される穴居群族等が、果して青白族と如何なる關係にあつたのであらうか。スサノヲの命の一族は必ずしも皇軍の味方ばかりでないかも知れない。

十七　炭坑の土蜘蛛、ゴウ屋の本質

廿五日、私は高橋、落合の二君と共に、田川郡の香春嶽を見物に行つた。ついでに同地の宮地炭坑をもチョイとのぞいて見た。これは頗る舊式の、謂ゆる『狸ぼり』の小炭坑だそうだ。この狸ぼりといふ言葉は、『土蜘蛛の代議士』淺原君の身上話の中で、私はよく聞いてゐる。私はこの小炭坑の坑口で、地の底の土中から這ひだして來る坑夫達の姿を見た時、こゝに卽ち現代の、坑夫といふ土蜘蛛が居るのだと感ぜざるを得なかつた。

その歸りの道で、私等三人は又、豐津の停車場のすぐそばの前記の甲塚邊と續いて居る、低い山の中腹に、多くのゴウ屋が（今日の小借家の樣に）並んで居るのを見て來た。これらは只の土窟で、石造りでもなく、裝飾の痕跡とは考へにくい樣であ

る。聞く所に依れば、これらのゴウ屋は殆んど無數に存在して居る。その無數のゴウ屋(或は塚)が、總て古墳であらうとは、どうしても私に考へられない。古墳と、ゴウ屋と、塚と、窟と穴居の跡との關係、從つてゴウ屋なる者の本質が、又改めて考へられねばならぬ樣な氣がした。

◇

廿五日夜、私は豐津支部の人々に送られて土蜘蛛の國を出發した。

廿六日夜は大阪で休息し、廿七日朝、水平社の栗須太郎君と語つた。栗須君と語る時、私は又一種の土蜘蛛の子孫を感じた。私は水平民族の系圖と歷史を取調べるほどの興味を持つて居ない。然し歷史上に現はれて居る大和その他畿內地方の土蜘蛛が、紀州の栗須君達の先祖でない筈はないと考へている。直接血統上の先祖といふ證據はヨシ無いにしても、賤民としての階級的先祖たることに毫末の疑ひはない。土蜘蛛の子孫は到る處にいる。

廿八日、疲れきつて東京に歸りつくと、今度は、臺灣の蠻族征伐の報道が先づ私の胸を衝いた。臺灣蠻族はまた多く女筆を存して居る點などに於いて、土蜘蛛族との間に少なからぬ類似を示している。

(追記の一。十一月四日夜十一時過、東京驛に於いて。私は今こゝで鶴田知也君夫婦その他と共に、高橋貞太郎君の豐津に歸るを送つた。彼は私と同年であるが、常に若い男女を周圍に置いて、快活な議論に耽ることを樂しみ、何かにつけて絕えず社會の尖端を行かうとするモダン老人である。私は知也君夫婦その他の爲に、この絕好のパパを祝福し、又豐津の同志諸君の爲に、この絕好のパトロンを讃唆するの情に堪へない。日本社會と雖も、恐らく他に、これほど立派な『前村長』はあるまい。)

(追記の二。『文藝戰線』の同人中、猶外に、豐津の隣村光富の出身なる長野兼一郎君があり、又東京生れではあるが、父祖の血統上、やはり豐津出身の意味を持つ所の、そして又私自身と親戚關係をも持つ所の間宮茂輔があることを、こゝに附け加へるの光榮を有する。

——利彥。)

無名作家の登龍門

『文壇アンデパンダン』の提供

現代は反逆の時代である。現代人は自由と公正を愛する。いはれなき情實、不曲されたる陋習、權力への阿諛、資本への迎合、その他一切の不義と不正を惡む士は來れ。文壇アンデパンダンは既成城砦によつて進路を阻まれた無名作家のための登龍門である。

文壇アンデパンダンは我社によつて立案された世界最初の企劃である。その第一回は去る三月發表六月締切、應募創作二千三十七篇を得た。此の中から嚴選された三篇によつて其第一輯を編まれ別項廣告の通り明後廿一日發賣される。天下の期待が此の擧、此の書に集まつてゐる。

われらは此所に第一回の出版を機とし、更に改めて第二回の提供を發表する。今や出版資本主義の横行時代である。可惜英才を抱いて朽ち果てんとする無名作家、出版界の積弊を恨んで悶々たる不遇知名の人士は來れ。惠まれざる、寧ろ虐げられたる作家群出せよ。新人雅出せよ。下記の規約了承の上續々投稿を俟つ。

第二回募集（締切昭和六年六月十五日限）

『文壇アンデパンダン』規約

一、原稿は創作（小說、戯曲）に限る。

一、原稿は大體枚數を一篇一百枚以上と定めておく。但し一作を一册として出版することもあれば、また二三篇合せて一册とすることもある。故に堂々たる大作であれば一百枚以上八百枚位まであつてもよいが、それほどでもないならば三百枚位までのものが二三篇合して一册として出版し得る可能性が多い。

一、作者への配當は印税七・五%を以てする。故に一册三人の合本ならば、枚數に拘らず頭割にその印税を三等分する。五人ならば五等分する。

一、原稿は昭和六年六月十五日で〆切る。そして同年十一月上旬に發行する豫定。その場合紙方製本裝幀等に關しては本社に一任せられたい。

一、原稿は中央公論社出版部宛。但し必ず「文壇アンデパンダン」原稿と傍書あるべき事。

一、原稿は必ず書留郵便にて送らるゝ事、而して、原稿は必ず返送する故、同料の書留郵便切手を封入せらるゝ事。

一、住所姓名は原稿の終りに必ず明記せらるゝ事。

以　上

右の規定に背反する者は本社は其責に任じない。

學界閨閥網の裏面

S・O・S

「瓜の蔓に茄子はならぬ」とは遺傳を意味する言葉である。「この親にして此の子あり」とは善行美徳を賞揚する場合の遺傳をいひ、「親の子だから」とは不良な特質の遺傳に對する侮蔑の言葉である。「お母さんに瓜二つ」「お父さんに生寫し」などいふ言葉は、容貌體格の相似たるを表はすので、かやうに子は親に似るものと昔から定まつてゐる。

音樂家バッハの家系は、百三十年間に六代に亙り音樂の名手を出すこと二十九人であつた。佛蘭西の數學家ジャック・ブルヌーイ一家には五人の卓越した數學者を出した。米國の辯護士リチャード・エドワーツといふ人は、英國皇族の血を受けたエリザベス・タットルといふ賢婦人と結婚し、その間に一男四女が生れた。この一家が二百五十年後に一千三百九十四人に殖えたが、その内二百九十五人は大學卒業生、十三人の大學總長、六十五人が大學教授、六十一人が醫者、百人が牧師宣教師、七十五人が陸海軍の將校、六十人が文士著作家、百人は法律家、三十人が判檢事、八十人は副大統領、大公使、上、下院議員、州知事市長等の高級官公吏となりその他も皆中等以上の人物で罪人等は一人も出なかつた。

惡い方の例でいふと、米國にマルチン・カリカックといふ人があつた。一七七六年獨立戰爭に從軍中低能な料理店の娘と通じ、野合の結果一男子が生れたが、その後百三十年間にその子供が四百八十人に增加した。その中八十二人は夭死し、百四十三人は低能で、三十六人は野合し、三十三人は淫賣婦に、二十四人は酒客、三人は癲癇、三人は犯罪者、八人は娼家の主人と

反逆する蕃族

永松淺造

一、凌辱の無かつた理由

霧社の蕃人暴動には、多數の婦人が殺害されたが、救援隊が行つてこれを收容してみると、不思議にも一人として、彼等蕃人の凌辱をうけたやうな形跡がなかつた。

かうした暴動には、大抵婦人の凌辱が伴ふものである。例へば尼港事件の如き、濟南事件の如き、あるひは南京事件の如き、何れも聞くに堪へない殘虐な凌辱を受けてゐる。凌辱を加へたのみならず、その屍體に對してさへも、正視すべからざる暴行を加へてゐたことは、人々の知るところであらう。

若し、霧社の蕃人が、内地婦人に對して凌辱を加へようといふ意志があつたら、彼等は小兒の手を捩るよりも、容易な事であつた。

なり、正常なものは四十六人だけであつたといふ。そして此の初代のカリカックは、戰後普通の婦人と結婚して、その方の子孫が四百九十六人あつて、その中一人の飲酒家と一人の背德者とを出しただけで、その他は何れも社會の上流に立つ人物であつたといふことである。

遺傳といふことが、良かれ惡かれ、偉大な支配力をもつものであることは、早い話が進化論の主唱者、チヤーレス・ロバート・ダーウインの家系を調べてもわかることで、此のやうに歴然と事實になつて顯はれて來るものなら、われ／＼も出來るだけよい血統の家と結んで、品種の改良をやりたいと思はれる位である。

即ち、系圖で見るやうに、ダーウインの家は、祖父の代より秀れたる學者として世に顯はれ

- (初世) エラスムス・ダーウイン
  - ロバート・ワリング・ダーウイン
  - (第二世) チヤーレス・ダーウイン
  - ロバート・ワリング・ダーウイン
  - サー・フランシス・ダーウイン ― フランシス・ガルトン
    - (第三世) チヤーレス・ロバート・ダーウイン
      - ジヨーヂ・ダーウイン
      - レオナード・ダーウイン
      - ヘンリー・パーカー

た。初世ダーウインたるエラスムス・ダーウインは、植物學者として聞えかつ哲學者で詩人であつた。職業は開業醫であるが、ラマルクや彼の孫に先じて未完成ながら進化論を唱へた。最初

しかも、さういふ事實がなかつたことは、死者に對して、せめてもの仕合だつた。

だが、蕃人の生活と風習を知つてゐる者にとつては、それは決して何の不思議でもない。

彼等は、男女關係、殊に性的關係については文明人の想像もできないほど嚴格である。女尊男卑とか、女天下といふやうな讃嘆氣のあるものではないが、ともかく女を非常に神聖なるものだとしてゐる。嚴に一夫一婦主義を奉じて、文明人のやうな亂婚や姦をおくやうなことをしない。

彼等が、婦人を神聖視してゐる一例を擧げてみると、酒を造る時の事實によつてもわかる。どの蕃社にも粟酒といふものがあつて、彼等はそれを神に供へ、また男女老若とも常にこれを愛飲してゐる。その酒造法は、粟を煮て、これを婦人が嚙み、唾液でどろ／＼になつたものを、甕の中に吐き出す。その前に蕃女は溪谷の清水で身を清めて、口は鹽水で綺麗に漱ぎ、いはゆる齊戒沐浴をするのだ。麹をつくることを知らない彼等は、かうして吐き出した粟が醱酵して酒となるのを待つの

の結婚によつて、チャーレス・ロバート・ダーウインの祖父となり、第二の結婚によつてフランシス・ガルトンの祖父となつた。彼の長男チャーレス・ダーウインは、年少才器を以て知られ、醫學論文の賞としてエディンバラ大學から金賞牌を授けられたほどであつたが、天才薄命の例へに洩れず僅か二十一歳にして夭死した。二男ロバート・ワリング・ダーウインは、即ち所謂ダーウインの父であるが、医者として有名であり、その弟サーフランシスダーウインも医者だ

奇癖ある天才的人物で好んで山林を徘徊し、性甚だ蛇を好んだとある。その子のフランシス・ガルトンは、優生學者として、又生物測定學の創始者として名高い。彼はその從兄ダーウインの進化論に刺戟されたので、優生學の研究室を設け、幾多の有益な論文を發表してゐるが、その研究の何れにも優つて、彼の一家の秀才系統そのものが、優生學の根據を實證してゐたことは皮肉にとれるほど愉快なことであつた。所謂進化論の主唱者ダーウインの子も、それぞれ秀才で、ヂョーヂ・ダーウインはケンブリッヂ大學を二番で卒業し、レオナード・ダーウインは海軍に入つて指揮官として數理的頭腦の明敏を以て聞え、ヘンリー・パーカーは化學者として令名があつた。

或る席で、このやうな話から日本の事例に移つて來た時、賴山陽の家系に春水、春風、杏坪の三人を出したことや、伊藤仁齋の子に五藏があること、現在では兄弟共と大將になつた西鄕南洲弟從道、大迫尙道弟尙敏、鈴木寬太郎弟孝雄の諸家のことなどが話題に上つたが、中で皆もおどろかしたものは、兄弟共に博士となり、或ひは大臣となつた箕作家の一族のことであつた。此の家は、最初からメンデルの法則に似た觀念で配偶者を擇んだわけではなからうけれども、後にはそれに動かされてゐるやうな點も窺はれ、また、他の家筋から、この家に結婚を希望するものも出て、今ではその正系傍系を合して、宛ら枝葉綿續する大樹のやうに、學界から各方面の社會にまで根を張り枝を伸ばして、一門皆榮えてゐる現狀にある。勿論これが閨閥といふのか、どうかは知らない。秀れた人々は何らかの意味で勢力を有するやうになるであらうし、從つて自然にそれに附隨しようと欲する他の勢力が、例へば支那やわが國の戰國の諸將の

である。猿が、果實を嚙んで、木のうつろに吐き出して、酒を造る方法と同一だ。

神に供へたり、祝賀の時に飲んだりする酒を、女の唾液を加へて拵へる事は、いかに彼等が女を神聖視してゐるかゞわかる。尤も、現代人から見れば、一種のグロテスクなものとして、大いに歡迎されるかもしれないが——

また、川祭や、毎年の雨期などに先だつて、諸女の巫女を招いて、水害や溺死者などのないやうに神に祈る。これも、婦人崇拜から來てゐる一つの事實である。

それから、婦女が懷胎をすると、その夫はかたく禁忌を守り、言葉や行爲を愼むばかりでなく、家族たちも姙婦のそばにゐては、凶事や、不淨や又は感情を刺戟するやうな談話を決してしない。そして、夫は懷胎後四五ケ月後になると、絶對に姙婦と同衾しない。それは、彼等が胎兒を重するためでもあるが、婦人を神聖なものと見てゐるがためである。

その氣持は、單に同族の女ばかりに對してでなく、他の蕃族の女に對しても、內地人の女に對しても同樣である。それがこんどの、

やうに、また中世の歐洲王侯のやうに、結婚政略で結びつかうとする場合はあり得るであらうから、他の藩閥、黨閥、財閥、學閥など、同じ意味で閨閥と稱するものが出來上つてゐるのかもわからない。けれどもその親類筋をそれからそれへと辿つてゆくと、初代以來一世紀そこらの間に大きな勢力となつてゐる。少し興味を覺えたのと、感心にいろ〳〵なことを知つてゐる人が手傳つて呉れたので、こゝに發表するやうな系圖が出來上つた。勿論われ〳〵は、興信所の廻し者でないから、どんなところに大きいブランクを拵へてゐるかもわからない。また文部省のお役人でないから、それが世の所謂學閥とどんな風に結びつき、その間にどんな奇怪の事實が秘められてゐるのかも知らない。門外漢の餘技として、その不足は最初にお詫びするとして、今を時めく學界の巨頭連の多數が、次のやうな關係で系統をひいてゐることは、何と面白いことではなからうか？

以下、少しく說明を加へて見る。

×

箕作家は、近江源氏たる蒲生郡觀音寺の城主佐々木氏の第五世佐々木右兵衛泰秀から出てゐる。琵琶湖の東岸箕作村に居住したので、箕作姓を名乘つたのである。これが、何故、美作の人となつたかといふと、大阪冬の陣の際、箕作家は大阪軍に屬し、敗亡して讃州の小豆島に隱れ、後に外戚の三木氏を頼つて美作に入り、藩主松平氏に代々醫を以て仕へるに至つたからである。

阮甫の父は箕作貞固、丈庵と號して醫術に秀れ、藩主松平越後守康哉に愛せられた人で、阮甫はその二男である。青年時代京都に學び、一旦郷里に戻り、儒家大村誠意の長女登井と結婚すると間もなく江戸に上つた。江戸で同藩の宇田川榛齋に刺戟されて、西洋醫學を學び、蘭學に通明した。當時、江戸の蘭法醫學には、大槻玄澤の流れと、桂川甫周を始祖とする二つの學統があつて、阮甫は彼に蘭學の手ほどきをしてくれた宇田川榛齋と共に前者の系統をひいてゐた。阮甫の頭腦の明晰であつたことは、坪井信道と共に宇田川門下の一秀才と謳はれてゐたこ

ある殘虐極まる殺戮騷ぎの中に、一つの婦女凌辱も起らなかつた理由と見るべきである。尤も霧社の裏山で、一人だけ若い婦人が凌辱されたらしい形跡があつたが、若しそれが事實とすれば、兇蕃の兇刄を免かれた本島人の所爲であらうといふことである。

二、蕃人の恐れるもの

こんどの暴動の元兇であると睨まれてゐる花岡一郎は、その弟の花岡二郎と差しちがへて自殺したなどゝ傳へられてゐるが、拓務省へ着いた公報によつても、兎に角死んだとは確かだ。只蕃女百何名かゞ殉死的に自殺したとも傳へられてゐるのは誤傳らしく、彼女たちは、男と共に戰鬪に從事して、兵站部で甲斐々々しく活動してゐるらしい。

兇蕃の武器は、霧社の警察分室から奪取した百五十挺の銃と、一萬數千發の彈丸がその主なものである。機關銃も二三門あるやうだが、これは本島人が密賣したものらしい。大正三年頃までは、蕃人は狩獵用又は護身用として、一家一挺、あるひは一人一挺といふ割

とで首肯される。

阮甫は幼時怪我をしたので右手が悪く、ものを食ふには箸を持たずに匙をもつて食べてゐた。癇性すぎて、神經質な人間であつたが、天性學問好きと見えて、病中でも書物を離したことがなかつた。自ら齒臂生と稱へ、戯詩を作つて、

憐殺雙肱似蟹腕、幸欣兩眼辨蠅頭などと詠じてゐる。

當時は高野長英が捕へられ、高島秋帆や渡邊華山が下獄した頃で、蘭學は禁厭されてゐたのであるが、阮甫の學名は追々と田舍の醫者仲間にも知られるやうになり、その著「外科必讀」「海上砲術全書」等は世に行はれた。しかし、家計は常に窮乏がちで、識者の體面を保つにはかなり苦しかつたやうである。後、蘭學の禁厭が解けて、幕府に召されて天文臺の譯員となり、嘉永六年ロシアの使節が長崎に來た時は、通譯官として長崎に赴任したりした。そのために美作藩を脱して幕臣の籍に入り、晩年には蕃書調所の教授職等に就いた。

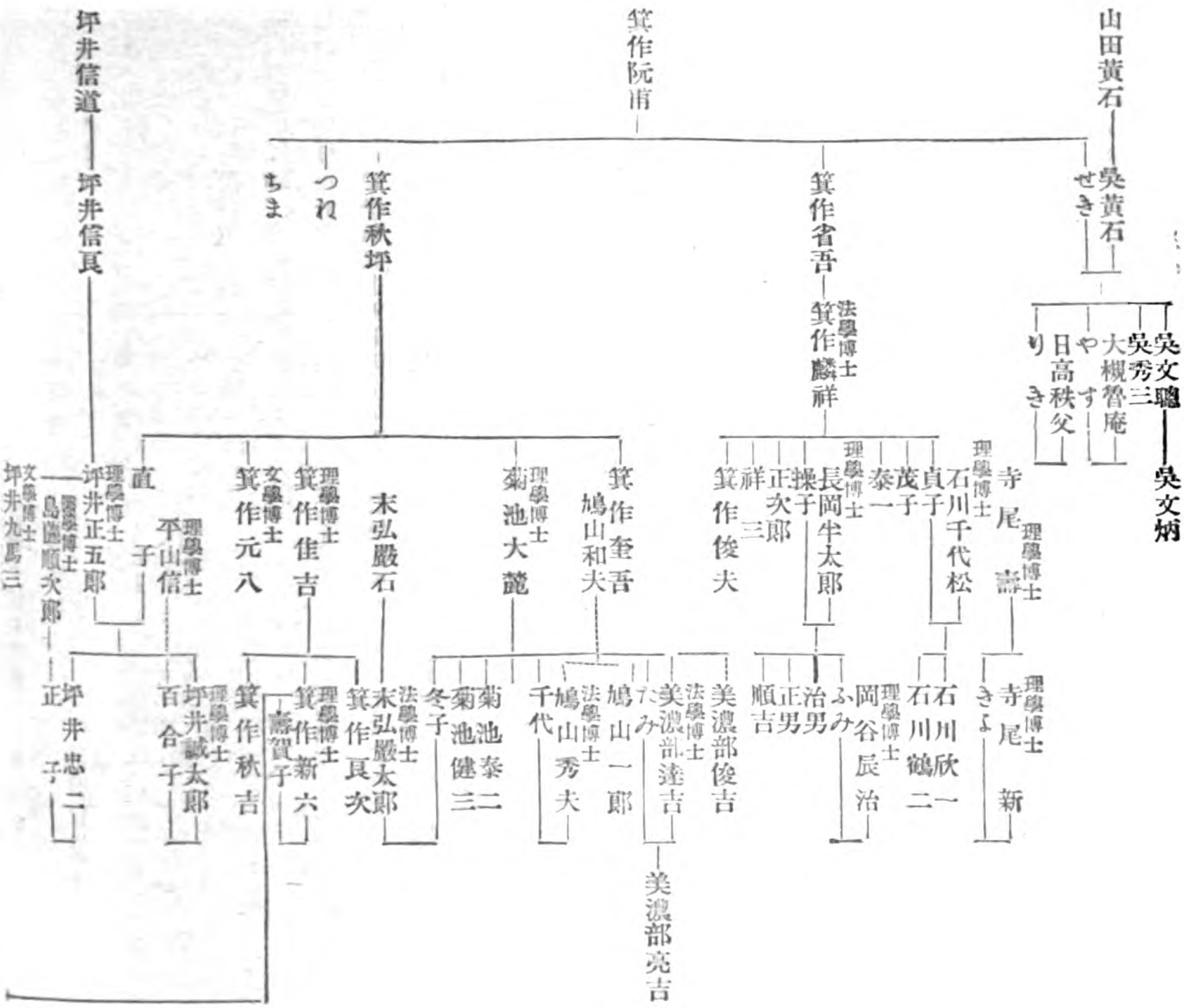
阮甫に三人の娘がある。長女がさき、次女がつね、末女がしん。男子がないので養子を貰ふことになり、阮甫が四十二歳の時、美作藩の島崎想庵の次男曹二を養子にしたが、性格が合はなかつたのか、翌年これを廢し、仙臺領水澤の藩士佐々木佐衞次秀規の二男省吾を得て養子とした。

省吾は幼名高之助。十八歳の頃江戸に出て、金に窮して奉公口を探してゐるうちに、鍛冶橋際の阮甫に紹介され、その内弟子となつた。省吾も幼時右手の人差指を怪我して不具であつたが、頭腦の極めて明澄な青年で、氣心も阮甫に適ひ、養子に乞はれたのである。省吾は二十二才であつた。配するに長女を以てすべきであるが、末娘は器量が悪かつたので、その末娘を妻とした。少し變な話であるが、別嬪だつた他の二人は、他家へ嫁にやることも出來ようからといふので、當時家計の苦しかつた阮甫が娘の件で心配させまいための遠慮からであつたと傳へられてゐる。この仲人には、阮甫の友人山田黄石がなつた。黄石の子も、省吾と机を列べる弟子の一人であつて、黄石の後を繼いでやはり黄石と名乗り、藝州の吳の人であるから山田姓を

で小銃を持つてゐたが、總督府は理蕃の上に有害なものと認め、全部沒收してしまつた。しかし、彼等は大木のうつろや、洞穴などに隱匿して、巧みに警察官の眼をかすめたものがある。それらの銃が、こんどの兇變に使用されたことは言ふまでもない。

たゞ、公然と彼等の所有してゐる武器は、蕃刀だけである。その蕃刀は出刄庖丁のやうな形をした刄渡り一尺乃至二尺ぐらゐのもので、甚だ鋭利でない。鈍刀だ。首を斬る時は三太刀、四太刀を加へる。それでも斬れない時は、首に蕃刀を當てゝ、石で刀の峯を叩いて斬り落す。本當の叩き斬りだ。しかし、こんどの霧社の騷動では、小笠原郡守のそばにゐた内地人が、二た太刀で首級を叩き落されたといふから、こいつは蕃刀の中でもよほど切れる代物だつたと見える。

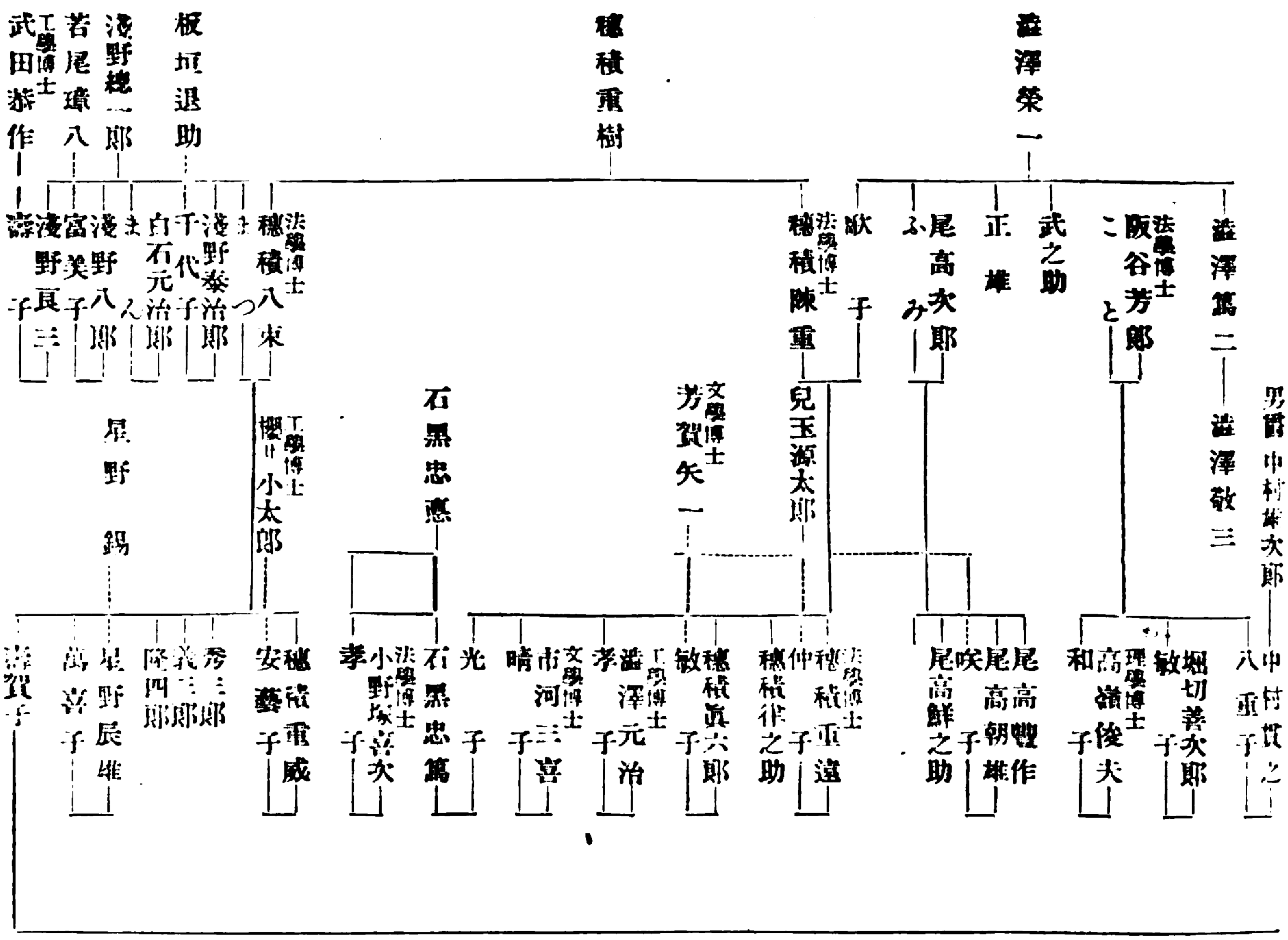
蕃人の男性は、子供でない限り、悉く銃の操縦法を知つてゐる。それが、こんどの暴動にあたり、討伐軍にとつて最も打撃だ。どうして彼等が操縦法を知つてゐるかといふと、彼等は唯一の食糧たる獸肉を得るために狩獵に



出かける。彼等獨得の強い弓と矢があるが、それでは十分でない。そこで、駐在所では彼等に三日以内を限つて銃を貸してやる。彼等は、それを持つて、家族が拵へた粟の握飯を腰に下げながら、泊りがけで奥山へ行く。そして遲くも三日目には獲物の鹿、兎、雉、鳩などをしこたま土産に持つて歸る。

かういふことで、彼等は巧みに小銃を操ることができるのだ。討伐軍の將卒に、頻々として死傷者を生ずるのも、彼等が狩獵で鍛へた腕で對抗するからだ。

飛行機は、蕃人を威嚇するのに、最も偉力を發揮するものゝやうに傳へられてゐるが、蕃人自身はさほど恐れてゐないやうだ。最初は、恐ろしい魔物が頭上に襲來したものとして、極度に恐怖を感じたものだ。しかし大正四年蕃人討伐のため、蕃界の上空を飛んでゐた飛行機が、故障のためグヌン蕃社の中に墜落すると、彼等はその正體を見極めるためにこは〴〵ながら近づいてみると、二人の内地人が乘つてゐたので、一人は殺して首を取り一人はほうぼうの態で逃げ出してからといふ



ものは、少しも飛行機に對して恐れなくなつた。もちろん、その爆彈投下に對しては恐れるが、飛行機を一種の魔物として恐れるやうなことは絶對にない。

彼等が一番恐れるのは流行病と蛇である。衛生設備がないので、一たび彼等の間に傳染病が浸入すると、將棋倒しにバタ〳〵と死亡する。大正九年流行性感冒が蕃地に浸入して見る〳〵數百人の蕃人が死亡すると、彼等は、『これは内地人や本島人が、我々に接近するために傳染するものであるから、彼等が我々に接近しないやうに殺して了へ』

といふ各酋長の申合せが成つて、二三の蕃社が一齊に蜂起して百七十四人を殺した。無智から來た悲劇も、こゝにいたればたゞ唖然たらざるを得ない。

蛇を恐れることは一種の迷信から來てゐるが、一つは毒蛇に咬まれて、忽ち命を落すことにも原因してゐる。彼等は、狩獵に出かける時、その道路の前方を蛇が横ぎるやうなことがあると、けふは凶日だと言つて、家へ引き返して、その日は狩獵に行く事をやめる。

嫁して吳黃石と改名した。この吳黃石が、後に長女のさきを後妻に迎へ、次女のつねは美作藩預所學校附の儒者菊池士郎の次子秋坪に嫁した。

さて、省吾であるが、彼は二十五六才までに日本國中をすつかり歩いた地理に明るい人物で夢霞山人と號してゐた。蘭學を阮甫に承け、譯著に「坤輿圖識」があり、その書中の蘭語 Republich (共和國)に對する譯語に窮して、大槻盤溪を訪れた話も殘つてゐる。極めて精緻な頭腦であつて、後生を囑望されたのであるが、一子麟祥を生んだ弘化三年の十二月に、咯血して二十六才の短かい生涯を閉ぢた。

そこで、麟祥は祖父阮甫に育てられ、省吾の妻しんは加州侯へ御殿奉公に出て、名をちまと改めた。省吾の急逝で、阮甫も賴りなく思つたものか、次女つねの夫菊池秋坪を懇望して箕作家を嗣がしめた。

秋坪は省吾と同じやうに阮甫門下の秀才である。彼の父士郎は文理と號した儒者で阮甫と父子の約束した後、大阪の緒方洪庵について學び江戸に戻つてから、箕作姓を繼いだのである。年は二十六才であつた。この人は明治になつて森有禮や中村正直等と明六社を起し、後東京師範學校が出來た時、その最初の校長たる攝理の椅子に就いた。妻つねとの間に奎吾、大麓、佳吉、元八を生み、つねの歿後に省吾の未亡人しんを迎へて後妻とした。此の後妻との間に生れたのが坪井正五郎に嫁した直子である。それ故に、箕作家はこゝに省吾と秋坪との二人の秀才によつて、二つの流れに分れたのである。しかし、省吾の妻しんはまた秋坪の後妻ともなつてゐるから、此の邊のところは、遺傳學から觀て一層面白い材料を提供するものであらうと思はれる。

×

阮甫は、孫達の命名に當つて、一二三四の數字を當てた。一番最初に生れたのに貞一郎(後に麟祥)次に生れたのが吳黃石の子で箕士(士は二と同音、後に文聰)この弟に三と四を殘して第三番目に生れた秋坪の子に奎吾次が大六(後に大麓)次が佳橘(橘に七の積)、次が元八、黃石の次男には秀三、三男が生れなかつたので四だけが欠になつてゐる。

内地人が、蛇を捕つて食つてゐるのを見ると彼等は身慄ひして驚き且つ恐れる。

三、歐洲人の血を傳ふ

臺灣の蕃族は、七種族あるが、アミ族の平地蕃と、ヤミ族の島嶼蕃を除くほかは、悉く八百尺以上六千五百尺の高地に住んでゐる。

最初、彼等も平地に住んでゐたが、優勢な移住支那人と激しい生存競爭の結果、その一部は淘汰同化され、大部分は衰亡の悲運に陷り、生存慾の強い者が山中に入り、だん／＼追はれて、その大部分が今日のやうに交通不便な高原地に生活するやうになつた。しかし今日では、支那人の血や、間にはスペイン人やオランダ人などの血が混つて、蕃人の純血を傳へるものは極めて少數である。

霧社の蕃人には、特に白人らしい風貌を有してゐる者が多いが、これらは曾て蘭人や西人が頻繁に來航してゐた時代に、血が混つたのであると觀測されてゐる。

現在の蕃族及人口は左の如きものである。

タイヤル族　三萬三千人

そこで、この最初の孫の麟祥であるが、彼は阮甫が幕臣に列して文久三年歿したので、その嫡孫として徳川家宗筋の跡を継ぎ、祖父の後を承けて開成所教授見習となり、慶應三年正月徳川民部大輔に随つて佛國に留學して明治元年二月に歸朝、明治政府に仕へて一等譯官となり、ナポレオン法典を譯して多大の功績があつた。累進して司法次官、元老院議官、行政裁判所長等に任ぜられ、貴族院議員となり、我國最初の法學博士の學位を受け、從二位勳一等男爵の高位を以て明治三十年十二月五十二才で歿した。

奎吾は麟祥と同じく素晴らしい秀才で、秀才といふより寧ろ天才の慨があり、性格も闊達ですべてに光彩潑溂としたところがあつた。十五才で開成所の教授補となり、間もなく幕府から英國に留學を命ぜられ、ロンドンに滯在すること一年、明治維新の急變を聞いて歸り、明治政府に用ひられて、少博士に擧げられたが、明治四年、外國で習つた水泳を稽古中溺死してしまつた。歳僅かに二十才。此の奎吾の歿後間もなく母のつねも病歿し、しん即ち後のちまが秋坪の妻となつた。

大麓は父秋坪の實家に當る津山の菊池家を嗣いで、菊池姓を名乘つた。幼年時代に英語及び蘭語を修め、幕命によつて英國に渡つて、理化學を專攻したが、その時の歳は僅かに十二で鋭敏な才は、兄奎吾を偲ばせた。明治元年一と先づ歸朝し、同三年再び英國に留學してケンブリッヂ大學に學び、前後十數年を海外に費した。歸朝後は東京大學理科大學長となり、二十一年理學博士、三十一年帝國大學總長に榮進し、三十四年文部大臣次いで男爵となり、樞密院へ入つて大正六年六十二才で歿。我國における數學界の開拓者で、その最大權威であつた。但し彼が政治家の器でないことは、その文部大臣の時、例の教科書事件にひつかゝつて無能を暴露した。教科書賣込みに關する醜聞は、久しい以前から公然の秘密とされてゐたのであるから、文部大臣としては宜しく制度を改正し、事の疑ひある者に對しては行政處分を行ひ、事を未然に止むべきであつたのが、彼は司法省の内問に對して斷じて左様な事なしと突ッ撥ねた爲に、不祥事件で教育界を塗り潰し、内閣の同意を得て發表した學制案さへ踏み潰されて文相を辭職し

ブヌン族	一萬八千人
ツオウ族	二千人
パイワン族	四萬一千人
アミ族	四萬一千人
ヤミ族	一千六百人
サンセツト族	一千二百人
計	十五萬七千八百人

この内、最も兇暴なのはタイヤル族で、こんどの騒ぎを起した霧社蕃も、これに屬してゐる。アミ族は殆ど本島人の生活に近く、納税の義務さへ果してゐる者がある。彼等の子供は、花蓮港や高雄あたりの市街地に出て、商店の小僧や女中奉公などをして、忠實に働いてゐる。一風變つたのは、屏東で賣春婦をやつてゐるが、珍らしいので相當に流行してゐる。

この頃は、各蕃族を通じて就學熱が盛んで本島人の就學率二十七八パーセントに對し、蕃人の就學率は平均三十八パーセントに達し殊にタイヤルの如きは四十一パーセントを示してゐる。

をかしなことには、彼等は七八歳までは自

たのである。

佳吉は安政四年十二月江戸藩邸に生れ、慶應元年保田東潜に師事し、明治四年には慶應義塾に入つて英學を修めそれから更に大學南校を經て六年米國エール大學に遊學して動物學を修め、更に英國に轉じてケンブリッヂ大學に發生學の大家バルフォアに師事して歸朝した。その後文部省御用掛から理科大學教授となり、理科大學長に進んで、その頃大學に根を下ろした箕作閥の中心となつた。彼は水産學方面に力を入れ、かの御木本の眞珠業は彼から出てゐるところである。佳吉は阮甫の最初の籍、即ち津山藩の箕作家を嗣ぐことになり、奎吾の後を嗣いで靜岡(徳川)藩籍の箕作家におさまつた元八、及び幕臣箕作家の麟祥と、菊池家を相續した大麓とならんで箕作の家は四家に分れたことになつた。

佳吉の夫人は岐阜縣人五島孝繼の長女安子で、二人の間に良次、新六、花子、秋吉の四子があるが、嗣子良次は、學問に志無く、東大政治科を出てから日本郵船に入り、その後コンマーシヤル・インテリセンス・ビューローの專務理事を勤めてゐたが、最近外國婦人との問題で新聞紙上を賑はして學者揃ひの系統中にも時として變り種のあることを實地に證明してゐた。

その次の**箕作新六**は、東大の化學科を出て、現に理學博士東北帝大教授である。末弟秋吉も東大應用化學科を出て海軍技術研究所で研究的生活に入つてゐる。それで、佳吉の後に學者としての正統をつぐものは新六であるわけである。

元八は史學者として有名である。明治十八年に東京大學理科大學を卒へ、獨逸に留學して滯在六ケ年、初めは動物學を修め、後に史學を專攻して歸つた。帝國大學をはじめ各校に史學を致へ「フランス革命史」「世界大戰史」等の大著を遺して、大正八年五十八才で亡くなつた。彼が何故動物學から史學へと、風變りな轉回を試みたかといふと、眼が惡くて實驗の際に顯微鏡が覗けないといふことにあつた。書物なら讀めるから、史學に鞍替へしたのであるが、文科大學の出身者でない者を、文科大學教授にしたことは、元八がその背後の閨閥に負ふところであると、此の時には一部には非議する者も出た。勿論之は、文科大學の教授になる前に、高師、

分の年齢を超えてゐるが、十歳前後になると本人もその兩親もその年齢を忘れて了ふ、いはゆる山中暦日なしといふのだが、そのため就學年齢七歳となつてゐても、十四五歳にして初めて就學するやうな少年少女もゐる。

霧社のやうな市街の形をなした處には、公學校といふものがあつて、教師には訓導がゐるが、教育所といふところには、駐在巡査やその細君が蕃童を相手に「いろは」から尋常六年程度のものを教へてゐる。今日では、全蕃社を通じて、約二百三十ヶ所の公學校及び教育所がある。花岡一郎などゝいふのは、尖端的なもので、たいてい片假名で書く蕃名を有つてゐる。言語は明晰、態度は活潑で、内地人の學童を凌ぐのも少なくない。

服裝は、永い習慣や經濟上の關係で、たいてい蕃服を纏ひ、跣足であるが、たまには内地人の服裝をして昇校する蕃童もある。霧社暴動の際、ある蕃童が羽織袴で内地人の子供と同樣な服裝をしてゐたゝめ、内地人と間違へられて殺されたといふ話もある。

一高の教授を勤めてゐるが、赤門の各學部ではいかに學識があつても、帝大出身でなければ、その地位は講師又は助教授に止められてゐるのが普通で、それが內規とされてゐるのであるから、元八が理科大學に教授になるなら兎も角、外國で史學を學んだ資格で、文科に教授となつて來ることは偏頗な處置であるといふのであつた。

しかし、學識があれば、出身校の如何に拘らず、またその門閥の如何に拘らず教授にしたいものである。

直子の嫁した坪井正五郎は、阮甫と共に宇田川門下の二秀才と謳はれた坪井信道の孫で、明治元年徳川氏に從つて一家を擧げて靜岡に移つた舊幕臣坪井信良の子である。彼は明治十九年に理科大學を卒業し、箕作佳吉に就いて動物學を修めたが、大學院では人類學を專攻し、在學中「埼玉の横穴」の論文を起草してゐる。これは本邦最初の人類學研究であつた。彼の先輩には石川千代松、佐々木忠次郎、飯島魁等がゐて、大森貝塚の發掘者米人モールスに師事してゐたが、彼自身はモールスと師弟の關係はなかつた。しかも、彼自らは日本の人類學の開祖を以て任じてゐたから、モールスを以て日本の人類學の鼻祖とすることに反感をもち、何時だつたかその研究室にあるモールス蒐集の大森貝塚採集の土器石器骨器等を、標本板からもぎ取つて他に移してしまつたことさへある。モールスは大森貝塚論文中に考古學といふ言葉を用ひて、人類學といふ言葉を用ひてないから、坪井を以て人類學の創設者といふことになつてゐるが、そんなことは兎も角、彼は東京人類學會を起し、長く理科大學教授として斯界に貢獻してゐることは認めなければならない。たゞアイヌ口碑に殘るクロポックルを以て先住民族として、後にその誤りを指摘される不始末はあつたとはいへ。

彼が人類學なるもので學界の一隅を占有することが出來たのは、動物學主任教授であつた義兄佳吉の外に、やはり義兄の菊池大麓が理科大學長であり、かつ總長渡邊洪基は、坪井の先代に教へを受けた恩義に感じてゐたから、その結果は坪井の學問と人物に注意し、他の反對あるに拘らず當時なほ時期尚早の人類學なる學問を大學に引き入れ、坪井に官費留學をさせて教授

四、急激な文化政策が仇となる

こんどの暴動の原因が何であるか、まだハッキリ判つてゐないが、拓務省方面での觀測によると、親切が仇になつた形である。

理蕃政策として、なるべく蕃人の男性を生業に就かしめようとして、安い賃銀ながらも彼等に勞働を與へることにしてある。ところが、彼等は永い因襲によつて、家をそとにして好きな狩獵に從ひ、勞働や農耕に從事するのは女の仕事としてゐる。そして、人に使役されることを非常に嫌ふ。だが、この頃は殆ど強制的に種々の勞役に徵發するので、彼等は非常な反感をいだいてゐた。といつて、直接その指導監督にあたる警察官は、決して虐待酷使するといふやうな事實は殆どない。むしろ、彼等警察官は、おかしい位に蕃人を庇つてゐる。拓務省あたりの役人が、殖產興業の見地から、もう少し蕃人に勞役を課しては何うだと注意することがあると、蕃地の警察官、殊に每日直接に蕃人と關係してゐる巡査たちは、自分の子供の事のやうに反對して蕃

に任命し、安心して斯學を專攻せしめる結構な身分にしたのである。當時緊急を要する他の諸講座の創設を犠牲にしてまで、坪井のために講座を設けたのは、既に門閥といふ一つの勢力にまで發展して來てゐることを物語るものである。

夫人直子は、秀才の血統であるから、頭腦明らかな、かつ語學にも堪能な女であつたから、坪井にとつては良き内助者であつた。二人の間に男誠太郎、忠二の男子がある。

此の正五郎の嗣子坪井誠太郎は、現に理學博士で東大教授である。大正六年の東大理學部地質學科を首席で卒業し、我國地質學界の元老理學博士小藤文次郎隱退後の岩石學講座を受け繼いでゐる。弟の忠二は大正十五年の東大物理學科の出身で、兄と共に秀才の評聲高く、現に助教授として地震研究所にゐる。彼等兄弟の夫人は、これまた學界に隱然重きをなす家の出で、兄誠太郎の夫人は前の天文台長帝國學士院會員理學博士平山信の長女百合子であり、忠二の夫人は京大より東大に轉じた内科醫學の權威醫學博士島薗順次郎の長女正子である。

なほ坪井の遠縁に當る者に東大名譽教授文學博士坪井九馬三がある。彼が史學界の先達であることは世間周知の事であるが、坪井正五郎の義兄箕作元八を史學科に教授として迎へた際に彼が文科の學長であつたことなどは、あづかつて力があることであらう。

呉黄石の長男呉文聰は、「理論統計學」や「社會統計學」の著書があり、我國の統計學の開祖として名高い。慶應義塾に學び、大學南校を經て、統計學を修め、卒業後は統計協會を起し、「統計集誌」を發行し、又官界に入つて統計官となり、東京高商や慶應義塾に教授であつた。大正七年六十八歳で亡くなつたが、彼は箕作麟祥が明治三年に神田の神保町にゐた頃の弟子の一人で、同門に中江篤助や大井憲太郎のゐたのも面白い。文聰の子文炳は、現に三菱社員にして兼ねて立教大學に信託法を擔任してゐる。

文聰の弟呉秀三は、現に東大名譽教授で、精神病學、生理學等の元老である。

彼の妹やすの嫁した大槻磐庵は、箕作阮甫の友人大槻俊齋の門人で伊豫吉田の人であるが、やすは嫁して間もなく歿した。

人の立場を擁護する。それは、決して故らにさうするのではなく、しよつ中彼等に接近してゐると、その純眞と愚直に引きつけられて自然と可愛ゆくなつてくるらしい。また蕃人の方からも、親のやうに慕つてゐる。

だから、警察官はこれら蕃人に對して氣を許してゐた。安心し過ぎてゐた。これがこんどの騷ぎを大きくした一つの原因である。婦人問題もその一つであつた。これは、蕃人に限らず、内地でも、また外來人や他村の者に自分の部落の娘が犯されるやうなことがあると、ひどいリンチを加へる。それは殆ど不文律の掟になつてゐる。蕃人の婦人たち、それも蕃女中の美人たちが、内地人に引つこ拔かれて行くことは、彼等男性に取つて堪へ難い苦痛だつた。機會あれば復讐しようと思つてゐたところへ、同地駐屯の軍隊が引きあげたので、一擧に内地人の有力者を屠るべく、運動會の日を選んで事を擧げたのだ。その他、勞働時間や使役の問題もあつたが、要は、あまりに急激に彼等を文明人たらしめようとした努力への反逆だつたのだ。

やすの次妹がくみで初め柏原氏に嫁し、故あつて生家に戻り、晩年は明治女學校長として過した。くみの下が末妹りきで、日高秩父に嫁した。日高は宮内省の官吏であつたが、書家として聞えた人である。

×

麟祥には先妻と繼妻とがあつて、先妻は長野縣の士族で儒者の三澤精確の第三女もと子で、もと子は十四才にして嫁してゐる。この夫人との間に、三男三女あるが、いづれも短命で世を終つてゐることは、その餘りに弱年にして嫁したが故ではあるまいか。卽ち貞子、茂子、泰一、操子、正次郎、祥三の六子のうち、茂子、泰一、正次郎は夭折し、長女の貞子は現存の理學博士石川千代松に嫁し、三女操子は理學博士長岡半太郎に嫁したが、いづれも短命で、祥三も廿四歳で夭折した。

麟祥後妻は靜岡の士族大前寛治の第三女とみ子で、彼女は三十三歳で後妻におさまつた。麟祥との間に俊夫をあげ、現在箕作男爵家は祥三の歿後この俊夫が嗣いでゐる。

麟祥の長女貞子の夫で我國動物學界の耆宿東大名譽敎授理學博士石川千代松は、舊幕臣石川惟安の弟で、明治十五年東京大學動物學科を出た。初めはモールスの門下で、モールスの歸國の後は箕作佳吉の指導を受け、大學卒業後暫らくは佳吉の助手であつた。こんな關係で當時の總長外山正一の仲人で、佳吉の姪に當る貞子と結婚し、大學に根を張る箕作・菊池閥の傍系に入り、駒場の農科大學敎授として、ダーウイン及びワイズマンの進化論の祖述者として世に顯はれた。

千代松の長男欣一は畑違ひの新聞記者として文名があり、長女きみは水産講習所敎授の理學博士寺尾新に嫁してゐる。寺尾新の父理學博士寺尾壽は、明治十一年東大物理學科の第一回卒業生で、十六年にフランスから歸朝して大學の理學部講師となり、フランス流の天文學講座を開いた。後、大學敎授に進み、東京天文台長の職に在ること三十一年間、現存の天文學者は殆ど彼の門下に育つたものである。

大正元年から昭和元年までの蕃害は左の如きものである。

大正元年	七百六十一人殺害
同　二年	二百四十人
同　三年	二百十四人
同　四年	百六十五人
同　五年	百人
同　六年	百三十七人
同　七年	四十一人
同　八年	二十四人
同　九年	百七十四人
同　十年	五十二人
同　十一年	十六人
同　十二年	四人
同　十三年	二人
同　十四年	二人
昭和元年	九人

昭和元年から今日までは、毎日二三人ぐらゐの被害があり、それもたいてい本島人であつたが、今年は本島人の被害は殆どなく、內地人のみを狙つたところに、從來の蕃害との相異點がある　そしてその原因も單純な誤

麟祥の二女操子の夫東大名譽教授帝國學士院會員理學博士長岡半太郎は、長崎縣の人で、明治二十年東大物理學科を出で、東大教授として、大學における長作閥の一翼を成してゐた。が、閥の如何に拘らず、彼が日本の物理學界を一人で背負つて立つ碩學であることは、充分に認められるところで、彼の盛名をして世界的に不朽ならしめたものには、原子構造に關する破天荒の學說がある。その理論は延いて水銀から金を採ることに成功したが、その他に彼の世界的發見は澤山あつて、我が科學界が眞に世界に誇り得る第一人者とされてゐる。夫人操子は早く逝き後妻を迎へたが、三男一女があつて、男には父の業を繼ぐ者なく、女フミが理學博士岡谷辰治に嫁してゐる。

×

大麓とその夫人たつとの間には四男八女がある。男爵を嗣いだ者は長男泰二であるが、泰二は東大物理學科を大正六年に首席で卒業した秀才系統の名を辱めない鋭才で將來を囑望されてゐたが、英國に留學中若くして客死し、その弟冠三が家督を相續するに當つて、男爵を辭退したので男爵菊池家は大麓より泰二に至つて絕えたことになつた。

大麓の二女は法學博士美濃部達吉に、五女千代は法學博士鳩山秀夫に、八女冬子は法學博士末弘嚴太郎に、それぞれ嫁してゐる。このうち美濃部達吉は兵庫縣人美濃部秀芳の次男で、前朝鮮銀行總裁美濃部俊吉の弟に當つてゐる。明治三十年東大法科の出身で、歐洲留學後東大教授として、憲法及行政法講座を擔當し、現にその權威者として重きをなしてゐる。彼の長男亮吉はまた東大經濟學部を出で、今はその助教授の地位にあるが、夫人百合子は拓務政務次官衆議院議員小坂順三の長女で、深井英五、津野田是重、田中隆一郎（文部大臣田中隆一長男）各夫人の姪に當る。達吉の姪でまた俊吉の娘である俊子は、現東大工學部冶金學科助教授工學博士大山松次郎に嫁し、また俊吉の長男熙は東大農學部を出て、その助手を勤めてゐる。遠からず助教授になるであらう。

鳩山秀夫は人も知る故法學博士鳩山和夫の次男で、現政友會總務鳩山一郎の弟である。明治

解や迷信からでなく、經濟的關係が主要因となつてゐるところに、こんどの蕃害の特異點がある。此點、特に爲政者の注意すべきところであらう。又その遣り方があまりに組織立つてゐるところから、支那方面から密かに渡來した共產主義者の指導によるものではないかとの說もあるが、それはあまりに穿ちすぎた消息ではあるまいか。

四十一年東大法科末件行の秀才として穂積重遠と雁行して出で、教授として民法講座を擔任し座て法學界の花形學者であつたが、今は退いて辯護士を開業してゐる。

末弘嚴太郎は大分縣人末弘嚴石の長男で、四十五年東大獨法科を首席で出で、ドイツから勞働法を携へて歸朝し、東大教授として、現に學界の新人として名聲嘖々たるものがある。彼の父嚴石は、東大法科の前身司法省法學校時代に梅謙次郎、松室致等と同窓で、明治十七年そのビリ尻で卒業したが、決して鈍才だつたわけでなく、大審院部長判事として、かの幸德事件その他を裁き名のあつたことは書くまでもない。

美濃部、鳩山、末弘とならんで、箕作系統の菊池閥なるものが法科に出來、理科方面の箕作閥と呼應して、一時は非常な評判のものであつた。が、これは實力によつて立つものであつたから、世間にもむしろ好感を以て迎へられてゐたやうである。

以上を通覽すると、最初蘭學を以て起つた系統が、自然科學に進んでその領域に榮え、それが漸次死絶してわづかに東大の坪井誠太郎、東北大の箕作新六等の少壯によつて殘壘が守られ別に中途から派生した菊池系が法學界の中樞に據つて昔日の盛觀を維持してゐる現狀にあるが、傍系には石川、長岡、吳、等の學界巨星が控へてゐる上に、平山信、島簡順次郎等の一方の權威が、新らしく加はつたから、箕作の直系は淋しくも、その全體としてながめた勢力は、遙かに倍するものがある。これを閨閥と呼ぶならば、やはり學界の中心には箕作閨閥があるといふことを意味してゐる。

その上、數年前、この箕作閨閥中の正系と目される東北大の箕作新六の夫人に、穂積閥として世に知られてゐる一門の、法學博士故穂積八束の末女が配せられたからして、こゝに、二つの大きな閨閥は、完全に握手した形になつてゐる。そのことは後で述べるとして、まづ穂積の家を調べて見よう。

×

穂積の家は宇和島藩伊達家の臣、鈴木源兵衛穂積の重胤に至つて、國學を宇和島に興した人

新刊紹介

大地のはらわた（西村眞琴著）著者は理學博士大毎事業部長の劇職にある人。本書には澄みきつた科學のメスが振はれて居るとともにゆたかな詩の感情が感ぜられ、盡きせぬ趣味情緒をそそる。（四六判六〇〇頁、挿圖數拾葉、定價二・五〇、刀江書院）

近代日本外國關係史（田保橋潔著）著者はペートル大帝時代の東亞探險に起し、複雜多岐をきはめた日本內外の事情を、多方面の角度から展望し綜合し把握し、以て明治開國前後の史的眞相を究明せんとせる力作。著者は京城帝大教授。（菊判七〇〇頁、定價六・二〇、刀江書院）

日本經濟史概說（本庄榮治郎著）その第三分冊、完結篇である。社會經濟史の分野に於て中心問題をなせる金融と交通の全貌を平明に指示せる新發表。（菊判一〇〇頁、定價一・〇〇、刀江書院）

偉人物語・努力の人々（大山廣光著）發明發見冒險事業家五十六氏に關する逸話集、子供の讀みもの。（四六判三一七頁、定價一・五

として讃はれた。代々一百五十石の物頭の家で武を事としたが、重胤は本居大平の影響を受けて國學を好み、その子重樹もまた藩校の國學教授として仕へた。穂積陳重はその子で、國學調に「穂積の遡」といふ意味で幼名を邑次郎と命名されたが、父に就いて學んだ後、岸田塾に入つたが秀才の名は近隣に聞え十六歳の時選拔されて貢進生として東京に上つた。

彼の家は貧乏で苦學の外學ぶ途がなかつたが、素封家入江某が、その才を愛して養子に迎へ、その娘を娶すつもりで學資を給した。彼はその學資を得て明治九年海外に留學し、英獨に五ケ年間學んで、明治十四年に歸朝、翌年東京大學法學部長となり、入江家と絶つて澁澤の女と婚し、我國法學界の元老としての地位に長く據つて、法科の穂積か、穂積の法科かとさへ言はれた。帝國學士院長、樞密院議長男爵となつて、昭和四年七十幾歳かで長逝した。彼が養家を棄てゝ、天下の富豪澁澤の女を娶つたことは、當時一部の青年を支配した立身出世に狂奔する輕薄な功利思想の結果として、屢々非難されたところであつたが、事實は、さう早合點する程どのことでもなく、養家より學資を仰いだことや、その娘と許婚であつたことは事實であるが、結婚して同棲してゐたものではなく、その上相手の娘も少し薄野呂の方であつたといふから、英國に在つて當時在世せるダーウインやスペンサーから直接に進化論的な觀方を學んで歸朝した新人の彼としては、いかに恩義はあるとはいへ、結婚に躊躇を感じたであらうことは、理解されないことではない。但し、澁澤の女を娶らうと決心したことは、やはり一種の功利心が強くはたらいてゐたであらうことも、また理解されないことではない。彼は、法理學者としては法律進化論その他多數の著書があるが、むしろその人柄が溫厚篤實で、元老らしい風格があるといふだけで、しかもあれだけの勢力をもち得たことは、少くともその夫人を通じて贏ち得た門閥の權勢の支持によるものと考へられるからである。弟の八束を法學部の教授に迎へ、多數有爲の門下を輩出して、穂積兄弟に睨まれると法學博士になれないなどと畏れられたことや、大學を退いてもあの權勢を牢固と維持し、他の社會であれだけに重視されたことなどは、まさしくそれを物語つてゐる。

（、文教書院）

樞密院問題（朝日新聞政治經濟部編） 樞府は封建的廢殘物だ、本書は樞密院の過去と現狀を檢討し其正體を直截簡明にあらはせるもの。樞府を論ずるものにとつての好箇の資料。（四六判一九六頁、定價五〇、朝日新聞社）

井上藏相の錯覺（武藤山治著） 世界の不景氣と我不景氣との關係について井上藏相に反省を促し、進んで此の不景氣救治實策をのぶ。（四六判一六六頁、定價・三〇、東洋經濟出版部）

フロイド派と文藝（對島完治著） 文藝作品に依て人間が興味を感じ感動をうくる理由は、その作品が、人類に無意識に存する瞑想 Phantasie 又は結情 Komplex 等を發現して居るからである、といふ立場から、是らの無意識に存する觀念傾向はいかなるものであり且いかにして生成せられたるかを研究し、且それが、いか樣に文藝に現はれて居るかを陳べたもの。（四六判一六七頁、定價五〇、天人社）

地球一蹴（北村兼子著） （四六判三六一頁 定價五〇、改善社）

讀本附圖（[illegible]編著） [illegible]二、三、四年[illegible]

その點では、陳重の夫人の妹、即ち澁澤の次女ことゝとの配偶者となつた法學博士男爵阪谷芳郎についてみても、よく相似してゐる事情にあるが、阪谷には、その夫人を得たに就いて、次の如き面白い插話が殘されてゐる。

阪谷芳郎は、岡山の漢儒阪谷朗廬の子で、明治十七年東京大學文科の首席卒業者であつた。當時、澁澤は經濟上の意見を徴するの名の下に、都築馨六、添田壽一、久米金彌、濱田健次郎、棚橋一郎、杉田輔人等大學を出たばかりの少壯を飛鳥山の別莊に招いて一夕の宴を張つた。大藏省の一屬官に過ぎない阪谷もその中にゐた。接伴役が、先に到着してゐた穗積陳重で、一同を澁澤に紹介した。その時、盛裝した妙齡の美少女が座に現はれて客に茶を侑めたが、これが澁澤の愛娘であつた。客たる若人達が此の佳人の前で胸をときめかしたであらうことは想像するに難くないが、その夜はたゞ雜談に刻を移して宴を終つて、越えて數日の後、穗積は阪谷を訪うて、澁澤の佳婿たるべきを慫慂した。阪谷は直ちに快諾して、その後間もなく華燭の典が擧げられた。他の一連達は、このことを聞いて、前日の宴が自分等の意見を徴するのでなくて、佳婿選擇の目的に外ならないことを知り、皆阪谷のために引立役となつた愚を後悔したさうである。都築の如きは、初め澁澤の女に意があつて、まさに閨閥運動を試みんとしてゐたので、落膽禁じ得なかつたらしい。が、都築はこゝで澁澤を失つたが、後に內田山の雷爺として伊藤博文、桂太郎と共に長閥の元老であつた侯爵井上馨の女を得たから諦められよう。

阪谷は、天成の美容に加ふるに才子肌で、後に大藏大臣となり、男爵に列し、現に貴族院議員として、財界及び學界の顏役の一人であることは世の知るところであるが、背後に澁澤が控へてゐなかつたら、果して幾何のことを爲し得たか容易に斷定し得ないであらうと思はれる。彼、人に向つて岳父の名を口にする時は、必ず「澁澤さん」の尊稱を以てして駙馬の禮を失はないので、故加藤高明がこれを嫌がり、屢々忠告したと傳へられてゐる。

阪谷には二男五女があつて、長女八重子は、海軍中將で後に製鐵所長官、滿鐵總裁に擧げられた男爵中村雄次郎の嗣子中村貫之に嫁し、長女敏子は、前東京市長堀切善次郎の先夫人であ

緒を收む。(各冊菊判四二頁、定價一・二五、武田交盛館)

法律に於ける價値の論理(牧野英一著) 一定の考が價値を保持するためには、第一に論理的であること、第二に道理に叶つて居ること、が必要である。かくて法律上の論議は一方に價値を豫定しつつ、他方價値を追求する。法律論一般に存するかかる特質乃至意味を意識的に把握しやうとするのが自由法論の方法的立場である。著者はかかる立場に於て論理が價値を保有する所以、論理によつて思想が進化をかさね進歩の目標を明かにする所以を、我國諸家の論述を論じつつ、考究せんとした。蓋し價値の論理の法律學に於ける地位乃至意義を知るに便なると共に紳士的なポレミークを玆に得たことを深く喜ぶ。(菊判四二七頁、定價三・〇〇、有斐閣)

山川行往(荻原井泉水著) 氏が京洛在住時代山川に親しみて得た感想及消息。詩趣豐かな珠玉の文字である。(四六判三八一頁、定價一・八〇、創元社)

投資相談(勝田貞次著) 投資一切に關し懇切な指導を與へるもの。(四六判三一八頁、定價一・五〇、千倉書房)

り、二女相子は亦た理學博士高嶺俊夫の先夫人である。高嶺は理化學研究所の主任研究員で長岡半太郎の高弟である。

なほ、澁澤門閥中には、榮一の三女ふみを娶つた尾高次郎、四女てるの夫大川平三郎、五女愛子を得た明石照男等があり、庶子の辰雄及びつる、まつの三人を養子として拜受した者に星野錫がある。後に星野辰雄は穗積八束の二女萬壽子を貰つて、現に各種會社の重役である傍ら立教大學教授として學界の一隅を與へて貰つてゐる。

尾高次郎の長男豐作は父業をついで實業界に在り、二男鐵雄は大川平三郎の養子となり三男朝雄は文學博士芳賀矢一の四女咲子を娶つて朝鮮京城帝國大學法文學部助教授であり、四男鮮之助は湯原元一の女愛子を夫人として帝國美術院嘱託の職に在る。

×

さて、陳重には三男三女があつて、長男穗積重遠が家督を相續して男爵である。現に法學博士帝大教授として東大に民法講座を擔當し最近は法學部長になつた。年收公表額十萬二千餘圓、所得稅八千八百五十四圓を納める身分であるが、東大の外に中央大學、明治大學、東京家政學院等の私法一般の講義に驅け廻つてゐる。その夫人は故陸軍大將伯爵兒玉源太郎の長女仲子である。

兒玉源太郎は十三人の子福者で、嗣子秀雄は朝鮮政務總監、定雄は三井物產の重役級、常雄は遞信省の課長、國雄は鐵道書記官、八郎は滿鐵社員、九一は內務事務官、女では前記仲子をはじめ、元子はオカッパ畫伯藤田嗣治の兄で陸軍書記官たる藤田嗣雄の夫人、鶴子は侯爵木戶幸一の夫人、等々、これらが穗積を通じて澁澤、淺野の財閥一門と連絡してゐるのである。

重遠の弟で陳重の二男律之助は工學士海軍造兵大佐で艦政本部に勤め、三男眞六郎は朝鮮事務官で夫人に文學博士芳賀矢一の次女敏子を娶つて、同じ朝鮮の帝大助教授尾高朝雄とは義理の兄弟に當つてゐる。

陳重の長女孝子は澁澤榮一の甥で現東大工學部長工學博士澁澤元治に嫁し、次女光子は男爵

日本經濟の實體（高木友三郎著）第一篇日本の現在地位、第二篇日本現狀の由來、第三篇日本をどうすべきか、に分れ興味深し。（四六判二七〇頁、定價一・〇〇、千倉書房）

販賣革命（中村第二著）日本の現狀に照應して分配組織の合理化と改善とを說く。時宜を得た書物（四六判二二九頁、定價一・二〇、千倉書房）

肺病全治法二十五則（矢部辨之助著）嶄新にして有效確實な療養法が要領よく記述されて居る。最新實地療法講座だ。（四六判二九五頁、定價一・五〇、實業之日本社）

口語六法・民法篇（吾孫子勝、水谷彥二郎共著）「六法」の規定を平易な現代語で意譯し、難解な術語や特殊用語には懇切叮嚀な註釋を施せる實用向きの好著。大衆のための民法であると共に學生のための民法であることも顧慮されて居る。（四六判七〇〇頁、定價二・〇〇、實業之日本社）

石黒忠篤の夫人、三女暉子は文學博士東大教授市河三喜の夫人である。現東大總長法學博士小野塚喜平次の夫人は、石黒忠悳の長女孝子であるから、忠篤の義兄に當り、間接には穂積重遠、澁澤元治の姻戚に當る。

陳重の弟穂積八束は、重樹の三男で、陳重が學部長の東京大學法科を明治十六年に出て、獨逸留學から歸朝後、大學の憲法講座を擔任し、傍ら樞密院書記官及び法制局參事官を兼ね、貴族院議員に勅選せられた。彼の憲法論に依つて頭腦を鑄冶された官僚は、彼を謳歌して我國憲法學者の第一人者としてゐるが、彼はメッテルニヒの帝王神權、官府萬能の政略學說を祖述したに過ぎず、官僚萬能の時代に阿附した御用學者として盛に非難された人物である。彼の高弟に故法學博士上杉愼吉があつて、共に君權論を以て民權論に對立したことは法學史上に殘る話柄であらう。

八束は官府を神聖視すると同時に自己をも神聖視する風があつて、大學では天神振を生し、家庭では婢僕と言を交へることを卑しとした。次の插話がある。一日大學に出勤しようとして誤つて車夫が樞密院に梶棒を曲げたが、さて樞密院に着いた時、彼は車を下りずに顎で元の道に引返せと命じた。車夫が唯々として邸に車を戻すと、彼の意思を解する能力無しといふのでその車夫は罷免されたといふ。が、外觀的に謹嚴を裝うた彼も、內面的には自己の弱少を痛感せざるを得なかつたことは、彼の夫人が、實家からの仕送りで役者狂ひを始め、梨園の人々との間に起る醜聞が、屢々新聞に剔發されてゐたからである。しかも、彼は、明に淺野を憚かつてこれに一刀を加へ得なかつたのである。

淺野の第二女婿には白石元次郎がある。彼は明治二十五年に水野練太郎、山座圓次郎等と共に東大を出たが、淺野の作婿となつて東洋汽船の總支配人その他、實業界に勢力を張つたが、その代り、夫人まんが、俳優歌右衛門と醜聞を撒いたことを默認しなければならなかつた。世に八束と共に駙馬哲學の體得者と目された所以である。

淺野は八束によつて陳重と結び、その緣故を辿つて澁澤に近づき、事業の上においてその庇

護を受けたことは多大であつた。經濟史家によれば、そこに財閥と結ぶ穗積一家の特殊なる意義があるらしい。

淺野閨閥中には、長男泰治郎に板垣退助の女千代子を娶り、次男良三に工學博士武田恭作の長女壽子を娶り、三男八郎に若尾璋八の女富美を娶つてゐる。穗積家がこれらの家と姻戚續きであるのは、如上の理由によつゐる。

八束には四男二女があつて、長男重義は辯護士で兼ねて中央大學教授であるが、その夫人安藝子は、丸ビルに建築事務所をもつ工學博士櫻井小太郎の長女である。次男秀二郎は東北帝大法文學部研究室に在る。長女萬喜子が星野辰雄と婚し、末女壽賀子が、箕作閨閥の直系箕作新六に嫁したことは、先に述べたが、新六と壽賀子との結婚によつて、箕作閨閥と穗積閨閥とを連絡あるものとして、これまでのところを眺めると、大變面白いと思はれる。その閨閥の根城である東京帝大の現在を問題にしても、總長小野塚喜平次、法學部長穗積重遠、工學部長澁澤元治、教授に美濃部達吉、末弘嚴太郎、坪井誠太郎、鳥園順次郎、市河三喜、その外名譽教授の元老から助教授や助手の若いところ及び以上の人々の追隨者等の顏觸れを考へて見たゞけでも、その勢力を以てすれば、どんなことでもなされるであらうし、またなされてゐるのでもあらうと想像されるのであるが、それは「想像の範圍」であるから、立入つて書くわけにはいかない。こゝには日本にも澤山の學者を出した家系のある事を、一寸書いたまでゞ、私の直接知らないことまでも書いてあるから、誤聞があれば寬恕を乞ふ。

中國革命夜話

村松梢風

一

一九〇〇年（光緒廿六年）の九月、廣東省惠州府内の三州田山寨に革命の義軍が起つた。革軍の主將は、孫逸仙の同志鄭弼臣であつた。時の兩廣總督陶模は、提督何長淸等に命じて、八千の兵を率ゐて三州田山寨を討たしめた。其の時山寨の兵勇は六百名ばかりに過ぎなかつたけれども、何長淸等は誇大な風說に惑はされて、遠く反軍の出路を塞ぐだけで、容易に山寨に近付かなかつた。

孫逸仙は、其の時臺灣に居た。惠州附近で兵を擧げることは彼の豫定の行動だつた。此の前年、哥老會、三合會、興中會の三祕密結社を合併して興漢會と名付け、各會の領袖は孫逸仙を統領に推戴した。支那の革命家としての孫逸仙の名は當時すでに重きをなしてゐたけれども、實際的な仕事としては、同志を集めることが主で、まだ一度も兵を擧げて力を試す機會はなかつた。然るに、光緒廿六年の春頃から、山東、直隷の二省に義和團事變が發生して、淸朝政府は非常な難局に直面した。孫逸仙は此の時期を利用して、事を擧げやうと考へたのだつた。

彼は、此の計劃を進める目的を抱いて、鄭弼臣、陳少白、宮崎虎藏、内田良平、平山周、淸藤幸七郎、福本日南、近藤五郎等の同志を引き連れて日本を發し、香港及び新嘉坡へ向つた。新嘉坡で革命の資金や軍需品を手に入れ、再び香港へ戾つて、豫て買入れてある小汽船に乘つて直ちに三州田山寨に潛入する手筈であつた。三州田山寨は惠州府の西南隅で大鵬灣から程遠からぬ地點である。

處が、此の計劃は種々の手違ひが生じた。第一に、新嘉坡へ

先乘りをした、宮崎、淸藤の二人が、當時新嘉坡に亡命中の康有爲を暗殺するためにやつて來たといふ嫌疑を受け、英國政廳の手で捕縛せられて獄に入れられた。結局二人は放免にはなつたけれども、政廳から退去命令を受け、こんな事が起きたゝめに孫逸仙も新嘉坡では何等策動することもならず、一同は日本汽船で香港へ戻つて來ると、爰でも宮崎、淸藤は上陸を禁止され、そればかりでなく香港政廳や支那官憲の警戒は頗る嚴重だつた。それでも血氣に逸る面々は、夜陰に乘じて九龍に上陸し疾走して內地に進入し、一氣呵成に事を擧げるべしと主張したが、孫文は頑として承知しなかつた。

孫は、福本日南等を香港に留めて準備に從はせ、擧兵の事は鄭弼臣を主將とし、近藤五郎と揚飛鴻の二人を參謀とし、機を見て發するやうに命じて、自身は一先づ宮崎、平山、淸藤等を從へて日本へ還り、更に策動したけれども思ふやうに捗らなかつたので、間も無く臺灣へ渡つたのだつた。臺灣總督兒玉源太郎は、民政長官後藤新平に命じて、孫と會見させ、或る條件の下に孫を援助することを約束した。孫は大いに喜んで計劃をめぐらしてゐるうち、東京に政變が起り、山縣內閣が倒れて伊藤博文が新內閣を組織すると、伊藤は臺灣總督に向つて、孫に對する援助の中止を嚴命した。孫の計劃は又々挫折した。

一方香港に殘留した者は、豫ての計劃通り三州田山塞に兵を集めて着々戰備を具へ、孫統領の命令一下を待つてゐたゝするうちと此の事がいつしか政府の知るところとなり、總督は討伐の軍を派遣したのだつた。

孫逸仙は、臺灣に於ける策動が失敗に終つた今日では兵を擧ぐるも勝算がないので、臺灣から香港の同志へ宛てゝ「我が戰備不十分であるゆへ、一時解散して敵を避けよ」と電報で命令したが、三州田山塞の方では、折角同志を糾合して是れまで事を進めたのに此の儘解散するは遺憾であると云つて、偏く沿孫の指揮を仰いだ。其の時孫は或る事を考へた。そこで再び「然らば長驅して廈門に出でよ、廈門に至らば接濟の道あらん」と命令した。

大將鄭弼臣は此の電報を香港で受け取ると、勇躍して三州田山塞へ乘り込み、山塞の兵士を一指して自から統率し、東の方廈門をさして進發した。六百人の兵のうち銃を持つてゐた者は三百しかなく、他の者は戈や矛のやうな舊式の武器を持つて從つた。ゆく〳〵兵を募つて千餘人を得た。佛子坳といふ處で初めて政府軍の副將杜鳳梧の軍隊と衝突した。革軍はよく戰つて是を敗り、敵將杜鳳梧以下數十人を擒にし、洋銃七百挺、彈丸五萬發を鹵獲した。革軍の士氣は大いに揚つた。鄭弼臣は全軍

に令して掠奪を嚴禁したから、沿道の民は之を德とし簞食壺漿して迎へた。同志の來り投ずる者も亦日に數百を計へ、間も無く兵數は約五六千人に達した。斯くして進んで永湖に至ると又一群の敵に遭遇した。これは提督劉萬の兵で、其の數は革軍とほゞ同樣であつたが、兵器彈藥は革軍に比べると遙かに完全であつた。しかし勇み立つた革命軍は物ともせず、激戰の結果美事に之を討ち破つて、大將劉萬は負傷して逃走し、革軍は銃五六百挺、彈丸數萬發、馬三十餘頭を分捕つた。それから行軍數日にして崩岡墟に至り、敵軍七八千人と河を挾んで相對峙した。革軍は一枝隊を出して夜襲を試み、天明に及んで全軍進擊した。革軍の弱味は武器彈藥の不足で、之が爲に隨分苦戰をしたが、とう／＼敵を走らした。併し其の時は最早彈丸が殆ど盡きて來たので、敢て追擊せず、只一筋に厦門へと急いだ。革軍の唯一の望は厦門にあつた。孫統領から厦門に送られる筈の彈丸にあつた。

かうして、起程以來十六日を經て白沙村に至つた。此時軍勢は愈々增加して二萬餘人に及んでゐた。

十七日目の朝、將に軍が白沙村を出發しやうとする時、香港から二三名の同志が到着した。其の中の一人は日本人の山田良政であつた。山田は孫の命令を齎して來たのだつた。それは

『外援期し難し、厦門に至るも恐らくは接濟の道無からん。軍中の事は、請ふ、司令自ら進止を決せよ。』

といふのであつた。鄭弼臣以下の諸將はしばし茫然としてしまつた。

一體これはどういふ事情であつたのか。其の間の經緯は、宮崎滔天著『三十三年の夢』に詳細に書かれてある。要するに、孫文の考へでは、其の前年日本で菲立賓獨立黨のために買入れられ、尋いで孫に讓られた筈の三百萬發の彈丸を、東京に居る同志に電命して厦門に急送させるつもりでゐた。處が其の彈丸は、周旋者の不埒から實際はまだほんとうに準備されて居らず急に厦門に送ることなどは到底不可能であつた。此の時周旋者中村彌六の私書僞造や橫領の罪跡が曝露されて、進步黨内の大問題を惹起し、中村の黨籍除名問題となり、續いて裁判沙汰にまで成り掛けたが、頭山滿の斡旋によつて中村は辛うじて罪人になることを免かれた。併し此の問題の爲に中村は完全に公生活から葬られてしまつた。いつたい中村が此の事に關係するやうになつたのは犬養木堂の口利きがあつたからで、中村は進步黨の領袖株の議員だが、かねて糖尿病を病んで、今後三年以上は生きられないといふ宣告を醫師から下されてゐた。それで當人も功名を急ぐ念があることを犬養は承知してゐたので、たま

く孫逸仙を通じて菲島獨立軍の銃器彈藥を買入れることの相談を受けると、其の實際の交渉役として中村を推擧したのだつた。中村は非常に喜び、長からぬ餘命を獨立運動に捧げて晩年を飾る覺悟を以て此の任に當つたのだつた。然るに、中村は持ち慣れぬ大金を手に握ると同時に心が一變してしまつた。それ迄彼は貧乏を看板に懸けた政治家であつた。彼は大倉喜八郎に交渉して、全然使用に堪へぬ廢銃や不發の彈丸を形式的に買入れ、其の間數萬金を着服したのである。かうして中村は、醜名を謳はれて政界からも社會からも捨てられてしまつたが、面白いことは、不正な金でも金持になつて養生をしたお蔭かどうか分らぬが醫者から三年以上は保たぬと宣告された彼の病氣は次第に快方に赴いて、三年はおろか三十年も生きのびて確か昭和四年に物故した。

孫文は、最後の方法として、臺灣で彈丸を製造して厦門へ送ることも考へたが、とかくするうち彼は總督府から退去命令を受けることになり、自身が厦門へ乘り込むことすら出來なくなつて、空しく東京へ引き上げなければならなかつた。



西湖畔玄妙古觀

鄭弼臣等の失望と遺憾とは眞に無量であつた。併し彼等は此儘事を中止するには忍びなかつた。年來の準備と苦心と、且つは擧兵以來連戰連勝の好成績を、一朝にして水泡に歸せしむるに堪へなかつた。そこで銃器を持つてゐる者千餘人だけを殘し、其の餘の兵丁は解散して、再び三州田山塞に歸つて再擧の計をめぐらさうといふことになつた。

提督劉萬は、革軍の情僞を偵知し、急に大兵を率ゐて襲ひ來つた。すでに彈丸の盡きてゐる革軍は打ち敗られて潰走した。

山田良政は、一方の兵を指揮して戰ひ且つ逃れて來た。そして惠州府城の東三十六支里なる三多祝といふ處まで來ると敵の軍に遮られた。革軍は奮戰したけれども衆寡敵し難く、多くは散り々々に潰走した。最後に山田の身邊に殘つてゐた者は三合會の荒武者五名に過ぎなかつた。彼等は小さ

な丘を死守して奮戰した。山田は支那服を身纏に着て、其の上から繩の帶を締め、日本刀を揮つて戰つたが、力盡きて捕へられ、同志の五人も捕へられて、其の場で銃殺された。

山田良政は、中華民國の革命に、日本人として犧牲になつた一番最初の人であつた。彼は、津輕藩士族山田浩藏の長男で、弘前の東奧義塾に學び、後上京して水產學校に入學し第一期卒業生として世に出た。初め昆布會社に入社し、明治二十三年上海支店に勤務したのが、支那に足跡を印する第一歩であつた。日清戰爭に從軍し、後北京で瀧川大尉（現海軍豫備少將）と行動を共にして、康有爲の變の時、王照を救ひ出して天津から日本へ逃れた。そして明治三十三年一月には、南京同文書院の教授兼幹事として赴任した。

山田は、明治元年生れの三十三歲であつた。彼は天性熱血漢だけれども、外見はいつも冷靜であつた。彼は基督教を信じ、上海へ來た當時、在留邦人青年を集めて、基督教青年會を組織したこともあつて、青年の間に信望が厚かつた。日清戰爭從軍と、其の後の北京生活の間に、彼の思想は次第に政治的に傾いて行つた。彼は、康有爲派の唐才常と非常に親密だつた。唐才常は長江沿岸で盛んに暗中飛躍を試み、上海から漢口へ潛入し、湖廣總督張之洞を屠つて武漢の要衝を掌握する計劃を樹てたが、愈〻事を擧げる前になつて發覺して、此の年の七月廿七日の夜、張之洞の爲に捕縛されて直ちに殺された。

山田が初めて孫逸仙を見たのは、其の前年の夏で、東京神田三崎町の孫の假寓を訪問したのであつたが、其の時はまだ孫の人となりを十分に理解することが出來なかつた。しかし、三十三年の春、上海文路の朝日館といふ日本旅館で再會した時は、初めて孫の遠大な理想を聞いて忽ち共鳴して、同志として、死生を共にすべきことを約した。彼は同文書院の職を辭し、孫が新嘉坡から日本へ行く時行を共にし、更に臺灣へ渡る時も平山周と共に孫に隨行した。臺灣で日本の官憲と孫とを接近させるについては山田の努力が大に加はつてゐた。併し孫は惠州の事が切迫して來たので、山田を臺灣から香港へ派遣したのだつた。

革命第一回の義擧、惠州事件は斯くして果敢なく挫折した。大將鄭弼臣は香港から日本へ亡命した。副將楊飛鴻は、香港に潜れて英語の私塾を開いてゐたが、或日授業中、ピストルを持つた刺客に襲はれ遂に彈に中つて斃れた。

山田良政が戰死した場所は、久しい間不明であつた。革軍の退却に際して、山田は道に迷つて一同と離れ〳〵になり、途中で官兵に捕へられて殺されたのであらうといふ推測だけで幾月が經つてゐた。

良政に弟があり、純三郎と云ふ。純三郎も亡兄の志を繼承して中華民國の革命事業に盡瘁し、現在上海に住んで日支の問題に奔走してゐる。

民國六年の十月、純三郎は所用あつて廣東へ行つた。彼は廣東で、國民軍第二路司令洪兆麟と或る處で會つた。

洪兆麟は、生粋の軍人であるけれども、頭を剃り、僧衣を着て、いつでも念珠をつまぐつてゐた。戰爭に臨む時もさうであつた。彼は革命の爲とは云ひながら餘りに多くの人命を彼自からの手で絶つたことを考へて菩提心を起し、政爭渦中から隱遁せんことを望んだけれども許されなかつた。當時廣東の民黨に二人の猛將があつた。一人は第一路司令雄略、他の一人が洪兆麟であつた。雄略將軍のことは通稱を虎と呼び、洪兆麟は魯智深と呼ばれ、眞に武將の双璧であつた。彼は湖南人で、前清時代既に營長であつたが、第一革命の時惠州を攻めて功があり、陳烱明に拔擢されて惠州軍務督辦となつた。其の後數回亡命して日本へ逃れ來たこともあり、廣東の革命戰には其の都度大功を立て、民黨には無くてならぬ武人であつた。民國十一年六月陳烱明が孫文に叛いた時、洪兆麟、雄略の二人は、陳烱明の恩顧に酬ゆるため其の謀叛に加擔して孫を廣東から追ひ出した。それがために國民黨と絶緣になり、其の後陳烱明の沒落と同時に洪兆麟も失脚してしまつた。

山田純三郎が、洪兆麟に會ふと、洪兆麟はしげ／＼と山田の顏を眺めてゐたが、談半ばにして突然

「山田さん、貴君には兄弟か何かありませんでしたか」と云つた。

「僕には兄がありました。それがどうしたのです？」

「私は貴君によく似た人を昔見たことがあるのです、實に不思議な程よく似てゐる。そして貴君の兄さんはどういふ方でしたか」

山田は豫々亡兄の最期の場所や其の時の事情を確め度いといふことは常に念頭から去らなかつたから、今洪兆麟からかう云はれると若しやといふ考へが起きた。そこで兄良政が惠州事件の時行方不明となつた儘、未だに其の死場所も明かでないといふ話をすると、洪兆麟は驚きの眼を睜りながら

「それでは矢張りさうでしたか。貴君の兄さんを殺したのは何を隱さう私です」

と云つて、やゝ膝を進めて、十八年前の記憶を辿りながら物語るのだつた。彼は當時まだ一個の青年士官だつた。彼は惠州府城の軍隊に所屬してゐたので、反軍討伐のため出動を命ぜられた。而も三洲田は彼の初陣だつた。

彼は、小丘に據つて最後迄抵抗した六名の革命黨員を捕へて其の場で銃殺したが、其の中の一人は日本人だつた。そして彼等の死骸は其の丘に埋めた。然るに、其の日本人は捕へられた時香港紙幣二千弗を懐中してゐた。洪兆麟の方では、それは日本の宣教師だらうと推測した。宣教師とすれば、外交上の重大交渉を惹き起すに相違ないといふ恐れがあるので、其の事を至く秘密に附して、今日迄過ぎてしまつたのであつた。

「私は永い間其の日本人の顔を忘れることが出來ませんでした。そして今日貴君にお目に掛ると、其の私の古い記憶が又々甦つて來ました。貴君が其の時の日本人と餘りよく似てゐるので奇異に感じたのです」

叡智深と呼ばれた將軍は無量の感慨を浮かべてかう物語るのであつた。

山田良政の最期は初めて明かになつた。純三郎は大に喜んでどうか兄の遺骨を受け取り度いと、云ふと孫逸仙は朱執信を三多祝に派遣し、別に洪兆麟の副官蔡標を同行させ、其の地で良政の靈を鎮める祭を營ませた上、遺骨を持ち歸るやうに命じたが、何分六名が一緒に埋葬されたこととて白骨は見別けが付く道理もなく、そこで骨の代りに小丘の土塊を持ち歸つた。純三郎は廣東で其の土を受け取つて日本へ持ち歸り、大正七年に郷里弘前の菩提寺に埋葬して墓碑を立てた。墓碑銘は犬養毅が書いた。中國々民黨からは廖仲愷が孫文を代表して弘前へ來て其の式典に参列した。

惠州の鎮守使李福林は、良政のために三多祝の小丘に紀念碑を建て、其の年の秋除幕式を擧げた。

其の前、大正二年、孫逸仙は日本を訪ふた時、谷中の鐵舟寺に良政の墓碑を建て、自ら碑文を書いた。

山田良政先生弘前人也、庚子又八月革命軍起惠州、先生挺身赴義遂戰死、嗚呼人道之犧牲興亞之先覺也、身雖殞滅其志不朽矣。

民國二年二月廿七日

孫文敬書

二

朝早く、旅館のボーイが私を呼び起した。寢まきの儘寢室を出て行くと、一人の軍人が部屋へ入つてゐて、私を見ると直立不動の姿勢で擧手の禮をした。私の惠州行のために、陳銘樞氏が寄越して呉れた護衛兵であつた。

七時頃、唐榮祺氏がやつて來た。唐さんは政府の役人だが、彼も矢張り私のために附けられた人だつた。私達は自動車で廣

九鐵路東站へ向つた。火車は午前八時にあつた。私達は一等へ乘つた。其の室はせいぐ\六人位しかはいれない狹い部屋で、私達のほかには香港の支店長とでもいふ風采の日本人の老紳士が一人居るだけだつた。沿道の土地は肥沃で、景色は明るかつた。到る處荔枝の園があり、畑には芋が作つてある。

唐さんは昔日本へ行つたことがあるとかで、少しばかり、ほんの少しばかり日本語を知つてゐた。そして彼は餘程耳が遠かつた。彼がどんなに慌て者だかといふことは、先刻車站へ着いて切符を買ふ時金が不足したので、彼は鞄の中へ仕舞ひ込んだ廣東銀貨を取り出さうとすると鞄の鍵が見當らなかつた。其時の彼の周章狼狽は極度に達した。到頭鍵が見當らなかつたので彼は鞄の横の方の口を無理にこじ開けて其處から手を突つ込んで銀貨の包みを二本ばかり引き出して漸う時間に間に合ふやうに切符を買ふことが出來た。しかし、列車に乘つてから落ちついて鍵を探すと、彼はそれをチャンとヅボンの帶皮にぶら下げてゐるのだつた。切符で思ひ出したが、面白いのは此汽車の賃銀だつた。それは、廣東から九龍迄の全線の乘車賃が、廣東銀の四ドルであるのに、私達は丁度其の中間の樟木頭驛迄の切符を買ふと、六ドルであつた。こんな奇怪な事はないと私は思つた。全線の運賃に比べて、半分の道程の運賃の方が反つて五割も高くなるといふことはどう考へても理屈に合はないではないか。唐さんも其の說明には困つてゐた。しかしそれはかういふ理由であつた。元來此の鐵道は英國の資本で造つて英國人が經理してゐたのだが、近年に至つてそれを廣東政府の手に回收した。しかしそれは全線ではなく、九龍を起點に約三十哩程の間は英國に割讓した土地であるから、其の間だけは依然として英國の經營になつてゐて、其の餘の八九十哩の間を回收したわけである。だから此の汽車は國境へ着くと、乘務員から食堂のボーイまで全部交替する。處で、支那側では其の後汽車賃の値上げを英國側に向つて交涉したが英國は頑として聞き入れない。昔通り全線四ドル(一等)を固守してゐる。そこで支那側では止むを得ず國内だけの乘車賃の値上げを行つた。其の結果、前に云つたやうな不合理な賃銀になつたのである。

唐さんは、陳主席から渡された惠陽縣長宛の書面を後生大事に持つてゐる。其の書面は、奉書大の紙へ達筆にかう書いてある。

俊甫縣長鑒茲有日本文學家村松梢風來粤行到惠州視察革命史蹟特介引前來希善爲接待是幸

陳　銘　樞

十時に樟木頭驛へ着いた。附近には碌な家もない寒驛である。汽車を降りると何しろ暑い。今日は五月の六日だが、日本の土

用眞最中と同じ景氣だ。廣い道路が附いてゐて、其處に乘合自動車が二臺ゐる。自動車と云つてもトラックで、極く粗末なものだ。しかし以前は惠州へ行くには汽車を降りてから民船で東江を遡つたもので、船だけに一日以上を費したが、最近此の道路が開通したお蔭で僅か數時間で達するやうになつたのだといふ。二臺のトラックは乘客を滿載して走り出した。

此の地方は女の勞働者が多く、道路工事なども皆女の土方が働いてゐる。其の女達の冠る笠は竹で出來てゐて、笠の周りに黒い布が垂れてゐる。それへ別に房を附け、就中若い女などは青や紅の房を下げてゐるのがなか／＼古風で優美である。村落は、少きも二三十戸、多きは百戸位一ヶ所に密集してゐて、決して二戸三戸と散在しない。村の入口出口の門を閉めると、村全體が一つの城廓のやうになる。それは土匪の難に備へるためである。

沿道は山が多いが、餘り高い山はない。そして多くは裸山だが、處どころ松の苗を植え始めてある。水田や芋畑も澤山ある。寧ろ平凡な田舍道である。十一時半頃埔仔墟といふ村で一寸停車した。何しろガタピシするトラックだから乘つてゐるのも樂ぢやあない。おまけに坂道へ掛るとエンジンが利かなくなつて自動車は動かなくなる。さういふ行程を四五十哩走つて、十二時半に漸く惠州へ着いた。

一連の裸山の麓から中腹以上へかけて無數の墳墓が散らばつてゐる。其の山のあはひを通過した處で自動車は停つた。竹園角站と書いてある。茶店のやうな家が二軒ばかりある。自動車を降りると荷擔ぎが集つて來て荷物を爭つて取らうとする。此の荷擔ぎも婆さんか小娘ばかりだ。私達は十二三の女の子を傭つた。何しろ非常な暑さである。試しに掌を上に向けて頭の上に擧げると、掌が焦げさうに熱い。空には白い雲が簇がり立つて、突然激しい雷鳴がした。

荷擔ぎは、竹の天びん棒の兩端に繩を下げた簡單な畚（もつこ）のやうな物で荷物を運ぶ。直ぐに湖畔へ出る。俗に惠州西湖と呼ばれる豐湖である。水は淺くて澄んでゐる。湖の東岸に横に延びてゐる城壁が古い都を包んでゐる。處どころをアーチ形の石橋で聯絡した堤が幾條も湖を横斷して附いてゐる。彼方に塔が見える。石橋の邊りでは大きな四ツ手網を下してゐる。私達は一番手前の堤を城壁の方へ歩いて行つた。そして西門（平湖門）から城内へ入つた。

城内の道は四門の石が敷いてあつて非常に狹い。鍛冶屋や指物屋や荒物屋などの小さな店が並んでゐる。人通りも餘りない。燒け付いたやうな其の敷石の上に、豚の仔が何十匹も寢轉んで

ゐる。五尺もある老豚がノソリ〳〵歩いてゐる。犬のやうに、快活に走り廻つてゐる豚もある。あらゆる豚は、犬や人間と同等の權利を自覺してゐるかのやうに、大威張で往來を占領してゐる。

　壁造りの住宅の門には紅紙の聯が貼つてある。それを一つ一つ讀んで行くとなか〳〵面白い。『家傳三寶。天瑞五雲』『愛留冬日。夢入梅花』『造家延福。具世界觀』『鴛鴦福祿。鸞鳳吉祥』といつたやうな類だ。

　やゝ廣い通へ出た。其の通を眞直ぐに行くと可成り廣い十字路がある。其の邊は中心街らしく店造りも幾らか揃つてゐる。其の一方には古い美事な石の牌樓が澤山竝んでゐた。傍らの料理屋へ入つて私達は晝飯を食つた。縣廳は其處から餘り遠くなかつた。門には『惠陽縣政府』と書いたペンキの看板が懸つてゐて、銃劍を持つた番兵が二人立つてゐる。唐さんが例の陳銘樞氏の書翰と名刺とを受付で一緒に渡すと直ぐ奥の方へ案内された。平家造りの建物が三つ四つ、間に庭を置いて奥へ續いてゐる。餘程古い役所と見えて、屋根も方々破損してゐる。庭には苔のむした老樹が立つてゐる。一番奥の建物へ案内された。縣長周俊甫氏は生憎地方へ出張中とのことで、留守を司る總務科長鄧鑛先氏といふ人が出て來て應對する。鄧鑛先氏はなか〳〵社交的な愛想の好い人だつた。其の室は例によつて正面に理の寫眞を掛け、紙の萬國旗を引き廻したり、羽目板にはいろんな國民黨の標語が貼つてある。さうかと思ふと、蔡元培の額が雨漏りと埃で汚れた儘掛つてゐる。私が鄧氏に旅館を世話して貰ひ度いと賴むと、此の土地にはろくな宿屋はない、汚なくてとても泊れるやうな家ではないから、行き屆かないけれども役所へ宿泊して貰ひ度いといふ。役所へそんな手數を掛けては氣の毒だと思つて辭退したが、是非泊つて見れと云ふので、それも支那の役所へ泊めて貰ふのも一つの經驗だらうと考へて、それでは御厄介になりませうと答へた。

　折から俄かに雷鳴はためき、驟雨がやつて來た。今朝からの酷熱が旋風と共に洗ひ流されたやうな氣持がした。間も無く雨は止んだ。今日これからの時間を無爲に過すのも勿體ないと思つたから、有名な蘇東坡の故趾を見物させて貰ふことにした。矢張り縣政府の官吏で葉誦怡氏といふ人が案内して呉れた。

　先刻通つた十字路へ出て、其處から東へ行くと東門へ出た。惠陽門といふ額が上つてゐる。門外は、東江と其の支流とが合流する處で、支流には舟橋が渡してある。其の對岸にも市街がある。其の附近の景色は支那の城趾らしく一寸によかつた。對岸の街は水東街と云つて、一昨年頃市街改正を行つたといふ新式

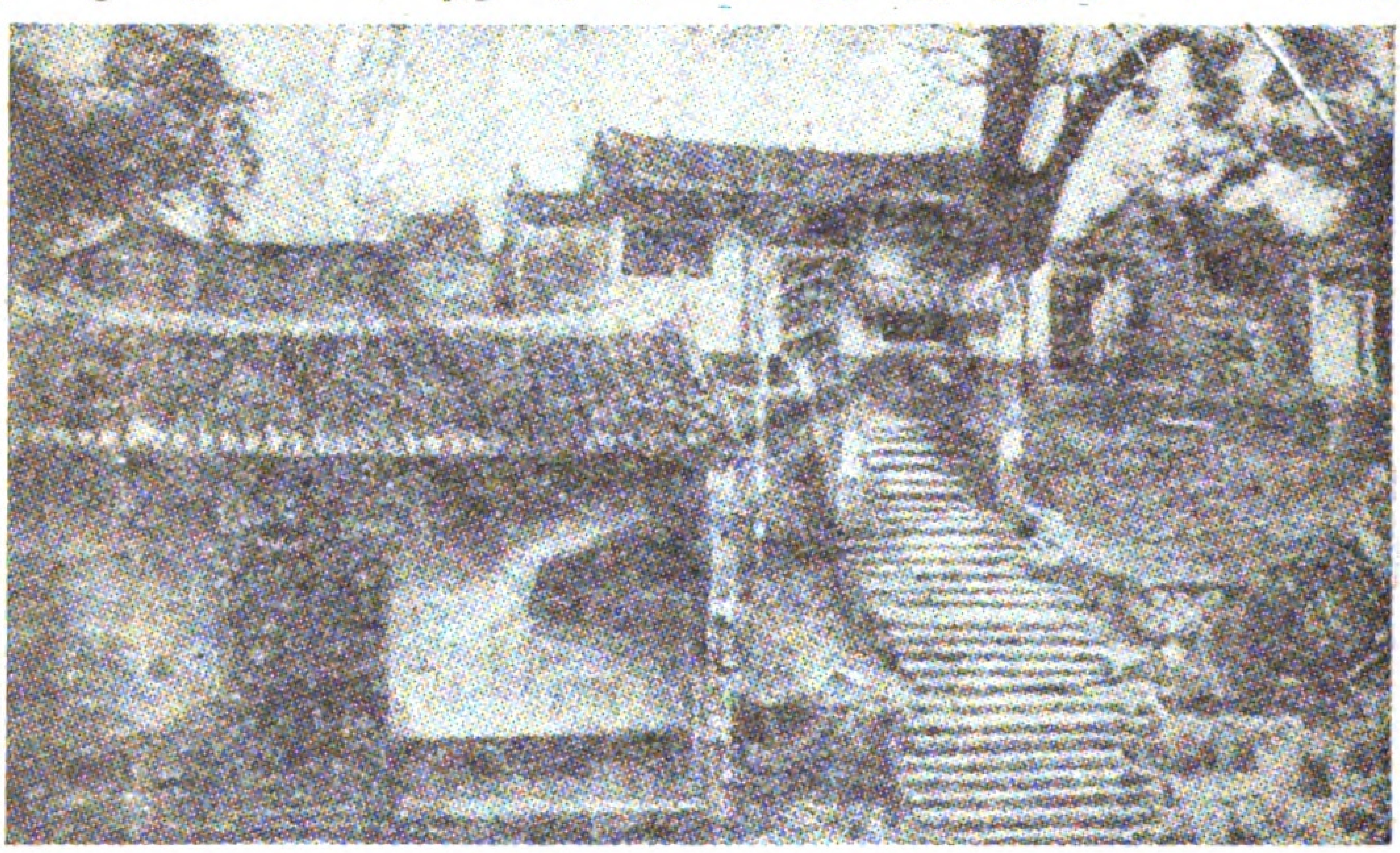
の市街である。道傍に眞黒いむく毛の大きな犬が到る處寢てゐる。有名な廣東犬の種類だ。それから又歩き廻ると、北門の側へ出た。可成り高い丘がある。丘の下に武帝廟がある。其の横から石段の坂を登つて行くと、瓦ぶきの小さな門があつて、赤い壁に紺色で『蘇學士故居』と額のやうに書いてある。丘の上には、何の木か知らぬが素晴らしい老樹があつて、繁つた枝葉を天空に擴げてゐる。丘上の建物に『蘇文忠公祠』と書いてある。そして壁には煙草のポスターがベタ／＼貼つてある。建物は、いつが日にも修繕をしたことがないと見えて屋根は破れ、壁は脱落し、見る影もなく荒れ果てゝゐる。瓦が落ちて敷石の上に堆く散亂して足の踏み場もないくらいである。幽靈屋敷といふよりもひどいくらいだ。それでも昔は相當に立派な住居であつたらしい輪廓だけは具はつてゐる。奥へ三棟續いてゐる。中央の建物の兩側の壁に『德有隣堂』『齋邪無思』といふ東坡の筆蹟を彫つた石が篏めてある。葉さんは、或場所を靴でドン／＼と踏んで見せて、そして私にも踏んで見よといふ。其の通りにやると、ドン／＼と微かに地下に反響する。

『寓惠集——東坡詩集——に、鑿井得泉、後人謂之蘇井、深約五丈、泉清、とあるのは此處にある井ですが、危險ですから埋めたのでせう』と葉さんは云つた。

一番奥の建物は大きくて、正面の室には祭壇があり、大きな位牌が安置してある。

宋贈太師端明殿學士文忠蘇公之神位

其の横に小さな位牌が置いてある。それにはかう書いてある。



惠州東坡學士故居

蘇文公侍姬霞王氏之位

東坡は、宋の神宗の時、王安石に反對して登州に謫せられ、安石の失脚後朝に迎へられて廟堂に立つたが、司馬光の死後は黨人の爭ひのため屢ゝ貶せられた。惠州に謫せられたのは紹聖の初年で、數年の後更に海南島の昌化へ遷された。

侍姬王氏とは朝雲の事である。東坡詩集に『朝雲詩』があり、その引に『(略)予家有數妾、四五年相繼辭去、獨朝雲者隨予南

遷、因讀戀大集、戲作此詩。朝雲姓王氏、錢塘人、嘗有子曰幹兒、未期而夭』とある。

朝雲字は子霞、東坡に事へること十三年、紹聖三年病を得て愛で死んだ。行年三十四であつた。『悼朝雲』の詩がある。其の引に『紹聖元年十一月、戲作朝雲詩、三年七月五日朝雲病亡、于惠州葬之、棲禪寺松林中東南直大聖寺塔、予既銘其墓、且和前詩以自解、朝雲始不識字、晩忽學書粗有楷法、嘗從泗上比邱尼義沖學佛。亦略聞大義、且死誦金剛經四句偈而絶』

壁には東坡の畫像を刻した碑が嵌めてある。有名な東坡笠屐圖である。

隣室が朝雲の居室であつたといふ。入つて見やうとしたが戸は釘づけにされてゐて入れなかつた。然しわづかに戸の破れ目から覗いて見ることは出來た。さうして私は千古の大詩人の、私生活を空想した。

此處を白鶴峯といふ。故趾の前に立つて眺めると、城壁は低く蜿々として走り、城外は洋々として東江沙が流れてゐる。市街を隔て丶彼方の山に古塔が聳えてゐる。東江の北は、小丘起伏する無邊の大陸である。雄大で而も美しい風景だ。

城壁へ寄つた方に娛江亭がある。其の前方が釣魚臺といふ。娛江亭の左右に、小さな池がある。右を麻池、左を豐湖と名付ける。池には雜草に交つて黃色い木蓮が咲き亂れてゐる。娛江亭の少し東寄りに、東坡の住居と接近して一棟への建物がある。それを翟夫子舍といふ。翟氏字は逢亭、東坡の交友であつた。

歸途についた。縣廳へ戻つた時分は日暮れ近く、直ぐ晩餐の卓が出された。舒氏、葉氏を始め、六七人の縣政府の役人達と一緒に食事をした。私達の部屋は中央の廳舍の一室で、其處は特に清潔に浄められ、寢臺には綺麗な絹布の蒲團が用意されてゐた。私は食後にシャツとパンツだけになつて、煙草を啣へ乍らブラブラ門外へ出やうとすると、左右の番兵がいきなり捧げ銃の敬禮をしたので吃驚して引つ返して、今度は洋服を着て出直すと又もや最敬禮だ。此の役所に泊つてゐる間私は此の敬禮で弱らせられた。それも其の筈だ。私が出入する時は必ず重立つた官吏が何人も隨行し、陳銘樞氏から附けられた護衛兵は習慣的にピストルに手を掛けながら、萬一私に害を加へる者でもあれば立所に撃ち殺さんずといつたやうな眼付をしてゐるのだから、縣廳の衛兵達は私を素晴らしい要人と誤解したのも無理はない。

門の兩側に、白大理石の唐獅子が一對据ゑてある。森共に四尺位の大きさだが、非常に古くてい丶作であることを私は最初爰へ來た時から眼を付けてゐた。私がしきりにそれを賞で翫して

ゐると、葉氏が出て來て
「此の獅子は少くも千年以上の物です」
と云つた。
　惠州にはまだ電燈が無い。私は何年ぶりかでランプの下で、賽開町で買つた繪ハガキへ音信を書いたりした。

三

　縣廳には、可成り多勢の人が住んでゐるやうであつた。總務科長の符毓先氏にしても役所で寢起きをしてゐた。私達が泊つた部屋と羽目一重の隣室にも二三人寢てる樣子だつた。役所の建物と續いた處に、縣長の家族であらうと思はれる人達が住んでゐた。七八つから十二三の男の子と十八九の令孃がゐて、晝も夜も役所全體を家庭のやうにして歩き廻つてゐた。表の棟の方には、下級の役人や、兵隊が澤山寢てゐる。
　それらの人達が朝は皆早く起きた。役所の庭に深い井戸がある。朝は附近の民家の女達が其の水を貰ひに來る。私は日本人の習慣で其の井戸端へ行つて頭や顏をザブ／＼洗つた。部屋へ行くとボーイが牛乳とビスケットを持つて來る。それからいろんな人が話をしに來る。今日は私を西湖へ案内して船遊をするのだと云ふ。彼れ是れするうちに九時過ぎになると、今朝も大勢一つの卓で食事をした。それから一同揃つて役所を出た。直ぐ近くの平湖門を出ると、城壁の外は湖であつた。船の用意も出來てゐた。一行は縣政府の重立つた役人達と、警察署長何其欽氏、地方法院管獄員游熙氏などに、唐さんと私を加へて十人ばかり、それに私の從卒や役所の兵隊が五六名附いて行く。
　湖は周回二十餘支里、中に數條の堤があり、中央の最も長い堤を東坡堤と云ふ。東坡堤は六橋に分れてゐる。東坡が帶を鬻いで工事を助けたのである。
　湖上から城壁を眺めると、殆ど舊態を留めぬまでに破壞されてゐる。それは民國十四年の國民軍と陳炯明軍との兵禍の名殘だといふ。惠州は、第一革命以來陳炯明の根據地だつた。
　陳炯明は、既に過去の人となつて現在は香港で餘生を送つてゐるが、一時は廣東に覇を唱へて、孫文と對抗を續けて來た。併し彼も古い革命黨員で、宣統三年三月黃興の一派が總督衙門を襲撃した時は彼も其の徒黨の一人だつた。第一革命の時は、胡漢民と共に惠州に事を舉げ、廣東省城を攻略して、民國元年胡漢民の下に廣東省副都督となつた。同二年胡漢民に次で都督となつたが、同年七月第二革命以後、龍濟光に逐はれて、南洋や歐洲へ亡命した。
　民國五年第三革命の際、廣東に討龍軍を起し、岑春煊、李烈鈞と共に龍濟光を廣東から逐ひ出して、粵軍總司令となつて、福建に出師した。當時廣東政府は、岑春煊、陸榮廷一派の、

西軍閥のために壟斷せられてゐた。陳烱明は同九年八月廣東に返つて、廣西派を驅逐して、自ら廣東省長兼粤軍總司令として内政の改革を圖り、同十三年二月廣東に初めて市制を布いた。

彼と孫文との衝突は、民國十一年、孫文が武力解決に依る南北統一策を主張するに對し、彼は聯省自治を主張したことから端を發した。孫文は突如陳烱明の省長を免じて惠州に退去を命じた。しかるに、其の年六月、孫の北伐軍が江西に入つて、廣東が手薄になれるに乘じて、陳烱明は兵を以て廣東を奪囘し、孫文を上海に逐つた。此の時の政變には、いろんな劇的の場面があつた。

孫文は、人を信ずること神の如きところがあつた。それは彼が人を信じたのか、それとも自己を信ずる力が餘りに强かつたのか、どちらとでも云へる。陳烱明に叛意のあることは風說が甚だ高く、孫に向つて其の事を言つて注意を促がす人も少くなかつたが、すると孫は

「俺は陳烱明をよく知つてゐる、彼は政見の相違によつて俺に叛くやうな男ではない」

孫文は少しも警戒しなかつた。

然るに、廣東城外の白雲山上の雲泉山館に於て或日軍議が開かれた。列席した者は、粤軍總司令(陳烱明)代理總司揮葉擧、財政廳長鍾秀南、第一路司令雄略(通稱虎)、第二路司令洪兆麟(通稱魯智深)等であつた。其の席上で、先づ葉擧が起つて、軍五萬の興亡迫れることを說き、孫大總統を打倒することの止むべからざることを提言した。鍾財政廳長は、廣東の財政上から、孫文の北伐政策に反對した。すると雄略將軍は

「最早是れ以上論議を盡す必要は無いと思ふ。此の上は、湖南の精鋭一萬を率ゐて最も重望ある洪司令の奮起を希望するのみです」

例の魯智深は、珠數をつまぐりながら默々として人々の議論を聽いてゐた。一座の視線は彼の面上に注がれた。しかし彼も陳烱明と廿年來の友交を重んじて、善惡を問はず孫文弑逆の決意をしたのであつた。

それから數日後であつた。孫文は、廣東市粤秀街にある大總統府樓上の彼の寢室で快く眠つてゐた。午前二時であつた。警衞隊長朱卓文が慌て丶其の室へ入つて來て、孫總統を呼び起した。

「只今警視總監魏方平から電話で、陳烱明の軍隊が當所を夜襲の計劃があり、其の先鋒は既に白雲山を發したについて、閣下に卽時避難なされるやう申し上げよとのことです。直ぐ様御避難を願ひ度う御座います」

すると孫文は平常の調子で

「いや、左樣な事はある筈はない、何かの間違ひであらう」

秘書長林直勉が續いて入つて來て、同様の報告をした。

「俺はそんな事を信じたくない。若し陳炯明が俺を殺さうといふなら、殺されもしよう」

孫文は泰然自若として動かうとしなかつた。秘書長は宋慶齡夫人の寢室へ飛んで行つて此の事を報告して「如何致したら宜ろしいでせうか」と相談した。夫人の答へは簡單であつた。

「そんな事は相談するには及びません。あの人を擔ぎ出して避難して下さい」

一同は無理矢理孫を擔いで、裏の墻を越えて逃げ出した。其の時は表門の方では銃聲が聞え出した。警衞隊は奮戰して全滅した。

孫文は珠江上の軍艦永豐に避難した。

孫文は二ヶ月ばかり軍艦生活を續けた。陸上は悉く陳炯明の手に歸してゐたが、軍艦だけはまだ彼の忠實な僕だつた。しかしそれも何時迄もさうではなかつた。

八月九日になつた。孫文は數日前から發病して、高熱に惱まされて、永豐艦の艦長室で氷嚢を頭に當て、うなつてゐた。傍らには、宋慶齡が看病に附いてゐた。廖仲愷、胡漢民、汪精衞、蔣介石等の國民黨の要人も詰め切つてゐた。一同は、賴む木陰の海軍も漸く反逆の兆が見えることについて額を集めて凝議してゐた。

其處へ、永豐艦長が、海軍司令溫樹德の命令を奉じてやつて來た。

「當艦隊司令は、只今卽刻閣下に退去を要求いたします」

孫文は氷嚢の下からジロリと見遣つて

「何、俺に退去せよと。俺は此處より外に行く處は無いではないか」

「英艦へ退去を願ひます」

「馬鹿を云へ。英國は俺にとつて宿昔の仇敵だ。其の英國の軍艦へ何んで行かれるものか」

廖仲愷が立つて枕邊へ行つて云つた。

「總理、あなたは千金の身です、中國四億の民衆の爲に、暫く恥を忍んで英艦へお移り下さい」

一同は交々孫を說いた。

「さうか、君達がそれ程に云ふなら、俺は麻醉劑を飲んで、戸板に乘つた積りで、英艦へ行かう」

宋慶齡を始め、左右の者は皆泣いた。

孫文は英國の軍艦に乘つて上海へ落ちて行つた。

孫陳の爭鬪は激烈に續いた。其の翌年孫文は、楊希閔の雲南軍と、沈鴻英、劉震寰の西軍とを利用して、廣東を攻略した。陳炯明は三度惠州に退去した。其の後も此の二者は爭ひ續けたが最後に民國十四年二月、蔣介石の率ゐる黃埔軍官學校出身者を

中堅とする精鋭の廣東軍は、惠州を攻擊して、林虎、洪兆麟の軍を追つて遂に惠州を占領した。其の時郷里海豐縣に蟄居してゐた陳烱明は、更に香港に遁れなければならなかつた。

陳烱明は、革命黨の出身でありながら、後には自己の立場を固守し過ぎた結果、孫文と衝突して國民黨の仇敵となつて晩年を穢したけれども、彼も亦一個の人材であるには相違なかつた。彼は廣州師範學校を卒業し、後廣東法政學堂に入つて政治經濟を學んだ。前淸末に、廣東諮議局員となつたこともあつた。

民國十一年九月の或日のこと、西湖畔の陳公館を訪れた者は、中國共產黨の主領として知られた陳獨秀であつた。陳獨秀は陳烱明とは豫ての知己だつた。彼は、陳烱明の爲めに、雄大高遠の策を獻じやうとして、はるぐ上海から南下して惠陽城へ來たのだつた。陳烱明は大いに喜んで迎へて、謹んで陳獨秀の說を聽いた。

陳獨秀は、先づ對時局策として、北伐回師と、孫文及び左右の者の一網打盡を勸告した。更に彼は肚裏を傾けて、赤露の現狀と、世界革命の大勢を論じ、三民主義の弱點急所を衝いて、共產主義の醍醐味を述べ、粵軍（廣東軍）を赤衞軍とし、陳烱明をレーニンに擬し、自らトロツキーを以て任せんと力說した。更に勞働の原理より、對外運動の策戰を論じ、其の淸新潑溂たる思想と、世界の事情に精通せる學識雄辯とは全く聽者を醉はしめるものがあつた。是れを說くに數日を費したといふ。

陳烱明は、嘗て一讀書子と目せる陳獨秀が、能く時勢を說き、兵器を說くに一驚を喫し、特に共產の新說に對しては深刻な驚異を感じたのであつた。しかし彼は多年陽明學徒として、年來聯省自治主義を奉じて來た。そして彼は操守堅固頗る頑固に近い方であつた。最後に彼は反對して、余は勞働階級が永遠に政權に參與することを不可と信ずる、如何となれば國を擧げて墮民と化し、生產は激減するであらう。且つ共產主義の實行は社會各階級に紛亂を招來し、反つて禍を與ふるものであると斷定すると云ひ放つた。玆に於て陳獨秀は大事共に成し難しと見切りを付け、滿腔の憾を抱いて惠州を去つた。

當時、陳烱明對國民黨の政治的環境は、前の話でも分るやうに、陳派は壓倒的有利であつた。若し此の時陳烱明が、陳獨秀の言を聽き入れたのであつたなら、民國十三年一月の孫文の容共政策實施に先立つて、中國革命の工作が或ひは陳烱明の手に依つて或る程度まで進展してゐたかも知れないと考へるのは、ひとり陳獨秀の感慨ばかりではないかも知れない。

私は船の中から、烈日下の惠陽城を眺めながら、其の樣ないろんな事を思ひ耽つた。

四

私達は湖中をおちこち廻つた。一番初めに西岸にある省立第三中學校を參觀させられた。それから引つ返して、大聖寺塔の下を通つて、船から上つた。大聖寺塔は土名を湖塔と呼び、小高い丘陵の上に建てられてゐるが、其の壯重な雄姿は西湖の風景を支配してゐる觀がある。此の塔は千年以上の建築だといふ。

湖塔の北に當る丘の中段に六如亭といふ古い亭がある。東坡の妾朝雲を葬つた所で亭の後ろにある古墳がそれである。附近で水牛が草を食べてゐる。

湖中に島が二つある。島には樓閣を築いて、風致を添へてゐるばかりでなく、遊覽者が其處で休憩する設備が出來てゐる。一島を紅棉水樹、一島を百花洲といふ。

湖には蓴菜や水蓮や荷(はす)が澤山生じてゐる魚鼈の類も多いさうだ。豐湖の名はそれから起きたのだといふ。

北岸に玄妙古觀といふ大きな道教の寺があつた。規模宏大でなか〳〵立派な寺だつた。私達は初め本堂の左手の客堂を訪問した。それは新しい建物であるが、周圍の壁に澤山の書畫を懸け、椅子や卓は紫檀の贅澤な品が飾り立てゝある。年頃四十五六の色の黒い筋骨逞しい道士がゐて、頻りに一行を歡待した。堂內を一巡して一番最後に遙か奧まつた一棟の堂へ行くと、其處には十七位とも八十位とも見える老道士と其の侍者が二三人ゐた。老道士は如才なく客を接待して、私の事も頻りに尋ねたりする。茶を出し菓子をすゝめる。何かの砂糖漬を菓子臺へ盛つてある上に數百の蠅が眞黑に簇がりたかつてゐる。老道士は拂子でもつて時々其の蠅を追ひ乍ら頻りに菓子を客に食へといふ。流石に手を出す人はない。



惠州西湖風景「紅棉水樹」

船の厨房では三人位の料理人が朝から料理の支度に掛つてゐた。午後の四時頃再び百花洲へ戾つて一同は島へ上つて宴會を開いた。山海の珍味が順〻に船から運ばれた此の閣は立派な建築だつた。聯に曰く

收來風月供詩料
閒興湖山作主人

島は直徑三四十間で、前庭に花壇があり、背後には竹叢がある。竹は幹が太くて簇生してゐる。

終日歡を盡して再び元の平湖門に戻つたのは午後五時頃だつた。

夜、私は唐さんと從卒を伴れて町へ散歩に出た。しかし電燈のない町は頗る陰氣なものである。私達はいつの間にか道を間違へて、賑やかな處へは出られず、とある大きな寺の前へ出た。夜目にも立派に見える寺だから構はず本堂へ入つて行くと、一人の僧が提灯を持つて横手の方から出て來た。堂内の模樣は少しも分らぬが、正面の壇の上にある眞鍮の大香爐がピカ／＼光つて見えるので私が何氣なくそれを手で撫でゝゐると、坊主は提灯を側へ差し付けて自慢してかう云つた。

「此の香爐は重さが百三十斤あつて、當寺開基より傳はるものだ、約千年も經つてゐる。或紳商から賣らないかといふ交渉を受けたこともあるが、寺の重寶だから拒絕した」

さうかなあと思つて提灯の明りでよく／＼調べると、道光何年といふ年號が入つてゐた。年號の彫り込んであるのも知らずに坊主が法螺を吹いてゐるのが可笑しかつた。

暗い城内を迷ひ迷つた後漸う例の十字路へ出た。其の附近の茶館へ入つて休憩した。私は惠州へ來て以來誤つて縣廳の賓客になつたゝめ、自由に外出したのは今夜が初めてだつた。民衆的な茶館へ入つて氣樂なく茶を飲んだり饅頭を食つたりすることは私の趣味である。

私は從卒とも初めて打ち解けた話をした。彼は古應雄と云ひ齢は廿八である。そして彼は此の惠陽縣の河源の人であつた。彼は十八の時軍隊に入つて以來幾度かの戰爭に出た。北伐の時は廣西から進んで各省に轉戰した。現在は陳銘樞氏の衞侍軍に屬してゐる。

古應雄君が旅行中私に盡して呉れたことは非常なものだつた。彼は私の爲に不必要なほど有らゆる勞役をする。例へば私が大勢の人と會食してゐる時でも、必ず私の背後に立つてゐて特に私の用事をするばかりでなく、身邊の警戒を寸時も怠つたことはなかつた。彼は現在准士官級の兵士ださうだが、キビキビした男で、相當に文字も解するらしかつた。

「君細君があるか」と私が尋ねると、

「去年結婚しました。妻は廣東に住つてゐます」と云ふ。

「それでは、早く歸つてやらぬと細君が淋しがつてゐるだらうね」

彼はニコ／＼笑つてゐた。

パラ／＼雨の降り出した中を縣政府迄歩いて歸つた。縣廳の直ぐ側の家に葬式があつて、夜おそくまで賑やかな音樂を奏してゐた。

此の翌朝六時に私達は惠州を去つた。

小説

眞理の春

續篇

細田民樹

◆愈々「中央公論」新年特大號より連載す

一九三〇年度の手擲彈「眞理の春」！ 現時日本を覆ふて全階級層を沸騰・震撼せしめたるこの劃期的階級文學の續篇は、今や作者半歳粒々彫骨の後に、構想愈々雄大、筆硯新たになりて其の第一回發表近きを讀者諸賢と共に欣びたい。

◆期待せよ。世紀の嵐を衝くこの暴露文學！

作者の言葉

◉作品に依る以外には——

今朝の新聞で見ると、さすがにアメリカの總選擧戰も不景氣に祟られ、『黃金の神樣』フーヴアーを見捨てて、民主黨が優勢のやうだ。これも所謂第三期的な沒落資本主義の一つの表れである。私がこの小說の前篇を出版してから、およそ半年の間にも、さうした世界恐慌の一環として、日本の階級鬪爭は加速度的に激化して來た。實に加速度的に激化して來て、勞働爭議の激增は元より、その性質も諸々方々に於て、今や一般大衆の行動に移るに至つた。現にこの小說の主題をなす某モスリン會社の爭議は、遂に數度の『市街戰』を演じつゝあるではないか。私がここに續篇を書き始めるのは、作者もまた階級鬪爭の一兵卒として、藝術を通じて、かうした激戰に參加するだけのことである。

この未完成な作品の一部が出版せられてから、およそ文藝批評に筆を執るほどの文壇人、左右兩翼の思想家、經濟學者、或ひは獄中の人々などの夥しい批評を受け、讀者大衆からは千數百通のお手紙を頂いた。だが、私はそれらの批評に答へ、或ひはお手紙に返事を書くことよりも、もつと重要な仕事に關はつてゐた爲、心ならずも御無沙汰をしてしまつた。また一方、この續篇が出るといふので、某々の方面から壓迫妨害策謀のあることも私は知つてゐる。

しかし、要するに、諸家の批評に答へ、讀者大衆に報ゐ、或ひは迫害と戰ひ得る作者の道は、作品に依る以外に最善は有り得ない。私はひたすら、その信念を押して、この續篇にむかふつもりである。

（五、十一、七）

在外日本人エロ群像

伊集院齊

伯林なり、巴里なり、兎に角、ヨオロッパへやつて来ると、誰でもみんな若返るだらう。ヨオロッパでは、日本人は、體は小さいし髪は黒いし、少くとも十は若く見られると云ふ人があるが、單に若く見られるばかりではない。生理的にも、心理的にも、ほんとに若返るらしいのだ。考えても見るが好い。營養は充分になる。脂ッこい肉の塊りと、消化を助けるビール、又は葡萄酒ー　室内の設備も、エネルギイの無意味な消耗を防止するやうに工夫されてゐる。冬はスチームが充分に體温を保つてくれる。外へ出ても、寒くはない。寒暖計は零下二度、三度を示してゐても、温度の關係だか、氣候の故だか知らないが、實際は、大して寒さを感じるような事はない。電車の中にも、タクシイの中にも、暖房装置が施してある。地下鐵に乗るために、路面から地下へ降りてゞも行かうものなら、むうツとして、暑くなつて来る位だ。

それに、周圍に動いてゐるヨオロッパ人の生活は、若々しくて、潑剌としてゐて、壓迫を感じる位精力的である。道を歩く時だつて、彼等はダンスのステップを踏んで歩く。男は女の腕を取り、女は男の肩に凭れながら——。私に云はせると、日常生活の中に、ダンスの調子を少しも持たない日本人が早く老ひ込んでしまふのは、決して不思議な事ではない。

つまり、日本人はヨオロッパへ来ると、みんな若返る。若返つて、困るような人もある。私の知つてゐる、東京の某會社の社長は、今年七十二だが、機械を買ふために伯林へ来た時、私と一緒に街を歩きながら、「あゝ女が好い！」とか、「おれを世話せい」とか、素人と商賣女の見境もなく、五月蠅い事を云ふので、閉口した事がある。その時には、私は日本人様御出入りの、例の有名な（？）カフエ・ヴイクトリアへ案内して、成るべく善良さうな女を摑まえてやつて、やつと解放されたのであつたが、女のために暗い眼にあふのも、この種の老人に多いのかも知れない。

一、二年前の事だが、某大學の學長が、巴里で悪い女に引つ掛かつて、十八萬フラン（當時の爲替相場では、約一萬圓）の信用狀を捲上げられた事がある。前後の事情を綜合して考へて見ると、その晩、彼は酒に酔つてゐたらしい。日本では、古武士的な所のある人格者、として知られてゐる人で、晩酌の習慣もない人ださうだが、花の巴里では、少し氣も緩つたのであらう。兎に角、酒に酔つて、そしてモンマルトルで女を摑まえたが、女に摑まつたかしたらしいのだ。大金をポケットに入れて、巴里の犯罪と罪惡の巣窟とも云ふべきモンマルトルを歩くなんて、私に云はせれば、抑々不心得千萬なのだが、今になつて、

そんな事を云つたつて仕方がない。いづれにしても、この尊敬すべき學長は、女と一緒に、怪しげなホテルへ行つたらしいのだが、其處で、好い心持になつて、その夜を樂しんで、さて、翌る朝、眼を醒ましてみると、女はゐないし、ポケットの中の物は無くなつてゐる。彼は青くなつて、直ぐに警察に訴へ出たさうである。その際、洋服を着て行くことが出來たのは、女の恩惠だつたと云はなければなるまいが——と云ふは、若し女が、脱ぎ捨てられた彼の洋服まで持つて行つてしまつたら、彼は裸かで、警察署長の面前へ進み出なければならなかつた事だらう。

喜こんだのは、警察署詰めの新聞記者達だつたさうだ。然うだらう！　ニウス・ヴアリウは滿點である。大學の學長と街の女！　その日の、巴里中の夕刊には、可哀さうに、彼の威厳ある禿げ頭の寫眞入りで、一段拔き、三段拔きの記事が出てゐた。

私の知つてゐる、或る銀行の重役も、伯林へ着いた翌る晩に、同じような災難にあつた。而も今度は、ほんとに洋服まで待つて行かれたのだ。勿論、彼は大學の學長みたいに、道徳的に、一人で冒險をやる必要はないので、誰か、勝手のわかつた者が付いてゐたに違ひないのだが、その男こそ、間拔けだと思ふ。そんな悪い女を摑まへてやるなんて、平常の心掛けが足りない！　若し彼がその重役の銀行の男だつたら、多分、何かの機會に、首になつたかも知れないと思ふが、それは兎に角として、この種の災難は、年に三、四回づゝは繰返されるらしい。珍聞として、又は參考のために、ヨオロッパ滯在者達の間には、國境を越えて、風のように、何時の間にか傳えられるから、不思議である。

前文部大臣S博士の精力絶倫振りも、當時、噂の種子を蒔いたものであつた。彼は二、三年前、何度目かの洋行で、伯林へやつて來たのだが、直ぐに、昔馴染みの女の家を訪問したさうである。然し、これなんか、私はむしろ、情味のある、一種の美談（？）だと思つてゐる。特に、年少氣鋭な、そして純情な、往年のS博士を想像してみると、一寸そんな氣がする。だが、その女が——と云つても、今では勿論お婆さんだが、大臣閣下の訪問を受けた事を、自慢らしく、吹聴して廻つたのだから、やりきれない。おまけに、餘計な事まで喋舌り散らした。「ミニステルSは、今でも大變に强壯で　私が周旋した若い娘を、一×に三×も何したさうです。」

この話を聞出して來た古い支那浪人は、白髪頭を打ち振りながら、感嘆した。「Sには敵はん！」だが、彼自身も、ヨオロッパへ來ると、比較的容易に、二頭立ての馬車に乘れる事を、愉快至極だと思つてゐるのだ。二頭立てと云ふのは？　然うだ。老人向きの、やゝ變態的な行爲を意味する一つの隱語である事は、誰にも直ぐに想像が付かう。

老人達にして、既に然り。況んや、若い紳士達に於てをや！　某道三段のMは日本人には珍らしいほどの偉大な體格の持主だが、二週間の豫定で、ロンドンから飛行機で伯林へやつて來て、小型のスーツ・ケースだけはホテルに置いたが、自分は一晩もホテルには泊らなかつた。女の家を泊り歩いてゐたのだ。そして碌に見物もしないで歸つて行つたが、歸る時には、三等の汽車であつた。而も彼の言ひ草が好い。「伯林は好い」。然う云つて、樂

耕な游來した。

内務省の官吏であるＢは、伯林へやつて來て、私にこんな告白をした。十四日間のシベリア旅行の後、やつと伯林に着いた時には、この近代的な大都會が、まるで天國のように見えたし、薄い衣物を着て、街を歩いてゐる女達が、みんな天女のように見えたさうである。丁度、復活祭の最中で、アカチアや、カスタニエンの並樹にも、一齊に新綠が萠え始めると云つた風な、一番行樂的な季節だつたから、殊に然う感じたのかも知れないが、一週間の後には、その天女達が、みんな裸で街を歩いてゐるような氣がして、仕樣がなかつたと云つてゐた。この裸かの想像は、云ふ迄もなく、彼が既に放恣な行爲と空想を持つようになつた事を示すものであらうが、そんな事は如何でも好い。此處には關係のない事である。だが、更に次ぎの一週間の後には、彼はもう我慢しきれなくなつた。ヨオロッパの女達が、實に醜惡で、動物的で、嫌惡すべき化物どもに見えたのださうである。

日本人様御出入りのカフェに通つて、日本人專門の女達を相手にしてゐる間は、先づ以て無難であらう。彼女達の數は、伯林だけで、七十何人に及ぶと云ふ。ウイーンにも、十人位はゐるさうである。ハンブルグの女について云々する人もあるが、あんな大きな港町だから、何時も移動があるのではないかと思ふ。ミュンヘンでも、それらしい女を見掛けた事がある。ロンドンの事は知らない。巴里には、多分、その種の專門家はゐないと思ふ。フランス人らしく、萬事國際的に！と云ふ譯なのだらう。

ところで、例へば伯林の女についてだが——と云ふと、何だか偉さうに聞こえるが、實はあんまり知らないのだ。生來の野暮天で、女には緣が薄い。たゞ、會社の偉い人達が伯林へ來ると、結局、何時も御案內(?)をしなければならない事になるので、表面的な手續だけは覺えてしまつた。つまり、斯うだ。テーブルについて、ビールでも飲みながら、樂の音につれて踊つてゐる女達、意氣な恰好をしてつんと澄まして、細卷の煙草を燻らしたり何かしてゐる女達、リキユールを飲んでゐる女達、コッちに流し眼を送る女達の中から、氣に入つた一人を物色させる。何時、話は私が付けてやらなければならない。私は二人を自動車に乘つける。そして私は解放される。

この種の女達が、純粹の獨逸人でないのは、云ふ迄もあるまい。巴里にしたつて、純粹のフランス女は、決して淫らな商賣なんかしない。大抵は猶太人だ。でなければ、スペイン人かイタリア人、又はバルカンの弱小國から流れ込んで來た女である。白色ロシア系の女も多い。私には一眼で、それ位の見當は付く。

警察の鑑札面は、ビュフェット・フロイラインと云ふ事になつてゐる。だが、彼女達の中には、スパイも二、三人は紛れ込んでゐるだらう。某國政府から手當を受けてゐる女。私は一人だけは、そんな匂ひのする女を知つてゐる。

眞にヨオロッパを理解するためには、ヨオロッパの女と同棲しなければならない！

こんな見識を持つてゐる人もある。成る程、ヨオロッパ人の半分は——女性の純計では、半分以上と云ふ事になつてゐるが——

女なのだから、私みたいな男は、結局、何年ゐても、ヨオロッパ文化の半分しか理解出來ない、と云ふ事になるのかも知れないが、それは仕方ないとして、さて、然うした尊敬すべき、熾烈な研究心(?)から、ヨオロッパの女と同棲してゐる人も、相當多いやうに見受ける。巴里にゐる若い畫家達が、時にモデル女と一緒に、アトリエで共同生活をしてゐるのは、これは云ふまでもないとして、伯林でも、立派な社會的地位のある、儼めしい人達が、若い女と同棲してゐる事がある。私の知つてゐる、某大學教授K博士も、一年ばかり、シユワルツワルトの女と同棲してゐた。牧歌的な、朗らかな感じのする、娘（メーデル）と云つた風な女だつた。某省官吏で、高等官三等と云ふ紳士も三ケ月ほど、鼻の尖つた、痩せこけた猶太人の女と同棲してゐた。但し、高等官三等自身は、彼女が猶太人だとは氣が付かなかつたらしい。そして女が後になつて云ひ觸らした所によると、彼は嗜虐性の變態性慾者だつたさうである。ヨオロッパの女と云ふものは、割合に平氣で、そんな事を口にする。彼は何時も、女の乳房に噛付く癖があつたさうで、女はそれを好まなかつたと斷言した。

同棲の結果、女に混血兒を生ませるやうな人もある。私も二、三人は、そんな紳士を知つてゐるが、彼はその赤ん坊が滿二十五歳になるまで、毎月二十五マルクの養育料を支給する義務を背負はされるだらう。法律によつて、然う定められてあるのだ。だが、二十五年と云へば、隨分長い。そのうちに、彼が死にでもしたら、どんな事になるものだらう。彼の妻君、又は子供が、それを支拂ふ事になるのだらうか。何だか變な話である。

日本人と同棲したがるこれらの女が、大抵は教養のない、下卑た女である事は、云ふ迄もあるまい。日本へ歸つてから、變な訛りのある、下卑た獨逸語を喋舌る人があつたら、その人はこの種の女と同棲してゐた、と考へて差支あるまい。勿論、それには例外はある。Aと云ふ青年は、ノイケルンの貧民窟に住んでゐた。左翼の運動を勉強してゐるが、彼の獨逸語と來たら、こいつは無茶だ。下卑てる、と云ふ所を通り越してゐる。

中には、教養の高い女もゐる。或る醫學者と同棲してゐる女なんか、正に然うだ。彼女は、イプセンの紹介者として知られてゐる某批評家の娘で、以前は、新聞や雜誌に詩を投書してゐた才媛だけに非常に、綺麗な獨逸語を話す。聲も好い。

言葉の話が出た序に、一つ附け加へて置きたいのは、或る土木技師の獨逸語である。彼は如何した縁故からか、貴族の老婦人の家に止宿して、大學へ通つてゐるのだが、馬鹿に古風な、お上品な話し方をする。と云ふのは、その老婦人は、以前、カイゼルの宮廷にも出入した人らしいのだが、今でも、宮廷風の繁雜な文法で話す癖が殘つてゐる。例へば、話の急所々々で、故意と少し吃つて見せる。どんなに文法的に話さうと心掛けてゐるかを、見せようと云ふのだ。帝政時代の宮廷文法には、「この邊で少し吃るべし」と指定してある。それから又、必要以上に假定法を使つたり何かする。しとやかに話してゐると云ふ心意氣を見せるのだらうが。老婦人がそんな話し方をするのは好い。土木技師がその眞似をするのでは、何としても滑稽である。

さて、女と同棲するについては、金が要らう。その金額は、勿論、場所により、相手に

よつて違ふだらうが、なかば職業的な女だと、ライプチヒや、ドレスデン邊りでは、月に六百マルク(＝三百圓)だと云ふ話だつた。伯林では、千マルクと云ふのが、通り相場らしい。云ふ迄もなく、部屋代から、食費、娯樂費、それから、女への報酬など、一切を含んでゐるのだらう。だが、それにしても、勿體ない話である。伯林の勤勞生活者の平均所得額は、月百八十マルクで、而も、それで妻子を養つてゐる。伯林大學の學生の中には、月八十マルクでやつてゐる青年もゐる。學生共濟組合で周旋してくれた、二十マルクの部屋に住んでゐるのだ。もつとも、それは高い屋根裏の——然うだ。天に近い部屋ださうだが。

馬鹿な日本人！　女に絞られてゐるようなものである。彼女達は考へてゐるだらう。黃色い紳士からなら、金が絞れる——。だから、女達は日本人と同棲したがる。又は、日本人と關係を付けたがる。夕方など、地下鐵の入口の邊で、明らかに街上婦人ではない娘さんに、馴々しく話し掛けられる事がある。例へば、「あなた、××さんを御存じではないでせうか?」など〻——。私はびつくりして、そんな人は知らないと云ふと、彼女はそれを話の緒口にして、何彼と話しながら、三、四間は私について來るだらう。そして、若しも私が彼女に興味を持ち始めて、カフエにでも誘ふものなら、勿論、彼女は喜こんで應じるに違ひないのだ。

もつと露骨な、兒戯に類するような、誘惑の手段もある。一人の老人が、往來で私を呼び止めて、「私の家には、立派な部屋が空いてゐて、奇麗な娘もゐるから、引越して來ないか」と勸めるのだ。その娘と云ふのは、フランス語とピアノを教授することも出來るさうで、年は二十だと云ふ事だつた。而も、老人はわざ〳〵ポケットから、彼女の寫眞を出して見せたが、成る程、快活さうな、利巧さうな、美しい娘であつた。

私の考へでは、こんな誘惑に乘り易くて、一番だらしがないのは、文部省の留學生である。彼等は日本にゐる間は「先生」だから、固くなつてゐるだらうが、ヨオロッパへ來ると、急に解放されてしまふ。おまけに、ふだん持ちつけない大金は懐にしてゐる。それに、女の扱ひ方は知らないと來てゐる。如何に當る、或る高等學校の教授なんか、伯林に着く早々から、女に附き纏はれて、困りきつてゐた。何でも、最初の晩に、同棲の約束をしてしまつたと云ふ。それには、言葉の行違ひもあるらしいのだ。Ja と Nein を間違へただけでも、大變な事にならう。そして實際、最初の間は、否定の質問に對する Ja と Nein を、兎角、間違へがちである。で、女は約束の履行を迫るし、彼にはその意志がない、と云ふ事になる。彼がどんな風に結末を付けたか、長いこと彼に會はないから、私は知らない。

勿論、中には、女なんか振向きもしないで、勉强ばかりしてゐる人もないではない。それは云ふ迄もないであらう。一年間、外出もしないで、部屋にばかり閉ぢこもつてゐた人もある。外へ出ると、何だか恐いのださうである。お蔭で主婦は心配した。あの日本人は酷い神經衰弱にか〻つてゐる。自殺でもしなければ好いが！　だが好い年をして、猶太人の女なんかに丸められて、仲に入つてゐる連中を見ると、日本も大した金持ち國だナ。

と苦笑せざるを得ないだらう。

然うだ。日本人は金持ちのように思はれてゐる。それがいけないのだ。もつとも、それには理由もある。戦爭後のマルク暴落時代には、實際、無茶な金使ひをしたらしいので、その印象が、未だ鮮やかに殘つてゐるのだらうと思ふ。今でも、大伯林の眼抜きの場所ともいふべき、選帝侯道路(クーアフュールステンダム)あたりの立派なレストランに這入ると、專屬のオーケストラが、直ぐに「君が代」の國歌を奏したり何かする。そんな時には、私は唯、一寸立ち上つて、指揮者に目禮する事にしてゐるが、昔は一億マルク位のチップは出したものらしい。一億マルクと云つても、當時の爲替相場では、五圓か六圓にしか當らなかつたのだらうが、それにしても景氣が好い。今でも二マルクか、五マルク位は出す人があるのかも知れない。

但し、こんなのは、云ふ迄もなく、大使館の人達とか、留學生とか、歐米視察の官吏とか、ヨオロッパ駐在の會社員とか、又は遊びに來てゐる金持ちの坊ちやんとか――兎に角、金のある人達のする事である。だが、ヨオロッパには、金のない日本人も澤山ゐるのだ。巴里にゐる若い畫家達の中には、隨分困つてゐる人も多い。二坪位の部屋に住んで、食ふや食はずで繪をかいてゐる人もある。日本人らしく、喧嘩を吹き掛けて、金にしようと云ふ無茶な人もゐる。乞食もゐる。この乞食はノール停車場や、プールヴァール・デタリイや、ルーヴル博物館など、物馴れない日本人の集まりさうな場所に出沒して、憐れつぽい聲で、同國人の誼みに訴えて、相當な金を貰ふのである。好い商賣である。私は三度目に巴里へ行つた時、ルーヴルで彼に掴まつて、三十分も濕ッぽい話を聞かされたが、五フラン(＝三十五錢)で別れることが出來た。

巴里には、實にいろんな人がゐる。日本人の宿所を廻り歩いて、春畫、又は猥本の類を賣つて、生活してゐる爺さんもある。頼んで置くと、珍らしい本を探してくれる。但し、一説には、彼は某國の軍事的、又は思想的スパイだと云ふ。少くとも、フランスの官憲は然う睨んでゐるらしい、と云ふ話だつた。以前は陸軍大學出身の優秀な青年士官だつたのだが、飛行機から墜ちたか何かで、以來、頭が變になつた――と自分では然う云つてゐる。又、旺盛な體力を利用して、變態性欲者の集まる祕密倶樂部に傭はれて、奇怪至極な男妾の役目をしてゐる男もあつた。この男は、日本人に擲られて、巴里に居堪れなくなつて、アルジエリアとかへ逃げて行つたと云ふ話を聞いたが――。

伯林には、こんな日本人はゐないようだ。大抵は學者らしく、おッとりしてゐる。私は唯一人だけ、凄い男を知つてゐる。妙な關係で知合ひになつたのだが、彼は十數年前、神戸で行はれた三人殺しとかの共犯ださうである。主犯は擧げられたが、彼は日本を脱走したらしい。そして支那や滿洲を廻り歩いて、日本軍のシベリア出征の時、變裝して蒙古に這入つて、ロシア、ポーランドを經て、獨逸へ來たのだと云ふ。今では、密輸入をやつてゐる。何でも、ハンブルグにゐる仲間の者と連絡を取つて、ヨオロッパでは絶對に高價なものとされてゐる日本の絹や、クレープ・ド・シイヌ(＝縮緬)などを、密輸入しては、賣捌いてゐる。何時もりうとした服裝をしてゐる

所を見ると、可成り儲かる仕事なのであらう。

伯林にゐる日本人で、彼を知つてゐる人は多分あるまい。彼は今では、相當に立派な獨逸語を話すし、敎養のある紳士らしく振舞つてゐる。名刺にはドクトルの稱號が印刷してある。たゞ顏に二個所ほど、古い創跡のあるのが、何となく底氣味惡く感じさせるが、彼自身に云はせると、獨逸では、それがために、却つて持てるさうである。と云ふのは、彼は以前、ハイデルベルヒの大學にゐて、國粹的な學生の團體に這入つてゐた、と云ふ事になつてゐるらしいのだが、獨逸人はそれを聞いて、彼の創跡を見ると、直ぐに、あの華々しい大學生達の決闘を思ひ出すのだ。その古創を看板にして、女を引つ掛けるのだ。と云つてゐた。彼のやり方は、下等で、凄い。女と同棲して、女から絞り上げて、好い加減に捨てゝしまふ。今は何人目か、十何人目か知らないが、ヴアリエテでピアノの曲彈きをする女と同棲してゐる。

さて、この男だが、この男は今年いつぱいで、殺人犯の方が時效にかゝるのださうである。そしたら、一寸、日本へ歸つて來ると云つてゐる。何のために？ 彼が底光りのする眼で、にやくく笑ひながら云ふ所によると、ヨオロッパで馬鹿な眞似をして行つた、所謂名士達を脅迫して、金を強請つて來るのだと云ふ。そのために、彼は今、內々、のッぴきならぬ證據材料を集めてゐるが、私も一度、冗談半分に、それを見せて貰つた事がある。大學敎授が女に宛てゝ書いた、下手な獨逸語の戀文、明日何時に、お前の部屋へ行くと云つた風に、愛稱を使つて書いた、某銀行課長から娼婦への申込狀、女への支拂が滯つたと見えて、女に怒られて書いた詫證文、それから寫眞もある。何の積りだか、堂々たる武官が盛裝して、例のビユフエット・フロイラインに、花嫁の白い衣裝を着けさして、一緒にうつしてゐる寫眞、猛烈なのになると、寢臺の上に、精悍な顏付をした紳士が胡坐をかいてゐて、その膝の上に、シミーズ一枚の女を坐らしてゐる、と云つた風な寫眞、等々々――。私がこの文章を書くについても、彼の蒐集に負ふ所が少くない。

彼は八十何人は大丈夫だと云つてゐる。一人二百圓としても、一萬六千圓。先づ一萬圓は動かぬ所だらう、と、この不敵な密輸入者は、自信ありげに云つてゐる。

來年の三月！ 三月に彼は歸るさうだ。そしたら、所謂名士達の間に、氣味惡い熱病のような恐慌が起こるか如何か、私は今、そんな事を考へてゐる。

對外爲替をめぐる悲喜劇

明智光太郎

◇

ものごとは何にでも、明るい方面があれば暗い方面があり、善いことがあれば惡いこともある。鬼が出ると同時に佛も出る所に、面白味もありおかし味もある。對外爲替が生み出す悲喜劇とても、つまりその一例に外ならない。對外爲替は生きものだ。騰貴することもあり、低落することもある。一方の騰貴は他方の低落であり、他方の低落は一方の騰貴である。鬼佛一紙、騰落は立場の相違にすぎないと、いへばいへないこともない。對外爲替が生み出す悲喜劇は、勢ひ騰落の兩方面に關係せざるを得ない眞理。

對外爲替は主として國際貸借の順逆によつて動くが、そればかりで動くと限つたものでない。その外にも對外爲替を動かす事情は色々ある。はたまた對外爲替の變動は四方八方に影響する。對外爲替の關係局面は極めて廣く、その演出する所は頗る入組んでゐる。もし入念に克明に對外爲替をめぐる喜悲劇を描かうとすれば、もとより短文の盡し能う所でない。ここでは單に大雜把な記述にとどめなければならない。

遠い所は一さいお預けとして、最近對外爲替問題が、我官民を苦惱させたり焦慮させたりしたのは、歐洲大戰の當時からだ。歐洲大戰が開始されたのは、我經濟界にとつて一大福音であり、同時に禍根を培つたものであつた。大福音といふ方面から見れば、殆んど行詰りの窮極にあつた我國際貸借は、歐洲大戰の開始後いくばくもなく局面一變、對外爲替は騰勢に轉じて正貨は増し、爲替銀行はコールを取つてドルを買ひ、正貨を輸入して巨利を博した。

當時正貨輸入に大活躍を演じ、目覺しい儲けをやつたのが臺灣銀行。それを傍觀した普通銀行は羨しいやら妬ましいやら『あんなボロイ儲けはありませんナア』と、聞えよがしに陰口を叩いてゐたものだ。併しながら妬まれ羨まれた臺灣銀行にも、好い日ばかり續かなかつた。あまり調子に乘つてドル買に猪突猛進しすぎて、手許の繰りまはしがつかなくなり、萬策つきて日本銀行に資金の融通を懇請したものだ。

ところが日本銀行はなか〳〵首を縦に振らない。『一體自分の資本も考へず、また一定の計畫も立てず、たゞ儲るのが面白いからといつて、無暗にドル買に突進するとは、銀行家にも似合はぬ不健全なやり方だ。手許の繰回しがつかなくなつたのは、いはば自業自得。今さら泣言をいつたとて始まらぬ』と頭から刎ねつけて相手にしない。日本銀行を口說き落すかボロを出すか。當時臺灣銀行の行くべき途は唯だ二つしかなかつた。日本銀行の前に甲をぬぐのもツラいだらうが、ボロを出すのは尚さらツライ。そこで平身低頭、日本銀

行のいふことを一々御無理御尤と承つて、資金の融通を仰ぎ當面の難局を凌いだことがある。これなどは慥かに對外爲替が生んだ悲喜劇の一齣。當時日本銀行の首腦者が『これは救濟資金ですよ。ようございますか。こん度かぎりですよ。二度はききませんよ』と念を押したのは、丁度道樂息子の尻拭ひをする老爺の態度。今なほ身に染みてゐる人がある筈だ。

さるほどに米國は歐洲大戰に參加した。今まで出るに任せて置いた正貨の輸出を禁止した。面喰つたのは我國だ。當時國際貸借は我國にとつて順であり、大局から觀て正貨減少の憂はなかつた。ただ支那からの正貨取付が馬鹿にできない一方、唯一の正貨流入口であつた米國が、正貨の輸出を禁止したとあつては、默つてゐるわけに行かぬといふのが、政府及日本銀行をして金輸出禁止を急がしめた理由である。慌て氣味が全然なかつたとは申されまい。今から考へればやはり悲喜劇の一齣だらう。

當時の政府は『こんな場合に出來るだけ輸出を增進させて、出來るだけ澤山の正貨を獲得しないのはウソだ。機會は度々來るものでない』と馬力をかける。商工業者も農民も儲かることには興味が湧く、張合もつく。『それ輸出だやれ輸出だ』と手當放題、國內物資の缺乏などには御構ひなしで、ひたすら輸出增進に力瘤をいれた。結果は在外正貨の增加となり、對外爲替の騰貴となつた。

表面から見た景氣は馬鹿によかつたが、一たび裏面をのぞくと、いろ〳〵の悲劇喜劇が演ぜられてゐた。第一に輸出奬勵に反對したのが農商務省の若手官人だ。『いくら正貨の增加するのが面白いからといつて、この調子で行つたら國內物資の缺乏＝物價暴騰は必然だ。そのため大多數の國民を苦しめては、正貨が增加したとて何になる』といふのが彼等の申し分。これには日本銀行も大體同意見で、『今は輸出奬勵もいい加減にすべき時だ。否、むしろ輸入を奬勵する必要がある時だ。このまゝ進めば物價暴騰は免かれない』と合槌を打ち、首腦部の一人の如きは、大藏大臣を子供扱ひにしたとか、大藏大臣がその人を首にしようとしたとか、日銀總裁三島子がその間を繕つたとか、種々の噂さが傳はつた。噂さはいふまでもなく悲喜劇の反映である。

◇

日本銀行首腦部の鼻息が荒かつたのは、政府對正金銀行のゐきさつにも關係がある。當時米國が金の輸出を許さなかつた結果、我國が貿易出超によつて、または貿易外の受取超過によつて獲得する正貨は、金をもつて取り寄せることはできない。否でも應でも在外正貨として蓄積する外ない。その任務を負はされたのが正金銀行だ。ところで正金の資力には限りがある。數億の在外正貨を蓄積するには、もちろん正金自身の資力では、不足も不足大不足である。これを補ふため市中から借金をし日本銀行からも融通を受けた。一時は日本銀行の爲替貸付が數億圓に上つたことさへあつた。自分の資力に幾倍する借金を持つことは、正金銀行としては無鐵砲な仕打。これを強ゐられるは迷惑千萬だらう。

のみならず我國際貸借が順であり、正貨が增加する一方であれば、對外爲替は當然騰貴せねばならず（即ち外國貨幣の價値は、當然低落せねばならぬ）、對外爲替が騰貴すればす

るほど在外正貨の價値は低減しなければならない、數億圓の在外正貨を抱へてゐる正金銀行にとつては、實に由々しい大問題だ。かりにドル貨の價値が一分低落しても、在外正貨數億圓とすれば、忽ち數百萬圓の損失となるからだ。

そこで正金銀行當局者（當時の頭取は今の藏相井上氏）は、この上は在外正貨の蓄積は御免蒙るといひ出した。併しながら在外正貨の蓄積をやめるといふことは、當時にあつては輸出の奬勵を中止することを意味し、輸出增進を見合せることを意味する。これは輸出の增進正貨の獲得を、無上の良策と思ひ込んでゐた政府の、極力排斥する所。政府は飽までも正貨蓄積を續けろと強制し正金銀行當局は左樣には參らぬと反對し、トドのつまり政府側は『それならば正金銀行の當局者をやめさせる』といひ出し、正金側では『吾々は株主總會で選擧されたのだ。政府の一存でやめさせ得るものならやめさせて見よ』とタンカを切る。息苦しいツバ競り合ひ、爭ひは死ぬか生るかの瀬戶際まで行つたが、そのうち内閣の交迭大藏大臣の入れ替りで、もの別れになつた。これなどは對外爲替が生んだ悲喜劇の中ちよつと念が入つたものである。

◇

話しは大正十二年の關東地方大震火災の當時へ飛ぶ。當時出現したのが山本權兵衞内閣、大藏大臣は日本銀行總裁から轉じた井上準之助氏であつた。前内閣の大藏大臣市來乙彥氏は、金解禁を自分の手でやつてのける底意があつたらしく、その前觸れとして在外正貨を平價に近い相場で拂下げることにした。對外爲替が強調であつたのは、いはずと知れたことである。その後を承けた井上藏相は、爲替政策について前任者の方針を踏襲した模樣であつた。ただ時は復興物資の需要旺盛、それを充足するために輸入の緊要が强調されるときであつて、政府は廣範圍に亙つて輸入關稅を減免した。その結果外國品は決河の勢で流入し、在外正貨はエライ勢で急減した。まさか度膽を拔かれたわけでもあるまいが、政府は急遽對外爲替の方針を一變し、拂下相場を辛くすると同時に、殆んど拂下げを停止してしまつた。さなきだに關東地方の大震火災が、我經濟力に對する海外信用を減殺した際に、在外正貨の拂下げ、換言すれば人爲による對外爲替維持策を停止したのだからたまらない。對外爲替は九天直下、低落につぐに低落をもつてした。井上藏相が泡を食つたとか、顏色蒼白になつたとか、雜多の風說は飽まで事實でないことを斷らざるを得ない。とにかく一方輸入が激增すべき施設をして置きながら、他方在外正貨の急減に喫驚するとは、目先が利いた仕打ちとは申しにくい。對外爲替をめぐる悲喜劇の一齣にかぞへられる所以である。

◇

いはゆる國辱外債を淸浦内閣が發行したのは、裏面に人知れぬ苦心があつた。當時外貨輸入を渴望する聲は、官民の間に充ち滿ちてゐた。在外正貨は手薄になつたが、輸入は增すとも減りさうもない。さりとて在内正貨を現送して對外決濟をすることは、人心が動搖してゐた當時實行不可能にちがい。外債發行は洵に餘儀ない事。しかも彼の當時外債を發行するには、何人がやつてもアレ以上の條件では纏るまい。大藏大臣官邸の夜は更けた。卓を圍んで深き沈默に沈んでゐるのは、大藏

大臣始め三四の大官と日本銀行の首腦部。海外金融團が提出した外債條件を容れるか、はた拒むか。これを決定する以外もはや交渉の餘地はない。容れれば外債は成立するが事情を知らない人々から、手痛い攻擊を受けねばならぬ。拒めばそんな攻擊は受けないで濟むが、對外決濟の行詰りから經濟界は異常な衝動を受けなければならない。一分また一分、息苦しい時は移つた。大藏大臣の眉宇は動いて、吐き出された一句に斷金の響きがある。『よし僕一人が世間攻擊の的にならう』と。かくて條件承認の電報は飛んで、外債は成立したのである。大藏大臣の苦衷を知るものは極めて少く、『屈辱外債』攻擊の聲のみ無暗に高い。對外爲替をめぐる悲劇中の悲劇といはればなるまい。

◇

高橋淌菴翁は世間から『重金主義者』といふ刻印を打たれた人だ。それが當つてゐるかどうか斷定しがたいが、翁が終始一貫固く金非解禁説を執つて渝らないのは、世間周知の事實である。歐洲大戰參加と同時に金の輸出を禁止した米國が、大戰終熄後間もなく金輸出解禁をした際、我政府部内にも日本銀行方面にも、『我國もこの際金輸出禁止を解くがよい』と主張する者があつたが、當時大藏大臣の要職に在つた淌菴翁は、どうしても承知せず、金解禁の議はオヂヤンになつた。當時金解禁を非とした主たる理由は『世界の形勢から觀て何時東洋に事が起るかも知れない。そんな場合の用心に成るべく多くの正貨を保有しなければならない』といふにあつた。その後東洋を中心に風雲大に動くようなことは、先づ無さそうだと大體見當がついたけれども、淌菴翁の金非解禁説は依然として少しも變らず。たゞその理由は『我國の產業が發展し國力が充實して、自力をもつて金本位制度を維持し能ふだけの確信がつくまで、解禁すべきでない。今やるのは尙早だ』といふことに變つて來た。この點から見ると理由などはアトからつけたもの、何が何でも金解禁をやるのは厭だといふが、翁の本位らしくも思はれる。『重金主義者』の刻印を打たれた所以であらう。

◇

政友會內閣の大藏大臣淌菴翁對憲政會總務濱口雄幸氏の、衆議院における金解禁是非の論爭は、當時の呼びものであり聞きものであつた。濱口氏は卽時解禁論者。淌菴翁はいふまでもなく解禁尙早論者。一方が水ならば一方は火。問答幾十回。虚々相摩、手に汗握る場面もあつたが、結局ケリはつかなかつた。但だ攻手の濱口氏に意外の材料があつて、屢ゝ淌菴翁の急所を突いた。その後見役となつて材料供給掛をつとめたものが、時の日本銀行總裁であつたとか無かつたとか、今なほ妙な噂さをする人もある。

世の中は妙なもの。卽時解禁論を振りかざして散々淌菴翁の油を搾つた濱口氏は、加藤(高明)內閣の大藏大臣として、卽時解禁論から解禁尙早論に鞍替へし、逆に淌菴翁を攻めた武器をもつて、自分が攻められる番になつた。攻手の花形は武藤山治氏、政友本黨がそれに應援した。濱口氏の武器はどこまでも『大震災のため我經濟界の狀勢が一變したから』の一本鎗。武者振はかなり勇しかつたが、隨分無理な手法もあり、足元の危な氣に見えたことも絕無ではなかつた。何せよ當時の對外爲替は三十八ドル半、平價にくらべて二割三

分弱の暴落だから、濱口藏相も變説を餘義なくされたのであらう。

◇

濱口藏相を變説改論として攻撃した武藤山治氏も、金解禁については立派に變説改論をした一人だ。前者が對外爲替の變動が生んだ悲劇中の一人ならば、後者も亦その一人でなければならない。對外爲替が三十八ドル半に激落した時にさへ、金解禁卽時斷行を主張(しかも熱心に執拗に主張した)武藤氏は、對外爲替がそれ以上に昂騰した場合には、一層熱心に金解禁卽時斷行を主張しなければならない筈だ。ところが事實は全然その反對。政友會(田中)內閣の時には鋒鋩を蔵め、今は解禁反對＝金輸出再禁止を叫んでゐる。變説改論でなくて何であらう。

武藤氏は政治家よりも實業家だ。紡績業者として發達した人だ。氏を動かす唯一の因子でないまでも、少くとも有力な因子の一つは、紡績業の利害でなければならぬ。ところで紡績の原料たる棉花は全部輸入品。その價格の一高一低は紡績業の利害に大關係があり、その運命にさへ影響する。しかも對外爲替が二割三分弱も暴落すれば、棉花の價格はテキメン二割三分もしくはそれ以上跳ね上り紡績業の收益はそれだけ食ひ減らされなければならない。武藤氏にとつてはまさしく一大事だ。金解禁によつて對外爲替を平價に回復させ、原棉價格の低下、紡績業の收益增加を圖らうとしたのは、無理からぬことであつたらう。

田中內閣と妥協した武藤氏は、紡績業者たる立場を忘れたわけではあるまいが、同志會長として仲間の始末をすることがヨリ急になり、一面對外爲替も三十八ドル半に暴落した當時にくらべると、餘ほど回復してゐたので、金解禁卽時斷行の旗印を引込ませ、時期尚早說に調子を合せたのかも知れぬ。

昨今武藤氏は紡績業の利益にも敏感であらうが、政治家としての欲望もかなり熾烈。犬養內閣成るの日は、閣員の一人に氏を發見するではないかなど、取沙汰する者もあり、氏の身邊にはそれを事實ならしめようとする運動もある。現に政友會の有力方面には電氣を通はせてゐるらしい。濱口內閣が金解禁を標榜して出て來つた頃から、武藤氏の金解禁反對の態度が頗る鮮かになり、金輸出再禁止まで發展したのは、政友會の出處と呼應する所がないだらうか。政友會の方に相思の情があるかないかは別問題だ。武藤氏の方に果して花を想ふ水心がないだらうか。

金解禁實行後の我經濟界は、まさしく大受難時代。紡績業もまた御多分に洩れず苦境に沈んでゐる。金輸出再禁止は根本的に不況解決策でないまでも、當面の一對策わけて事業家にとつての便法だと受取られてゐるもの。紡績業の利害を閑却することができない武藤氏が、金輸出再禁止說に共鳴し、熱心にそれを主張するのは不思議ではあるまい。

武藤氏は正直な人。その進退にケレンや手管があらうとも思はれぬ。たゞ氏は正直なだけ單純だ。一事に熱中すれば他事との關係や聯絡やは、全然無視する。少くも考慮するいとまがない。金解禁に對する所說が、昨日は東、今日は西、他人の目には變化窮りないように見えても、その時の武藤氏には、案外眞劍であるのだらう。とも角濱口氏にせよ武藤氏に

せよ、現代一方の雄。それが金解禁問題や對外爲替の高低にあやつられて、變說したり改論したり種々の場面を見せたのは、また悲喜劇の一齣たるを失はぬ。

◇

田中內閣は金融恐慌を機緣として生れ出で、金融恐慌の跡始末を一つの使命として出現した。金融恐慌は對外爲替に甚き影響を與へないのは無論のことであつてさなきだに金解禁に反對である政友會、それを母體とする田中內閣が、金解禁に冷淡であつたのは、寧ろ當然でなければならない。但し田中內閣とても終始態度が變らなかつたわけでない。わけてもその晚年頃、在外正貨は涸渇しかけるし、四分利英貨公債の始末をつければならぬ時期は近づくし、外資輸入の見込みは立たないし、このまゝ推移すれば對外爲替暴落のおそれがあると、取沙汰された際には、政府殊に財政當局の意は、確に金解禁の方に向つて動いたと信ずべき理由がある。

併しながら當時の經濟界は、金解禁を恐れること猛獸の如く、田中內閣の財政當局にその意思があると推測しただけで、有價證券價格の暴落となり、人心の動搖となつた。これらは一大事だと蹶起したのが、所謂財界三巨頭(團、鄕の兩男爵と井上氏)。當時の大藏大臣三土氏と膝詰談判して、到頭『政府は金解禁を實行する意思がない』と聲明させた。

三巨頭の一人鄕男はこれより少し前に『金解禁を可とする』意味のパンフレットを、世間に振りまいた人であり、井上氏はそれから間もなく金解禁を旗印とする內閣に、しかも大藏大臣として列した人である。三土氏の態度もさることながら、鄕井上兩氏の出處も不可思議でないとは申されまい。對外爲替をめぐる悲喜劇の一つにかぞへる値打ちは、十分にある。

◇

現大藏大臣井上準之助氏に對しては、毀譽紛々だ。どこまでが正當でどこが不當か、斷定の限りでない。たゞ有りのまゝの事實をいへば、金解禁を旗印とする濱口內閣の大藏大臣井上氏は、入閣直前に三土前藏相を强要して、金解禁不實行を聲明させた井上氏と、同じ人であり、入閣約一月前に金解禁反對の講演をやつた井上氏と同じ人である。經濟界は生きものであり、政策は時に應じて變るところに妙諦があるといふことは、假りに不磨の眞理だとしても、あの時この時とで別段經濟界に變化はなかつた。金解禁に對する井上氏の態度が變つたのは、外界事情の變化に因るといはんよりも、主觀的打算の結果に出たものだと、推測する者が萬一あつても辯解なかなか容易でなからう。

金解禁斷行を政府が責任をもつて聲明すれば、對外爲替が昂騰するのは當然の事。はたまた爲替銀行をして割合よく(賣手にとつて)輸出手形を買入れさせ、それを政府が買取れば、在外正貨が增加するのも、これまた當然の事。井上藏相の手柄でもなければ政府の功績でもない。それを手柄らしく吹聽し、濱口首相をしてさも金解禁準備(その重な一二)が成つたらしく、思ひ込ませたものがあつたとしたら、罪の深い仕業であるが、こんな見え透いた手品に乘せられた濱口首相も、ちと甘過ぎるといふ譏りは免かれまい。

政府が買取つた在外資金には、本來爲替銀行

の手にあつて、輸入爲替資金にあてらるべきものだ。それを政府がどこまでも抱へ込んで放さなければ、爲替銀行は窮地におちいるだらうし、爲替銀行を窮地におとすまいとすれば、政府が買取つた在外資金（卽ち政府が蓄積した在外正貨）を、自由に拂下げる外はない。つまり無理に蓄積した在外正貨は、遂からず激減しべき運命をもつてゐたのだ。果然今年一月十一日の金解禁實行期が、まだ到來しない前から在外正貨は減少また減少し、正貨が倫に現送された頃には、至極心細い狀態になつてしまつた。當時『日本銀行はなぜ在内正貨を現送させるかはりに、在外正貨を拂下げないだらう乎』と不審がる者がある一方日本銀行は『在外正貨を拂下げるよりも、在内正貨を現送させる方が手續が面倒だ。それだけ正貨減少の速度を遲くする功能がある』とソラゾラしい辯明をした。何ぞ知らん在外正貨は激減して、拂下げたくても拂下げるだけの餘地が無かつたのである。

金解禁が實行され、金本位が完全に回復された以上、對外爲替がスペシイポイント以下に低落することは、本來あり得ない道理。もしあつたら不道理でありドコかに無理がある證據でなければならぬ。ところが現内閣の大藏大臣によつて統制された對外爲替は、金解禁實行後においてスペシイポイント以下に低落した。そのため在内正貨はドシドシ流出して、短時日の間に二億圓臺を突破した。正貨政策爲替政策に無理があつたためである。

當時内地銀行はいはゆるモラールサツポート申合の手前、暫時外國銀行の正貨現送を傍觀してゐたが、到頭シビレをきらしてしまひ、始めは外國から日本向爲替を賣ることによつて、事實上の正貨現送をやり、後には公然正貨を兌換して現送を斷行した。金解禁をしても在内正貨の現送は、多くて二億圓、おそらくそれ以下で濟むだらうといつた大官は、面目玉を潰したかたちだ。對外爲替をめぐる悲喜劇中の悲喜劇でなければならぬ。

この種の悲喜劇が、もし何等の弊害も伴はず、また國に對しても、少しの損をかけないならば、或は一場の御愛嬌と見られもしよう。併しながら在外正貨の無理な蓄積では、國に莫大な損をかけ、正貨政策爲替政策の失當では、國以外にも迷惑をしたものがある。對外爲替をめぐる悲喜劇もかうなつては、少々念が入り過ぎる。

◇

今年夏の眞最中、ロンドン海軍條約問題で樞密院の老人連が、政府いじめに大汗を流した當時のことだ。世間には現内閣は必ず行詰るもの、政變は屹度來るものと、極め込んだ者が少くなかつた。政變があつて現内閣が倒れたら、政權は政友會に行く外に行きどころがあるまい。さうなつたら政友會内閣では、不景氣轉回の一策として、金輸出再禁止をやるに相違ない。對外爲替の激落＝圓貨價値の低減は免かれないだらうと、先きの先きまで氣を回はしたのが頭のよい金持連中。足許の明るい中に『資本の逃避』をやつておくが賢明なりと、大に圓賣ドル買をやつたものだ。たださすがの金持連も我利々々亡者といふ譏りを受けるのは有難くないと見え、我爲替銀行を經由しないで專ら外國銀行を利用した。我爲替銀行を經由すれば、『資本逃避』をやつた個人もしくは法人名が、筒拔けに政府や日本銀行に知れるだらうが、外國銀行を利用すればそんな心配もない、從つて我利々々亡者

ふ譏りを受ける氣遣ひもないと考へたからである。天晴れ妙案のつもりであつたらうが、その實頭隱して尻隱さず。『資本逃避』を企てた連中の名前は、わかる所にはチヤンとわかつてゐる。

但し『資本逃避』を企てた連中の思惑は、美事に外れた。弱さうに見えた政府の腰は案外強く、鼻息が暴かつた樞密院の老人達は、最後のドタンバで俄に折れてしまつた。政界を掩つた暗雲は吹きはらされて、金輸出再禁止が近く實現される可能性もなくなつた。金持連は赤くなつたり青くなつたり、政友會のぶざまを痛罵して、纔かに鬱憤を洩したものもあるさうだ。悲喜劇としては傑作であらう。

◇

金輸出再禁止論を公然口にする實業家は今でこそ多くないが。政界の風雲急と見えた當時においても、さうであつたかどうか。こゝにはまきた腹の中でさうあれかしと望む者が、實際少いかどうか。疑問でないこともない。金輸出再禁止はその主張者（中の或もの）が言明する通り、産業資本家にとつて福音らしく受取れる。それだけ産業資本家の中には、表面曖昧内々贊成のものもあるやうだ。金融資本家の多くが反對なのは無理からぬこと。たゞ無産階級中にこれに贊成する者があるのは、金輸再禁止と無産階級の利害について、十分な理解があるのかどうか。はた金融資本家に對する鬱憤晴しに、金輸再禁止を歡迎するだけなのか。とにかく洗練の餘地があるやうだ。

同じく金輸出再禁論を振かざす人の中にも、立論の根據や目ざす所は種々雑多、イザとなつたら仲間割れができるかも知れない。殊に我國際貸借は萬年逆調。正貨減滅は必至の運命だと前提して、金輸出再禁止を主張するものは、新平價（平價切下げ）による金解禁の前提として、金輸出再禁止を主張するものと、兩立できない筈。それが提携してゐるとしたら不思議であらう。一人でこの兩面を具備するものがあつたら、一層不思議であらう。悲喜劇の材料は、この邊に培はれてゐる。

對外爲替は財政經濟の全局にわたつて、關係をもたない部分は無い。それだけ對外爲替をめぐる悲喜劇は數かぎりなくある。それを一々書きたてたら果てしがない。ここでは大きな所目ぼしい所を少しばかり拾ひあげただけである。今は時めく某大官が現前閣出現の直前に『平價切下げあるのみ』と、陰辨慶で力みかへつたことや、財政關係の官人中に金輸出再禁止論を抱く人があることなぞ、對外爲替をめぐる悲喜劇は、スツパ拔けばいくらもあるが、それも罪な仕業と一さい預かることにした。

『生活に喘ぐ』體驗記

「江東貧民窟富川町！」

高橋辰二

私は九月はじめに十圓持つて東京へ出て來たが、今では一錢も持つてゐない。

仕事に出られない日がつゞいて富川町に居ても、食ひ込むばかりだつた。

母は死にかゝつてゐた。

その手紙が來た日に、私の手には一錢もなかつた。冬が來るのに宿屋で私は、――二十日以上もどや錢がたまつて、――困つてゐた。冬の着物もなかつた。身一つに落ぶれて何一つ職業もなかつた。食物も、一度食つたり食はなかつたりで、煙草も路上に落ちてゐるのを拾つて喫つては、何も仕事のない頭の中で苦しんでゐた。

「一人つきりで食へなかつたら……死んだ方がいいぜ――」

或る友人が私にさう云つた。

富川町には、一人の名物男が居る。

彼は瘠せた細い黒ヅボンをはいた勞働者だ。眼の下にタンコブを持つてゐる。彼は夜になると、通行人の着物を取つつかまへて、口論を吹つかけるとか、或は夜更けの路上に立つて、ガミガミと議論を怒鳴り出して、一晩中寢ずに出放題な事を云つて軒々を起して歩く。

警官も相手にしなかつた。

彼は以前は、小學校の教員だつたさうだが、今では落ぶれて、野宿(オカン)の仲間になつた。慘めな姿で毎日、無論宿屋にも泊れなかつた。だが元氣な男で、聲は若者のやうに若若しく大きかつた。いつでも怒鳴り散らして、踊りながら往來に立つて手足を振り廻した。

自動車を止めたり、洋服の男が威張つて歩いて來ると、それを早速、手をひろげて止まらせた。

彼は――富川町の町を守る男だ。人間は何かさう云ふ面倒な仕事を持つて生れて來るのだ。彼が怒鳴り出すと景氣が好かつた。だが彼は口から出まかせに、何も定つた事を云ふのではなく、一寸の演說をやり出すのだ。

彼は金もなく、姿も汚なかつたが、眞面目な顏色で、つむじの曲つた風のやうに、やたらに變な男に食つてかゝる。が女には手をかけない。夜更けに彼が宿屋の前で怒鳴り出すと、夜明けまでつづけて演說をし通すのだつ

た。が、所々の宿屋の者に追立てられて、「夜中、さわぐ奴があるか！」と怒られて、突倒されたり、頭を撲られたりしたが彼はまたも路上に起き上つて、冷やかに夜雨の降る路上で眼も鼻も泥にまみれたまま、翌朝まで怒鳴り散すのだ。

彼は何を議論してゐるのであらうか？

訴へるのであるー　悲惨な人間のどん底の生活を、彼はありつたけの聲で怒鳴るのであるー　よく注意して見給へー　彼は何を云はんと欲するかをー　眼も耳もない人間には發見出來ないのだ。それは明かに、苦痛の火柱であるー　そして何物かに食つてかゝる、狼のやうな勞働者の眞實の姿なんだー

人間の身體は、食物の爲にはどうにでも變化する。――さつま芋ばかり食べてゐると、身體中が瘠せるだけでなく――眼の光も弱くなる――ついには小便も黄色くなる。私は燒芋ばかり食べて二十日間生活したのだ。誰でも、飢えてゐる人々が身體にみになるやうな食物を、幾日も食はずに水道の水を飲んだり、食事をごまかしてゐると次第に、肉體の熱がなくなる。そして手足も冷たい幽靈のやうに見えて來る、ばかりでなく放屁するたびに非常に神經が痛み、尿道が痛み、しまひには身體も動かなくなる。便所へ入ると、チクチク尿道が痛んで、さるまたまでも、まつ黄色に染るのだ。

私は鏡に向つて、何日も自分が姿を眺めなかつた。――肉體的にさう云ふことをするのが嫌だつた。

其處に突立つてゐる、瘠せた肉體に恐怖するのだらう。――やはり電車にも乘らず、金もなく、空腹で着物も薄い、ヒトヘ物一枚で、ただ突立つたり、あてどもなく歩いて來る：：産業豫備軍の淋しい姿を時々、暗い横町のガラス戸に見つづけて來た。

宿に歸ると、どや錢を催促されて、晝も夜も身體の休まる時間はなかつた。

宿屋には、――二十日以上も借りがある。宿錢は二十錢で泊めるが最近、市内で嫌な噂が立つてゐる。勞働者が「五十錢」に値下げされると云ふ。――さうなつたら「宿」の木賃宿も、どや錢五錢で泊めるだらうか？

一たい社會制度つて、何んであらうか、我我の頭にはハッキリ理解出來ない事ばかりだ。金がなくて勞働者が失業すると、身體に必要な何物も手に入らないー

だが、あらゆる街に、大勢のいい着物を着た、いい食物を澤山食つては、何もせずに遊んでゐる人を見る。

一錢もない勞働者が、食ふに困り、人を殺して、生きてゐるのとは大分違ふ。

勞働者が、樂しげに酒を飲んで仲間の頭を撲つたりする宮川町の酒場では、彼等の頭の上から酒屋の主人が水をぶつかけて、路上へ放つて置く。どちらが主人で、どちらがお客だか分らない。ただ金のある連中に、頭を下げる世の中だー

一度、私は本郷の方のある下宿に生活してゐる友人を訪れた時に、彼と共に近所にある錢湯へ行つて、裸體になつたときに驚いた。――一寸、ハカリに上つたのである。すると今まで十五貫より下つた事のない私の身體が――一足飛びに、――十二貫に下つてゐる。全體、何がこう酷く瘠せさせたのだ。

「安い食物ばかり、食つてゐた故だらう」さう思つて可成り私は憂鬱になつた。それから下宿屋へ歸つて、晝食をごちそうになると私の身體がゴロゴロ鳴り出した。空腹に――はじめて人間らしい食物を入れたのだ。私は横

に寢て、恐ろしい——富川町の暗い生活を愴めに考へた。

下宿屋のめしは、舌ざわりも柔かく、味も旨かつた。そして快よく喉を通るのだ。——富川町の食物屋のめしには、八分通り、南京米が混入してあるために、榮養分も少なかつた。それ故に私は瘠せたのだ。が幾萬の勞働者は、それを知らないよ　いや、飢えてゐる私逹にとつては、それで澤山だつた。我々は食物屋の卓に向ふたびに、——飯代の心配が、——心に響くから、うまい、まづいとは云つて居れなかつた。多少でも多くの食物を腹へ送りたい！　飢を慰めたいだけだ！　食物がすべて黄金のやうに眺えるし、食物から立上る煙が、赤んぼの頰ほどに、可愛かつたらう。

病人のやうに瘠せた身體で、或る夜私は、五錢にぎつて富川町の暗い横町まで「今川燒」買ひに出かけた。

其處には小さな腰かけが出てゐた。私は其處へ坐つた。そして今川燒を——五錢注文して燒けるのを待つてゐた。が空は今にも雨が降りさうになつて來た。

暗い横町から、誰か出て來た。私と同じに今川燒を三錢買つた。

その婆さんが、その腰かけに腰を下ろして私に何か小聲で話しかけた。

「兄さん……一つきりですみませんネエ、お上んなさいよ！」と。

婆さんはさう云つて、私に一つ今川燒を差出した。

この婆さんは何んだらう？

「有難う」と手を出して、その婆さんが差出した今川燒を、私は買つて食つた。

しかし、その婆さんが、また何か話しかけた……がその聲は低くて聞えなかつた。私は自分の周圍を見た。

そこには勞働者が五六人と、今川燒の主人とが私を眺めて、ニヤニヤ氣味の悪い顏で薄笑ひをしたのだ。私はこれで分つた——

婆さんも多少赤くなつて私を見つめた。その婆さんは「富」を歩いてゐる、淫賣婦の一人だつたが、何んと！　勞働者に好意を持つた淫賣婦だつたらう！

それから四五日たつた。

或る日私は歩いて、玉の井の西方にある大畑と云ふ工場町まで、義兄を訪ねて——金借りに行つた、

彼はヤスリ職工だつた。

家は細長くて低かつた。土間に立つて、片方の腕を失つた——去年工場に雇はれてゐた時だ——義兄が、人を睨むやうな嫌な顏付をして頭を下げて鐵片にヤスリをかけてゐた。彼は休まずに一日働いても、一圓しか問屋から貰へないと云ひながら、こぼした。屋根の破れた長屋町だが、家賃を一年間——休まずに支拂へば十二月一月分だけは、家賃をまけてくれるのだと云つて喜こんでゐた。私が來たのでは、餘計忙しげに手を休めずに働いた。

姉は風を引いて寢てゐた。

長屋町に住んでゐる人間は多少は、誰でも背が曲つて來るのである。私はそれでも夕暮までに義兄から、五十錢借りて歸つて來た。

その夜から、私は富川町を出て橋の上で蓙ムシロをかぶつて、土左衛門のやうに寢た……
……

あゝ——富川町……

飯代の心配と——生命の恐怖とが日夜重なり合つてゐる。

ブルジョアの社會が、——飢えた人間を造るのだ。一九三〇年は、終る！　空腹！

飢餓！　そして用の無い人間が、富川町に

は腐るほど歩いてゐる！　絶望のどん底から叫ぶ人を見ながら、私は橋の上で、足を縮かめて寝た……

光のない世界で

和田隆二

蟲けら、私はこのけらと言ふひゞきを、粘つて石炭酸の様な臭氣のする舌の上で轉がして見る。それは自分を嘲り揶揄する言葉であり乍ら、捨て鉢に似た快感を私に覺えさせる。あまりにも適確に私自身を表現した似つかわしい呼名であるからだ。

蟲けら――たしかに私は蟲けらに相違ない。光のない世界にうじ／＼と這ひまわり、餌を求めてアップ／＼と喘ぎまわつてゐる私、私はいつか「俺は人間である」と言ふ感情を路傍に捨ててしまつた。だが私はそんな感情に見向かうともしない、落つこちた人間意識を惜しいとも思はない。私はたゞ食を拾ひたいのだ。――熱を持つてひつついてしまつた唇の中で、ギツチリと痛い位歯を喰ひしばつて、じつと白い眼でアスファルトの道を凝視しながら歩く――憑かれた様に腰を曲げ、鈍い眼を見はり、ポケットに両手を突込んでのめる様に前かゞみに歩く。十一月の風は私の夏服には寒く、饑えて垢じみた肌には冷たい。フト私は立上る。無意識にアスファルトの上に燻つてゐる喫殻を拾ひ上げる。パッパッと髭ののびた両頬を凹ませて思ひ切り喫ふ。私は朝から煙草にも飢えてゐるのだ。唇の熱くなるまで喫つた二三服の煙に痲痺した頭を震はせ乍ら、血と歯糞とに塗られた歯はギツカリと吸口の蝋を噛みしめてゐた。だが――私には、この卑しい、醜い自分の姿に氣がついて愕然とする餘裕がない。誰が私をこんなふうにしたか？　曾ては今の私の様にふるまつてゐた浮浪人を侮蔑と憐愍の眼を以て傍觀した私を――。

醉はれた様な氣持で私は一日をほつつき歩ろく。ピカ／＼と光つた圓タクの中の紳士、旨さうに煙を燻らせ乍らオーバの襟をひらつかせてゐる月給取、手を上げてゐる交通巡査、盛装して赤い絹物を蹴り出してゐる女、三輪車のペダルを踏んでゐる小僧、……彼等は生活を持つてゐる。

だから生き生きとしてゐる。軌道に並んで鶴嘴を振り上げてゐる工夫、把手を握つてゐる運轉手、彼等も生活を持つてゐる。私も亦曾ては生活を持つてゐた。商業學校の卒業生は、上級學校のそれよりよく賣れた。月給が安くて勤勉に働くからだ。そして私は算盤とタイプと簿記の技術によつて××モータース會社に買はれたのだ。が世界的不景氣は決して中小資本家を沒落させ、勞働者を街頭にほり出すだけでなかつた。米國の大金持、モルガン商會の庇護のもとにある私の會社も亦他の各大工場の整理に倣つて、狂暴な經濟恐慌の嵐の前に四百名の職工と三十名の社員を饑餓の大海におつぽり出したのだ。

その日から私は失業者だつた。職工たちは彼等の武器を取つて立上つた。ストライキだ。だが私たちには武器が無かつた。私は蒼ざめて永い奴隷生活を振り返つた。しひたげられ

た生活、權利なく自由なく顎で使はれた生活、私はだがその生活に依らなければ食へない種類の人間だつた。嫌惡すべき寄生蟲――食ふための忍從、破廉恥な屈伏、だが今はそれすらも失つてしまつた。私は蒼白いインテリ失業者だつた。

疲れ切つて、空家の樣にガランとした家に歸る。妻は居ない。ベタ〳〵と白粉を塗つて稼ぎに行つたのだ。妻は女給だ。そして私は、もう妻を捉へておく力もない。

「早く縫ひ上げろ、質屋へ持つてくんだ。」

この言葉に、涙をためた眼で怨めし相に私を見詰めてゐた妻、そして唯一人の彼女の姉から送つて貰つた銘仙の反物を膝に抱いたまゝ、すゝり泣いた妻――彼女も變つてしまつた。私が腹が減つて寢つかれない夜更、しばしば酒に醉つて歸つて來るのだ。

「畜生！　何だつて酒なんぞくらつて來やがるンだ！」

私は或夜言つた。

「だつてさ、お客のものを食つたら、それだけとくぢやあないか。」

私には怒鳴り返す元氣がなかつた。

――私は昔から道具が好きであつた。蓄音機、寫眞機、何着もの洋服、掛圖、植木……月々の月給は殆ど月賦の支拂やこれらのものに消えた。私は月給取の通癖の樣に現金より持物の貯藏慾を持つてゐたのだ。金を持つてゐても持つてゐなくても他人には判らない。道具を持つてゐることはその人を裕福に見せる。――私はさう考へてゐたのだ。今になつて私は後悔する、何故貯金をしなかつたか。道具はすつかり十分の一か二の途方もない値段で質屋にはいり、流れてしまつた。若し金で貯めてあつたら……私はそれを資本にして小さな商賣でも始めてゐたゞらうに。

私はガランとした家を眺める度にそれを思ひ出す。そして新らしく會社の惡辣さに腹を立てるのだ。――私たちの會社には滿期年限があつた。この滿期まで勤勉に働くと退職する時、莫大な退職手當がはいるのだ。それは優に私たちの餘生を不自由なく保證する。私はその退職手當を當てにしてゐた。愚かな私は滿期にならない中に何かの口實をつけて必ず解雇してゐる會社の手管に氣がつかなかつたのだ。――月給取には意氣地がない、勞働者の樣な團結心も鬪爭心もない。そしてこれは餘りに月給取りにふさわしい待遇なのだ。

夜が更けて妻が歸るまで私は眠れない眼をつぶつていろ〳〵な事を考へてゐた。……不景氣、破産、産業合理化、馘首、ストライキ、小作爭議、巡査、失業者、首つり、一家心中、資本家、女、西洋料理、酒、自動車、泥棒、監獄、妻、米、煙草、算盤、金、地震、金、火事、紙幣、海、……しまひには眞闇な網膜が燃える樣にヒタついた。起き上る。お櫃は空つぽだ。ガブ〳〵と水を飲む。水は冷たく頭の底にまですき通る樣に思へた。ベタリと坐つてフト考へる。――子供があつたら……と。私は二三日前、或る新聞社の前で讀んだ掲示新聞の記事を思ひ出してゐたのだ。

それはこうだ。――木賃宿に二人の親子が泊つてゐた。彼等も生活に喘いでゐた。親爺は息を曲藝團に賣つた。息は親爺の言ひつけ通り一週間程して逃げて來た。

「よし、よし、よく歸つて來た。」

數日して息はまた別の處へ賣られた。が彼は苦心の末矢張歸つて來た。

「遲かつたな、おら心配してた――」

賣つた。歸つた。しかし終ひに息は歸りそこれた。彼はかたわにされ、親爺は引つ張られた。……

妻は蒼白い顔をして歸つた、私は此頃になつて、妻が醉つ張らつて歸るのを望んでゐた。酒を飮んだ愉快さ――それを私は知つてゐたからだ。せめて妻だけでも愉快にゐた方がいい。私は妻に棄てられたら餓死しなければならない。

「今日はいくら？」

「五十錢きり、たつた……」

妻は崩れる樣に坐ると吐息を吐いた。

「閑なの、二三組あつてもチツプなんて置く奴が無くなつた。」

私は世の中がいくら不景氣だからと言つても金のある奴にはある事を知つてゐる。カフエになど來るのはそのある奴らだ。しかし、こゝにも矢張り影響が來たのだ。

「煙草――今日は三本切り。」

彼女は袂からグニヤ〳〵とまがつた巻煙草を摘み出した。客のを持つて來るのだ。私はそれを待ちくたびれてゐた。

「近頃は、何か食つてやらうと思つても、たゞではおごる客がないのよ。」

「たゞではね……」

私は餓鬼の樣に煙草を喫ひ乍ら小聲で繰返した。二人ともボツリと默つてしまつた。若し、若しこの調子で女給も駄目になつて行つたら……私は思はずゾツーとした。考へたくない事を考へたのだ。だがそれが妙に私の心にまつわりついて來た。――妻が体を賣る。そして私は妻の商賣が濟むまで押入れにかくれてゐる。男が拂ふ金の音に耳を傍て乍ら、私は空腹でグーグー鳴る腹の音で男に感附かれはしないかと心配しながら息を殺してゐる。男が歸ると押入れから出てその金で米を買ひに出る。畜生ッ、何と言ふことだ！

「あーア、いやになつちまふ。」

私は、この妻の溜息が私を責めてゐる樣に思へて首を縮めてゐる。痩せこけた妻の頰、賃貸屋で借りて着てゐる派手な銘紗の着物。私は見てゐると堪らなくなつて來るのだ。

「いつまでこんなことをしてゐなきやならないのか知ら……」

「堪忍して吳れ――」

私は意氣地なく低い聲を出した。

「今に俺も何か見つけるよ、これでも商業學校を出てるンだから……」

學問が今となつて禍してゐる、生れ乍ら勞働者として頑強に育つてゐたら……それをつく〴〵と感じてゐながら、私はやつぱりさう言はずには居られなかつた。

妻がまた泣き出してゐた。私は小さく消えた喫殼を汚れた指の間に挾んだまゝ、じつと妻のふるへてゐる肩を見つめてゐた。どうしていゝかわからない。考へもしない。薄暗い部屋でたゞぼんやりと石ころの樣に坐りつゞけるほかがなかつた。

一小賣商人の生活苦體驗

正 木 仁

近時失業問題が由々しい社會問題として論議された、續いて困窮せる農村問題が國家の重大

事として研究對策を講ぜられつゝあるに、獨り都市に於ける各種小商店小賣業者の生活苦の叫びは、どうして閑却されつゝあるか。これ世人乃至識者が、大勢に附隨せる一些事として顧みず等閑視して居るのであらうと思ふが私は數に質に社會性の中樞を占める小商店小商人の、刻下の生存上の切實な問題として、この悲慘を自己の體驗に記し、社會人の血涙に訴へたいのである。即ち私達の多くは、儲けることのみを主眼とする資本主義經營と違つて、小作人、勞働者と等しく、無產者として、食ふため生くるため身上を生命とする小商人であるがため、生活の喘ぎは迂遠でなく、殊更甚大悲慘に身に迫つてゐるのである。

尤も斯業に就て、比較的日の淺い私は、一部業者の如く、好況時代にあぶく錢を儲けた經驗も無く、問屋筋を借倒した體驗も無いから從つて、廣く小賣業者として正道を踏む者の、現今苦境の事實を考察する卒直な材料なりと自負するものである。

私は大正十二年、餘り景氣の芳しからぬ時代、小都市、中產階級以下（失禮な言ひ分だが）場末の小規販賣を目安として、經費倒れの警戒から、小資本で末流の日用雜貨商を開店した。

然し當時好景氣時代後の餘波をうけた世上の沈滯氣分は、この平凡な經營方針に適中して、私は當時母妻子供二人の生計を支持しつつ約二年餘を順調に過し得たのだつた。

處が私の最初の經營方針を脅やかしたのは同業者の簇出だつた。

由來すべての餘力のない小賣業者がさうであるが、殊に私達同業者間には各自組合の名目があつても、團結的相互組織がなく、未だに蹂躙されて居ながら、確固たる共同戰線に立つだけの資力が乏しく、値段の協定等もなく、自由競爭が却つて共喰ひの狀態を示し、他から壓倒の機會に乘ぜられて居るのである。

其處で私は自衞上、雜多の商品の中から、品質と値段の周知された品種を選んで、値引政策をやつて、客を吸引したのだつたが、この商策は強ひて私の德義心も傷けず、共倒れの厄から免れたのだつた。

次の脅威は公設、私設市場の創設だつた。これは一般の實益を圖るための企畫で、私達埒外の小商店の前途が危まれたが、左程の影響も無く、販賣にのみ着眼し、仕入れに何等顧慮を加へぬ不合理な經營法は効果的でなく、不正商人の横行と共に、一時賑つた人々の購買心理も次第に沈み、第一次の市場經營者の失敗に歸したのだつた。

だが此頃から私達小賣業者が、一大難關に遭遇すべき運命にあつたのだ。曰く大資本主義的經營による百貨店の壓迫的進出である。

斯くしてデパート式販賣の威力は、廣く他の幾多の小商店にも、私達同業者にも致命的打擊を慘酷に投げ與へ、資力を有せぬ私達同業者の過半數は、其渦中に犧牲になつた感する。ことを知らぬ大資本の運用による實利、大量を取扱ふことを目標とする廉賣、其機關には多數の個人的生命が養れて居るとしても、また殺伐された個人的生命も其比でない。そして人々は眞實の品と値の吟味を忘れ、大にして高く新奇なるアパートの名に憧れ、虛榮に陶醉しつつあつたのが、當時の人心傾向だつたのである。

葬られゆく小賣商店、沒落しゆく商店街、この時に當つて果然問屋筋は、悲運にある私達小商店に向つて、現金取引開始を宣言し、貸付商品の回收を嚴にして、自ら遊動資本の活用を失ひ、手足である出店にも等しい小賣業者を苦しめ、兩者の生命力を殺ぐに至つた

のごあゐ。閉店、廢休業、差押へは、恰も地主對小作人の立毛差押へのやうに日々繁華街を淋しくし、一方資本を有する商店は猛威を振つて全盛を旺歌した。

突如金融の路を塞がれたと同様の私の店は、商品の融通に詰つて、店舗を擔保として高い金利を流用せねば立ち行けぬ場合となつた。私は後面の難を知りつつ、當面に直した切拔け策として、この路を選ぶことを餘儀なくされ、漸く營業上の命脈を保ち閉店を免れたものの、この遣繰算段は勢ひ商品價格に不良の影響を及ぼさねばならぬ破目に陥り、弱が上に不振を敢てしたのだつた。

一般市井の小商店の商品價格に對する非難は、この頃から發せられ、相手の問屋側も近年まで日々倒産する者の數を加へ、原産地の不況を惹起した理由は、實に此處に存する。

斯くて百方苦面の結果、店は續けたが、私達微力の小商店では、到底都市一流の大商店、百貨店と對抗して、いつまでも爭覇し、支持宣傳を行つて行く術が、流通機關もなく資金も有せぬだけに、絶對不可能のことだつた。

元來私は商是として營業の方針を儲くるより、食ふことと生きることにレベルを置き、健實な奉仕的信用を德として居るが、一朝生活必須の用を欠くの不振を見ては、自ら生き家族をどうして生活させるかといふ、眼前差迫つた問題に強く支配され心を動かさずには居られなかつた。同じことでも農民とかサラリーマンとか勞働者であるなれば、或意味で足りることが多いが、明るく華かなことを生命とする商人が不況となる程積極的に金と力を要するわけなのだ。

經濟に詰り死活路に立つた私は、生産地から直賣することを思ひ立ち、中間の口錢と勞力だけ安價に供給するため、資本家擁護的の聯盟や慣習と鬪ひ、品を生産地から手に入れ、一方顧客心理と購買力、季節と期間、消費能力等需給關係な考慮し、引續き廉賣デーを開始し急場を凌いだのだつた。

處がそれも束の間昭和三年末頃から産業合理化が提唱され、智に疎かつた他の大小商店が悉く、世界的不況に刺激せられ、この商策を專ら行ひ私の立場を無くしたのだつた。そして本年に入るや緊縮政策と、一般購買者の自覺が實質必需品本位に傾き、全商店未曾有の受難時代を現出し、多くの業者を倒して、益々深刻となつた不景氣は、操短、縮少、失業、金解禁後の物價の低落といふ風に、飽くまでピラミツト式不況を招來した。

これでは資力の乏しい者、無産者ほど苦しまねばならぬことになり、この部類階級に屬するすべての小商店小賣業者が全然浮ぶ瀬が無くなつた。

そこで私は更に行詰つた經營を一新して整理處分品を仕入れ、引續き廉賣を斷行し、經濟眼の發達した顧客の心をそそり、店舗をマーケツト風に更へ多少の活氣を添へたが、これも漸次普及され市場が再び擡頭するに從ひ客足が薄れ、過渡期が持續性となり、期待の景氣好轉を見ぬうちに、大なるは保ち小なるは亡び、私達の行路が暗黒となつてしまつた。

全然最後の武器を稱はれた私は、不況に從ひ市井には處分品の續出こそすれ、その食傷氣分のうちに流行に先んぜられ、或は舶來品として一蹴せられ、唯一の好景氣に逢はず私の盡すべき策、施すべき商略も盡きたのである。

私達一家は賣喰ひさへ出來ぬ境涯に突き落された。本年七月抵當の店舗に對し債權者から差押へを執行された際、一人の妹に初めて

これを知つて驚愕の餘り卒倒し、突然世を去つた。私はこれを醫師の診斷通り定命である腦溢血とあきらめられやうか、餘りに悲しい偶然である。それ以前第三子を難産した妻にも充分の攝養もさせ得ず、その妻は虚弱な子を抱へ、今も心臓病に惱みつゝ、編物の内職に痩せて居るではないか。

私は奪はれた店舗の殘少の物品を纏めて、極經費の少い土地に移し、行商のささやかな路を辿つて糊口を凌いで居る。

私は敢て淺間しい日常家計の喘ぎを記したくない。私は働くことを生活とし信條として居るため、働けぬことと働いても食へぬ事象の中に、其非を求めるものだ。

私はいま生くる路に苦しみ、生きて喘いで居る。そして私一家の悲慘な結末に對し、責を回避し良心を僞瞞せうとする者でないが、多數の類似した世の出來事を見、商道の踰越悉くこの厄を蒙りつつあるの事態に對して、辛苦の洗禮の正しかれと祈るものである。

馴れぬ都市の小賣商人として、被壓迫階級にある。無産者として、二重三重の迫害をうくる私は衣食住の路に就ても、未だ體面を考へるだけ乞食以上に苦しみ、純然たる失業者より更に苦をなめて居る、經營の困難即ち生活苦であつて、食へぬことが非の存在である。餘りに下層民に多き悲しき世相の巨細に對して單に衣食住生活の苦を記すことを避けたのは、この上生恥を曝したくなく世に既に周知のことで生くる路の獲得により解決する事柄だからである。(了)

飢餓線を行く

中山宏

職を失ふてから一年、私はいまだに「失業者」である。

田舍新聞の、記者とは名ばかり、集金から廣告の注文取りまでして、僅かな生活費を得てゐた、その新聞社も去年の暮に潰れてしまつてからは、私は妻の僅かな賃仕事によつて、漸く餓死から免れつゝ、職を求めるためあらゆる努力をした。しかし、減らすかといつても雇ふところのない大衆失業時代である。三月餘りの日を、東洋一の商業都市といはれる○市のどん底で、野良犬のように餓えながら職を求めたがそれも徒勞であつた。

八月の灼けつくやうなある日、私は妻からの送金によつて、半病人のやうな身體を漸く故郷の町へ運び歸つた。だが、故郷で待つてゐるものも矢張り餓えてあつた。家主の冷たい眼が光つてゐた。米屋の催促が棘のやうに私達の胸を刺した。人の足音がする度に、私達は息をひそめて、胸を不安に轟かした。そうした精神的な苦痛と共に、飢餓は私達の肉體を極度に衰へさして行つた。殊に姙娠中の妻にそれが甚だしく、ヒステリーが昂じるばかりてあつた。ヒステリーの發作の烈しい日は、一日お粥さへすゝれないのである。——妻の針仕事が唯一の私達の糧を求める方法であつたから……。

妻が、町の呉服屋から貰ふ仕立物の賃銀は一日四十錢内外。私の内職が一日十錢から十

五錢。──それは「釦付」といつて、一枚の紙へ貝釦を百五十個程縫つけて五厘、熟練した者でも一日四十枚は難かしい。──それが私達の全收入であつた。

──一人前の男が一日働いて十錢か十五錢か。だが、お粥位すゝれるか。あは……。

無心に手を働かせながら、私は不覺にも涙が溢れてくる。そんな時、私は強ひて空虚な笑ひを笑つても見るのである。

私達の二本の針に托した生活の上を、秋はいよ〳〵深まつて行つた。

私は友人から、ある印刷所に解版小僧を募集してゐることを聞いた。新聞社に居た關係でその印刷所の主人を知つてゐたし、それに印刷の方も少しやれるので、私はある夜、其印刷所を訪れて賴んでみた。しかし、そこの主人は、給料はいくらでもよいといつた所で、大の男を僅か十五圓位では雇へないといふ理由で、どうしても承知してくれなかつた。私が、給料はいくらでもよいから使つてくれと、あまりうるさく賴むものだから、主人はたうとう腹を立てて言つた。

──君のやうな大人よりは、小僧の方が役立つんだ!

あゝ、女よりも、小供よりも無能な男!

私は目の前が眞暗になつたやうに思つた。

──だが、それが資本主義經濟組織の原則なんだ。最も低廉な賃銀の下に、最も搾取出來得るものを、彼等は要求してゐる!

今の社會組織に對する怒りが、私の心を熱くした。しかし、すつかり生活に疲れ切つた私には最早や勞働者の強靭な神經がない。人生と眞向から格鬪する精力が失はれてゐた。不合理な社會組織のために、現在飢餓に瀕しながら、その不合理と鬪ふ自らの階級とゝもに進軍するのも、今の私には懶かつた。

いろ〳〵な考へに耽りながら、うすら冷たい夜の街をあてもなく歩きつゞけて、家へ歸つたのは、夜もかなり更けてゐた。家の前まで來た時、私は異樣な唸り聲にハツとした。私は不吉な豫感に脅えながら、慌てゝ飛込んだ。そこには、濡つぺらな蒲團にくるまつて妻が苦悶してゐた。

──どうしたんだ!

妻は咽喉から軋るやうな音を出しながら、無言で苦しんでゐる。私はその枕許に散らばつてゐる藥の空袋を見て、妻が自殺を企てたことを直覺した。すぐ隣家の人を賴んで醫者を呼んで來てもらつた。醫者の手當に依つて妻の生命は取り止めたが、私は何故か、殘酷なことをしたやうに思つた。

妻の蒼い顏を見守りながら、私は夜明けまで眠らなかつた。涙が止度もなく流れた。

不幸な妻!

結婚すると間もなく失業した私を、養つてくれたのは彼女であつた。妻がなかつたなら私は或は餓死してゐるかも知れない。私は妻に感謝すると同時に己の無能が口惜しかつた。そして此の後生きてゐたところで、幸福もないであらう私達の生活を考へた。

──いつそ、死なした方がよかつたかも知れない。そして自分も……。

妻が寢ついてしまつたので、私達は忽ち食を得る途を斷たれてしまつた。家の中には何一つとして、金になるものは殘つてゐなかつた。あゝ、餓死! たうとう、それが目の前までやつて來た。私は病人を抱えて絶望してしまつた。しかし、まだ私は餓死したくはなかつた。

──妻が病氣で死にかゝつてゐるのです。

どうか助けると思つて……。

　私は、その言葉を繰返しながら、友人や親戚の家を物乞ひのやうに訪れて廻つた。私にはもう、恥も外聞も感じる力がなかつた。それよりも何十倍かの壓力で飢えが迫つてゐたから……。借りられるだけ私は借りた。しかし、返して貰ふ的のない私に貸してくれる額は僅ずであつた。やがて、借りる所もなくなつてしまつて、もう、どうすることも出來ない飢えが迫つて來た。まだすつかり快くならない妻は、臨月に近い體で、働きだした。でも、妻は元氣に笑ふのであつた。

　——私は矢張り死なゝかつた方がよかつた。どんなことをしてゞも私は生きる！　お腹の子のために……。

　私も妻のために笑つた。

　——そうだよ　僕の第二世のために……。あは……。

　だが、それは恐怖に歪められた笑ひであつた。

　子供が産れる。そして、それまでに職がなかつたら——それは不安よりも恐怖である。そして恐怖は次第に絶望になる。

　——どうとも、勝手にしろ！

　私はさう度胸を据えても見る。もう一枚五厘の鉛付けも馬鹿らしい。私にはもう明日を考へる力がない。神經が次第に麻痺してゆくことをはつきり感じる。家賃の催促も、米屋の針のやうな言葉も、私にはもう何とも感じない。

　——もう十ヶ月も滯つてゐるんだ。此月はどうあつても貰はなけりやならん！

　家主が怒鳴る。

　——まことに濟みませんが、もう少しの間たくが仕事が見つかりますまで……。

　おろ／＼と妻が涙聲で頼んでゐる。

　——いやどうあつても待てん！　もう待てるだけ待つたんだから……拂へなけりや此月かぎり出て貰はう！

　——でも……もう少しの間……もう一月ほど……そのうちに何とかいたしますから……。

　そんな押問答を聞きながら、私は寢ころんで、窓の外を流れる悠々たる白雲の姿を、うつろな瞳で追ふ。「家主はもう一月待つから、それまでに拂へなかつたなら、家を明渡すことを妻と約束して歸つた。しかし、幾月たつた所で拂へないことは判り切つてゐる。そのときは？……。

　——その時はどうにかならア。こんな喰ふや喰はずの生活をしてゐるより、一思ひに餓死する方がましだ！

　どこまで行つても極まりのない考へにそう結論をあたへて私はニヒリスチツクになる。

　妻は、やがて生れ出る新らしい生命に、希望をつないで、いそ／＼と針仕事に餘念がない。その姿を見るとき、私もどうかしなければならないと焦りはする。

　だが、この暴風的な不景氣、洪水のやうな失業者の流れを乘切る力を、すでに私は失つてしまつてゐる。

　失業してから一年になる。

　働いてさへ足らぬ勝ちの私達の生活であつたのに、あゝ、私達は此の一年のあいだ、よくも生きて來られたものだ。その奇蹟のやうな過去を回顧するとき、私は傷心に涙する。

　——それは「生活」といふより、たゞ命を繋ぐ」のみであつた。飢えない程度の生活でなく、死に致らない程度の飢餓線を歩いて來たのである。そして、明日も、私達はその飢餓を越えて行かねばならない。どこまで行けば果てるであらうその一條の線を傳つて行く私

達の生活――それは、一本の綱を命とたのむ輕業師のそれよりも危い曲藝ではある。――無限の脅威をもつて迫る明日。そこには冬が待つてゐる。妻の出産によつて、私達の唯一の收入の途も杜絶えるであらう。

寒さを防ぐ衣類は質屋の倉で心中してしまつた。そして、私達は住む家も追はれればならない。

一物も與へられず、すべてを奪はれてしまつた私達は、果して、生きてこの冬を越せるであらうか。

沒落に瀕する清水燒職工の月末

日吉東山

一

九月、月末勘定日である。元來ならばこの勘定日といふ日は我々勞働者にとつて頗る嬉しい日である。金がはいるから。

しかし今の我々清水燒の職人は、この日嬉しさよりも不安が先きに立つ。勘定の計算があつても、金を支拂つて貰へるかどうか分らぬからだ。

清水燒も他の産業にもれず頗る不景氣だ。が、こゝの不景氣は只の不景氣ではない。産業革命に當面して沒落しつゝある手工業――それが今の清水燒界の慘憺たる姿なのだ。

瀬戸や美濃で最近盛んに近代的な機械力や生産方法による陶磁器類の大量生産が行はれ、それが手工生産の清水燒を壓倒してきたのだ。原料産地であり、且つ資本力ある製造家の居た瀬戸や美濃でこそ機械力應用は可能であつたが、原料産地を遠く離れ、しかも神代ながらの手工的技術を生命としてゐる清水燒は、過去に於て大資本家をも作り得なかつたし、又將來機械力を應用する餘地もない。

かくて清水燒は（少數の『帝展派』を除いて）今や正にこの地上から一掃される絶望的な立場にあるのだ。

歷史の車輪を展さうとする時、其處にどえらひ無茶苦茶が行はれる。親方（製造家）の苦境もさる事ながら、その下積みに生活する我々職人の絶望的な生活の凄さよ！ 五條、日吉町、泉涌寺に散在する三百軒の親方の各々は、毎月々々行はれる夜逃げの第何十番目かの實行者にならぬために、又自分の商品と瀬戸や美濃の機械製品に負けぬ安い商品たらしめるために、我々職人をのみ虐使し追害する。賃銀制度が受負制であるから我々の勞働力支出は只でさへ超強度だ。それにこの數年來の工賃のガタ落ちはどうだ。二年前二錢以上であつた番茶碗の單價が、今や一錢前後に突落された。鐘紡の手當四割減の比ぢやない。更に又、一日のうち、一ケ月のうちに襲つてくる手待期間の頻繁さと增大さよ！ 一ケ月十七八日も仕事のある月はまだよい方だ。この夏の如く五日か七日しかない月が續いて、一體我々はどうして食つて行くのか。だから仕事のある日は死物狂ひだ。諸君は、我々職工が、諸君の手にする茶の茶碗を、足と指先きだけで土から一日五百もひねり出すのだと聞いたら驚くだらう。然りそれは一日十二三時間に亙る長時間の、全く想像に價する激勞

の結果の記錄だ。が、この超人間的記錄は、工賃を次ぎ々々に極度に引上げられる結果、又次ぎ々々に破つて行かねばならぬ。肺病が流行し、脚氣は職業病となつてもあやしむに足らぬ。しかも我々の月收は今や四十圓にも滿たぬ慘めさだ。四十圓！ 成る程これだけで極く最底の生計が營めうるものかも知れぬ。だがこの額は帳簿上の數字で我々の實收入てはない。親方は最近になつて、全部の勘定を支拂つてくれたタメシがないからだ。

勘定日の夕方、我々は親方の座敷へ行く。そこで我々は何を聞かされるか？ 先づ次ぎの仕事の工賃値下の要求だ。イヤだと云へば、そんならあの品物だけ來月から止めまつさ、と來る。ほんとにストライキをやれば、商品のストックを持つて裕福な親方なら喜び、他の親方は家族だけてやつて行く。更に他の親方は安い『助け仕事師』(自宅で仕事をしてゐる職人)へ仕事を出す。失業者が無數に居るからこの方面でも事をかゝぬ。其處で我々は泣き寢入りだ。えゝ、まゝよ。で、工賃が又下る。より強き激勞！ より長き勞働時間！ 我々は自發的にからだの續く限りそこへ猪突する。せざるを得ぬ。

五月の勘定日の事だつた。斯うして我々の一人々々が値下を強制された結果、さて勘定となつた。そこで我々は始めて工賃半拂ひの煮湯を呑まされたのだ。

『問屋から金が來んで。すまんけどこれだけづゝ持つて歸つとくれあす。』

差出された金は參拾圓づゝであつた。我々七人の職人は眞赤になつて抗議したが駄目だつた。眞實に金が無いのだ！ 又泣き寢入りだつた。そしてこの半拂の惡手段が六七八月と續いた。この間我々のすべては夥しい『食ひ拂ひ』をためて、借金と『一升買ひ』の袋小路で生活して來た。九月に入つて今月こそ、と思つたのは、全くのつぴきならぬ生活事態だつたからだ。

此の日我々は朝から不安な氣持で相談した。『今日こそ全部呉れるまで動かない。』斯う云ひ合つて決意した。『さうでなかつたらほんとに夜逃げだ！』

が駄目だつた。朝からの不安が實現した。夕方埃まみれのからだをふいてゐる最中に、神さんが工場へ來て早口に云つてのけた。

『すんまへんけど、十五圓づゝ持つて歸つとくれあす。旦那は用があつて外へ出ましたさかい。』そして金を分配した。

私は先手を打たれたと思ふと無闇に腹が立つて。――『ようし！ 逃げを打つなら歸るまで待つ！ 馬鹿にするねえ！』だが親方の臺所へ坐り込んだのは私とSだけだつた。

二

二時間の後、私は矢張り十五圓を懐にして親方の家を出なければならなかつた。親方は歸つたには歸つたが、燃料屋に取ッ掴まつて詫り々々歸つたに過ぎなかつた。金は、ほんとうに、親方も、ないのだ！

私は我家に近づくに從つて胸が熱くなつてきた。が、泣いたところで何になるのだ。やるせない腹立たしさが全身をふるはした。が、腹を立てたところでやり場がなかつた。

三尺ロジの奥の我家の前に來て、私はハツとした。土間の央に米屋ががんばつてゐるのだ。私は苦笑して家にはいつた。一室切りの家の暗い電燈の下に、赤ン坊を背負つた病後の妻が、一ヶ四毛の瓶口の内職をしてゐた。大きい二人の子供は、夕飯が濟つたかどうか、その横にゴロ寢してゐた。

『お歸りやす。十圓だけでも賴んまつせ。』私の顔を見ると第一番に米屋が口を切つた。

『まだ勘定が濟らんですまんが五日にしてくれ。』

云ひも果てず米屋が追つかぶせた。

『へへ……、チヤンと知つてまつせ。十五圓貰はれたやろ。あんたは殘つてもつと貰はれたかも知れへん。五十圓近くも蓄つとる。たのんまつせ。』――畜生！知つてあがる！

『誰に聞いた。』と云はざるを得なかつた。何と疎な事だ！　それでは持つてる事を白狀するやうなものだ。と女房の眼が語つてゐる。

結局我々は米屋に七圓取られた。それから家主が、炭屋が、醬油屋が、時分を當て込んで押しかけて來た後には、十五圓の金は我々の手に一厘も殘つてゐなかつた。

（さて、あしたから又、どうして米や炭を工面しやう？）

私と妻との間に、悲痛な沈默が續いた。――働いても働いても……何と云ふ事だ！

『お前の瓶口から少しははいるだらう。』

やり切れなくなつて、私は斯う云つてハツとした。重苦しい夫婦間の沈默を破る積りで、其金は既に長男の眼病の爲に前借してあつた物だから。果して妻は血走つた顏を上げた。

『前借したぢやありませんか?!　そんな風に妾を當てにしてゐるから、今日が日十五圓ばかししか取つて來れんのです。』

『ナニ！』

私は思はず取り上げたキセルを投げ出した。自分の云つた事は惡い。憐な、病身の妻を責める事にしかならぬ樣な事を云つた自分が惡い、と私は思ひながらも、妻の角々しい當てつけに、耐へてゐた悲痛な焦燥とやり場のない憤激を爆發させずには居られなかつた。

『もう一度云つて見ろ！　働いても、お、お、親方がくせ上らんのだ！　馬鹿野郎！』

諸君よ、こんな時夫婦喧嘩するのは馬鹿の骨頂だ。だが、だが、これ以外に俺達はどこへ憤激を持つて行けばよいのだ！　一致して親方へ、と諸君は云ふかも知れぬ。さうだ、我々も知つてゐる。我々は大正十二年以來勞働組合を作り、親方と戰つた。そして今（この十月）も戰ひつゝある。が、戰ひに戰つても、個々の工場へ歸れば文句なしに前記の始末だ。親方に實力がなく、產業は沒落の過程にある！　勝つても負けても犧牲としての沒落の前に、何とも術がないではないか?!

兎に角私は妻を二つ三つ食らはすと、泣きたをれた彼女を尻目にかけて家を飛出した。

三

十一時過ぎ、私は××古着店の中に居た。步き廻つて心の落ちつきを得た私は、可愛さうな妻のために、せめて三圓でもよい、明日からの米代を工面しやうとて此處へ來たのだつた。手當り次第の友達、知人に借りのある私は、窮餘の一策、最近同じい故鄉から出て來たこの古着屋の主人を思ひ出したのだ。が私の行らうとしたのは、恥しくも悲慘な窮策であつた。窮迫すると人は犯罪へ誘惑される。私は古着屋で古着を借り、それを質入れして金を得やうと云ふ、陶器職工の成れの果てがよくやる手を眞似やうと云ふのだつた。

並べられた古着の中から、大島の袷と羽織を前にして、國のおやぢが危篤であるが、着て行くものがない。來月中間滿期になる無盡（そんなものゝある筈がない。）を當てに貸してくれ。と云ふ私の口上を聞いた後、この年配の主人は突然斯う云つた。

『あんたは確か陶器でしたね。』

私は變だと思つたが、正直(?!)に、さうだと答へた。すると主人は手をふつて云つた。

『では、掛貸りは御覽下さい。あんたはさうてはないでせうが、どうも此頃の陶器屋さんは……へイ、どうど惡からず。へイ』

私はふら〱と其店を出た。街は寢靜つてゐた。故鄉の山川が思ひ出された。そこで十年近く陶器職人の弟子奉公してゐた時分が追想された。諸君よ！　こんな時、私の眼に涙がにじんでゐたとてよもや諸君は笑ふまい。

評議會闘爭記

―非合法運動の暗示となれる濱松樂器爭議の思ひ出―

野田律太

「評議會」のこと

濱松樂器爭議の思ひ出を語りたいと思ふのであるが、此爭議は、當時の、日本の××的勞働者の中心地帶だつた『日本勞働組合評議會』によつて指導された爭議としていろ〳〵な意義と教訓とを含んでゐると思ふ。殊に直接指導の任に當つた當時評議會の組織部長三田村四郎君が、その前年、上海紡績勞働者大罷業應援に行つて、中國××運動遂行の實踐を通じて、眞に身を以て汲み取り得たる戰術を應用したこと。從つて其所には合法と非合法の問題、一工場の爭議を濱松全市のゼネストに××せしめたこと、及び經濟鬪爭と政治鬪爭との結びつけの問題、又は一地方の問題を×××さんとした戰術等々、貴重な經驗と教訓とが充滿してゐる。尤も之等が充分に成功したのではない。然し此經驗は、左翼運動其後の發展の上に基礎的な訓練となり、ある意味で×××運動の暗示となり、端初となつてゐるとみられるもので、その點に意義深いものがあると思ふ。

そこでまづ此爭議を指導した『評議會』のことを簡單に述べる。

大正十二年、日本の資本主義の爛熟、大震災による日本帝國主義のファッショ化、第一次××黨事件等は、それらのかもし出す必然の理由よりして勞働階級を異常に××的緊張の中に誘き入れた。總同盟の運動が頂天に達した時は大正十二年の前半である。十二年後半に入つて總同盟中の日和見主義的幹部は、この大衆の××的亢揚の前に、退却を始めた。そして山本内閣に依つて投げ出された懐柔政策――普選實施の聲明、勞働代表選出權、其他等々――の方へ結びついた。

この變化が十三年度總同盟大會の『方向轉換宣言』であつた。この『宣言』後一年、日和見的社會民主々義者は黨内左翼を排斥しつづけつひに十四年度大會後において分裂を策し、總同盟から『左翼』を追ひ出した。

この追出された總同盟左翼こそ正しく日本の勞働階級の××的階級鬪爭を指導する『評議會』となつたものである。

追ひ出される前に『左翼』は總同盟内に革新同盟といふものを結集してゐた。そして十四年五月二十四・五兩日に亙つて、神戸キリスト教青年會館に革新同盟は全國大會を開き、日本勞働組合評議會を創立した。創立當時の

中央部は、組織部長三田村四郎、政治部長佐々木節、財政部長青柿善一郎、教育出版部長鍋山貞親、爭議共濟部長長谷川浩松、調査部長谷口善太郎、國際部長中央委員長野田律太であつたが之が三年後の解散直前には次の樣な顔ぶれに變つてゐた。

爭議部長政治部長中村義明、組織部長婦人部長杉浦啓一、教育出版部長調査部長國領五一郎、財政部長共濟部長松尾直義、關西オルガナイザー河田賢治、國際部長中央委員長野田律太。

評議會の勢力は創立當時三十二組合、一萬二千七百名、これが二年目には四十六組合、三年目には五十九組合、三萬五千八十名に達し、解散直前には更に激增して組合數七十、組合員又四萬を突破してゐたのであつた。組織網は九州から北海道に亙つた。

創立第一年の爭議件數一〇九件、參加人員一〇四六四、二年目二〇七件、人員二五二七二。又一九二六年二月一日より一九二七年一月末日まで滿一ヶ年間の犧牲者は、檢束四〇三八名、拘留一五二三名、收監一九六名である、其後鬪爭の激化に伴ひ犧牲者の數は數へ切れなくなつてしまひ今は記録にないが、若し調査が出來たならば優に大量なものになつてゐるだらう。

評議會は之等の日常鬪爭以外に單一無產政黨問題、組合の產業別整理合同、總聯合結成の前提とする各地の組合會議を設置する事等を戰つて成功した。工場代表者會議の展開、國內運動戰線の統一、更に上海罷業應援を契機として太平洋沿岸勞働組合の提携、帝國主義戰爭反對運動、對支非干涉運動、ソビエット聯邦勞働者代表レプセ氏一行の招待等の政治的全階級的鬪爭をも戰つてゐる。

かくして、昭和三年四月十日、三・一五事件において最も多くの『黨員』を出したとの理由によつて『評議會』が支配階級によつて解散させられたことは、世間周知の通りである。

敵を見る

濱松樂器爭議は、大正十五年四月に起つたのだから、評議會の力の最も充實した時であつた。

此年の初めには共同印刷爭議があり、それが解決した直後なので評議會は闘志旺盛を極めてゐたので、普通にいへば東京の三井系大資本家と三ヶ月の戰ひに勝つた餘勢を以て、一地方資本家の如き一擧に屠るべしとなす譯だがそういふ輕擧はしなかつた。濱松の勝敗は中部日本の勞働階級の勢力の興廢に係はるとみて、策戰上評議會はストライキ決行の遷延を企てた位である。（そのことは後にのべる。）

順序としてまづ、濱松の敵を見よう。

濱松市は、東京大阪の中間に位する工業都市で、人口十萬、組織可能勞働者約五千を有する重要なところである。

敵、樂器會社は、明治三十年十月の創立にかゝる我國最大の樂器製造會社であつて、資本金三百四十八萬圓（內拂込三百十二萬圓）年約一割二分の配當をして居つた。

社長、天野千代丸一族はガリ〳〵の國粹主義者で武勇傳物語に出で來る樣な豪傑揃ひであり、專務取締役花輪播三郎は三井物產に永年勤續した人で、今でも囑託として密接な關係を持つて居る。

其他の各重役は、市會議員、商業會議所會頭及び常議員、銀行、鐵道の重役、同業組合長、貴族院議員等々、各方面に渉り一人が

それ〴〵數個の重役を兼ねてゐる。それ故に樂器會社は、濱松地方ブルジョアの共同體であつて、市會も、商業會議所も××にコントロールする偉力を持つて居る、その上に從輪重役の關係で三井王國を後に控へてゐる點等が、彼等をいやが上にも強力なものにしてゐるのだ。

本社と本工場は濱松市中澤町に在つて、東京、大阪に支店を持ち、横濱と釧路とに分工場がある。從業員數は次の如くだ。

本社	社員	三九	職工	一四六
東京支店	同	八〇	同	五四
大阪支店	同	四九	同	三
横濱分工場	同	二七	同	一〇四
釧路分工場	同	六	同	二七

大正十四年末一六〇名を解雇したので、爭議發生當時本社職工數は男工一〇四六、女工二二六、合計一二七二名であつた。

樂器職工組織さる

濱松市に勞働組合が最初に手を着けたのは評議會であつた。元中部地方評議會（名古屋）で活動して居つた島津當平君が名古屋を追はれ、大正十五年早々濱松に移り同市の鈴木織機會社に就職し、直ぐに宣傳して同會社の從業員を中心に『濱松合同勞働組合』を組織した。會社は早速組合を壓迫し、之を破壞せんと企て、それが動機となつて爭議が勃發し、勇敢に鬪爭した結果、組合は大勝利を得た。

從來、ブルジョア新聞を通じてのみ『勞働爭議』なるものを見てゐた濱松地方の勞働者大衆は、目前に鈴木織機爭議の光景を實見して、資本家及び××の正體をハッキリ見極め、同時に團結力の偉大さを痛感した。

濱松合同は、この勝利によつて、鈴木工場從業員百名を完全に締付け、強固な基礎を確立したのみならず、飯田織機、東洋染色、中村氷糖、帝國製帽、遠州織機、等々十四工場に組合員を新らしく獲得し、更に樂器會社に向つても働き始めた。樂器從業員は、恰も晋に答へる響の如く、濱松合同へ加入を申込んだ。當時樂器從業員の合同加入振りを調べて見ると、四月上旬に百五十名、同十三日三百名、十八日八百名、二十三日には早くも一千名を突破して完全にオールとなつてゐる。實に素晴しい大發展と云はざるを得ない。

評議會の煽動、宣傳が、斯様に成功する有様に對して、濱松の各工場主は驚愕し、手の平を返す様に、昨日の鬼が佛になつたごとく、溫情主義的な施設を行つて職工の機嫌を取る様になつた。

樂器會社は、職工の一部を利用して『誠工會』と云ふ御用團體組織を計劃したが、既に合同に加入してゐる職工たちからハネッケられてしまつたのも此頃であつた。

長い間、溫順な羊として、資本家の搾取と彈壓の下にゴマかされて來た勞働者は、漸く自覺した。組合で開かれる研究會、坐談會は毎日毎夜、溢れる様な盛會を極めた。階級意識は刻々と鮮明になり、自己の立場を知るに至り、ストライキの機運は向上した。

評議會本部では、新興の地濱松の形勢を見て早晩一大決戰の必要ありと、特に注意した。然しながら、それにしても組合に加入したばかりの、今日のまゝでは、長期のストライキに耐えない缺點があるとみて、延せるだけ延して、其間に一通りの教育を行ふ方がいゝと云ふ方針で、其點に全力を傾注して居た。外に、當時政黨問題、大會後の整理、メー

デーの準備、其他各地の爭議等もあつて、本部は多忙を極めてゐたことゝ多少この引き延しの理由にはなつてゐる。しかし、もつと重要理由は此地の勝敗は日本中部の勞働階級の向後の全結集に影響甚大とみて、評議會は常に勞働階級の全國的組織とかいふ立前から、一地方一工場の問題をその時既に全××的見地から取扱はうとしてゐたのであり、そのために樂器職工の鬪爭力を今少し涵養しなければ眞に階級的なストライキは敢行しえないと考へたのである。

ストライキ決行

評議會中央部のこの考へ方が間違つてゐるとは決していへないと思ふ。所が大衆の力は頗る創造的であり、評議會幹部の辯證法的認識を一蹴した。この點、階級鬪爭指導者の非常なる洞察力と飛躍的認識力の培養のゆるがせにできない所である。で、樂器職工の動いたあとを檢しよう。

四月下旬に至つて、遂に樂器全從業員は結束し、歎願の形式を以て要求書を會社に提出し、起ち上つた。

要求の內容は、「衞生設備の改善」「最低賃銀の件」「正月休みの期間が十日では長過ぎるから七日にして貰ひたい」「兵事關係で缺勤した時は日給半額支給して欲しい」「解雇手當の制定」「殘業歩增」「一年二回の慰安會を催し相成度候」と云つた樣な、初歩的な經濟的なものばかりである。

會社は、この歎願書受理の形式の上で、「組合代表者が立會ふのはよくない」とか、「職工代表とだけでは困るから署名せよ」とか、或は「『歎願』する場合二十五日午前九時、等と日限を定めるのは不穩當だ」とか、色々ゴタゴタがあつた上、兎に角正式に受けつける事になつた。

天野社長は、益々險惡になる工場內の形勢を見て、全職工を三分し、一組宛、會社樓上の廣間へ集め、說敎をした。かうしたことは何處ででもよくやりたがる手だ。

『諸君から要求せられる迄もなく會社は既に氣がついてゐた。敢て第三者の介在は要しないことだ。我々は最全を盡す。冷靜に考慮して、會社を信頼して吳れ』

そして最後に社長はその後のストライキにおいて、爭議團を有利にしたのつぴきならぬ「失言」をやらかした。『それにも拘らず、諸君が飽くまでも團結して反抗するなれば、會社は××でも××でも意のまゝになるのだから……まあ、よく考へて置いて下さい』

この××でも××でも意のまゝ云々が、後に爭議團にしば〳〵利用され始めると、天野社長すつかり閉口してしまひ、『其樣なことは絕對に言はぬ、常識で考へて貰へば判る』と頻りに辯解した。しかしこの「失言」は單に後になつて利用されたのみではない。その場で職工を直ちに憤慨させることに役立つたのだ。この點ストライキはしば〳〵不用意な資本家によつて激發の機會の與へられる實例を見得よう。指導者はそこを摑むのだ。

其翌日、會社は突然、歌舞伎座といふ劇場で職工慰安會を催した。

これには從業員が吃驚した、あまりに突然な、まるきり敵から棒の慰安會は一體何のためだらう？　尤も要求の中には一年二回の慰安會を開催する樣に書いてはあつたが、それにしてはあまりに現金過ぎる。

『正宗一本と汽車辨一つで機嫌をとり、重役のお說敎で誤魔化されて耐るかい！』

誰からかさういふ聲が傳はつた、この催しも亦そういふ風に我々によつて逆に利用された。會社の腹の中を見透した勞働者は歡待され乍ら憤慨した。そして此日は醉つた爲めに從業員の氣勢は大いに上り、會社は壓倒され重役は舞台の上に立往生し、かれらの期待する何物も生れず、會社は再度の失敗をした。

斯うしてゐるうちに回答の日は來た。回答は『勞働組合はよくない。會社の誠意を信頼して……』といふ體のいゝ拒絶だつた。そこで、今度は要求書が提出された。之は、爭議の場合の定石であつて、是が拒絶されると愈々本調子になるのだ。

二十六日午前九時、交渉委員は事務所へ回答を聞きに入つた。それが十時になり、十時三十分になつても委員が歸らぬので、從業員はゾロゾロ玄關前に押しかけた。此形勢を見た天野社長は『勞働者萬能の目的を達せんとして示威的態度のもとに回答を迫るはけしからん』と、捨言葉を放つて、他の委員と共に奥の方へ姿を隱してしまつた。

此時、豫ねて評議會本部から派遣されて居た松葉君が、一段小高い所へ馳け上り、

『諸君、も早これまでだ、斯くまで會社が不誠意を以て臨むなら、後は力と力だ。引揚げッ！』

と絶叫した。同時に何時、何處で、誰れが準備してゐたのか、惡資本家膺懲の標語を書いた數旗の長旗がサッ！　と林立した。ワーッ！　と歡聲が擧り、鬪の聲が嵐の如く湧き起つた。全員四列縦隊、實に整然、春風に靡る×旗を先頭に勞働歌の聲も勇ましく、行列は蜿々長蛇の陣をなして行進を始めた。

かゝる場合を豫想して大會の場所としてライオン館が用意されてゐたのであつた。

三田村の地位

樂器會社從業員千二百余名は、一絲亂れず意氣軒昂、ライオン館に雪崩れ込み、直に大會を開き、交渉委員の經過報告を聞いて益々憤慨し、お互に激勵し合つて固い決心を誓つた。此時までは僅か一人の松葉君が指導してゐたゞけであるが、四月廿七八日頃には本部の指令によつて大阪から三田村四郎、鍋山貞親、東京から木澤兼治及び名古屋からは寄田春夫以下數名の鬪士が乘り込んだ。

そこで取敢へずライオン館を本部にし、此處に凡そ千名を收容することにして殘餘の團員を合同勞働組合事務所又は支部事務所に收容し、正式に爭議團を組織した。

爭議團總司令には木澤兼治が擧げられ、情報、炊事、訪問、會場、財政、印刷、教育、遊説、警備等の專門部が出來、外に司令部には多數の應援鬪士、組合幹部が配屬され全團員は十三班に分たれ、各班に專任の應援鬪士（オルグ）を着けた。

三田村はこの間にあつて濱松合同執行委員長に就任し、一種特別の××を始めた。

その第一、彼の主唱ですぐに爭議團内に一般的な勞働講座の外に雄辯講座、婦人講座及特別研究講座が作られた。この特別研究講座は團內の優秀分子三十人位を集め、××的ストライキ××、戰略の教育を施しかれらを爭議團內の××とするのが目的であつた。濱松地方の勞働者の地方性は示威的性質に富み、一般的鬪爭心強く往時傳來の三河武士的性格がいちじるしかつた。三田村は頻りにこゝに着目して『こいつは面白いぞ君、』と頻りに私に語つたが、かれはこの地方性を、階級的に揚

棄し、今度のストライキの爭議團内細胞養成とストライキ後の工場組織の根となる××××××の養成とを目的として特別研究講座に力を入れた。(此細胞がいかに活用されるか、いかなる意義を持つかは後に明かにする。)

その第二、かれは濱松合同執行委員長の立場を利用して、極力未組織工場の××とその擴大强化に馬力をかけた。これは樂器爭議を濱松全產業のゼネストへ××させる道を切りひらく努力であり、同時にこの仕事の中でかれはその××としての『細胞』を既にもう作り始めてゐた。この『細胞』のことは小泉保太郎著『左翼勞働組合運動』の中の『原始主義を揚棄せよ』と題する論文中の『濱松爭議』の中に書いてある。

その第三、彼れが着濱早々『爭議日報』の××を計畫し、首唱して爭議團にすぐ之を實行させた。これがいかに有效だつたかは五月八日に資本家側で之にまねた同じものを發行し始めたのでも知れる。

その第四、直ぐ間近に迫つてゐるメーデーの組織を彼れが一人で努力した事。このメーデーは空前の成功をした。このことは後で述べるが要するに、爭議團に於ける三田村の地位は、かゝる仕事と共に、一種特別の立場を持つてゐた。それが五月廿九日の大檢擧後、××部が地下に入ると共にいよいよはつきりしてきた。どうはつきりしてきたかといへば、爭議團及濱松合同勢力下の諸工場或は小市民層の間に迄、かれのいはゆる『××』網が行き渡り、××部の指導が直接××網を通じて常に全爭議團、及市民層をさへ動かした。

××の活動に加ふるにビラ、ポスターによるアジテーションは勿論だが、『爭議日報』は爭議團の機關紙として、最も重要な××をおびるに至つた。三田村が爭議日報を極度に重んじた所以は、別にある。卽ちかれは、それを單に爭議團のアヂプロの仕事とのみみず、××的階級鬪爭の一種の××紙とみてゐたのである。そのことの理解と併せて細胞を握つてゐる三田村の指導的地位は、今から思へば勞働者の大衆行動における「×」の地位であつた。三田村が細胞を今日いふ『工場細胞』卽ち黨員と見立てゝ濱松爭議を××運動の如く指導したといふことは小泉保太郎の『左翼勞働組合運動』についても凡そうかゞはれる。しかしあそこにもそのことは凡そあいまいにしかかゝれてゐない。それは一つはあの論文の書かれた時期にもよるだらうが、實は三田村は濱松において當時それ程明瞭に×××的運動として、該爭議を把握してゐたのではない。先にもいふ樣に上海大罷業に參加した經驗から得た非合法的戰術の××と、常に××的なゼネストへといふ左翼的イデオロギーの下にみらるゝ如き指導が行はれ、爭議終了後に至つて『××』の組織が、全國的に勞働階級全體に行きわたつておらなければこの種の眞の戰ひはできない』と明瞭に自覺するに至つた。少くとも彼れが爭議のあとで筆者にそういふ風に語つたことだけは眞實である。

さて爭議開始の初期において、爭議團は特に優勢であつた。爭議團本部は、横濱分工場にも手をつけたりしつゝ、濱松市内では頗る活潑に爭議團の宣傳煽動は行はれて行つた。團内部では團員が未經驗の故に、最初は心配されたがこゝを上手に指導して、未經驗なだけに指令を固く守り、統制もよくとれるやうな特長を作り、此方面は非常に具合よくや

つた。爭議團の演說會は入場料二十錢三十錢徵集して而も每回大入滿員の盛況である。

ある劇場の持主は、此盛況を見て『如何でせう勘定の方は四分六と云ふ風にして貰へませんか、勿論廣告は私の方で持ちますで‥‥』と、云ふやうな相談を持ちこんで來てわれ〱を笑はせた。かやうに宣傳は奏效して一般市民及び郡部に至るまで輿論は爭議團に好意を寄せ、なにくれとなく便宜を計つてくれた。

敵の陣營

一方會社側を見るに、工場は廢墟の如く靜まり返り死の如く沈默してしまつた。

それでもさすが社長天野は、落付き拂ひ、全社員に訓示し、對策を立てた。今彼等の陣容を見るに、新聞係、來客係、警察係、警備係、印刷係、記錄係、娛樂係、通信係、受付係等の部門を定め、××と××を取るために林支配人をして署長を訪問せしめた。××からは職工名簿を借りに行き、×××からは援助を申込んだ。

役場へ從業員の戶籍原本の分讓を頼み（謄寫五十枚、戶籍謄本下附二百六十枚）。株主及銀行、×××及び其他關係筋へ爭議突發通知狀千五百枚發送。

それから『日本勞農同志會』の組織である。

會社は爭議の原因を、どこまでも評議會の煽動によるものと信じ切つて居るので、此際濱松の地から評議會の勢力を根絕する決心のもとに、社長の長男天野辰夫をしてかゝる反動團體を組織せしめた。もつとも社長の長男は、他から指圖を受けなく共、進んで勞農同志會位は組織するほどの國粹主義者であるが、――今その構成分子を見れば、大化會、黑龍會、秋水會、國本社及び濱松市在住の反動分子に依つて組織され、その主張の第一には『我等は日本人たり、神人一體人類無差別の信仰に發する崇高なる日本主義者なり』との文句を揭げ其他全部六ケ條からなる堂々（?）たるもので、會長は前記天野辰夫、副會長格には自稱米國法學博士牧野孫太郎、林大學、森田秋峯等々三十數名の猛者揃ひである。

之等が先頭に立つて評議會擊滅のために大活動を始めたのであつた。

爭議團がビラを撒けば、會社は直に又ビラを撒く。同志會も撒けば國本社も撒くと云ふ次第で町內はビラの洪水となる。當時かれらのまいたビラには實に殺伐を極め、威脅、脅迫、殺人豫備に類するもの等全部法律にひつかゝりさうな過激なものばかりであつた。

爭議中のメーデー

一九二六年のメーデーは日本に於ける第九回目のメーデーである。そして濱松では之が最初のメーデーであつた。三田村は爭議團及濱松全勞働者の×××示威として專念之の組織に沒頭してゐたのである。

午前九時、龍禪寺境內に集まつた勞働者は約四千名其內には約四百名の婦人が加はつてゐる。爭議團員一千二百名を中心に濱松全勞働者の五分の三は、完全にメーデーに參加したわけである。境內を中心としてメーデー歌は合唱され、見渡す空には一沫の煤煙さへも見ることは出來なかつた。

定刻になると青年闘士幾名の猛烈な演說が行はれ、三田村四郎を總指揮者とし、鍋山貞親を先頭に、××警官五百名によつて嚴戒された中を足取勇ましく行列は行進を開始し

た。示威行列は蜿蜒數丁にわたる長蛇の陣で市内目貫の町を練り歩くのだ。尙ほ此行列の××の一つは、且つて三田村が支那に出張中、彼の地の示威運動の×××をそのまゝ應用したことである。即ち、從來は行進中に、聲を揃へて歌を合唱するだけであつたが、指揮者が時を×××一聲高く、『打倒列强！』と叫ぶと、行列の××が之に應じて『打倒列强！』と叫ぶ。數千數萬の大群が調子を揃へて叫んだ時、其時こそ一層示威の××が上る。そこで、濱松では、指揮者三田村が、あの澄み切つた聲で『惡資本家を倒せ！』『天野を葬れ！』『勞働者××せよ！』と叫び、それに調子が揃つて四千の口が同時に開いた。今日尙、この方法が××されないのは××だ。

濱松全市民は、始めて見るこの凄まじいデモンストレーションを前にして、今更ながら勞働階級の偉力に驚いた。

行列は午後一時、合同勞働組合本部前の靑物市場に於て解散した。

最初のメーデーを美事に成功した勞働者は其歸途『再び市民諸君に訴ふ』と見出しのついた宣傳ビラを撒布した。

『××も××も意の儘にして見せる！』と豪語した天野社長！
我々爭議團は飽くまで
戰はざるを得ず！

このわき見出しがあつて長い本文のついてゐるビラであつた。

指導部の計劃は一〇〇％の成績を擧げた。三田村の得意思ふべしである。

壓迫を逆用して陣營の强化へ

メーデーのデモに成功して爭議團の意氣は計畫通り冲天の勢となつた。此時、漸く××の手は加はり、先づ爭議團本部ライオン館立のきの問題が陰險な手段によつて行はれた。『ヨシッそれでは！』と直ぐに準備して、樂器會社を中心に、ぐるりッとそれを×××する様な陣形に九ケ所の分宿所を選定した。即ち爭議團司令部は元濱町三六、第一班元濱町六〇、第二班八幡町二五六、第三班山下町、第四、五班八幡町五一六、第六班馬込町、第七、八班八幡町石岡方、第九、十一班馬込町、第十、十二班八幡町一八。

之によると、會社の周圍を完全に××したことになるので、會社は、比較的遠方にあつた爭議團を壓迫して返つて間近に呼び迎えた結果となつたのである。

尙、×××は會社の門前に一戶を借入れ、其處に頑張り嚴重な看視をしてゐるのであるが、壁一重へだてた隣家には勞農同志會員が陣取つた。かくて双方睨み合ひ、何日何時、××と棍棒の衝突が惹起され、血の雨を降らすかも知れぬ形勢の下に一分の隙もなく緊張し切つて相對峙したのである。

爭議團は連日の如く示威運動を敢行した。或時は凧揚見物を利用し、又は中田島にて運動會を催すと稱し、そして各地より應援團の來る時は必ず驛まで迎へに行つて。

會社、同志會、靑年團本社(×××有志團)等は、協力一致評議會の中傷と逆宣傳とに依つて爭議團の結束を亂し切崩さんものと狂奔した。色々様々な宣傳ビラは、それこそ雨の如く撒き散らされた。五色のビラが撒かれたかと思ふと、疊一枚もあるデカイものが配布された。

今、彼等が如何に狂奔したかの一端とし

て左のビラを見ることにする。

> **濱松市民よ蹶起せよ!!**
>
> 震災の時社會主義者襲撃の虚報に自警團を作つたではないか。今はこゝへ社會主義者が大びらでゐばれてゐるのだ。彼等をオツパラへ、彼等を葬れ!
>
> 勞農同志會

> **犬を追ひ出せ!!**
>
> ――奮起せよ市民諸君――
>
> 共産主義の犬評議會をツマミ出せ!! 爭議團員諸君!! 諸君を喰ひ物にする評議會と絶縁せよ。それが滿天下の輿論だ。
>
> 日本主義勞農同志會員諸君、ロシヤの犬共が尾を捲いて逃げるまで飽く迄頑張れ!!
>
> 全國の日本主義聯盟は續々諸君の後詰にやつて來るぞ、吾等は其の先鋒隊だ。
>
> 起て!!市民諸君!!
>
> 奮起一番ロシヤの犬共を放逐して眞に濱松市の平和と勞働者諸君の幸福とを確立せよ!!
>
> 青年團本社

之に對して、爭議團は、簡單明瞭に反駁し

ことに、右のビラ（一）に對して爭議團の出した「濱松の平和を亂すものは天野社長一族なり」のビラには會社が非常に困つた。どうしても宣傳には勝てぬ」と歎き、そこで今度は女工の一角を切崩さんとしたが、そのために作つた『日の本婦人會』は、社長夫人只の一人でやつてゐる仕事だと直ぐ看破され小市民層からさへ×××にされた。

此間にあつて毎夜の如く、裏切者が毆打され、同志會員が溝の中へ投げ込まれる様なことが繰返された。

××は郡部から百五十名を召集し、益々警戒を嚴重にする。十七日夜の秋葉神社のデモの如きは、×××と爭議團との大衝突が起り双方澤山の負傷者を出した。

會社必死の活動によつて少數の裏切者を得ると直ぐ『脱退聯盟』を組織し、之を同志會が白刃を持つて護衛し、切崩しのビラを撒かれた事もあつた。

然し、あらゆる努力にも拘らず會社の戰術は成功せぬので、つひに『相愛會』と云ふ朝鮮人の團體を煽動して爭議團本部を××せしむるに至つた。

相愛會暴行事件より
五月廿九日事件へ

與日なき努力にも拘らず、爭議團の結束の前に齒が立たぬので、會社は、爭議團の中に一人の朝鮮人が居る事を利用して、『相愛會』の者と稱する鮮人數名と内地人數名、それを社長の息子天野武則が率ひて十八日午後四時頃、爭議團本部を訪れた。武則は天野一族中でも秀れた男士で、柔道五段、劍道六段と云ふ豪傑だ。昔なら三百石はブラ下つて居たであらう。此一團に更に山本といふ××部長が案内役といふ形で、盛んに幹部に面會を強要した。彼等の言分によれば、爭議の渦中に一人でも鮮人が居ては『日鮮融和』の上によくないのださうだ。

其時は、幹部は示威運動に參加してゐた爲事務所不在であつたが、そこへ、三田村と木澤が歸つて來た。それが幹部だと判ると、いきなり飛びかゝつて暴行を加へた。そして障子を破壊し、器物を投げ、狂亂の限りをつくした。勿論それに應戰して暫時は[illegible]られたが少數と多數では勝敗は明かである。殊に卑怯し

て來た方には××の用意もあつた。

翌日の全國の新聞には此てんまつが大げさに書かれた。爭議團本部では全國無産團體に對し『社長の息大野武則を先頭に、××を携へた多數の暴漢、爭議團本部を襲撃し、幹部を傷け、建物を破壞し去る、而も×××は側に居ながら傍觀的態度を執れり』といふ檄を急送し、全市に撒布した。

相愛會は、之を反駁するやうな、そして又それを大勝利として誇るが如きビラをまいた。『血にまみれて打倒れた』筈の三田村は、自分の投げた鐵ビンで、小指を少し負傷したのみ、元氣に少しも變りはなかつた。

相愛會の暴行事件は、それ自體としては大問題ではなかつたが、此問題を宣傳煽動の×とする時、重大な意義があつた。全國の勞働組合はアヂビラによつて一齊に××し爭議團員中には決死隊を組織せんとする者が出來た。

このアヂが如何に全國的にきいたかは、勞働運動には全く關係のなかつた三田村の實兄が（横濱の仲仕頭）弟の復讐をするため、多數の子分を引連れて、濱松へ乘りこむ。と傳へられ、××を驚かしたことでも判る。此問題は三田村から『其必要なし』と拒絶して漸く事なきを得た。

其事件以後、濱松の天地には、血生臭い空氣が濃厚になつた。

勞農同志會の鬪士（？）が酒に醉つぱらつて爭議團本部へ暴れ込み、滑稽にも檢束されたる事も此時分である。

佛教積善會僧侶團が調停に起たんとしかけたのも此頃だ。形勢は深刻になり、會社はあせり出した。そして横濱分工場の問題に關しては、要求の大部分を認めて、其方だけは一先づ鎭めた。本工場爭議團との間に充分な連絡のとれてゐなかつた場合とて、どうすることも出來なかつた。殘念なことである。

爭議勃發以來三十五日目、卽ち五月二十九日は此爭議を顧る時、第一に思ひ浮ぶ重大な危機であつた。そしてこの爭議は、この日の大××を楔機として一轉し、非合法組織に××され、三田村の××××が始まり、この爭議を歴史的事件たらしめる重要素が發生するのであつて、五月二十九日迄を第一期として區分しなければなるまい。

こゝでちよつと『第一期』の機關をふり返つて見やう。爭議團の編成は前述の如くであるが、××としては、班長會議、書記會議、應援團會議、細胞會議、等があつた。

こゝで特に細胞會議のことを、のべておこう。先づ××の編成は、爭議團員中の意志の鞏固な者を選拔し、特別研究講座に依つて敎育し、集中的形體をとつて幾つものグループに分け各班に分置してあつた。

細胞の××は、主として結束を維持し、司令部の指令を實行するための働を爲し、全員に影響を及ぼし、活動を活潑にして行くのである。

この第一期の細胞は凡そ六十人か百人近くはあつたと思ふ。そして全部が合法的に活動してゐた。之が五月廿九日の檢擧によつて全滅し、僅かに三人のこつたことは小泉の『原始主義を揚棄しろ』に書いてある。

應援團會議は、全國から集まつた應援團の會議であることは文字通りであつて、爭議團を指導し、鬪爭を展開するため、各班に手分けして働き、その爲の必要から時々會合した。

最初の組織形體は、どこまでも合法的であり、先づ司令部には總指揮者本澤兼市が控へ、

應援團會議に於てプログラムを作製し、之を各班に徹底さす、××はそのために活躍する。

これが相愛會の襲擊以來、總司令の木澤、その下の鍋山、三田村の三人が半非合法的なアヂトを持つ事になつて、此アヂトの××により合法的本部は××するやうになつたのである。そして五月廿九日に木澤、鍋山がやられ、三田村はのこつた。で、このアヂトは相愛會毆りこみの五月十八日から大檢擧の五月廿九日まで十一日間つゞいたのである。このアヂトは一般に理解出來ず『かくれるのは卑怯だ』といふ樣な非難もおこつた。アヂトのメンバー自身も尙未だ用意が不十分で、毎日アヂトを出て爭議團司令部へ顏を出してゐた。木澤鍋山の二人はだから司令部で五月廿九日の檢擧にひつかゝつたのである。かく半非合法的アヂトにしろ、アヂトの確立によつて應援團會議は次第に無用となり、五月廿九日以後は邪魔にさへなつた。このアヂトの性質は、『評議會本部出張所』であるわけだつた。

五月廿九日事件

此日午後三時、三百名の×××は、爭議團本部及各詰所を一齊に襲擊し、嚴重なる搜索を行ひ一切の書類を押收し、爭議團幹部及應援團等九十八名を一網打盡檢束してしまつた。

何が斯の如き××をなさしめたか？　勿論爭議團を壓迫し、切崩すためにやつたことは言ふまでもないが、コジツケにもせよ相當な理由がなければならぬ筈である。

曰く『××主義宣傳の陰謀あり』と會社から告發したことが一ッ。

帝國製帽、日本形染、三立製菓、中村氷糖飯田織機、鈴木織機、東洋タイル等々濱松十四工場千五百名の勞働者が五月二十七日正午を期して一齊に工場内廣場で大會を開き、爭議團應援の決議をなし、更に工場内で物すごい示威運動を敢行し、代表者を以て、樂器會社に乘込み、其決議文を手交し、强硬に談判した。

かうした形勢のもとに今にも濱松全市を暗黑とするゼネストの氣配が充ちて來たので、今は猶豫ならずと一擧にして樂器爭議を彈壓し、蹂躪し、崩壞せしめんとしたのであつた。

爭議團は××に占領され、全市に戒嚴令は布かれた。幹部を一人殘らず奪はれた爭議團は大混亂に陷つた。

××の暴行は翌日も其翌日も繼續された。

ブルジョア新聞は一齊に『評議會の大陰謀事件發覺』云々と大きく傳へた。總檢束の報に接して、各地より乘込む應援團は蟻の這ひ込む隙もない程嚴重な警戒網にたいていは引かかつてしまつた。

評議會本部では陣容立直しのため全國總動員計劃を立てると共に、此際最も安全と思はるゝ上村進、布施辰治、近内金光、細迫兼光、水谷長三郞等の辯護士諸氏を依賴して派遣した。然るに××は之等辯護士にさへも踏止まる事を許さなかつた。

流言蜚語は飛ぶ。各班の連絡は切れる、そして此混亂の最中、僧侶團の調停が再度持ち上り、又一方××からは『爭議解決のために代表者を出せ』と迫つて來た。

それで爭議團内部は又々混亂した。解決は望ましいことだが、どれを見ても有利に解決しさうな『調停團』ではなかつた。それでも××に威嚇されて何とかしなければ居られないと云ひ出すものがある、一方飽くまで頑張る硬派の議論もあつて、爭議團は正に蜂の巣を

つゝいた様になつてしまつた。

此時である。只一人大檢擧に洩れた三田村が×××を巧に突破してヒヨッコリ濱松に歸つて來た。

五月二十九日の大檢擧の時、三田村は名古屋松坂の方へ出張して居つたのであつた。軍用米の寄附方に就て三重縣農民組合へ懇談に行つて居た其留守中に突如あの大檢擧が行はれたのであつた。

歸つて見れば想像以上の混亂狀態なので、自分の隱れ家として、濱松市天神町の鈴木巣太郎氏方の二階に間借りをし、早速謄寫版と紙とを買入れ「大檢擧」にどのやうな××の××がかくされてゐるかを曝露し、之に抗議した宣言と、僧侶團及××への代表選出を拒否せよとの、煽動ビラを作り、之を巧妙なる方法を以つて、混亂した爭議團の中へ送りこんだ。それについて從前と同一筆蹟の『爭議日報』も出るやうになつた。

ビラ及び日報は、此場合、爭議團にとつて××××であつた。さしも混亂した爭議團の動搖はピタリと止つた。

『我等の××部は生きてゐる。××部の指導に從へ』と云ふ聲は期せずして一致した。

此形勢を見て資本家××は驚愕した、この度びこそはと、狙つた計劃は××に失敗した。鳴物入りで大檢擧して見たが幾ら調べても何も出ては來なかつた。公務執行妨害一、出版法違反二、銃砲火藥取締法違反一、其他暴行事件等で十四名は、起訴されたり拘留される事になつたが、其他の全部は釋放された。

但し、釋放はしたが、濱松の土地には置かぬ方針でそれぞれ、地方へ追放したのであるが、東京から馳けつけた南喜一は追ひ歸した筈なのに直ぐ引返し、岡島千里は名古屋から中央線に乘り、齋藤重太郎は濱名湖を一周して再びまた戻つた。

爭議團は秩序を回復し、從前よりも更に團結力を強固にした（或班では血書の連判までして誓つた）。それは、一度追放された者が歸つたこと、爭議團幹部の檢束を解かれて來たこと、及び時間經過に伴ふ落着等を數へることが出來るが決定的な原因は××部（アヂト）が儼存し、「爭議日報」が復活して規則正しく××され、××に撒ちこまれたことであつた。

そしてこれからの鬪爭が第二期である。

第二期の特長はしばしばいつた如く地下××部が爭議團を指導したことであつた。したがつて第二期では鬪爭組織が再××されてすつかり姿をかへてしまつた。現在の我々にとつての教訓や意識は此第二期にある。

『アヂト』の確立

『アヂト』は『煽動點（アヂテーターポイント）』など書かれてゐるやうだが、普通『指導部』又は『祕密指導部』といはれてゐるやうだ。アヂトは樂器爭議の私の記憶によれば、五月十八日彼の相愛會襲擊事件以來、木澤、鍋山、三田村の三人によつて本部から離れて、その上に組織されたのである。

此『アヂド』は先にもいつた通り、半非合法的なものであつて、爭議團司令部（本部）に皆が宿泊して居たのを別な家で寢泊りするやうになつた程度のものであつて、鍋山は殆んど毎日司令部に出て行き、木澤は双方の間を度々往復した。

但し××から來る一切の情報は『アヂト』に集中し、アヂトから××を發するのである。

『お山の大將』を氣取つて居る爭議團幹部の

中には、このアヂトからの指令に對して内心少なからず不平があつた『デモクラシーの破壞だ』とか『三田村の獨裁』だとか、さういつた不滿の聲が起りかけた時、あの彈壓が來た『彈壓！』と同時に各地方から新たに××した者、例へば東京から南喜一、大阪から太田博、飯石興市、中村義明、京都から辻井民之助、奧村甚之助、等々（中には檢擧を巧に脱れた者もある）の諸君によつて會議が開かれた。三田村も列席した。

此會議は、應援團の最高會議に價し、云はば評議會中央部の對策協議會ともいふべき會合でこゝの意見として『經濟的鬪爭の小さい範圍で爭議をまとめよ』と三田村に對して盛んに忠告（？）したが『アヂト』の者として只一人殘つた三田村は、此會議を全然問題にしなかつた。彼が上海に於て經驗した『アヂト』の價値は絶對的なもので、凡ゆる意見に對して『階級的×××鬪爭へ』の主張を持して斷乎として鬪ひ、南一人を連れて更に一層健實な『アヂト』を作つた。そして應援團會議の諸君に向つては『君達は足手まとひだ、サッサと歸れ！』

三田村は確信を以て宣言した。又ある同志に對しては退去をさへ命じた。

太田は『南一人を三田村につけて置いたのでは結局三田村の獨裁と同じことだから今一人シッカリした者を着ける必要がある』と主張したがそれもものにならなかつた。

『アヂト』は此時から完全に××にあつて休みなく爭議團員に對して動きかけてゐたが、一方爭議團司令部も地下へ引つこんで太田、赤堀、武田、辻井、德田（後に荒木）等に依つて作られた。

地下的司令部を折角持つた幹部諸君は、だが、相手は判らず、情報は『アヂト』にのみ集り、只々『アヂト』の指令によつて動くだけの仕事なので經驗多き之等指導者は、決して愉快ではなかつた。有つても無くつてもいいやうに扱はれることはトテモ堪へられなかつたのは尤もなやうである。

かやうにしてゐる所へ、東京から上森、市村兩君が『爭議解決のために』といふメッセージを發表して公然と乘り込んで來たが、『お前達の出る幕でない、歸れ！』と一言の下に『アヂト』から追放された。

こうして、第一期においては三田村獨裁の『アヂト』が確立され、これが最後まで爭議を××した。

三田村の『アヂト』

大檢擧によつて細胞を殆んど全部失つた困難は、幸にも岡村慶次郎、岡島千里、齋藤重太郎三君の第一期時代の××係を殘したことにより、急速に復舊することを得て、こゝにアヂトの機能は、充分に發揮するやうになつた。『アヂト』は五月廿九日直後の混亂の時は轉々したが、少し落着くと、天神町鈴木方（市街を七八丁離れた田舍の一軒家の二階）に定め、其所には三田村、南、久津見（三田村のワイフ）山邊健太郎（この書記が三田村と同一筆蹟で爭議日報を書いた）及びレポーターの都合五人が住んだ。

爭議團には三人一組の××グループが各班に分置され、前記三人の××係が其上にあつて『アヂト』との連絡を巧妙に取つた。

從つて『アヂト』は居ながらにして爭議團全體の狀勢を正確に、敏速に知悉し得た。

更に重大なことは、合同勞働組合を中心と

して爭議に直接關係のない諸工場に××組織のあつたことだ。

この方の××は、濱松市民として、濱松市の種々なる機關に派遣され、輿論を煽動した。

そして小泉の著者には全細胞の半數がかくされ、半數が公然のアジテーターとして表に出されたとあるが、之を著者はどういふ積りで書いたのかわからないが、第二期に入つてからの××は、全然非合法的に作られ、甲の××グループは乙の××グループを知ることは出來なかつた。

各班で誰れと誰れが細胞だか判らんと云ふのですべての團員はどんな場所でゞも弱いことが言へない狀態におかれ全××の×××的配置は非常に爭議團を引きしめたのである。

そしてかゝる××があつたからこそ爭議團は長期に亙る持久戰に耐え、幾度か危機に瀕しても直に陣容を立直し、外觀は、今にも支離滅裂の如く危ぶまれながらも決して破綻を生じなかつた。祕密司令部は『アジト』の下に已むなく働いた。

會社の動搖

會社は、重役の身邊を守るために爭議に關する事務を社長の自宅に移した。

社長邸の大廣間には反動の親分連中が居並び、山手の森にひゞく樣な大きな聲を出して高談が盛んなことだ。

『――ウンあの鍋山の小倅か、奴は會社廻りばかりしてゐるんだよ』

『さうかい。それで一體全國評議會は何人位ひ居るんだ』

『先づ三萬だらうなあ……』

『ぢやあ、歐洲航路の汽船一艘へそ奴を積込んで太平洋のド眞中で××ズドンー　とやるんだねえ』

『わつはゝゝそいつあ妙案々々』

等と物凄い元氣だ。會社は同志會、相愛會、青年團本社、等を動員し、全市の資本家の協力を受け『共産黨の陰謀事件』(共産黨といふ言葉を先方から使ひ始めた)をデッチ上げて××を動員し、或は代議士を上京せしめ社會局に向ひ『何故濱松の實狀を調査せぬか！』と難じ、其結果成田事務官、石原屬の出動を求めるに至つた。

爭議團の切崩しに至つては萬策を弄するのであるが一つとして成績が上らぬので遂に××行動をも始めた。一例を見るなれば、

神久呂村都田の齋藤某の息泰二と言ふ一爭議團員は、自宅に於て一人留守番をしてゐる所を暴力團數名に誘拐され、會社內に監禁されてしまひ釋放されないので父兄は憤慨し、不法監禁誘拐罪で告訴すると言つた。

飛行機部の飯尾某方に行つた勸誘團は、當人が不在であつたにも拘らず血迷つて精神に異常のある兄をむりやりに自動車へ押し込んで連れ去つた。先づかういふ調子である。

一方會社內部に前から潜んでゐた暗鬪が、漸く表面に現れた。即ち三井系の三輪專務と社長派との對立である。社長派は專務を三井の廻し者と目し、事實又時機を見て天野を追出す形勢にあつた。それが社長の爭議方針反對の形で現れた。

『會社は營利を目的としてゐる、それにまで××に代つて共産黨征伐をする積りでやられたのでは困る、社長の意氣は壯だ壯なりと雖も營利會社が營利を忘れてはやり切れぬ。此際臨時總會を開いて爭議對策を協議する必要がある』かうした聲が起つた。之に對して社

長は斷乎として反對し『今左樣な事をしては主旨が弛緩するのみでなく、叉評議會に足元を見られる』と拒絕した。

土地の有志大野木、柴田兩氏が六月十四日社長を訪問した時の如き『市民の迷惑が何だ、會社は不景氣な時、たゞの一文でも市民の厄介になつたことがあるか！』と叫鳴つた位頑强である。

そのうちに會社の第五十七回定期總會の日が來た。六月廿二日のことだ。

集まつた株主二百四十一名、今日濱松全市は仰々しいまでに×××の網が張られ、恰も戒嚴令がしかれたやうであつた。

總會は型の通り進行し、原案を可決し、八朱の配當を定めた。至極平凡に會議が進行をつゞけてゐる最中、約六百名のデモが××を舉げて殺倒した。前日から鬪士の豫備××を行ひ、警戒網を張り詰め、安心してゐた××は狼狽した。會社門前は××の渦卷となつた。大活劇は三十分近く續き男二十四名女子四名檢束されて、デモは方向を轉換した。

此示威運動で會議は一時中止したが、再び生氣に返り、小林正幸と云ふ一株主より、『靜岡新報に天野社長の態度に疑惑の色益々深し、濱松全市民に困窮的不穩の色漲る。其罪を謝せ。叉民友新聞には、頑迷な態度に濱松市民天野社長の猛省を望む、等の記事あり、之に付て辯明を求む』と質問した。社長は、『新聞は虛報誤傳をなし、中傷的記事を掲載する』と前提し、赤露××黨を引合に出して大演說をこゝろみ、吾人は身邊に危險迫ると雖も敢て畏怖せず、云々、と大見得を切つた。勿論此質問は八百長でありそれを以て氣の弱い株主を感服させ、うま〳〵と難關を美事に突破した。

毎年、株主總會後には工場内作業狀況を視察さすことになつてゐたが、さすがに此時は許さなかつた。實況を見せたのでは、醜體を暴露するからである。

司令部葬らる

大檢擧に依つて半合法的『アヂト』が破壞され、三田村は南を連れて『アヂト』を××し、××に入つたこと及び同じく××司令部の組織が持たれたことも前に述べた。

こゝに二つの異つた秘密機關が出來てゐたが、『アヂト』の指令に對し司令部は別な意見を持ち、不滿があつた。

司令部は、爭議自體を一日も早く、少しでも有利に解決する目的で、出て來る色々の調停團に一つ一つ望みをかけた。『アヂト』は調停團が現れると、先づ其××を突き止め、無力なもの又は有害なものに對しては眞向から××した。勿論『アヂト』は爭議の解決を度外視したのでもなければ、爭議の長引くことを好んだ譯ではない。それどころか爭議の解決を有利に導く一××として、無力な調停團を排擊したのであつた。

『アヂト』は爭議團の現狀、團員の欲求等を悉く知り拔いてゐるだけに、其後々の現象の僅かな變化には×だもせず、一定の××に向つて邁進した。

この『アヂト』の方針を理解出來ぬ司令部は、『アヂト』の行ふ總ての政策が失敗であり幻影を追ふて行くもの、如くに見へた。就中千名からの爭議を僅か二人（その實一人）のアヂトによつて充分に××出來るものでないと云ふ古い型の戰術が先入主になつてゐるので事毎に、獨裁と横暴に憤慨した。

それだけでなく、もつと根本的な××は樂器の爭議を單に樂器の爭議としてのみ取扱はんとする首領連の考へ方と、『部分的經濟鬪爭をして全面的××××へ迄××せしめる』と云ふ『アヂト』の方針とは、絕對的な對立を形成した。

その結果『アヂト』の政策の上に妨害にすらなることが發生しさうだつたので、遂に『アヂト』及細胞は、司令部を無視するに至つた。司令部の太田は少し前に名古屋のアジア製靴爭議の指導を受持つて、其方へ出張したが中にはどうしても立退かぬ連中に三田村は公然と集會を開かせ、一網打盡、××されるやうにし向けたことさへあつた。個人的に又『道徳的』にはよくないことでもあらうが『アヂト』の斷乎たる決意の前には斯の如き××により妨害物の排除を餘儀なくせざるを得なかつたのである。

かくて『アヂト』は勞働者を信頼し、細胞を××の力と賴み、そして又勞働者も××部を厚く××し、『火の中でも水の中でも』敢て辭せぬ緊密な××體となつたのであつた。

從來の爭議に、千名に對する百名二百名の應援團を必要とせられた型は××せられ、少數の××者によつて心地よきまでに××は展開した。

××部は、所謂輿論の聲なんかには少しも頓着せずむしろ之を××し、引きずつた。攻勢に次ぐに又攻勢である。『アヂト』は對立的な司令部を葬り去つた。

人權蹂躪

××の彈壓は、五月二十九、三十日の大檢擧以來依然として峻烈を極めた。

爭議團各班に潛在する若き應援鬪士は發見次第檢束し、追放された。この追放するに當り最初の間は東京の者は東京まで、大阪の者は大阪まで、といふ具合に、自分の所までの汽車賃を渡してゐたが段々豫算を喰詰めたので、大阪へ歸る者に對して僅かに岡崎邊までの汽車乘車券しか渡さぬ樣になり、其為に知人もなければ組合もない所で下車して閉口する者があつた。警備隊側合等に從事する者は毎日々々檢束され××された。會社の附近を歩く者は、それが自宅からの便利な通路であつても用捨はしなかつた。××に對しては思ひ切つた侮辱を加へ、恰も戒嚴當時を思はす位だつた。爭議團の平凡な行動をこと更××に導き、毆り蹴り突き飛ばした。斯樣な人權蹂躪に對して濱松全勞働者は見るに見兼ねて奮起した。

私の役目

本部は此爭議の最初に於て、組織部長三田村、教育出版部長鍋山の二人を派遣してゐたが、愈々野田律太、中村義明の二人も出動することにした。

六月二十九日の正午頃。私達が本部で仕事をしてゐるところへ突然三田村が歸つて來た。神出鬼沒、彼はよくかうしたことをする。直ぐに私達は、別な家で報告を聞くことにした。

『アヂト』と細胞の××の調子が非常にいゝこと。爭議日報の××網の苦心談、濱松地方××の確立。それの活動範圍が××して、濱松市の各工場、而も鐵道從業員組合、濱松工場内借家人同盟、青年同盟、市議選擧對策協議會、爭議解決促進同盟。及び近く三方ケ原農民の方にまで××及んだ。從つて八日で

は樂器爭議は、全體的×××に問題が發展轉化して來た。此調子で本腰を据えて×××めば痛快な××が捲き起るに相違ないと云ふのである。三田村は新××の採用に就て固い信念と、成功の自信に滿ちてゐた。

『ところが調停運動決裂以來××の彈壓がヒドクなつて、トテモ表面には活動出來なくなつた。今迄は南一人の活躍はどうにか出來たがも早それも駄目だよ』で、此際公然と自由に活動出來る者が必要になつた。

『但しだ。僕の活動は××の前へ公然と現れることを除けば、其外の仕事の上では自由自在だ。濱松つて處は愉快な處だよ、僕のこと忍術使ひだ、なんて騒ぐんだからねえ。』

三人は聲をあげて笑つた。

三田村が榮養不良な樣子なので其れから長堀食堂へ案內したが、ダブルビフテキを二皿喰つて喜こんだ。

『何しろ社長、市長、××等に對しては個人的な反感が高まつてゐるのでトテモ押へ切れない。今にも爆發しさうなので心配してゐる』

その樣なこと云つて私達は別れた。

中村君と私とが濱松へ行つたのは其翌日である。元城町の山內と云ふ八百屋の二階を借り本部を定めた。新聞記者、雜誌記者、各地から來る視察、調査、研究者、慰問、激勵の有志等々、朝から晩まで千客萬來の狀態には閉口した。

夜、警戒網を巧く逃れて公園のベンチ、木の葉影、カフエーの二階、撞球場の中、等で三田村と私との××が每日行はれた。

『調停團との交涉』が與へられた全部の使命である私と中村とは直接爭議の指導には無關係である。但し『アヂト』の指令で團員の激勵をしに行つたりはした。爭議團員は物凄く緊張してゐた。『アヂト』の方針は、此際、協調會理事添田敬一郞氏を動かしては如何？といふことであつた。

前から協調會囑の大月氏が濱松に詰めてゐたので『アヂト』は其方へ絲を引いてゐた。或時の如き三田村、久津見、大月の三人が仲居旅館で會見中を刑事に踏込れた事もあつた。

『アヂト』の命令で、私は兎に角添田氏を動かして見ることとなり、やがて添田氏は濱松へ來て、諸方面へ運動を始めた。

『アヂト』の對添田方針は、濱松へ引つ張り出しておいて勝手に調停運動をさせておき、私には向うからよびに來る迄、訪ねて行つてはならぬとの命令が下つてゐた。さうしておいて一方『アヂト』は益々鬪爭を×××てたのである。

七月六日の夜會社材料乾燥場に放火事件があり、それは單なる小火に終つたが時節柄大事件視された。

十日夜は、爭議解決促進聯盟の批判演說が催され、之には上村進辯護士も出演したのですつかり會社糺彈演說會になつた。

斯うして愈々切迫した空氣が濃厚になりかけた時、天野辰夫氏と舊知の大橋京之助氏が添田氏とは別口に濱松へ調停に來た。加藤氏を通じて此事は直ぐ私のところへも通達された。辰夫と大橋たの間には餘程つき進んだ話が纒つた樣子であるが父の社長がそれを怒つて『貴樣は俺の敵だッ！』と辰夫をキメツケて結局暗から暗へ此運動は葬られた。

丁度この頃、日は忘れたが、電燈がついたばかりの夕方、中村と私と散步に出た。活動寫眞館のある方へブラ〳〵行くと先方から協調會の大月と、西尾末廣（總同盟幹部）とによく似た二人連が來るので「ハテナ？」と氣付いた時、西尾に似た方の男が倂の帳場へ飛込んだ、變だな！と驅けつけて見ると、帳場

の中で西尾君が私の方に背をむけてかくれてゐる。その恰好が滑稽ではあるが少し臭い、と私は思つた。

あとで天野辰夫に中村と私とがある料亭へよばれて行つたことがある。その時、三田村によく似た感じの此資本家の息子は『僕は君達と戰つてゐるが、君達の悪口をいつて僕に取り入りにくる勞働運動家のあるのはいやな氣がしたね』とにが〳〵しげにいつた。私は倖の賑場の中へ逃げこんだ西尾君の姿を思ひ出して『先生コソ〳〵策動してるな』と思つたことがあつた。

調停運動

調停團は、最初濱松西數ケ寺の僧侶團が起ち（同令部は之を賴つた）縣會議員松本伴造氏が起ち、消防組が部長會議を開き、市民によつて『爭議解決促進聯盟』が組織されてしば〳〵調停が試みられたが、物にならなかつた。そこで新たに住職、辯護士、市會議員、調停官、市助役、市長、×長其他濱松の有力者に依る調停團なるものが組織された。之は平和論者と會社の傀儡と、××との雜多なものである。この有力（？）な調停團からの會見申込みに對し、爭議團では南喜一、釋喜二郎外十一名の委員を出して數回接衝した結果先方は、

『爭議費用は公然認めぬが金一封として一萬圓贈る。解雇者は貳百名とし、之に對しては相當の手當をする。復職にも相當のことをする。總ては調停者に一任せられたい』

と言ひ、それが厭なら手を引く、とアッサリしたものだ。

其處で爭議團の委員が『相當とは何か、百圓も相當なら千圓も相當だ、解雇者の數だけハッキリして手當が相當とだけでは、例へば「兎に角死刑にする、絞首臺に昇つて見れ、罪名は後から相當なことに決める」と言ふのと同じでないか』『結局ヤル所までやれと言ふのか』とだめを押すと。×長は『マアさうです』と返答した。

この案に對しては調停團の中にも不滿足に思ふ者があつた位だ。

惟ふにこれは、市民を慰める（ゴマ化す）爲の手段だつた。×長は株主だつたし、××は此機會を利用してそこへ出てくるであらう南か三田村を檢束する手段にしたのである。

爭議團側は、此調停運動の經過の中で、市長に對し、又××に對し、個人的な憫ひの聲を放つに至つた。

それは又××の絶好の材料にもなつた。

小市民層への働きかけ

××層への働きかけは爭議の最初から特に注意した所であつた。從つて市民の輿論は爭議團のものであつた。具體的には行商隊の商品が非常によく賣れることだ、石鹸屋へ石鹸が賣れることとさへ珍しくなかつた。尙ほ市民の中から『爭議解決促進聯盟』が生れ、一般市民の絶大な共鳴と支持を受けてゐる。何處の爭議にも市民から調停者は出るが、この時の樣に一ツの組織が創造されたことは嘗つてない。聯盟は演說會を開き市民大會を開き趣意書に數千名の調印を集め一戸の事務所を持ち、事務員を置き、市民全體の組織力を以て目的を達しようとしてゐる。市民は爭議の必然性を理解した。それ故に爭議團の運動會には常に有志の名で賞品を澤山寄贈して來た。

かうした市民の同情が集まるに就ては、『×××』は注意深くも、爭議の狀勢報告其他アヂビラを浴場、理髮店、其他料理店、撞球場等々、凡そ市民が集まる場所で、所謂

世間話に花の咲く處へは××なく×ち込む樣にした。その上更に其話題の方向に就てまで細胞メンバーの×が伸びるやうにした。

だが然し輿論なるもの丶性質上、爭議團の形勢如何により、又は新聞の逆宣傳的記事に依つて左し右し、時には不利な、悲觀的な情況になることはある。

然しながら之を又有利に轉換することは極めて容易である。其××はさうした輿論にこだはるとなく益々活潑に攻撃的態度を以て進出すればよい。それこそが結局輿論を戰ひとることであり、從つて小市民を爭議團の味方とし得る。

小市民層の輿論が爭議の勝敗に重大な影響があると思ふ考へ方が間違ひである樣に、又小市民層を殊更に無視し敵に渡す樣なことをするのも大なる誤りである。

濱松の小市民層は、完全に最後まで爭議團の味方であつた。

小市街戰となる

爭議は早くも二ケ月を過ぎてしまつた。會社も爭議團も今は必死の對抗である。勢ひ戰鬪は白熱的激戰とならざるを得なかつた。凡ゆる調停運動は破れ、添田氏の出馬はあるが、然しそれはそれとして××には一歩も休養があつてはならなかつた。

會社の、切崩しの運動は奏功せず、折角獲取して鑵詰にしてある裏切職工は、待遇の惡い事に對して不平を起した、殊に勤續七八年に亙る職工を新期採用の形式にしたことからそれが爆發し、サボタージュを始めた。

又、工場内の寄宿舍が不完全にて、蚊帳さへも行渡らぬ始末の上に、不衞生な結果からアクション部の女工森下チヨの妹はチブスに罹つた。

更に、あまりの苦痛に耐へ兼ねて、裏の塀を乘り越え、逃走する者も出るに至つた。

本期の總會は、漸く切り拔けはしたもの丶次の總會には莫大な缺損は明白であり、從つて大株主の間には別な問題が起り、社長を苦しめるのであつた。

會社の積極政策は、新期工募集、解雇通知の連發、そして煙突から煙を出す事、機械を空轉さす事だつた。

新期工募集は、だが、頭數を揃へても、樂器の仕事は不熟練工では何の役にも立たず、折角景氣よく煙突から吐き出す煙は、石炭を焚く時の黑煙ではなく木屑をクスベル白い煙だつた。

工場内では敷島會が組織され×××をよせ集めて大和會が作られた。

一方爭議團は各地から寄贈される軍用資金激勵の電報によりて意氣を昂げた。就中三重農民組合から白米二十俵の寄贈を受けた時の如きは、それを大八車に積み込み、ワッシワッショの掛聲勇ましく一大行列を作り、會社を一周して××を行つた。物凄い喊聲は四邊を壓した。

七月六日の放火事件以來消防の夜警が嚴重になつた。ところが七月十六日午前三時、小竹×××にダイナマイトが××した。此處でも物質的破壞は僅少だつた。然し騷ぎは大きく敵の胸中を氷にした。

其晩班長會議（細胞もゐるが細胞會議ではない）が頗る緊張して開かれた。集まつた者は中村愛吉、内藤增吉、伊藤由太郎、太田正吉、近藤賀明、須貝滿直、中野花吉、其他班長全部、其處へ細胞係の岡島千里、岡村慶二郎が加はつた。議題は局面轉換策として『少し××いデモをやらう』と云ふのである。

然し今折角添田の運動があるので之に妨害

になつてはよくない、一應『アヂト』の意見を聞かうと云ふことになり、南を呼んだ。南は酒屋の風をして自轉車で來て、

『デモがどんな×く行はれても交渉には差支ない、僕が勸めはできぬが決して止めぬ。勝手に××がよい。さうだなあ、何かやればいいねえ、乾度有效だよ』と答へた。

それから岡島は大阪電燈と藤永田の經驗を話し、岡村は共同印刷の例を話した。別れる時岡島は『××隊には少し位酒を呑ます方がい〻だらう』と云つた。

林重役と×長の×を××する、之は絶對に時間を同じくするのだ。さうすれば××が總動員で其方に集中する。ガラ空になつた×××へ××隊が突撃し之を××ふ。

××は大體かうであつた。

××隊は金山神社へ集合すること。

林重役邸へ行く者は馬見村新津の宮。

市長宅へ行く者は鴨江觀音境内。

夜になると黑衣の青年が續々と指定の場所へ集まる。勝手を知らぬ應援鬪士は路に迷ふ者もあつた。酒とビールが持ち込まれたがビールの方は油臭かつた。

やがて林××の×へ鬨の聲が押しかけた。同時に××の×へもワアッー と叫聲が迫つた。物凄い暗夜の××の中からバラ〱〱〱つと小石の礫が雨の如く打ち衝かつた。××がガチヤンと破れて周圍は眞暗闇、横側の××を乘り越へる音がメリ〱ッ！ と氣味惡く響いた。

×長の×では家庭圓滿、蓄音器の音が平和の夢を誘ふ樣であつたところへ、ウワアーッと×の聲が迫り×が飛んだ。

ワッショイ、ワッショイ。バラ〱〱カチン！ ×だ、瓦だ、木片だ。

×長は劍道の達人である。スワッ、とばかり木刀振りかぶり『寄らば切るぞ！』と表へ飛出し中正眼に構へたが×にもならなかつた。

×れるだけ×れた群集――××隊――は潮の如く引き揚げた。

金山神社へはピケが飛び、豫想通り××はトラックで總××したと報告した。

『ソレッー』

とばかり恨み重なる×××へ向つて出動した。

あゝ然し策戰に齟齬があつた。行動の上に誤りがあつた。トラックは直ぐに歸つた。ガラアキの管の×内には大勢の××が待つてゐた。ビール壜はいたづらに路傍にコロビ揮發油は蒸發してしまつた。

其翌日、××が血まなこになつてゐる時、八幡社境内に於て正義團は運動會を開いた。此處で亦々解散命令に××して大××を演じ双方負傷者を出した。

かうした××戰は隨所で行はれた。

激戰以後の形勢

暴動事件があつてからは、××の取締は言語×に峻烈を極めた。正義團員は、表に出ると直ぐに××されてしまつた。留置場も道場も檢束者で充滿した。そして中では××、××が繰返された。それ等の光景は、多少の體驗をもつ筆者は、トテモ書く氣にさへなれないほど××なものであつた。讀者は夢で見る地獄を××して、それ×だと思つて貰へば事實に近いものになるであらう。

一方、この『少し手荒い』行動は三田村の指令によるものだと思ひ込んだ××は、今は『アヂト』の搜索に死者狂ひになつて私と中村の本據にしてゐる宅の周圍を嚴重に警戒した。

小さい私宅の本據は、直ぐ前後に、同志會

の壯漢が數名半纏着で棍棒を持ち、構へてゐる。それから又四五間離れた所に××××が數名控へてゐる。つまり××團と××とが協同して二重に網を張つてゐるのであつた。

私から爭議團に送るレポートの如き、レポーターが宅を出て五六間も行くと直ぐ奪はれて了つた。餘りな仕打に癪に障つたから或時、

『此手紙を開ける奴は大馬鹿なり』

とだけ書いたレポを出した處、例によつて直ぐやられた。二階の窓から此光景を見て、中村と二人でうれしがつて、大笑した事があつた。

眞夜中のことだ。

芝田某といふ名刺を持つた壯漢が面會に來た。變な時間にやつて來たので斷つたがどうしても承知せぬので二階へ通すと、いやに謙遜さうに『お初にお目にかゝります』といふ調子で挨拶をした後『×長の宅を襲撃したのは怪しからん、××は市民の父である。市民に謝罪狀を書け』と云ふではないか。

『なる程×長の宅を襲撃したことはよくなからう、然し、×長は×長であると同時に株主であり、調停者として不誠意を極め、爭議團に對しても個人的に反感を抱かせた、從つて會社側の味方、それ故に爭議團の敵、といふのであればやむを得ないことかも知れん、第一左樣な交渉に來る者が、眞夜中を選ぶ等とは既に禮儀を失してゐる』そんな事で之は追返した。

翌日、靜岡縣の××課長を先頭に、××××が十數名、ドカ〳〵と私達の二階へ××した。そして『三田村の行方を知らない筈はない』といふし『人に物をきくのに亂入するとは怪しからん』といふし、そこで又激論が起つた。結局、××課長が『實は、禮儀正しくやつてゐたのでは三田村と南は捕まらんので無禮したが』と謝罪して飽迄も二人の行方を追及する。當の三田村は、此頃辨天島の涼しい旅館で、添田氏と、解決に就て、種々交渉を重ねてゐるのであつた。それをいふわけには參らぬ。課長の顏をみてゐると、全く職務とはいへ、氣の毒だつた。そんな風で要領をえないので靜岡縣下の××は總××を以て濱松を警戒した。

會社側はたまりかねて、更に積極的に出て暴漢を煽動し、爭議團の手薄な班に押しかけて××し、數名檢擧された程だつた。

添田氏の調停案は、不幸にして爭議團を滿足さすには餘りに貧弱だつた。此方の話は十數回の接衝が行はれた後、遂に決裂して了ひ、同氏は、一先づ東京へ引揚げる事になつた。

此時、かねて『ブチト』に於て××してゐた會社側の分裂政策――會社内部の對立を利用して一方の三井財閥を動かすこと――が漸く實現の運びに至つた。

それは、東京より鈴木茂三郎、石黑悦二郎兩君が、來濱し、三井の山本条太郎、増田ビルブローカーの増田二郎が調停に立つ旨の下相談だつた。

かうした事は、鬪爭を××させることによつて、必然に現れる狀勢にあつたのである。

全國的大彈壓

鈴木、石黑兩君には、案内役として松尾直義君が同行して來た。

そこで、直ぐブチトに通知して三田村、中村、野田、松尾の四名は辨天島に行き、鈴木、石黑兩君と六人で、辨天島から舟に乘り、向側の砂濱に上陸し、海水浴でもする者の樣に裸體となり、寢ころんで色々相談した。それによると、添田氏の案の十倍もいゝ條件が持ち出されてゐるのである。

其所で、爭議團代表數名と、中村君、松尾君が上京し、直接山本増田兩氏と會見し、具體的に交渉を進める事になつたのである。

ところが、此方の交渉が好調に進みかけた頃上京代表者は、一人殘らず警視廳に檢束されてしまひ、更に、濱松に引き返して來た石黒君も濱松署に檢束されてしまつた。

それのみでない。評議會に對する最後の彈壓として、東京、大阪、神戸、京都、其他の地方に於ても未曾有な大檢束が行はれた。

之は評議會が濱松の問題に對して行ふ××がどこまで發展するか判らぬ事に對する××階級の××の現はれであつた。若し、非常に有利な條件で解決さしたのでは、將來如何なる結果を生じるかも知れぬと思つたのでもあつた。事實當時の狀勢は、濱松全市のゼネストは容易に××されるし、又××××な——少くとも評議會關係だけは——ゼネストも可能なところまで××が行渡つてゐたのである。

其所で、××××はこの全國的總××を以てわれ〳〵が完全に手も足も出せぬ手段を取つたのであつた。

大阪の評議會本部は、直ちに移轉本部を組織し、からうじて機關紙は正規に出版したが、充分な活動は全く不可能に陷つてしまつた。

全評議會は留置場に移された。

この露骨な、資本家××の獨裁的××行使の前に、我々はたゞ憤慨したり、恨み言葉を放つまへに、××の缺陷に就て考へて見なければならない。一般勞働組合の合法性といふ様なものが、どこまで××されてゐるだらうか？ それは既に明な如く××狀態に於ては全く零である。この零を百にし千にし萬にするものは、たゞ〳〵强固な勞働者の××的××と、××的大衆××以外にはない。

三田村捕まる

濱松の爭議團は數度の激戰により優秀な鬪士を全部拔かれ、細胞網は今又破壞された。

この大混雜の最中、雁次郎の半纏を着てイナセな姿の三田村が元城町の私のゐる所へヒヨッコリ顏を出して、

『いよう！』

といつた。

『おや！ 良いのかい、大丈夫か？』

私はおどろいてきいた。

『はゝゝ』

『君と南を搜すので命がけらしいよ』

『搜してゐやうだねえ、ずつと前からだよ』

『ちよつと呑氣過ぎるぜ。昨日はこゝへも××課長自ら出陣だよ』

『そいつあ亂暴だ。こゝは爭議團の協調會ぢやないか。はゝゝ』

『大物がさう〳〵出て來たのでは警戒網蹂躙罪を××するぜ』

『之は大笑ひだ』

『用件は何だい？』

『ウン、南も其所へ來てるんだ、奴、暑いから氷水呑んどる、どうだ、一つ海水浴へでも行かうか』

『よからう』

三人は自轉車に飛び乘り中田島へ走つた。久し振りで三人は×××を呶鳴つた。小供の様になつた三人は水泳競爭なんかしてハシヤギ遊び夜になつて歸ることにした。

歸り途で、先頭の南が、自轉車に燈火がないと云ふので××につかまつて叱り飛ばされてゐる。其處へ後から追ひ付いた三田村がとび下りてまあ〳〵と謝つてやつてゐるのが愉快だつた。

しかし「アヂト」も今は刻々險のんになつた。

昨日、隣りまで搜索隊が來たので明日位移轉の必要がある。取り敢ず『三田村は街の東の方に居る』といふ流言を××して置いた。

しかしそれは失敗だつた。七月二十九日午前十一時に三田村と南は多數の××にふみこまれて『アヂト』で捕まつた。捕まつた時

の樣子は、其時、三田村は無產者新聞の原稿を書き、南は騰寫版印刷をして居つた。

捜索隊は先づ家の周圍を嚴重に張り、ドカドカと數名の××が二階へ馳け上つた。

三田村は顏色もかへないで、ペンをおき、

『はゝゝ、とう〳〵見付けたねえ、××××しなくてもいゝよ。僕が三田村、それが南だ。暫時待つてくれ、準備する』

落ち付き拂つて、一切の書類、謄寫版の原紙、等を綺麗に燒き拂ひ、室内を整理し、鞄を空にして錠をかけ、×××は氣をのまれてぼんやりみてゐた。ゆう〳〵と捕繩を受け、南と並んで自動車に乘つた。

『おかみさん、色々御厄介でした、ちよつと靜養して來ます。』

この言葉が、此家に殘した當座の挨拶だつた。（二人は公判の結果無罪になつた）。

大爭議の大詰

三田村、南の檢擧に就て新聞は大きく報道した。爭議團員の中には二人が自動車で運ばれて往く處を目擊した者もあつた。

二人の檢擧されたことは爭議の上に致命的な大打擊であつた。混亂の波紋は渦を卷いた。ところが其翌日、平常と少しも變りなく爭議日報が發行され、それが同一筆跡、同一文法であるので、今まで日報を三田村の仕事とのみ思つてゐた連中は檢擧のことを半信半疑にした。だが檢擧は確實に知れ渡り只々不思議なことにしてしまつた。

『アヂト』は關東印刷の細田君によつて再建されたが、有名無實なもので、困難の中から情勢をさぐり、苦心して出す指令も時期を失した拙いものになつてしまつた。

爭議團は幹部を根こそぎ奪はれ、細胞網は打ち破られ『アヂト』を失つた。

今は全く手足を失つた者の如くどうすることも出來なかつた。表面に働ける者は、私一人である。而も私は『アヂト』の方針に從ひ調停者と折衝することのみの任務についてゐたので今更どうにもならなかつた。

此混亂に乘じて會社のスパイは××した。買收、懷柔、脅迫は全體的に襲つて來た。

私一人で甲の班を鎭め、乙の班に激勵して居れば、其間に又々甲の班がグラツクのである。

伊東知事、林田工場長、坂本地方課長、高野署長、小竹重役、天野社長の會議が開かれたのはこの動搖最中であつた。その會議の席へ悄然と現れたのは、爭議團の最高幹部、河部清七、近田道三だつた。

兩人が命令されたことは『濱松の治安を一日も早く回復するために添田案を支持せよ』であつた。

裏切者は元氣づき大びらに活動を始めた。『和協促進自發聯盟』が組織され、屈服の公然たる活動を起し『添田案支持』の聲が組織的な力となつた。

一方收監されて居る者の家庭に對しては、『吾々の方へ贊成すれば直ぐ釋放出來る』とまるで檢事局と約束まである樣なことまで云つて切崩す運動が起つた。

も早爭議團は挽回出來ないほどの狀態になり、且又非常に疲れても居つた。

斯くて拾收すべからざる中に、一問題が起つた。それは林田工場長の食言問題であるが、こゝでは省略する。

八月七日、添田氏は再び濱松に來た。翌日國光館に於ける悲壯な最後の大會は、一度は拒絕した添田案を以て解決することを決議した。そして同時に悲壯な解團式が行はれた。宣言は涙であつた。

樂器爭議はどこへ行つたか？

爭議は四月廿六日示威行列をなして會社を引

掲げて以來、百五日目の八月八日全く終了した。爭議團は『アヂト』なる××的組織が持ち、各班に××グループを作り、その緊密な××による働により幾度か襲ひかゝる彈壓、迫害による混亂を救ひ、優秀なる成績を擧げた。更に『アヂト』は××網を擴大し、その活動を通じて地方的、階級的連帶感情の××への氣運を××し、その萌芽を示すに至つた。その點につき、今稿を終らんとするに當り左の一節を讀んで見ることにする。

『爭議中にかの普通選擧制による我國最初の市議選擧が來た。地方『アヂト』(三田村のアヂト――筆者)はメンバーを動員して濱松合同の中に『選擧對策委員會』を設置せしめ、且つ濱松合同のイニシアチーブの下に『市議選擧協議會』を作り出した。この『協議會』が急速に出來上つたのは、各工場の××の活動殊に鐵道從業員組合所屬工場――濱松鐵道工場に××があつたからである。

それから爭議團と合同勞働に、所屬勞働者中の有權者調査を××した。問題はこれから起つた。

爭議團有權者調査表がとゞいた所を××がおそひ、それを押收して行つた。その報件を受けた『地方アヂト』は直に、この事件を××の勞働者に對する『選擧干涉』として彈劾し、普通選擧の××をバクロした。その彈劾文を起草すると共に、爭議團、組合のメンバーに××を發し、『選擧干涉彈劾運動』を××することを命じた。

『地方アヂト』は、××の勞働者農民の抗議運動を捲き起すことの××を力說し、『彈劾文』を全國の勞、農團體に送るとともに、特に無產者新聞には、この××の重要性を力說した手紙まで添へて送附した。

濱松では大變な問題となつた。勞働者の抗議運動に對して、ブル新聞は『普通選擧制最初の選擧干涉』として、大きな紙面を割いてこの事件を取扱つた。×××××新聞に釋明しなければならなかつた。

しかし我國のプロレタリアートはまだ、この事件を重大視する程成熟してゐなかつた。全國からの抗議運動は起らなかつたのである。そしてこの××組織の指導者連は、この事件の時にハツキリ次の如く言つた。

『かゝる運動が××するためには、今日こゝにあると同様な組織が全國各地に××されてゐなければ駄目だ』と。

彼等は明白に大衆的組織をとつたプロレタリアの××××を言つてゐるのである。』(小泉保太郎著左翼勞働組合運動三二九頁)

この最後の『指導者連』の言葉は、ほんとうを云へば主として三田村の言葉であり、彼れはこの言葉通りに、その後の彼れ自身を行動づけて行つてゐる。即ちかれが濱松刑務所を出獄し、當時第一次××事件の服役を終つて出所した渡邊政之輔氏等と交渉が起り、間もなく三田村は東京へ行つて××的な人物となつて行つた經路において、渡政等との×組織運動に參加してゐる。

斯くて濱松爭議に行はれたアヂト組織の××がどこへつゞいてゐるかゞ判ると思ふ。同爭議の第二期××は、その指導者をして、プロレタリアの×の結成を促進せしめる拍車となり、その××の核心となつたのである。

霞ヶ關人事大異動評

全く幣原の天下となる

刀吏公

先頃の外務省の外交官異動は近年にない大がゝりなものであつた。幣原がオラが外相の後を受けて、堂々と元の古巣へ舞ひ戻つた時、世間では、大異動を直ぐやるだらうと豫期したものである。といふのはオラが大將が柄にもない外相兼攝をやり通した爲め、外務省の人事も、彼の對支外交と同樣大脱線になつて居たからである。一體、近年の外務省は「石井、幣原カンパニー」などゝ謂はれる位この二人の系統勢力が根を張り、重大なポーストは大體この二人の直系傍系により占められてゐる觀があり、人事の異動も自らこの二人の合名會社(?)の定款によるといふ觀さへあつた。石井が大使の出稼せぎを永くしてゐる間に、最近十年は幣原を中心とした松平出淵などが自ら一系統となり、人事異動の手順が自然と出來上つてゐたやうなものだ。それが、オラが外相が乘りこんで來て、既定の定款による人事が一時は脱線して了つたのだから、幣原スクールの面々が當時面喰つた事は一通りでなかつた。

今度の異動で次官の吉田がイタリー大使に、アジア局長の有田がオランダ公使にやられるのは、オラが外相の脱線人事(幣原スクールから見て)を、えて引き戻すやうなものだ。出淵が駐米大使と決つて出て行く時、自分の後任に、聯盟の事務局長をしてゐた公使の佐藤を、はめようとして、當時の政務次官森格を說いて、オラが外相に進言したものだ。すると、オラが外相は「それも好いナア」と生返事をした丈けであつたが、スエーデン公使として行く許りになつてゐた吉田を任命して了つた。それから、政友會の山本(悌二郎)の弟である有田をアジア局長にし、この二人に外交を任せたといふやり方だから、外務省内が誰よりも先づ驚いたものだ。

○

幣原、松平、出淵などいふのは好くいへば重厚穩健な吏僚タイプで、自らそこに共通な型を造り出してゐる。これが、幣原の近年の異常な出世により勢力を得て來て居るから、この系統に屬してゐる者は霞ヶ關では幹部派といつた名稱を與へられ、他の連中で、肩合ひの違ふ硬骨漢、國策派、或は脱線組は非幹部派といふ事になつてゐる。自分からオン出た前の滿鐵副總裁で今代議士になつてゐる松岡洋右、同じくこないだチエッコ公使を辭めて滿鐵に入つた木村鋭一、本田熊太郎、今度ロシア大使に任命された廣田、それにこの吉田などは大體皆此のグループだ。

一體田中が吉田を次官にしたのは、吉田が牧野内府の女婿であるから、それに氣を配つてやつたものである事は言ふまでもない。吉田は土佐の男で、その家も親類筋も政友會の代議士が多い。尤も田中としてはそんな事は考慮の限りでなかつたかも知れないが、吉田は元來がお坊ちゃん式なところもあり、有田と一しよになり、オラが外相とも息の合ふと

ころがあつたが、支那に對し獨自交渉なるものをあの通りやり、イギリスを相當にいぢめつけたりして、幣原スクールにいはせると、支那に於ける日英協調を散々にして帝國の地位を孤立にして了つたといふのである。だが吉田としては牧野内府の女婿だからなんて言はれるのは、損なことで、可成り骨のある面白味もある人物である。

○

だが幣原が二年前に戻つて來てからは、次官といふのは名許りで、吉田には外交の仕事も人事も殆んどさせなかつたやうだ。それなら、早く轉任させたら好さゝうなものを、ソコが幣原の幣原たるところで、世間樣に對しても、(無論内府樣に對しても)遠慮に遠慮を重ねて、直ぐにも替へたいところを今日まで隱忍してゐたといふ次第だ。幣原は元來が非常な事務好きで、女といへば女房以外には知らないし、道樂といふものは何一つなく、英文を書くのが唯一のホッピーだといふので、元來當人自身が事務次官としては典型的な人物なのだから、何んにも用をさせない次官を一年や二年置いても少しも苦にならなかつたのである。吉田としては、こないだ迄奉天總領事をしてゐたのに、次官をした許りに、イタリーとはいへ大使になつたのは、あの年頃の外交官としては好いクジを引いたものだ。

吉田の後を襲つて、白耳義大使から聊か變則に次官になつて來る永井(松三)は松平、出淵と霞ヶ關の同期生で、三人は大てい同じやうな重さのポーストに就いて來たものである。三人が揃つて頭角をやゝ現はし出したのは十二三四年前からで、松平がシベリア出兵の時の外務省代表となり、出淵が米國代理大使となり、永井が英國の大使館參事官になつた。現在は三人とも大使になつてゐるが、永井の白耳義は他との振合ひが少々役不足といふので國際聯盟の帝國代表か何か一役別につけてある。この男は生眞面目で、純然たる吏僚タイプだから、幣原の次官としては、持つて來いだらう。出淵も大使に出る時、「自分と同期でなければ最適の後任者だ」と言つて居たが、さすがに遠慮して、推薦はしなかつた。出淵の出來ない事を幣原はさつさとやつて除けたワケで、永井を次官にして幣原スクールの陣容が堅くなつた事は爭へない。永井にして見れば、大使から次官になるのは降格だが、白耳義にこの儘居らされゝばそれなりけりで外交官商賣の元仕舞ひとなるのが、オン大いふ通り次官の番頭役を承つて置けば、今度はアメリカかイギリスあたりへ出られるチャンスがあるといふもの。恐らく、幣原もその位のことは考へての上の事だらう。

○

駐支公使に任命されさうになつて、支那側からカスを食はされ、宙に迷つて居た前トルコ大使の小幡(西吉)がドイツ大使になるのは、吉澤がフランス大使となつたのと同樣、レールを外れた任命だ。元來、小幡を支那公使にしようとした時、アグレマンなど正式にとる前に支那側の意向を探らなかつたのは石橋を叩いても渡らない式の幣原としては近頃の手ヌカリであつた。幣原が第二次外相に就任した時、たつた一つの大きな人事は、當時ロシア大使に内定してゐた佐分利を支那公使に任命した事であつた。幣原の佐分利信頼は中々深いものがあつた。實際佐分利は外柔内剛、しつかりとしたエライところがあり、晩年彼の人氣は、狹い範圍ではあるが、高くなつて來て居た。佐分利の自殺は、王世廷などは、當時の日支外交の犧牲だと言つてゐたさうだ。その意味に、佐分利が公使に任命されて

間もなく渡支し、南方の連中に會ひ、自分の對支方針の腹を決めて一旦歸國して幣原にその事を話すと、幣原と意見の重大な相違を見出したに違ひないといふのである。佐分利は實際、南方に非常な同情をなしてゐた。ところが、佐分利の自殺、その後へ例の二十一ヶ條問題の立役者の一人であつた小幡を公使にしようといふのだから、支那側が、幣原外交の硬化と見て、アグレマンをせぬといひ出したものだといふ消息通がある。何れにしても、あれで幣原の顔も潰れたが、小幡の顔は更に潰れた。そこで、ドイツ大使といふことでケリをつけたものである。小幡は幣原よりは二期許りの後輩で、頑固屋であり、仲々變つてゐる。寺内内閣の頃、彼は政務局にゐたが、寺内總理に外交方針につき楯をついて其れが容れられぬとて、役所に出なかつたといふ話もある。しかし、何んと言つてももう少々時代離れがして居り、外務省の本流からはこれを最後に離れて行く組の一人だ。

支那公使任命はそんなワケでラチがあかず、永井長舌次官をやつたのも、その邊を何んとか旨く話をつけさせる爲めであつたが、永井も日本の田舍の選擧民のところへ行つて、場當り演說をやることは勝手が違ひ、あのやうなヘマをやり續け、虻蜂とらずで踊るやうな始末である。重光(葵)が上海の總領事として支那公使代理になつたのは今迄もやらされてゐた事だが、若いこの男としては、大した拔擢である。

○

條約局長の松永(直吉)のオランダ公使は拾ひモノである。オランダ公使といふポーストは外務省では好いポーストで、あすこからは、大抵いゝ處へ廻はされる。松永を條約局長にしたのは出淵が次官の時で、出淵自身は自慢であつたが、その後の成績は香しくなかつた。例の田中内閣の土壇にヒヾの入つたやうな大騷ぎを起した「イン・ザ・ネーム・オブ・ザ・ピープルス」(人民の名に於て)問題にしても、出淵と松永の責任だ。さすがに、出淵は當時アメリカから、「必要ならいつでも辭表を差し出す」と言ひ寄越したさうだ。ステートペーパー(條約書)起草では、死んだ珍田以來外務省の第一人者として知られてゐる幣原の代になつてからでも、こないだのロンドン條約文では畑違ひの樞密院からあの通り突つこまれて、苦しい答辯をしてゐる。近頃の外務省はテクニカル・ミステークの大きいのを可成りやる。イタリー大使から松永の後任に一局長として松田(道一)が歸つて來るのは、永井(松三)の次官よりも目立つ降格だが、恐らく幣原としては、近頃右のやうな外交文書のテクニカル・ミステークが多過ぎるので、最適任者として松田に目星をつけて口說いた結末だらう。松田は地味な溫厚な人物で、國際條約の方許りでなく内地の法制にも通じて居るから、適任といふ點に間違ひはない。それにしても大使から局長は少々變則過ぎるやうだから、或はこれも一時の方便かも知れないといふ者もある。

○

情報部長の齋藤(博)が英國の大使館參事官になり、その下にゐた白鳥(敏夫)が部長になつたのも一寸面白い異動である。この二人は今の外務省の靑年組の仲間では英語に最も熟練した方で、相當二人とも羽根を伸しかけて居るのは、「ヒデハラ、イングリッシ、スクール」ともあだ名されてゐる近頃の外務省としては當り前のことだといふ者もある。しかしそれはあながち當つてゐない。實は二人とも幣原のタイプには餘程の違い方だ。齋藤は一

見貧公子然とした、如才のない男のやうだが、どこか人を食つたやうな圖太さも腹の中に持つて居り、見かけのやうな優男ではない。酒も飲み歩けば議論でも國策論をやる。たしか、政友會内閣の時は、吉田からのヒキで紐育總領事から歸つて來たもので、當時歐米局長といふ話もあつたとかいふほど、吉田とは好い仲だつた。英語がよく出來るので、方々から引つぱり凧の觀があり、今度のイギリス行きは、二年前から松平大使から懇望されて居たものだ。白鳥は石井の甥だが、この男は齋藤以上にも人を食つてゐるところがあり、ゾボラのやうでどこか締つてゐるやうでもあり、遊ぶやうな勉强するやうな、不得要領なところと郷里上總の山家育ちの野趣を持つてゐるところが、この男の好いところだ。二人とも幣原スクールとは即かず離れずだが、將來はどつちものして行く有望組だ。

○

世間も當人自身も多年最適任の支那公使として期待されてゐた廣田がオランダ公使からロシア大使に榮轉したのは最も面白い。廣田は外務省内に於ける異數の國粹家(?)で、玄洋社型のところがあり、外國語などは極めて不得手だから、輸出向きではない。田中内閣の時、次官に推す者もあつたが、それも實現されず、不遇の形でオランダへ二三年行つてゐた。今度、幣原は彼れを小幡のいきさつの後で支那公使にと腹案を立てたらしいが、彼は自分から、ロシアを買つて出たものである。彼は多年の日露國交恢復論者で、例のヨツフエが來た時、情報部長として松平、川上の參謀格として働き、歐米局長としては、芳澤カラハンの日露通商條約をやらせたもので、あの後で自分でロシア大使に行き度かつた位のものであつた。幣原としては、アグレマン問題で味噌をつけて居る支那公使を彼にやらせて、國内の人氣をいくらかでも緩和したかつたらしいが、廣田は目先きを利かして、今のやうな支那へ行つても何んにも出來ないし、對支問題で幣原との意見も平常から合つてゐないのだから、むしろ「明日の國」であるロシアへ方向替へをしたものらしい。歐米局長としてポーランド公使から歸つて來る松島(肇)は、死んだ本野の下に帝政ロシアに二十年も居り、それから又ポーランドに居たもので、彼の外交官生活はロシアで終始してゐるワケだ。それが歐米局長にしたのは、對露問題を廣田と二人でしつかりやらせる陣立とも見られる。彼は吉田より一期後で、豪放な素質があり、今でも次官級といふところである。

○

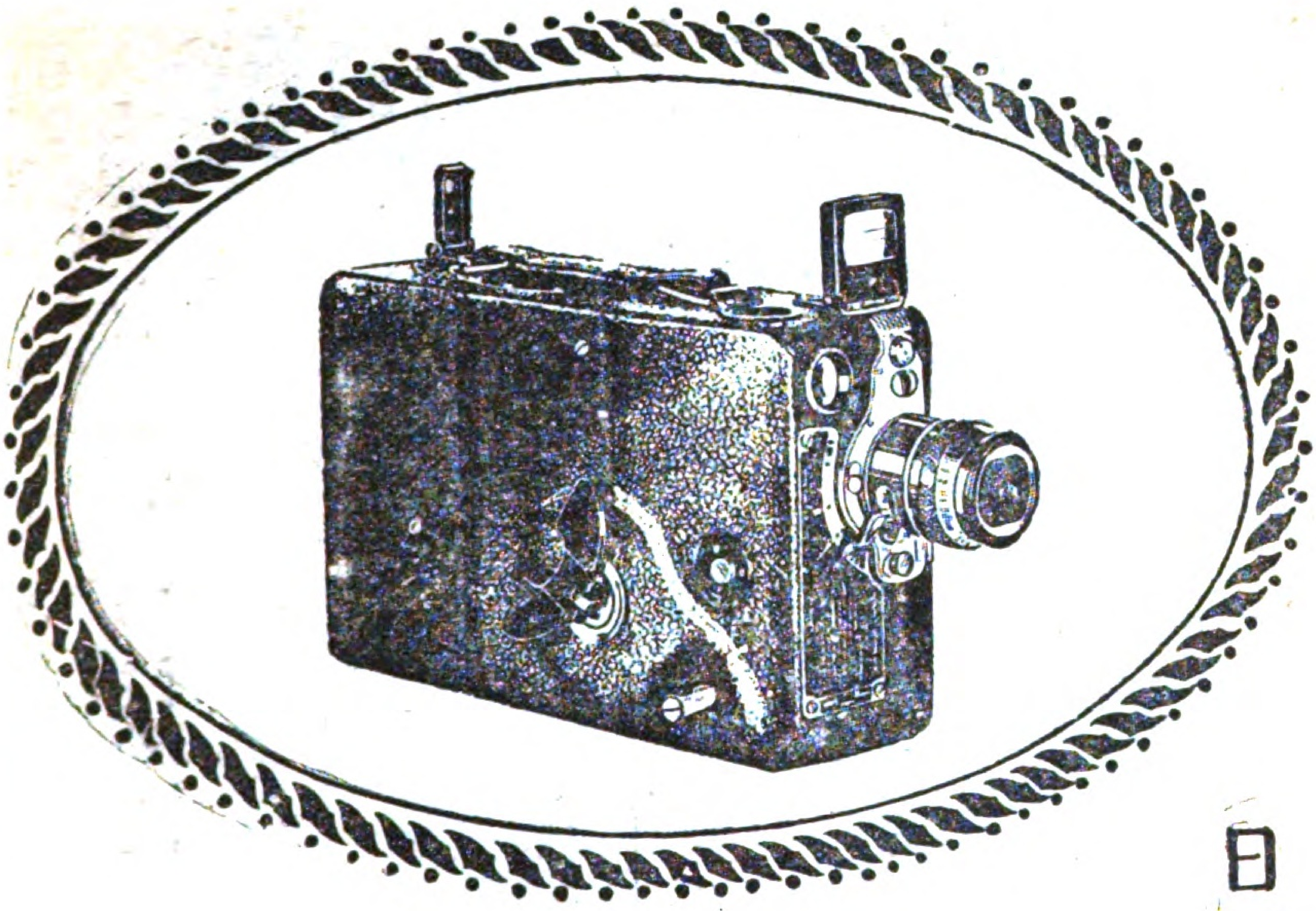
歐米局長からチエッコ公使に出て行く堀田(正昭)は第一次幣原レヂームの時に、人事課長として外國稼ぎから呼び戻された程だから、幣原の氣受けは好い方だ。寒山拾得の一人のやうな顏をして、落ちついた好漢だが派手氣が少しもない。チエッコ行は當人としては大して乘氣でもないかも知れないが、彼に限らず、東京に居れば高等腰辨で借家住ひしてゐるのが、一國の公使として乘りこんで行つて分に過ぎた官邸の主人公となるのだから、皆んなもう一度思ひ返へして見ると、「お互ひにさう贅澤な事は言へない」といふことになる。有田の後の谷(正之)は、小幣原とでもいひ度い、幣原の子飼ひで、幣原がオランダ公使の時外交官補としてはじめて異人の國へ行き、公文の書き方のイの一番から幣原から習つたといふのだから、幣原としてはほんとうの愛弟子で、氣が置けず、使ひいゝといふワケだらうが、何しろ堅實第一の好い女房

役である。

○

こんなやうなワケで今度の異動で最も目立つのは局長級と大公使級との入れ替へで、大公使が戻つて局長となるのは、最近重きをなさなくなつた局長の地位をウンと重くするものであり、又比較的若い局長等を大公使にして、相當彼等を好い氣持ちにさせてゐる。幣原自身の好惡からいへば、恐らくもつと左遷させ度い者、拔擢し度い者、辭めさせ度い者などあつた筈だが、彼は性來の溫厚篤實—惡くいへば臆病と世間の氣兼ねから、思ひ存分にはやつて居ないで、誰にも好かれと苦心してゐる。併し、要所要所にはチヤンと自分の直系をはめてゐる。

だが、かうした人事異動の跡を局外から見れば、狹い外務畑許りから一國の代表を擇ぶといふ事の無理が今更ら思はれる。十一二年前までは之等書記官とか課長とかいつた連中が、みんな公使級になつたり大使になつたりしてゐる。つまり、一國の代表といふものが、吏僚の職業化して了つてこんな大きな人事異動にも別段新しい生彩は殆んどない。尤も外交といふものが殆んどロシアと支那だけになつて了つて、他は一種の交際官になつて居る現在では、形式だけの大使公使で十分間に合ふのだから、これでも好いといへば好いワケかも知れない。要するに、外務省は幣原の天下となつたのである。往年の海軍が山本權兵衞とシノニムであつたやうにだ。



殺人都市シカゴ

清澤洌

1.

シカゴに着いた翌日、ホテルで新聞を擴げてみると、私は直ぐそこの名物に打ち當つたのを發見した。『世界最大の新聞』をその題字下に使つて看板にしてゐるシカゴ・トリブユン紙の記者が、昨日の白晝、しかも停車場に通ずる大通りで殺されたといふのである。この記者はリングルといつて長い事、警察及び下街の方面を受け持つてゐて、社會部記者として顔きゝであるが、その書いたものが無頼漢團の怒りに觸れ、かれ等は例によつて殺人者を差しむけて殺さしたといふのが、各新聞に現はれた筋である。

シカゴではギャング間の殺人沙汰などは、あの有名なストック・ヤードで牛が何疋殺されたといふほどの感興もない。私は汽車の中で、ある雜誌の挿話を讀んだのを想出した。

——プルマンの寢臺列車が進行してゐると、窓外でピストルの音が響いた。婦人の乘客は蒼くなつて黒人のポーターに聞いた。

「強盜團が襲來したのじやないの」

ポーター君は平然として「いゝえ、御心配に及びません、汽車がシカゴの町に這入つただけなんですよ」——

併しその珍らしくない殺人沙汰も、ギヤング以外の人間を殺したといふことから意外の注意をひいた。殊に新聞は『これ醜團が一般公衆に對して挑戰するものである、よろしい、賣られた喧嘩なら買はう』といきり立つた。自分の尻を踏まれると、直ぐ公衆とか輿論とかを持ち出して怒りまはすのは、なにも日本だけの現象ではない。

ハースト系の新聞が加害者逮捕に對して一萬五千ドルの賞金をかけると、當のトリブユンも直ちにこれに續いた。懸賞金は二三日の内に五萬五千ドルに上つた。新聞の鋭鋒は自然に犯人を檢擧しえない檢事局や警察にむけられ、警察署長以下幹部は辭職した。

かくしてシカゴの朝野が、その醜團王國の絶滅を期して氣勢があがつてゐる際に、皮肉なことには市中には毎日殺人事件が繰り返されてゐた。また新聞では『模範的市民』である被害者リングルが、實はギャングと密接な交渉があつて、多額の給與を受けて居り、一個の俸給生活者であるかれが、ミシガン湖畔に別莊を有して堂々たる生活をしてゐたことの噂なども聞えて來た。

トリブユン紙も、たまらなくなつて『結果がどうならうとも、リングルとギャングの關係について徹底的に調査する』と、公平なる調査員をあげて調査を開始したのであつた。

その結果は噂は間違つてゐなかつた。かれはギャングの巨頭連——ことに米國の罪惡王

といはれるアル・ケポーンなどと聯絡を行し新聞記者の肩書を利用して警察署長や、市の吏員などは人形の帽子を代へるやうに自由にしてゐたことが分つた。

『職に仆れた』リングルを庇ふ心持に發したシカゴの諸新聞の論調は、いつの間にか、白晝殺人團が横行するシカゴの無政府狀態を、どうにかせねばならぬといふ點に變つた。

2

現在、シカゴや紐育には殺人業者に對する特別な洋服を造ることを業として居るものがある。普通のポケットでは、急場の間にあはないので、内側を皮にして直ぐ手の屆く個處につけてある。

今から餘程前に殺されたオバニオンといふ親分は、愛想のいゝ男で、誰に逢つても握手をしたり、肩を叩いたりしてニコポンを發揮した。併しかれは決して兩方の手を一緒に用ひることはなくて、どんな場合でも一方の手だけは自由にしてゐた。この謎はかれが殺された後で解けた。かれの洋服や外套には三つのポケットがあつて、それに、一つゞつピストルが入れてあつた。この三つのポケットをつけて、しかも最新流行に見せるのが、洋服屋として技術を要するところで、それがまた專門家を必要とするところでもあるのだ。

特別な洋服を着るかれ等は、特別な自動車をも持つて居る。シカゴ切つての大親分アル・ケポンの自動車は重量七噸もあつて、普通自動車が三噸であるのに比すれば正に二倍以上の重さで、少し大袈裟にいへば小城が動いてゐるやうである。これは裝甲自動車であるからで、周圍に使つてある硝子はブレット・プルーフ――砲彈に對する保證つきのものである。かれはこの自動車を、特に自動車會社に命じて造らした。

一九二五年一月に、かれがシカゴの大通りステート街を自動車で疾驅してゐると、カーテンを下し切つた――謂はば覆面の自動車が擦れ違ひ樣に、機關銃で砲彈を浴せかけた。幸ひにかれはこの時、その自動車に乘つてゐなかつたが、運轉手は背後に負傷し、同乘者二人は床に横臥せになつたまゝ助かつた。裝甲自動車を造らしたのはこの經驗によつてゞある。

こう警戒してもまだ安心がならぬ。昨年セント・バレンチン日に、モランといふ親分の身内七人を機關銃で殺した前後には、この裝甲自動車の前後に、二臺の自動車を從へ、それには四臺の『魚形水雷』……この仲間では速射機關銃をそう呼んでゐる……を搭載してゐた。今でもギャング間の戰爭が始まつて風雲が急を告げると、これだけの注意はとるのである。

かれがまた芝居に行く時などは、シーツを八つから十買ふ。そして自分の周圍に物凄い連中をおいて、警戒の任に當らせる。この連中だつて道樂からこんな危險な仕事をしてゐるのでなくて、かれ等の俸給は大體に一週間百弗、一ケ月に四百弗は下らない。

一方、ギャングに對抗するためには機關銃を備へてゐて、他方官憲に對しては、賄賂をその武器とするのである。かれの唯一の仕事は酒の密賣と賭博であるが、これからあがる收入は一九二六年度に七千萬ドルであつた。これは合衆國地方檢事オルセンが勇氣をふるつて調査した結果の數字であるが、昨年、ケポーンが自から語つたところでは、かれは官

憲の「保護」を受けるために、シカゴだけで三千萬弗を使つたといふ。

シカゴの殺人犯人があがつたら、それこそ寧ろ不思議な例外である。

3.

殺人の物語りをする前に、シカゴの罪惡の內容を語つてをかう。

シカゴ名物の犯罪は大體二つに分つことができる。一つは無論禁酒法を中心にする無賴漢團の殺人であるが、この外に過去二三ケ年以來、脅喝團が出て來て、商人をゆすつて金をとることが激しくなつた。商人にしてその要求に應じないものは、窓を破つたり、ダイナマイトを爆發させたり、配達人を擲つたりして、商賣を邪魔するのである。元を洗へば同じ幹になつた枝であり、たぐつてみれば同じ源に達するが、併し現在においては明白に異なる存在である。

この脅喝團（racketeer）が出て來てからシカゴでは殺人の外に、爆彈事件が非常に多くなつた。試みに警察發表のものを見ると

一九二〇年	五一件
一九二一年	六〇
一九二二年	六九
一九二五年	一一三
一九二七年	一〇八
一九二八年	一一六

と累增して來てゐる。

更に本家の殺人數を見ると、その數はもつと多い。卽ち

一九二六年	三六六
一九二七年	三七九
一九二八年	三九九
一九二九年（同年六月一日まで）	一四七

といふことになつてゐるが、これは檢屍官が殺人と宣告を下したものに限るので、實際の數はこれより多かろう。

この殺人事件の處罰がシカゴ一流の數字を示してゐて、同市から發行される册子や記事の中には殆んど載せられて居らぬ。一九二六年には七十人の犯人（三百六十六件の中から）が有罪の宣告を受けたが、その內死刑に處せられたものは八人である。一九二七年には八十七人有罪になり死刑者三人、一九二八年には七十七人の內死刑者皆無。併しこの有罪の決定者がギャングの一味だと思へば間違ひであつて、これ等は醉つて友人を殺したり、警官を罵つて射擊したりした者にすぎず、謂はゞ小さい蠅である。一九二二年以來、ギャングの者は一人として死刑に處せられたことがない。

シカゴの殺人の代價は五十弗以上である。何人かがある者を失きものにしようと思へば——かれ等の仲間ではこれを"Put on the spot"とか"take for a ride"とかといつてゐる——百弗以內で依賴することができる。習慣や名前、特長を聞いてをいて、かれは容易にその仕事を果すのだ。

もつとも人間の生命でもピンからキリまである。新聞記者を殺すのには一千弗ぐらゐかゝるだらうし、實業家は五千弗、市の高官は一萬弗、大會社の社長になると五萬弗乃至十萬弗かゝる。そしてかうした大仕事には殺人者をニューヨークか、デトロイトから連れて來るのである。殺した後は大概つかまらないのだから、その金は丸儲けだ。

併しこゝでシカゴのために一應辯明してをきたいのは、この犯罪成績は何もシカゴだけ

ではないことである。ニューヨーク州の犯罪調査委員會は、今から五ヶ年以前に種々なる批難に鑑みて紐育市の犯罪狀態を調査したことがあつた。これによると一九二五年に紐育の警察は一萬九千四百六十八人を拘引し、この内から一分九厘七毛を放免して――九割八分〇三毛を警察裁判所にまはした。この裁判所でその内の五割六分九厘一毛――半分以上だ――を放免し四割一分一厘二毛を大陪審官に送つた。この陪審官で一割二分二厘四毛を放免し、いよ／＼高級裁判所に送つたのは二割八分某しである。かうして最後の模樣を見ると、刑に處せられたのは一割〇二厘七毛であつて、結局十人の拘引者の内九人までは放免されたのである。

殊に殺人事件の如きは、犯人として拘引された者十六人の内一人だけが有罪となつたにすぎず、その委員會も流石に驚いて『職業的犯罪者はニューヨーク州を安全地帶とするであろう』と指摘してゐる。

後で論じうると思ふが、米國新産業主義が始まつて以來、混迷、かつ有力なる經濟的、社會的勢力が、押えらるゝことなく進んで來た不可避なる結末である。

4.

殺人戰は餘程以前からあつたけれども、その正體をつかむためには一九二四年のオバニエンの殺害から書き出していゝであらう。

オバニエンはその頃、シカゴの北部の地盤を有して飛ぶ鳥も落す勢であつた。『かれの手が觸れゝば何でも金になる、金にならない場合は血になる』といはれたほどで、二十八歳のかれは――ギャングの親分はみんな不思議に歳が若い――ドシ／＼羽をのして行つた。

當時他の地盤でかれと對立するものにトリオ及びケポーンがあつたが、彼等は警官に送る賄賂の額が餘りに多いといふので、かれにその値下げの協定を申し込んで來た。

『お前らにはお前等の考へがあろうが、おれにはおれの考へがあらア、こゝでお互ひに手を切らうじやねいか』

かうかれは斷つた。かれは平生、イタリー人のギャングを馬鹿にしてゐた。かれ自身がアイリッシュ種なのが異にかゝつて、それが時々行動に現はれた。

シカゴそのものが外國人の寄合町だが、その内でも酒の密造や賭博常習のギャングには外國人が多い。その總數の九割五分までは外國人で、その九割五分の内、八割五分まではイタリー人及びシシリー人（シシリー島に生れたイタリー人のことだが、非常に有力だから別にしておく）で、殘る一割は外國生れの猶太人である。オバニオンはこの事實を癪なことに思つてゐた。

このかれの行動が酬ひを受ける時が來た。かれは一九二四年の夏、自分の經營する花屋にゐたが、そこに三人の人が這入つて來た。

『先刻、電話をかけて來たのは君だネ。花がいるんだつて？』

と一人の男と握手をしてゐると、突然ピストルの音がして六發が、かれの身體に食ひ込んだ。犯人はその場から逃げて、誰も證人になるものもない。犯人がかれの知人であつたらうと思はれるのは、かれが一方の手に花屋用の鋏を持つてゐて、他方の手で握手をしたことで、餘程油斷をしなければ、そんな眞似をする男ではない。始めての人なら握手をしたから、一つの手はピストルの這入つてゐる

ケツトに入つてゐる筈だ……警察でそういふ鑑定はしたが、元より犯人が分る筈はなかつた。この白晝の事件は暗から暗に葬られてしまつた。

かれの相棒で親友であるルイス・アルテリーといふ男が『誰がオパニオンを殺したか知れないが、おれの前に出て來い。いつでも、どこでもお望みの場處でおれも死んでやる代りに對手も二三人叩き切つてやる。おれの都合はマヂソン街とステート街の角がいゝんだ』と啖呵を切つた。それは人通りの繁しい場所である。

四ケ年經たない内に、その場所の近くでピストルの果し合ひがあつてかれは殺された。

5.

親分が殺されて、その乾兒が敵討ちを思ひ立つのは、なにも日本の俠客だけの美點ではない。オパニオンの一味の者は、その下手人が對立するトリオであることに疑ひを持たなかつた。

この事があつてからトリオはシカゴから姿を隱した。警官の信ずるところによると刺客はかれを後から追ひかけて一緒に旅行したけれども、警戒が嚴重で手を下すことができなかつた。

機會は來た。翌年(一九二五年)一月廿四日の朝、かれが家に入らうとするところを二人の男がかれを射撃した。その彈丸は頸のところに適つたが、更に續いて發射しようとしたのを何に驚いたか、そのまゝに逃げ失せた。

トリオは直ちに病院に這入つた。

私は始めにシカゴではギヤング用の特別な洋服があるといつた。それと同時にシカゴではこの連中の使ふ彈丸は一般のものとは違ふそうである。かれ等は彈丸を玉葱と一緒に煮て、その後でにんにく(ガーリツク)でこすのである。かうすれば彈丸が命中した場合に毒を生じて、輕傷であつても對手を殺すことが出來るのである。

この醫學的結果の眞否はどうであつても、とに角トリオはその傷のために長く惱んだ。かれは病院にあつても、その安全を信じ得ず、寢臺を窓際、フアイヤー・エスケープ等の近く——外部から近より得る場所にをくことを拒絶した。

かれは警官に對して、絶對に犯人の名前や容貌は語らなかつた。この事はギヤングの間に嚴存する道德律であつて、現に私がシカゴに滯在する間に、一週間に十四五名の殺人事件があつて、明瞭に犯人を知らねばならぬ事情にありながら——そして當人は死に瀕して最後の息を引きとる場合にあり乍ら、決して加害者の名前をいはないのが常であつた。

かれ自身は犯人の名を語らなかつたけれども、その犯人が他から知れて來た。その時、その近くに居つた十七歳の青年——掃除人の息子だ——が現場を見てゐた。警察では嫌疑者を九人拘引して、これを行列にして歩かせ、隣りの部屋から小穴を通してその青年に覗かせた。

『どれだか分るか』、警察署長は聞いた。

『エイ、五人目の男です』、青年は答へた。

それは殺された親方オパニオンを繼いだモランであつた。

も一度、警官はかれ等を他の部屋に移して、行列をさせてみた。今度はモランを四人目にをいた。

『四人目の男です』。この青年の眼は狂はなか

つた。これよりさき、この青年は新聞に出た葬式の寫眞を見てもモランが犯人であることをいつた。ギャングの親則として、かれ等は葬式の寫眞などをとることを禁じてゐるのはかういふことがあるからなのだ。

かうしてモランは裁判に移されることになつたが、判事ウイリアム・リンゼーは五千弗の保證金で、かれを許した。警察署から、も少し證據を蒐集するまで拘留しておくことを要求されたに拘はらず。

6.

一方の親分トリオは彈丸を見舞はれ、生死の境を往來して、さすがにおびへた。それに身體もよくない。かれは故郷であるイタリーに歸りたかつた。そこで兄弟分であるケポーンに相談すると、かれは三臺の自動車に機關銃をのせて、トリオを取卷かせ、バッファローから紐育に出で、出帆の間際の汽船をとらへた。四人の護衛がかれと共に行つた。

今かれはイタリーのゼノアの近くに居る。百萬弗以上を持つて歸つたので、その金で何人かの用心棒を周圍において居る。

生命をつけねらつたトリオが、ひそかにイタリーに逃げたと聞いて、一方のヘイミー・ワイス（これが親分になつてゐた）は非常に怒つた。一味の者を三十臺の自動車にのせ、これに何れも機關銃を備へつけて、イタリー人團の本據であるシセロに暴れ込み、ケポーン一黨の有してゐる建物には悉く砲彈を打ち込んだ。

この猛勇のワイスもその後、十二個の彈丸を身體に射ち込まれて殺された。その後を繼いで親分になつたドラッチは三ケ月しか生きてゐなかつた。その後に來たのが前にいつたモランである、かれは二ケ年間に周圍の手下二十人を殺されたが、かれ自身はなほ安全である。ケポーンの一派はかれの生命が欲しかつた。昨年のヴアレンタインHに、七名の者を並べておいて、後から一千發の機關銃を發して殺したのも、その中にかれがあることを豫想したからである。

過去六ケ年間にシカゴには、頭株の殺された者だけ、少なくとも八十名はある。これは普通の密賣者や『小者』を除いてのことであるが、この内裁判にまで持ち來たつたものが、たゞ四人であり、その一人もが有罪になつて居らない。やゝ有罪になりかゝつたものがドガチーといふ男で、これはシセロ（イタリー人區域）の選擧の時にタンクルといふ者を殺したのだが、多數の證人があつて逃れられなかつた。併しこれも結局無罪になつたが、それから四ケ月の後、檢事のマクスウインギンと二人で歩いてゐるところを、二人ながら殺されてしまつた。

かうした事を書けば無限にあつて止まるところを知らないが、こゝに一應注意しておきたいのは、この連中がいつでもポケットに莫大な現金を持つてゐることである。コロシモといふ親分が殺された時には、一千弗紙幣で十五萬ドルを持つてゐた筈だが、これがなかつた。ワイスが機關銃で殺された時にはポケットに五千三百弗あり、ゲンナは三萬弗持つてゐた。かうして殺された巨頭七十人のポケット・マネーが五十萬弗に上るといふのだから、その金持振りが分るであらう。

今一つの事實は、この連中が飽くまで大膽でなければならぬことである。かれ等の口調でいへば仕事をして來た後で、平氣で大きな

ビフテキを食ふ度胸がなければならぬ。『仕事』の後で昂奮するやうな者があれば、これは仲間の秘密のために危險とあつて、かれ自身が料理され、冷たい身體が田舍の泥溝の中からでも發見される運命になるのである。

かれ等はまた仲間を賣つたといふやうな嫌疑がある場合には拷問することも平氣である。足の裏を燒いたり、指を切つたり、トラックの後につけて引き廻したり、赤熱のアイロンをつきつけたりする類である。

昨年(一九二九年)一月廿三日の夜、ボロメンタなるギャングの一人を連れ出した。かれ等はこれを生きながらに燒き殺すつもりで自動車の中に連れ込み、その着物をぬがせアルコールに漬けた着物に着代へさせた。かれはあらん限りの悲鳴をあげたので、通行人の注意をひき、それがギャングの恐怖心をそゝつた。かれ等はピストル二發を以てこれを殺し、死骸をハルステッド街とグランド街の角に捨てた。

それは當時の新聞にも詳しくのつてゐたところである。

7.

このシカゴのギャング王國に君臨してゐるのはアル・ケポーン (Al. Capone) といつて本年三十三歳になる男で、シカゴの半分は市長トンプソンが治し殘る半分はケポーンが治めるといはれてゐる。

シカゴを中心にする土地で殺人戰が起ると、新聞で傳へられるのはまづかれの名である。警察の記錄によると過去五ケ年間に、かれが直接に手を下したか、少なくともかれが關係を有する殺人事件が二百二十六件を有するといはれてゐる。しかもかれは一回もこれに對して刑を受けたことはない。昨年、暫らく砲器携帶罪の故にペンシルバニアの刑務所に入つたことはあるが、これは對手のギャングの襲擊をのがれるためで、かれは刑務所の中からその王國を指揮してゐた。シカゴの警察ではかれの歸ることを極力反對したが、かれはこれを一笑に附して、飛行機で乘り込んで來た。

かれはイタリー系ではあるが、紐育のブルックリンに生れた。二十一歳の時まで一度も拘引されたことがなかつたといふのであるから、この近隣としては成績のいゝ方である。ある時、玉突き場で、ナイフを持つて打つてかゝる對手を、拳骨でなぐり飛ばし、殺してしまつたと思ひ込んで、從兄の世話でシカゴの親分トリオの用心棒になつたのが、『出世』の始まりである。

かれは小學校を四年まで行つただけだから教育はないけれども度胸はある。折しもアメリカ禁酒法が施かれて、酒が公然賣れなくなつたのが、かれ等にとつてはつけ目であつた。かれ等は自身酒をつくる外、カナダから紐育から密輸入した。この繩張りの關係から、シカゴの內部で、またデトロイトの同じ種類のギャングと、常に大袈裟な機關銃戰があるが、こゝでは述べない。

法律を冒して酒を密賣するのであるから、その利益は莫大である。この密賣酒屋をスピーク・イージー(そつと喋れ)といつてゐるが、原價六弗の一ガロンの酒が四十弗になるといふ。かう利益があると警官や判事に賄賂できるのは無論で、禁酒官エロリー (E. O. Yello-[illegible]) は二十五萬弗を提供されたといひ、シ

カゴの警察部長ゴリンス(Morgan Collins)は、見逃してくれさへすれば一樽五弗づゝで一日百樽平均(一日約一千弗)を提供され、また合衆國次席地方檢事ワウ(William Waugh)は裁判を開廷せぬやうにしてくれゝば五萬弗を提供する旨申込まれたといつてゐる。以上はいづれも收賄しなかつた人々。他の多くは收賄してゐるのは公然の祕密である。

普通の國において無頼漢は、醜業婦賭博と聯絡してゐる。これによつて得る收入は少なくはないが、併し米國の酒の密賣によつて得る巨額に比すれば、物の數ではないのである。米國のギャングが社會的、政治的に他國において到底想像もつかないほどの大きな存在であるのは、禁酒法の副産物であるといつてい丶。かれ等は現職の人々を買收するのは無論であるが、その上に選擧場裡において投票を書代へたり、奪ひあつたり、脅喝によつて書かせたりすることぐらゐは不氣である。

このギャング團の巨頭アル・ケポーン……新聞では Scarface Al といつてゐるが、これはかれの顔に傷痕があるからで、一味の者はかれを Big Fellow と呼んでゐる……は、今フロリダ州マイアミの白砂水を嚙んで美しい邊に廣大な別莊を持つてゐる。皮肉なことはその別莊は大統領フーヴァのそれと軒を並べてゐることで、大統領が犯罪委員會を造つて法律勵行を考へてゐる時に、隣りでは如何にしてこれを破らんかに苦心してゐるのだ。

8.

殺人團の一面を知り得たわれ等は、最後に最近の現象である恐脅團——日本でいふと壯士團のことに言及しないと完全であるといへない。

壯士團的行爲は昔しのブラックメールを近代的な方法で行つてゐるにすぎない。卽ちある商店に行つて『保護』乃至は『勞働組合』の名を以て、毎月一定の額を要求する。これに應じないが最後、ダイナマイトを投げなり、窓をこはしたりして、この商賣を邪魔するのである。この行爲を Racket といひ、Racketeering とか Racketeer とかといふ字がそれから來て居るが、これは極めて新しい文字である。

この方法を行ふのに、一人で行つて直接に金をねだるやうな智慧のないことはしない。たとへばまづ勞働組合の管理を奪ひとる。たとへば洗濯屋から毎月の奉納をさせようと思へば、洗濯屋と配達組合を自分のものとする。うまいことをいつて聞かない場合には、ぶん撲るか、二三人 ride につれて行つて、あの世に旅立たせるのだから事は簡單である。場合によつては、新しい勞働組合を起す。これが出來あがると、洗濯屋に行つて、毎月二十弗なり三十弗なりの『寄附』を申しつける。應ずるものはよし、應じないと、劇藥を洗濯物に投げかけたり、ダイナマイトをしかけたりすることは前に述べた通り。かうすると九割九分までは要求に應じて、客の方の値をさげることにするのである。

それなら警官に訴へたらいゝではないかといはうが、これは事實を知らないもので、かれ等がこの醜團の一員であつたり、かりにかれが眞面目であつても、一人の力を以てどうにもなるものではない、況んやギャングは一團になつて金が幾らでもあり、警官の生命をとるくらゐは朝飯前である。ラケッチアは野火のやうに擴がりつゝある。

本年四月廿日のシカゴ・トルブユン紙は、シカゴの勞働組合が醜團の手に落ちつゝあることを報じて

『シカゴに於ける勞働組合は無頼漢團の手に渡りつゝあるといふ事實について勞働組合は深憂をいだいてゐる。すでに最も有力なる數個の組合は完全にアルフオース・ケポーン及び一黨の手に落ちてゐる。他の重なる組合も醜團の暴擧を避けるために毎月金を送つてゐる』

と書き始めて、建築業などが特にこの危險に面してゐることを報じ、しかし政治家などとの聯絡があるから、どうにもならない計りでなく、勞働組合の領袖でケポーンの援助を受けに行くものが澤山あるとて悲觀的な意見を書いて居る。

見よ、政治と司法を自由にする罪惡王ケポーンは、勞働組合をもわがものとして來てゐるのだ。そしてかれは三十三歳の青年である。

* * * *

これ等の理由はどこにあるか。

第一には戰爭の影響であることは疑はれない。戰爭はアメリカ人に鐵砲を以て人命を奪ふことを大架裟に教へた。現に巨頭ケポーンは世界大戰に參加し、そこで機關銃の用法を教はつて、それをかれの『商賣』に利用することに氣づいたのである。

第二には無論禁酒法である。アメリカの禁酒法がなければ、これほど強力な醜團の存在が可能であるわけはない。禁酒法は醸酒といふ大きな產業を暗黑世界に追ひこんで、そこで強力な一團の努力を造らしてしまつた。殊にシカゴの如く十人の內九人までは禁酒法を破つて、酒の需要が非常に多いところにおいて然りである。

第三にはアメリカは戰前に外國移民について何等の制限を加へず、自由に入國せしめたからである。この醜團が多くイタリア人であり、これにポーランド人、ユダヤ人などが交つてゐる。かれ等は移民の兩親を持つた米國生れか、外國から來た連中で、英語も滿足に話せないものがある。

第四には米國の都市が急激なる發達をとげたゝめ、社會的秩序なく、そこに生じた雜草だともいへる。たとへばシカゴは現在四百萬の人口を有するが、その歷史を見れば百年に滿たないのである。一八八〇年――今から五十年前には人口五十萬、それから二十年後の一九〇〇年には百七十萬人になつてゐる。かうした急激な發展の最中にあつて、その社會狀態を顧みる餘地があらうか。物質文明と機械的進歩は、精神的、社會的方面を置き去りにして行つたのである。

併したゞこれはシカゴばかりではない。ニユーヨークでもピッツバーグでもデトロイトでも、米國の都市はその政治的腐敗の故に破產せんとしてゐる。アメリカにとつて最も大きな將來の問題はこれである。

附記　ここに並べた數字その他の事實は、最も信據すべき十數種の材料から得たもので元より誇張はない。なほシカゴが敎員や消防夫警官の給料が支拂えず、破產に瀕し、サイラス・ストローン氏等市民有力者の奔走によつて七千四百萬弗の市債を發行して漸く一時を切りぬけた市政的方面などは、こゝでは觸れる暇はなかつた。

革命前夜の印度

武藤丸楠

戰後世界の所謂『第三期』の最も尖鋭化せる局面は、廣大な植民地大衆をとらへつゝある嵐の如き××の奔流の中に、何にもまして明瞭に映し出されてゐるものゝ如くである。しかもその奔流の先頭には、第三期に入る前までは多かれ少なかれ植民地民族運動の主流をなしてゐた植民地ブルジョアジーを押しのけて、植民地プロレタリアートが民族解放の全運命を擔ふ花形闘士として苦難に滿てる途を驀進しつゝある。先づ支那を見よ。『今や支那においては、既に明確に二個の異れる政權、二個の異れる政治制度が存在してゐる。一は地主、買辦ブルジョアジーの國民黨統治であり、一は勞働者、農民、勤勞大衆のソヴェート政權である。この兩種の政權を代表する兩種の異つた階級の最後の決戰は、正に支那の解放と、勞働者農民、全被壓迫民衆の運命を決定せんとしてゐる。』過般の長沙ソヴェート樹立は、全支ソヴェート地區代表者會議（一九三〇年五月）のこの宣言が、一九三〇年の支那の基本的な政治的相貌を最も直截明確に要約したものであつたといふことを何人にもうなづかしめるであらう。

所で一九三〇年の印度はどうだつたらう？世界人口の六分の一を占めるこの國でも、イギリスの暴力支配の根底に鐵斧を下すところの××的諸事件がこの一年間に矢繼早やに起つて、帝國主義の軛より全印度を解放するための××闘爭は直接に歴史の議事日程に上るに至つた。社會帝國主義者マクドナルドの支配に對する憎惡と激昂の嵐は全印度の民衆をとらへ、全土のあらゆる都市および農村において大衆の自然發生的行動に比類なき熱度をもつて展開された。澎湃たる大衆運動を押止し、機を見てそれを英帝國主義に賣りつけるために、自ら運動の『先頭に立たう』とするガンヂー一派の民族改良主義者の必死の努力は、夙に最初の段階において暗礁に乘りあげてしまつた。そして、マクドナルド＝帝國主義を倒せ！』、『ソヴェート・印度萬才！』の旗を高く掲げた印度プロレタリアートは、益々廣汎なる農民、小市民、全被壓迫大衆を自らの周圍に引きよせつゝ、印度獨立のための眞の革命勢力として公然の舞台に姿を現はしたのである。

一九三〇年初頭のラホールの全印度國民會議はすでに『嵐の前兆』を示してゐた。この國民會議こそは過去數十年來印度における民族運動の特異な組織體として知られてゐる所のものである。歐洲戰爭直後（一九一九―二一年）の時期に起つた印度革命の最初の昂揚期において、國民會議は勞働者農民大衆をもその影響下にもつて運動の先頭に立つてゐたのであるが、現在の段階においては印度ブルジ

ヨアジーおよび小ブルジョアジーの上層の階級利益を露骨に代表する以外の何物でもなくなつてゐる。だが、毎年の終りから翌年の初にかけても知れるその年次大會は、それに附隨して開かれる全印度勞働組合大會その他の會議と共に、印度における××的諸勢力の消長のバロメーターとも見られ得るのである。現に、最近の數年間では、民族ブルジョアジーを代表するガンヂー一派の國民會議右派に代つて、ヤワハラール・ネールに率ひられる左派に代表せられる急進小ブルジョアジーの勢力が次第に壓倒的になつて來た。その結果は一九二七年末に開かれた大會の席上で『印度獨立』の問題が國民會議始まつて以來初めて公然と論題になつたといふことに現はれてゐる。問題は一九二八年十二月の大會まで持ち越されたが、そこではガンヂー一派がわづかばかりの員數で『若しも英國政府が一九二九年末までに印度を自治領として認めないならば、市民的不服從の手段をもつて印度獨立の目的を貫徹する』といふ修正案を通過せしめた。

それから一年後のラホール大會は更にもつと『急進化』せざるを得なかつた。既に一九二八年春のサイモン委員會反對運動に端を發した××的民衆運動は、一九二九年にはボンベイ、カルカッタの紡績勞働者の總同盟罷業となり、排英暴動の勃發となつて、國內大衆の急進化は、國民會議の民族主義指導者たちを否應なしに前方に驅り立てゝゐた。しかも、保守黨內閣に代つたマクドナルドの『勞働黨』政府は年內に印度を自治領にせよとの民族ブルジョアジーの嘆願に對しては一顧だに與へなかつた。かくてラホールでは、ガンヂーに代つてヤワハラール・ネールが大會議長に選ばれ、國民會議は印度の獨立を目標とするといふ決議がなされ、行動綱領として『英領印度政府の各種委員會に對するボイコット、勞働黨內閣の召集せる英印圓卓會議のボイコット』等を決議した。だが、一九三〇年一月一日から開始する約束だつた市民的不服從運動(非軍事的反抗運動)は國民會議執行委員會が適當と認むる時期まで延期を宣言せられたのである。

表面上如何にも強硬な、しかし裏面ではあくまでも英帝國主義との協商の餘地を殘しておく、かうした遣り口は印度ブルジョアーの現在の立場を反映したものである。紡績業に主たる地盤をもつ土着資本は、マンカシアの紡績資本に對する鋭き對立の範圍に於てこそ國內被壓迫民衆の反英運動を利用し、それを自らのための道具とする事を必要とするが、同時に絶えず背後から印度紡織勞働者の總同盟罷業によつて現實に脅かされてゐる。ガンヂー主義者が英國綿布のボイコット、鹽專賣法に對する反抗を說きながら、直接生產點において英國の帝國主義支配の根底を衝く勞働者の政治的大衆罷業、街上示威運動、農民の土地收益稅不拂運動を嚴罰に禁じてゐるのは、子供だましのやうな反英『模擬戰』によつて大衆の××的行動の方向をそらせ、自己に最も有利なやうに全運動を賣りつけやうとする民族ブルジョアジーの政策を直接に表現してゐるにすぎないのだ。

ガンヂーイズムの模擬鬪爭のたわいなさは、大衆のイニシアテイヴによつて次々と展開された××的な鬪爭手段との對比において益々戲畫化された。本年三月初旬、勞働黨內閣の冷淡さにごうをにやしたガンヂーは英領

印度總督アーウインに『最後通牒』を發し、手織綿布の宣傳と鹽專賣法反抗のための有名な『宣傳行脚』を開始した。所でガンデーが行脚の出發地として選んだのは反英大衆運動の中心地たるカルカッタでも、ボンベイでもなく、グジエラットといふやうな北部の全くの片田舍であつた。二十五日の後、ガンジーの一行はキャンベイ灣の海岸に達し、そこで專賣法にするための製鹽なるものが行はれ、ガンヂー自ら海中に入つて一握りの鹽を作つたが、それをガンヂー信者たちは途方もない値段で爭つて買ひ取つた！　この頃から英領印度政府の彈壓は狂暴化し、立法議會議長パーテルをはじめとして印度國民會議の錚々たる『名士』たちが續々と逮捕投獄せられた。所で、これに對抗するためにガンヂーが指示した鬪爭手段(?)は――室内に蟄居して斷食(ハルタール)することによつて犧牲者をいたむといふ變つた方法だつた！　だが、大衆は最早そんな方法に滿足しきれなくなつたことを示した。ガンヂーの嚴かな訓戒にも拘らず、勞働者農民の大衆は定められた日に街上に出で、英國軍隊の銃火を浴びながらデモンストレーションを行つたのである。ガンヂーが率ゐる製鹽行列者の中からでさへ、襲ひかゝる騎馬警官の鞭に對して投石をもつて應へる者が續出した。かくて本年の四月、五月には、斷食のすきなガンヂー主義者を遙かに取殘して、廣汎なる勞働者農民の大衆は政治的ゼネ・ストと農民一揆をもつて直接に英帝國主義の武裝權力と正面衝突するに至つたのである。

都市における勞働者、ストライキ農村における農民の土地收奪税、税租不拂運動は、數年來の深刻な經濟恐慌によつて益々強力に發展して來た。そしてそれは、最初印度國民會議の一分派として生れた全印度勞働者農民黨が益々獨立的な××的組織として成長するに至つたことを反映してゐる。殊に昨年以來の世界恐慌の波が印度の全經濟を破綻にまで逐ひやり、勞働者農民の生活が極度に惡化するに及んで、大規模な自然發生的大衆鬪爭が相次いで起り、益々尖銳化せる樣相を呈するに至つた。昨年來の紡績勞働者の大衆ストライキを基礎として、勞働組合運動は急激に從來の改良主義的指導者の影響下から離れて、××的なギルニ・カムガール（赤旗組合）の指導下に立つやうになつた。印度××黨はこの××的勞働組合運動の擴大によつてその大衆化の地盤を見出さうとしてゐる。他方、急進的小ブルジョアの大衆は、知識階級層の膨大なる失業群の發生により急激に左翼化し、××的青年運動、學生運動は全土に蔓えんしつゝある。彼等はガンヂー非暴力說教の幻想から目覺め、直接に勞働者農民運動に接近し、これと結びつかうとしてゐる。

一九三〇年の印度勞働者運動は、二月に起つた大印度半島鐵道(G・H・P・R)十二萬從業員の總同盟罷業を主潮として急激に高潮して行つた。本年春から夏にかけての鐵道勞働者を先頭とする印度勞働大衆の鬪爭の發展は、丁度支那革命史上一九二二年の京漢鐵道ストライキから一九二五年の上海五卅事件に至るまでの期間を髣髴たらしめるものがある。G・H・P・鐵道ストライキは、三月二十日のメールート・デー(昨年のこの日、勞働組合禁壓法、治安維持法によつて全印度の勞働運動者三十二名が逮捕されてメールートの牢獄につながれてゐる。その一週年を記念する

鬪爭デー）前後を中心として全印度勞働者の一齊蹶起となつた。四月に入つてボンベイ、カルカッタ等印度プロレタリアートの城砦と呼ばれてゐる大工業中心地を先頭に、カラチ、マドラス、マホール、等に高度の政治的性質をおびた大衆的抗議ストライキが續々と起り、勞働者のデモが警官隊、英國××と衝突して流血事件は毎日のやうに各地から報道せられた。今や印度プロレタリアートは印度××の最前線に姿を現はしたのである。鬪爭形態の點から見ても、本年四月以後は明らかに從來よりも高度の形態、即ち直接××をもつて英國官憲の彈壓に對抗する段階に移つたことが見られる。既に四月一日にカルカッタで勞働者、學生の印度獨立を要求する、大示威運動が行はれた時に、市内の所々においてバリケートが築かれた。同十五日のカルカッタの大示威運動は、ガンヂーが斷食して謹愼してゐるさい中に、直接英國××の衝突となり、市街電車は燒かれ全市の交通は杜絶し、政府はタンクを出動せしめてやつと暴動を鎭壓した。この日以後全印度の重要都市には戒嚴令が敷かれた。所が、數日後の四月十八日には、カルカッタの近くのチッタゴングで勞働者大衆は警官隊との衝突後、××の兵器庫を襲ひ、小銃を奪つて××と交戰するに至つた。これまで大衆示威の際にはきつと姿を現はして民衆を薙ぎ倒してゐた恐ろしいタンク、裝甲自動車の襲威に對して勞働者は獨創的な對抗方法を案出した。即ち、彼等は二臺のタンクに××をぶつかけて火をかけ、搭乘者もろ共黑燒にしてしまつたのである。

四月二十三日には、更に重大な暴動が起つた。それは印度革命に新しい歷史を開いたといはれる。ペシャワールは印度の西北國境にあつて、英國のソヴエート同盟攻擊上軍事的に重要な意義をもつ地點である。この都市に、附近の農民運動の激化を背景として暴動が起り、英××を市外に逐つて、二週間の間市中は完全に暴徒の手中に歸した。注目に値するのは、これまで英領印度政府が農民一揆鎭壓に當つて最も信頼出來ると信じてゐたシーク族の土民兵が英國士官の命令に服從せず、部分的には暴動の味方についたことである。マクドナルド政府の嚴重な報道禁止によつて、ペシャワールに出現したこの印度最初の革命政府についていまだに全世界は何等具體的な事實を知らせられずに居る。だが、それにも拘らず、外相ヘンダソンは英議會において同市に二週間にわたつて『革命委員會』（ソヴエート）の勢力が樹立せられてゐたことを告白せざるを得なかつた。このペシャワール革命政府は、マクドナルドが送つた『八〇臺の爆彈投下用飛行機と五〇〇〇個の爆彈』を使つてはじめて鎭壓せられたのである。しかもその後と雖もペシャワールは山三附近の土族軍の襲擊を受けて來てゐるのである。ペシャワールに次いでは、ボンベイ南方のシヨラプールに勞働者の暴動が起り、市は約一週間のあひだ勞働者の手中に歸してゐた。これらの事件は、たとへ短期間の勝利ではあつたにせよ、××鬪爭によるソヴエート政府樹立の課題が直接印度勞働者農民運動の日程に上つたといふ意味において、印度××の將來にとつて極めて重大な意義を有するものである。

勞働者農民のかくの如き××的躍進に對してマクドナルドの勞働黨內閣が取つてゐる對策はまた思ひ切つて猛烈なものである。ガン

ヂー一派の非暴力反抗に對しては國民會議派の領袖たちの投獄によつてその鋭鋒(?)を挫かうとするに止つてゐるにも拘らず、勞働者、農民の大衆行動に對しては騎馬兵、棍棒、××から××自動車、××用飛行機に至るまで一切の近代的武裝力を動員し、民衆煽動者は軍法會議によつて處刑してゐる。『印度において、今日マクドナルド政府の下におけるごとく勞働者農民の血が廉くなつたことは、未だ嘗つてなかつたことである』とはドイツのローテ・フアーネ紙が適切にも指摘してゐる所である。一日としてマクドナルドの××の血腥い『英雄行爲』が報道せられぬ日とてはない。過去と現在における『偉大なる』勞働黨政府の名聲は印度革命に對するその流血的な彈壓によつて一層輝きを増したやうに見える。イギリスの金融資本、ロンドン株式取引所の忠實な奴僕として、マクドナルドは英帝國主義支配に抗して蜂起しつゝある印度三億二千萬民衆の屠殺者の役割を遂行しつゝあるのだ

以上一九三〇年の印度を通觀することによつて吾々は次の如き三つの結論に到達せざるを得ない。――即ち第一に、ガンヂーを首腦とする民族ブルジョアジーの排英運動は、完全にその無力さが暴露され、闘爭の激化と共に次第に大衆の信頼を失ふと共に、他方ではいよ／＼英帝國主義との妥協の道を進むであらう。

第二に、印度プロレタリアートはその一年間の闘爭を通じて印度革命における指導階級となつた。それは印度において決定的意義を有する農民革命の進展につれて、殖民地ソヴエート革命の遂行のための巨歩を踏み出すことになるだらう。

第三に、マクドナルド政府はその平和主義的假面を完全にかなぐり棄て、殖民地民衆の壓殺と反ソヴエート戰爭遂行のための英帝國主義ブルジョアジーの使徒となつてゐる。かくて一九三一年に、マクドナルド自らが第二次世界××の火つけ人にならぬとは誰が斷言し得やう？

かやうな情勢の下に、來る十二月末から開かれるであらう全印度國民會議の今年度大會が如何なる結果に終るかは、吾々のひとしく注目すべきところでなければならない。

（一九三〇・十一・五）

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルヂング五九〇區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

最も經濟的な 實用替ズボン

本社代理部の替ズボンは、價格に品質に已に定評あるもので、何れも地方在住の愛讀者諸君のために、特選したものばかりであります。

純毛黑サージ	三圓八十五錢
上等黑サージ	五圓七十錢
極上黑サージ	七圓二十錢
純毛黑絹セル	五圓
上等黑絹セル	六圓五十錢
純毛茶及黑メルトン	三圓八十錢
フラノ(薄茶、鼠、紺)	四圓三十五錢

◆特價提供品◆

半毛黑サージ	二圓七十錢
茶縞スレン(閑暇用)	一圓六十錢

寸法			
大	腹廻約二・四尺	股下	一・九尺
中	同 二・二尺	同	一・八尺
小	同 二・一尺	同	一・七尺

御註文には大中小の別と參考に全身長も御記入下さい。(股下はクルブシ迄を計つたもの)

送料内地十八錢　領土四十五錢

古書賣買のお取次

「古書案内」は從來古文書、和本、錦繪等も扱品中に加えてをりましたが、右の中には思はぬ高價な内容を持つものがあり、再び求め難いものを含む場合さへ少くありませんので、今後はこれ等の類に屬するものは一切お受けしない事に致します。

要するに賣買共に普通の古書のみをお扱ひ致します譯ですから、右の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用を願ひます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、送品は着金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介代着金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格なども時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知をきを願ひます。

D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、汚損の程度等詳細にお書添へを願ひます。時には、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。

E、御紹介の宛名は「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

スマドレ、シャンプー　ヘヤトニック

シャンプーは洗髪液、ヘヤトニックは美髪液、前者でキレイに汚れを落し、後者で毛を養ひ天來の美を增すと云ふ仕組は流石にパリー、ニューヨーク、ロンドン等で賣出してゐるものだけあります。

殊にこのシャンプーでの洗髪は實に手輕で、日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、數滴スマドレシャンプーの用意さえあれば、僅かな時間で每もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ちよく會談する事が出來ます。

定價　特大瓶　二圓



而も朝夕スマドレヘヤトニックを用ひて輕くマッサージする事で、一日の能率を高め、芳香邊りを包み毛髮は絹の樣に軟く日々漆黑の美を增します。

定價　婦人用　紳士用　特大瓶各二圓五十錢

送料各東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

ユーカリ吸入器

ユーカリ吸入器の效果は、已に世に識られてゐます。噴霧器式の樣に大仕掛けでなく、蒸氣吸入式の樣に億劫にならず、敷島一個ポケットに入れた程の輕るさで、車中でも、事務室の中でも乃至步きながらでも、煙草を吸ふ程の手數も要らずに樂々と使用が出來ます。



使用法

(イ)部からユーカリ油少量を入れる、其程度は(ニ)部の小孔が覆はれる迄。鼻の惡い時は(ハ)から咽喉又は口腔の惡い時は(ホ)のゴムをはずして(ロ)から吸ふ。三四回深く吸つて、二三回むせた位な所が適度です。使用後は(イ)と(ロ)とに栓をしてをけば何日までも使えます。

(ユーカリ液一ヶ月分附)

定價　上製　一圓八十錢　並製　一圓三十錢

送料　內地十二錢　領土四十五錢

最新除毛劑



タキーは、手足、脣の下、襟、髭等任意の所に塗つて、三分乃至十分後に水で洗ふだけで剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり除毛する事が出來、繰返して使用するにつれて次第に毛が發生しなくなり加ふるに皮膚の美を增すと云ふ重寶な藥です。

定價(マムクリーム付)二圓二十錢

送料內地十八錢　領土四十五錢

新産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿樣纖維質の部分と、絕對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄からなる新發明產兒調節器で、他の從來品の生理的損失を一掃した良品です。

本器は永久的の使用に堪え、眼覺めたる新しき家庭の實際問題の上に輝く大いなる光明臺であるとまで多大の賞讚を受けてゐます。

一回經產婦までは　〇番

三回經產婦までは　一番

四回以上の方は、　二番を使用

定價　(錠劑十二錠付)　六圓

錠劑のみ十二錠　二圓

送料　內地十八錢　領土　四十五錢

サユリ　ヨウモトニック

鬱で有名な三共の新製品です。毎朝脫脂綿につけて、頭の地肌に塗れば、所謂若禿を防ぐ事受合ひです。

〇頭の痒い人、脫毛する人、〇壯年禿髮の人、遺傳禿髮の憂ある人、〇若白髮の人、〇大病後薄毛の人、〇日常ポマードを多量に使用せらるゝ人、〇病床にあつて洗髮の出來ぬ人、特に婦人では〇產後薄毛の人、〇常に日本髷の人、〇大きな添へ毛、髢を用ふる人、〇赤毛が苦になる人はお用ひ下さい。

定價　大　二圓　小　一圓二十錢

送料　東京市內六錢　內地　十二錢　領土四十五錢

麻雀牌特價販賣

◆麻雀牌は徒らに高價なものと思つてはならない、と云つて余りに廉價な呼聲につられたのでは粗惡品を買はされる。要するに信用ある手を經て求める事に限る。

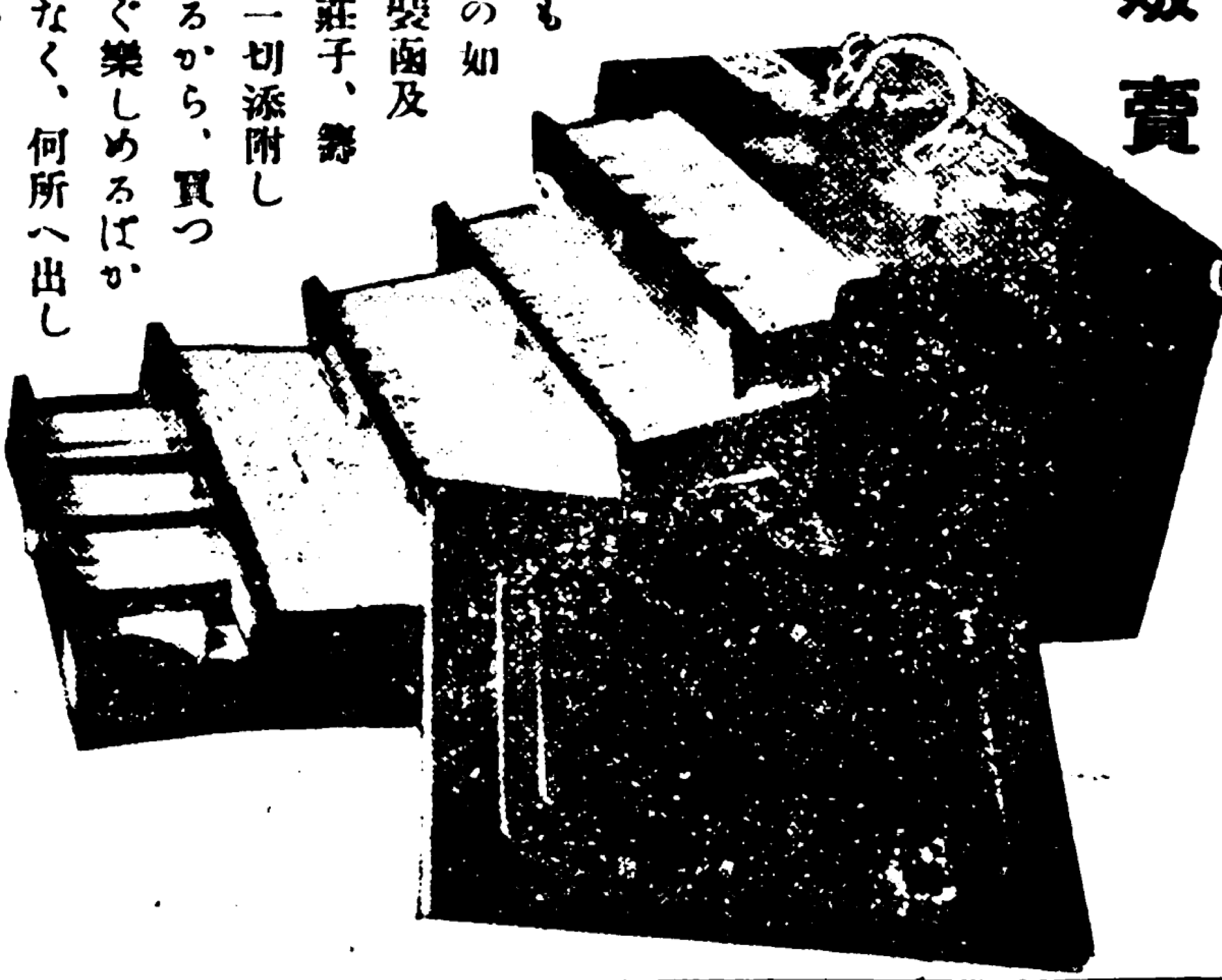
◆本社代理部の特選標準牌は、市價よりも少からず廉價ですが、之には理由のある事でその代りストックが僅少ですから、現品の配送は嚴正な御註文順により、遲れた方は次回の入荷まで、少しづゝお待ちを願ひます。

骨のみの厚さ

支那尺	曲尺	
A(八分)	(二分)	二一・六〇円
B(九分)	(二分二厘半)	二七・五〇
C(十分)	(二分五厘)	三五・五〇
D(十一分)	(二分七厘半)	三九・七〇
E(十二分)	(三分)	四五・三〇
F(十三分)	(三分二厘半)	五一・〇〇

送料　東京市内十二錢　内地六十三錢
　　　領土　九十錢

◆何れも下圖の如き美裝函及び、莊子、籌碼等一切添附してあるから、買つてすぐ樂しめるばかりでなく、何所へ出しても恥しくない優良品ばかりです。



◆試みに見よ。此の函だけでも市價六・七圓は取られる。ボール函入りの牌でも九分と云へば二十六・七圓は普通の市價です。籌碼だけでも二・三圓はする。これ等一切を集めた價格に比較して、本社代理部の特選牌が如何に廉價であるかを知られ度い。

◆型は全部日本に於ける標準型で、彫刻と云ひ着色と云ひ、純正な支那製だけに一點の非を打つ所もなき優良品です。

注意）麻雀牌は販賣規則の殊に嚴格なものにつき、一度封を切つた上での御返品及御取換えは絕對にお斷り致します。

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風にたじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國産第一の優秀品です。

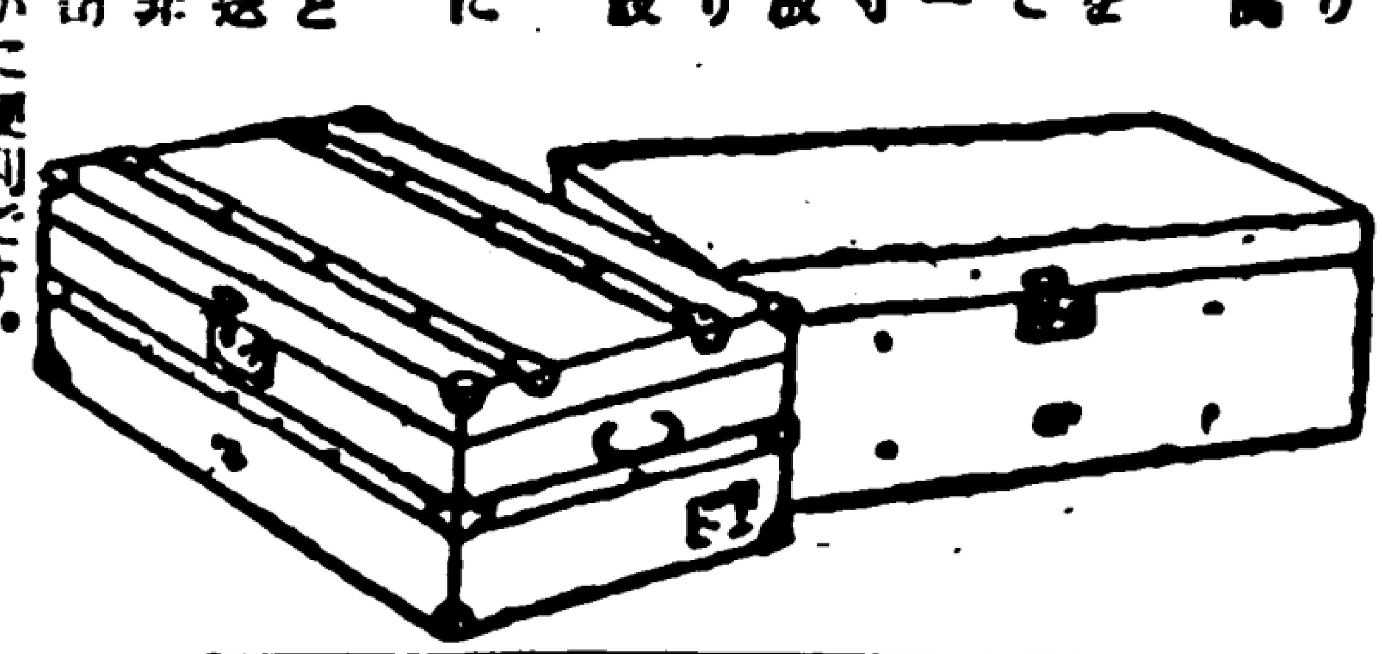
價二圓五十錢二圓八十錢三圓五十錢四圓
(自動吸入式)　三圓五十錢以上
送料　内地　十八錢　領土　四十五錢

昭和文庫

厚い鋼鐵板張りの外面には漆の高温焼付けを施し、防蟲防濕の工夫をした堅牢な容器で縱二尺四寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分、内部は木板で圍み、ナフタリン藥室入れまで設備してあります。

毛織物類入れに貴重書畫入れに、上製はトランクとしてそのまゝ發送する事が出來、非常用としては懷防や支那靴より遙かに便利です。

定價　上製　九圓八十錢
　　　並製　六圓八十錢
送料　東京市内配達料二十錢
　　　地方荷造費三十錢運賃先拂



洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大　一圓　小　六十錢
送料内地　十二錢　領土　四十五錢

ズボン吊兼用
保健整形帯

サッポーター

(一) **ズボンを腰で輕快に釣り支へます。**ズボン吊の如く肩の凝りや、胸脊の壓迫がなく、ゆるやかな氣分で常に居られます。

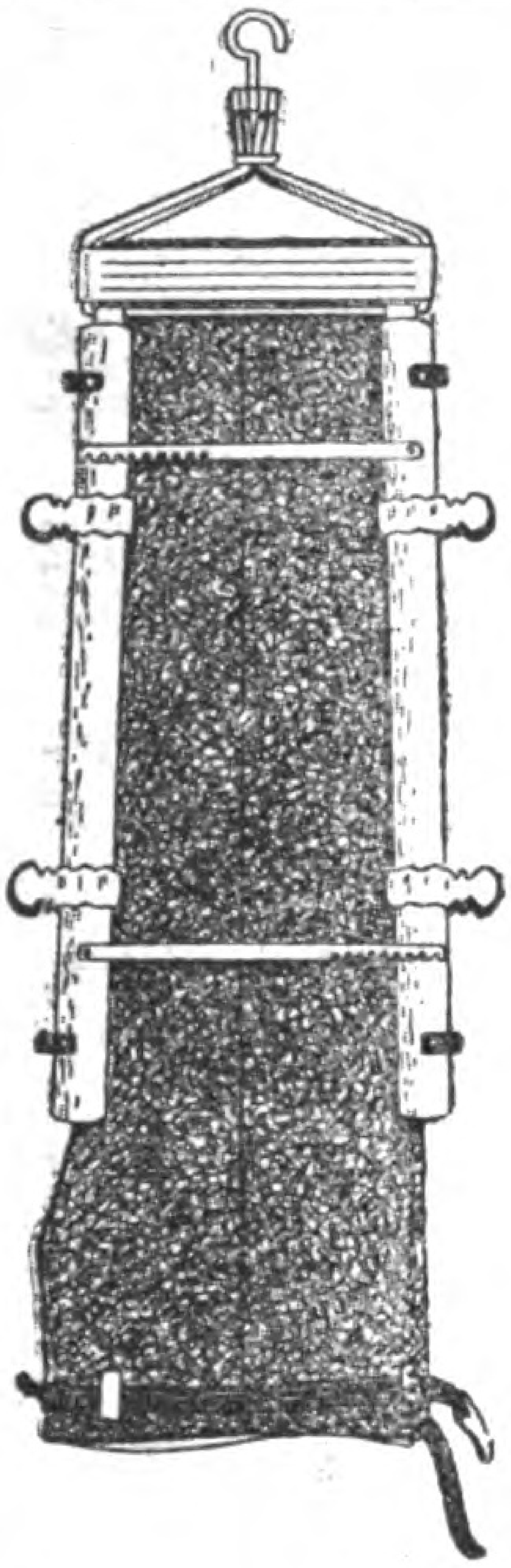
(二) **姿勢を正しく、スタイルを端正に整へます。**座臥動作は自由で、姿はスラリと、前屈みの人も姿勢の正しい習慣となります。

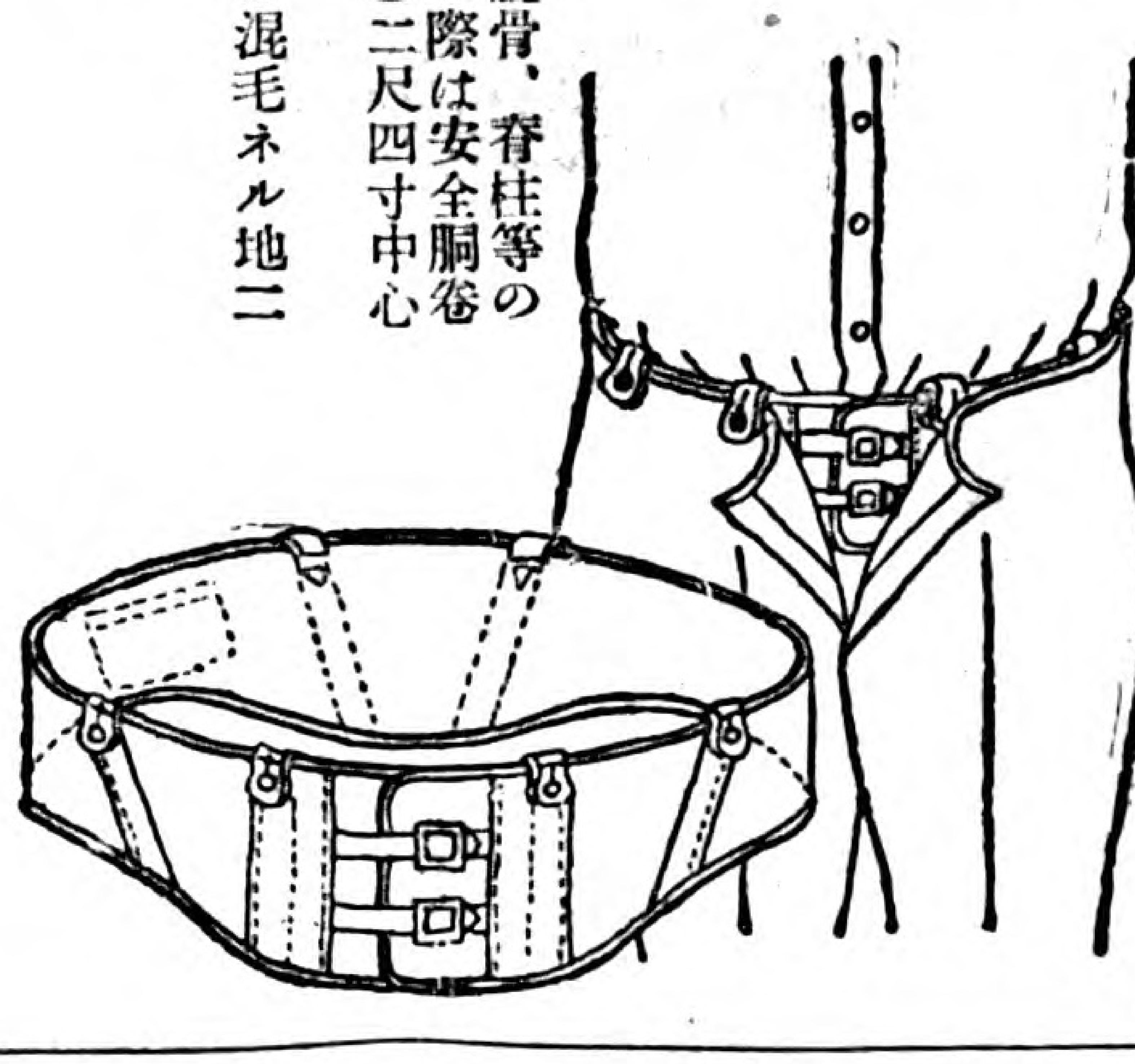
(三) **胃の下垂を防ぎ、腸を保護し、腹力を强め、**疲勞を和らげ、神經過敏に罹る事を防ぎ諸種病弱の原因を輕減します。

(四) **勤務も活步も愉快に、活動力を盛んにし、**下腹、臗骨、脊柱等のシマリ工合良く、和服にも用ひられ、殊に旅行外泊の際は安全胴卷の代用をつとめます。(特大)周圍鯨三尺五寸中心(大)二尺四寸中心(中)二尺一寸五分中心(小)一尺九寸中心

◆**高級特製品　五圓五十錢**　A純毛ネル地三圓六十錢　B混毛ネル地二圓九十錢　C一重地二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

◆**御註文には引締めた腹廻り寸法をお報らせ下さい。**





輕便ズボンばさみ

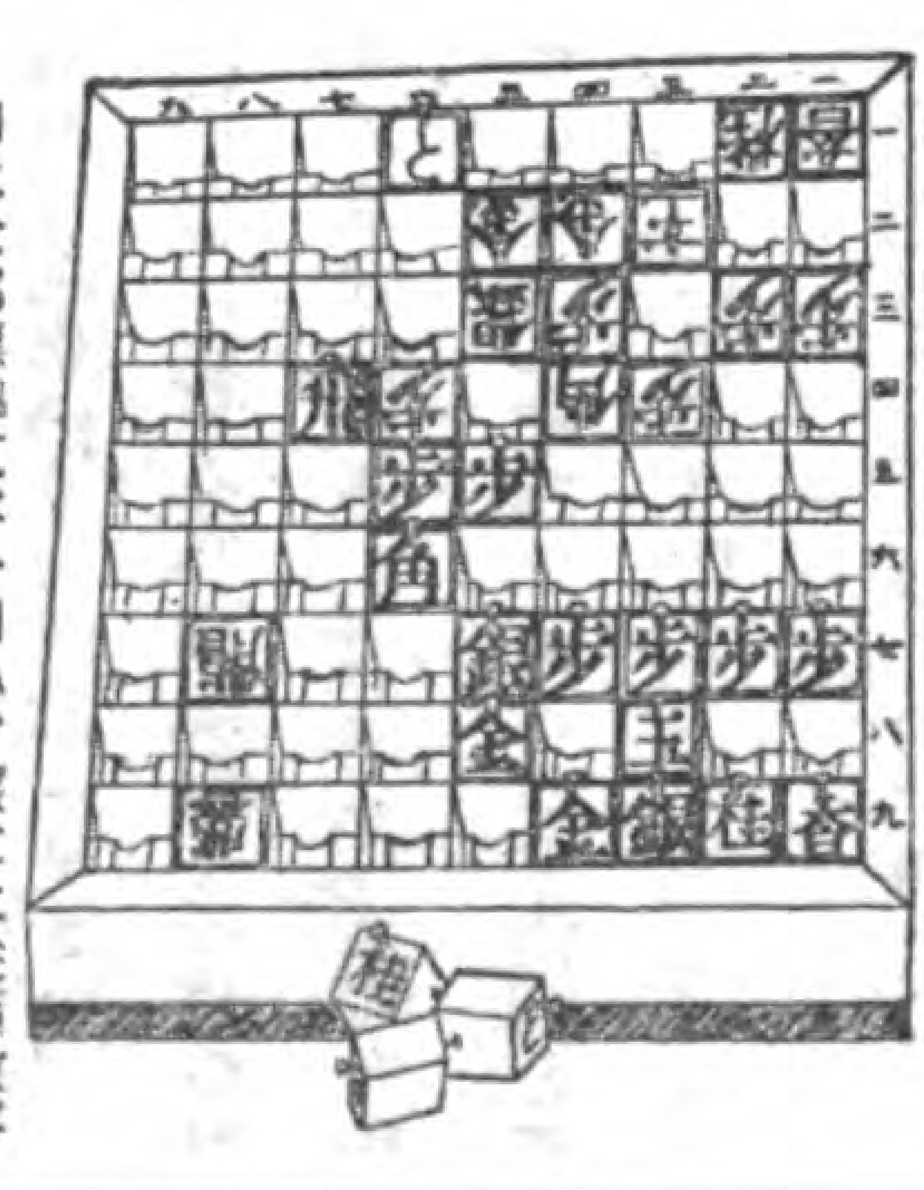
ヅボンばさみは、すべてに手輕な事を要します。板ばさみの所謂高級品は、値段だけは六・七圓致します。本誌愛讀者諸家は、**輕便で効果的な本品を**常用される事をおすゝめ致します。

定價　上製　二圓五十錢
　　　並製　一圓九十錢
送料內地二十七錢領土五十五錢

最小型將棋盤

縦三寸七分、横三寸二分、厚さ五分の最小型輕便將棋盤です。

木とアルミニユームとで造られてありポケツトに入れて小しも重く感じる事なく、駒には一個一個蟲針が附けてあるなど、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。



駒は全部標準文字を用ひ、盤には縦横數字が記されてあつて、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

好きな道でも、まさかに大きな將棋盤を持步るく事は出來ないが、これさへあれば繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの寢ばひのまゝで、或ひは机上に、病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棋家にとつてこれ程便利な有難いものはありません。

定價(駒全部附)　一圓八十錢
送料　東京市内十二錢　內地十八錢
　　　領土四十五錢

洋服の注文は今‼

◇特に二回に分割拂込みのお便宜も計ります。

（年内調製の御註文は十二月十四日限り）

◆洋服の生地見本は、御承知の通り餘りに多種多樣で、全部取揃へる事は經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ず御希望の品、例へば「冬服のB」「合服のA」と云ふ風に明確にお指定の上、お忘れなく御年齡をお書添え下さい。

◇代理部では、御年齡、御職業その他の御希望條件に最も適合した生地を見立て、明確な圖入の寸法書と共に御送り致します。

◆キザな流行の支配によらず、紳士的な而も明るい感じの洋服を求められるなら、山間の僻地からでも居ながらにして、眞に東京型の洋服を求められるなら、本社代理部を利用するに限ります。

◆生地見本を御覧の上、代理部考案の用紙にす法を書入れて送れば、思ひ通りの型、思ひ通りの寸法の服が約二週間でお手に入る譯です。

◆裁縫の入念と、品質の確實な事は、所謂通信販賣洋服と類を同ふするものではありません。

◆見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。



	〔合服〕〔冬服〕
A	35円00
B	43円00
C	50円00
D	60円00
E	70円00

中央公論社代理部洋裁係

振替東京七八四七五番

現代軍人論

馬場恒吾

現代の國民は目の敵のやうにして、陸軍と海軍の費用の減少を要求してゐる。これは國民が惡いのか、軍人が惡いのか。玆に現代軍人論がある所以だ。

昭和二年の秋と三年の春に、ゼネーヴで開かれた國際聯盟の軍縮準備會で、ロシアの代表者は軍備全廢を提議した。それは餘り突飛であるとして、列國は誰れも眞面目に相手にはしなかつたが、人類の理想から云へば、軍備全廢が合理的な結論である。人間が猛獸の眞似をして、互に殺し合ふと云ふ事はどう考へて見ても不合理に相違ないからである。軍備全廢の說が行はれないのは、軍備全廢の說が惡いからではなく、それを實行する程度迄進歩してゐない人類の方が惡いのである。それ故に、世界を指導する立場にある諸國は少くとも此理想丈けは否認しない。不戰條約が其表現の一つである。日英米三國の海軍々縮條約も其方へ一歩を進めたものと見るべきだ。其歩みは遲々たるものだ。だが、人類の歩む方向は決定されてゐる。

露西亞の軍備全廢の提議に對して、列國はこれは露西亞が故らに實行不可能の提議をして、軍縮會議をからかつたもの位にしか思はなかつた。またさう思ふのも無理でない節がある。スターリンの今年六月廿七日の演說を見ても、彼れは口を極めて平和主義や國際聯盟や軍縮會議を罵倒してゐる。スターリンのみならず、左翼理論家は大抵一致して、世界の帝國主義諸國は次ぎの世界戰爭に向つて準備する。其戰爭は不可避的に起る。さうして其機會に新らしき社會が生れるであらうと云ふ希望を有つ。

世間では極端と極端は一致すると云ふが、戰爭を期待する事に於て、左翼理論家と、反動的軍國主義者の云ふ事と妙に一致

する點がある、日本の固陋な軍人仲間に於ては日米戰爭は避くべからざるもの、やうに云ふ。日米戰爭が必らず起らないとは、神樣でなければ保證出來ない、だが、國民の大多數は日米戰爭を希望してはゐない。實際政治家は全力を悉くして、か、る戰爭を起らないやうにする爲めに努力してゐる。元來戰爭に依らなければ世界の改造と再建が出來ないと云ふ考へが聊か古い。例へそれが左翼理論家の思想であつても、それは封建時代の考へ方である。世界は戰爭に依つて改造と再建が行はれた事もある。併し戰爭に依らざる改造と再建は毎月、毎日行はれつ、ある。量の變化が質の變化になると云つても、人類をさう機械的に見る必要はない。

スターリンは倫敦の軍縮會議を嘲つて、軍縮會議が海軍の再編成と擴張の會議に轉化したと云つた。事實としては軍縮會議は軍縮會議であつた。只此軍縮會議の後始末をする各國海軍の當局者は軍縮を軍擴に轉化せんと試みるものがないとは限らない。スターリン唱へて、帝國主義的の軍人が之に和すると云ふ珍現象が起るのである。

ファシストとコンミユニストに共通な點がある。一つは極右の專制、一つは極左の專制であるけれども、其專制である點に於ては同じだ。彼等は共に專制を通じて理想社會を現出せんとする。專制は專制する者に採つては自分の獨斷を皆んなに押し付ける事が出來るが故に極めて愉快であるかもしれぬが、專制されるものに採つては、如何に悲痛な條理をさへ、之を訴ふる處がないが故に窮屈千萬だ。文明人はか、る窮屈な政治に反抗する。そして彼等の希望する所は、自分等の同意を得て行はる、政治である。議會主義必ずしもまだかうした所まで完全に進んでゐるとは云へないけれども、所謂專制より優る事數倍だ。或程度迄は人民の同意を得て政治が行はれるやうになつてゐるのである。

議會政治の國に於ては、支配階級の意志は人民の同意を條件にして行はれる。ファシスト專制、又コンミユニスト專制の國に於ては、其專制と云ふ名に依つても明かなる如く、政治を行ふに人民の同意を必要としない。支配階級は自から善と信ずる所を直ちに實行する。彼等が善と信ずる所が、果して善であるか、否かを裁判するものがない。それを總選擧に依る國民の審判に訴へると云へば、それは議會主義であつて專制ではない。それ故に、彼等が善と信ずるのは彼等の獨斷以外の何物でもない。其獨斷を國民に押し付けんとするが故に、彼等の賴む所は國民の同意ではなくして、彼等自身の有する武力である。武力がなければ專制は滅びざるを得ない。ファシスト專制の伊太利

は流石に軍備全廢を唱へない。コンミユニスト專制の露西亞がそれを大聲疾呼したとき、列國が怪訝な顏をしたのは、專制と軍備全廢とはそれ自體の中に互に矛盾抗爭する要素を含んでゐるからであつた。

人類が智慧の程度に於て、自分等を猛獸の社會と同じ水準に置くならば、世界は戰爭に次ぐに戰爭を以てするより外に生きる道はない。併し人間は猛獸よりは幾何か理性があるだらう。戰爭を能事とせずして、平和的に生活する方法を發見するに苦しまない。現に封建時代に比較して、今日の世界各國の大多數は國內の平和を維持し得て居る。之を日本の例にしても、百年前には諸國諸大名が各武備を整へて、彼等が互に戰端を開く危險は充分に存在した。それが今日になつては如何なる氣違ひも日本國內に日本人同志の戰爭が勃發するとは考へない。此平和の基礎は何人も專制政治を行はうと志ざすものなく、それよりは國民の意志の總和に從ふと云ふ原則を認めるやうになつたからである。世界の列國關係が、一國內の各地方の關係の如く、しかく平和になり得る方法も亦外には存在し得ない。卽ち各國民の意志の總和に服從すると云ふ所の、世界的議會主義に依る外はない。

軍人は兵力の飽くまで强からん事を希望する。國民は負擔の飽くまで輕からん事を要求する。兩方共にそれは人情である。だが必ずしも尊敬すべき人情ではない。軍人も國民も、現在の人類を組織する一部であると云ふ所の自重心とそして謙遜の心を有つならば、彼等の共同の關心は、彼等が世界的議會主義の指令に服從する準備がありや否やと云ふ所になければならぬ。彼等の欲する所が、平和の世界を欲する所の人類多數の意志に叛いてゐるか、從つてゐるかと云ふ所になければならぬ。

世界平和を目的とする運動は今迄に屢々企てられて、屢々失敗した。其失敗は今後も繰返へされるであらう。スターリンは國際聯盟は存在してゐるけれども腐り果てゝゐると云ふ。これは餘りに酷評であらうけれども、國際聯盟がまだ世界に平和を强制する實力のない事は事實である。國際聯盟は形に於ては世界的議會主義を表現してゐるやうであるが、何分五十幾ヶ國の世界各國は其中には、餘りに文化の低きもの、利己心の强きもの、世界の大局を顧みざるもの、地方的偏見に囚はれてゐるものを含むが故に、彼等を國內の議會の如き實權を有する會議に集める爲めに、尙相當永き將來の時勢の進步に待たなければなるまい。それよりは今年の倫敦に於ける海軍々縮會議の如きは已に素性の知れた數ヶ國の會議であるが故に、世界的議會に行く前提として却つて成功した方である。

倫敦會議に依つて得た所の日本の取り前が日本の利益であるか否を批判する觀點が二つある。一つは只日本一國の利害のみを基準として考へること、一つは世界の利害を分擔する强國の一つとしての日本の立場から考へる事である。此二つの内、後者が現實に卽した考へ方である事は爭はれない。日本は封建時代の鎖國主義を捨て、已に六十年を越した。日本は日本のみの日本でなくして、世界の日本になつた。吾々は世界以外に逃避すべき道を有たない。世界の經濟的危機が日本人の生活に如何に深刻な不景氣を持ち來たしたかを見よ。日本は世界の空氣を呼吸して生息してゐる。日本人は最早島國的精神を脫却せねばならぬ時期に到着した。世界を繁榮ならしめる事に依つて日本も繁榮になり、世界を混亂せしめることに依つて、日本も混亂し、世界の平和を助ける事が、日本の平和を助ける事になる。此見地から見れば倫敦條約の成立は日本に採つても斷然成功だと云はなければならぬ。軍人が日本の海軍を强きが上に尙强からしめんと欲する心情は諒解出來る。併し彼等は世界を指導する强國の軍人であると云ふ所の新たな立場に立つて物を考へる必要がある。卽ち彼等は世界の大局に對して理解と同情を有つて考慮する事を要求されてゐる。

殊に近代の戰爭は軍人のみに依つて戰はれる戰爭でない事は明かだ。例へば今の飛行機と燒夷彈を以てすれば、東京の如きは一日にして燒き拂はれ得る。大戰爭になれば關東震火災の如きが全國的に同時に起り得る。それに毒瓦斯を加へれば慘害は無限に想像される。だから、新たなる戰爭を始めようとする前の第一の準備は全國民に志氣沮喪せしめない丈けの精神的訓練でなければならぬ。それには軍人と一般民衆が平生から融け合つて、國民をして陸海軍を我等の陸海軍だと思はすやうにしなければならぬ。國民の後援なき戰爭は昔も出來なかつた。現代は殊にさうである。其點に於ては日淸戰爭當時の參謀次長であつた川上操六は偉らかつた。其時分は陸軍中將と云へば今からは想像出來ないほど威張つたものであつた。然るに、川上は日淸戰爭を始める前に、これは國民の後援を得なければ戰爭には勝てないと思つて、自分で各新聞社を歷訪して、どうか此戰爭に勝てるやうにと、新聞の後援を賴んで廻つたものである。軍人は國民の精神的援助がなければ、軍人として働けない事が明白にされてゐる。

只精神的援助のみではない。近代戰爭は物質的にも民間工業を總動員して初めて行はれる。大砲、砲彈、船艦、其他戰爭に必要なるものは悉く之を民間工業の發達を待つて、初めて豐富に供給され得る。軍人に云はしめれば飛行機も軍事用と民間用

とは全然別物であつて、民間飛行機は、戰爭の役に立たぬと云ふ。併し、全く役に立たぬとは常識では信じられない。少くとも民間に於て飛行機製造能力が發達しなければ、軍用飛行機の補充が思ふやうには行はれない。民間の工業が發達するに從つて、軍用飛行機の優秀なるものも作られる。民間工業を無視した國防計畫は完全を期する事が出來ないとすれば、國防は畢竟するに民間工業に依存すると云ふ事になる。

玆に一つの結論が生れる。軍は國民の精神的と物質的の共鳴がなくしては、軍としての活動も出來ない。すると、軍は最早國民と懸け離れて存在出來るものでなく、國民と共同して生存せねばならぬ。結局、軍も國内の議會主義を完全に承認せねばならぬと云ふ事である。

然るに制度の上から見ても、其承認はまだ完全に行はれて居らぬ。陸海軍大臣は陸海軍大將又は中將でなければならぬと云ふ制度がそれである。此制度があるが爲めに、議會が承認する内閣でも、軍部にボイコットされゝば潰れねばならぬ。軍部大臣を軍部以外から連れて來る譯けに行かず、文官大臣が軍部大臣を兼ねる譯けにも行かず、つまり内閣を完全に組織する事が出來ない破目に陷るのである。

今一つの制度として帷幄上奏權がある。陸海軍大臣、參謀總長、軍令部長は、内閣を差置いて、直接に上奏する。この帷幄上奏權が純粹に統帥權に關聯する事に使用されるのならば不思議はないが、二ヶ師團問題の時の上原陸軍大臣は、帷幄上奏で辭職の上奏をした。陸軍大臣としては西園寺首相の手を經るのが當然であつた。それを直接陛下に上奏したことに關しては、後に西園寺からたしなめられた。今度の倫敦軍縮會議後の海軍部内の紛擾に際して、軍令部長加藤寛治大將も、帷幄上奏で、辭職を上奏した。財部海軍大臣を出し拔いたのである。かくして、帷幄上奏をする權利を有してゐる人々は、恰かも我々のみが陛下の直參だと云ふ顔をする。彼等が統帥權問題を屢々口にするのは、彼等自身のかゝる優越感を犯かされたやうに感じるからである。倫敦條約の付議せられた時の樞密院で、陸軍大將で顧問官である河合操は統帥權問題で大に議論した。濱口内閣が軍令部長の同意を得ずして條約の兵力量を決定したのは統帥權干犯であると云ふのである。河合は田中義一首相の親友で、參謀總長迄勸めた人である。だから、世間では餘程物の判つた人だと思つてゐた。その人が樞密院の政治家が主唱する議論を大聲疾呼する事に對して、政府側では吃驚したのである。これもまた、軍人が日本の議會政治を充分に承認してゐない一例である。

其邊になると、田中政友會内閣の海軍大臣をしてゐた岡田啓介大將は大局を見てゐる。軍縮協定に對する政府の回訓案を倫敦に向けて發送する前に、濱口首相と加藤軍令部長は三度も會見してゐる。其最後の會見の時には岡田も其席に居た。軍令部長は回訓案に反對の議論を述べた。其後で、岡田は付け加へて、併し政府が此回訓案で決定されるならば、海軍としては其範圍内で最善の方法を講ずるより外はないと云つた。加藤は默つてゐた。別に岡田の云ふ事に反對をしなかつた。これが政府をして加藤軍令部長は回訓案に暗默の同意を與へたものと思はしめた。そして政府は樞密院に於て、回訓案は軍令部長の同意を得たと突張つた。今でも、實際あの時は、軍令部長も同意してゐたのであらうと云ふ人もある。

岡田の意見は軍部で兵力量を如何に決定しても、それ丈けの兵力を備へる金は軍部が持つてゐるのではない。金は議會の協贊を經て初めて出來るのである。それ迄は紙の上の兵力量に過ぎない。紙の上の兵力量を兎や角云つて見たつてつまらない。それよりに實際海の上に浮んで出る兵力を問題にした方がよいと云ふのである。最後には議會が財布の口を握つてゐると云ふ所まで見透しを付けてゐる。だから此方が大局を見てゐる。

軍人が軍部を別世界と心得て、軍部以外に目を閉ぢてゐるときは、如何に其人物が誠心誠意でも、其見識が頑冥固陋になるを免れない。從つて現代の國家では落伍者になる。元より、專門技術の方面に屬する軍人が自分の專門に沒頭する事は當然であるが、苟くも大局の任に當る方面では、其視野を廣くする必要がある。外に向つては日本の陸海軍が此世界を幸福にする爲めに如何なる役割を勤めるかを理解し、內に向つては、國防の力は誰れに依つて築き上げられるかを承知してゐなければならぬ。それは窮極に於て世界的の議會主義、國內の議會主義の承認に到達せねばならぬ。其理解の上に立つ軍人が軍人としての將來を有つ。

日本の陸海軍を築き上げた人々にかうした近代的意識を期待することは無理である。だが彼等の中にも著るしく大局の見える連中はあつた。海軍で云へば山本權兵衞、加藤友三郎の如きがそれである。大局が見えればこそ彼等は共に總理大臣に迄のし上げた。山本は彼れの第二次內閣のときは只鬼面人を驚かすのみで、內容は如何にも空疎であつた。たがそれより以前に日本の海軍をして、世界の大海軍の一たらしめた功は彼れに歸せられる。彼れが少壯時代、外國に遊んでゐたときも、彼れは只軍人としての專門的技術を覺えるよりは、寧ろ日本の海軍を如何に組織するかと云ふ事を目標にして勉強してゐた。今度の倫

敦條約で海軍が騒いだとき、彼れは少しも口を出さなかつた。今の海軍巨頭で彼れの息のかゝらぬ連中はないのだから、彼れが活動すれば相當に有效であつたと思はれた。然るに彼れは、現役でもない自分が出る幕でないと云つて一言も賛否を云はなかつた。それを物足らぬ如く云ふ人もあるが、今は却つて山本には奥床しい所があると賞める人が多い。

加藤友三郎は純粋な軍人であつたが頭が冴え切つて、物靜かな落着いた人であつた。彼れは原敬内閣の海軍大臣として、華盛頓會議の首席全權となつた。其當時日本は八八艦隊の堂々たる計畫を持つてゐた。だが、加藤は此堂々たる八八艦隊を動かす金は、日本にはないと云ふ事を知つてゐた。身動きの出來ない鎧を着るよりは、寧ろ身輕になつた方がよい。若しそれで相手の武器をも減少さす事が出來れば一層利益だと、此見地から對米六割を承諾した。今の加藤寛治大將は其時も七割説を固執したが、加藤全權は條約は自分が決定するのだと云つて、取合はなかつた。それで隨員加藤の方は治まつたのである。視野の廣いものが、視野の狭いものを包容するのは容易なものだ。

今度の倫敦會議に關しては財部海軍大臣は加藤寛治大將を包容し得なかつた。尤も今度は加藤の地位が上つて、軍令部長であつたからでもあらう。彼等は對立抗爭して、加藤が先づ辭職した。それは不思議でない。只不思議なのは、財部海相が、自分と抗爭して辭職した軍令部長を一段上の軍事参議官に推薦し、そして、自分との抗爭を續けさすやうにした事である。餘りに人が善過ぎると云はれても仕方がない。

倫敦に於ても、財部全權は一度は日米妥協案に賛成したのである。所ろで、其後に其決心がグラ付いた。本國の海軍部内からの電報に動かされたのであらう。これが倫敦に於ける他の使節の憤慨の種になつた。これは財部個人の性格にもよる事であらうけれども、制度の罪もある。海軍大臣と云ふ職責が政治家と軍人との二重人格である。其職責に含まれてゐる内部の矛盾が此所に現はれたのだとも云へる。

倫敦に往つた連中は云つて居る。英米の軍人も日本の軍人と同じく、盛んに軍人本位の議論を主張した。併し異る所は、英米の軍人は最後は内閣が決定するものだとあきらめてゐる。内閣の決定は國民の決定である。それに服從して何の恥づる所があるかと云ふ態度である。軍部が政府と對立抗爭すると云ふ事は國の醜態であると共に、國の能率減少である。

財部海相が退いて、安保清種大將が其後任になつた。此人は溫厚の長者と云ふ風がある。風波の荒かつた海軍部内も、彼れの下に少康を得るであらう。だが、海軍が面目を新らたにする

のは次ぎに控へてをる俊才が表面に立つときであらう。次官の小林躋造、呉の野村吉三郎、横須賀の大角岑生は何れも新時代の空氣を呼吸してゐる人々だ。前の次官であつた山梨勝之進は立派な政治家である。前の軍令部次長末次信正中將は其政治家振りが祟つて今閑地に就いてゐるが、純粹の軍人として倘將來がある。此等の人々が第一線に活躍するとき、海軍の黴臭さは何處かに飛んで了うであらう。少くとも國内に於ける小さな紛爭に日も尚足らずと云ふ如きはなくなるであらう。

陸軍には故山縣有朋の傳統が殘つてゐる。元より日本の陸軍の基礎を築いた者として、彼れには沒すべからざる功績がある。日本に徴兵制度を布いたのが彼れであるが故に、此所に陸軍の基礎は出來た。彼れの官歷は陸軍卿、參謀總長、內務大臣、司法大臣、樞密院議長、內閣總理大臣と云ふ如く、多方面に亘つてゐる。晩年の彼は陸軍の大御所、官僚の大御所、政界の大御所であつた。彼れの直系子分で總理大臣になつたものに、桂太郎、寺內正毅、田中義一があつた。其何れも長州出身の陸軍大將、陸軍大臣の經歷を有つてゐた。其中の田中は山縣死後に政友會總裁を經て、總理大臣になつたのであるが、それ迄になる地位は山縣庇護の下に作られてゐた。

山縣はかうして軍部のみならず、一般政治の方面に於ても、彼れの系統の人々をして支配的地位に就かしめる。そのやうにする爲めには山縣一流の用意周到さを以て制度の組織からして準備したのである。即ち陸海軍大臣を現役大中將に限つた事も(後に山本權兵衛內閣に依つて豫後備迄擴げられる)、帷幄上奏權も、彼れが拵らへた制度である。此制度に依つて、軍閥は內閣を脅かすも起すも自由になつたのである。二ケ師團問題で陸軍大臣上原勇作が第二次西園寺內閣を潰した事も、第一次山本內閣の次ぎに、清浦內閣が海軍の加藤友三郎の爲めに流產になつたのも、皆軍部大臣が大中將でなければならぬと云ふ制度の結果である。山縣は軍人として內閣の死命を制する制度を作つたのである。

山縣が一般政治組織に對して、進出する方法は、恰も戰場に臨むだ時と同じく、一つの陣地を取れば其處を要害堅固の城廓に築き上げて、再び敵に取られないやうにする事である。彼れは陸軍を築き上げると共に軍閥の權限を擴張して、文官共に輕蔑されないやうにする。彼れが二度目に首相になつた時代に樞密院の權限を擴張して、樞密院を官僚の牙城にした事は茲に說明するには餘りに有名な事柄である。彼れは同時に文官任用令を制定して、政黨人の侵入に對して官僚城を護衛する鐵條網とした。彼れは戰略を一般政治にも應用したのである。彼れは殊

に軍部が愛した。それで軍部の爲めに城を高くし、濠を深くして、國民に臨むと云ふ制度を作つた。それが却つて陸軍に禍いしたのである。

山縣が創造した制度は大部分今日迄殘つてゐた、軍部と軍部以外の政治組織及び一般國民との融合一致を妨げてゐる。濱口内閣になつて唱へられる軍制改革は其所を狙つてゐるとは思はれない。併し日本の陸軍を國民が衷心より支持し後援する陸軍とならしめる爲には山縣の殘した制度を改革する必要がある。

今年六月宇垣陸相が病氣の故を以て辭意を表明したとき、濱口内閣は極力其留任を求めた。そして彼れを留任せしめる爲めに陸軍次官阿部信行中將を無任所大臣とし、陸軍大臣臨時代理とする迄の手續きを取つた。内閣は何故に宇垣の留任をそれほど必要としたか。その理由は當時種々に風説されたが、眞實の所は、内閣は宇垣ならずしては軍制改革は行はれないと見たからである。其半面には宇垣は改革を斷行する意志と力を有つてゐる事が察せられる。

内閣の希望する軍制改革とは、只單に陸軍の費用の節約にある。併し此れ丈けも今年編成される豫算には間に合はない。宇垣の病氣が永引いた事が其原因になつてゐる。玆にも陸軍特別の事情がある。外の官省であつたならば大臣の命令が直ちに行はれる。陸軍では山縣時代以來一つの遺風がある。山縣生存中は、如何なる陸軍大臣でも、山縣の承認を經ずしては大なる改革を行ひ得なかつた。今日軍制改革をするにしても、山縣は生存しないが、元帥、軍事參議官と云ふ如き陸軍巨頭の諒解を得る必要がある。下手に此等の巨頭に交渉すれば、出來る改革も出來なくなる。それ故改革は宇垣全快迄待たなければならぬ事になつたのである。それでも日本の陸軍に軍制改革の企てられる事が、陸軍々人も亦新時代に向つて一歩踏み出さんとしつゝある證據だと云へる。かくして、日本の軍部も、時の流れに從つて、日本のそして、世界の議會主義に合流して行くのである。それが却つて、日本の軍人に、名實共に國民と共に活きると云ふ道を開くのである。

一九三〇年の顔

大宅壯一

一、一九三〇年の魅力

私は昨年來、即ち一九二九年の暮に、「一九三〇年の魅力」と題して、或る週刊雜誌にこんなことを書いたことがある。

「年末から年始にかけて、あらゆる新聞雜誌は、少し大袈裟にいふならば、『一九三〇年』といふ活字で埋つてゐる。まさに『一九三〇年』の洪水だ。

もちろん、暮が迫つて來ると、街頭に『大賣出し』ののぼりがひらめくと同樣に、大抵の新聞雜誌には、その年の清算的回顧談が現れ、門前の松飾りと共に、新しい年への希望が甦つて來るのは、毎年の定例で、ちつとも珍らしくはない。だが、それにしても今年は特別だ。『一九三〇年』といふ年は、どこか特別の魅力があるに違ひない。

一九二八年から二九年に移つたところで、ただ最後の八が九になつたゞけだが、



一九三〇年になると感じがすつかり違つて來る。つまり十九世紀から二十世紀になつたやうなものだ。さうすると『一九三〇年』のもつてゐる人氣は、結局この數字的錯覺から生れたといふことになる。

それにも拘らず、民衆は盛んに『一九三〇年』に呼びかけてゐる。そこで逆說的にいへば、『一九三〇年の魅力』は、今日の民衆が到る處で疲勞し、厭惡し、困憊し、絕望し、苦悶してゐるといふ事實に存するのである。」

その「一九三〇年」も、もはや剩すところ幾日もなくなつた今日、不景氣と失業の洪水の中へ、全民衆の拍手を浴びて登場したこの人氣男「一九三〇年」について、私は再び筆を執ることになつた。希望でも幻想でもない現實の「一九三〇年」を檢討しなければならないのだ。

彼は果して、「未曾有の難局」を打開してくれた、或は少くとも、打開しうる可能性を示してくれた英雄であつたらうか？　それとも單なる數字的錯覺をもつて大衆を欺いた詐欺師であつたらうか？

試みに、彼がこの一年間にわれ〳〵に與へた印象に基づいて、「一九三〇年の顔」を心に描いてみるがよい。それを大寫しにしてみて、現れて來る形相を戰慄なしに凝視しうるものがあるだらうか？　明るい朗らかな微笑の影のたゞ一つをさへ見出すことが出來るであらうか？

一九三〇年の時代的意義や本質を究める前に、われ〳〵はまづ彼が示した形相を解剖してみる必要がある。

二、エロ・グロ・ナン

東洋一を誇る某大印刷會社の職長の話すところによれば、鑄造しても鑄造しても、すぐにまた不足をつげる二つの活字がある。それは「女」と「階」の二字であるが、殊に前者に對する需要は最近急激に増大し、一萬個のストックが大抵いつでも、すつかり出拂つてしまつてゐるといふことである。

「階」はいふまでもなく「階級」その他の熟語をつくるのに必要な字であるが、「女」といふ字が使用される場合は、今更説明するまでもないであらう。しかもこの二種の活字に對する需要が最近幾何級數的に増大したといふこの一事實は、一九三〇年の社會相を具體的に特色づけるものではなからうか？

「階級」と「女」――この二つのコンビネーションによつて、何人の頭にも浮んで來るものは、あの有名な獨逸の漫畫家ゲオルゲ・グロッスの作品である。

ところで、一九三〇年の「階級」的特色の方は、後で追々述べることにして、もう一つの特色である「女」――これを因數分解すればエロ・グロ・ナンとなる――の方から始めよう。

エロ・グロ・ナン、即ちエロチック・グロテスク・ナンセンス的傾向は、一九三〇年の日本の顔を毒々しく彩つてゐる白粉であり、口紅であり、眉墨である。これまで一部「尖端」層の相言葉であつたエロ・グロ・ナンが、今や酒や煙草と同じやうな生活必需品となつて、末期社會の全大衆を風靡し始めた。

「エロ」がそれ自體獨立した一個の商品として、或は他の商品の間に混入されて、素晴らしい賣行を示したのは、確かに一九三〇年の重要なる特色である。

キネマや演劇の營業成績は、エロの含有量に比例するやうになつた。そしてつひに、「エロ百パーセント」の、即ちエロ以外に何等の「不純物」をも含まないレヴユウが急激に擡頭し、他の興行物を壓倒して全盛を極めた。

文壇では、「無内容」を肉色のサックの中に入れたやうな「文學」が、自ら「新興藝術」と名乘つて、「キング・オヴ・キングス」の如く華々しく登場した。あらゆる新聞雜誌出版物において、エロ・グロ・ナンがジャーナリズムの味の素となつた。

梅原北明一派及びその亞流のウルトラ・エロが「非合法」の地下に潛り込んで盛んに活躍すると共に、「非合法」と「合法」の間の狹いセーフテイ・ゾーンを巧みに縫うて行く丸木砂土が一躍時代の流行兒となつて、「中間物」の王座を占めると共に、「創作」の分野にまで進歩した。「エロのはいらない「藝術」は、氣の拔けたビールのやうに商品價値を失ひ始めた。

寢室が玄關となり、床の間となり、つひには街頭にまで進出して來た。

社會組織が××に瀕して來ると、調和と均齊に代つて、破調と畸形が美と享樂の對象と

なる。感覺が意志を抑へ、理智を驅逐して生活の支配權を獲得する。

感覺の對象は刺戟である。ところで、刺戟は徹底した唯物主義者である。刺戟を規定するものは量であつて、質ではない。そしてこの刺戟の暴君にとつての最大の寵姫は、エロとグロであることはいふまでもない。

理智が方向を見失つて首を縊つたものがナンセンスである。ナンセンス文學とは、この「首を縊つた理智」の文學である。それがいはゆる「自殺階級」の作家によつてつくられ、同じ心理によつて支配されてゐる讀者層に喜ばれるのはそれがためである。しかもその層は、嘗つては「人格主義」の夢に生きた智的貴族階級から、戰鬪的プロレタリアを除いた全大衆の間にまで、漸次擴がりつゝあるのである。

では、彼等の理智を首縊らせ、つひにその生活指導精神を放棄せしむるに到つたものは何であるか？

三、暴露地獄

細田民樹の「眞理の春」その他が機縁となつて、いはゆる「暴露文學」が一九三〇年の文壇を特色づけた。だが、この「暴露」的傾向は、單に文學の範圍内にのみ現れた現象ではない。否、逆に文學はこの時代の一般的傾向を反映したにすぎないといへるであらう。



政治界、財界、教育界、宗教界等々……社會生活のあらゆる分野において、從來陰蔽されてゐたすべての欺瞞とからくりが、今年ほど徹底的に、大衆の前に暴露された年はなかつた。全く一九三〇年の日本は文字通りに暴露地獄であつた。

裁判所と新聞紙面を賑はせた主なる「疑獄」だけを擧げても、小川前鐵相等の「四私鐵疑獄」、小橋前文相等の「越鐵山手急行疑獄」、山梨前總督等の「朝鮮疑獄」、天岡賞勳局總裁の「賞勳疑獄」、東京市會議員連の「板船、京成疑獄」、藤田謙一等の「合同毛織事件」、鶴見祐輔等の「明政會事件」、乾新兵衞等の「會社乘取事件」等々、數へきれないほどある。そして之らの「疑獄」や「事件」に連座したスターたちの起訴、收容、保釋、公判等に關する記事が、毎日のやうに、新聞に現れその噂が人々の口にのぼつて、絶えず眼や耳を刺戟しつゞけて來たのだ。數千年來搾取と欺瞞に馴らされて來た一般大衆は、いかに善良なりといへども、かやうな「事實」につゞけざまに直面させられては、現在自分たちを支配してゐる連中の正體を見究めざるをえないであらう。

全くこれらの「疑獄」や「事件」は、一九三〇年におけるもつとも有力なる大衆啓蒙運動であつた。修身の教科書や講談社の訓へに

従つて「えらくなる」といふことが何を意味するか、「えらくなる」ための手段や方法は何であるかを前記の人々がはつきり具體的に示してくれたからである。

死んだ田中義一が「總理大臣」として成し遂げた最大の功績は、多年全國民の憧憬の的であつたこの神聖なる地位を、身をもつてカリカチュアライズしてくれたことであつた。

小川前鐵相の演じたもつとも偉大なる役割は、既成政黨の使命について、いかなる無産黨の辯士よりも雄辯に、全大衆に向つて、端的に、具體的に説明して聞かせたことであつた。

天岡賞勳局總裁が新時代から永久に感謝さるべき點は、帝國主義の意識的並に無意識的××が、野蠻人が南京玉の首飾りを喜ぶやうに珍重する××から、「名譽」のメッキを剝ぎとつてくれたことである。

更に又、かの講談社的英雄のカリカチュア鶴見祐輔の「明政會事件」への登場は、一九三〇年を特色づける事件として逸することの出來ないものである。最近の日本における「立身出世」のレコード・ホールダーとして、小説「母」及び「子」の作者として、善男善女の羨望と憧憬を一身にあつめてゐたこのメリケン政治家が、今年の總選擧では、前回には最高點で當選した地盤で見事に落選したのは、確かに一つの「生きた教訓」であつた。



ブルジョア文壇の「大御所」菊池寛の「モデル事件」「暴行」「脱税」、同じくブルジョア文學の一變種である社會民主々義文學の本丸「文藝戰線」派の内部に起つた「代作事件」及びそれにからまる同派幹部連の醜聞暴露もまたこの一般的傾向の文壇的反映として甚だ興味がある。

いつの時代においても、亡び行く階級は、個人的にも家庭的にも、また集團的にも、いたるところに暴露さるべき多くの「醜聞」が藏してゐる。自己の「醜聞」に對する異常なる恐怖は、他人の「醜聞」に對する病的興味となつて現れる。こゝに末期社會における暴露地獄の必然性が潜んでゐるのだ。一九三〇年の日本が、以上のべたやうな「疑獄」や「事件」や「醜聞」で滿たされてゐるといふことは敢て怪しむに足りない。それらがついに、個人的にも集團的にも、陰蔽しきれなくなつたところに一九三〇年の歴史的意義がある。しかも暴露された一つの「事實」の背後には、それと有機的に結びついてゐるいかに多くの「事實」が匿されてゐるかといふことを大衆に見透かされた點からいつて、それは支配階級自身の手によつて行はれた、被支配階級の解放のためにもつとも有效な「宣傳」「煽動」の一手段であつた。

四、「學校騷動」の勞働爭議化

「學校騷動」は日本の名物であり、大抵の學校の年中行事の一つである。だが、それが今年ほど量的にも質的ほど深刻化した年はない。これまた一九三〇年の時代相として見逃すことの出來ないものである。

立正大學、浦和高等學校、大谷大學、富山高等學校、日本大學、松山高等學校、第三高等學校、佐賀高等學校、臺北高等學校、佛敎專門學校、東京音樂學院、東京女子藥學校、日本女子大學校、早稻田大學等々……手許にある古新聞をちよつと繰つてみたゞけでも、たちまち十指に餘る「學校騷動」を拾ひ出すことが出來る。ほとんど一年中を通じて、どこかの「學校騷動」の記事が出てゐない日とてはないくらひである。

文部省の調査によれば、最近一ケ年間における「學校騷動」は、約三十件、處分された學生の數は六百名に達するといふ。更にもしその參加人員を調べようものなら、まさに「戰慄すべき」數字を示すであらうと考へられる。

これらの中で、一九三〇年度における「學校騷動」の「惡化」もしくは「深刻化」として特に注目すべきものは、日本大學(六月)、第三高等學校(七月)、早稻田大學(十月)、等に起つたものである。

日本大學のは、學校側が××隊と結んで學生たちに向つて挑戰し、亂戰狀態に陷り、つひに百名の負傷者を出して、全く「未曾有の不祥事」を現出した。學校の惡辣な營業政策があまりに露骨すぎたゝめ、珍らしくも學校側の敗北に了つたが、そこに到達するまでの過程がもつとも深刻なる勞働爭議を髣髴させた點で注目さるべきである。

第三高等學校は、昔から有名な盟休學校であるだけに、多年の經驗と訓練を經て、最初から堂々と學校側に對戰し、統制部、連絡部等の組織も整然たるもので、つひに學校を「占領」するにいたつたが、これまた××隊に包圍されて屈服し、二十五名の退學處分を筆頭に夥しい犧牲者を出して大敗した。しかしその要求中に、「代表會議の自主化」といふ項目が加へられてゐるのは注目すべきで、後の早稻田大學騷動の先驅をなしたものといふことが出來る。

早慶野球戰の入場券問題に端を發して、つひには「全早稻田學生聯合委員會」の公認要求にまで進展した早稻田大學騷動は、ごく最近のことで今更說明するまでもないが、それは參加人員の數からいつて、「學校騷動」としてはもつとも大規模なもので、しかも從來の「學校騷動」のみならず、勞働爭議の戰術までが巧妙に取り入れられてゐる點からいつて、一つの歷史的事件であるとさへいへるであらう。

聞くところによれば、早慶野球戰の入場券が早稻田大學當局の手を經て、日清印刷、日清生命等々、大學そのものと同一の企業組織に屬する諸會社へ渡つた數は夥しいものであるといふ。單にこの一事實をもつてしても、「大學」の本質がいかなるものであるか、いかなる方向に向ひつゝあるか、また「スポーツ」なるものがそれ自體學校その他の企業組織の有力なる廣告機關として、學生一般從業員の目かくしとして、いかに大きな役割を演じてゐるかゞわかる。

普通、「學校騷動」は、革命前のロシヤ、支那、日本等、文化的水準の低い國々にのみ見

受けられる現象であるといはれてゐる。その當否は別問題として、これらの三國の青年の心理には、一種の共通性のあることは事實である。

　これらの三國はいづれも、短時日の間に先進國の文化を取り入れた。さまぐ＼な「眞理」が一時に輸入された。各人はそれらの諸「眞理」の中から、銘々階級的個人的にもつとも都合のいゝ「眞理」を選び出して、自己の生活武器とした。その選擇に際して青年はつねに「自由」である。この「自由」が、彼等をその階級的規定から或る程度まで脱却せしめ、傳統と權威への反逆兒たらしめ、或る段階において、本質以上に進歩的な役割を演じさせるのである。「學校騷動」もその一つの現れである。最近それが著しく尖鋭化したのは私立學校においては資本主義一般の風潮に從つて營利主義が露骨になつたゝめであり、官立學校においては支配階級の反動政策が意識化し始めたからである。そしてつひに、「學校騷動」は多くの場合勞働爭議の形態をとるにいたつた。彼等の「盟休」は、この知識の市場の暴利に對する集團的抗議であり、或る特定の市場に對する非買同盟であり、更に進んでその市場の支配權への參與、もしくはその支配權の××である。

　騷動が起ると、學校當局はきまつたやうに「背後に左傾分子の策動」云々をする。だが



今度の早稲田騷動の場合に徴して明らかであるやうに、それは學校當局の責任轉嫁の口實にすぎない。もし「左傾」してゐるとすればそれは、大部分の學生である。今日では或る程度の「左傾」は常識である。

　この學生一般の「左傾」に對して、文部省はいかなる對策を講じたらうか？

　巨額の奬勵金を投じて全國直轄學校の學生主事の間から募集した文部省懸賞「マルクス主義あら探し」は、果してどの程度まで成功したか？　生徒一人あたり約三十錢の「思想善導費」は。生徒の茶話會費となり、いはゆる「思想善導饅頭」と×××が、果してこの三十錢の「猫いらず」でもつてマルクス主義を退治ることが出來たであらうか？――これは一九三一年に殘された興味ある課題である。

五、神と資本家

　相當知名の文士で、突如として佛門に歸依するものが續出したのは、一九三〇年の特殊現象として甚だ興味がある。

　わが國におけるプロレタリア文學運動の先驅者として、代表的なアナーキストの一人として、多年筆に、口に、反資本主義的思想を表明して來た宮島資夫が、今春來妻を隱し、洛西嵯峨天龍寺の毘沙門堂の堂守となつてゐた。

日本プロレタリア作家同盟員として、また一時は映畫從業員組合の「指導者」の地位に立つたこともある「マルキシスト」今東光が、天台宗延暦寺派の一僧侶の指導の下に佛門に入り、つひに得度式まで受けた。

また例の「千代子夫人讓渡事件」によつて異常なセンセーションを捲き起した明治大正文壇の巨匠谷崎潤一郎も、その後高野山に入つたと傳へられてゐる。

もつとも、三人の文士が佛門に入つたといふことそれ自體は、別に大した意義があるわけではない。突然「世の無情を感じて出家」するといふやうなことは、決して珍らしいことではない。

しかしながら、時代心理のもつとも鋭敏なる反映である作家が三人も、ほとんど時を同じうして出家したといふことは、それ〴〵個人的にのみ理解さるべきものではない。殊にその中の二人が、これまで反資本主義的な團體又はグループに屬し、嘗つては何等かの意味において進歩的な役割を演じたことがあるといふ事實は、一般智的大衆にとつて普遍的な一つの問題を提出するものである。

出家する前の宮島資夫は、アナーキストといふよりは國家主義的色彩の方が強く、一部の人々から、ステキスト（ステート・アナーキストの略）と呼ばれてゐた。このことは、彼の反資本主義思想は新興ブルジョアジーに對するプチ・ブル的反感にすぎず、その「反逆心」は旗本に對する町奴のそれに類するものであり、マルクス主義の思想的竝に實踐的擡頭と共に、その反資本主義思想は轉じて反マルクス主義思想となり、再轉して反動の陣營に接近したことを示すものである。



それは宮島資夫のみならず、從來の日本のいはゆる「アナーキスト」の大部分についていひうると思ふ。嘗つては「アナ」「ボル」と竝び稱せられて、反資本主義の陣營を二分してゐたアナーキズムも、今日では雜誌「婦人戰線」に據る少數の婦人「アナーキスト」を除いて、ほとんど行方不明になつてしまつた形である。

アナーキズムそのもの、階級性は別問題としても、日本の「アナーキスト」はすべて、少くとも私の知つてゐる限りでは、「日本でアナーキストは自分一人だ」と信じてゐる。このことは極言すれば、日本に「眞正のアナーキスト」が一人もゐないことを意味する。

府下千歳村で蘆花に倣つて半農的逃避生活を送つてゐる石川三四郎は、アナーキストといふよりはむしろトルストイアンではないか？

生田春月が自殺し、加藤一夫が退いて、今日文壇に殘存してゐるほとんど唯一のアナーキストともいふべき新居格は、反資本主義性

又はプロレタリア性をほとんど喪失して、文化學院的文化主義者、といふよりはむしろ文化趣味者に還元してしまつたではないか？

行方不明になつたアナーキズム――これまた一九三〇年の文化史的特色の一つに數へられるであらう。

今東光の「出家」は、宮島資夫の場合に比して、遙かに必然性を缺いてゐる。後者の場合は、その階級的批判は別問題として、そこに到達するまでの過程に一種の必然性が感じられる。だが、ナップの映畫同盟を除名される前後から「出家」するに到るまでの今東光の行動は、全然誠實性を缺いてゐる。今にしてみれば、菊池寛に「反逆」してプロレタリア派に投じた彼を信用することが出來ないと同樣に、佛陀の弟子としての彼をも信ずることが出來ない。彼は佛門に入ると同時に、昨日まで自分が屬してゐた陣營に惡罵を放つてゐるが、それは彼の人間的不誠實を立證するばかりである。

しかしながら、その過程に多少の必然性や誠實性を缺くと缺かざるにかゝはらず、階級對立が今日の如く尖銳化した社會において、「出家」が何を意味するかは、今更說明するまでもないことである。

客觀的現實と主觀的欲求との溝渠が、容易に越え難く感じられたとき、大低のインテリゲンチヤは忽ち現實から脫落する。この脫落が彼等の眼には、「現實より飛躍」と映ずる。「出家」は自殺と共に、この脫落乃至飛躍の一形式にすぎない。今日いかに多くのインテリが、カフヱに、バーに、ダンス・ホールに「出家」しつゝあることよ！

支配階級の反動的攻勢がます〳〵××化すると共に、インテリゲンチヤの間からかうした脫落者乃至飛躍者が、夏の夜の流星の如く續出するであらうことは明らかである。しかもこの脫落者乃至飛躍者を歡迎する「神」「佛」その他これに類するものが、裏では巧妙に支配階級と手をつないでゐる、否、實は支配階級の番犬の一種にすぎないことはいふまでもない。

六、豐作饑饉

一九三〇年二月十一日の「金解禁」は、現內閣の實施したもつとも重要な政策の一つであつた。この金融資本主義のからくりは一般大衆に、圓價の昂騰を恰も國家の財政的實力の發展乃至恢復であるかの如く見せかけて、近き將來における「景氣挽回」を約束した。だが、その結果はただ、一部金融資本家がこの金の價値引上げによる差額から莫大の利益を獲たゞけで、「不景氣」は加速度をもつて深刻化し、殺人化し、各家庭に、街頭に、失業者の氾濫を招致した。

この戰慄すべき世相を如實に反映してゐるものは、每日のやうに新聞の三面を鮮血をもつて彩つてゐる「家族心中」である。封建的家族主義がなほかなりの强靭性を保つてゐる現在の日本において、失業のために死を選ばねばならないといふことは、文字通りに餓死線上に追ひつめられることである。

一九三〇年の日本の全失業者は、政府の「調査」によれば三十萬內外だといはれ、實際は百萬を遙かに突破してゐるともいはれてゐる「失業」の範圍や程度を精密に知ることは困難であるが、いづれにしても、中流以下の家庭がほとんどすべて破産に瀕してゐることは事實である。職業にありついてゐる個人も

しくは家族といへども、絶えずそれを失ふ危險に曝されてをり、その周圍には幾人かの失業者又は幾組かの失業家族を衛星の如く抱へこんで、これまた實質的に、心理的に、失業者と同じ水準にまで引下げられてゐる。

東京に入りこんでゐる各街道筋には、徒歩で「歸鄕」する失業勞働者の群が陸續とつゞいてゐるといふ。だが、彼等はすべてもと〳〵故鄕を追はれたものであり、しかもその故鄕たるや、都會と同樣に否都會以上に、窮乏のどん底に陷つてゐるのである。

今や全國の農村、山村、魚村は、物凄い呻き聲をあげてゐる。昭和の「聖代」に木の根を食つて生きてゐる村があるといふ有樣である。

それでは、今年は全國的凶作であつたかといふに、皮肉にも、一九三〇年はレコード破りの大豐作であつた。こゝにおいて全國的な「豐作饑饉」を現出し、資本主義社會の胎內に祕められてゐる根本的な矛盾が、露骨に、端的に、大衆の前に抉り出されたのである。



これまで「饑饉」といふものは、自然對人間の鬪爭における人間側の敗北を意味してゐた。しかしながら、その鬪爭において、「自然」又は「神」の假面を冠つて民衆を窮乏のどん底に陷れたものは、多くの場合、人間の中の裏切者である「地主」であり、「資本家」であつたのである。かくて自然對人間の鬪爭は、結局人間對人間の鬪爭、搾取階級對被搾取階級の鬪爭に還元さるべき時が來たのである。一九三〇年の「豐作饑饉」は、一面において、此關係を全大衆にはつきりと認識させる絶好の機會をつくつたものであるともいへるであらう。

生糸も米も、遙か生産費以下に暴落した。百姓は娘を賣つて肥料代を拂はねばならなくなつた。山村の炭燒は、一日九錢の勞銀で一家を養つてゐるといふ。

この全國的な殺人的窮乏に對して、嘗つて數億の國庫補助金をもつて、臺灣銀行その他を救濟し、生糸ブローカーの損失を補償した政府は、いかなる對策を講じつゝあるだらうか？　この金融資本の完全なる××から、大衆は何を期待しうるであらうか？

新聞の報ずるところによれば、ほとんど毎日二三十組の「陳情團」が、內務、大藏、農林の各省に向つて押しかけて來るので、各省とも新たに警官の「守備隊」をおいて、これが防止撃退につとめてゐるといふ。

――かゝる狀態が果していつまでつゞくであらうか？

七、爭議・暴動・市街戰

一九三〇年は又、東京市電、[illegible]、富士

紡、鐘紡、洋モス等を初め、全國の各主要產業部門において、大罷業が頻發した年であつた。しかも本年度の爭議の重要なる特色として注目すべきことは、これらの爭議のほとんどすべての場合において、爭議團の戰鬪的分子が指導的地位に立つてゐる社會民主々義的幹部のコントロールの外に出て、著しく硬化し、爭議が長びくに從つて漸次暴動性を帶びて來たことである。しかもその「暴動」性たるや、從來の爭議の場合のやうに、偶發的なものではなくて、明白に意識化し、愼重の準備と整然たる組織の下に行はれるやうになつた。組織勞働者の多くが、戰鬪的マルクス主義者によつて指導されてゐる××的勞働組合に屬するものも、階級的裏切の常習犯の勢力下にある協調的勞働組合に屬するものも、爭議に際して著しく實戰化し、××化したことは、動かすことの出來ない事實である。

メーデーに際して、各地で武裝した勞働者が隊伍を組んで××隊の虛をついたといふことも、これまでになかつたことである。

東京市電の大罷業においては、右翼幹部の裏切りが徹底的に暴露せられ、裏切者は武裝した××隊によつて長い間守護せられねばならなかつた。

最近の洋モスの爭議においては、組織的な街頭デモが夥しい×××と正面衝突して、多くの負傷者を出し、諸新聞はこれを「市街戰」として報じた。日本で勞働爭議が一般に「市街戰」の名をもつて呼ばれたのは、恐らくこれが最初であらう。



(7)

又單に都會の工場勞働者ばかりではなく、各地の貧農も著しく××化して來た。新潟、秋田、山形、山梨等の小作爭議は申し合はせたやうに××化した。

但し今年の二月に行はれた總選擧には、「無產黨」は一般の豫想を裏切つて、前回よりも更に三名を減じ、文字通りに慘敗した。左翼社會民主々義の偶像大山郁夫は、東京府下の知識階級が壓倒的多數を占めてゐる選擧區において、右翼中間派の候補者と爭つて勝ち、躍り上つて喜びながら、「大衆の支持」を絶叫した。

勞働總同盟竝に社會民衆黨の「育ての親」鈴木文治は、前回には最高點で當選した大阪の選擧區において見事に落選し「大衆は未だ目覺めない！」と慟哭して、ブルジョア新聞からさへ嘲笑を買つた。(因みに勞農ロシヤでは、日本の勞働總同盟竝に社會民衆黨は、「右翼社會民主々義」でなく、「反動團體」の中に入れて分類してゐるさうである。)

數年來私鬪的勢力爭ひに沒頭してゐた「中間派」諸黨が合體して全國大衆黨をつくつた事や、「合法的左翼」を標榜する勞農黨の内部に、「解消運動」なるものが起つて動搖を來し

た事や、最近また「全無産黨合同」の呼聲が起つた事等も、一九三〇年の日本の勞働運動竝に無産政黨運動を特色づける事件であらう。「勞農黨華やかなりし頃」の夢が忘れられなくて、つひに左翼から脫落した大山郁夫が細迫兼光、河上肇その他の「同志」から置き去りを食つて、「一人になつても勞農黨を死守する！」と叫んでゐる姿は、一つの憫れむべきカリカチュアである。

又日本における「マルクス主義研究の最大權威」河上肇は、一ケ月前に除名した「解消派」と握手して、その現實認識の低度をすつかり暴露してしまつた。

資本主義社會における「合法」は、闘爭を通してのみ獲らるべきものであつて、退却による「合法」は敗北であり、反動への接近にすぎない。大學の研究室における二十年の「マルクス主義研究」が、戰鬪的勞働者の一ケ月の實踐に劣ることを實證しえたのは、一九三〇年において日本のプロレタリアート竝に進步的インテリゲンチャに與へられたもつとも大きな教訓の一つである。

かくて「産業合理化」の進展、「不景氣」の殺人化と共に、勞資の對立は急激に實戰化し、それに對する資本家の××的攻勢もいよいよ露骨になつて來た。治安維持法や××××だけでは間に合はなくて、私有財産擁護のためには切捨御免の「盜犯防止令」發布となり、「催涙ピストル」の發明となつた。

一九三〇年の日本の顏――少くとも私の眼に映じた大體の輪廓は、以上のデッセンによつて諸君の前に浮び上つて來るであらう。そして今われわれの前に、全然新しい別な「魅力」をもつて迫りつゝある「一九三一年の顏」は、誰か別な人がもつと正確に描いてくれるであらう。

編輯者雜記

◇

一九三〇年は終らんとする。躍進に次ぐ躍進をつゞけた本誌は今茲に本年最終の素晴らしい成果をひつさげて讀者諸賢に見えるを悦ぶ。

◇

特に巻頭堂々と一九三〇年世界經濟總觀を得たのを誇りとしたい。これは實に同學同攻の眞摯新鋭の學徒の言葉通りの共同制作であり、かゝる方面に於ける劃期的な企てだ。本稿に於ては現在資本主義の本體を暴露した。爾后毎月、讀者の支持の續く限り、多大の犠牲を拂ひつゝも之を繼續し、順次その展望を世界資本主義並に社會主義各國に及ぼすであらう。來月は特に重大なる經濟的危機を持つ獨乙を取りあげ、來々月は更に南米に及ぶであらう。

◇

常に論壇に清新溌剌たる旋風を捲き起す本誌は、又、櫛田・河上・蠟山諸氏に對する大々高田・稻村・向坂諸氏の眞向からの駁撃と、勞農黨解消問題をめぐる河上・大山兩巨頭の一騎打ちとを得て、讀者の待望に應へた。

更に經濟學方法論の階級性を闡明せる塚本(匿名)氏の巨論。其他森戸氏、美濃部氏等々。

◇

評議會鬪爭記と學界鬪閥網とは、本誌ならではの得難き資料だ。前者は日本のもつ最尖鋭な階級的實職であり、後者は半才に亙る究明な努力になれるもの。

◇

懸賞募集は豫期以上の効果を收めた。集まるもの千餘通、涙の裡より五篇を採つた。農業恐慌時代、サラリーメン恐怖時代、中小商工業者没落時代、而もこの大衆失業時代の生々しき具體的事實をここに見られよ。

◇

本誌は實に「諸賢の中央公論」であるが爲めに、あらゆる努力を吝まない。年は間もなく更まる。やがてはちきれる力を以て新春號は諸賢の前に現はれやう。

◇

別掲見らるる如く、全日本を震撼させた階級的暴露文學「眞理の春」の續篇は、愈々本誌新春號より掲載する。新春號の創作欄の偉觀は單に是に止まらない。豪壯溌剌たる内容と相俟つて其の堂々たる顔觸れは必ずや諸賢を驚嘆せしめずにはおかないであらう。

◇

論文、中間物また素晴らしい白眉篇揃ひであることが、洩れ傳へられて既に自然の待望を得てゐるを報告したい。而も優秀なプランは尚机上におどつてゐる。その一斑としては、百%價値の大附錄がある。

かくて堂々群誌を壓して出づる本誌が新春の巨容! 本誌なくして讀者の机上や寂しからん。

◇

尚、出版部として絶大なる歡迎を得た「文壇アンデパンダン」第二回を募集する。實に文字通りの登龍門だ。奮つて名篇力作を寄せられたい。時代は新進作家を要望して已まない。

カラブウ内親王殿下

——世界怪奇實話XI——

牧逸馬

1

食卓の人々は、つと顔を見合はせた。かすかに叩戸の音が聞こえた——やうな氣がしたのだ。

夜の八時過ぎだ。おそい晩飯だ。小作人ドルフ・ホルトン——Dolf Horton——の家である。野良を終つても、何やかや仕事が殘つて、いつも食事が遲れる。英吉利の四月は、春とはいつてもまだ冬の感じだ。八時にはもう眞つ暗で、ことに今夜は霧がある。しつとり濡れた濃い闇黑が戸外に擴がつて、この、ブリストル市に通ずる田舍道は、蓋をしたやうにしづかだつた。

英國グロセスタシヤア州、アルモンズベリイ市——Almondsbury, Gloucestershire——の町外れである。

農夫ホルトンの一家が臺所につゞいた些やかな食堂で簡單な夕食をしたゝめてゐる。いま叩戸の音がしたやうだが、耳を澄ますと何も聞こえないので、一同はまた默つてフオウクを取り上げた。

と、ふたゝび細君が皆を制して、

「あら、誰か來てゐますわ。」

聞耳を立てた。やはり玄關に物音がする。確かにノックだ。あたりを憚るやうに、だが二三度、今度ははつきり聞こえた。内氣な訪問者らしい。氣兼ねしながら、しきりに表ての戸を叩いてゐるのだ。

「何人でせう、いま頃。」

「浮浪人かも知れないよ。」ホルトンはナプキンを置いて、椅子をずらした。「おれが出てみやう。」

「宜御座んすよ。」と細君は起つて、「わたしが出ますわ、もしか變な人でしたら、大きな聲で呼びますから——。」

平和な農村——といふのは、詩や繪で言ふことで、實際は、

當時、手工業から工場制度に移らうとして、人類の經濟生活を根本から搖すぶつたいはゆる産業革命時代、その發源地の英吉利である。新發明の機械に職を奪はれた失業者の大群が、街道の漂盗と化して、日夜大都會から大都會へと鎖を引くやうに浮游してゐる。山火、竊盗、押込み、强請などは何度のことで、この移動人口の流路に沿つた民家では眞に人心兢々たるものがあつた。おまけにこの霧の深い闇夜だ。遠慮ぶかい叩戸に隱れて、何んな狂暴な客が飛び込まないとも限らない――。

ホルトンのおかみさんは怖なびつくりで玄關の戸をあけた。濃い煙りのやうな霧が、白い渦を捲いて流れ込んで來る。

『はい。』濡れた夜の空氣が冷たく低迷してゐる戸外を透かし見ながら、『はい、何誰？』

眼は闇黑に慣れてゐないし、うしろに灯を背負つてゐる。はじめはちよつと何も見えなかつた。

すると、訪問者は、いくら叩戸しても應答がないので、諦めて、一度往來へ出たものらしい。戸が開いたのを見て引つ返してくる樣子だ。さやさやと微かな衣擦れの音が、闇黑の奥から近づいて來る。

――おや、女のやうだが、どこか知つてゐる家の人かしら？と、思つた時、暗いなかから浮かぶやうに光線の範圍へ踏み込んで來たのを見ると、何とも言ひやうのない異裝の人物である。

おかみさんは、無意識に、消魂しい聲を上げてゐた。

食堂に居殘つて耳を立て、ゐたホルトンと娘達は、その大聲で、がちやりとフォウクを置いて突つ立つた。

『あら、誰か來て下さいよ、早く！』

ホルトンは押つ取り刀といふところだ。狼狽てふためいて玄關へ驅け出した。娘たちも怖ごは父の踵を踏んで、おもて口を覗きにくる。

母と向かひ合つて、奇妙な人間が立つてゐる。

第一印象が、扮裝のまゝ東洋劇の舞臺面から脫け出て來たといふ感じだつた。

女である。若い女だ。黑の絹に金で刺繡をした印度風の綏やかな着物を纏つて、髮に金貨を飾り、革草靴を穿いてゐる。じぶんのはうこそ驚いたといつたやうに、圓な眼を見張り、飽氣に取られてゐるホルトン一家の顔から顔へ視線を移して、戸惑ひしたやうに、ぼんやり立つてゐるのだ。

明らかに東洋の、たぶん印度あたりの女であらう。が、この霧の夜、場所は英吉利の片田舍である。何うして印度の女が、まるで地から湧いたやうにこゝへ――曲馬團からでも逃げて來たのかも知れない。しかし、それにしても、曲馬團は田舍に住む者にとつて最も華やかな年中行事の一つだ。近くにそんな興行が掛つてゐるなら、疾うに耳に這入つてゐなければならな

いー―。

女とホルトンの家族と、不思議な睨めつくらがつゞいてゐるうちに、女は、どんどん這入つて來て、うしろ手に玄關の戸を締めた。そして、寒い、といふ意味を示して、肩をすぼめた。扉に倚りかゝつて、白い歯を見せた。眞珠のやうに粒の揃つた、光る歯だ。

につこりしたのだ。變に慣れなれしいのである。

無言の行に氣づいて、ホルトンはこの珍奇な闖入者に、農夫らしい人の好ささうな、しかしまだ愕きに滿ちてゐる聲音で、第一の質問を試みた。

『お前さんは何かね。どこから來なすつた――。』

2

と、こゝで、第二の駭愕が、善良なるホルトン一族を待ち構へてゐた。

いきなり女が、兩手を上げて鼻の先に振り立てたのだ。手首に懸け連ねた眞鍮の腕環が、世にも盛大な音を發して、ぢやらん！ ぢやらん――！ といふのだから、ホルトンは度膽を抜かれた。同時に、女は、猿轡を除られたやうに一度に饒舌り出した。が、その言語たるや、である。莫迦に濁音が多かつたといふから、

『がぎぐげご、ばびぶべぼ、だぢづでど――。』

なんかと響いたのだらう。不幸なホルトン夫妻とその娘たちは、眼をぱちくりさせて顔を見合つた。

女は英語が解らないのだ。ABCも識らないらしい。聲は音樂的な低音で、落ちついて聞いてゐると旋律的な調子なのだが、何しろ双方言語不通で、何がなにやらさつぱり判らない。

『どこの人だね、お前さんは。』

『あゝ、がぎぐげご！』

『え？ 何か用かね？』

『おゝ、ばびぶべぼ！ ばびぶべぼ！』

『仕やうがねえな。』當惑したホルトンが細君を返り見て、『弱つたな。何うしたもんだらう――。』

相談をはじめると、女は、夫婦の顔をにこにこ見較べて、

『だぢづでど。』何ごとかひとり呑み込んでしきりに合點いてゐる。『だぢづでど！』

ちんぷんかんぷんこの上なしといふ會話だ。ホルトン家の人々も女も、たうとう匙を投げて笑ひ出してしまつた。

ところが、妙なもので、一緒に笑つてみると、言葉は通じなくても、笑ひの中には萬國共通の一脈の人情味が漂ふ。人々は多分にものずきな好意をもつて改めて女を見直した。

ぽつちやりした瓜實顔、いさゝか淺黒い皮膚、調和を破るほ

ど大きな、水つぽい眼、身長約五呎二吋、小柄ですらりとしてゐる。ちよいとした美人だ。白のモスリンの襞飾を襟に卷いて金で縫取りをした黑い絹の着物――といふと聞こえはいゝが、その金は剝げ、黑の色も褪せて汚點だらけ、それも、白く砂埃りを浴びて縒れよれになつてゐる。おまけに、すこしも身體に合つてゐないでぶくぶくなのだ。貧弱な木綿の肩掛けを二枚、勿體らしく前後に垂らして、頭はと見ると、印度人の頭卷布といふやつだが、細かく觀察すれば、それにすこしくアラビヤ風を加味した形で、荒い縞の布地を塔のやうに高くぐるぐる卷いてゐる片方の端が、裾に屆くほど長く下つて、頭布の下に金貨飾が覗いてゐるのだ。變ないでたちだが、ひどく上品なところがある。そして非常に人なつつこい。

まぎれもない東洋の女だ。性格的な感じである。眼に智的な閃きを見せて、恰好のいゝ、だがちよつと猶太人めいて分の厚い鼻、口びるは大きく、强く、しぢう微笑してゐて、全體に好人物らしい觸點をあたへてゐる。髮も瞳も黑く、肩に、何かメタルをつないだ鎖のやうなものを懸けて、手には、葉を拂つた小枝の杖。革草鞋から着物の膝にかけて眞つ白に塵埃に塗れてとろどころ惨ましく鉤裂きしてゐるのでも、どこか可成り遠くから道のない道を步いて來たことが想像される。年齡は廿五？六？

無錢徒步旅行の異國の女――ホルトンの家の人々は、急にこの、言葉にさへ不便な珍客に人間的な同情を感じはじめた。まあ、お這入りなさいといふ身振り宜しく、家ぢうで廊下へ作れ込む。取りまいて色いろ訊いてみる――のだが、訊いてみると言つても、はじめからいふとほり言葉は通じないのだから、總掛りで手眞似足眞似だ。娘たちまで面白がつて、思ひつくまゝ種々手旗信號のやうな恰好をして見せる。兩方とも解らせるのが大變だ。女もホルトンも散ざん頭腦を絞つたあげく、やつと判明したところによると、女は、足を擦つて「がぎぐげご」で、これは、長道中をして疲れてゐるといふのらしい。それから、お腹を押さへて「ばびぶべぼ」は、空腹で耐らない意。あたまを橫に肘枕の態は、眠りと休養を欲するといふのだらう。つまり、步き草臥れて腹が空いて、睡くてやり切れないから、食を惠んで一泊させてくれ――しきりにその動作を繰り返しながら、人好きのする微笑をつゞけてゐる。

3

さう判ると、田舍の人は氣立てが好い。家ぢう親切の競爭みたいになつてさあさあと手を取らんばかりに食堂へ案內する。丁度晩飯が出てゐるところだから、早速食卓へ椅子を引いて、腸詰、野菜、麵麭、この邊の農家で自釀する名物の林檎酒を大

コップに、ありつたけの御馳走をならべる。口ぐちに奬める。根が單純な人たちだ。そこへ、天から降つたやうな、文字どほりのこの遺客だ。大層な歡待振りである。

ところが、女は、その折角の食べものには手をつけずに、ただ默つてにこにこ笑つて、のべつにお低頭してゐるだけだ。一同の機嫌を損ねまいとして、一生懸命のやうに見える。ホルトン家の人々は一さう氣の毒に感じ出して、何うしたらこの頼りなささうな異國の女旅人を慰めることが出來るかと、家を擧げての騷ぎである。そのうちに女は、ホルトンのおかみさんに、手眞似で、食べ物が違ふから自分で料理したいのだが許して貰へまいか――さういふ意味を傳へた。承知すると、早速臺所へ起つて行つて、一種獨特のやり方で米を煮る。それに牛乳をかけて食べるのだ。それだけの食事である。濟むと、流しへ行つて、儀式のやうに嚴肅に、水差しの水を交るがはる兩手に掛ける。娘のひとりがタオルを持つて行つてやつたが、拭かうとはしないで、手を空に振り廻して水を切り、そのまゝ乾かすのだ。成程、よほど變つてゐる――一同珍しくてたまらないから、ぞろぞろついて廻つてしきりに感心してゐると、女は矢庭に床に跪座づいて額手禮といふ、額部に手を當てゝ上半身を屈めながら例の音樂的な聲で、「矢張り「がぎぐげご」と聞こえるやうなことを言ひはじめた。祈禱らしいのである。何時までもつゞけてゐる。身體を低く曲げて、額が床につきさうだ。やうやく祈が終つて、寢る段になる。こゝでまたホルトンの人達が飽氣に取られたといふのは、どうせ百姓家のことだから餘分の寢臺などありはしない。姉娘と一つベッドに寢るやうにと、叮嚀に、と言つても手眞似でだが、その意味を現はすと、女は、より叮嚀に辭退して、上に着てゐる寢卷のやうな長い着物を脫いで食堂の床に擴げた。そして、その端を固めて枕にする。ごろ寢だ。そのまゝ安らかな寢息を聞かせて眠つてしまふ。

翌朝である。

四月三日、アルモンズベリイにこの地方で大きな馬市が立つ。郡檢事サミユエル・ウォロウル氏――Mr. Samuel Worrall――は大地主で、謂はゞ鄕士、グロセスタシャア州の名家だ。邸宅をノウル園――Knole Park――といつて俗にアルモンズベリイの古城、堂々たるものである、そのノウル園のヴエランダに出て、これから馬市に出掛けやうとサミユエル・ウォロウル氏が馬車の仕度を命じてゐるところへ、アルモンズベリイ市の貧民救濟委員の一人が農夫のドルフ・ホルトンを伴つて急な面會を求めて來た。

ホルトンはウォロウル氏の小作人の一人だ。何か重大な用件らしいので、取りあへずその場に通してみると、ホルトンを隨へてあわたゞしく這入つて來た委員が、いきなり、

「昨夜町へ妙な人間が飛び込んで來ました。」と言ふ。「印度かどこか、とにかく東洋の女らしいんですが、いふことがさつぱり判らないので、みんな當惑してをります。」ちよつとホルトンを返り見て、「突然この者の家へふらつと舞ひこんで來ましたさうで、ゆうべ一晩泊つて、今朝になつても出て行く樣子もなく、すつかり腰を据ゑられて手古摺つてをりますんで。」

ホルトンが引き取つた。

「髮も眼も黑く、皮膚は淺黑くて、齒が眞つ白でございます。仲なか美人でございます。どうもすこしも言葉が通じませんので、私はじめ一同持て餘してをります。一應お耳に入れて置いたはうが宜いと存じまして、それに、これは私の思ひつきで御座いますが、旦那樣のところに、希臘人の下男がゐましたですね。」「さうだ。」ウォロウル氏は横手を拍つて、「うちにゐる希臘人の男、あれは五六個國語を話します、あれに通譯させませう。」「どうぞさういふことに。」ホルトンは大よろこびだ。そして、旦那樣御自身おしらべ願ひたいもので。」

なほ附け加へて、早いものでホルトンの家に變な女が來てゐるとの評判が立つて、もう朝から好奇な見物人がわいわい詰めかけて覗きに來る仕末だといふ。

そこへウォロウル夫人も出て、來てさういふ珍しい人種なら是非呼んで見たいものだと言葉を添へる。事實、この時からウォロウル夫人は、この、降臨したる漂泊の東洋美人に絶大な興味を示して、終始かの女のための最もよき保護者となつたのだ。

4

が、女は、ホルトンの家が餘程氣に入つたらしい。それとも何處かへ伴れて行かれて危害を加へられるとでも思つたのかも知れない。なかなかウォロウル氏の邸へ出頭しやうとしないのだ。宥めたり賺したり、やつと多勢でそのノウル園へ引つ張つて來て、ウォロウル氏夫妻と同家の下男の希臘人に會はせた。

左右から挾むやうにしてウォロウル氏夫妻が何を訊いても、勿論英語は頭でわからないのだから、女は、たゞ首を振つて微笑ふだけだ。そして時どき例の不可解な國語で何ごとか一生懸命に陳じやうとするのだ。よくよく事情ありげである。可哀さうでもあり、見てゐると仲なか愛嬌がある。それに上品なのだ。ウォロウル夫人はすつかりこの印度女が氣に入つて、

「女ひとりで、こんなに遠く故國を出て放浪するなんて、ほんとに何んなに心細いでせう――言葉も判らないところでねえ。」

心から同情を寄せる。

ウォロウル家の希臘人の下僕といふのが、こゝぞとばかり通辯に立たうとしたが、これもさつぱり役に立たない。女の言ふ

ことはすこしも判らないし、希臘人が、得意の五六個國語を片つ端から振り廻しても、一つとして女には、一向通じないのだ。ぽかんとしてゐる。しまひには兩方とも呆れて、顏を見合つて笑ふだけだ。これで當面の唯一の望みも切れて、矢張り元の手眞似足眞似の萬國語へ返る。啞者の問答である。ウォロウル夫妻をはじめ一同女を取りまいて、それぞれ智慧を絞つて珍妙な手つきをする。脚を叩いて顏をしかめるやら、遠くを指さして疲れた恰好で歩いて見せるやら、あらゆる姿態と表情を示して、贅をつくしたウォロウル家の應接間に、これはまるで舞踏性喉狂患者の寄合ひだ。世にも奇拔な大眞面目の無言劇が展開される。發表方法の創造と判斷の努力とで、みんな大汗をかいた。その結果、やつと判明したところによると、第一に女は、半片(ヘッペニィ)錢をすこしと、贋金の六片(ペンス)を有つてゐるきりで、まづ無一文なこと。太陽の昇る方角、卽ち東のはうから來たものであること。長いあひだ船に搖られたり歩いたりして、足が痛いこと。旅の疲勞で身體の具合ひが好くないこと。それだけである。子供の話しのやうで、情ないほどうやむやだが、それ以上、何うにも意思を交換する手段がないのだ。ちよつと複雜なことになると、女もウォロウル家の人々も手も足も出ないのである。お互ひに五里霧中で焦いらするか、仕樣なく笑つてしまふかで、何時までも同じことを繰り返すばかり、おんまりだらしがないので、相方馬鹿々々しくなつてぽつねんとしてゐる。

體操みたいなことをして草臥れたゞけで、何が何やら、その日の會見はこれで終つて、ウォロウル家では、食費はこつちで支給するから當分滯在させるやうにとホルトンに言ひ含めて、途中女中と下僕をつけてホルトン方へ送り返さうとした。すると今度は、小屋のやうなホルトンの百姓家よりは、アルモンズベリイ第一と言はれるウォロウル家のノウル閣(バアク)のはうがお氣に召したに相違ない。好きなものは好き、嫌ひなものは嫌ひと、いやにはつきりしてゐて、幼兒のやうに單純な南亞細亞の女である。何うしてもホルトンのところへ歸るのは嫌だ。自分はこゝにゐるんだと言ひ出した。言ひ出したといつても、言葉は判らないのだから、まるで駄々つ兒のやうに家具やドアに獅嚙みついて、一生懸命離れまいとするのだ。

これにも人々も苦笑の顏を見合はせて、

『矢張りいゝところは解るとみえますな。』

『價値判斷はあるらしいね』

『何ですかいぢらしいやうですわね。』ウォロウル夫人も口を出して、『人見知りをしなくて、可愛かないこと? こんなに居たがるんですもの。しばらく置いてみませうか。あたくしが面倒

をみますわ。」

といふことになつて、ウォロウル氏自身も多分に興味を感じてゐたところだから、女はそのまゝノウル閣に逗留することになる。居据わりのお客さまだ。これからウォロウル夫人が手塩にかけて追ひをひ了解を深め、身許を明らかにして、出來ることなら英吉利風の貴婦人(レディ)にまで教育してみやうといふのだ。そこで夫人は、アマチユア人類學者といつた格で、眞面目な研究的態度で女を觀察し出した。

夫人は先づ紙とペンをとつて自分の名前を書いて見せたのち女にペンを渡して、同じやうに姓名を書かせてみやうとした。が、恐るおそるペンを受取つた女は、軸からペン先まで不思議さうに見入つたきりで、怖いもののやうに、そつと机のうへに置いてしまつた。そして、部屋の隅に、子供の繪具箱が置いてあるのを見ると、うれしさうに駈け寄つて、穂の長い小さな繪筆と、青の繪具皿を取り出して來た。ペンは、使ひ方は愚か見たこともない様子だが、毛筆はお手のものとみえる。器用な手つきである。筆の先に青繪具をふくませて、さらさらと紙を撫でる。達筆だ。一行の文字だ。亞剌比亞字らしいのである。

5

が、亞剌比亞の字など、その方面の學者でもない限り、さうざらに讀める筈はない。ウォロウル夫人も困つて、その、女の書いた字を白眼んで首を捻つてゐると、急に相手は面白さうに笑ひ出すのだ。そしていきなり、文字と自分を交互に指さして、鸚鵡のやうに繰り返した。

「Caraboo!　カラブウ!」

しかし、ウォロウル夫人には、この「カラブウ」が何のことがその時はまだ判らなかつた。

たゞ曙光を認めたやうな氣がした。根氣よくやりさへすれば或る程度まで相互に理解出來る望みがある。夫人はさう思つて次ぎに、毎日女を伴れて邸ぢうを見せて廻ることにした。多くの部屋のなかには、一つぐらゐ、彼女に親しい品物があつて、それがそのうち彼女の眼に留まれば、生國身許などが判明する一條の手懸りになるかも知れない。この夫人の思ひつきは、全然無效果ではなかつた。食堂には漆塗りの戸棚が飾つてある。それに支那の男女の風俗が模様風の繪になつてゐるのだが、それを見つけると、女は一時に顔を輝かして活きいきと手眞似をし出した。自分の故國では、みんなかういふ服裝をしてゐるといふらしいのである。それから、バナナを配らつた果物籠の靜物畫の前で、嬉しさうな表情をして、じぶんの生れた國々は、この

バナナが澤山成つてゐるといふ意味を示した。

夜になつて寢臺へ案内しやうとすると、懸命に首を振つて拒んで、ホルトンの家でしたと同じやうに、着のみ着のまゝで床にごろ寢し出した。いくら習慣が違ふといつても、これはあんまりだとウォロウル夫人は驚き呆れて、きつと寢臺を何かひどく恐しいものと考へてゐるに相違ないから、それには、完全に無害であることを實驗によつて示すに限る。そこで、ウォロウル家の娘が、寢臺に上つて眠る眞似をして見せる。この通り決して怖いものではないからと安心させやうとしたが、何うしても尻込みして寢臺へ近づかうとしない。床にクッションを敷いてその上に寢ると言ひ張るのだ。仕方がないからその通りにさせることにすると、先づ女は、厳かに膝まづいて、はじめに東を向き、それから西に面して二三度天を仰ぎながら、大聲に唱へた。

「アラ・タラ！　Allah Tallah！」

太陽を拜むらしいのである。

この、神性を「アラ」と呼ぶことから、ウォロウル夫人は、女は回々教徒に違ひないと思つたので、翌朝、教區の牧師に東洋の宗教書と支那印度あたりの風俗書集を持つて來てもらつた。宗教書のはうは、英語で書いた研究的なものなので、何ら役に立たなかつたが、寫眞帖を見せると、支那に關する部分には一々覺えがあるとみえて、しきりにうなづいて微笑する。そして、船の繪を描いて、そこから大きな船に乘つて來たといふつもりらしい。夫人は、もう一度女を案内して邸内の隅々まで歩いて、あちこちに仕舞つてある、知人の東洋土産などの支那の裝飾品を出して見せた。その度びに女は同國人に會つたやうによろこんで、じぶんはそれらの品物とおなじ國から來たのだと手眞似で言ふ。また自分を指さして、鸚鵡のやうな聲で熱心に叫びつゞけた。

「カラブウ！　Caraboo！　カラブウ！」

ウォロウル夫人は、につこりした。判つたのだ。女は、カラブウといふ名前なのである。かうしてカラブウは、ウォロウル家の客としてノウル園に落ちつくことになつた。

前に言つたやうに、小柄な女だが、魅力的なカラブウである。漆黑の髮と眼、線の強い、眞赤な口びる、小麥色の皮膚、新鮮な顔いろ——敬神家で、禮儀正しく、愛嬌があつて貴族的だ。言葉こそ通じないが、ウォロウル夫人はカラブウが大好きになつて、母親のやうなこゝろもちで、何くれとなく親切に面倒を見てゐる。

その間に、附近の大學の言語學の教授たちをはじめ、多くの

學者達が、われこそ見事カラブウの通譯に立つてみせやうと每日何人となくノウル閣へ押しかけて來たが、一人として成功したものはない。亞刺比亞語、印度語、支那語、どの學者も最初から首を捻るだけで、一語も解釋出來ないのだ。亞刺比亞語らしいところもあり、支那語らしいところもあり、印度語らしいところもあるが、それでゐて、何とも不思議、頭で語學の系統が違ふのか、一言もわからないのである。誰が來ても、まるつきり推測もつかない。どうも妙だ。ことによると、これこそあの日本人といふ特殊の人種かも知れない――といふことになつたが、とにかく、かうして博言學者團が出ても、解らないものは仕樣がない。ウォロウル夫妻は諦めて、そのまゝうつちやつて置くことにした。その代りカラブウに英語を教へる。叩き込むやうにぐんぐん教へる。カラブウが英語を覺えて、英語で話しが出來るやうになるまで待たうといふのだ。さうすれば、彼女に關する一切の神祕の扉は開かれるだらう――。

英吉利の田舍の人だけに、氣の長い話しである。

6

カラブウは斷じて獸肉を食べない。すべての肉類や、葡萄酒、麥酒などの醱酵飲料は、見るのもいやなやうに顏を外向ける。カラブウの飲食物は、水、茶、魚類、鷄卵、麵麭、牛乳菓子、果實、それだけだ。しぢう默つて、にこにこして床に座つてゐるか、氣違ひのやうに「アラ・タラ！ Allah Tallah！」と大聲をあげてお祈りしてゐるかで、日課になつてゐる英語なんか習はうともしない。ABCさへ頭から受けつけないのだ。日を經るにしたがつて當初の好奇心が褪めかけると、さすが親切なウォロウル氏夫妻も、いさゝか當惑顏を見合はせて、ひそかに處分方を考へるやうになつた。

『何時まであゝして置くわけにもいかないね。』

『さうですわね。何うしたらいゝでせう――でも、いま追ひ出すのは可哀さうですわ。勿論行くところはありませんし、第一、ことばが判らないんですもの。それに、この頃はそりやあわたしに馴付いて――。』

『しかし、僕は思ふんだが、彼女だつて、あの晩いきなり地面から這ひ出してホルトンの家へ飛びこんだわけぢやないだらう。何處からか歩いて來たんだらう？ 內地から來る筈はないから海岸のはうからやつて來たんだらうが、それなら、その、せめて步いてゐるところでも、一人やふたり誰か見たものがあるに相違ない。かうなれば、外部から出來るだけ手懸りを拾つて、何國の人間かぐらゐ突きとめるよりほかに仕方があるまい。』

このアルモンズベリイに近い船着場と言へば、まづブリストル港――Bristol――である。そこでウォロウル氏夫妻は、カラブウを伴れてブリストル市廳に出頭して市長に會つた。警察關係に依頼して色いろ調べて貰ふ。これだけ變つた服裝をしてゐるのだから、誰か見たものがあれば、覺えてもゐやうし、口の多い港町である。すでにいゝ加減評判になつてゐなければならない。ところが、波止場附近はいふまでもなく、ブリストルからアルモンズベリイに到る街道すぢを一軒々々軒並みに調査しても、誰ひとりさういふ女を見かけたといふものはないのだ。と言つて、すこしも英語を知らない東洋人の女が、ひとりで、しかもあんな恰好で、反對側の倫敦方面の海岸から、何日もかゝつて內地を突つ切つて旅行して來られるとは考へられない。必ず途中どこかで、不審訊問に引つかゝつて保護を受けてゐるはずだ。

保護――さうだ、官憲に引き渡して保護して貰ふことにしよう。いゝところへ思ひついたといふので、そこらは市長が取り計らう。浮浪者としてブリストル市の婦人ホウムへ押しつけて、ウォロウル氏夫妻は一先づアルモンズベリイへ歸つた。が、考へてみると、あの言葉の不自由なカラブウである。例によつて床に寢たり、大聲に「アラ・タラー」をやつたり、係員や收容者一同を手古ずらせてゐるだらうが、それより、何しろ食べものからして違ふんだから、本人はどんなに困つてゐるか知れない。しばらく一緒にゐて、言葉こそ不通だが、何うやら氣ごゝろも知れて來てゐたカラブウである。さう思ふとウォロウル夫人は、耐らなく可哀さうなことをしたやうな氣がして、翌々日ブリストルへ出かけて行つてまた引き取つて來た。かうしてカラブウは、ブリストルの婦人ホウムに二日ゐたきりで、これからひき續いてふたゝびウォロウル家の賓客としてアルモンズベリイのノウル閣に厄介になることになつた。

遊ばせても置けないから針を持たせてみると、かなり器用である。簡單なものなら、見本さへ見せれば何でも縫ふ。段だん重寶になつて來た。それに、ちよいと繪ごゝろがある。木だの人だの、品物だの、暇さへあると色んなものを繪に描いてゐる。筆談といふのはあるが、これは繪談である。繪解きだ。この、カラブウの描く繪によつて、ウォロウル夫人が追ひおひ判斷したところによると、カラブウは遠い遠い東の國から來て、その生國では高い地位にあつたこと、何か反逆運動の混雜に際し誘拐されて船へ乘せられたこと、何箇月かの航海ののち、着たまんまの無一文でこの英吉利の海岸へ抛り上げられたこと、など、など、など――いかにもぼんやりした、夢物語みたやうなはなし

だが、夫人をはじめウォロウル家の人々は、どうやらすこしづつ謎が解けて來る興味が先に立つて、信じるも信じないもない。そのまゝに受け取つて、さういふ高貴の方なら粗相があつてはならないと一さう大事にし出した。ところが勿論、懐疑派はどこにでもゐる。これを聞いて、一部の人々は、はてな、眉唾ものだぞと首を傾げた。そんな出鱈目な――あたまから一笑に附したものもあつた。がこれらの信じない連中も、そのうち動かすことの出來ない證據が現れてぐうの音もなく默つてしまつたのだ。それはまさに一つの劇的進展だつたといつていゝ。

カラブウの言葉を解し、自在に會話をまじへる通譯者が出て來たのだ。

7

カラブウとは何者か？

彼女は何處から來たか？

この神祕を解くべく、センセイションはすでに全國的なものになりつゝある。「ノウル園(パーク)のカラブウ」から「アルモンズベリイ市のカラブウ」、「グロセスタシヤア州のカラブウ」それから「英吉利のカラブウ」と――この瞬間の好奇の焦點は一カラブウに集中されてゐる。ブリストル市廳と警察が主動して、英吉利ぢうから歐羅巴大陸の沿岸にわたつて身許調査の手懸りが求められた。ブリストルの港では、だれか東洋へ旅行した經驗があつて「カラブウ語」を解する者はないかと血眼で搜索した。印度へ行つたことのあるもの、在支那の英商館に勤めてゐたといふ者、そのほか二三人名乘り出てカラブウの前に立つたが、一たまりもない。双方頓珍漢をきはめとて一人して、「カラブウ語」の片言隻語をすら解し得ないのだ。全く、すこし大きく言へば、「カラブウ語」は英吉利全體の「時の問題」にまでなつてゐた。

バス町に、ウヰルキンスン博士――Dr. Wilkinson――といふ學究肌のお醫者さんがある。

このウヰルキンスン博士がウォロウル氏夫妻の友達で、夫妻と同じに、いや、夫妻以上に、天蓋孤獨のカラブウに同情を寄せて、その國籍、放浪に出た事情、それにいはゆるカラブウ語に學者的立場から大いに興味を持つてゐる。博士は、まづ文字から審べて行かうと、やつとカラブウに二通の手紙を書かしてバスとブリストルと二つの大學に送つて判讀を乞うたが、まるで鍵語のない暗合文のやうなもので何うしても讀めないのだ。たゞ線や點のぐあひが、支那の漢字に似てゐるやうでもあるといふ心細い限りである。そこで今度は、ウヰルキンスン博士がひとりでカラブウに倚つて、一つ二つと數を算へさせてみたカラ

ブウ語で二を「デユウス」――duce――三を「トルア」――trua――五を「ゼニィ」――zennee――と言ふ。博士はちよつと不思議に思つた。佛蘭西語の二は「デユ」deux、三は「トロア」trois五は「サンク」cinq だ。何となく言語學的に相通ずるものがあるやうな氣がするのだ。

葡萄牙人マニユエル・アイネツソ――Mannel Eynesso――は馬來諸島の旅から歸つたばかりで、ブリストル港とバス町を往つたり來たり、半々に暮らしてゐる。だから、カラブウの噂は初めから聞いてゐたが、通譯に出たいと思つても傳手がなくて出られなかつたといふのだ。それが今度、バス町の知人によつてウヰルキンスン博士に紹介された。博士を通じてカラブウに會ふ。

かうして神秘「カラブウ語」は、他愛なく解かれたのである。

マニユル・アイネツソは、葡萄牙人だけに當時流行の探險的航海業者だ。長く馬來小群島(マライ・アウチペラゴ)にゐたといつて、近東人風の陽に燒けた皮膚をしてゐる。いかにも冒險家らしい風體で、ウヰルキンスン博士に伴はれてカラブウを訪問する。

會つて一言二こと交すと直ぐ、アイネツソは博士をかへり見て莞爾とした。

「こいつあ無理ですよ。これはちよつと誰にも判る筈はありません。」得意滿面で、葡萄牙人が言ふのである。「この女の話す言葉は、單獨の國語ではないんです。色んな國語が雜然と集まつて、特殊の訛を帶びてゐる方言ですよ。はゝ、はゝ、これにはみんな手を燒いたでせう。いや、さぞお困りでしたらう。お察しゝます。東印度諸島とスマトラの西海岸でだけ使つてゐる言葉なんです。』

そして、あれほど誰も齒が立たなかつた「カラブウ語」を、マニユエル・アイネツソは、本人が話すそばから逐語的に譯して聞かせたのだ。ノウル園(パアク)の大廣間である。主人ウオロウル氏夫妻ははじめからの關係者だといふのでホルトン夫婦、ブリストル市長、警察官、アルモンズベリイ教區牧師ガイ・スリイス長老、ウヰルキンスン博士、その他言語學者二三、ノウル園(パアク)の召使ひ近處の人々などが立ち會つて、呼吸を凝らして二人を見つめてゐると、カラブウとアイネツソは、部屋の中央に人々に取りまかれて慣れなれしさうに談笑してゐる。久しぶりに言葉の通じる話し相手があらはれたのだ。まるで長い間の無言の行が解かれたやうに感じたのだらう。カラブウは別人のやうに生氣を呈して、頰をうつくしく紅潮させてしきりに饒舌り込んでゐる。アイネツソはにこにこうなづきながら、熱心に聞き入つてゐるのだ。話す。訊く。答へる。何か可笑しいことがあるとみえて、

兩人腹を抱へて笑ひ崩れる。自由自在な會話ぶりだ。立會ひの人々は、一刻も早くカラブウの話しが英語になつてアイネッソの口を出て來るのを待つてゐる。

8

『名前はカラブウ姫ですが、南洋の孤島ジャヴァス――Javasu――から、數奇な運命に弄ばれて、この英吉利まで流れて來たのです。』

マニユエル・アイネッソの通譯である。

カラブウの父は元來支那――この支那のことを彼女はコンジイ、Congee と呼んだ――から渡つた征服者で、たしかに一個の英雄に相違ない。名をジエス・マンデユ、Jessu Mandu といつて、大軍を擁してジャヴァス島に覇を唱へる族王である。母は馬來貴族――カラブウの言葉では馬來人、Mandin――で、カラブウが七つの年、ほかの島の蠻人――これもカラブウ語だ。Boogoo である――との戰爭に流れ矢に當つて死んでしまつた。カラブウのほんの名はシス・マンデユ、Sissu Mandu だが、その時の大勝利を記念して今の Caraboo に改められたのだといふ。

父のジエス・マンデユ王は四人の妻妾を蓄へてゐる。外出の時は、平民ども――Macratoos――の擔ぐ駕籠椅子に乘る。王の正裝は、頭布に金の扣鈕、結髮の右側に三本の孔雀の羽、金で縁どつた琥珀の玉を、小指ほどある金鎖で頸に下げる。まことに威風堂々たるものだとある。母は歯を黒く染めて鼻に寶石の棒を通し、頭の右側に大きな金の輪を飾つてゐた。平民は土下座してカラブウの父を額拜する。膝をついて、自分の右手で頭のてつぺんを押さへる禮だ。カラヴウ内親王に對しては、人民は片脚膝まづくだけである。父君は色の白いはうだが、母君は黄褐色だつた。カラブウ内親王殿下は、故國ではふだんでも、何と七本の孔雀の羽をあたまの左側に飾つてゐたものだ！

内亂が起つたのである。姫君のおんば日傘の生活は破られた。カラブウ内親王殿下が三人の女官と、もに、ジャヴァス王宮の奥庭を御散策あらせられてゐる折りしも、矢庭に馬來船――殿下のお言葉ではプラフ、Prahu――に乘り込んだ反逆者の海賊團が上陸して來て、こゝに、亂鬪が開始された。殿下御自身、お勇しくも繊手に短劍をおふるひ遊ばして、よく二人の慮外者をお斃しになつたが、咄嗟の出來事なので救援間にあはず、お傷はしや海賊めらに誘拐されて二週間後には奴隷船に賣られてゐたといふ。大砲と、四十人の部下と、それに船長――Justee――これも殿下のお言語――さへ乘り込んでゐる大きな船だつた。船長の名をタバ・ブウ――Tappa Boo――といつて、背中に長い辮

髮を垂らしてゐた。内親王殿下はおどろきとかなしみのために瀕死の御病氣で、船中ずつと船醫の看護を受けさせられた。

一個月の航海のうち、ジャヴァのバタヴィアに寄港して、そこで四人の女奴隷を積み込む。それから亞弗利加のケエプ・タウン、つぎに聖ヘレナ、やがて暴風雨に押し流されて英吉利海岸のブリストル運河へのし上げたのだ。カラブウ内親王殿下におかせられては、このブリストル運河で、申すも畏きお身をもつて闇夜ひそかに御脱船遊ばされたのである。

——と、葡萄牙人マニユエル・アイネッソが御通譯申し上げた。

マンデユ王朝の花と謳はれたカラブウ内親王殿下——さう言へば、はじめから﨟たけたお方であつた。といふので、ウオロウル家では急に下へも置かないもてなしである。なほよくアイネッソを通して伺つてみると、殿下はスマトラをはじめ諸島の風物、生活狀態など、下情に通じて微細に御存じである。一同恐懼してゐると、氣輕な殿下は、即座に英吉利までの航海圖を描いてお示しになつた。繪のお上手な殿下である。お見事なお出來榮えだ。成程支那からバタヴィア、ケエプ・タウン・聖ヘレナと、荒くれ男の乘り込んだ奴隷買ひの軍船の通つて來たあとが一眼に判つて、今更ながら恐れ多い限りであつた。

いまは、いやが上に有名にならせられたカラブウ内親王殿下だ。英吉利ぢう誰知らないものもない。地理學者、科學者、言語學者などが、この珍しい御生國の狀況をおたづね申さうと、踵を接してノウルパアクに集つて來る。何よりも專門家のあひだに問題になつたのは、殿下の御臈筆になるその不可思議きはまる書體だつた。

ウオロウル家では、失禮のないやうにと萬端の注意を怠らない。キヤラコと色絲を獻上すると、殿下はにつこり御笑納になつて、お手づから本國風のお召物をお縫ひ上げになつた。姬君らしい、淑やかで威嚴のある御着衣である。色の組合はせお美しいお胴着、縫ひのあるお紐、渦卷模樣のお裾、レイスの緣、たゞ何とおす、め申し上げても、お靴下はお召しにならない。ノウ・ストッキングの元祖である。平らな木の底のついた革草鞋をおはきになつて、初めての謁見者には雜物でお顏をかくしてお會ひ遊ばす。お國ではさういふ習慣だとおつしやるのだ。

が、どつちかと言へば活潑な御性質である。そして、極く平民的に渡らせられる。よくノウル園の裏庭で弓をお引きになる。劍術もなさる。舞踏はことのほかお上手であつた。しかし、英吉利人の食べものだけは、何うしてもお口に合はないとみえる。恐れ多くも三度三度御じぶんでお料理あそばされた。

9

評判は高まる一方だ。東印度會社の耳に這入つた。放任して置けないはなしである。丁度その頃、東洋方面で英吉利は和蘭に壓迫され勝ちだ。誘拐された王族の娘をじぶん達の手で送り返してやれば、馬來諸島、ことにスマトラの人氣は英吉利につくにきまつてゐる。何一つするにもたゞではうごかない商人根生の英人だ。東印度會社は、こゝに利用すべきひとつの機會を見たのだ。

一まづ丁重に會社の客としてお迎へしやう。計畫してゐるところへ、例のウヰルキンスン博士とウオロウル夫妻が會社を訪れて、同じ依賴を持ちこんで來た。二つ返事で相談が成り立つ。國賓待遇でジャヴァス島へ御送還申し上げやうといふのだ。準備は早い。船もきまつて、會社は殿下に見事な錦襴の衣裳を獻納する。ウオロウル家のおみやげ品だけでも大變なものだ。すつかりお仕度が出來て、殿下には御機嫌うるはしく御出帆の日をお待ちになつてゐらつしやる。

すると、このあやふい瀬戸ぎはで露れたのだ。

二人の人間が、ほとんど同時に、この愛すべきカラブウ内親王殿下の正體を摘發してゐる。

ひとりはマクナマラといふ若い自由勞働者で、偶然アルモンズベリイ市へ流れこんで御高名なカラブウ内親王殿下をお見かけ申したのだが、すると何うだ！善良なマクナマラ青年が膽をつぶしたことには、彼は五六ケ月前に、たしかにこのカラブウ殿下をサリスベリイ平原で會つて、しかも一夜樹の下で一緒に寢てゐるのだ。その時の殿下は、お忍びにもことを缺いてありふれた女乞食のいでたちで、おまけに訛のひどい、しかし、それだけ爭へない英吉利人の英語を話して、農家の女中の口を探して田舍を廻つてゐるのだといふ丈のお話しだつたが、これは一たい何うしたといふのだらう？あの時一晩會つて、同じ石の枕で星を眺めて別れた彼女が、やんごとない東洋のお姫さま――マクナマラは白痴のやうにぼんやりしてしまつて、人の顏を見るとこのことを話して歩いた。すると、ブリストルに、ニイル夫人――Mrs. Neale――といふお婆さんが住んでゐる。まへからカラブウ殿下の人相を聞いて、何となく臭いと思つてゐたのが、今この氣が狂れたやうになつてゐるマクナマラ青年のはなしが耳にはいると、いよいよ思ひ當る節があるから、親類のモルテモアといふブリストル船渠の事務員に相談して、それとなく、二人でアルモンズベリイへ首實驗に出かけた。ノウル閣へ行つて、はじめウオロウル夫人に面會する。これ

これしかじかの疑ひがあつて來たから、一度カラブウさまに會はせてくれと申し込むと、夫人は笑つて受けつけない。が、あんまり言ひ張るので、うたがひを晴らすつもりで拜謁を許すことにした。元より非公式だ。御出發の日が迫つて、奇しき御滯英の日の紀念とあつてブリストルの畫家バアド氏が伺候して御肖像を描かせていたゞいてゐる。その、御正裝の殿下がモデルにおなり遊ばしてゐる一室へ、ウォロウル夫人に案内されて、ニイル夫人とモルテモア氏が這入つて行つた。

壁を背に立つてゐらつしやるカラブウ内親王殿下を一眼見ると、世にも失禮なニイル婆さんは、ぷつと噴飯したのだ。

『まあ！　お前――お前は、こんなところで』と、つぎの瞬間、お婆さんはがんがん吠鳴り出してゐた。『メリイ！何をしてゐるんです！　Why, ほんとにお前はメリイ・ウヰルカックスぢやないか。そんなへんなものを着て、東洋のお姫さまだなどと、圖々しいにも程があるよ。何の眞似です。いゝ加減になさい！』と、より奇怪なことには、カラブウ内親王殿下におかせられては、見るみる御顔色蒼白に變らせられて、たちまちぺしやんこにおなりあそばしたのだ。

人一倍流暢な英語で告白した所によると、元ブリストルのニイル夫人方の女中で、メリイ・ウヰルカックス・ベーカア――Mary Wilcox Baker。デヴォンシャア州ウヰザリッヂ、Witherridge, Devonsir の生れ。父は小作農。幼にして極度のルンペン性を發揮し、ハウンスロウ・ヒイスで曲馬團に加はりなどして生家に寄りつかず、爾來エクセタアからタウントンとほとんど英吉利ぢうを股にかけて流れ歩いたが、國外へは一歩も出たことがないとある。

東洋の風俗習慣や、神秘などといふ言葉は、放浪生活のあひだに倫敦の St. Giles 病院に入院中、東洋に行つてゐたことのある看護婦から聞いたものだといふ。三度結婚してゐるが、最後にベエカアといふ船員と別れて、食ふに困つて思ひついた詐欺だつた。

それにしても、着物、言葉、態度、生れつきの俳優と言はうか、やはり一種の天才だつたことは疑ひを入れない。三ヶ月間カラブウ殿下になりすまして、一ことも英語を滑らせなかつた。英語のわかるやうなまばたきさへしなかつたのだ。この無學な女が、一つの言語を發明して、あの出たらめの文字とともに、英吉利中の學者を完全に煙に捲いたのである。人騒がせが面白かつたのと、樂な暮らしがしたかつたからだと言つてゐる。露れさへしなければ、東印度會社の手で、スマトラへでも何處へでも行くつもりだつたらしい。徹底してゐる。すべてが詐欺と判つた時、可哀さうなウォロウル夫人は、あまりのショックに

寢込んでしまふし、人一倍肩を入れたウヰルキンスン博士は、責任を感じて公職を退いた。一八一七年の出來事である。そもそもカラブウがあゝしてホルトン方に現れて騷動の發端となつたのが、四月馬鹿――四月一日――の翌日だつたことも大いに洒落れてゐるが、「殿下」と同罪に、もしくはそれ以上不屆きたのは、かの葡萄牙人マニユエル・アイネツソ君だ。與太を與太に「通譯」したのだから念が入りすぎてゐる。出鱈目の「カラブウ語」をより出鱈目に「譯」して、事件を何倍も大きなものにしたのだ。眞顏で「會話」した御兩人こそ、さぞ面白かつたに相違ない。アイネツソは、其筋が躍氣になつて搜したが、多分あの彼の「架空島ジャヴァス」へマンデュ王陛下の天機奉伺にでも出かけたあとだつたのだらう、英吉利ぢうどこにもゐなかつたから。

旅からの文藝批評

廣津和郎

大阪行きの汽車の中で、私は片岡鐵兵君の『一つの性格』（中央公論）といふ小説を讀んだ。片岡君の身邊にこの二三ヶ年降りかかつてゐた一つの災難の時に、胸を痛めてゐた私は、彼がかうした創作を書き得るやうな餘裕を得たといふ事實に、喜びを感じた。

けれども、小説そのものは、恐ろしく急いで撲り書いたやうなものだつた。もつとも撲り書きといふ事で、人を非難出來る自分ではないが。

併しこの小説の手薄さは、單に撲り書いたために生じた缺點とばかりは云へない。それよりもこのテマについて、如何に片岡君が簡單にしか、唯上面的にしか考へてゐないかといふ事を暴露してゐる點に、此の作の救ふべからざる不愉快さがある。

許婚者であるブルジョワの娘と結婚前から關係してゐるブルジョワ——といふよりも此處では寧ろインテリゲンチャの青年を代表させるつもりで作者が選び出したに違ひない一人の青年が、本氣で『運動』してゐる彼の友人の刺戟により、又現代のインテリゲンチャらしい時代的煩悶により、許婚者にそむいて、友人の運動の手助けをする。——一口に云つたら、さういふ事を書いたものだが、この青年のあらゆる行動は、唯のオッチョコチョイで、何處にも本當のものが一つもない。もつともさういふ唯のオッチョコチョイを、作者が書くつもりだつたのなら、それはそれで、底に作者の眼がピカリとでも光つてゐればそれでいいが、併しさうではなく、友人の『運動者』をかばつたといふところから、終に留置所にぶちこまれ、その留置所で自分を買ひ下げに來た辯護士及び立合の警部の面前で、雄々しくも今後本氣で

運動のために盡すといふ宣言をするところを見ると、かうした一つの性格が、終にそこまで行く事を書かうとしたものに違ひなく思はれるが、それにしては、この一つの性格が何と眞實味がなく、好い加減に描かれたものだらう。友人の『運動家』に刺戟され、又時代についての反省にみづからも動き出して、許婚者にそむくところなども、何と出鱈目で、好い加減なものにしか描かれてゐないことよ。この程度の『心』しか、許婚者に對して持合はせてゐないこの青年は、結局『運動』に向つたつて、この程度の『心』しか示す事が出來ないに違ひない。何て手薄な戀愛關係、手薄な男女間の交渉だらう。作者は御都合よくその相手の娘をも、この青年同樣、オッチョコチョイのモダンガールに作り上げてしまつてゐるが、その娘そのものもほんたうに生きてゐる人間には描けてゐない。唯のカタ、通俗芝居の仕出し的人物ほどにしか動いてゐない。――かうした性格のインテリ青年の弱さを描くなら弱さを描くにしろ、『弱さ』そのものの强さ――つまり眞實味がなければ、この都合よく作者が簡單に組み上げた『運動入門』の通俗小說も生きては來ないだらう。殊に最後の留置所の場で、辯護士や警部を前にして、大した罪(?)で捕まつたのでもないのに、「お父さんが社會何に縛られても」「お母さんが病氣でも」構はないから、自分は運動するのだと宣言して、そしてそんな處には這入らない方が運動する上に便利であるであらうに、態々地下室の檻房――『暗い、一切の自由を剝奪された其處』にみづからを埋めて行くところなど、讀んでゐて、ぞくぞくして冷汗が出て來る。――まあ、なんて手薄な宣言を、雄々しい氣になつて、このオッチョコチョイがするのだらう。――もつとも、此處のところは、作者が『一つの性格』といふ題をつけたところを見ると、かうしたオッチョコチョイの弱蟲の人物であるからこそ、直ぐ金切聲を揚げて、こんなお芝居がかつた宣言をするのだ、と云ふ皮肉な觀察で、描いたものでもあるのだらうか。若しさうでもなかつたら、片岡君よ、讀者たる我々は救はれないではないか。

自分がスウツケースの中に入れて來た雜誌は、『中央公論』『新潮』『改造』『文藝春秋』の四册だが、自分は片岡君の『一つの性格』以外にプロ派の作家のものを三つ程讀んだ。

尾崎士郎君の『忘れられた時代』(新潮)――尾崎君は現在ではプロ派の作家とは云へないかも知れない。けれども、この『忘れられた時代』は、今から十五六年前の、日本の社會運動の或時期の斷片を取扱つたものなので、此派の中に、一括して云ふ事にするが、我々その時代を多少知つてゐるものには、モデル的興味が湧かないでもない。けれども、これだけでは何と云つ

ても、樂屋落ちたるを免れないだらう。この調子でもいいから、もつと詳しく、もつと長く、あんなに尻切とんぼにせずに書いてくれたら、伴、大井、高木等の面目がもつと現れて來て、讀者にもそれぞれの人物の面影が感ぜられるやうになるだらうと思ふが、これだけでは唯ごたごたしてゐて、最も描かれなければならない筈の伴、大井さへはつきりしない。

細田源吉君の『炎の脈搏』（中央公論）は同盟罷業小説だ。地味な筆致は片岡君が手輕く投げ出した『運動入門』小説よりは好意を持つて讀めるが、併しごたごたして、平板で、描かれてゐる炎の脈搏が一向我々の心に傳はつて來ない。――もつとも日本全國として見れば一日數ケ所に同盟罷業が起りつつある現在であるから、かうした作品に、『印刷された自分を見る』ことの眞實な熱情をプロレタリアは感ずるのかも知れない。若しさうでもなかつたなら、作者のかうした努力は浮ばれないだらう。

貴司山治氏の『記念碑』（改造）は面白かつた。この作者はプロレタリア大衆小説を志してゐる作者であるだけに、誰にでもよく飲み込めるやうに、この物語を噛んでふくめるやうに説いて聞かせてゐる。單に狹い水平運動のためのみに鬪つて或部落民に、濱本千藏が農民運動の種を蒔く。その種がどんどん成長して、澤山の農民組合を生み、次第々々に組織立つて來る――そして普選が開始されるや、八八大學に教鞭を取つてゐた濱本千藏は農民大衆に推されて日本最初の無産派代議士になる。そして農民とプロレタリアのために戰ふ。そして彼は反動政府のまはし者のために、終に兇刃に斃れる。――それを慈父の死を悲しみ惜むやうに悲しみ惜んだ農民達は、官憲の壓迫をも顧みず、そして又彼等が刻んだ石が何度沒收されてもひるまずに、新しく幾度でも石を刻み直し、終に雪の降る日、朝早く大擧して峠の上に出かけ、この農民運動の力強い指導者のために、終に記念碑を立てる。――物語そのものが既に十分な感動を與へる上に、この作者の誰にも飲み込めるやうな平易な物語り等はかうした種類の作物に大變適してゐると思ふ。

○

東京にゐると、近頃私を煩雜にしてゐる文學以外の俗事のために、月々の雜誌をゆつくり讀んで見るやうな心の餘裕がなくなるが、今月は旅で暮したので、持つて來た四雜誌の創作は大部分讀了することが出來た。――こんな事は全く最近めづらしい。

○

室生犀星君の『時と命令』（文藝春秋）はこの作者のコツコツ

とためまず努力してゐる心構へは、この短篇の中にも窺はれない事はないが、併し結局スタイルについての若干の工夫及び努力であつて、かうした少女も、又その少女の事をも物語つてゐる一人稱の『僕』なる主人公も、別段深い觀察によつて描かれてゐるわけではない。この作者が數ケ月前に書いた一人の女給が放浪して行く經路を描いた作物も、やはりスタイルの上の若干の工夫と努力に過ぎなかつたのに、若い新時代と稱せられる人々が、それに感嘆の聲を放つてゐたのを、私は不思議に感じたことがある。

堀辰雄君の『聖家族』(改造)――この作者について、川端康成君が、『最早自分などにもはつきりとは理解出來ないところのある新しい作家だ』と賞めたのか、或は川端君流の利口なお茶濁しをやつてたのか、そんな批評を下してゐたことがあるが、この『聖家族』などを見ると、川端君のさうした『新しきもの』へのお世辭は、この作者のために惡からう、と云ひたくなる。――一體この作者の作物、(自分は前にも二三讀んでゐるが。)例へば今度のこの『聖家族』などの、何處にそんなに理解出來ない程の新しさがあるのであるか。

そもそもこの作物の何處が、一體新しいのであるか。と云つた方が、尚一層適切な疑問だと云ひ得る。

それは時代々々によつて、色合の相違はあるが、概して青年の間は、第一期藝術味とでも云ふべき『藝術味』に捉はれる。そしてそれは早く拔け出さないと、へんに主觀的な、ひとりよがりの霧の中にさまよひ込んでしまつて、その中から出られなくなる。自分達と同時代でも逸才豐島與志雄君の如きはその第一期藝術味の殼を、いつまでも大切にし過ぎてゐた嫌ひがあつた。豐島君は彼の年齡がその第一期藝術味と一致してゐた時代には、『湖水と彼等』その他のすぐれた短篇を書いてゐる。併し彼はそれをいつまでも餘りに大切にし過ぎてゐた。それで彼の處女膜――卑近な例を引くことを、豐島君よ、許されよ――が甚だしく固いものになつてしまつた。

自分はこの『聖家族』を讀むと、豐島君に對して感じた感じに似た感じを持つ。この油繪の額縁に硝子をはめたやうな艷は、どうしても作者が意識的に捨てるやうに努力しなければならない艷であると思ふ。遍理といふ青年、九鬼といふ死んだ先輩、その先輩に戀してゐた夫人、夫人の娘で遍理と心の中で戀し合つてゐた絹子、その絹子に近づき得ずに、却つて、遍理が氣輕に近づいて行くカジノのダンサー――これ等はこの世のものとも思はれない『藝術』の霧の中の人物だ。我々はそれ等に觸れようと思つて手をのばして見ても、その正體を摑み得ないほど

かしさにイライラする。一體それ等の人物は肉體を持つてゐるのだらうか。中世紀の影繪のやうな『魂』か何かだけで動いてゐるのであらうか。——そして更に我々が恐れることは、若し何かの方法でその霧を追つ拂つてしまつて、これの正體を、白日の下に照し出して見たら、それが恐らく甚だ幼稚な唯の甘い物語になつてしまふだらうといふことだ。

岡田三郎君の『妻の死と百合公』（中央公論）は、この材料を、岡田君が何と彼流の月並な書き方で、器用に片づけてしまつたものだらう、といふことを感ずる。もつと辿々しく、苦澁し苦澁し書いたら、もつと深い感動が來なければならない作物であるのに、といふ氣がする。最初の女中の手紙などの書き出しはもう少し好い作物の序幕だといふ氣がしたが、最後の『百合公』の朋輩の出し方——朋輩の言葉などは、この作を甚だしく淺くしてしまつてゐる。併し病床に寢てゐる妻の、良人を求める慾望——作者は唯の慾望と書いてゐるが、果して唯の欲望だらうか？——あの場合良人を求めるあの病み衰へた一人の女の喘ぎは、まざまざと目に見えるやうに描かれてゐる。もつと本氣に書いたら、好い作物になるのにと思ふ。

ささき・ふさサンの『あれも私』（新潮）は、前半と後半とがチグハグだ。『あれも私』にテマがあるのだつたら、あの最初の書き出しは、何處で處置をつけてしまつたつもりなのだらう。——どうも最初の書き出しに書き始めたところを、もつと續けて書くべき作物であつたのを、途中から『あれも私』のテマが唐突に飛び込んで來たのではないかといふ氣さへする。あれも私——この作者の作物には、今の時代に於ける我々の位置といふものに對して、絕望に近いやうな暗い反省が、時々現れるのを、自分はよく身に感じて讀むが、併し今度の『あれも私』の反省は、少々少女染み過ぎはしないか。つまり惡口を云ふと、文學少女染みてゐはしないか。

嘉村礒多君の『秋立つまで』（新潮）——これは、甚だよろしい。傾向、主義、主張の如何にかかはらず、此處まで打込んだ作物には、自然と胸が迫り、涙が流れて來る。

自分は久しぶりで、『本物』にぶつつかつたといふ氣がした。この作にも、又いろいろな批評家はモダン味の不足、階級意識の不足を數へ立てて、この立派な作者の價値を踏みにじらうとするだらう。——併しそんな事を云つて、理窟のための理窟をこねる連中には、いくらでもこねさせて置くがよい。

自分はところどころ、涙のために、讀みつづけられなくなつた。作者の眞實、中に出て來る人物の、この陰氣な沼のやうな生活の中で、日常のこまこました、やる瀨なさの中ににじみ出

してゐる人間らしい哀れさ、殊に仲の惡かつた父親から意外に優しい手紙を貰ひ、而もそれに對しても、主人公は尙一點の疑ひを感ぜずにはゐられない――さういふ場面の後、カツ子が兩親及び主人公の先妻の子供への贈り物を買つて來、兩親には自分で宛名を書くけれども、先妻の子供の宛名は良人にゆづる場面――そして良人がそれを書いてゐる間、横を向いて淚をぬぐつてゐる場面――自分は讀みすすめられなくて、雜誌を投げ出し、仰向けに轉がつて、頰に傳はつて來る淚をしばらくの間拭うてゐた。

この作者は葛西善藏のやうにとぼける術も知らない。自分で自分を英雄視する術も知らない。それだけに、もつとひた向きで、眞實で、誇張がなくて、我々の心をほんたうにゆり動かす。

久しぶりで一ヶ月の創作の大部分に眼を通さうと試み、途中でイヤになり、さういふ努力を無意味と感じかけてゐた時に、はしなくこの作にぶつつかつたので、私はほつと甦る氣がした。

嘉村礒多君は今のだれ切つた創作界では、稀に見るだれてゐない、ひた向きな作家だ。自分は氏の作を大概今まで讀んでゐるが、今度のなどは殊に好い。（十一月八日）

工業の廣汎なる持續と緩漫なる衰微、こゝに印度經濟機構の植民地性が存する。印度手工業の衰微及び近代工業の比較的不發達をば全部英國統治の責に歸することは誤であるが、英國の植民政策上の作爲若くは不作爲が之に對し鮮からざる責を有することは否定出來ない。印度國民運動の經濟政策上目標とするところは英國産業の附屬的地位を脫却し一の自主的なる經濟單位としての發展にある。其要求は大體ブルジョア自主國家の建設にあるがしかもガンディーの主張及び運動方法の最も特色とするところは寧ろ手工業的農民的要素の著しき混在たる點に存する。之れ亦上述印度經濟の現發展段階を反映するものである。(矢内原)

●**ラウンドテーブル誌「印度に於ける危機」**(The Crisis in India. Round Table. No. 80. Sept. 1930 p. 679—708)。印度の自治權獲得には今日に於ては英國も反對しない。たゞ問題はこの目的の到達の爲めの手段に存する。之に關し印度は國內諸異分子の意見を統一し且つ政黨組織を發達せしむる責任があり、英國は印度の國防及國內秩序維持の責任がある。兩者責任の限界線を何處に引くべきやが來るべき圓卓會議の主要任務である。(矢内原)

●**ラウンドテーブル誌「英帝國の經濟的統一」**(Imperial Economic Unity. Round Table. p. 745—765)、ビーバーブルック卿等の英帝國內自由貿易政策卽英帝國關稅同盟運動は自治領及英本國の何れの經濟的利益にも合せず、帝國の政治的關係の發展傾向に對して反動的であり、直轄植民地に就ても國際條約上の拘束及財政上の必要によりて實行不可能である。故に寧ろ經濟的及技術的合理化によりて帝國內の貿易を增進する方法が考究せらるべきである。(矢内原)

●**ラスト「英帝國主義の經濟的危機」**(Rust, W. The Economic Crisis of British Imperialism. The Labour Monthly. Vol. 12, No. 7. July 1930. pp404—412.) 英國はその經濟恐慌を切拔ける爲めに合理化を強行しつゝある。勞働黨政府は金融資本に隷從し、その組織的合理化政策は本國産に止まらず全帝國に及ばんとして居る。T・Hトーマスが自治領相に轉任したるは失業者減少策の失敗者としてにあらず却つて「合理化大臣」として今秋の帝國會議の主要論題たるべき帝國の合理化を計畫せんが爲めである。分解せんとする英帝國の統一を計るため帝國內自由貿易運動が、起つて居るが自治領はその經濟的發達を其國の利益に從屬せしめんとする政策に反抗すべきは明白であり、一方英國では一九二八年度食料品の輸入額英帝國內より一八七百萬磅に對し外國より三一六百萬磅原料品輸入は英帝國內より七一百萬磅に對し外國より一九七百萬磅であるから帝國內特惠に伴ふ外國品に對する保護關稅は國內食料品原料品の價格を高からしめ、資本家間にも利害の對立があるのである。而して合理化は恐慌を解決する効なく、植民地民衆の搾取の強化はその反抗を强める。要するに保守自由勞働の二資本家政黨の何れも現在の難局を切り拔ける途を持たないのである。(矢内原)

●**長谷川萬次郎「民族主義と資本主義の諧段階」**(批判、一・二、昭和五・六、頁六——一八)民族意識は決定する力ではなく決定され

た意識である。社會條件は民族意識から產れるものでもそれに左右せられるものでもなく社會條件が民族意識を產み常にそれを左右する。それは元來民族そのものが何等の生活形式でないからである。近代的民族主義は社會生活が封建的範疇を破つて擴大されたこと、即ち地方的から國家的へと推移する生活組織に伴つた意識で、さういふ進化の現象を民族なる非科學的な空疎な觀念で基礎づけるのは錯誤であるには違ひないが、實踐的に効果的であつた。かくて資本主義國家はその革命當國に於ては民族主義を鼓吹したが、その勃興にに於ては寧ろインターナショナリズムが、その國家精神であらねばならなかつた。然る時この根本の性質が歪めらるべき理由を近代時家は持つ。即ち植民政策實行の必要上、並に頽廢期に於ける資本主義社會構造維持の必要上、民族意識的昂奮を利用する。しかも二十世紀の無產階級は民族意識によりて糜衆の代りに貧窮に陷る外なきが故に之を忌避する。さればこの意識の利用は資本主義初期に於けるが如く効果的でなく、從つて實踐的にも可能性は無い。（矢內原）

政治學及法律學

◆政治學の一般理論、

●テンニース「國民集會の說とホッブスのリヴァイアサンにかける原始集會」(E. Tönnies, Die Lehre von den Volksversammlungen und die Urversammlung in Hobbes' Leviath-an. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. 89.Band, 1. Heft. 1930.)人間集會の發展傾向は次の如し。先づ單なる集合が共同の意欲行動によつて集會となり、更に決議能力を有するに至り、更に單なる偶然的集會より觀念的に存在するものの具體的表現たる集會となり、それが更に一の團體の機關たるに至る。その最も代表的なるは成員の總會である。かゝる集會が一體的意思を有し得るは多數決原理による。成員の諸條件が平等なる程一體性の可能大となる。然るに成員の增大はかゝる平等を破壞し、個人及階級の支配鬪爭が表面に現れ、集會は普遍的より階級的となり君主への協働機關となる。然るに君主と集會のこの二元は漸次に集會の優越へと發展する。階級的にして且參與機關に過ぎざりし集會が、漸次に選擧に依る國民主權代表の決定機關たる集會となる。而して最後に立法のため定期的に繰返す所の集會より、根本法制定のための一回的集會への發展となる。この最後の發展に關してホッブスの國家起源論が極めて注目に値する。彼は當時の支配契約論を採らずして「君主か集會か」の問題をば一元的に解決せんことをその根本題目とした。彼の說はその三著述（Elements, De Cive, Leviathan）に於て注目すべき發展をなすが、リヴァイアサンに於て歸着する所は、原始契約によりて一の集會が作られ、國家及その形態はこの集會によりて初めて決せらるとするに在る。即ち彼は之により一の國家形態が亡びたる時新しき國家形態が設立さるる一方法をば示唆した。それは即ち今日「國民集會」と稱せらるる所のものである。歷史は、十九、廿世紀諸國を通じて、革命に伴ふ新憲法の制定は凡てこの「國民集會」の方法に依れることを示す。ホッブスが事件に先んじて旣に之を

豫示せるは大なる興味である。(峰山)

◆法律學の一般理論

●田中耕太郎「自然法の過去及び其の現代的意義」(カトリック研究第一輯、昭和五・十月、頁一三—七〇頁) 古代希臘より今日に至る各時代に於て法律思想の顯はるゝ形相が種々相異るに拘らず、我々は其の中を一貫して流る一の共通の認識少くとも共通の憧憬として自然法の觀念を認め得るのである。第十九世紀に至り歷史學派實證學派乃至唯物史觀の法律理論の興ると共に自然法は徹底的に葬り去られたかの如く考へられたが、歷史派の代表學者の思想にも尚自然法的要素が認められるのであり、自由法は自然法に反抗したる歷史學派及び註釋學派概念法學に反抗することにより再び自然法に還元しつゝある。自然法の法律學の各分科に對する重要性を見るに、國際法と自然法との密接なる關係は周知の事實であるが、商法の如きも自然法の基礎付けを受くる所あり更に世界法は直接に自然法に其の淵源を汲むのである。法律の正當なる解釋及び其の欠缺の補充は自然法を基礎として初めて完全に行はれ私法に於ける法典編纂事業個個の法律制度の生成も自然法に負ふ所少くない。法律及び道德は中世紀的自然法に於て初めて共通の基礎を得、兩者各々固有の分野を有し乍ら法は單に外面的活動に限られずして倫理化せられ、又道德は主觀的心持の問題に止らずして法律化され、兩方より步み寄るのである。自然法は社會生活中に於ける勢力の分裂對立の存する場合及び社會生活に於ける病弊甚しく現實と理想との懸隔が著しき場合に於て、現實の力として創造的機能を營み、何時の時代にも革新に生命と基礎を與へた。現代に於ける社會問題勞働問題の解決は之を——無力なる新カント派社會哲學に非ずして——自然法に期待しなければならぬ。現代に於て自然法に對する攻擊の一論據として屢々強調さるゝ所の、自然法が前古不易の法を設定し時勢の變遷社會的需要に應ずる能はずとの主張に對しては、例へば聖トーマに於る如き自然法と實定法の關係自然法の彈力性は興味あるものである。自然法に對する現代學者の恐怖は之により法律學の自主性が失はるゝものと單純に思惟するにあるが、實は之によつて初めて法律學が眞に生きるのである。法律哲學復興の現代に於て自然法理論は益々其の重要性を加へつゝあるのである。(高柳)

●安田幹太「法律解釋に於ける主知と主意」(京城帝國大學法文學會第一部論集第三冊)自然現象は齊一であると云ふ事が自然科學の根底をなして居る。從つてある公理・法則は一般に充當するものとして、其の上に安心して理論的研究を積み立てて行く事が出來る。その故に自然科學に於ては理論的方法と經驗的方法とを分離する事が出來る。然るに社會科學は之と異り、其の對象たる社會現象に齊一を豫定する事は出來ない。從つて基礎たるべき法則は更に經驗に照して吟味されねばならぬのである。此の意味に於て社會科學には理論的・經驗的の二つの方法は分ける事を得ぬ。從つて法律學の範圍に於ても、法律社會學を外にした法律規範學を考へる事は不可能である。然るに自然科學に於ても「理論」とは多數の法則を矛盾なく說明する一つの假設に過ぎぬから必然に一義的になるとは限らない。社會現象に於てはその齊一が豫定され得ないのであるから、基礎たる法則は傾向律に止り、その上

に立つ理論も亦一義的でない。そこで經驗的にも理論的にも多數の結論を生ずる可能性があるのであるから、もし科學の結論は絕對に一つ限りでなければならぬと云ふならば、社會科學は科學ではなく「科學的な學問」であると云ふことに滿足すべきである。

こゝに於て社會科學には研究の態度が問題となる。即多義的な結論の中の何れを選擇すべきかと云ふことである。法律學の範圍に於ては古來二つの態度がある。その一は主知主義的態度であつて、歷史法學派の如く社會には個人を離れた客觀的法規の存在することを考へて、この客觀的な法規を客觀的な姿に於て觀察しようとするものであり、他は主意主義的態度であつて、自然法學派の如く社會の要求する秩序は何であるべきかを主觀的に定め、こゝに出發點を置かうとする態度である。法典編纂後の概念法學は、社會の法的規範が法典と云ふ形で明確にされたのであるから、之を忠實にたどることによつて眞の社會の法規範を認識し得ると云ふ意味に於て前者であり、法典と社會現象との食ひ違ひに出發した自由法學は後者である。斯の如く態度の異るにつれ結論も又異り得るのであるが、吾々は強いて普遍充當する法則を求める必要は無いのであつて、自己の可とする態度の上に立つて、より眞理に近い傾向律を求めることに努力すればよいのである。氣象の法則がある漁村の明日の天候の豫知については、漁夫に及ばなくても、その法則たることは動かし得ぬのではないか。(穗積)

●フォン・ヒッペル「法の拘束性に就て」(Ei Hippel, Über die Verbindlichkeit der Gesetze, Archiv des öffentlichen Rects F.N.F. Bd. 18 Heft 1. S. 86—120) 法の定むる手續に從ひ且つより上位の法に違反しない所の法律は總て拘束力を有するものであらうか。それともかかる點に就て何等瑕疵なきに拘らず、拘束力なき場合が存し得るであらうか。法律の主權性 (Souveränität des Gesetzes) を認める者は、正當の手續に基いて制定された法律はその恣意に出づると否とを問はず常に拘束力を有するとなす。即ち法と權力とを同一視し、法は合理的なるが故に通用するのではなく、主權者の制定する所なるが故に通用すると解する。純粹法學派はこの主權者の觀念をその正當性を基礎づけ得ない空虛を當爲の形式としての基礎規範の觀念を以て置き替えたに過ぎない併し乍ら、法が法として拘束力を有するのは法が法の理念に合し合理的なるが故であり、自然と自由と道德律の結合の上に始めて我々の遵守すべき法が成立し得るのである。(美濃部)

◆政治學及政治問題

●永安百治「公營事業の起債償還と減價銷却」(自治研究、昭和五・十月、頁二五—三〇) 收入を伴ふ生產的公營事業は使用料を以て經營し、其創設費は起債に俟ち、その元利償還費も使用料を以て支辨すべきが一般に是認せられてゐる所である。而して使用料は手數料主義に依つて實費を限度として決定すべきであるは云ふを俟たぬが、其使用料の決定には、狹義の經營費、改良費及び起債元利償還費が基準とならねばならぬ。そこで、起債の償還計畫は、自ら使用料の內容に影響を與ふることになる。この償還計畫に於ける償還年限と償還額との決定基準は起債によつて施行せられたる設備の耐用年限と減損價格とである。公

營事業に於いては私的企業と異なり、償還年限は耐用年限より早くする必要がない。實際はそれより早く定むる場合が多いが、それが爲めに使用料は不當に高くなる。償還額は設備の減損價格を基準とすべきであるが、設備價格は維持及び改良費の支出によつてその程度を減ぜられるから、減價額なるものは維持及び改良費を支出しても猶減ずべき額を計上すべきである。之を要するに償還計畫は主として設備の耐用年限と減損價格とを基準として決定すべきであるが、實際に於いては金融市場の狀勢によつて制せられる。(蠟山)

●**今中次麿**　**「政治の經濟化か經濟の政治化か」**(經濟往來、昭五・十月)「經濟國策」の提唱の著者山本条太郎氏が社會萬般の問題に亙り自ら一家言を樹てんとする態度は政治家の越權だ。今日政治家の任務は自ら凡ゆる部門の專門的研究立案をなすことではなく、各部門專門家の見解に據つてその最良の實現を圖る所にある。氏は政治の經濟化を提唱するも、今日要求さるゝは寧ろ經濟問題の政治的解決、即ち經濟の政治化である。そのためには益々獨裁的統制を要する。各國種々の獨裁政治は正に該要求の現れだ。氏が民營、地方分權等を說くは時代錯誤だ、合理的なる政治的解決は大衆自らによりてなされる。我國にて尙多少の意義を保つ軍閥及樞密院もやがて政黨の絕對權力の下に立つに至るべきも、その政黨支配が極まつて自ら分壞する迄は大衆の政權は來らぬ。その間の政黨は資金を豐かにして權力把持に狂奔すべく、山本氏の政策は正にそのための經濟黨策で、經濟國策ではない。(蠟山)

●**ポロック**　**「英國政黨組織」**(J.K. Pollock, British Party Organization. Political Science Quarterly. June. 1930.) 過去廿五年間の英國政黨組織の變遷を見るに、三大黨共に主として選擧權擴張に因る組織の擴大と強大化、職業的役員の增大と組織化、婦人、青年、出版、敎育調査等各部の組織發展等の諸傾向を見得るが、最も重要なるは、黨組織の重心が地方的組織及びその全國的聯合より中央本部に移り來れることである。今日組織權力の中心は、保守黨ではその「保守及統一黨協會全國同盟」に存せず、自由黨ではその「自由黨全國聯合」に存せず、勞働黨にてもその年次大會は敎育的意義を主とし、實權は「全國執行委員」の監督の下で中央本部が之を有する。各黨共今や中央本部が凡ゆる黨の機能と組織權力とを總括し、正に組織の樞軸をなす。かくて衆民的目的は之を維持するも衆民的手段は之を斥け、政黨規律を強化し、而してかゝる集權的組織が更に集權的なる指導者に奉仕せしめらるゝことゝなるのである。(蠟山)

◆公　法

●**美濃部達吉**　**「ケルゼン敎授の法律學に於ける國家概念の批評」**(國家學會雜誌、四四・八、昭和五・九月、十月、頁四七―七八、七六―九四)、國家が單一體たるは常に法による結合を前提とするが其統治組織は決して思想上の Sollen に屬せず客觀的事實として社會心理に依り侵すべからざる權威として意識せらるゝを要する。社會心理は社會の標準的權威たる一般人を支配する共通の心理で、此現れである服從意識習慣性正義心により國家の統一的團體たる性質が成立する。國家意識は自我の一に過ぎず階級的民族的等の對立により國家意識が失はれるものではない。ケルゼンは次

に國家の意識は實在の心理作用と關係なく、單に歸屬の目的の爲にする juristische Konstruktion で、法認識の手段として設けた觀念に過ぎず、法卽國家とする。法律學に於ける意思は唯人の意思が社會的交渉を有する限度に認められ、又社會心理上、或目的を遂する爲、人間の活動を惹起する力とされる場合に廣く認められ得るが、常に現實の心理作用或は少くとも社會心理上或者の意思として認めらるゝを要し法により始めて Zurechnen するのではない國家が活動從て意思を有するは社會心理の認識する所である。ケルゼンは法の究極たる根本軌範が基く所は說明し得ないとする。法は社會心理に基き從て國家は法の前提でないが、其權力は法を作る重要な原因の一である。ケルゼンは又社會學と法律學とは全然對象を異にし國家雙面說は誤とする。法律學と社會學とは全面的と一面的との差があるが、既に法が一社會現象である以上社會現象の一たる國家が社會學の對象と同時に法律學の對象ともなり得るは當然である。更に彼が國家の自律的制限を法の規律に外ならぬとするのも誤で國家の制定する法律又は其締結する條約が國家自律の法たるは、爭ふを得ぬ。只是が國家を拘束する效力あるは、理法によるが、是は自然の力に基き、敢て國家の最高性を妨ぐるものではない。尙國家自律說は決して國際法を國法の一部となすものではない。法の淵源と法の效力範圍とは別問題である。（美濃部）

●渡部宗太郎「自治監督の特質」（法學論叢二十四・四、昭和五・十月頁、五九—九六）一般に國家監督とは國家自身の利益の爲めに卽ち國家生活の維持發達の爲めに國家が支配し得る立場に在る意志主體を監督して必要ある場合には敢て之を拘束し一定の法規範に合致せしむることをいふ。而して國家の監督は政治的行動に對する監督と非政治的行動に對する監督とに區別せられ、前者は更に獨立の人格たる者に對する監督と然らざる者に對する監督とに分れる。自治監督とは獨立の人格たる者の政治的行動に對する監督である、卽ち國家が獨立の人格たる地方團體の政治的行動を一定の法規範と合致せしむる爲めに繼續的に注意し必要に應じて之に一定の拘束を加ふることをいふ。その特質の一は法規違反を除去する爲めの單なる命令又は禁止を目的とする消極的監督のみならず、被監督者に於て必要なる或種の政治行動を實行しない場合には國家が自ら進んで積極的に代つてその行動を實行する點であり、その二は地方團體は國家機關たる個人と異り國家に對して獨立の人格者であり、かゝる意味に於てその監督權を行使するためには常に法の根據を必要とする點、及び地方團體に對する國家の監督は地方團體と國家との間のある程度の獨立關係を基礎とすべきものであり、從屬關係に基く國家機關に對する職務命令の性質を有せず、從つて自治團體に監督權の限界に對する一定の審査權が與へられ限界を越えたる監督權の行使に對して權利主張の可能性の認められる點である。（美濃部）

◆私　法

●瀧川政次郞「日本埋藏物法沿革」（法學新報、四〇・一〇、昭和五・一〇月、頁三八—七一）王朝時代に於ては埋藏物の事を宿藏物と云つて其の要件としては第一に土地に埋沒せられ普通の狀況では容易に發見できぬこと、

第二には無主物ではないが財主の知れぬことであつた。その宿藏物が官地（官の直接の用益地）又は自己の私地に於て採得（發見且占有）せられた場合には全部採得のものとなり、他人の私地なるときは半分した。しかし「古器ノ形製異ナルトキ」は官收して相當な代價を與へた。そして他人の私地に於て採得しながら官に送らずして隱匿する者は、徒一年以下杖八十の罰を受けた。武家時代に於ては、成文の規定は天文五年の伊達稙宗の塵芥集の他に見當らぬのであつて、慣習法に委せられて居た。德川時代の判例によれば、埋藏物の發見者は遲滯なく之を官に屆出ることを要し隱匿する者は過料に處せられた。屆出を受けた役所は之を公示し、原所有者の現れぬときは發見者に全部を與へ、原所有者の現れた時は金銭のような可分物なれば半分、不可分物なれば相當な謝禮を出させた。明治の初新律綱領は明清の律を參酌して王朝時代の規定を復活したが、宿藏物と云はずして、埋藏物の語を初めて用ひた。其後公法私法の別が明になるにつれ、隱匿者の處分と所有權の歸屬とを分ち、明治九年太政官布告第五十五號を以て前者を同第五十六號を以て後者を規定した。舊民法は包藏物の範圍を土地以外に擴張すると同時に歐洲學者の通說に從ひ、發見者は告占の法理により半分を、包藏物の所有者は添附の法理により半分を得ることにした。（王朝時代のはかゝる法理を基礎とするのではなく「酬其功力」と云ふ意味である。）續いて現行法に至つたのであるが、埋藏物と云ふより宿藏物と云ふ方が明確であらう。又、「學術…資科ニ供スヘキ」ものは國庫に歸屬せしめるが、何が然るか判定は難しいから「古器—形製異ルモノ」と云つた方がよい。（穗積）

◆國際法

●泉哲「保護國が被保護國の爲に締結する條約の性質」（國際法外交雜誌、二九・八、昭和五・一〇月、頁一—一三）國家併合の場合に於ける被併合國の舊條約の取扱に就て、實例、理論共に特別の例外的場合を除く外條約の消滅することを認めてゐる。被保護國が保護國に併合された場合も被保護國の舊條約の消滅すること獨立國併合の場合と同樣である。之を間島問題に適用すれば、日本が被保護國朝鮮の懇望により清國との間に締結せる間島條約は、朝鮮の併合と共に——第一條の境界條項を除いては——消滅せるものと言はねばならぬ。日本は表面上此の解釋をとらず滿蒙條約第五條第二項により間島に治外法權を擴張し、支那は間島が南滿洲に屬せずと主張して之に反抗して居るのであるが間島の地理的歷史的其の他の諸事情より考察して滿蒙條約の間島適用は當然であり、假に適用なしとするも朝鮮併合による間島條約大部分の消滅は確實であり日支一般通商條約が同地に適用せらるべきである。（高柳）

●松原一雄「國際聯盟と國際法」（國際法外交雜誌、二九・七、昭和五・九月、頁一—一二）成立以來既に十年、幾多の貢獻をなし又幾多の經驗を有するに至つた國際聯盟の國際法上の地位性質に就て學者は種々の說を爲してゐるが、第一に現實國際聯盟が所謂超國家でないことは明であり第二に之を同盟なりとするは譬喩としても形容としても妥當でなく第三に之に國際人格を認めんが爲の聯邦視も理論上實際上有害無益である。聯盟には明に聯盟自身の「行動範圍」なるものあり、聯盟は或は

「生ける有機體」ならんも、それが爲に必ずしも法人格を有しない。聯盟規約は「聯盟」のに非ずして「聯盟各國」の權利義務を定め、聯盟自體に法人格を附與しては居ない。聯盟の利益は聯盟各國の共同利益であり、聯盟の意思は聯盟各國の共同意思であり、聯盟の行動は各國の共同動作である。聯盟は聯盟各國が一定の事項につき共同動作を取る爲の組合である。聯盟の法人格の否定は決して聯盟の使命の重大性を否定するものではない。聯盟の重大なる任務は國際平和の擁護に存し、現在の國際團體に於て國際平和及び國際協力の促進の爲に有力なる機關たることは爭ふべくもない。併し所謂國際法治主義の實現は前途尙遼遠である。吾人は將來に望を囑して聯盟の發達を待たねばならぬ。(高柳)

◆國際政治及國際事情

●田川大吉郞「重點は徐ろに動く」(國際知識、一〇・一〇、昭和五・一〇月、頁一六—二五）歐洲大戰を轉機として世界の重點は徐ろに動く。獨逸は軍國的破壞主義の爲に躓づき今や建設的協力的平和的方面の精進により再び興りつゝある。佛國も軍事的施設より經濟的施設に向つて進みブリアン提唱の歐洲聯盟も經濟的聯盟である。英國の最近百五十年に亘る世界的覇權は、其の經濟的優越と共に海軍の、科學の、更に政治の優越に因る所大であつたが、今や後の三要素次第に衰退し國運興廢の重點を經濟の發展に置かんとする。米國の金貨榮收の努力に就ては言ふまでもない。かくして倫敦會議に於ける世界の重點が軍艦力の多寡を爭ふ點にありや軍艦力を制限縮少せんとする點にありやは自ら明である。然るに日本の國策の重點は依然として軍國主義であつて倫敦條約に關しても、第一に飽く迄も、戰爭すると言ふ前提を以て、第二にそれに不足なき補充擴張計畫を立てると言ふ約束を以て、樞府軍部政黨等大體一致した方針のもとに此の條約を假に締結し今後の會議に臨む準備を立てんとするものであり、倫敦會議の主旨は殆ど全く無視されてゐる。それは餘りに世界の大勢を懸け離れたものではないか。吾人は世界の動きを見落さず見誤らぬやうにせねばならぬ。(高木)

●[illegible]「英國勞働黨外交の指導精神」(「外交時報、五六・一、昭和五・一〇月、頁一一八）英國勞働黨は弱肉强食の帝國主義を排して、世界平和國際協調を其の外交政策の指導精神とする。この根柢の上に立つて勞働黨は軍備縮少制限のために能ふ限りの努力を拂ふことを惜しまず、植民地に對して植民地のための植民地を力說して、自治能力あるものにはなるべく速に自治を與へんことを主張し、又近代軍備競爭を列國の經濟的競爭に基くとして資源の獨占排他に反對し之を各國民の共同利用に委すべきことを强調する。かくして勞働黨は力の外交を排して正義の外交を主張し法の支配する國際社會の實現を期待する。國際關係の現狀に於てかゝる基調に立つ外交を遂行するには實際上尙幾多の困難あり、勞働黨の外交も必ずしも理想通りに動いては居ないが彼等の有する指導精神が羊頭狗肉でないことは信ぜらるゝのである。(高木)

●グレアム「日本と其の對英米關係」(Graham, Japan and her relation with Britain and U.S.A., Communist Rev. 1—8, Aug. 1929, pp 463—472）一九〇五年日英兩國は攻守同盟を締結して東洋に於ける彼等の利益を擁

護した。世界大戰に至るや、日本は歐洲の生產の破壞によつて生じた商機に乘じて、努力に努力を重ね遂に一九二〇年迄に大資本主義國家の一となり、其の市場は遠く印度南米濠洲より阿弗利加にまで及んだ。日本は又銀行鐵道、借款、勢力範圍等により支那に多大の壓迫を加へ、自己の支那侵略を防護するために絕えずソヴイエト聯邦に對抗した。併しながらこれと同じ時期に米國も亦支那との間に巨額の貿易を作り上げ、一九二三年には日本の次位を占むるに至つた。米國の東洋に於ける此の發展はその領土的擴張と相俟つて日本の經濟的軍事的安全を脅すものであり、かくて必然的に太平洋に於ける制覇の戰爭にまで導かねばならぬ。國家主義的感情は兩國を蔽ふ。兩國共武裝しつゝあり、日本の一九二七年の軍事費は一九一三年に比し二六四%の增加を示して居る。日本は戰に進みつゝある強い潛勢力であり、英國よりの支援なしには米國は日本を徹底的に打破することを期し得ない。(高木)

社會學

●宮林義雄 「支那に於ける兒童死後婚に就いて」(社會學雜誌、七五、七六、昭和五・七月、八月、頁一五一—五六、三三一—六四、)支那には古來、夭死した未婚の兒童を婚姻せしめると言ふ謂はゞ死後婚とも稱す可き、洵に珍らしい風習がある。著者は數多き文獻の內から死後婚の事例を蒐集し詳細に研究した結果次の諸事實を確め得た。卽ち死後婚は漢人種蒙古人種、圖伯特人種の間に行はれ、紀元前十數世紀頃既に黃河上流地方に存在してゐた。其後その地方に繼續されて來たが今日では江南沿海地方一帶の一圈內に行はれてゐる。死後婚の類型には(一)生前、許婚關係にあつた男女兩方側の死亡に依るもの。(二)生前、許婚關係がなかつた男女兩方側の死亡に依るもの(最も多數で且、基本的のもの)。(三)生前、許婚關係にあつた男一方側の死亡に依るもの。(四)生前、許婚關係にあつた女一方側の死亡に依るもの。(五)生前許婚關係が無かつた女一方側の死亡に依るもの。以上五つがある。死後婚は未成年の未婚男女の婚姻であるが中流以下の貧家には行はれない。更に著者は死後婚の發生事情を次の如く說明する。卽ち支那人は元來、祖先の靈は常にその族に吉凶禍福を與へると信じるから、祖先崇拜の念が甚だ強い。而して末永く子孫をして祖先の祭祀を繼續せしめる事は族長の最大義務である。婚姻は全くこの宗祭繼承者を得る手段であり、從て其れは族長の宗教的義務である。然るにもし自己の子供が未婚にして夭折するならば、親はその重大な義務を履行しなかつた事になり、子供の靈は瞑んぜず、偶に親を苦しめるかも知れぬ。故に死者をして來世での結婚生活を樂しましめ、その靈を歸依せしめて以て族の安泰を計らうとする。是れ死後婚の理由であると言ふのである。(戶田)

●ナンズ 「階級の特質」(Nuns, J.C. The meaning of Class distinctions. J. Philos J. Studies 5 (17) Jan, 1930:3—16.) 階級の特質を決定する準據は之を人間が所有する經濟的貧富、知能の有無、傳統的身分の高下等の諸々の外的なるものに求むべきではなく、階級の特質は之を純ら上位と下位卽ち優位と劣位 superiority and inferiority との人間關係の內面性に求むべきである。階級は人間關係の橫の所謂水平的な組織體系を持つ他の社會關

體に類比し得られない。階級は、是等の關體と根本的に差異するところであつて、人間關係に於ける優位と劣位との縱の所謂垂直的な關係體系である。而して階級の特質をなす此優位と劣位との關係體系は如何にして成立するのであるかを考へるに、外的な經濟的原因に因つて喚起された例へば優位なる審美的意識は最初は人間關係の他の諸相に對しては漠然たるものであるが、漸次他の諸々の人間關係に轉化され擴大されそれに應じて、優位性が集中し占有せしめられて、並に人間關係に於ける優位なる關係體系が明確に顯然と成立し來たる。（戸田）

●ガルピン「農民の覺醒」(Galpin, Charles Josian. Rural life.—Amer. J. Sociol. 35 (6) May. 1930: 1010—1016.) 最近十年間の經濟的動機を機緣として農民は大に自覺し來つた。彼等は農具の改良や新發明によつて收穫を豐かにしようとのみ專念してゐた。從來の熱情をかなぐり捨て丶、彼等は最早新農具の無益さを悟つた。而して彼等は農民たりとのみ考へてゐた昔時の事から醒めて、吾々も人類社會の一員であるとの事に活眼を啓いて人類としての平等の資格を得んと奮起し來つた。斯る變態は農村社會に於ける農民生活の一大變動であつて、それは年を追ふて表面に顯れ來たりつゝある現象である。農民は辛苦流汗、只だ農作によつて幸福を得んとする從來の古い信仰を失つてしまつて、彼等は專心に人道理論の内に新信仰を求めつゝある。（戸田）

文化人類學

●八代義定「福島縣に於ける古墳分布の狀態」（福島縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第五、昭和五年・三月、頁一—五六）福島縣下に於ける古墳分布の狀態に關する記錄である古墳築造の頃は農耕を生活の中心としたから耕作に適する場所に人民が集まつた。此條件に適するのは海岸又は各河川流域の沖積地であることは明かである。縣下を海岸帶中央帶盆地帶に、區分することが出來る。海岸帶に於ける土地利用範圍は海拔四〇米以下、中央帶は同五〇米以上三四〇米以下、盆地帶は同二〇〇米以上二八〇米以下の地域である。古墳は其築造時代文化を反映するが故に、其實數は民居の密度を指示し、該時代開發のバロメーターとなし得る。海岸帶に於て最も密布するを見る。沃土よりなる沖積地が農耕に適するのが主因であらう。氣溫、海産物等の惠まるゝは其副因である。中央帶の古墳は阿武隈川を中心に兩岸二里以内に帶狀をなして密布し、支流方面は稀薄である。盆地一帶の地は、前二者に比して其面積に對する分布密度極めて稀薄である。其原因は猪苗代湖の範圍大にして、今日の如き沖積作用の定成を見なかつた從つて沖積地域が小であつた爲と思はれる。三帶を通じて古墳の型式は封土を有するものは多く圓墳である、瓢形墳數十三、方形墳三。埴輪を伴ふもの海岸帶五ケ所、中央帶三ケ所。横穴古墳は海岸帶最も多く、他二帶は極めて貧弱である。（松村）

●テイラー「人種移動帶と其重要性」(Taylor, Griffith. Racial migration-zones and their significance. Human Biol. 2 (1) Feb. 1930. pp. 34—62) 最古型の人種は現在世界の周緣部に居つて人類起源地—恐らく中央亞細亞南部に居らないといふ見方に、帶又は圏の概念が用ひられてゐる。著者は其創案者の一人である（一九一九年）。之は何故ネグリトー、ニグ

ロ、オーストラリア人、地中海沿岸民、アルパイン人が地理的に最も廣く擴り、且分散したかを明かにする。是等諸人種は多分過去三十萬年の間に起源地から分散し、變化ある地理並に氣候の狀態によつて性質上の分化を遂げたのであらう。其要因は内分泌の内に惹起された變化を通して間接に幾分成就されたであらう。此分散の附隨的證據として、上に書いた諸人種の位置が、大移動路特にパレスタイン、スエズ、ベーリング、亞細亞濠洲に關係があることが知られる。頭形、血液型毛髮の組織等は斯かる移動の迹を辿る主要標準として用ひられる特質である。データはアルパインは最新高等人種型、ノーディックと地中海人種は古く且つ密接な關係にあり、モンゴロイドとアルパインとは殆んど相類するものなることを示す。アリアン語系は恐らくアルパイン語族と相關係し、ノーディック及地中海人種に影響したところのものである。されば人種相反說ノーディックの上論の如きは荒唐無稽で現在地上を支配してゐる、各地方のあらゆる人種の遺風に過ぎぬのである。(松村)

人文地理學

●**小寺廉吉**「**社會生活の地理學的研究に就て**」(高岡高等商業學校研究論集、第二號、昭和五・一月、頁九七—一四一) 社會生活と地理的環境との關係に關するラッツエルとデュルケムの言葉を對照すると、前者は土地が社會生活に影響を與へるものだと見、後者は社會生活が土地を變形するものだとする。此の土地こそ地理學的研究の對象であるが、それと社會生活との關係は複雜であるから、それらの研究は各種の專門家によつての地理學的研究に屬する土地と結合する。社會現象は(一)は地理的條件の影響を受ける社會現象であり(二)は社會現象それ自身が地理的な表現を有するものである。此の地理的現象の歷史的性質は、地理學的研究に於ける型を取扱ふ時にまた其の地誌的研究を行ふ場合にそれが重要な意味を有つ。更らに我々は、地球の各地方に位置し存在する社會生活と社會生活との間に、世界的な經濟的結合を見る。今日此の結合の狀態は中間階級的なものであつて、それらは將來益々緊密になり有機的になりしかもそれが地理學的現象として表現する。此の現象もまた歷史的意味に於て理解さるべきである。我々はいつも我が地球をば種々な地的現象の統一體と觀念し、此觀念を社會生活の地理學的研究の指導的觀念とする。(新渡戶)

●**三澤勝衛**「**八ケ岳火山山麓の景觀型**」(地理學評論、五・九——一〇、昭和四・九——一〇月) 八ケ岳火山山麓の中での西麓斜面である山浦地方の南山浦地方を一つの獨立した地理學的地域として其の景觀を考察した。此の地域の主要地表現象として、聚落・人口密度・耕地・地質・地形・耕地肥沃度・灌漑水・馬匹飼育密度・桑園金肥施用濃度・春季飼育戶數密度・夏季卓越風及防風林・民家生垣密度・主要副業・蠶種製造家密度の分布を、文獻及踏査等に基いて夫々別々に圖示して之を解說し、更らに明治初年の經濟的區分圖(一)聚落及耕地帶(二)荏草野帶、(三)荏疎林帶、(四)森林及灌木草木帶」を參照し是等の地理學的景觀の構成を考察した。——(一)聚落地帶が海拔一二〇〇米以下である事。また聚落地帶内の道路が扇狀地形と關聯して、縱道即ち東西原の多い事聚落の氏神の位置が概ね其の上位にあ

る事、(二)人口密度(疎・中・密・超過)と耕地との關係に於いては、農桑式を基調として居るから。山麓聚落であるに係はらず多數の人口を包容してゐるのは、水田と桑園との組合せから水田の肥沃度、馬匹飼育の密度と桑園金肥施用の濃度との相關關係にある。なほ灌漑水原は他の人工的水原が扇狀地なる自然と調和しつゝ此の地域の開拓に寄與し、水田への入口に於ける水温を高めるヌルメなる水溜は海拔高度の稻作栽培の爲に工夫されてゐる。此の地域の強風性が防風村によつて著しく緩和され、しかも其の樹種が地形と地味に相應しい赤松である事も、此の防風村の仕立に努めた住民の努力を證據立てゝゐる。之を要するに、此の山麓地域が多數の人口を包容してゐるのは、其の農業經營に稻作と養蠶との兩元への完成に對しての灌漑や防風や施肥に努めた結果であり、それが調和した地理學的景觀の構成となつて表現されてゐる。(新渡戸)

●ヴアロー「地域的憧憬と地理學」(Vallaux, Camile.Camile. Lesaspiratione regionalistes et la Géographie Mercure de France. 205(723). Aug. 1,1928: pp. 568—585) 自然的地域の概念は、ヴイル・タルド・ラ・ブラーシユと其の學徒によつて、フランスに適用されたが、それは優れた現代にも批判的に再評價される。自然的地域は山地以外には跡付ける事は困難であつて、時代の吟味はそれらが人文的地域と適合しない事を證據立てる。(一)近代的交通は以前に成立つてゐたこれらの統一を壞し、(二)經濟的關係は自然的地域よりも廣くなつたり狹くなつたりする。フランスでペイ(Pays)とよばれる小さな地區は、昔通市場町に往來し得るやうな範圍をいふのであるが、そこには夫々の活動力の特色がある。デパートマン(Departement)もまた生活の地方的慣行を有つてゐる。正當な地域は土地的であり、政治的であり、また行政的でなければならない。物質的地域主義は生活樣式勞作慣行及び文明の外形にあらはれてをり、フランスに於ては、今日それがブレトンの服裝や祭禮のやうな遺習に見られる。精神的地域主義は一層しつかりと根を下してをつて、それが各地の鄕土藝術に見られる。(新渡戸)

歷史

◆國史

●中村孝也「蘐園學派の經濟論」(史學雜誌四一・一〇、昭和五・一〇月、頁一—三一) 蘐園學派とは荻生徂徠一派の學派である。筆者は先づ江戸時代における經濟論の系統的區別を述べ、ついで荻生徂徠の學風の展開して行く有樣を述べ、この學派の經濟論は徂徠によつて開拓され、太宰春臺によつて大成せられ山縣周南によつて側面から補足されたものであるといふてゐる。次にはそれら經濟論の題目を分類して思想の系統を尋ね、本邦先進學者の說を祖述したもの、本邦では獨創の如く見えるが實は支那思想を演繹したもの、全くの獨創論などに分ち、徂徠の貨幣論、物價調節論、社會組織改造論、春臺の銀本位論、重商主義的財政政策論、周南の人口論等をその後者に屬するものとしてゐる。最後に蘐園學派の經濟思想史上における地位を考へその綜合的な特色を強調してゐる。(黑板)

●牧野信之「中世末に於ける寺內町の發達」(史學雜誌、四一・一〇、昭和五・一〇月頁三二—六六) こゝにいふ寺內町とは中世末に於ける

都市出現の形式の一として、一向宗の寺院を中心として、その寺院によつて構營せられた市邑を指してゐる。そしてかかる形式の市邑が何故起つたかは、本論文によれば、蓮如によつて盛に行はれた一向宗宣傳の業が、その居住地に多くの僧俗を群集せしめ、彼等が營んだ舍屋がいつしか寺を圍繞して市邑をなすに至つたのであるが、後にはこの形式を最初から豫想して街衢を作り組織を定め、法主は緇俗兩界の權を執つて住民に臨むに至つた爲であらうといふ。本論文はそれら寺内町の實を河内の富田林、久寶寺、八尾寺内、和泉例貝塚、近江の山田、寺内、越中の古府、井波、城端、攝津の天滿、大和の今井等に求めて、それぞれの構營の由來をあげ、後に極めて寺内町成立の徑路源流制度等を述べてゐる。(黑板)

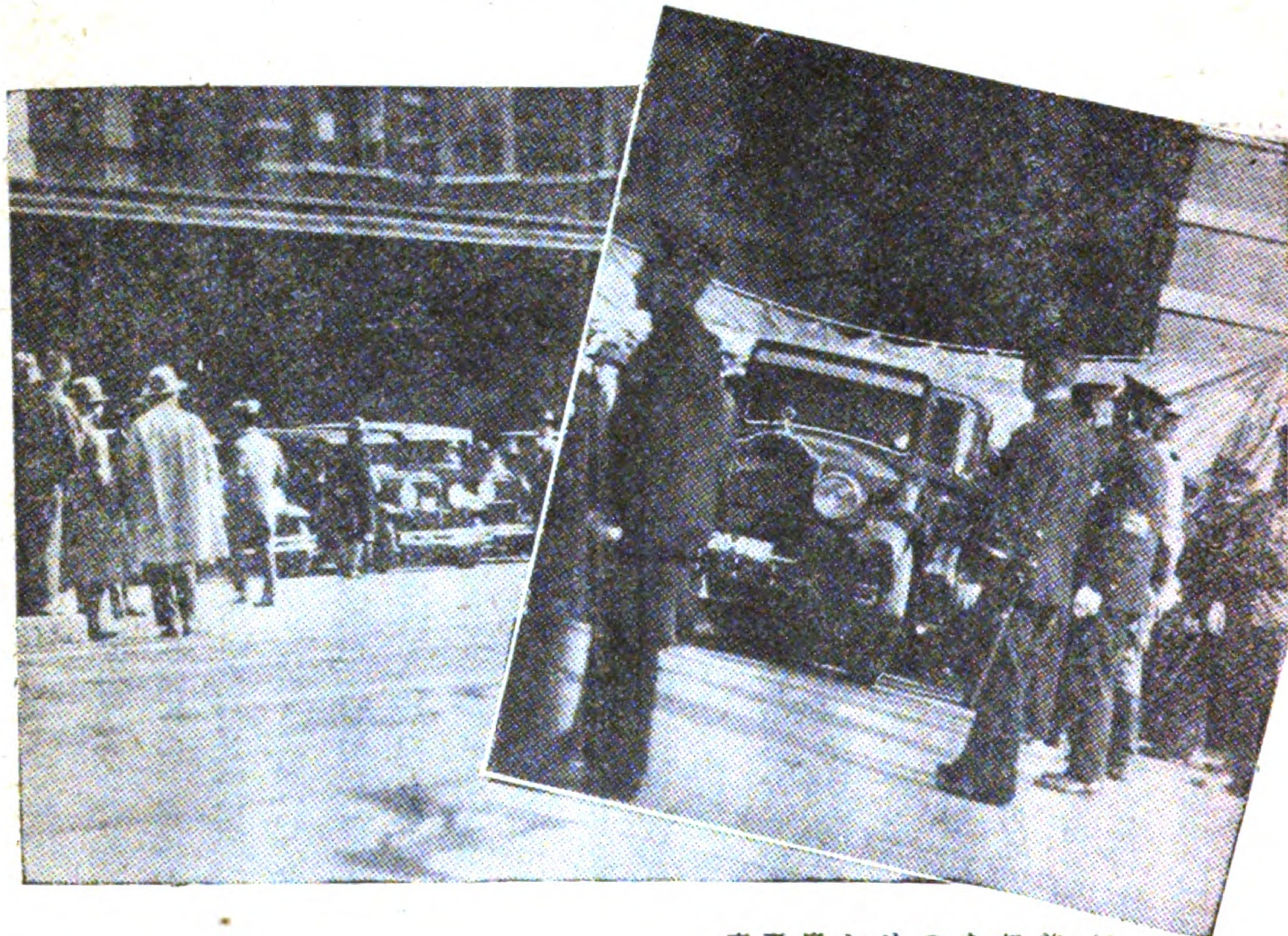
●**蘆田伊人「西歐最初出版の日本地圖に就いての或る考察」**(歷史地理、五六・四、昭和五・一〇月、頁一八—四八) 故山崎直方博士所藏の古地圖展覽會の際出陳せられた一五九五年版のオルテリユウスの日本地圖は、歐洲で出版せられた日本を主としたる地圖の最初をなすものであるが、未だ作成の出據が明かにせられてゐない爲に本論文に於いて、その研究が試みられたのである。筆者はまづ日本島が歐洲で描かれた世界地圖に載せられてから一五九五年前に至るまでの歐洲における日本關係地圖の沿革を説き、それらの地圖における日本島の形狀は甚だ不完全で、或は芋蟲の如く或は頭蓋骨の如き形をなしてゐるのに、一五九五年に至つてオルテリユウスが完全に近き形狀の日本圖を作つたのは、その原因一に彼が日本における日本圖を入手しこれを基圖とした爲であるとしてゐる。進んで地形島嶼等の細い點の一致を求めて、その基圖を唐招提寺に藏する行基の日本圖に酷似したものであつたと推斷し、更に歐洲の既成の地圖と、西歐人の日本來航者の日記報告とによつて、この基圖の日本圖に多少の變更が加へられたことをも論じ、以てオルテリウスの日本圖を生んだ三つの源泉を明かにしてゐる。(黑板)

◆東洋史

●**鳥山喜一「猛安謀克と金の國勢」**(朝鮮支那文化の研究、昭和四・九月、頁四六九—五三五) 北滿のアルチカに起り、遂には北支那をも掩有した金帝國の發展と其の衰亡には、種々の源因が考へられるが、其の有力な源因の中には、猛安謀克の制度の消長を數へねばならない。猛安と謀克とは生女眞部の族長を主帥とする戰闘團體に起源した。一は ming-kan 千夫の長の意を有し、他は muke 百夫の長であるといふ。國家創立の際に於て、此の稱號は外族の併合、招撫の手段として生女眞以外のものにも與へられた。しかも國家組織が漸く固定すると、經濟的地盤の獨占の爲めに内族に向つて集中された。同時に屯田軍的遷徒移住(コロニゼーション)によつて中原の各地にも布植せられ、政治的經濟的特權を享有した。やがて特權階級的飽滿の狀態に到達すると、國家維持の軍事的經濟的勢力が消耗し減衰した。國家崩壞の間際に於て招兵(傭兵)の將領に嘗ての名譽ある榮爵が賦與された。此の國家と傭兵との資本的雇傭關係は、軍規の弛緩を暴露して、必然的に國家を瓦壞にまで追ひ詰めた。後の清朝の興起に深い關係をもつた滿洲八旗の制も、勿論金の此の制度に傚ふ所多いこと氏の言の如くである。(池内)

●五井是博「唐の賤民制度とその由來」(朝鮮支那文化の研究、昭和四九、頁四〇一―四六七) 唐の賤民を大別して官賤民と私賤民とする。官賤民に屬する者に官奴婢、官戸、雜戸、工樂、太常音聲人がある。官奴婢は多く反逆相坐の法により、沒せられて官に入つたもので、男子は農事に女子は裁縫に從ふのを普通とした。又一般に當色以外の通婚は禁ぜられてゐた。官戸は一年三回一ヶ月宛本司に上番して服役する義務があり、又百姓口分田の半を受ける點が官奴婢と異つてゐた。雜戸は官戸よりも一段良人に近い者で、其の良人と異る點は賦役を異にすること、良人と通婚し得ざることの二に歸せられる。工樂は正しくは工戸・樂戸にして前者は宮廷の工藝品を製作し、後者は音樂を奉仕するものである。太常音聲人は太常寺に屬して樂を作すもので、元來は樂戸であつた。その他の官賤民と異る點は良人と婚姻を通ずることが出來たことである。而して以上の官賤民の階級を次第して(良人)――太常音聲人――雜戸――工樂――官戸――官奴婢とすることが出來る。私賤民は私奴婢、部曲、部曲妻、客女、隨身の五種を含む。私奴婢は下賜、貿買、典質によつて發生する。私奴婢は資財と同一視され、又其の戸籍は主家に附屬して、州縣には籍を有しなかつた。その身分は子孫相傳であつた。部曲は賣買を許されない。又良人の女と婚する事を得た。部曲妻は部曲の妻で、客女の場合あり良人の場合もあつた。その籍は主家に附載されたと考へられる。隨身は稍明かでないが、通常解して年月を限つて賃傭せらるゝ者をいふ。以上の奴隸の發生の因は戰爭による捕虜、犯罪によるもの、及び貧窮の結果人身賣買に會した者等である。私奴婢は多く後者から發生した。奴隸商人の手を通じ奴隸市場で取引された。其の際質劑とか文券とかいふ市劵の類が必要とされた。部曲の發生的意義は稍異り漢代は隊伍の名稱であり。士卒の義に用ひられ、一轉して私兵の意味に用ひられ再轉して私家の下僕となり、終に唐制では私奴婢と良人との中間に位する賤民階級となつたのである。

●志田不動麿「委面の意義と耶馬臺國在南方論の否定」(史苑四・五、昭和五・八月、頁二八一―三〇四) 西暦第三世紀の中葉の我が日本に關して、支那人の傳へた魏志倭人傳は幾多の疑問を其の中に含んでゐる。本論文に述べられてゐる委面國の問題もこれと關係あるもので、それによると、從來委面土國として諸學者に論議せられ、或はヤマトと訓じ、或は倭のイト國(筑前怡土郡)と訓まうとしたことが、すべて誤りであつて、委面國といふのが最も正しいことになる。著者は次いで、支那人は古來未開の黥面せる民族を名づくるに面字を附することを擧げ、委面國といふのは黥面せる倭人國の意味であつて、特定の一地名に非ざることを主張してゐる。倭人が黥面文身せることは、おのづから倭人傳の記者をして會稽や南越方面の風俗を想起せしめ、そして倭國は福建省福州の東方に在るとか、その風俗習慣は廣東省海南島に同じであるといふ結論を導かせるに至つたのである。卽ちそれは記傳者の誤れる主觀的心理的作用の結果で、正しく現實的客觀性を把握してゐなかつた事に歸因するものである。かようにして構成せられた倭國南方論、又それから出發する邪馬臺國九州論は到底成立の餘地がない、といふのが本論文の主旨である。(池内)



(右) 首相をのせた寢臺車
(左) 東京驛頭に參集せる閣僚自動車

丸ビル内本社編輯部より之を寫す

濱口首相狙撃事件

暗殺の流行と其の防壓方法

長谷川如是閑

日本では最近總理大臣に對する暗殺の企てが恒例のやうになつてしまつた。原敬氏のは既遂で、田中氏と今度の濱口氏のは未遂だつたが、とにかく、累代の首相は次ぎ〳〵に覘らはれてゐる。いかに流行は防がれぬといふ時代でも、かゝる流行は斷然防壓されねばならぬ。累代の首相が暗殺の的になるといふやうな流行については確かに所謂心理的傳染の效果があつたに相違ないことゝ思はれるが、かゝる流行を來す所以は、たゞ事相が傳染的の性質のものだからといふだけの理由ではなく、傳染をうけるだけの素地が一般の間に存在してゐるといふことを想はないわけに行かない。

それは何であるか。或は國民性といふやうなものにそれを求めて、暗殺好きの性向を民族的にもつてゐるからだといふやうなことがたゞ常識的に云はれてゐるが、然しこれは民族性といはれてゐる特殊の性向

を人種的に根柢づけてゐるといふ點で誤謬たることを免れない。民族性など丶いふものは、社會形態によつて出來上つたもので、それの變化に伴つて何うでも變化するものであるといふ科學的見地によれば、特に暗殺好きの國民など丶いふ烙印を打たれねばならぬものなどはない筈である。帝政時代には、ロシヤ人は暗殺好きの國民だといはれたが、今日のソヴエット・ロシヤには一向大官暗殺などは行はれない。其癖共產主義反對のロシヤ人も澤山ゐるといふが、最早今日ではロシヤ人を暗殺好きと呼ぶわけには行かないほど非暗殺國民になつてゐる。イギリス人は暗殺は餘り好きでないやうだが、同じアングロ・サキソンのアメリカ合衆國には往々行はれる。

尤も暗殺は政治的動機によるとはいふが、その實、單純な犯罪性の動機を交へてゐるものも多いのであるから、犯罪傾向の著しい所では、暗殺も多い道理だらうが、然し犯罪傾向といふものが、ロンブロゾー一派の考へるやうな人種的のものだとはいはれないし、やはり社會形態に伴ふ行動なのだから、普通の犯罪の性質をもつた暗殺でも、その人種に固有の傾向などと、斷定することは出來ない。

社會組織といふ點からいふと、近代デモクラシーの社會形態は、政治上の暗殺を防ぐに有效な形のものであると一般に考へられてゐる。それはその筈で、政治上の機會均等主義といふことがデモクラシーの一つのモツトーになつてゐるほど、政治の此形式に於ては、各方面の政治的見地が代表されて、それぞれ權力關係に於ける均衡狀態に參加してゐるといふことになつてゐるからである。

然るに近代デモクラシーの國家に於て事實、暗殺が減退してゐるといはれるか何うか疑はしいので、現に日本でも、明治以來今日に至るまで、維新前後の秩序の變換時代ほどは行はれてはゐないが、然し中々減退しない。警察のそれに對する警戒などは、今日の方が却つて嚴重な位で、そのことが暗殺の減退に影響してゐるであらうとは思はれるが、傾向自體は減退してゐるか何うか問題である。

近代の政治が暗殺を減らす效果があるといふについては近代政治の組織では暗殺そのことの效果が薄くなつてゐるといふこともその一因である。獨裁政治に於ては政治の傾向が個人的の努力に支配されてゐるので、個人を倒すことによつて政治の變化が起り易いが、近代の代表政治では政治は利害集團の傾向によつてゐるので、個人の勢力は決定的ではあり得ない。個人を倒しても即座に、ある利害集團の勢力が倒れるといふ譯には行かない。舊政治の利害集團は、純政治關係の内部に於ける朋黨だから、その頭目でも倒せば、その集團も潰へるが、近代政治に於ける利害集團は經濟關係の利害によるものだから、一定の經濟關係の存する限り、その上に泳いでゐる人間を一人や二人倒しても集團の勢力そのものを倒すことにはならない。

從つて、此の近代的政治の認識が一般に行き亘れば行き亘るほど暗殺の減退することは確かである。然し、近代政治の形式は理論的には近代の勃興期に於ける自由主義、機會均等主義、强力否定主義、非軍國主義等々の商業主義的平和主義の系統をつゞけてゐるが、實際の近代社會は、さういふ資本主義初期の組織から生れた政治理論、社會理論

を踏み倒して進んでゐる。産業組織に於ける自由放任主義が一變して獨占主義となり又舊軍國々家の領土侵略に反對した商業的平和主義の時代は、一變して植民地搾取の目的による帝國主義戰爭の時代となり、干渉排斥、强力否定の近代國家が干渉そのもの、强力そのものとなつてしまつた。かうなると、近代國家は暗殺を減退させる、といふ理論は、その根據を吹き飛ばされてしまつたわけである。

然しデモクラシーの政治は、元來經濟的利害の競爭であるといふ事情に變化はないのだから、とにかく近代社會のこの形式を呑み込めば、暗殺の效果を疑ふに至るといふことだけは確かである。少くとも近代主義者は暗殺を否定するに相違ない。上述の資本主義組織の進化によつて國家は封建化したが、その政治家は經濟關係に於ける役者であるから、いかに反動化しても暗殺の效果についてはさう信用を置いてゐないに相違ない。だから國家の此形式の下に於ては暗殺は、この近代政治の經濟關係を認識し得ない反動家の手に行はれる場合が最も多い。ドイツなどが今日でも盛に暗殺の行はれてゐる國だが、その大部分は極右派の所業で、所謂赤色テロの暗殺などは、數からいふと全體の一割にも足りないといふことである。

むろん極右派といへども、今日では、一定の經濟的利害の根柢に立つてゐるのであるが。然し、極右的見地に立つものは、多くはデモクラシー以前の政治形態にその理想を置いてゐるもので、貴族、軍人、官僚等の階級の獨裁政治をそのユトッピアとしてゐる連中である。資本家社會のある一部の群は、必ずしもこの種の政治形態をユトウピアとしてゐるわけではないが、その種の舊意識の群と連盟して權力關係の上に有利の地位を占めることによつて、その資本家的地位を有力にすることを得るので、それを使役するのである。我國に於ける反動政治家の一部即ち×××などに閉ぢ籠つて、先き頃も超然内閣を夢みて失敗したやうな連中が即ちさういふ一部の資本家群の手先きなのである。

暗殺は、近代國家では主として舊政治形態をユトウピアとする連中が執る手段であることはドイツの例によつて實證されてゐる。(尤も日本などでは、原敬氏の場合のやうに、近代デモクラシーの封建化を代表したやうな政治家を暗殺するものもあるが、然し、この場合でも、暗殺者は決して近代デモクラシーの理解者ではなく舊政治に於ける善政主義者即ち孔孟主義者のそれであつた)。現に今回濱口氏に對する下手人も、こゝに述べた一般理論の公式通りの種類の人間であつた。

それ故に、暗殺の流行を防遏する根本的の方法は、もつと經濟的利害の分野と政黨のそれとを密接せしめて、資本家階級をして暴力團的の超然主義的政治群に依頼せしめないやうにすることである。それには舊國家的機關を××ならしめて政治をもつと近代的組織とし、中間勢力を撲滅する方法を講ぜねばならぬ。

國家教育の如きも現在では舊××の道德を復活せしめることが、封建化した現代に相當した方法であるとでも考へてゐるやうに、舊××道德の保存復興に努めてゐるが、さういふことが認識の錯誤なのであつて、さういふ思想は暗殺實行者の思想と同一範疇の誤謬に陷つてゐるのである。『今日の所謂國家思想の濫發なるものは、少くとも暗殺た

けについていつて見ても、それを撲滅せしめるように實行××するものであることは確かである。

濱口首相の遭難に際して

杉森孝次郎

號外と夕刊を見たばかりで、濱口氏の遭難の事情について私の知識は絶無だ。最近、戰後、當路の政治家にして直接行動の手に殪れたるもの世界を通じては、不幸、一、二にしてやまぬが、一九二二年六月二十四日の朝、自宅から外務省への車中、年わかき同胞ドイツ人のために惜しむべき最後を遂げたるラーテナウの如きは、もとよりその一人だ。佛のポアンカレの强硬的なる手法の前に、ラーテナウの外政ぶりは當時のその國の一部の人々の眼には軟弱、屈從許しがたきものであつた。これがラーテナウの場合、その兇運の社會的一事情であつた。これに加へて、ラーテナウの場合には反猶太族主義がその社會的事情内にはあつた。ラーテナウの場合、無數の脅怖はその兇變前にあつた。首相及び他の友人たちは、かれのために身邊警察を希圖してやまなかつた。ラーテナウ自身は、その外相在任中、いかなる危險に曝されつゝあるかをば知り拔いてゐたけれども、自分の政治的心術の公正に矜持を托して、周圍の心配をつとめて辭拒したものであつた。

濱口氏の場合、いな首相濱口氏の場合、いかなる社會事情の存したるか、それともなんら特殊の社會事情と目すべきもの存せざりしか、目下無知識である。しかし、いかに多くの場合、近代にあつて、ナショナリズムの側面から公人の犧牲者が出たことか。その或場合に於いては、公人の政策に一部同胞の深甚深憾を刺戟、强要するものがあつた。そして、被害者加害者の犧牲がでた。

公人の公動に對して公喜、公悲、公憤することは自然または當然だ。しかし、その公憤が或種の直接行動に出づる可能にもまして、全社會人の考慮と研究と對策を必要とするものはない。ラーテナウの場合、英と佛の代表者は、ロシヤを相手として、ドイツをばのけものにして祕密協商をやつたものであつた。ラーテナウは、この祕密協商がドイツを犧牲として事實化する虞れを懼き、一九二二年四月十六日に、ラパロに於いて、ロシヤから提供されたる「平和及び友情の條約」を受諾したのであつた。

ラーテナウの場合は一例のみ。列國の政治史が、多少ともそれに聯想を持たせる難局と異見と激情とを、甚だ悲しむべき形に於いてあまりにもしばしば、いまなほ示すことは、これこそ深憂を刺戟する獨立の一事だ。

もしそれ公人遭難の事情として、公的ならざるものがある場合の如きは、最も悲憤すべきことではあるが、この種の可能に對しては、社會的制御作用がおのづから存するものであつて、それがとめどもなく發生するが如きことはないのである。

政治的訓練教化を發達させることによつて、政治上の異見が直ちに激情化し、直接行動化する必要なき狀態を一刻も早く發達させる必要がある。正しき意味に於いてのデモクラシの發達が根本的對策だ。

テロ式なる直接行動は、それの對象が實は一個人、あるひはいかなる少數の個々人にも存せず、むしろ主としてその社會の實力、事情、また制度等に存する時には、その目的とする效果を生じない。實體が社會にあり、シムボルだけが個人、個々人に存する場合、それは當然のことである。また、直接行動を採らずに、しかもその目的をば必ず達成せんと決意する時、そこには無限的なる貴き收穫が生ずることは無例外的絕對則ではないが通則、隨つて原則價、主義價あるものだ。デモクラシの方法はいたづらに騷々しく、やかましく、手數多く、まだるつこく、ばか〳〵しく、無目的のやうにしば〳〵見える。しかし、理想と目的が明確に立つて居り、而決意が純眞にして絕對强であるならば、それ決して精力の浪費でも、時間の濫費でもないのだ。人間的なる、文化的なる各種の創造がその過程に於いてなされるのだ。

しからば、ロシヤやイタリーの歷史をどう見るかといふ質問が起こるかも知れない。あれは、やはり、デモクラシの未發達を原因とするものであり、それの發達への犧牲多き一必然であつたのだ。けれども、現代の意義ある、成功するものは、直接行動でさへ、例外的、漸減的、急滅的場合を除けば、集團的、組織的、社會的、大綜合的であつて、テロ式ではない。

濱口氏の遭難は、その性格、素行等からして、靑天霹靂の感をすべての社會人に與へる。ラーテナウのついでに想起さるるエルツベルゲルは、その前年(一九二一の夏)兇手にかかつた政治家であつたが、かれの如きは、その性格に激越、奇矯なる側面もあつた。多くの場合、これに類するものがある。公人濱口氏の場合、その遭難は、性格以外の問題を最も當面せしめる。そして、その問題の最も主なるものは上記の內に不完全ながら示意されたであらう。

偉大なる政治家リンカンは、わが明治三年、四月の十四日に、晚、劇場に於いて狙擊されたことは周知の通りである。かれはその翌日の午後七時に長逝したのであつた。わが濱口氏の場合、何人もその致命傷ならざること、快癒をねがはざる者はない。(十四日)

政變斷じて起らず

馬場恒吾

東京驛に於て濱口首相を狙擊した者が、若し首相を暗殺する事に依つて、民政黨內閣を潰し得るものと考へたとしたならば、それは確かに政界の事情を知らないものであつた。今より九年前政友會內閣の首相原敬が東京驛に於て暗殺されたとき、それ迄は政友會內閣を猛烈に攻擊したゐた反對黨の憲政會も、又一般の新聞も、暫くは鳴を靜めて只首相が更つたのみで、政友會內閣が其儘に存續することを當然の事とした。蓋し今日反對黨である所の政友會も、それと同じ態度を採べ

あらう。それ故に假令濱口首相の負傷が癒ゆることが遅くして、首相として政務を見ることが出來ないやうになつても、民政黨内閣が更つて政友會内閣になる事は、斷じてあり得ないと斷言出來る。

殊に十四日の兇變に際して、東京市中に現はれた現象は却つて民政黨内閣の壽命を延ばすであらうとの印象を起さしめた。濱口首相が正直な善人であると云ふ事が一般の常識になつてゐたと見へて、彼れが狙撃され重傷を負つたと云ふ事が判ると、東京の市民は期せずして、同情の聲を擧げた。彼等が如何に首相の容態を心配してゐるかは、ラジオ屋の前に集る群集、新聞社の電光ニユースを貪る如く見つめたる人人の顔色にも讀まれた。今迄は不景氣は此内閣の罪だと考へてゐた人も、内閣が變つたら果して景氣は治るかと考へざるを得なくなつた。濱口首相は撃たれた後、『男子の本懐だ』と云つた。命を捨てる覺悟で彼れが政治を行つてゐるとすれば、彼の政策は少くとも吾々の再檢討を要求すると思はれる。

それ故に、幸に彼れの快復が早くして、再び政局に立つ事が出來れば、濱口内閣は他の事情が同じくば、前よりは一層鞏固な地盤の上に立つであらう。若し亦不幸にして彼れが首相の地位を捨てなければならなくなつた場合にも、民政黨内閣としては今回の事件に依つて其壽命を延ばすことになる。

だが、後者の場合、濱口に代つて誰れが首相となるか。固より之れは今は誰れも考へてゐない。だけれども、首相の恢復が永引く場合には當然行はるべき問題である。そしてそれを決定するのは日本の政界の客觀的狀勢である。

此所に日本の總理大臣を推薦する上に於ての、既に確定してゐる原則の一つは、それが政黨々首でなければならぬ事と云ふ事である。過去六七年以來は總理大臣には何時も政黨總裁が推薦された。今日の場合で云へば、濱口首相の次ぎに民政黨總裁になるものが首相になると云ふ事になる。

然らば黨總裁は誰れが決定するか。政黨本來の性質から云へば黨員の選擧に依つてそれが決定すべき筈である。然るに日本の既成政黨の黨員大衆は總選擧の時に代議士に投票する以外にたいして發言權を有たない。そして其代議士の多くは政黨領袖の庇護に依つて漸く代議士たることを得た人々である。だから黨の總裁の選定は黨の只最高幹部の相談に依つて決せられる。而して黨の最高幹部の意志は首相を推薦する地位にある元老の意志を反映する。

濱口首相が辭職する場合に、後任首相を現在の閣僚の間から求めるとすると、此所に總理大臣候補者として見らるゝ者が三人ある。宇垣陸相、安達内相、江木鐵相がそれである。所で、宇垣陸相は彼れが軍人であるを止めぬ限りは政黨總裁にはなり得ない。安達、江木兩人の内の何れを選ぶにしても、黨内の議を纒めるに相當の困難が伴ふ。安達は選擧の神樣として黨内に多くの子分を有つてゐる。若し代議士の投票に依つて總裁を決定するとせば安達が當選する可能性が多い。だが總裁は投票に依つて選ばれない。黨の最高幹部の協議に依つて決せられる。それがすら〳〵と安達に決定すると云ふ豫想は下されない。

江木は政治的には濱口首相と同心一體と云ふべき程の立場に立つてゐた。其手腕と鬪爭力のある點に於ては首相として相當に有望である。併し現代の政治家の年輩から云へば彼れはまだ若いと見られてゐる。彼れが首相になる事に付いては、彼れ自身が眞先きに、そして彼れの同輩も同時に尙幾分か躊躇する所があるであらう。從つて現在の關係から後任首相を定めんとするときは、其間に幾許かの紛爭を惹起する不安が存在する。

殊に此時局に關して重大なる關係のあるのは元老の意志である。西園寺公が日本の政局に關して決定的な勢力のあることは、海軍條約に關聯する問題が起つて以來、何人も見逃す事の出來ない重要性を帶びて來た。彼れが倫敦條約の成立に贊成すと云ふ所の、斷然たる意向を示した事は、其方向に國家の方針を導いた。知る人ぞ知る。倫敦條約に贊成する人々は彼れに感謝すべき多くの理由を有つてゐる。

西園寺公は目下の經濟方面の時局を甚だ重大なものと見てゐる。彼れは、多難な時局を突破する爲めには、男自から政局に立つた程の決心で、日本の政治を指導せんとする。從つて、彼をして自由に後任首相を推薦せしめるならば、彼れの意中は、財界の信頼を負ふ所の山本達雄男、若槻禮次郎兩氏の間に存するものと察せられる。問題は民政黨が其孰れを選ぶかにある。そして民政黨内部には倫敦會議以來、若槻ファンの再生産を見た。其所に若槻首相說が實現の可能性を帶びて來る。

暴力は終に徒勞に屬する事が、十四日の事變に依つて再び證明された。**我國民を幸福にすることそれ自身は凡べての人が望む所である。**併し國民の幸福は國民自身が全體的に幸福を獲得する努力をすることに依つて、從つて國民全體の水準が高まる事に依つて得られる外に、如何なる拔け道も近道もない。强制的に早く國民を生長せしめんと欲して、稻の穗を引張るやうにすることは、支那の賢人が云つた如く、只稻を引きちぎる結果をしか生まない。我々には國民の自然生長を氣永がに待つより外はない。それが國民の幸福を增す唯一の方法である。一人の政治家の力に依つて國民が幸福になるとか、或は一人の政治家を無くする事に依つて國民が幸福になるとか思ふのは、英雄主義の迷信に過ぎない。濱口遭難は吾々をして此平凡なる眞理を新たに痛感せしめる。

内閣打倒劇の脚本作者!!

(濱口首相の狙撃された當日)

堺　利　彦

内閣打倒劇! いつでもこれが社會當面の實劇として、大人氣の喚呼者であり、吸收者である。

忠臣藏は如何なる場合にも當り狂言たるを失はない。判官切腹と、城明渡しと、大石内藏介とは、如何にそれが繰返しであり、お極りであり、型どほりであらうとも、見物は『又か』と云つてそれを排斥するよりは、むしろ『又だ』と云つてそれに感興を持つのである。興行界、

稍久しくダレた時、幾度でも忠臣藏が持出されるのは、一つには、習慣、惰力、先例の利用である。脚本作者はだからいつでも、當り狂言を少しばかり書直して、又一當て當てようとする。

政治家は皆な脚本家であり、俳優である。自黨内閣の場合には俳優の性質を持つ者が多く、他黨内閣の場合には作者の性質を帶びる者が多い。もちろん、人柄として、より多く俳優に適するのもあり、より多く作者に適するのもある。現内閣の中にも、本職脚本家、兼職俳優と目すべき者もあるが、前内閣側の中に、自然、專門的脚本家が多いだらう。

然し專門的脚本家の外、補助的、附屬的、部分的の、大小種々の作者仲間もあるだらう。そして場合に依り、部分作者の方がヨリ大なる意義を持つ事もあり得るだらう。然しそんな事は今、問題外の『不自由事』としておく。

我々無産階級の立場としては、『現内閣の打倒』がいつも不斷のモットーである。田中内閣の下では、『田中内閣打倒』が最も急速の必要であつた。濱口内閣の下では、『濱口内閣打倒』が最も切迫した要求である。だから、二大ブルジョア黨が味噌のツケあひをやり、泥のカケあひをやり、恥のサラシあひをやるのを見て、至極結構とも思ひ、痛快とも感じて居ること勿論である。よしんば、それが更に一歩を進めて、××××あひとなり、××××あひとなり、××あひとなつたとしても、我々は別だん驚きもしないし、哭れもしない。彼等としては、やりさうな事だからである。

若し歴代首相の××が、大抵みな、『過勞』か、『××』かに依つて斃れるに任ふとしても、それは致方ないかも知れない。濱口君が『男子の本懐』を口にしながら、遂にその目を閉ぢるとしても、それはむしろ彼の爲に、生涯の最後を飾り得たものとして、祝福してよいかも知れない。世には、モット深く惜まれながら、又充分それに値したと認められながら、遂に『過勞』以外の死に遭遇しなかつた人もある。我々は濱口君に對し、他の總てのブルジョア政治家に對すると同じく、階級的嫌惡を感じ、階級的憎惡を感ずるは勿論であるが、別だん大した個人的反感を持つて居ない。殊に現在の遭難の場合、さうである。それが濱口君の平生に於ける謂ゆる『謹嚴の德』から生じた『得』である。

政友會總裁犬養君は、この事件について、新聞記者に語つて曰つた。『それは事實とすればお氣の毒だ。』『原因は矢張り不景氣だらうな。犯人も失業者か何かであらう。』『いづれにしてもお氣の毒だ。何といふ困つた無茶な事をしたものだ。』我々は平生、犬養君の『シンラツ』と皮肉が老いても一向に衰へないのを見て、頗るそれを多とし、快として居るものであるが、この急變の場合とは云へ、右の感想には、如何にもソラトボケた樣な、自然を裝ふ態度が現はれて居るではないか。

兎にかく我々は、これで濱口君を死なせたくない。富士子孃が『お父さん、しつかり』と呼び、夏子夫人が『しつかりして下さいー』と呼んだ事を新聞で見た時、又次男巖根君と中嶋秘書君との輸血の行はれた事を知つた時など、我々はさすがに少なからぬ愉快を感じた。

我々はこんな事で濱口君を死なせたくないのみならず、こんな事で

濱口內閣を倒したくない。我々は我々の實力で『濱口內閣打倒』に成功したい。我々は濱口內閣の、民政黨の、ブルジョア階級の階級的罪惡に對し、**我が無產階級の階級的處罰として、濱口內閣を叩きつぶしたいのである。**

我々は斯樣な事變の場合、その直接の加害者が、多くは×××な人物であり、その原因が大抵、偏信もしくは誤解に在ることを信ずる者である。そしてそうした人物を、遂にこゝに至らしめた、その誤り事を憎む者である。

『東京朝日』は曰く、『今度の場合』『直接行動の流行』が『暴力行爲の常習者によつて企てられた。』『反動的暴力行爲の害毒は、左傾運動を刺激して、**それを一層悪化せしむる。**』『最近の勞働爭議中、それに右傾團體の手の加はつた時、問題の解決を一層困難ならしめた。』『常習的暴力行爲の取締りを嚴に』せよと。

『策士』は何處に行つた。『親分』はどうした。『國士』と『愛國者』は何處にどうして居るか。

*　*　*　*　*　*

濱口首相の遭難に就いて

吉野作造

濱口首相は十一月十四日東京驛に於て暴漢の襲擊に遇ひ腹部に重傷を負うて萬一を圖られぬと云ふ。彼れを我國今日の最大の政治家と謂うには世上多少の異議あらんも彼れを誠實敦厚の國士とするは多くの人の一致する所である。今その不幸なる兇變を耳にしては國民中之を悲しみ且つ一日も其の全癒の早からんことを祈らざるものは一人もあるまいと思ふ。

私人として濱口雄幸氏は恐らく一人の敵も有たなかつたらう。公人として總理濱口の所謂政敵を有するは云ふまでもない。其外彼れの政策を不都合とし或は之を憎み又は憤るものも各方面に亙つて澤山あつたに相違ない。之は濱口首相に限らず斯う云ふ地位に在る人には凡そ免れぬ運命だからである。併し斯う云ふ地位に在る人の公人としての行動を責むるの方法は自ら他に備はつて居る（不十分ながら）。彼れに一日も國政を託すべからずとせば、其の道に由て、彼れの率ゐる內閣を倒せばいゝ。而して彼れを殺すことは必ずしも彼れの率ゐる內閣が倒すことにはならない、否却てその目的に裏切るものである。然るにも

拘らず、今日なほ濱口の政策を阻まんとして此目的を遂するに最も不適當なる暗殺と云ふ古風な行動を執るものあるは如何いふわけか。

× × × ×

細かく考へれば幾多の原因を算へることが出來よう。私は特に茲に最も根本的な二つの原因を擧げて自ら反省の資に供したいと思ふ。

第一は近年暴力團の横行に對する社會的糺彈の弛頽せることである。直接行動は所謂左右兩翼より襲ひ來るの怖れあるも、就中右傾派を標榜する暴力團の跋扈は一時頗る烈しく、其後官憲の取締に依て一面著しく其鋒鋩を斂めた樣ではあるが、他面また有力なる筋と何等かの連絡を繋いで今猶ほ一層鞏固なる組織の上に横行を逞うして居るものもあると聞く。而して斯の如き者の樣も現代に存在し得る所以のものは、少くとも之を援助する者があるからではないか。中には或る目的の爲に之を利用するものもあるとやら。利用の一面は奬勵である、最少限度に於て默過である。曾て震災の時大杉を殺した甘粕大尉を公然賞恤した××者があつた。之と同じ樣な思想は今日にも流れて居ぬだらうか。固より私は大杉と首相濱口とを對照するのではない。口實を愛國の精神に藉りさへすれば如何な暴行も大目に見られるとなつては、輕躁の徒は何を仕出來すか分らないと思ふのである。私は原敬の暗殺のときにも此感を抱いた、故田中義一の狙撃の場合にも同樣の感を催した。が、原にも田中にも實は個人的に人の憎惡を買ふ樣な素因は全くなしと云へなかつた。ひとり濱口首相に至ては全く此事なきに近く、而も暴漢は國家の爲めにこの罪魁を除いたと豪語して居ると云ふ。之れだけで觀ても、彼れが全然時弊に誤られた狂噪の一青年であることが分るではないか。私は彼れが如何なる暴力團體と關係あるかを知らない(又何等の團體と何等の關係がないのかも分らない)、その關係の有無はどうでもいゝとして、兎に角斯うした不心得者を醸出せしめたに就ては、平素暴力團の横行に對して餘りに寛大であつた社會的制裁の弛頽が、第一に責任を負ふべきものではあるまいかと考へる。

× × × ×

もう一つの根本的原因として私は、「實際政治家の道義的責任の限界」に關する世論の曖昧といふことを擧げたい。如何に大臣が惡政をやつたからとて、之を殺すべからざること又之を殺したとて由て以て直に其惡政を改めしめ得ざることは論ずるまでもない。論戰の舞臺に於て辯難攻撃するのは幾ら烈しくともいゝが、たゞ何處までが當該大臣の徳義上の問題として責むべきかを明識せずしては、徒らに論爭を尖鋭化し無智の人を誤りて不當の手段に出でしむることがないとせぬ。この邊のけじめが昨今の政論界に於て頗る曖昧になつて居るは頗る遺憾なことである。

政策の當否を爭ふは要するに政論の範圍内の事である。政論圏内の爭はどんなに烈しくとも容易に人をして憤怒の念を起さしむるもので

はない。政論の範圍を超え、彼れは德義上斯く／＼の不正ありなどと詰らるるに及んで、爭は甚だ面倒になる。列へば宰相何某は其地位を利用して云々の不義を行つたとか又はひそかに政商の請を容れて職務上當然爲すべきを爲さなかつたとか云ふが如き是れである。地位を利用して不義を行ひ請托に由て本然の職務を怠るは、德義上の題問たること固より一點の疑もないが、玆に一つ德義上の問題か政治上問題か曖昧に附せられ、而も一面から德義問題として猛烈に論詰せられて居るものがある。之がまた青年狂暴の徒をして昂奮の極首相暗殺などいふ暴擧を敢てせしむる原因にならぬかを、私は疑ふのである。

或る新聞は報じて曰ふ、濱口首相兇變の報に接して無産黨に屬する某氏は之を首相の自ら招げる禍だと云つたと。謂ふ心は、彼れは畢竟金融資本の傀儡に過ぎず、全民衆の要望に裏切り其の利福を蹂躙して恬として顧みざる不德漢である、一日もあの地位に在らしむべきでないと云ふに在るのだらう。既成政黨と無産黨との立場を對比せるものとしては誠に當然の說明だと私も同感である。併し乍ら日本當今の實際政治を如實に觀察する場合に在つては、既成政黨といはず無産黨といはず、苟くも廟堂に立つて大政施行の衝に任ずるに當ては、種々の不當なる制限拘束を甘受するの餘儀なき事情に在ることを識らなくてはならぬ。制限拘束の發源地の最も大なるもの、近來の歷史に於て、第一に樞密院であり第二に陸海軍閥である。軍縮條約の爭に於て濱口內閣はいさゝか樞密院の鼻柱を挫いたるが如きも、明哲保身の術に巧みな人達の巢窟とてさう易々と其の地歩を讓り切るものではあるまい。陸海軍閥に對しても最近政府は大にその勢力の根抵を脅かすの方策を有するが如きも、結束してストライキをされれば遂に內閣の崩壞を免れぬ。故に今日の政黨は、苟くも廟堂に立つの素志をすてぬ以上、先づ以て其意に反し或る點までは樞府に屈し軍閥に屈するの雅量を有せなければならぬ。玆には詳しく述べぬが、之から派生して又種々の變態情實が現れて來ることも注意するの必要がある。尤も玆處まで來ると、之も餘儀なきものとして大目に見ねばならぬか否か怪しくなる、强い內閣は押し切つても行くだらう、弱い內閣は遂に節を屈するの譏りを免れない。何處までを已むを得ざる讓步とし又何處までを讓らずとも可いものを讓つたと觀るべきかは、それ／＼の場合に依て一樣ならざるべきも、何れの內閣に在ても、一定の變態的讓步を餘儀なくさるるものあることは疑ない。純粹なる政治理論から云へば之は不當の讓步である。この不當の讓步を敢てして平然たるは許すべからざる不德である。この點に於て無産黨の論難は正しい。併し日本の實際政治の組立てから云へば、それは何人が天下を取ても免れ得ぬ讓步である。尤も這の讓步の範圍は時代に依て段々狹められつゝあるのは事實だ。十年前と今日とでは莫大の相違があるから無産黨が天下を取る頃はそれを認める必要がなくなるかも知れない。私は勿論一日も早く斯かる日の



來らんことを希望するものであるが、今の所では、さうも往かず、飽くまで純理に拘泥する以上、無產黨は到底天下を取れぬ運命にある。故に天下を取らんと期する以上、どの政黨も上述の制限拘束は甘受せねばならぬ、即ち之は斯くして各黨共通の制限拘束なのである。正道でないが已むを得ないとすれば、之に服する所以を以て一が他を德義呼ばはりするのは穩當であるまい。

以上は一例に過ぎぬが、餘儀なき制限拘束の原因はまだ外にもある。而して制限拘束の實際的侵入をどの點で喰ひとめるかの掛引の巧拙はあらうが、この餘儀なき制限拘束を甘受せるの點を取て直に之を德義問題とするは、實際政治上の論としては聊か輕佻の譏りを免れないと思ふ。之を責め得るは自覺のみの點を誇るはいゝ、之を嚴しく責めることに依て民間政治的見識の開拓に努むるは尤もいゝ。たゞ此事を取り上げて、時の政府が始めより不正不義の動機に基き、節を官僚軍閥乃至財閥に賣りその當然爲し得る事を怠りて意識的に民衆の利福を蹂躪したなどと說くのは、言は痛快を極むれど輕佻の靑年をして不當の昂奮に惑はしむるの恐なきか。斯うした問題はもッと冷靜に取扱つて行きたい。今度の事件には斯んな關係も多少は手傳つてゐないかと思ふ。

このテロリズムの本質

猪俣津南雄

一

暗殺といふと思ひ出すのは次のことである――

ロシアのアレキサンドル二世皇帝は、「人民の意思」黨の黨員グリネヴイツキーの投じた爆彈によつて街上に××された。「人民の意思」黨は、初めは合法手段で農民を覺醒させることを目的とした團體であつたが、政府は、たゞビラを撒いたといふだけで黨員を投獄し、流刑するといふ風に、猛烈な彈壓を加へた。そこで、「人民の意思」黨は飛躍してテロリズムの黨と化した。政府は、彼等のテロルに答へるに、「政府のテロル」――黨員を死刑に處す――をもつてした。例へば、ポスターをはつた十五歳の少年までが死刑にされた。そこで「人民の意思」黨の人々は、最も苛酷な××××××し、「それでも效果がなければ、××××にまで及ぼさねばならぬと考へた。かくて、遂に一八八七年三月一日、アレキサンドル二世皇帝の××が來たのであつた。

當時のロシアには、まだ、多數の勞働者と農民とを抱擁する×××的政黨がなかつた。「人民の意思」黨の黨員達は、戰慄すべき孤立的な鬪爭のうちに、專制政府との「段違ひの鬪ひ」に突進したところの、最も勇敢な個人達であつた。

この「段違ひの鬪爭」を續けることを決意した人々の中には、レーニンの實兄アレキサンドル・ウリヤノフがゐた。皇帝××事件があつて間もなく、「人民の意思」黨の執行委員は、殆ど全部一擧に檢擧され、死刑に處せられた。だが、むろん、一××の暗殺によつて、制度はちつとも變りはしなかつた。反對に、人民は更に慘酷に壓迫された。

レーニンは、その頃、中學を卒業したばかりの十七歳の少年であつた。彼は、兄の死刑の知らせを受けたその瞬間に、「いや、僕等はあんな方法を取るまい。僕等は別な手段で行かなきやならない」といつた。その時の彼の表情は、深い印象を殘すものだつた――と彼れの實妹マリヤ・ウリヤノフ女史が語つてゐる。レーニンは、その時から、××と資本の束縛からの解放のために、自分が唯一の正しい途だと考へた道に向つて、專心勉強をはじめたのであつた。

しかし、レーニンは、ロシアにおける××運動の眞の先驅者であつた「人民の意思」黨の人々を輕蔑したどころではなかつた。反對に、彼等の任務がいかに××であつたかを十分に知つてゐた。そしてレーニンは、此の人々の遺業を承繼ぐことを拒まなかつた。しかし彼はたゞかう信じてゐた――「吾々の心臟は、現代の唯一の××階級たる勞働者階級の心臟と共に××りせねばならぬ。吾々の心臟は、全世界を解放

することなしには自身のための自由を獲得し得ないところのプロレタリアートの心臓と、一つの心臓のやうに××りせねばならぬ』。

初期の運動段階にあつては、勞働者の中にも、個人的テロリズムに走る傾向があつた。レーニンは、彼が最も尊敬した、それらの人々に就いて言つてゐた——、ヘルツーリンのやうなプロレタリアが數百人あつて、彼等がもはや、これやそれやの個々のけだものに對して××や××××を手にして飛びかゝつてゆくやうな孤立した人物ではなくなつて、群がる多數勞働者の××に彼等が立つ時に、その時にこそ、吾々は必ず勝つだらう。その時にこそ、×××の××は滅び、同時にまた、×××××の××は滅びるだらう、と。

二

その後かれこれ五十年たつてゐる——。

今日の午前九時に濱口總理大臣は、東京驛で「壯漢」に射撃された」と號外新聞は書いてゐる。しかし「壯漢」はいかなる人物であるか、まだ皆目わからない。それを知る自由は吾々に與へられてゐない。しかし吾々は、有り得る場合のいくつかを××するの自由を持つ。

政府がその眞相の發表を拒んでゐる期間において、テロリストは×××員だといふやうな印象がふり撒かれるかも知れぬ。しかし、××主義、マルクス—レーニン主義のＡＢＣでも知つてゐる者は、今日の×××員は、輝ける先覺レーニン達の經驗と理論とを十分に汲み取て、個人的テロリズムへの誘惑などは斷乎として斥けてゐることを知つてゐる。

或は、テロリストは無政府主義者だといふ噂が立つかも知れぬ。しかし、吾々は、それも嘘だと信じて差支ない。

「壯漢」は、日本人らしい。從つて今度は、「不逞鮮人」といふ不逞な言葉が此の事件と結びつけられることはありさうもない。

「壯漢」の××にブルヂョア××がある可能性、——これは一つの可能性たり得る。没落を孕める現代資本主義の番卒として、腐敗しきつたブルヂョア××は、眼先きの××を取るためにはどんなことでもやり兼ねぬ。ブルヂョア政黨の首領達は、たゞ政權と利權にありつくために、そのための資金を調達するために、最も破廉恥な收賄のかずかずをやつてゐる。政權を取るための必要ならば、彼はその仲間を牢獄にぶち込むことをさへ厭はない。彼等は、曾つて彼等が有した進歩的役割のすべてを失ひ切つてゐる。抑壓された大衆の××といふ、此の上もなく崇高な政治的××は、今や完全に、プロレタリアートとその唯一の×に歸してゐる。だからブルヂョア政治家は、大衆の眼をゴマ化せるなら、どんな××でもとり兼ねぬ。全く反動化してゐるブルヂョア××は、種々なる××のために××し得る多數のごろつきを飼つてゐる、この×はれたる者は、原則として、一種の「治外法權」をを有し

これが更にナイーヴな「愛國者」や「憂國者」を××する。そして大衆を××し、支配するために彼等の案出した合言葉、「愛國」「憂國」「至誠」などが、皮肉にもしばしば、彼等の醜陋な内部闘爭のテロリズムの合言葉に使はれる！

今日の事件を書いた新聞の中には、今度濱口總理大臣のやられたのと、先年原總理大臣のやられたのと、場所も月も同じだといふことを感慨深かさうに書いたものがある。しかし、暗殺の企てられた月と場所は同じでも、その社會的意義は全く違つたものであり得る。恐らくは違つてゐるだらう。

日本資本主義は、今や沒落への轉向期に立つてゐる、この時期における當面の政治過程は錯綜してゐるが、しかし一つの基線に沿ふて動いてゐる。沒落期におけるブルヂョア支配は、一見正反對の、二つの形態――即ち議會主義とファシズムと――を持ちつゝも、前者はますます後者に取つて代られてゐる。が、言ふ迄もなく、議會主義からファシズムへの轉化は、たゞ、對立・闘爭の發展によつてのみ可能なのだ。一方では最も基本的な、ブルヂョア陣營とプロレタリア陣營との間の諸對立・諸闘爭、他方では派生的な、ブルヂョア陣營内部の諸對立・諸闘爭。

現下の日本にあつては、一見、議會主義擴大への傾向と、ファシズムへの諸動向とが、同時的に存在する。しかしこれは、支配階級の側における同一の必要及び促迫の、二つの矛盾した現はれに過ぎない。

この事態の詳しい分析をこゝでやつてはゐられぬが、濱口内閣は一見議會主義擴大の方向を歩むかにも見えるのも、沒落への轉向期に入込んだ日本資本主義が古き方法による支配を急速に×××ならしめてゐるからなのだ。かうした物的過程の進行は、極く最近にも、軍縮問題を××として、尖鋭な對立闘爭を、ブルヂョア陣營内に惹起した。この闘爭の一方の立役者となつた濱口内閣は、金融資本の一時的××の下に、樞府と軍部を抑へることに成功し、外觀だけは一應議會主義な進出せしめはしたが、しかし、一方のかうした進出こそが、また、その對立物ファシズムのために地盤をつくるのだ。何故といつて、日本の議會主義は、尚ほ未成熟にして早くも頽廢しつゝあるではないか。そして此の沒落への轉向期に立つ日本資本主義の物的過程の基礎の上に、昔華やかなりし頃のブルヂョアの××形態の議會主義を押擴げようとすればするほど、その議會主義はみじめな馬脚を露はしてくる。

いまセンセーションをよび起しつゝある一テロリストの行動が、ファシズムへの諸動向と何等かの××××を持つかどうか――それを決定的に論斷し得るだけの材料は吾々はまだ持ち合せない。だが、果して何等の×ゝ××もないだらうか?!

日本資本主義は、此の第三期世界恐慌＝解禁恐慌を××として、沒落への轉向期に入り込んでゐる。資本主義××の激浪は、幾千萬の勞働者・農民を飢餓の渚に打ち上げた。濱口政府は、此の殘忍な資本主義

制度を××するために鬪つてきた。彼等を先頭に押し立てた支配者階級は、解放に向つて大衆を××し××せんとする眞の勢力の存在を極度まで恐怖し、××をもつてその××を脅かしてゐる。前衛分子の大衆的投獄は××された。かうした事態の下に、餓死の脅威を突き附けられてゐる人間××は、決して××ではあり得ない。そして、彼等のうちの素朴で純眞で英雄主義的な何人かが、個人的テロリズムへの××に驅られないといふ××などが一つだつてあるだらうか?!　最も反動的なフアシズムでさへも、かうした狀勢を××としてのみ登場する。

マルクス＝レーニン主義者は、解放鬪爭の目標を制度におき、鬪爭の推進力を階級に見出してゐる。しかるに、ブルヂヨア支配者とその手先共は、進步・發展の問題においてつねに制度・階級を否定して個人を昂揚する。制度が惡いのではない、個人が惡いのだ、何某大臣のやり方が惡いのだ、何某内閣の政策が惡いのだ、――彼等は口辯のやうにかう說いてゐる。ナイーヴな、個々の被支配者達は、うか／＼と此のブルヂヨア・イデオロギーを信じ込む。そして、此のイデオロギーこそは、一定時には「義憤」として、「膺懲」として、「復讐」として、個人的テロリズムに形をかへるのだ。かくして、ブルジヨア××は、自分の蒔いた種を自分で刈る！

突發した此のテロリズムの本質は、今のところまだ精確には分らない。しかし、おほよその見當はつく……

（談話筆記　文責在他者）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

附録

最新社會科學の頁

編輯責任者

池內宏
蠟山政道
新渡戸稲造
穂積重遠
戸田貞三
河合榮治郎
高柳賢三
高木八尺
那須皓
村川堅固
上田貞次郎
黒板勝美
矢內原忠雄
松村瞭
小泉信三
阿部賢一
美濃部達吉

（イロハ順）

目次（昭和五年十二月）

經濟學

◆理論經濟學、學說史及學說批判

●**櫛田民藏「マルクス勞働價値說の擁護」**(中央公論、四五・一〇・昭和五・十月・頁二一―四一)曩に本誌(四五・九)に紹介せる高田博士の論文に對する反批判である。高田氏は商品の價値を交換から從て消費から說明しようとするに對し、マルクスの勞働價値說は歷史的に特殊な形態をとれる物質的生產を基礎として理解さるべきであると謂ふのが此反批判の中心點である。個々の論點を逐次に擧ぐれば(一)資本家的再生產は不可能であるとの批判は、單に社會總資本の問題たるものを個人資本のそれにすり換えることに依て成立つ。(二)マルクスに於ける價値と生產價格の問題は斯う解さるべきである――價値と價格との差異は現在の事實であるが、社會資本を問題とする限り、價値の總計は生產價格の總計に等しく、これによつて利潤の出所が明白にせられる。平均利潤は社會の剩餘價値が各種生產部門の競爭を通じ資本に比例して分配せられたものにすぎぬ。(三)價値法則と差額地代に關する批判は資本論の誤讀に基く。即ち博士が言及した所謂『虛僞の社會的價値』は『剩餘價値に非る價値』なる意味に非ず、却つて剩餘價値の一部でありながら、それでないやうな外觀をもつところの社會的價値の意味である。(以上所謂內在的批判に對する反批判)(四)分業と私生產とを前提とする交換は、共通物(價値の尺度單位)を必然としその共通物は必然に生產に支出せる人間勞働でなければならぬといふのがマルクスの主張である。(五)『使用價値』の捨象といふ事に就いては、これは商品所有者が交換過程に入るに先だつて採るべき理論的準備と解すべきものである。(といふ事は商品所有者に取つては其使用價値は問題とならず、たゞそれが幾らに賣れる、若しくは幾らに賣りたいといふ表象又は意思表示のみがあるといふ意味らしい。)マルクス批評者はこれを理解して居らぬ。(六)複雜勞働は單純勞働へ還元し得ぬとの批判に就ては資本論第一卷からの一節を引用し、(A)價値とは人間勞働一般の支出である。(B)單純なる平均勞働は時代により異るが一定の時代に於ては一定である。(C)複雜勞働は社會的に單純勞働の倍加と看做される、(D)複雜勞働の單純勞働への換算の比率は競爭によつて定められる、と謂ふマルクスの論證をあげ、此還元の可能性を說くことは批判者のいふが如き獨斷では決してなく、たゞ競爭による比率換算の問題を省略したにすぎぬ。(七)商品は勞働の生產物に限られず、現に勞働生產物に非る幾多の事物が商品として賣買せられて居るのに、マルクスは何故に商品を勞働生產物に限るかまた非勞働生產物が價格をもつ所以は、果して勞働價値說によつて說明し得られるかの批判に對しては何故にマルクスが其の經濟論を勞働生產物たる商品をもつて始めたかの理由を理解すべしと逆襲し、資本家社會では、物財としての諸商品中基礎的であり支配的なものは勞働生產物としての商品であると述べて居る。(以上內在的批判に對する反批判)筆者は資本家の手中に歸する利潤は餘剩勞働から生れることを說明するのがマルクス價値論であるといふ點を力說する。筆者によれば、價

値とは「物に對象化された人間勞働」で超感覺的なものであるといふ。さうすると現象形態たる利潤を合計して之を超感覺的なる剩餘價値の總額なりとし、さて利潤總額は剩餘價値總額に等しいといふのはタウトロギイに陷りはせぬか。（小泉）

●丸谷喜市「流通生活に於ける經濟的計慮」（國民經濟雜誌、四九・三、四、昭和五・九、十月、頁一――三〇、二九――六〇）經濟生活は其の發展過程の推移と共に幾多の變遷を重ねる。併し乍ら、變化するものは畢竟するに唯だ其の現象形態のみ。經濟生活の本質に至つては斯くの如き變化を越えて不變である。本論文は斯る結論を經濟的計慮の問題を通じて證明して居る。經濟生活の本質的モメントは(イ)物質的手段(ロ)價値生活であるが財の獲得及び準備に就て行はれる犧牲と其の目的物とに就ての比較商量によつて、この場合の經濟的計慮が行はれる。次に經濟生活の現象形態に就て經濟的計慮を見んに、(一)自給生活に於ては經濟生活の本質に照應する經濟的計慮が其のまゝ妥當するが、(二)流通生活に於ては、この計慮は稼得と消費とに二分せられ、且つ經濟生活の普遍性に照應する經濟的計慮一般に比して著しくその態樣を異にする然かも斯る樣式の變化に拘らず、經濟生活の本質其れ自體は依然として變化せざるものである。（小泉）

◆日本經濟史

●古田良一「我國近世に於ける國內海運の發達」（經濟史研究、昭和五・十一月、第十三號頁一――一五）我國近世の初期は、中世末期より引續いて國民の海外渡航盛んで國外海運は、未曾有の活躍をなしたが、寛永年間の鎖國によつて全く衰微した。國內海運は之に反して政治上に於ては中央集權的封建制度の確立による國內平和、經濟上においては地方經濟に取つて代る國民經濟の發展、更に江戶の繁榮によつて頗る盛大に赴き、鎖國による國內自給自足は愈々その勢を促進された。江戶の人口增加はまづ酒、油、醬油等の日用品の需要增加を生じて、大阪よりのその運輸を陸路より海路に移し、寛文以後に於ては米の輸送さ始まるに至つた。江戶大阪間の海運に次い西廻海運と東廻海運との二航路が開けた。後者は海路險惡にして頗る振はず、その運賃も前者に比して高かつたが、後蝦夷江戶間に物資の運送行はれ、更に幕末に至つて蝦夷地經營に力を致すや。船舶の往來頻繁となつたが遂に西廻の盛大には及ばなかつた。西廻海運は從來の陸運海運及び湖上漕運の三者を併用する手數費用を省き、貨物の減損を避けんとして起つたがそれに依て敦賀、小濱及び琵琶湖岸諸港の衰微、瀨戶內海諸港就中下關兵庫の隆盛を來した。それは更に對抗策として日本海岸より河川の改修又は運河の開鑿によつて江戶又は太平洋岸に出でんとする幾多の計畫を生ぜしめたが、殆ど成就しなかつた。江戶大阪間の海運、東廻海運、西廻海運、の外沿岸各地に海運の開けたることが、文獻に見えてゐるが、多く一地方的で、稍重要なるは下關長崎間航路であつて、長崎は貿易上、江戶、大阪、堺等との間にも海運關係を有した。以上の如き國內海運の發展には、幕府の奬勵も與つて力あつた。併しこれら航路の交通に用ゐられ

ることは少く、幕府の奬勵にも拘らず、參覲交代は多く陸路によつた。たゞ瀨戸內海のみは、朝鮮信使、和蘭人の參禮、一般旅行者、金毘羅參詣等により交通頗る盛んで、種々の航路があつた。(河合―土屋)

●**奧田彧「伊勢國長島に於ける地割制度」**(農業經濟研究、六・四、昭和五年、四月、頁六三―六八) 德川時代に於いて諸地方に行はれた地割制度は、諸學者によつて漸次明かにされたが、本稿は伊勢國長島の地割制度を始めて紹介したものである。筆者はそれについては嚢に中部日本の地割制度の分布を調査された際に、三重縣の町村役場からの回答によりその存在を知られてゐたが、今度實地調査の結果、故老の凋落、史料の散逸に苦しみつゝ、その大體を闡明するに成功せられた。その地域、面積を古文書、談話等によつて明かにし、その起因をば水害等による農業上の損失を共同開墾者が均等に負擔するにあらうとされる。發生年代は明白ではないが、相當に古きことを斷定し、その割替年限及び割替時季につき記し、更に割地權者は割地の行はれる部落の戸全體又は部落民全體でなく、割地を共同に所有せる特定者で、已の持分の自由讓渡を許され、持分量も不平等で總有的性質よりも寧ろ共有的性質多きを指摘し、而も一部に於ては他部落住民にも割地權者たるを許さるゝを明かにし、我國地割制度に於ては土地共有團體は必ずしも同一部落民により構成されなかつた一例を提供される。分割標準も日數に依ものと石高によるものとの二種あり、分割方法にも初め机上にて分割配當し、後實地につき之を測量配當するものと、先づ實地につき測量分割して後に記帳するものとの二があり、配當後の交換、一割替期間に限る賃貸又は質入も之を許された。又割替に於て庄屋の獨斷專行が多く、割地權者の承認は形式的に過ぎず、本制度の地味の均分といふ利益も同時に割替時に於ける掠奪的利用を導いた。本制度は他地方のそれと同じく明治八――九年に於て地租改正の結果廢滅に歸した。終りに伊勢の桑名郡七取村大字香取の地割制度に關する一資料を揭げる。(河合―土屋)

●**波多野鼎「我國の基本的階級の構成過程」**(理想、第四年第五册、昭和五・十月、秋季特輯號、頁一――三三) 近來社會學者の好題目の一として階級の問題が取扱はれるのは、資本主義社會發展の必要が生み出した階級的實踐が、社會の意識に強要した一の自己反省に他ならぬと前提し、我國に於る資本家及び勞働者階級の發展を論ぜられてゐる。先づ階級とは生產機構の中に基礎をもつ上下關係的集團であるとし。法制的に基礎づけられた上下關係的集團たる身分との區別を指示し、封建社會においては階級は萠芽に過ぎず、身分の廢墟の上に資本主義社會と共に、或はその不可缺的構成部分として始めて發生せるものとされる。資本主義的生產機構の構成には、大規模經營に必要なる資本の蓄積、自由勞働者の存在、市場の擴大、勞働用具の發達等の諸條件が前提されるとし、是等諸條件の成熟過程こそ同時に又勞資二階級の形成過程に他ならぬとし、之が究明に移られる。筆者は德川時代における。商業資本の發展が市場の擴大に應じて農民の副業的家內工業や都市の手工業を支配し、自らに隸屬せしむると共に一方高

利貸資本として作用し、財政窮乏せる諸侯を搾取し、更に農民への貸付によつて土地の兼併、自作農民の沒落、農村無產階級の大量的生產を惹起し、それらはやがて都市に流入して近代的自由勞働者の萠芽となれるが述べられる。

次で明治維新政府の出現するや、それは我國基本的階級の構成を政治的強力的に促進したが、就中舊藩債の整理、秩祿處分及び地租改正は最も強き三拍車であつたことが論じ、商人は經濟的方法により、華族及び上層士族は政治的方法によつて資本家階級に轉化し、農民及び下層士族は一切の財產を喪失して勞働者階級に沒落し、政府のマーカンテイリズム政策により強行的に變革された新生產機構の中に編制さるゝに至つた過程が詳細に分析されてゐる。

終りに、かくの如く政府のマーカンテイリズム政策の庇護の下に發達した我國資本主義は初期に於て勞働者階級を幾多の封建的束縛の裡に置いたことを示し、二重の意味で自由なる近代的勞働者階級として生長するためには、日露戰爭後、殊に明確には歐洲戰爭を一轉期とする我國資本主義的生產機構の高度化を待たねばならなかつたことが述べて、稿を結ばれる。(河合—土屋)

◆社會主義、共產主義及無政府主義

●ベネディクト・カウツキイ「リヤザノフ編マルクス・エンゲルス全集」(Kautsky, Benedikt, Die Marx-Engels Gesamtausgabe. Die Gesellschaft. VII. Jahrg. Sept. 1930)本文は豫て刊行中のリヤザノフ編マルクス・エンゲルス全集の第一部第一卷下並に第三部第一、第二卷の批評である。其要旨に曰く、前者は只傳記的價値しか持たぬ初期マルクスの詩小說戲曲等を其內容とするものであるが、其中に既にマルクスの現行社會組織に對する反抗心の萠芽を認め得るとなすリヤザノフ氏の解釋は當を得てゐない。リ氏がマルクス自身の作製にかゝる閱讀書拔粹をば原文通り忠實に複刻せず引用個所のみを列記するに止めたのは其目的に副はざるものである。次に後者卽ち往復書簡集に就ては、成程リ氏の新版には忠實に省略無く收錄されてゐるが、然しベルンシュイン監修の舊版にマルクスの粗野苛酷なる表現が省略若くは訂正せられてゐるのは、當時尙種々の人事關係の顧慮すべきものがあり、又時代の趣味も現在と異つた事を考へねばならぬ。又それには唯一のマルクス遺族たるロオラ・ラファルグの希望が參酌せられてゐる事を顧みないのも公平を失する。之を要するにベ氏版には本質的なるものにして差控へられたものは一つも無く、リ氏版には本質的なるものにして新に附加せられたるもの一つもあること無しとはカウツキイ氏の結論である。稍リヤザノフ版の短所を擧げんとするに急なるの嫌はあるが、一方讀書界の一部にはリヤザノフ盲信も行はれてゐるから、斯ういふ批評も存在の權利を持つであらう。(小泉)

●ラスキ「フランス革命に於ける社會主義的傳統」(Laski, H.J., The Socalist Tradition and the French Rorolution, London, March, 1930)社會主義的、共產主義的思想は夙にフランス大革命以前に諸所に存在してゐたが、是等は孰れも其革命的手段を考慮せざ

る單純なる道德的要求にすぎなかつた。所謂近世的意義に於る社會主義、共產主義はフランス革命掉尾の謀叛として知らるる。バブウフ主義を以て始まるバブウフ主義の意義は實に共產主義を理想として定立せしに止まらず更に其の如何にして是が實現す可きやの革命的手段に關して極めて明確且つ詳細なる見解を有せし事である。バブウフ主義を共產黨宣言、レーニン、トロッキイの著作と比較する時後者の思想的淵源が那邊に在るか略ゝ推察出來る。殊にボルシエヴイキの綱領はバブウフ主義者のそれと酷似する。レーニンは大規模なるバブウフ主義者である。要するにフランス大革命は社會主義史上未曾有の大事件である。蓋し、第一、是を機として近世的意味の社會問題の發生を見、第二、從來道德說にすぎざりし社會主義思想が現實化し、第三、從來の特權者對非特權者の對立が富者對貧者の對立に變り、第四、總ゆる方面に於ける平等の問題が發生するに到つたからである。(小泉)

◆財　政　學

●**若槻禮二郎「軍縮による財政の負擔輕減の程度」**(經濟往來景氣轉換號。昭和五・十月)ロンドン海軍々縮會議に帝國主席全權として派遣せられた氏が軍縮條約の一目的たる國民負擔の輕減を算出したるもの。第一は主力艦の縮少だ。主力艦は華府條約で英米五五三の比率に定められ代艦建造可能の期限は一九三一年に切れる筈だが更に之を六ケ年延期した。この建造延期がなければ各國は主力艦の建造に着手する爲、一隻三萬五千噸のもの約八千萬圓を要するとせば一九三一年以降六ケ年間に日本は三億六千萬圓英米は各六億佛國は二億四千萬圓伊太利は二億二千四百萬圓、合計二十億二千四百萬圓の建造費を要する譯であるが、これだけ節約された次第だ。のみならず現有主力艦の縮少により日本は一隻二萬七千五百噸を縮少しその標準維持費として毎一年額たる四百萬圓の經費縮少をなすを得るに至つた。更に一九三六年以後に建艦延期は可能と考へられる素地も出來た。第二は補助艦卽ち巡洋艦驅逐艦及び潛水艦の縮少だ。この問題は華府とジユネーブで不成功に終り、日英米相互に意見一致の六ケしい難點があつた。今度は成功した。併し會議不成功の場合各國の造艦競爭が行れるとすればその程度如何を推定して補助艦縮少程度を知るの外はない。この點から云へば英國の持論たる七十萬噸に對する條約による保有量を見るより外なく、日本は差引縮少量は十萬噸、英國は十六萬噸米國も十六萬噸だ。之に要する製艦費は少くとも日本は約三億圓、英米各々五億圓になるだらうが之だけ節約になつた形だ。更に補助艦が建造せられる場合はその維持費と代艦建造費が日本毎年三千四五百萬圓はかゝるであらう。三國合計で一ケ年一億五千萬圓は結局節約された譯である。第三に航空母艦については大小型合して華府條約の制限內に止め、以上補助艦以外の艦艇は新建造を止め、新造する場合は保有制限內に噸數を割當てる事としたから、將來經費の膨脹を抑する事が出來る。以上は軍縮による經費節減の推定論である。(阿部)

●**小川鄉太郎「財政整理の內面的觀察」**(經濟往來、昭和五・十月、景氣轉換號)濱口內閣の

大藏次官なる筆者が大藏當局の財政整理のために辯じたるもの。濱口内閣は昭和四年度及び五年度において合計四億八百九十萬圓の國費を節した。その中節減に屬するもの一億六千五百二十萬圓。繰延に屬するもの二億四千三百六十九萬圓であつて繰延は繼續費に於て行はれ、節減は臨時費と經常費の兩面に亘り臨時費の繰延は起債の制限となつた。以上の外地方費の整理も行はれたから昭和四五兩年度で十億圓の節約であつた。公債政策では前内閣の豫言に比し兩年度で二億圓の起債を差控へ更に國債の償還額については當然增減を差引き獨乙賠償金の減債基金繰入を入れたと云へば昭和五年度に於て償還額は九千五十萬圓で發行は五千五百五十萬圓、差引三千五百萬圓の國債總額減少となる。なほ財政整理が租稅負擔の輕減の望みをあらしめてゐる。第一昭和四年度において豫定された小包料其他通信料引上げの二百九十四萬餘圓の取止め義務教育費國庫負擔金の增額一千萬圓、海軍々縮條約による減稅財源等何れも減稅の實質を帶ぶるものとされる。而して財界の整理が金融市場に對する壓迫を除き財政の病弊たる放漫を矯正し、公債價格を維持してその大保有者たる金融機關の信用を高めたるはその效果であり、これによつて財政の收入支出は鞏固にされ、延て財界好轉の地均をなしたと云ふ意見の開陳。(阿部)

●**富田勇太郎「預金部勘定の改善」**(經濟往來、景氣轉換號。昭和五・十月)大藏省預金部長たる筆者が最近預金部勘定の趨勢を預金部の任務に對照しつゝ說明したものである。預金部資金は昭和二年のパニック以來激增し、昭和五年七月末には三十倍を越ゆるの盛況を呈した。そは恐慌の影響と投資口の減少を見送る貯蓄と一般國民の節儉とに原因する。而して現今預金部資金の運用は地方資金十億二千萬圓を越へて第一位を占め國債證券、一般及び特別會計貸付金その他之に次ぐ地方資金は逐年增加するがそは郵便貯蓄者階級と直接利害關係ある方面に投資するの必要と資金偏在を緩和して中小商工業者や農漁業者に對する資金融通の途を開くの方針に基く。最近地方資金は昭和四年度と五年度において一ヶ年當り公共團體普通事業資金(治水、交通其他事業)資金は二千五百萬圓、各種組合普通事業(耕地整理組合、產業組合、漁業組合、森林組合、畜產組合、等の事業)に對する資金は二千七百萬圓、社會事業(公益質屋、公設市場、簡易宿泊所、職業紹介所等の)事業に對する資金は七百萬圓を貸付けた。又最近決定の分は昭和四年度は公共團體及び組合高利借換資金三千萬圓(昭和四年九月決定)失業者救濟事業資金一千百九十七萬圓(昭和五年一月決定)。中小商工業者に對する資金二千萬圓(昭和四年三月決定)、養蠶應急資金四千萬圓(昭和五年六月決定)、かく郵便貯金の增加が地方資金特に中小農工商金融及び失業救濟に役立ちてゐるに重點を置く。(阿部)

◆社會政策

●**奧井復太郎「獨逸社會政策理論前史」**(三田學界雜誌二九四、昭和五・九月、頁 ――)本稿は現代社會政策的傾向の發生を學說史的に剖察せんとしたるもので、その材料を獨逸に於ける經濟學及び社會學にとり、自由放任

論の發展と之に對する所謂社會政策的批判とを紹介したるものである。

先づ獨逸に於ける自由放任論に影響を與へたるものとしてバスチヤが舉げられる。ブリンス・スミスはバスチヤの見解を繼承し、社會關係を主として經濟關係として觀察し社會問題としての勞働問題の存在を否定した。自由放任論はその根據として個人主義の社會哲學を有し、人間活動の自利的動機を抽象し、それが自然的に最大の效果を收め得ることに自然法則の發動を認め、從つて經濟活動以外の動機は全然無視せざるまでも之を第二次的のものとなし、經濟的福祉卽ち社會進歩なりと看做す。而してその重要視するところは生産である。

獨逸に於ては佛蘭西崇拜熱によつて十九世紀初頭自由放任論が行はれたが、それが時期尙早なりしため、ナポレオン失脚を機緣に反動が起つた。上述スミスの自由主義運動はこの復古的運動を驅逐しえたが、早くも再び新しき敵に當面せざるをえなかつた卽ち社會政策的理論之でありその萌芽は一八六〇年代にあるが、それが表面に現れたのは一八七二年の社會政策學會の擡頭である、ロッシャー、エンゲル、ヘルマン、シユタイン、シエフレ、ナッセ等を擧げうるが、代表的なるはシユモラーである。

彼等は全體主義の社會哲學により、國家乃至社會を文化進歩の擔當者とし、人間の全生活方面を交叉關係とみて方法論上の分離を試みず、具體的研究を强調する。自由放任論の生産第一主義に對し分配に重きをおき、前者の經濟主義に對し文化主義を以てする。シユモラーの「十九世紀獨逸小工業史」がその例證としてあげられる。(河合)

●**波多野鼎「日本の原生的勞資關係」**(社會政策時報、第百十八號、百十九號、及百二十一號昭和五、七、八、及九月)著者自らその冒頭に述べる如く、此の論文の目的とする所は明治三十年前後を一轉期として展開された我國の資本主義的生産方法の下に於て、勞働と資本との關係が如何に構成せられてゐたかを明かにするにある。此の關係、卽ち原生的勞資關係を具體的に述べるに先立ち當時の資本主義的生産方法卽ちその技術的基礎、經營規模、企業形態等の素描を當時の三大工業たる製絲紡績、織物工業に就て試み次で本論に入る。著者は先づ上述諸工業に於ける女工募集難による奴隷仲買人的「紹介人」——中間搾取者——の跳梁を述べて當時の勞資關係が如何なる經路で取結ばるるかを說き、進んで生産過程に入り、初期資本主義の可能條件たる幼年勞働者の虐使が吾國に於ても亦一般的現象なりしを指摘し、勞働時間の問題に於て、徹夜業及び之より不可避的に生じた『交替制度』が如何に女工達を過長勞働に驅りたてたが、工場主は如何に、「時計の針」を後戾りせしめる「事」に成功したか、又彼等の休憩時間と食事時間とが如何に奪取せられたかが例證的に記述された。その結果は何であるか。曰く、資本家にとりては利潤の增大、勞働者にとりては肉體的消耗。勞資關係に於て勞働時間と並んで最重要なのは賃銀問題である。仍て著者は當時の賃銀形態(請負賃銀制度)及び賃銀率を述べ此の制度に潛む欺瞞を摘發し續いて工場の絕對君主がその『砂糖菓子と鞭』の道德

原理より案出した賃族制度及び工場懲罰制度が勞働者の人格の尊嚴とその自由否その生命迄も破壞せる事、之と並んで寄宿舍制度（指定下宿）が工女を肉體的（呼吸器病消化器病）及び職業的にも道德的にも墮落せしめたる事を述べた兩章はまさに一篇の哀史である。以上の叙述に於て著者はよく資料の不足——明治三十三年農商務省の苦心になる調査『職工事情』は殆ど唯一のものであらう——を克服して原生的勞資關係を大觀し得た。之等の勞資關係を對象とせる工場法、勞働者募集規則、寄宿舍取締規則、又之等の勞資關係より自生せる勞資の抗爭、之に對する治安警察法、勞働爭議調停法等は著者今後の課題である。（河合）

●經營經濟學、商業、工業、商業政策及工業政策

●名古屋高等商業學校產業調查室「本邦製造業の生產數量指數」（調査報告第九輯、昭和五・九、頁一——四八）一製造業製品の多種性や量的變化內質的變化の存在等通常の困難の外生產數量數字開始期の不同と統計規則變更毎の數字の飛躍と指數計算の基礎たる、評價値測定の資料（製造により追加された價値、委託作業の價値等）を與ふべき生產センサスの缺如等の困難は日本生產數量指數作成を困難とする。茲には官廳統計により昭和1——3年平均年生產價額壹千萬圓以上の（1）紡織工業（一〇）（2）金屬及機械器具工業（五）（3）化學工業（一三）（4）木竹製品工業（四）（5）食料品工業（一四）（6）電氣及瓦斯（二）（7）其他の工業（三）七類外五一數列を採り、資料の關係から大正八年を基準年とし、評價値として各數列は原料品の價値を含む生產總價額前記三ケ年平均、七種大類別には各の賃銀支拂總額の千分率を使ひ、左の幾何平均指數を得た。

明治26	10.95
27	13.20
28	15.67
29	18.36
30	19.59
31	21.31
32	20.02
33	21.74
34	22.39
35	24.34
36	24.54
37	29.96
38	34.81
明治39	32.09
40	37.56
41	35.30
42	36.68
43	42.12
44	47.72
大正1	54.04
2	57.10
3	56.23
4	59.81
5	77.37
6	85.29
7	91.38
大正8	100.00
9	100.47
10	95.43
11	112.99
12	117.85
13	127.51
14	126.67
昭和1	151.27
2	154.15
3	162.81

右を複利曲線による傾向線に作れば大正十年迄複利增加率年七・六八％以後七・四五％、故に大正九年後の不況の中でも生產過剩傾向を重ねた事を示す。（上田）

●「本邦紡績カルテルと綿絲價格」（名古屋高等商業學校產業調查室調查報告第十輯、昭和五・一〇月、頁一——四〇）綿絲價格として大阪三品取引所の左二十番手當月限月平均相場をとり、棉花相場としてブローチ現物月平均相場をとり、棉花相場の影響を除外するために之を三倍し（昭和二年以降はストリクトミッドリングを用ひ之の二倍半を以てす）綿絲相場との差額を求め更に銀塊相場の影響を除くために上海銀貨相場の指數（明治二七年より昭和三年迄の全平均相場を基準とす）を乘じて修正差額を求め、かくして操短を行へる期間と行はざる期間とにつき各前月を基準として修正差額の増減率を計算し、明治三二

年一月より本年六月まで前後二十四回に亘る操短が綿糸相場に及ぼせる影響を見た。その結果修正差額總平均は操短期間に於て三・五一の增率平時にあつては〇・四四の減率を示し操短の效果ありしことを見る。然し最近に至つてはその效少く、昭和二年以降のみでは操短時平時、共に各一・二六、二・九一の減率を示し、操短は減少を食止めるだけの消極的役割をしか演じてゐない。（上田）

●**大谷孝太郎「支那產業革命研究序論」**（支那、二一・七—九、昭和五・七—九月、頁一四——三二、七——一八、一五——三六）。支那の將來を定める其產業革命にはマルクスも云ふ如く（イ）特殊性（支那の國民性）（ロ）普遍性（世界の時代性）がある。（イ）產業革命開始當時清末の支那は歐洲封建制度とは異れるが前資本主義の意味で封建經濟を有し國民經濟的資本蓄積の不足、貧富懸隔の大、搾取慣行の普及、通域的分業貨幣の發達等を見たが、產業革命に於る支那國民性は階級的自覺や組織に基かず從來の家族ギルト等の團體經驗に基業勞働者の迅速な工會（勞働組合）組織、家族的結合の強固と資本蓄積の不足と農民の副業要求とに基くコッテージ・インダストリーの發生、有產階級は土地支配と連結し農民に高利貸する故之を破壞する佛國型の革命の不可能等に現はれ（ロ）生產力の增大、資本主義高度化と諸國の帝國主義侵略、階級的國民的不平等の發生と其克復運動、勞農露國の成立を見た現代世界は（1）支那有產階級の買辦化と產業資本の商業資本との遊離化、（2）手工業の家內工業化と無產階級の增大、（3）國家の瓦解を支那に起し、最近の其諸變革は民族革命民主革命共產革命階級鬪爭社會化運動等佛革命より露革命迄の總ての混流だ。右兩性は開港や辛亥革命等にも見得るスターリンヴァルガ、ニアリングは勞農獨裁の成立、村落經濟より勞農國家への飛躍を支那の將來とするが其說は客觀的把握に缺く。同質的世界社會への過程にて支那の國民性は時代性と化すだらう。（上田）

●**リーフマン「國際カルテルとその國際統制」**（Liefmann, Robert. Internationale Kartelle und ihre internationale Regelung. Z. f. Geopol. 6 (8). Aug. 1929. P. 654—661）

戰後における經濟的接續地域の分離並に國民的經濟的孤立傾向は、國民主義の障害に打勝つ手段として、國際カルテルの結成を助長した。國際カルテルは原料品基礎產業に最大重要性を有する。是等產業において獨占的地位を有する國內カルテルを持たないことは、更に國際カルテル運動に向ふについて大なる障害であつた。國內カルテルの目的は明かに市場の分割、價格の統制生產及販賣の統制特許權の交換であるといへる（詳論あり）。大なる國際コンツエルンの成立も國際カルテルの發展と相並行してゐる。で最も重要なるは石油、化學、電氣工業においてゞある將來において國際カルテル及國際コンツエルンは疑もなくもつと重要なる役割を演ずるであらう。國內カルテル統制の或種の方法は彼等の惡影響、例へば高價政策等を防ぐに用ひられるだらう。各國のカルテル法は國際カルテル協定の實行を確保するために同一化されなければならぬ。その差異を調節する中立的機關はまだ不完全であり、又は全然缺除してゐる。國

際カルテル及び國際コンツエルンの國家的、及び恐らくは國際的管理も重要なる仕事として殘つてゐる。そして後者は多分唯時の問題であらう。(上田)

●ウィスリング「**英國木綿工業の現狀**」(Wisselink, J., The Present Condition of the British Cotton Industry, Harvard Business Rev. 8—2, Jan. 1930, pp. 152—169) 英國綿業の難局打開策として合同が試られつゝある。直接間接に五百人を養ふ五七一三萬の錘はランカシアに集中してゐると云へ全體は大工場でなく多數中規模工場より成る。縱の結合の傾少な仕上工場に稍直接販賣の傾向があるが綿業はまだ機能的地域的に四段楷(一)紡績(二)織布(三)仕上(四)販賣に分立してゐる。輸出市場の減退は之に依存する同業の重大事だ。紡績部門は金融狀態惡しく固定利子負擔も重いが根本的困難は不利な其技術狀態だ。單に一般的金融改善のみを求める提案は此根本困難に觸れぬ。此必要に應ずべくランカシア木綿協會は生れた。英綿業が其前に有した市場に今供給してゐる日支印の競爭で苦しむのは(一)高い勞働費と短い勞働時間無交代制による高い間接費(二)生産販賣の非合理的方法による。此點は小工場が其減退しつゝある外國市場を維持する爲自己の特別輸出高を持たねばならぬ必要から解決が困難になり生産の合理化も殆ど困難となる。改善は紡績織布仕上の完全な縱の結合によつてのみ可能だ。之により紡績工場の合理化の外更も尙多くの注意が織布部門の狀態に支拂はれ就中有效な取引機關が作られるだらう。又かなり相互連繫關係ある何等かの橫の結合の一會社を創成すれば更に多くを成就し得やう。販賣組織を持つ一の完全な縱のトラスト又は緊密に相互連結した橫の集團より成る同樣な會社の英國に於ける結成の可能性は他國綿業の重大な考慮に値する。(上田)

◆土地問題、農業經濟及農業政策

●**大阪商科大學經濟研究所**、「**米穀法實績調査**」(調査學報第三輯、昭和九・九月、頁一——二五八) 年收穫四割を商品たる米と見て人口の五割を占める農民一戸當り一五五圓の收入日本米に特殊な嗜好を持つ日本國民一人、當り年四二圓の支出、に當る米の問題は歐洲大戰後供給になく價格にある。米穀法は大正十年以來米價安定策として買入九回賣拂一四回買換買入一〇回同賣拂一五回出動したが其效果を統計的に測定すれば如何。標準偏差による年次米價の動きは、物價の影響を除外した時、更に其上に景氣又は作柄の影響を除外した時、すべて大正十年以後變動の減少即米穀法の有效を證する。反之作柄と米價との直接の相關々係を見ると十年以降其關係大となり米穀法は人爲的に作柄米價關係に干涉し調節する所少きに見ゆる。年内季節的米價變動は大正十年以後增大し米穀法の效は之には觸れてゐぬ。個々の買上又は調節目的の買換等は二三の消極的效果以外米價に見るべき影響を生じてゐぬ故、右記年次米價への影響は米穀法の存在夫自身の影響によると見るべきか。米穀關稅は内地米の値に殆ど影響せず、内地外米價格を上げた、米穀法運用方針は地主大農の利益にのみ添ひ、然らざる時は作柄の傾向に通行してゐる。而も同法會計は昭和四年

九月迄の支出一八八百萬圓、內損失八千萬圓今後毎年の失費二千萬圓を豫想されてゐる。(上田)

●根岸勉治「秋田縣に於ける土地所有關係」(社會政策時報一二一、昭和五・十月頁一三七—一四六) 明治維新の農政改革並に其以後の地主擁護政策は土地兼併の傾向を助長した。秋田縣は我國第三位の大地主王國で、五十町步以上の大地主の所有耕地反別は總耕地面積の一七・七%總小作面積に對して三三・六%を占む。土地所有權は絕えず擔保流れ購入等の方法により移動して居るが、例之好景氣時代の大正九年度に於て、田畑宅地を通じ純小作者の購入は最も少く、畑地では自小作者多きも田地宅地では小作人以外の者(地主及商工業者)が多數を占めた。田に付ては純小作者は人員八%、反別五%、價額五%、自小作者は人員四九%、反別四〇% 價額四一%、其以外の者は人員四三%、反別五五%、價額五三%、の割合を示し、購入面積の單位の大なる程地主及商工業者の購入員數、面積、價額何れも大となつてゐる。而も田舍町の土地所有者は其の所有地の平均六割甚しきは九割を他町村に持つ有樣で、比較的商業不振の田舍町の土地兼併が目立つてゐる。之を總町村の十町步以上の地主に付て見れば、市街地に於ける地主員數三七%反別四八%收得小作料五%を示し、田舍小都市の土地支拂は豫想外に強く、附近の農村を彌疲弊せしむる原因となつてゐる。最近農耕地が頻々として市街地の商工業者の所有に移る傾向が顯著で、爲に小作關係の圓滑を缺かしむる狀態である。(那須)

●中澤辨次郎「都市膨脹の及す近郊農村の社會的變動」(都市問題、一一・二、昭和五・八頁一九——二九) 都市外延地帶は郊外卽都市の外延帶にて都市より放射線的に擴大し農業形態の解體的作用を行ふ地域と近郊卽農村の最後の發展として都市より後退的針路をとり最上極農業形態として都市に一定の保健資原を供給する地帶とに分つを要す。近郊は粗放農より集約農に進化し東京では都心二里以內は觀賞植物牧畜三里以內は根果菜四里以內は根莖菜五里以內は、根菜部及輕い主穀農業があり、夫は市民への低價鮮菜供給と糞尿の清淨所の役を果す。而も其資本收益率は五分九厘、勞働を自家勞力として除外して一割二分七厘だが郊外住宅地とすれば此月八厘三毛の地代が最低十錢になるから地主は耕地整理を名とし區劃整理を行ひ耕地を荒廢させて待ち、而も小作人は反百圓乃至三百圓の涙金で追拂はれる。此種社會問題は東京大阪名古屋神戶福岡橫濱の大都市郊外は勿論岐阜新潟靜岡濱松等にも起つてゐる。(上田)

●ドレシャー「佛國人口問題と其の農業に對する意義」(L. Drescher: Das französ. Bevölkerungsproblem u. s. Bedeutung für die Landwirtschaft. Bericht der Landwirtschaft. 12, Bd. S. 245—259. 193[illegible]) 佛國人口增加率は漸減傾向を示す。一九二一乃至二六年間の增加數は約百五十萬であるが其の六二%餘は外國人が占む。のみならず年々農村より都市へ農業より都市的職業への移動が行はれ人口數二、〇〇〇以下の町村の人口數の總人口數に對する割合は、七五・六(一八四〇)、六二・六(一八九一)、五七・九(一九〇六)五三・六(一九二一)、五〇・九(一九二六)、不足勞

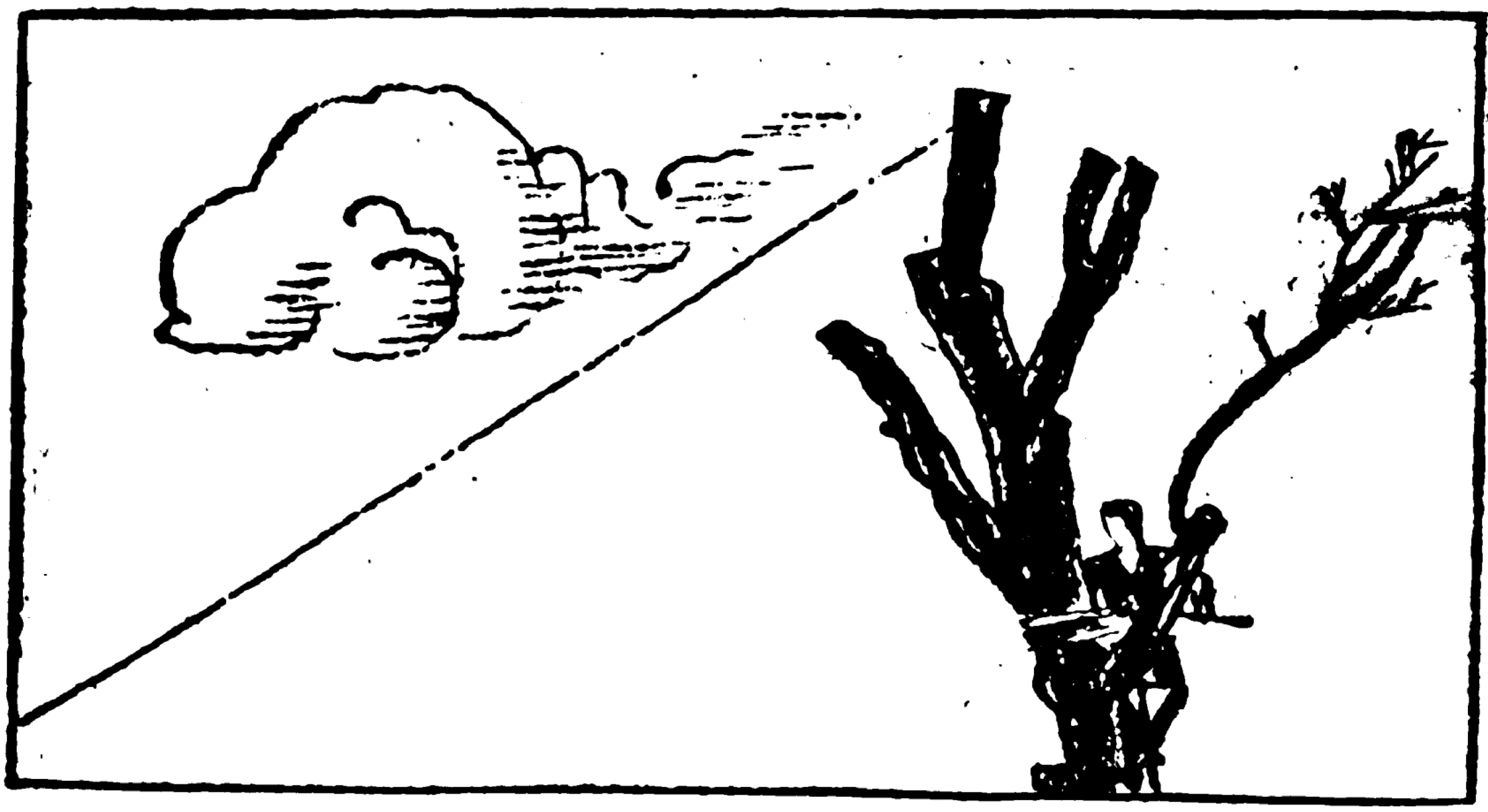
働力は外國人（主として伊太利人、白耳義人波蘭人、西班牙人）が之れを補ふ。獨白佛國境近くの工業地帶、伊佛、西佛國境近くの農村地方等には、單純なる季節的外國勞働者のみならず定住者が漸增しつゝある。特に農業地方に於ける影響は、第一、異人種混在に基く農村社會構成の變化、第二、外人農地所有者の增加（Gers）縣農地面積の二・八九％最も多し。一九二七年全農地の一・二五％は未歸化外人が所有するか又は經營する。佛農民離村に伴ふ地價下落のため外人は土地を購入し易し）第三、外國勞働者を雇傭する大農經營の增加に存す。佛國政府も亦農村勞力不足を補ふため海外勞働者の移入を企て、且つ外人の歸化條件を緩和しつゝある。尙ほ著者は佛政府の人口增加獎勵策を略述す。また農村人口の減少は農民向都に先だちて起りしもので、これは佛人特有の思想——利子寄食、生活の安易、（の愉悦、一切の屈托否定——に基くものであり、また現に最も人口減少の甚だしき佛西國境に近き諸縣に於ては地力豐沃で農民の生活程度は高い。此の意味に於て佛國人口問題は結局文化の問題である（那須）

●ルートレッジ **「人口の國內移動と都鄙の經濟的不平等」**（R.M. Rutledge; Relation of the flow of population to the problem of Rural and Urban Inequality. *Journal of economics* vol. 12. No. 3. pp. 427－439, July, 1930）

人口增加の大で且つ財產の均分相續が行はれ且つ移住の多いユター州のCache Counp（モルモン宗徒が人口の約九十％を占む）に於ける不動產抵當負債の增加率が一九一〇年乃至二五年間に於けるアメリカ一般の平均數値より遙かに大なるに注意し、其研究視野を擴大し遂に農村より都會へ移動する人口と共に農地に對する支配者が其農村より離るゝに至る現象を見て、若干の數字の計算と推理とにより て次の如く考へ得る。一定社會の人口壓力が大となり都市への移動が行はれると共に、若し其社會の富の大部分が土地財なる時は、土地自體は農村に止るが其れに對する財產權は外部に移り土地の生產力を支配す。かくて此の一定社會の生產力に伴ふ購買力が外に移り從つて其の社會の生產資本を購買し或は生活標準を上昇するに必要な部分が減少する。ために此の社會と移住民の移つた社會都市とに經濟上の不平等が增加する。若し移動民の財產權を購入するために不動產抵當が設定されるも其の利子が蓄積さる。一般に均分相續行はれ且つ土地金融機關の發達したる所での此の不平等打破策は、人口壓力を抑壓して少くとも現狀維持に止らしむる事、次に農地價格を昇らせる諸行爲を抑止するにあり。（那須）

◆植民政策及植民地事情

●矢內原忠雄 **「印度工業と植民政策」**（國家學會雜誌四四・十、昭和五・十月、頁三二——七五）印度工業は重商主義時代次で自由主義時代の英國植民政策の强要を受けてその發達が阻害せられたが、帝國主義時代は英國にとつては資本輸出、印度に於ては工業保護の時代であり、殊に世界大戰の刺戟により工業助長獎勵政策がとらるゝに至つた。印度工業は現在尙次の特徵を持つ。一、資本主義工業發達の不均整不十分とその發達速度の緩漫、二、資本主義工業の外國的要素に支配、三、乎



血

野上彌生子

一

芝の上村の應接間は、田口のそれほど華美でなかつた代り、却つてよい趣味で纏まつてゐた。胡桃材の卓、唐棧風なきれで張られた椅子。同じ材料と塗りで仕上げられた小型のキャビネット。暗色（あんしよく）の、四邊を殘した敷物。フランス展の時、或る華族と引つ張り合ひになつて手に入れたと云ふこれ等のセットは、上村の放蕩者らしい凝り性と、その點似たもの夫婦でないことはない辰子の協力で、用心深く美しさが保護され、一箇の花瓶、一枚の小布團も、なをざりには附け加へられてなかつた。そこに醸された清楚な調和には、わりにひくい天井から吊られた、ほの白い磨り硝子の燈籠型の電燈まで、日本間の方の上方風な澁い飾りつけと通ずるものがあつた。

眞知子は鼠皮の淺い上靴をくうに浮かせ、らくな姿勢で、少しあいた窓の下の長椅子にかけてゐた。座敷の方には、冴えた上調子を入れて三味線がつゞいてゐた。今日は姉の稽古日であつた。眞知子はそれを知つて來て、もう二十分待つてゐた。いつまで待つても逢つて行かなければならなかつた。

昨日は一日がかりで部屋の整理をし、簞笥と書棚を秩序づけ、旅行鞄に入れるだけの身の廻りのものと書物を擇み出した。断片的な日記や感想を書き留めたノート類、手紙（重に米子に貰つたもの）、それ等には殘して置きたいものもなくはなかつたが、思ひきつて裏庭に運び出し、火をつけた。不意な焰の色に驚いて飛び出して來た女中に對し、眞知子は念のため口留めした。母の疑惑を少しでも引かないやうにすることが必要であつた。簞笥の始末の時、柄が氣に入らぬと云ふ口實で與へた銘仙の羽織と着物のため、それは忠實に守られた。過去の生涯の一切は、彼女の脱出に先立つて灰であつた。

眞知子は立ち上り、肩を強く動かし、胸に組み合せた手を置き、二三歩壁の方へ、それからまたこちらへ、部屋を行つたり來たりした。容易にやみさうにない三味線の音が、だん〳〵じれつたくなつた。幾らかでもそれを遮るため、長椅子越しに窓を締めようとして、ゆるい勾配で、四月の午前の日光に青々と膨れ擴がつた芝庭に眼を移した時、奇妙な眩覺が、思ひがけもない記憶の斷層に彼女を投げ込んだ。公園につゞく小高い森を負ひ、一面に蓮の花の咲いた大きな池。煉瓦の迫持。圓柱の並んだ外廊。萠黄の絨氈で、兩端を殘して蔽はれ、眞鍮の笹縁がきら〳〵してゐる階段。増上寺の寺領であつた當時のまゝを傳へた寺院風の黒い門。それに對し、古びてゐるのと距離があるために不似合には見えない鮭色の本館。——これは彼女が十二三のころ住まつてゐた知事の家のスナップであつた。その後なほ幸運に進んだ父の地位は、一さう格の高い官舎にも家族を置いたが、古めかしいその煉瓦の建物は、池で泥まみれになつて掘つた烏貝や、森のかくれんぼの童話的な追想とともに、どの家よりももとは彼女の氣に入つてゐた。が、突然どうしてそんなことが思ひ出されたであらう。これまでの生活地帶は、如何なる視野からでも、殊にこの場合に於て興味らしいものは殘つてゐない筈であつた。

稽古がすんだらしい。三味線はやまつた。辰子のにぎやかなお饒舌と、なにかそれに應酬してゐる師匠の、年取つた男の

やうにはない艶つぽい笑聲が玄關で聞こえた。眞知子は窓を離れた。姉の急ぐ時の、爪先だけで摺るやうな足音が廊下から近づき、ドアがぞんざいに開いた。

『まだそんなところにゐらしたの。』

上半身しかうちには入れないで、辰子は冴え〳〵と叫んだ。『あちらで待つてりやいゝのに。なんてんでせう。』

『今日はこゝの方がいゝの。』

『へえ、すつかりお客様ね。』

笑つて、無理に自分の部屋に連れて行かうともしないで、丁度座敷のものを下げて通りかゝつた小間使を呼び留めた。『とみや、こちらへ冷たいもの持つて來てお呉れ。――え、何んでもいゝよ。――大きな聲出すと咽喉がからつから。』

眞知子は飲み殘した紅茶茶碗と菓子皿の並んだ卓にさし向ひにかけ、辰子のまだ音樂の影響から脱しきらない、浮き〳〵と樂しげな顔を眺めた。眼や耳や口の快樂で日々を塗抹してゐるこの姉の生活法に對しても、いつもほど氣むづかしくなれなかつた。眞知子の新な祕密は、そんなおせつかいをする餘裕のない歡喜で全細胞を彈力づけてゐた。同時にそれを押し包む努力を忘れないで、巧妙に粧うた平靜で、彼女は訊いた。

『昨日電話でお願ひしたもの、頂ける。』

辰子の美しい額の一隅で、或る筋肉が收縮した。そのまゝの表情で、帶の間の金入れから四つに疊んだ百圓札を摘み取り、卓の上に置いた。眞知子は輕い見得で、すぐには仕舞はなかつた。ドアが開き、オレンヂエードの盆を捧げて小間使が入つて來た。と、なにかゞ彼女の手を突き出し、機械的な素早さで紙幣を掴ませた。さもしく、不快な、恥ぢの感じがそれに續いた。

『やつぱし話しては貰へないの、まあちやん。』

辰子自身も女中の赤い帶を部屋の外に見送つてから漸く云つた。『そのお金なにゝ使ふのだか。』

『訊かない約束で、貸して下さる筈だつたわ。』

『約束は分つてるんだけれど。――ぢや別なこと訊くぶんにはさし支へない譯ね。返事してくれる。』

『出來れば。』

『あんた誰か當があるの。』

『――』

『好きな人とか、それとも幾つになつてもきつと貰つてくれる人とか。』

下を向いてストローに口をつけてゐたのと、窓を後にしてゐたので、かすかに頰に湧いた色が明らさまにはならなかつた。それと共に稍ゝ不自然におくれた返事も飲みかけのもののせゐになつたから、眞知子はそのあと却つて大膽に反問した。

『お姉さまはどう考へてゐらつしやる、』

『そんなこと私は疑ぐるのは嫌ひだから、これまでは人があんたのことで氣を廻したつて相手にもならなかつたのだけれど、河井さんまで斷つちまつたから――』

『河井さんの話ならよしませう。すんだことだもの。』

『すんだことだから話してもいゝぢやないの。是非嫁かせようつてんぢやないし。――兎に角あの人まで平氣に斷るんなら、あんたにも屹度當があるのだ、でなくてたゞ斷つたんなら大馬鹿だともつて。――ねえ、どちらです。』

今日の金が何のため要るか、出鱈目でごまかしたくなかつたと同じに、その質問に對しても姉だけに嘘はがつきたくなかつた。が、ふだん拘泥のない考へ方をしたとは云へ、所謂眞知子の當が誰にあつたかを知つたならば、この姉とても（勿論はたの關係者なら霞へ上つたであらう！）非難なく承認してくれようとは思はれなかつた。にも拘はらず、彼女は打ち明けて見たい、どんな顏されるか試驗したい誘惑を禁じえなかつた。礦山の鑛夫が瞬間のたのしい陶醉のため、爆發の危險を賭してダイナマイトを嚙む――彼女の慾望はそれに近かつた。

民子は姉らしい愛と、好奇的な興味で默つてゐる妹を眺めた。それ以上問ひ詰める必要はなかつた。彼女は眼の隅にいとほしげなからかひを見せ、唇で笑つた。

『なんだつて今まで隱してたの。狡いわね。』

『だつて——』

『云ひ譯はしなくてもいゝから。どんなひと。』

云つて仕舞はうか。——再び強い誘惑。鑛夫のダイナマイトの一片が眞知子の舌の上にあつた。

『云へば妬かれるとでも思ふの。大丈夫よ。まあちやんの旦那さんなら、幾ら美しい人だつて、燒もちやきやしないから。』

『お姉さまのそんな話し方、大嫌ひ。』

『はい、はい。——もう眞面目なんだから怒らなくたつていゝの。』

『——』

『なんて名前の方。』

『——』

『まあちやん、名前さへ私に云へないんですか。』

卓越しに急にさし寄せた姉の顏には、喜劇役者が假面をかなぐり捨てた時の、わざと剽げた今までとは違つた嚴肅さとともに、怖れの表情があつた。眞知子はその顏に家族の、親類の、身寄りの、知人の、すべての人々の複合寫眞を見た。

『云へないんなら、訊かなくたつていゝ。』

避けてキャビネットの碧い壺に向けた妹の眼を、姉は打ち解けた憎しみで追うた。『と云ふより、私に名前に打ち明けられないやうな人と結婚する筈はないんだから。ね、まあちやん、さうでせう。あんたもそれだけは分つてるわね、どんな人とあんたが附き合はうと、好きにならうと、そんなこと私は一度も心配しやしなかつた。いよ〱となれば悧巧な判斷をして

くれるとおもつたからよ。』

『それが合ひ言葉なのね、私たちのまはりの。悧巧な判斷！悧巧な振舞！悧巧な話し方！そのためどれほど歪められて育つたかとおもふと腹が立つくらゐだわ。』

『腹が立つても、癪にさわつても悧巧にならなくちや駄目ですよ。でなければ損するんだから。短い一生に損な暮らしをしちや詰んないぢやないの。』

『お姉さまは損はしてゐらつしやらないつもり。』

『してませんとも。』

眞知子は冷然と強い凝視で不承認を示した。

『そんな顔して。――そりや思ひやうだから私が損はしてないつて頑張つたつて、あんたがしてると云へばそれまでだわ。負けて、ほんとうに損してることにしてあげてもい丶。ひとより百倍もしてゐるつて。――』

その時まで彼女の口邊に虚勢的にあつた微笑の線が急に硬化したと思ふと、うるんで、大きく擴がつた眼に、透明なきらくした液がいつぱい溜まつた。が、頰まではこぼさず、敏捷な瞬きで喰ひ留め、すぐつゞけた。『さうなれば損の味は誰よりかも私が知つてるつて譯ね。さうでせう。だからまあちやんには、よしんば私のしたのとは違つた損にしろ、させないですむならさせ度くないとおもふのが分らない。それを餘計なことだと云ふなら、引つ込むから勝手にするがい丶わ。どんな無茶だつて、理窟はつくんだから。』

――なにか感づいてゐるのか、抽象的の訓戒か。――眞知子は言葉ほど氣色ばんではゐない、たゞ瞼の降起に輕い充血の見える姉の顔を眺めた。どちらだつて構はなかつた。寧ろ睫毛の裏に隱されてゐる、容易に泣かないひとの涙が珍しかつた。眞知子は姉の眞實な愛とともに、種々な享樂で擬態された彼女の生涯の苦悩をそれに見た。併し今日の妹には二つながら感傷以上ではなかつた。殊に後のものに對しては同情よりもどかしさが、憐みより輕蔑が先行した。結句苦い涙は、美しい部

居、滑かな衣、舌に快い食物で相殺されるであらう。金と時間の無目的な消費で、ブルジョアジーに湧いた虱の生活の一聯が彼女の上にも——他の驕慢な有閑婦人の群と同じく、(眞知子の偏愛は、如何に彼等からこの姉を分離させたかつたか！)續くであらう。おゝ、併し或る日の鐘が鳴るまでである。その時蓬頭とぼろと空つぽの胃の行進が、華麗な虱を踏み潰し、殻を燒き、その生存と組織を根こぎにするであらう。丁度一世紀半前バスチィユに於て彼等がなした如く。——

眞知子は椅子の板に脊柱をぴつたり壓しつけ、細めた上眼で、非常に遠い距離を見るやうに目前の姉を見た。打ち明ける必要はなかつた。舌の上のダイナマイトは無作用に咽喉に辷らされた。

姉の家を出ると、自動車(くるま)を拾つた。歸途とは反對の方に向つて驅けさせた。

『海を見て行かう。』

手をあげた時、突然な思ひつきが眞知子の黒い麥藁帽子(ストロー)の下層を貫いた。暮れるには數時間あつた。夜でなければ闇は歸らなかつた。鞄を持ち出すにもその方が都合がよかつた。家で待つには堪へられない、姉との會見で更に膨脹力の加はつたものを、なにか暢び〳〵と廣大な空間に發散させたかつた。

『海を見て行かう。』

洋品店、カフェ、花屋、書店、文房具店、小ざつぱりときら〳〵した飾り窓の連續。ラヂオ屋の喇叭に蜂の巣の蜂の子のやうに人だかりがしてゐる。野球だ。スコアは？　が、よその土地の仕合らしい。家並み平靜である。罐詰屋の小僧が、顔をきれいに塗り、煎茶の上つ張りを着た隣の繪葉書屋のショップ・ガールと、店先で犬をじやらしてゐる。慶應の前廊。——三田の通を驅け抜けた。——庚申堂——東禪寺——黄塗りの横つ腹に赤文字で使命を素朴に廣告した遊覽車が、田舍ものをぎつしり詰め込み、泉岳寺の曲り角から鈍重によろめき出た。明白に東京を後(うしろ)にしつゝ、ある感じの數分。廣く、しらつ茶け

た街上の埃風に汐の香が交り、灰白色の品川停車場が直に左にあつた。眞知子は八つ山の鐵橋前で乘物を飛び下りた。

海が思つたより碧い。三つのお臺場。汽船が走つてゐる。前景の、コンクリートで出來た陸橋の欄に、二三十人沖に向つて列をなしてゐる。彼等も海を見に來たのか？寧ろ數十米突の前に海のあることを彼等は忘れてゐる。橋下のコートで、此處も野球だ。眞知子は向下りに緩い坂になつた陸橋を渡り。岸の方へまつ直ぐ、低地を横ぎつた。

淺青色のひろ〴〵と弧になつた空で、晩い春の太陽は輝いた。中の臺場の草地に陽が當つてゐる。綠の長い斜面。白い蠟燭の如く立つ燈臺、反對の端に枝をひろげた松。なにか麗かに、草地から飛び立つ雲雀の歌が、水路越しに響いて來さうな氣がした。

併し二分の後、眞知子の注意は全然異種の觀物に引きつけられてゐた。一本の黑煙をあげつゝある煙突に。一臺の尨大な起重機に。一箇のコンクリートの建物に。――左端の臺場のうしろから、遙かな沙洲の如くつゞく對岸に立つた三つのものは、距離のある、別々の存在にも拘はらず、威嚇的な外觀に於て類似があつた。煙突はたゞ立つてゐるとより地殼から突き出で、なほ大空を貫かうとする如き高度と直線で見るものを壓した。起重機は宛然ギロチンだ。最後の一つは。――層になつた、コンクリートの強固な積み上げと、擴がりで、巨大な集塊(マス)で、白き城砦だ。プロレタリアートの勞働力の巧妙な搾取場としての、資本主義の、經濟諸態形の、生產全機關の防壁としての、砦(とりで)だ。

護岸工事で水面が低くされ、それだけ急に深まつた海が、靴の先でだぶつき、鹹味のある風がスカートを吹いた。彼女は杭のやうに立つた。對岸から眼を離さなかつた。來るべき戰の地をのぞむ若い兵士の、初心な戰慄が、觀望を興奮づけた。否、戰はすでに戰はれてゐる。爭議中の××――鬪が語つた――の本社は、たしかにあの一劃にある筈であつた。

眞知子はなにか焦燥に似た感じであたりを見廻した。誰かゐないだらうか。お、丁度な相手が見つかつた。下手(しもて)の渡し場に近い草原に、一人の印ばんてんの男がつくばつてゐた。彼女は駈け出し、自分でも分らなかつた馴れ〴〵しさで、見知らぬ相手に話しかけた。

『――この正面は、洲崎になるのでしたね。』
『さうです、洲崎だ。こつちが芝浦だ。』
『あすこの高い煙突、何工場なんでせう。』
『知らねえな。』
『起重機の立つてるのは。』
『さあ。――』

それより、どうしてそんなことを聞きたがるのか。――彼は酒毒で赤くなつた圓い鼻を鳴らし、いびつな、剝げつちよろの帽子の下から、稍好色的に、美しい洋服のお孃さんを眺めた。

彼女はひるまなかつた。

『ぢや、あの左の端の』腕を肩からまつ直ぐ伸べ、遠い水際の、汐曇りの中の目的物を指した。『白い、大きな、軍艦見たいなのは。』

――正しく軍艦なら二萬噸級の戰鬪艦だ。二本竝んで後部についた、短いがつちりした煙突が煙を吹けば、何んとまつしぐらに海に向つて突進しさうではないか。

勞働者は眞知子の顏から、人差指の向ふに鈍重な視線を轉じた。矢張りなにの工場か知らないと答へた。飽和點に達した彼女の驚は、失望と、もどかしい憤りにまで分裂した。仲間(タワリシチ)！君は昔の支那の詩人のやうに、白雲の悠々と亙る姿でも此處で樂しんでゐるのか。君たちを絞り上げる、目に見えない壓搾機の部分品であり、支柱であるあの煙突、鐵塔、コンクリートの壁に對し、どうしてさう無關心になれるのか。――が、彼女はもう一度よく彼を見た。汚れた革手袋のやうな皮膚。たるんだ顎。薄い肩胛骨。腹掛の下で、凹んでぜい〳〵云つてゐる胸。これは搾り滓だ。搔き落された鐵屑(かなくそ)だ。一箇の勞働力の哀れな殘物だ。――壓搾機とは緣のきれたものだ。

眞知子は殘酷な質問をかけ過ぎた。

二

家では母が留守になつてゐた。

『△△樣からお電話で、お國の御隱居さまが入らつしやいましたとかで。』

『晩御飯は。』

『あちら樣のやうに仰しやいました。』

なほと都合がよかつた。——そのまゝ部屋の方へ行きかけるのを、女中は追ひ、彼女に訪問客のあつたことを傳へた。

『お貴にお出かけになつてまだお歸りがないと申上げましたら、一時間ほどしてまたお寄りして見ると仰しやいました。』

『お名前を伺ふの忘れちや駄目。』

『いゝえ、お孃さま、伺ひましたんですが、』新たに來た愚直な女中は、いつも受ける注意に今日は違はなかつたことを熱心に證明しようとしながら『仰しやらないのでございますよ。質素な洋服を召した方で。』

A—子が氣まぐれに舞ひ込んだのかも知れない。

『眼鏡かけてらした。』

『かけてはゐらつしやいません。』

では、誰なのか。他に思ひ當る學校友達はなかつた。殊に親類おひの若い女客で、取次の眼に質素だと映ずるやうな服裝で誰か訪ねて來るだらうか。詮議立ては無用であつた。その人が再び來た時、彼女は再び留守であるだらう。

眞知子は部屋の正面の押入から鞄を引き出した。すつかり詰まつてゐた。が、もう一度開けた。歸りに買つて來たものを入れなければならなかつた。齒ブラシと、粉と、コティのナイト・クリームの一瓶。この新しい買物が、云はゞ彼女の結婚

の支度の全部であつた。彼女は一種愛情を以つて、小さい紙包を隙間に壓し込みながら、なにかおかしく、愉しんで笑つた。――ねえ、お母様、私たちの御婚禮つて、お金がかゝらなくていゝでせう。――おゝ、斯んな風に話しかけられたら。――同時に眞知子は思ひ出してゐた。暮れに田口で聞かされた、二十五棹の箪笥と百五十本の帶の噂を。それに對して示した母のこゝろからの歎賞を。

ぴちん！鍵をかけた。いつでも出かけられた。その母が丁度ゐないのだ。が、眞知子は、今一つの仕事が課せられてゐるのを忘れえなかつた。なにか數行でも書き残すべきではないか。愛よりも義務としてそれを感じてゐた。

書簡箋が机の抽斗から取り出された。萬年筆の運動はすぐには伴へなかつた。書きかけては破つた。母よ、左様なら！それだけの挨拶なら、寧ろ默つて去つた方がよかつた。何故去つて行くかを明かにするためには、一篇の感想文を必要とした。

急いだ足音が廊下を鳴らして來た。眞知子は開いた障子の方へ、不機嫌な瞥見を投げた。

『先ほどのお客様が入らつしやいました。』

もう來たのか。まだ歸らないと云はすべきであつた。これからだつて、斷れなくはなかつた。

『私また出なくちやならないから、今日は逢へないわ。でも、どなたつて。』

今度こそたしかに聞いた誇りで、稍勿體ぶつて發音された米子の名前は、咄嗟に眞知子のペンを捨てさせ、椅子から立ち上らせ、すぐ案内するため女中を追ひ返したほどの反應を持つてゐた。思ひがけない悦びであつたと共に、彼女の來たのは救ひであつた。それを口實に困難な書きものが拋棄された。で、大急ぎで書きくづしの紙をまとめ、重ねて細かに引き裂き、ポケットに突つ込んだ。鞄はわざと出し放しにした。なにか彼女に隠す必要があるだらうか。斷じて。――米子こそ今日の脱出と結婚に就いて知る最初の、唯一の人であるであらう。

奥の方へ突つ込んだ餘分の椅子を。骨折つて押入から引き出すと、眞知子は性急に肩を振り、自分でも女中のあとを追うた。表座敷へ曲らうとするところで出逢つた。まことに、紺のサージの、あはれに無装飾なワン・ピースだ。とうとう洋服

になすつたのね、あんたも。よく似合ふ。婦人闘士より尼さんじみて見えるけれど。——でも出し抜けに、いつ出てるらしたの、相變らずあんたらしいやり方ね。——二日間に、一さう輝やかしく表情的になつた眼で馥香り立て、手は行きなり腕を掴んだ。斯うしがみつき度い衝動の、わづかな自制であつた。

『出直してもよかつたんだけれど。』

米子は强い把握で半分引きずられながら『どこへか入らつしやるとこだつて。

『女中がさう云つた。』

自分だけに解るおかしさで、眞知子は笑ひ聲を立てた。『あのお取次、とても聖人だから。でも、云つたの嘘ちやないの。もう三十分あんたが遲ければ、私ゐなかつたのよ。』

二人はすでに、開けつ放したまゝの部屋に達した。鞄がまん中に位置し、彼等を迎へた。

米子は訊いた。狀況の最も自然な想像として。

『旅行』

眞知子は答へた。詐謀的な、美しい笑ひで。

『さう云つてもいゝ。』

『ぢや時間きまつてるんでせう。』

『構はないの。』

『——？』

『お葬ひなのよ。』

『——？？』

『それもうそ。お誕生。』

『――??』

相手の顏につぎ〳〵に加はつた疑問の表象が、彼女の帽子を取つた小さい頭と、細い體軀の全形を、終にそのまゝで一つの？に變へた時、眞知子の高揚した諧謔は、それ以上抑へておくことの出來ない激情にまで燃え上つた。彼女は椅子をぴつたり寄せ、米子の膝の手を取り、それを自分の二つの掌の中で緊めつけ、可憐に幼稚らしく溢れた悦びの眼を、ちかぢかと持つて行つた。

『ほんとのこと、云つたげませうか。』

今こそダイナマイトは危惧なく嚙まれた。

『私うちを飛び出すのよ。婚約したの、關さんと。――私たち今日結婚するの。――』

米子の頰の皮膚下のわづかな色素が、消滅した。彼女は意外なことを聞いたと云ふより、或る怖るべきものを見たかのやうに、擴大した、動かない瞳で眞知子を凝視し、取られてゐる手を解かうとして、却つて自分から摑み、激しく震へた。彼女の驚愕を、驚愕以上の恐怖を、恐怖以上の苦惱を、その手が眞知子に刻みつけた。

米子は白く膠着した唇を漸く動かした。

『――あのひと、私とも結婚してる筈だわ。』

轟然！ダイナマイトは舌頭で爆發した。一切が寸斷された。眞知子は吹き飛ばされたなにかの一片のやうに、椅子に崩れ、突き上る咽喉の塊りを口腔で壓した。

米子は蹈みかゝり、組み合せた腕の中に隱した顏をのぞき込んだ。ライヴァルより、優しい姉の仕方であつた。つゞいて口に出した言葉も、常の調子に近づいてゐた。

『あなたに話したいともつたんだけれど。――大阪へ行く時もよつぽど話しておかうかともつたんだけれど。――もしかしたら分つて吳れてるともつたから。』

ほんとうに分つてゐなかつたらうか。——田端の家ではじめて闘に就いて聞いた際のかすかな臆測。なほ起せば起された他の多くの疑ひを成長させようとしなかつた、その不自然な否定が、眞知子に極度の羞恥を與へた。

『分つてたと云へば嘘だけれど、分らなかつたと云つても嘘なの。正直に云へばさう思ひたくなかつたのね。だからさう思はないやうに努めたことが、ほんとうにさう思はないやうにしたのだわ。』

『私が打ち明けなかつたら、知らないですんだともふ。』

『多分。』

『ぢや、默つてるとよかつたのね。』

『そんな——』

『いゝえ、默つてゐたかも知れない。あの人がたゞ私の夫であつただけなら、——子供の父になるのでなかつたら——』

その時まで見せなかつた涙が、眼からと云ふより顔のあらゆる部分からの如く迸つた。米子の蔽うた手に沿ひ、忍びやかな泣き聲と痙攣の中を、涙は線になつて流れた。

眞知子の言語の中樞はしゆんかん無機能であつた。彼女は特殊の注意を以つて、米子の胸の下のゆるやかな襞に眼を留めた。金のないものが新たに洋服になるのは不便だと米子は云つてゐた。たしかに今は便利な筈だ。彼女はまた數ケ月前の米子の病氣を思ひ出した。病氣だと信じてゐた自分の迂濶さを。——それまでは輪廓を現はさなかつた一つの新たな痛みが、明白な嫉妬が、はじめて意識に浸み出した。と、闘に對する怒、もつと複雜な、分析しえない痛恨と厭惡が、彼女の全感覺を掻き亂した。

眞知子は意地惡く、今までとは別なひとであつたかの如く、また自分自身別なひとになつたかの如く、しげ／＼とその姙婦を見た。

米子は視線を感じたやうに顔の手を離した。涙は乾いてゐなかつたが、蒼ざめた薄い頬と、尖つた顎に、決定的な或る表

情があつた。

『ねえ――』

しづかに、冷やかではなく話しかけた。『二人で泣いたりするのよしませう。何んにもならないんだし、醜いことだし、それよりはつきり極まりをつけることを、今は考へればいゝんぢやない。』

『どんな風に。』

『あんたが私のことであの人に失望しなければ、またあの人が私よりあんたの方を擇ぶなら、このまゝ大阪へ歸るから。』

『それが新らしい道徳だと云ふのね。ロシア風の、流行の理論からすれば。』

『何故そんな云ひ方するの。』

相手の素直でない應じやうを敏感に咎めて『私はもつと本氣なのよ。理論でもなければ、人眞似でもない。たゞ斯んな内輪のことで仲間の好奇心を引いたり、そのためあの人の仕事までなにか批評されたりするのを避けたいためなの。でなくともインテリの立場は誤解され易いのだから。もう一つはあんたと喧嘩したくないの。どんな原因からでも厭。私はあんたが好きなの。だからあの人があんたに引かれた氣持も理解出來るし、同じやうにあんたがあの人を好きになつたのも分るの。』

『それで身を引くと云ふんならやつぱり理論ぢやない。どんな云ひ譯をしたつて、あんたの方で厭になつて捨てるのではないんだから。』

『ぢや理論でもいゝ。その理論が私に命ずる。』

『守れて。苦痛なしに。』

返事の代り、新たな一滴が、ゆるんだ涙線から大きく湧き、粒のまゝ頬を轉がつた。と、急に激しい憎みが、この瞬間にも減退した米子の友愛への感動といつしよになり、眞知子に充滿した。

『そんな不自然なことする必要はないのよ。』

自分の中からも危く溢れさうになつたものに拮抗しながら、彼女は故意に強く、「あんたのために、生れて來るもの、ためにも、あの人から離れちやいけないわ。寧ろあの人のために一番それが必要なのだわ。あの人の生活と仕事をしつかりさせ、あんたが心配するやうな批評を仲間に受けさせないやうにするには、ほかに途はないんだともはなくちや。」

『それが自然。あんたにそんなこと忠告して貰ふのが。』

『どうして忠告されないの。私もうあの人を愛しちやゐないんだもの。』

云はうとして云つたより、なにか發作的に、未構成のまゝ突き出たその言葉は、却つて實質を決定させた。眞知子は婚約の打ち明けをした時以上の驚愕で啞になつた米子を眺め、今度はたしかな意志でつゞけた。『はじめから愛してたのぢやないのかも知れないわ、——多分。愛してたとすればあの人ぢやなく、あの人たちのイデオロギだつたのよ。』

何時間たつたか知らなかつた。すでに夜に近かつた。暮れると庭越しに聞こえて來る隣のピアノ。二月前からのドビユッシーの『トッカタ』がはじまつた。裏の通りで、犬が長く引つ張つて吠えた。

眞知子は腕を机の上に投げ出し、その一方に頭を載せ、凝然と硬く見張つた眼を、部屋の闇に据えた。もう泣いてはゐなかつた。涙で洗ひ捨てるには、悲しみはあまりに大きかつた。戀に破れただけであつたならば、もつと違つた感情で忍びえたかも知れなかつた。それと共に消え去つた生活の目標は、何ものに依つても償へない喪失であつた。彼女は二つのものを切り放して考へることが今は出來なかつた。寧ろ彼女に於ては一つの不可分な種子であり、根であり、成長であつた。

時計を見たいと思ひながら、投げ出した腕をスヰッチの方へ伸ばす氣になれなかつた。打撃は生理的にも來てゐた。動けばふら〳〵なりさうであつた。が、斯うしてゐるうち母が歸つて來るかも知れなかつた。この怖れが急に彼女を立ち上らせ、電燈をつけさせた。やがて八時にならうとしてゐた。彼女は茶の間まで行つて女中を呼び、自動車屋に電話をかけさせた。

『これから行つて來なくちや。——お客樣でおそくなつたけれど。』

この云ひ譯も、鞄までには役立たなかつたから、どこか遠くまで出掛けるのかと訊かれると、少しまごついた。遠くか、近くか、どこへ行くか、眞知子自身でも知らなかつた。たゞこの家根の下だけには留まれなかつた。

彼女は部屋には歸らず、茶の間の卓の上で、母の萬年筆と小使帳の紙を借りて書いた。

『お母様、お許し下さい。今夜私はうちを出ます。いづれあとから委しくは申上げます。御心配下さいますな。』

それを竪に二つに折り、茶棚の上に載せ、押へに中段の食籠を置いた。すべてが不思議な落ち着きでなされた。――自動車が來た時さへ、彼女は普通の外出と違はない平靜さで玄關にあらはれ、はめかけの滌手袋のボタンを、電燈の下で丁寧にかけた。

が、今時分から旅鞄を持つて出掛けるのを怪しむより、たつた一人にされる心細さで、小さく、悄げてゐる女中を見ると、眞知子は深い愛憐を感じた。

『お母様がやがて歸つてゐらつしやるともふけれど、淋しかつたら裏の爺やに來て貰ふといゝわ。――ぢや、さよなら！』善良な、少しぼんやりの女中に殘した袂別は、同時に今後にしつゝあるすべてに對する彼女の袂別であつた。

不意に何かの刺戟性のものが、鼻腔を襲うた。暗い前庭を、眞知子は急いで表の乘物に向つて駈けた。

夜の上野停車場。低く平べつたい屋根の下で、電燈だけ豐富に輝いた土間のバラックは、市場か、港町の船着場の上屋に似てゐる。たゞ買物の群集の代りにこゝには旅客の目まぐるしい運動があり、喧騷があり、岸壁を打つ波の代りに、適當な面積と、出入り口の區別を持たない廣場に渦巻く、自動車の奔流がある。

夜の街の家々は、光の連續した壁であつた。正面の上野の山の黑い盛上り。その背景の中に交る〲印刷される赤、綠、黃。なにか神祕に美しい仁丹の廣告塔。――本郷臺を山下へ、はづみのついたスピードで駈け下りた眞知子の自動車は、前

燈の發光で、相つゞく競爭者と青白く反撥しつゝ、廣場の奔流へ、一水脈として突入した。

運轉手が首を出し、赤帽を呼び留めた。渡された鞄と同じ角型の、がつちりした年配の男だ。あとに直ぐ飛び下りた眞知子に對し、鞄は預けるかと訊ねた。眞知子は頼んだ。

が、切符は。

「買つて下さい。」

「どちらまで。」

「××」

それなら出るところだ。――赤帽は金を受け取ると敏捷に職務を遂行した。三番のプラットホーム。八時四十五分、△△行。きれ地の文字を裏の電燈で黒々と浮かせた、掛行燈のやうな改札口の揭示クラブ白粉の赤いネオンサイン！驛夫はもう時間のないのを警告しつゝ鋏を入れた。あはてた旅客が一さうあはてゝ駈け出す、發車前數分の、他に較べやうのない、神經的な遽しさ。眞知子もまた、信玄袋を脊負ひ、朴齒の下駄を鳴らして飛び込んで來た東北訛りの若者について疾走しなければならなかつた。

ベル！　發車！

混んだ三等車の入口に、漸く乘りえた眞知子は立つてゐた。席がなかつたと云ふより、見出さうとしなかつた。彼女の握つたまゝの切符には、北の國の溫泉場の名前があつた。それは山瀨の任地に近かつた。が、赤帽に訊かれるまで、そんなところへ行く積りはなかつた。いま切符を手にしてゐてさへ決して。

急に或ることが殘されてゐる氣が強く生じた。それを果すまでは、東京を離れてはならない筈であつた。汽車は動いてゐる。もう間に合はなかつた。搖れる身體を、そばの老夫婦のかけてゐる席の凭りかゝりで支へ、苛立たしい後悔で、彼女は胸を板にした。そとには黒い夜が汽車と共に走りつゝある。不整に散亂する遠い灯が、すでに都會の圏外に出た時の旅人ら

しい顧望（かへりみ）をさせた。

につぽり！につぽり！　――常盤線行はお乘り換え！――

進行はしづかに止まつた。再びそれは東京ではないか。――愕然と、ありえない感じで、白く輝いたプラットホームを眞知子は見下ろした。と、立ち上つた數人が、急いで出ようとして身體と荷物で通路を塞いだ邪魔ものに打つ突（か）つた。彼女はドアから押し出された。つぎの瞬間には決然と、新たに乘り込まうとする冬を自分からすり拔け、長い脚の直線で外に飛び下りた。

敎室の窓は明るかつた。崖の横斜した樹木と、夜の暑い霜が、方形の火影に依つてうす白く輪廓づけられ、常は太陽の下で隱されてゐるものを、警戒なく表示してゐるかのやうに見えた。暗い病舍では、睡眠劑の利かない狂人がなにかうたつてゐる。かすかな水の音。坂に沿うた小溝にたまく〳〵流れ込む、同じ崖の上のもの持ちの、古い池からの逝け水であつた。

眞知子は暗い、ひそやかなその水を足もとに聞きつゝ、途中何べん考へたか知れないことを考へてゐた。米子が來てゐるかも知れない。――が、もう一度闘に逢ひ、二日前の狀態に極まりをつけることは、米子に對する（同時に自分自身に對しても）義務であり、私情ではなかつた。この理論づけが、普通かゝる場合に抱かせる逡巡を、彼女から拂つた。ゐたらいつそその方がよかつた。

念のため押して見た入口には鍵がかけてなかつた。そのまゝわざと高く踵の音をさせて入ると、向側の戶がそれに應じて開いた。戶の幅だけ、たゝきの上まで流れ出た光で、そこにある筈の女靴を見ようとした。黑い緒の古下駄の外には何んにもなかつた。

米子さん入らつしやらないんですか。――

眞知子は迎へた闘を板の間の上に見上げた。平氣で訊けると思つた言葉が、口に出なかつた。この停滯は、彼女が少し笑つてゐさへすれば、場合が場合で、男の愛撫への誘ひかけと間違へられなくはなかつた。闘もさう解釋したのか、それとも待た

された戀人の性急な發作であつたか、彼はものも云はず、行きなり彼女を兩腕で抓へ、横抱きにしたなり奥へ運び込まうとした。眞知子は短く叫び、身を悶えた。にも拘はらず、見たよりずつと强靭な腕の力は、彼女の感覺に快い痲痺を與へた。

『どうしたんです。』

そのまゝ下ろされようとした椅子から、精いつぱいの勢で振りきり、撥ね除くと、關の若く性的に笑つてゐた顔が、はじめて驚きに變じた。『なにを怒つてるんです。』

それには答へず、彼の前に直立した眞知子は、乾燥した重い聲で云つた。

『關さん。二日前のお約束で今夜うかがつたのだと思はないで下さい。それを取り消しに來たのです。』

『――』

彼の濃い眉が、瞼の上で縮んだ。

『あなたはまだ米子さんにお逢ひしないんですか。』

『――』

同じ短かい間のあと、關はその眉を動かさないで、狼狽するより腹立たしげに訊いた。

『君は逢つたのですね。』

『えゝ。』

『いつです。』

『今日の午後。』

『それでお互ひに何もかも饒舌り合つたと云ふんですか。――ふん。』

低い鼻音と共に、彼の左の肩を聳やかし、くるりと後を眞知子に向けて、彼は電燈のある机の方へ去らうとした。陰になつた黒い背中が、侮辱を一そう明瞭にした。

『そんな云ひ方を、あなたがしてよろしいんですか。』

危く持ちこたへてゐた平靜を、彼の意外な出方で、亂された眞知子は、前に立ち塞がつた。『御自分のなすつたこと考へて御覽になつたら。——それで平氣にそんなこと仰しやれるんなら、惡者です。』

『自分のことを善人だとも思つてやしないが、惡者だと云ふ意味は。』

彼女が激してゐるだけ落ちつき、不思議に闘々しくは見えないで、彼はつゞけた。『少くとも君に對してどんな惡いことを僕がしたんです。君は僕を好きだと云つた。僕を踏臺にしてブルジョアジーの圈を飛び越えようとした。僕も君は好きだ。君の飛躍に手を貸さうとした。それだけだ。』

『もつとも親切な人のすることだと仰しやるつもりなら、序でに、もう少し親切に、米子さんのことも話して下さる筈ですわ。』

『ぢや大庭に就いて、君が何か僕に訊きましたかね。——訊かれたら多分隱さなかつたでせうよ。』

この逆襲は、無防備な急所を衝いた。彼女の昂然と擧げてゐた頭が垂れ、眼は暗い床に落ちた。意識下の廻避でそれはあつたか。米子のことなぞ思ひ出しもしなかつたほど、それほど夢中であつたのか。——どちらにしろ、訊きもせぬ告白までさせようとする考へ方は、歴史であつた。

『併しこの機會に僕の氣持をはつきりさせて置くのもいゝかも知れない。——どうです。まあ掛けたら。』

言葉と共に彼は近づいて肩に手を置き、もう一度彼女を椅子に落ちつけようとした。それを振り切る力は眞知子に失せてゐた。

『覺えてゐませう。僕は努めて君を避けようとしたと云つたのを。併しそれはあの時云つたやうに、單に君のブルジョアジーが荷厄介なためでもなければ、大庭とのことがあつたからでもない。』

では何のためか。——が、妨げないで、わざと窓の方へ椅子をずらしてかけてゐる彼に、眼だけで詰問した。

『黨がすべてゞ個人は常に無であることを必要とする我々の生活に、最も個人的な戀愛を入れるのは、どんな形に於ても無理だ。それは考へられるでせう。確つかりしたい、奴が、そのためには脆くしくじる。同志で結ばれた間だつて、旨く行かない場合が多い。幾つかの例が僕を教訓した。今日までどうにか、羽目は外づさずにすんだのです。大庭とのことはぢやどうする、と君は訊くでせうが。』

前より嚴しく投げた彼女の視線に對し、閑は輕く瞬きし、椅子に突いた手でこめかみを支へた。半分だけ光線を受けて傾いた彼の顔は、そのまゝの角度で、向ふの壁の書棚を――米子の兄の遺物を見ることが出來た。

『嚴密に解剖すれば僕の大庭に持つてる感情は、亡くなつた大庭に對すると大差はないので、はじめからそれを一歩も出なかつたのです。勿論君に感ずるものとは性質が違つてるから、僕自身としては氣持に矛盾はない。必要ならいつでも打ち明けられるし、大庭も理解してくれると思つた。事實大阪に行つたことが我々の間に結末をつけたやうなものだから――』

『結末なら、あなたが考へてゐらつしやるより、』その時まで固守した沈默を、眞知子は抑制したしづかさで破つた。『ずつと確かな形でついてゐます。』

『どう云ふ意味です。それは。』

『五六ヶ月すれば、米子さんは母さんになつてゐらつしやると云ふことです。』

あまりに高い音波が人の聽覺に入りえないと等しく、この言葉は彼の理解力を超えてゐたかのやうに、閑はちよつとぼんやりした顔で眼を顰めた。が、つぎの瞬間その眼は擴がつて動かなくなつた。彼は椅子から立ち上り、一足眞知子に近づいた。

『大庭自身でさう云つたんですか。』

『ほかに誰が話せます、そんなこと。』

『併し――』

『今になつてそんな顔なさるの不思議なくらゐですわ。』

それには返事せず、組んだ手を後頸部に置き、闢は部屋を歩き廻りながら、獨語した。

『子供を持つてどうするんです。――誰が育てるんです。誰が見てやるんです。――僕にはそんな金もなけりや、暇もない。大庭だつて同じ筈だ。――それに何んて――』

この呟きを眞知子は理解しないではなかつた。彼等に於てそれが常識であり、自然であることをも知つてゐたに拘はらず、斯る事情に於て常にろこつに曝露する男性のエゴイズムの外、その時はなんにも感じなかつた。

『闢さん。』

彼女の呼びかけは、彼女だけでなく全女性のものであつた憎みで、慄へた。『女がひとりで母親になれるとお思ひになるんですか。あなたは望みもしなかつたことを、米子さんにだけ望んだのだと仰しやる積りなんですか。あなたはそれほど卑怯な方なんですか。――あのひとのお兄さんのやうにしか米子さんを愛さなかつたと仰しやるのからして、この上なく卑怯ですわ。』

闢は移動を止め、部屋の中央に立つて、一言答へた。

『たゞ、事實です。』

『ぢや、あなたが考へてゐらつしやるやうに、米子さんはあなたを考へてはゐらつしやらないのも事實ですわ。それはどうなさるの。』

眞知子は知らないで椅子を離れ、彼に迫まつた。『もしそれにも責任がないと仰しやるんなら。――いゝえ、あなたが今のあのひとを一と目でも見たら、そんな冷酷なこと決して云へない筈です。米子さんには私たちのことで死ぬほど苦しみながら、あなたを誹謗させないため、大阪へ引つ返してもいゝとまで仰しやつたのです。それほどあなたを大事がつてゐらつしやるのです。屹度あのひとはその通り實行したでせうよ。赤ちやんのことさへなかつたら。――』

家を出るまでに流すだけ流した、此處では激しい感情で却つて閉塞されてゐた涙が、急に蓋が取れたやうに溢れ出し、眞

知子の動いてゐる唇に生暖かく浸みた。

彼女は立つたまゝ短い嗚咽でそれを飲み込み、兩手を胸に絞つた。

『關さん、あなた方の運動が人間から貧乏をなくするやうに、斯う云ふ苦しみをもなくするのでなかつたら、結句何になるんでせう。どんな見事な組織で未來の社會が出來上らうとも、斯んな思ひで苦しむものが一人でも殘つてる間は、パンや着物で苦しむ今の世界が不完全だと同じに、決して完全な世界ではない筈です。』

『それが結論ですか。』

うわ手に、にや〳〵して、彼は覗き込んだ。

『さう考へたければ。』

『斷然逆轉だな。――寧ろ君には正當の復歸かも知れない。その觀念論が。』

この揶揄を、彼はもう笑つてゐない顏で嚴格に投じ、手だけ後に伸ばして椅子を引き寄せた。『――一つ考へて見て下さい。人間かパンや着物に苦しむやうに、君の强調するやうなことで誰も彼も苦しむと思ひますか。ないとは云へない。人間に病氣があるやうに、貧乏のない社會が來てもその種類の苦痛は、多分殘るでせう。併し個人的な、特殊の、限られた場合に於ける私事にしかそれは過ぎない。その日の民衆の勝利や幸福、それを實現させてゐる組織とは關係ない筈です。例へばこの資本主義の社會に於て、どの家かで誰かが齒痛に惱んでゐることが、一般の飢餓や失業や、ストライキと關係はないと同じで。――もしそれを何か關係があるやうに考へたり、一小部分の現象で、全部の構成まで否定しようとしたりするのは、過去の個人主義的迷妄ですよ。』

その時、彼は自らの正面過ぎた辯駁に氣がついたやうに、諧謔を交へて結んだ。『――齒の痛みは飢のやうに人を殺しはしませんからね。』

『打つちやつて置けると仰しやるんですか。』

緩和劑は無視された。喰つてかゝる。――日本語の持つこの形容詞の巧みさが、彼女の語勢と表情でその瞬間證據立てられた。『それがマルキシズムの理性なんですか。あなた方が口癖にしてゐらつしやる正しい認識と云ふのはそれなんですか。――假りにさうだとしても、あなたからそれを敎へられようとは思ひませんわ。』

『資格がないんですか。』

『歯を痛くさせたのはあなた自身ぢやありませんか。』

『――ぢや、君の理論に從つて、』彼はぶつ突かつて來る生徒を面白がる若い教師の餘裕で立ち上り、手を伸ばせば肩が摑めるほどちか／＼と寄つた。『僕も資格を主張しよう。――ねえ、僕等のことは僕等に解決させた方がいゝ。僕が大庭に逢つて話をします』

――何もさう君が躍起になるには及ばない筈だ。――云はれたより、云はれなかつた言葉の方が強く響いた。眞知子はちよつと肩を竦め、彼を見詰めたまゝうしろ下りに、自分の持ち場を捨てた人のやうに退いた。と、關はそれを追ひ、椅子が彼女を遮ぎり留めた時、その手を取つた。

『同じ理論からもう一度君自身に就いて聞きたい。――本統に取り消しですか。』

『もちろん。』

答へといつしよに振り切らうとした。さうさせないで、關は形のよい冷やかな鼻梁を、眞知子の興奮で赤く、なにか純眞に輝いた顏にさしつけた。

『覺えてゐますか。一昨日僕の云つたの。――いよ／＼となつた場合、常にどんな思想を持つてゐようとも、君は、寧ろ君たちは、細胞にこびり着いてゐる生活を捨てることは出來ない――』

『私は捨てた。』

『――』

『今夜家を出たのです。』

驚きの凝視で、關は廣い額を縱の皺できざみ、捕へた手に、もう一方の手をかけた。

『それで、僕との約束を取り消すとすれば、——捨てた家へ歸るんですか。』

『決して。』

『歸らなければ、どこへ行くんです。』

『——。』

『進むか、退くか、僕等に來るか、ブルジョア層に後戻りするか、方法は二つだ。中間に生きることの出來ないのは、君が十分わかつてる筈です。』

『いゝえ、分らなくなつたのです。何もかも。——わかつてるのは、あなたに隨いて行けないつてことだけ。』

『さうか。——ぢや、』

左の眼だけ心持ちすがめた、さうする時變に魅惑的になる視線で、二秒彼は眞知子を見詰め、手を放ち、一種輕快に云つた。

『左様なら。』

『——さよなら。』

高い踵を返すやうな歩調で、眞知子は靴下だけの足を急いで戸の方へ向けた。漠然とした危險の豫覺。——それ以上彼とゐる怖ろしさが彼女を驅り立てた。が、玄關に出ようとして、突き當りの帽子臺の上に無造作に置かれてた白い紙包にはじめて氣がついた。彼女の注文は忘られてなかつた。そこまでは十分達しない燈光が、一方のらつぱ型にあいた口から、群がり、押し込められた内側の花を、それぞれの色と形に於て照らした。ほのかな香氣。——花の匂は、すでに彼女に親しかつた、關の若い男らしい、精悍な、しめつぽい體臭をふと感じさせた。

二十分の後、眞知子はもう一度下車した驛から汽車に乘つた。彼女は眼を泣き腫らしてゐた。なほ拭いても〳〵涙が出た。隣にかけてゐたお爺さんが、田舍者の率直な同情から、なにか不幸なことで旅するのか、と問ひかけたほど。――彼女はうなづいた。さうして手巾をあてた顏を窓に押しつけ、今度は大つぴらに泣き續けた。

三

『アキルや、アキルや。――吠えるんぢやありません。郵便屋さんぢやないか。――ほんとうにお前は、この節見境ひがなくなつちまつたよ。ねえ、きいちやん。いけないアキルだことねえ。』

みね子は娘と玄關に立つて犬を叱る。彼女一流の決して效力のない叱り方で。――犬はだらりと舌を出し、横目で主人の方を見い〳〵、なほ表に向つて吠え立てる。――今度はその風をおかしがつて笑ひ、それからやつと土間に抛り込まれた封書と繪葉書を拾ふ。

『おや、お父さまからよ。――これは眞知子叔母さまのね。さあ、いゝ子だからきいちやん持つてつておあげなさい。お手紙ですつて。』

肝の強い、泣き蟲の、甘つたれも、機嫌のよい時にはそんな使ひが出來た。彼女は云はれた通り、封書の方を暑中休暇前から來てゐる若い叔母に渡すため、よち〳〵奧の部屋に駈けて行つた。

眞知子は北國らしく軒を深くした窓下のミシン臺で、それを受け取つた。兄の病氣で郷里の家に歸つてゐると云ふ米子からの、思ひがけない便りであつた。なにかの傳手が、眞知子の遠くない所在を彼女に知らしたらしかつた。三時間の汽車と二十分の自動車は、村の入口まで連れて來るであらう。一日前に電報を貰へば驛まで迎ひに出る。もう長くはゐないと思ふので、どちらにしても折り返し返事を待つてゐる。――たゞこれだけの、他に何んにも觸れてない手紙に、眞知子は却つて語るべき多くを持つてゐる彼女を、また三月前の出來事にも歪みを殘してゐない彼女の友情を、感じた。

眞知子はあり合せのレースで、姪のために拵へてゐた帽子をもう一度針の下に置きながら考へた。それにしても誰が自分のことを米子に傳へたらう。

そこへみね子が、隣市の夏季講習會に講師として出張してゐる山瀨が、明日は歸つて來ると云ふ知らせを持つて入つて來た。

『――でも、これどなたのことか知ら、ねえ。非常に珍しい人に宿で偶然出逢つたつて云ふの。』

『そんなこと書いてあつて。』

『ほら、讀んで御覽なさい。』

會場の中學校をコロタイプ版であらはした繪葉書が押しつけられた。云はれた通りの文字があつた。のみならず、山瀨はその人をどうかして誘つて來ようと苦心してゐた。

『東京の古いお友達だわ。もしかしたらA――さんかも知れないとおもふの。春休みに逢つた時、この夏は社用でこちらの方へ來なさるやうなこと云つてらしたから。屹度さうよ。斯んな時いつも私が當てるもんだから、山瀨がそれは驚くの。見てらつしやい。明日も連れてらつしやればA――さんだわ。』

眞知子は姉の不思議な能力を試驗するより、その前に出來れば米子の村に向つて立ちたかつた。山瀨が歸つたあとでは、この姉に殘すやうな簡單な說明では訪ねて行かれさうに思へなかつた。

が、話し出すと、みね子は正直な、それだけ無意識な身勝手を云つて引き留めた。

『山瀨の歸つて來るのが分つてるんだから、無理に明日立たなくたつて。――それにお客さまが一緖だとすれば、まあちやんゐて吳れた方が助かるんだもの。――校長さんの奧さんにこの間お逢ひした時もあんたのこと云つて羨やましがつてゐらしたのよ。あんないゝお妹さんがいらしてればあなたは樂隱居が出來るつて。あの奧さんお子さんがないから、きいちやんに世話の燒けることは分らないのよ。でもその他のことぢや、全く私まあちやんのお蔭で樂をしてるわねえ。――さう云へ

ば夏座布團のカヷァ、洗つたきりぢやなかつた。明日いるかも知れないから、ふみに手傳つてアイロンかけて頂戴よ。――ふみや、ふみや。――」

どこでもゐる場所から、動かないで、せいいつぱいの高い聲で、みね子はいつも女中を呼ぶ。返事のないのはだるい八月の午後の居眠りである。が、氣のよい主婦は怒る代り、小さい娘に眠つてゐる耳を引つ張らせる樂しみでにこ〳〵して、二人でそつと足音を忍ばせて女中部屋に行く。

×――溫泉での不意な、數日間眞知子を夢中にした高度の發熱が、隱してゐた名前を知らせ、義兄の山瀬を驅けつけさせてから丁度三月たつた。どんな暮らし方を此處でしようとも、東京へ引き戻されるよりはましであつた。寧ろ眞知子は、曾つてない謙遜さで彼等の生活に從つた。秋の新學期から、縣下の女學校に教師の口が見つかりさうであつたのも、現在の彼女には一つのわづかな希望であつた。

明けの日は近ごろになく暑かつた。街の外輪を青い塀のやうに周つてゐる山の上に、棒狀の雲が立ち、晴れた空で遠雷の音がした。雷嫌ひのみね子は朝から蒼い顏をしてゐた。彼女の特別の神經は今日がどんな日であるか知つてゐるらしかつた。併し晝過ぎる頃までは空氣はます〳〵熱く照りつけ、崩れた雲が、白い獸皮の如く、低い層を重々しく光らして浮動した。

山瀬はその日盛りを歸つて來た。

彼の自動車が、門にかぶさつた合歡木の葉の陰に停まつた時、眞知子は裏口で杏子を乾してゐる女中に手を藉してゐた。みね子はけたたましく妹を呼び立てた。その聲で山瀬ひとりではないことを知つた。併し白い料理着をかなぐり捨てたまゝ、氣輕く庭から廻らうとして、眞知子は既に降りて乘物の外にある山瀬と、つゞいて降りようとしてゐる河井の、灰色の夏服と、同じ色の輕やかな帽子を見た。どうして斯んなことが起こり得たか分らなかつた。山瀬の常識は當てにしないとしても、彼女の滯在してゐる家を河井が訪ねて來る筈はなかつた。それを打ち明けないで誘つて來たほど、幾ら山瀬でもそれほど無

考へであつたらうか。

これ等の疑惑は、素早く裏口へ引つ返し、改めて玄關で待たうとした間に抑へつけられた。眞知子は姉のひとり極めにしてゐたA――氏で本統にあつたかのやうな平靜さで、その客を迎へることが出來た。それに比べると、河井は表面彼らしい落ちつきを失はなかつたに拘はらず、彼女の短い挨拶を受けた時、旅行で少し日に燒けてゐる顏の色を濃くした。彼は自分のぶしつけな訪問を意識してゐた。

併し山瀨とみね子は、無邪氣な接客の悅びで夢中になつて、二人の置かれてゐる位置に就いては忘れてゐるやうに見えた。

『ほんとうに私、河井さんがこちらにゐらしてるなんて考へもしなかつたから、多分A―さんにでもお逢ひしたのだらうつて話してましたのよ。ねえ、まあちやん。』

『默つてお連れして、お前たちを驚かしてやらうと思つたのだ。』

『ひとの惡いお父樣。ねえ、きいちやん。――』

今度は小さい娘までを話仲間に引き込みながら、みね子はつゞける。『あんた覺えてまちよう。このをぢ樣。東京のお祖母樣のとこから、ごいつしよに汽車ぽつぽで歸つたの。――』

この旅行中に示した彼の謙讓が、眞知子の想像以上に彼等を近づけ、親しませてゐるらしかつた。これは少くとも山瀨に取つては一つの名譽感でもあつた。同時にそれを反影し、その親近を發表する方法としては、絕えず話すこと、何か口に入れるものを勸めるより外には知らなかつたから、夫婦はこれ等のお饒舌の間あらゆるものを彼の前に並べ立てた。冷たいお茶、麥湯、菓子、裏で乾してゐるのと同じ樹からとれた杏子の砂糖漬。同じ手製のもので、この田舍の山に多い野葡萄を搾つて拵へた葡萄酒。――純粹で酸味の勝つたこの果汁は、わづかなシャリベッと氷水で淸新な旨い飮みものになつた。河井が褒めたら、山瀨は何杯も强ゐて彼を困らした。

山瀨自身はあんまり水を割らないで飮んだため、さう多くない筈のアルコホル分に作用され、取つておきの願望を無遠慮

に持ち出した。ひとつ書齋を見て貰ひたい。――尤もその部屋の方が山の眺めもよければ涼しくもある、と云ふ口實があつたので。

　障子を洋風の硝子窓に變へただけの八疊。出入り口の唐紙を殘して、すべての壁面が書物で舗裝されてゐた。田舍の高等學校の、それも大して金のない敎師の持ちものとしてはたしかに不似合に豐富なこれ等の藏書には、或る歴然たる特質があつた。それは彼の專攻の學問を明示する以外に、過去二三十年の間、つぎ／＼に日本に流入した雜多な思潮や藝術を、完全に痕跡づけさせることが出來た。ニイチェ・オイケン、ベルグソン、タゴール――これ等の超現實主義や觀念論が最近の社會科學の唯物史觀をしんがりとして同じ壁に並んでゐた。またマーテルリンクが、イブセンが、ストリンドベリが、ドストエフスキが、トルストイが、――この文豪の故國の社會組織の變革と共に發生したプロレタリア作家の一二の代表作といつしよに他の壁にあつた。丁度女の簞笥に貯め込まれてゐる着物や、帶や、裝身具が、過去の流行の色、模樣、型を示すやうに、――同時に時々のはやりものをおくれずに買ひさへすれば、一々は身につけなくとも、彼女等が安心し、なにか美人の仲間入をしたやうに信じ込むと等しく、讀まなくとも、これ等の書物を飾つておくだけで、山瀨は時勢に遲れない學者の自信と滿足を持つた。

『斯う云ふ慘憺たる狀態でして。』

　周圍の洋書の重みで聲がまるく盛り上つてゐた。それを卑下の言葉で誇りながら、生徒たちに訪問された時與へる椅子に彼を招じた。『根太が落ちはせぬかと、大屋の方ぢや心配してるらしいんです。』

『なにか簡單な板でも張らせるとよろしいんですね。』

『それに越したことはないんですが、――尤もこの學校の敎師で一生終るつもりなら僕も大改善をやりますがね、まだどうもその氣にもなれないものですから。――實はこの冬も臺灣大學の方へ殆んどきまりかけてゐたやうな次第でして。ねえ、眞知子さん。』

小さい卓の上に、座敷で勸めたものをもう一度運ばされてゐた眞知子は、彼の言葉が出騒目でないことを證明しなければならなかつた。

と、河井は彼女の方へ椅子の身體を少しふり向け、彼等が上京してゐた時のことでそれはあつたか訊ねた。

「え丶、あの時。」

「さうです、上京中のことなんです。」

眞知子の返事に、山瀨は急いで自分も續け、當時の夢の切れつ端を眼鏡のかげで追うた。「殘念でしたが、つぎの機會には優先權を持つてるわけですから、まあそれを待ちますよ。」でこぼこの聲で押し通してるのもそのためなんでして。――併し思ふに書齋は、あなた方のやうに豪奢な生活に馴れてゐられる方は別でせうが、我々の如き貧乏な學徒に取つては簡素なほどい丶ですね。寧ろ必要です。それに就いて思ひ出すのは、御存じのエッケルマンとの對話の中に出て來るゲーテの青い椅子の話ですが。」

「青い椅をゲーテがどうかしたのですか。」

「たしか競賣かなんかで買つたんですが、自分の書齋には、青い絹のその椅子が贅澤すぎて落ち着けなくなると云ふのです。黄金のインク壺からでも平氣に書けた筈のゲーテにしてこの言葉があるかと思ふと、一さう深い意味を感じさせられますからね。――」

一度去つて、また引つ返して來た眞知子は、山瀨の最もたのしい話を邪魔するのを五十秒延ばした後、校長の宅から小使が迎へに來てゐることを取りついだ。

急に、山瀨は彈かれたやうに机の前の彼の椅子から飛び上り、ちよつと茫然とした顏をし、それからあはてた早口で、どもつて云つた。

「すぐ、すぐ伺ひますと云つて下さい。」

やかましやの、禿げて、黄色く、萎びた老校長のクロッス・アップは、ゲーテも青い椅子も一瞬に消滅させた。が、河井も同じく立ち上つて別れを告げようとすると、彼は飛んでもないと云ふ風に首と手を同時に振つた。

『ほんの三四十分もすれば歸つて來ますから、どうぞお待ち下さいませんか。今日は是非ごゆつくりして頂きたいので。――』

河井は連れの者と夕方までには落ち合ふことになつてゐるのと云つた。

『それにしてもまだ三時を打つたばかりですから。――實は今度の講習會と云ふのが、思想善導の意味で校長が熱心に肩を入れてゐたので、誰かに僕の歸つたことを聞いて樣子を知りたがつてゐると見えます。斯んな時おくれるのを非常に嫌ふ方でしてね、どうもすまじきものは宮仕ですよ。』

鼻に皺を寄せ、おどけた苦笑ひをして見せながら、併し、序でに考古學研究會に屬してゐる同僚のB――君を引つ張つて來よこと彼は語つた。『校長の宅のすぐ近くです。あなたの見えてることを知らせてやればどれほど悅ぶか分かりません。相變らず方々掘つてゐるやうで、先達は石枕の珍らしい型を、この近くで丸塚と云つてる古墳のあとから發見したらしいのです。恐らく會の方へも報告したことと信じますが。』

『さあ、如何でせうか。僕はまだ聞いてゐません。』

『ぢや一さう悅んで來ますよ。ですから是非お待ち下さい。』

山瀨はひとりでそれに極め、入口から座敷の方へ向つて、細君のみね子を呼び立てた。ねこ、ねこ、ねこと聞こゆる彼一流の呼び方で。――『どうしてゐるの。皆んな引つ込んだきりで。――お客さまに失禮ぢやないか。』

この呼び立てに應じ得たのは前と同じく眞知子だけであつた。

『何をしてゐるのです。みね子は。』

『ちよつと。』

彼女は濁した言葉を微笑で償つた。

書齋の窓にあつた山は半分存在を失ひ、空は鐵色に黑ずみ、雷は腰強く近づきつゝあつた。急に濕氣を加へて吹き出した風が、裏の杏子の甘酸つぱい香氣を運んで來た。

いち早く蚊帳の中に、小さい娘と共に入つてしまつた姉を、眞知子は正直に傳へることは出來なかつた。

山瀨が出掛けて三分しないうち、雷鳴は驟雨を伴なつて眞上に來た。ぶつ突かるしぶきで、窓硝子は冬霜に凍つた朝のやうにまつ白になり、電光がそれを引き裂いた。家は激しく音波の中で、海にある船のやうに搖れた。

河井も眞知子もしばらくは默つて、目の前の自然の盛んな躍動に注意を集めた。

「かみなりは。あなたはお怖くはありませんか。」

「それほどには。」

「お強いんですね。」

「でも、落ちれば厭です。」

河井は瀧のやうな音の中で、いつになく聲を立てて笑つた。糸ぐちがよかつた。それに低い聲では雨に打ち消されるので知らず〳〵高調子になつたのも、彼等の會話を、その關係にこだはらせず素朴に、寛がせた。

「御旅行は。會の方のお仕事。」

眞知子は訊いて見た。まだよく知らなかつたことを知らうとするより、半分はその調子を崩すまいとする骨折で。

「いや、さうではありません。この奥に、親戚で牧畜をやらしてゐるものがゐまして、そこへちよつとした用事があつたものですから。」

「□□牧場のことでせうか知ら。」

「さやうです。」

□□牧場が河井一家の出資になる模範的な牧場であることは眞知子も知つてゐた。

『たしか私のまゐつた頃までは、この邊でも牧場の牛乳を配つて貰へたやうですわ。』

『只今でも冷却裝置を旨くすれば十分配れると思ひますが――

そこまで云ひかけ、河井は急角度で話題を屈折させた。『こちらへはまだお長くゐらつしやいますか。』

眞知子は餘計なことを口にした悔恨で、丁度電光が閃いた間だけ默り、つゞく聲の底から無遠慮に突つぱねた。

『まだ極まつてをりません。』

河井の赤くなつた首が、清潔なまつ白い襟を際立たした。この羞恥感は、却つて一度釋明しなければならなかつたことを促し立てた。彼は今日の突然な訪問を先づ詫びながら――

『お訪ねをする資格は、私には既になくなつてゐる譯ですが、實は近いうち、またあちらへ參ることになつてゐますので、この機會にお暇乞ひをさして頂ければと存じて――』

一さう完全な結末がそれでついたと云ふ感じと共に、眞知子は彼の外國行が羨ましくないことはなかつた。彼女自身にしても、そんな自由がもしあつたならば、この田舍で、女教師の口を待ちつゝ、留まらなくもすんだであらう。

『今度もイギリスへ入らつしやるのですか。』

『今度は他の國の方が主になるだらうと思ひます。幸ひ姉が連れ合ひの任地から歸つてまゐつて、當分母と暮らしてくれるやうな話ですから、出來るだけ方々を廻つて見ようと思つてゐるのです。』

『たとへば――』

約一ケ月前の新聞紙で見た、彼によく似た×――國駐在の大使夫人の、二人の子供と家庭教師の外國婦人を連れた歸朝の寫眞を、記憶のカードから拾ひあげながら、眞知子はつづけた。雷は間を加へたが、雨は衰へなかつた。それを冒しては山瀬も歸れないとすれば、便利な話題を大事にする必要があつた。

河井は見殘した歐洲の二三の地方と中央亞細亞をあげた。歸路にはロシアに出て、そこに滯在する積りだと云つた。

『ロシアがあなたの研究に、なにか役立つものを持つてゐるのでせうか。』

『さうお考へになりますか。』

『少くとも現在のロシアは。』

『ところが事實はさうでないやうです。』

彼はおだやかに否定しながら、『モスクワの前史學會の會長は、ラベ・ブロイ教授の弟子で、なか〳〵精力的な學者ですが、最近に貰つた手紙に依りますと、蒙古で大規模な發掘を計畫してゐるらしいのです。』

『お親しくなすつてゐらつしやいますの。』

『いつしよに北歐を歩いたりしたことがあるものですから。歸りには是非ロシアに廻れ、その頃には自分たちの蒙古の仕事も緒に着くだらうから、それを見て行けと申してまゐつてゐるのです。ソヴィエット政府も、革命直後と違つて、斯う云ふ種類の學術的事業にこの節は力を入れるやうですし、またさうなるとスラヴ流に思ひきつたことをいたしますから、今度の發掘も立派な效果を擧げるだらうと思ひます。』

河井は、昨年の冬彼の新しい研究所で、同じ主題に就いて語つた時と同じ熱情を以つてこの時も語つた。彼の焦けた顏は、帽子の下だけ鮮明に白くなつてゐる額や。旅行で精力的にされた表情と共に、常の河井にはなかつた活き〳〵しさで生氣づけられてゐた。眞知子は誰か別人を發見したやうな珍らしさで、快活な唇の内側に光る齒を眺めた。さうして云つた。完全な準備と十分な資金でそんな仕事が出來たら、何んと愉快であらうと。

『發掘とは別ですが、ヘヂン博士の蒙古と西藏の映畫、御らんになりまして。』

『いや、見たいと考へながら。』

『庫倫を立つ時でしたか、何百頭と買はれた駱駝に支拂つた夥しい銀貨や、その駱駝が天山の奥地へつけて入る山のやうな物資が映されてゐますの。あれを見てゐると、あゝ云ふ仕事は人より準備だと云ふ氣がいたしますわ。』

『或る意味からはさうも申せませう。その上に立派な指導者を得れば一さう理想的に行はれる譯です。今度のロシアの計畫もその點で十分期待し得ると思ふのです。』
『ぢや、是非まはつて御覽になるとよろしいのね。』
彼女の勵ましを、河井は耳よりは舌の上で受け取り、美味を味ふやうに、間をおいて云つた。
『さうまで熱心に仰しやつて頂けるのは意外でした。』
『――』
『この春までは、あなたは斯んな仕事に對しては――』
『土の下のことだから、馬鹿にしてた筈だと仰しやるのですか。』
河井はよは〳〵しい當惑で赤くなり、彼女を眺めた。併し眞知子の厳しい言葉は、彼よりも寧ろ自分自身に向つて放たれた。同時に彼よりも自分自分にその變化を説明しようとする調子でつゞけた。
『そんな生意氣なこと、今では思つてはゐませんわ。どんな仕事だつて、高い目的に結びついてさへゐれば、値打に變りのないことを知つたのです。漸くこの頃になつて。』
『併しどちらを採るかの問題になれば、あなたとしては矢張り土の上の世界をお擇びになるだらうと思ひますが。』
『それは勿論ですわ。ですから私があなたでしたら、ロシアへ廻るにしても蒙古の發掘よりかあの國に造られてゐる新しい社會を見る方がたのしみです。私たちには理論だけきや分らないものが、あすこでは模型になつて出來上らうとしてゐると云ふ氣がいたしますわ。私疑ぐり深い性分ですから――』
云ふ如く彼女を最近に於て一さう懐疑的にしたものの追憶が、兩方の眼を貝形につぼませ、下端で裏おもての睫毛を絡み合させた。が、つゞく瞬きですぐ彈き捨てようとしながら『話を聞いただけや、書物を讀んだだけでは承知出來ないのです。自分でたしかめた上でなければ。』

『我々が發掘に重い價値をおくのも、云はば同じ心理かと思ひます。それに依つて推測がはじめて實證される譯ですから。』

『丁度掘り出された破片をあなた方がいろ〳〵と研究なさるやうに、たつた一つの珍らしい世界の模型を、私はそばに寄つて、自分の眼ではつきり見たいのです。構成や組織に手を觸れて見たい、今まで困つてゐた人達が困らなくなり、一人殘らず仕合せになる筈の理論がどの程度まで活かされてゐるか、その美しい理論を生かす力をほんとうに人が持つてゐるか知りたいのです。どうかしてそれを信じたいのです。たしかに信じさせてくれる見本をあすこで見つけたいのです。』

東京を遁げ出して以來、ほかの事は何んにも考へなかつたと云つてもよかつた主題は、話してゐる間に知らず〳〵一つの烈しい願望となつて燃え上つた。彼女は誰を相手にしてゐるか忘れた。この眞摯な打ち明けが、二人の間隔を俄かに壓縮し河井をして、さきの日の强固な拒絶にも捨てえなかつた念ひを、もう一度口に出させたほど近々と彼女を感じさせた。親愛な同伴者として、彼女を執心の土地へ連れて行くことを考へただけでも、甘美な夢であつた。

『たゞ、この際斯んなお話をいたすのは、機會に乘じるやうで心苦しいのですが。』

たしかに、彼の頰にのぼつた血の色の一半はその辛い意識に發してゐた。『あなたがこの春、お洩らしになつた私の環境に就いての不滿は、外國の生活で容易に救はれるでせうし、また私自身の仕事に對するお考へも、あの時分とは幾らかお變りになつてゐらつしやるやうですから――』

雨が小降りになり、風が吹いた。窓の向ふの若い一本のどろ柳が、風の方向へ、上にむいた枝ぢう、束になつて靡いた。濡れた裏葉が、白い煙のやうに流れるのを見る眞似して、彼の視線を避けてゐた眞知子は、その時庭から眼を返し、彼を遮つた。

『變つたのはそれだけではございません、いろ〳〵の事情が、あの頃とはすつかり變つてしまつたのをあなたは御存じないのですわ。それでそんなことをお考へになるのですわ。』

『事情がどうお變りになつたとしても、そのためにこの望みを捨てようとは思ひません。』

『たしかに。』

『誓つて。』

『ぢや私が誰かと結婚してゐたとしても。』

河井の面は色素を失つた。

『ほら、そんな顔なさるでせう。』

眞知子は左の眼だけで意地悪く笑ひ、唇の隅を曲げた。『本統は結婚したのぢやありません。しようとしたのです。いゝえ、半分結婚したと云つてもいゝのです。』

『併し――』

『もつと申しませうか。』

眞知子の感情は炎症を起してゐた。痛い局部にメスを當てないではゐられない潔癖が、一種むごい快味と交ざり合つた。

『その人と結婚するため、私は家を飛び出したのです。結婚とともに實行運動の仲間入りをするつもりでした。或る出來事が私を追ひ立てなかつたら、今もその人といつしよにあなた方を敵にして、ひよつとしたらあなたの一門の工場か會社で、直接戰つてゐたかも知れませんわ。――斯うお話すれば、その人が誰であるかも多分お分かりになる筈です。』

河井の顔には再び新鮮な輝があつた。眞知子の思ひがけない告白は、彼を一旦驚かしたあとは却つて深まつた情感で包み、希望を新たにさへさせた。少しも關心を持たうとしない相手に、これほどのことを彼女が話す氣になるだらうか。――言葉のきれるのを待ち、彼はきつぱり云つた。それはすべて過ぎたことだ。從つて婚約者が誰であつたにしても自分には關係がないし、同時にまた彼女の思想的傾向に就いても、怖れや不安を感じはしない。――

『地上の問題は、私たちのやうな仕事と違つて、少し眞面目に研究しようとすれば當然その思想に突き當たるのでせうし、それを乗り切ることは現在では容易ではないのですから、あなたがその方へ深入りをなさらうとした氣持も、不自然とは思

つてなりません。』

『では、思想そのものは。』

膝の上で、彫のある洋銀の小さい火附器をおもちやにしてゐた眞知子は、がちやと急に卓にそれを返し、しづかな黒瞳で見あげた。『私に怖れも不安も感じないやうに、それに對しても何んにも感じないと仰しやるつもりでせうか。』

『それより、生ずべきものが生じつゝある、と云ふ氣持の方が強いのですね。個人の力や、權威ではどうすることも出來ない、たとへば若い地球が氷河に蔽はれる時のやうな。――』

『その氷河があなたの持ちものを皆んな壓し潰す日が來ても。――さう落ちついてゐらつしやれて。あなた方の地帶が、一番ひどく荒らされる筈ですが。』

『併し私の仕事まで壓し潰しはしないだらうと思ひます。どんな社會でも、自分たちの過去をはつきりさせる願望を捨てはしないでせうから。斯んな偉さうなことは云つても。』

日光が庭樹のしづくの間から、俄かに潑剌と輝き、額に直射した。彼は眩しく細めた眼で、なにかしめやかな感情を追ふやうにちよつと默つてから『その運命を素直に受け取れるかどうか、その時にならなければ分かりません。存外見苦しいあはて方をしさうな氣もいたしますね。正直なところは、當分何事も起らないで、やりかけのものを落ちついて續けて行ければ、それが私には仕合せなのです。意久地のない、身勝手な考だとお思ひになるでせうが。』

たしかに三月前の眞知子であつたならば、云ふ通り考へたであらう。もつと非道くさへも。――が、その場合の彼女は、云ひながら優しくもの憂げに微笑した河井に、人間としての眞實を見た。眞知子は率直に傳へようとした。他の英雄的な宣言より、その打ち明けの方が彼らしく、自然に響くと。――

そこへ不意に唐紙があいて、娘を抱いたみね子があらはれた。二人はほんとうの戀人同士のやうに、かすかに狼狽し、彼女の多分蚊帳の中でうたた寝してゐた、腫れぼつたい顔へ振り返つた。

四

稻、馬鈴薯、甘藍、黍、林檎。――

午蒡、トマト、黍、瓜、林檎。――

たまく〵まるい丘陵、村落、森、馬の放牧、△△川の白い支脈。これ等でわづかに變化づけられてゐる、山のない、××平野を突つ切つて、汽車は進んだ。

林檎。――林檎。――旅人をしてまさしく陸奥にある念ひを根深くさせる果樹が、窓の左右を汽車といつしよに馳けた。高い枝と灰綠色のしなやかな葉の間で、實は新聞紙をかぶつてゐた。

話だけで知つてゐた、世話の燒ける袋掛を、眞知子はこの夏思ひがけず親しく見た。それより二月早い、白色の青く匂つた、淸雅に可憐な花をさへも。――

前に掛けた、アイヌ型の首をした二人連れが、眞知子にはまだ半分外國語である土音で、八甲田山の雪中行軍の昔話をしてゐる。

彼女は左の耳だけそれに貸し、窓際に顏を寄せてゐた。遠い耕地を限る、薄い藍の、なにか透明な礦物質の如く輝いた空。その全面に反射し、屈折してゐる午前十時の若い日光。いづれも北の國の早い秋を感じさせた。林檎が袋を去り、放たれた豐滿な成熟を誇る日もやがて間はないであらう。稻が刈られ、馬鈴薯が掘られ、甘藍が取り入れられ、その林檎でいつぱいにされた貨車が中央市場に向つて走り去る。殘された空つぽの、黑々とひろがつた北邊の耕地が、待つものは雪である。林檎の花とともに、雪をもこの土地で見ようといつか考へたらうか。

眞知子の淡い感慨は、二日前の河井との不意な會見に必然的なつながりをつけた。彼は夕方歸る時、明日の訪問を約束した。山瀨と同僚の素人考古學者は、石枕を掘り出した古墳に案內しようとしてゐた。

が、明けの朝非常に早く、同行の書生が、東京からの電信で河井がすぐ歸京しなければならなくなつた旨を知らせて來た。書生はまた、丁度玄關に出た眞知子に彼からの手紙を手渡した。もう一度彼女に逢へないのはこの上もなく殘念であるが、すぐ引き返して來るつもりである。その間に彼女も彼の再度の申込に就いて、この春よりは多分親切に考慮してくれると信じるから、希望を持つて立つことが出來る。——愼ましく、飾り氣のない言葉に、愛が充ちてゐた。それより急いで書いたと見え、行が不揃ひで、字もむしろ下手であつたのが、彼らしくない意外さで、却つて親しみを感じさせた。

前の二人は、八甲田山の話を、風呂敷から取り出した一包の餅に代へた。多分兵士であつた昔の彼等自身の如く勇壯に運動する二つの鬚だらけの顎を横から眺め、眞知子は考へた。

私を秘書に雇つてくれないか知ら。それならすぐ承諾してもいゝ。外國へ行つたら、月給だけのことは十分働いてあげる。——

この空想は出鱈目ではなかつた。河井ならば、正常の距離と禮儀で、雇傭關係を危惧なく守つてくれさうな氣がした。それにしても彼等の契約と旅立はどんなに人々を仰天させるであらう。田口夫人の粉つぽい、白い大きな顔を思ひ浮べただけでも、堪らなくおかしくなつた。

と、小柄な、前頭部に創痕のある方が、餅を頬張つたまゝ、上眼でじろりとこつちを見た。勘違ひをしたのだ。眞知子は急にはづかしく、氣の毒で、座を立ち、網棚のバスケットを下ろし、彼等を後にして、散らかつた雜誌や新聞の始末にかゝつた。降りる筈のつぎの驛まで五分とはなかつた。汽車は粗く上下動で搖れ、速力を加へた。

來てくれたらうか。注意された通り電報が打つてあつた。眞知子はもう掛けないで、やがてあらはれて來た意外の、城下町の入口らしい前景を眼で迎へた。工場のトタン塀、煙突、化粧品を手にした及川道子、堀割、黄色い瓜を積んだ小舟、游ぐ子供、家鴨、西洋洗濯屋の高い乾場。並んで、小さく、歪んでゐる家、家、家、家。——

汽車は船べりを横にし、岸へ近づいた船のやうに、プラットホームの縁をしづかに辷り込んだ。

米子はブリッヂの下で、青い洋傘をあけて合圖をした。その前を眞知子の窓は五六間通りすぎたので、追つかけて來た。もう洋服は着てゐなかつた。多分田舍の紫外線で急に焦がされた彼女には珍らしい頰の色と共に、その一事がまつ先に眞知子の眼を引きつけた。

一九一五年より新しくはないフォード。それでも派手な縞シャツで、鳥打の廂を伊達にうしろかぶりにした運轉手は、彼等を見つけると急いで戸を開けた。

通る部屋も通る部屋もおそろしく廣かつた。がらんだうで、疊がぼこ／＼で、埃りと、黴と、穀類の粉つぽい匂がした。それにひどく暗かつた。その暗さは、昔風の大きな建築が持つ採光の不用意だけではないことが、廊下に出ると分つた。八月の眞晝時に、岩丈な雨戸が、なにか拒否的な重々しさで締めきられてゐた。二三枚置きについた、雪國特有の小さい明り窓。わづかにその隙みから投げてゐる微光をたよりに、眞知子は米子に従ひ、荒れた板の通路を何遍か曲つた。

「迷ひ子になりさうね。」

「足もとに氣をつけないと落つこつてよ。ほう／＼腐つてるから。」

急に明くなり、池のある庭があらはれた。離室になつた、いくらか新らしい、昔の立派さが十分殘されてゐる客間が、彼等を迎へ入れた。

「こゝだけなの、やつと部屋らしい形してるのは。」

それでも雨じみを遁れてゐない壁を、米子は茶道具の載つた卓から、眺め廻しながら、「斯んなぼろ家つて、想像されなかつたわね。」

「あんな廣い部屋を、いくつも何に使つたかとおもふわ。」

「廣すぎも、多すぎもしなかつたのよ、以前は。きようだい達が家族でみんな住まつてゐたし、祖父の代からの政黨關係で、

よそからの客は絶えないつて風だつたから。私の覺えてる頃だつてどの部屋へ行つて見ても人間で、いちんちざわ〳〵してたものなの。」

それだけの人間が、ではどこへ消え失せてしまつたらう。それが昔の話だと云ふなら、彼女の病氣の兄は。家族は。門の前で自動車を下りた時、坪庭でなにか雜穀を乾してゐた白髪の雁男を見たきり、眞知子は誰にも出逢はなかつた。あの多くの部屋を通り拔ける間だつて、話聲も、もの音も、人間がそこに住まつてゐることを證明づけるほんのかすかなしるしをも、捕へることは出來なかつた。そのしづけさは、しづけさを超えてゐた。たしかに何かの力が、大きな眞空の筒に家をしてゐた。

やつと、別の方の廊下から足音が近づいて來た。女中が水を運んで來たのだ。黒い縁のはまつた、赤塗の、蓋までついた水桶であつた。古風なこの用器は、はじめて現はれたものを見ると云ふ感じと共に、きめの細かな睫つ毛の小女まで、なにか珍しいひとのやうに眞知子をふり向かせた。

「お風呂は駄目らしいつて。」

「え丶。」

「仕樣がないのね。」

久しく使はない客風呂が洩るのだ、と云ふ意味を眞知子に說明してから、米子はもう一度女中へ、「それならお風呂はよいから晩御飯を早くするやうに。お客さまは汽車のおひるですからつてお久さんに云つて頂戴。」

お久さんはひる寢してゐる。低い聲でさう答へたらしかつた。

「お兄樣は。」

旦那樣もさつきお醫者樣が見えたあとで、これもよく眠つてゐる。――

「ぢや、お久さんやがて起きるだらうけれど、起きなかつたらさう云つて起こすの。分つた。」

眞知子は控の間においたバスケットから洗面器を出してゐた。二人の話がかすかな好奇心なしではなく耳に留まつた。そ

の三人稱の呼び方には、普通の雇女とはちがつた、勿論また嫂ではありえない特殊のひゞきがあつた。と、米子も親しい客に反映したものの内容をはつきりさせておかうとするやうに。女中を去らせると、眞知子が水を汲んでゐる濡れ縁に寄つて行つた。
『嫂が、この春から東京のうちへ歸つたきりなの。』
牛込あたりの富裕な地所持から嫁いだひとであることは、眞知子にも豫備知識があつた。
『離婚。』
『結句そんな事になるのね。』
『わけは。面倒なの。』
『それが、――』
鉢前に、渦になつて吸ひ込まれて行くしやぼん水を見詰めながら『結婚した時分は父も貴族院で東京に家もあつたし、兄は學校を出たばかりで歸つて來なくもよかつたでせう。嫂の方ぢやいつまでもその氣でゐたのが約束が違ふと云ふのも不平の一つなの。もと〳〵田舍に住める人ではなかつたし、殊にこの頃の田舍はあの人には理解されないのだから。あれだけ父の頃までは意張つて、贅澤をしてゐられて、どうして今出來なくなつたか、それが分らないのだから。このまゝ田舍で暮すことは、あの人には死ぬのと同じなのよ。』
『それだけの理由で、とにかく今日までいつしよに生きて來た夫を、離れて行けるものかしら。』
『噂はいろ〳〵あるけれど、それを云へばお互ひなの。兄にだつて、ひけ目がない譯ぢやないんですもの。』
眞知子は汲み換へた洗面器に顏を浸け、まだ煤煙のついてゐる氣のする瞼毛を、水面でぱち〳〵させた。彼女は、この古い家のどこかに隱されてゐる一つの女の顏を想像して見た。

小さい女の子が紙風船をついてゐる。綠と赤を紡型にはぎ合せたきれいな風船。日光が、こめかみで切つたおかつぱと風船を麗らかに照らした。明るいのはそこだけで、あたりはうす暗く、その中を人が脅えて驅け廻つてゐる。何か大變なことがはじまらうとしてゐた。逃げなければならなかつた。眞知子も逃げて行かうとした。足枷をされてゐるやうで自由が利かなかつた。それに女の子を殘しては行かれないのであつた。が、女の子は平氣に風船をついてゐる。そこだけにある日光が、こめかみで切つたおかつぱと風船を麗らかに照らした。人波を掻きわけ、やつと近づいて連れて行かうとすると、女の子は風船といつしよに急にぽかりと空に浮び上つた。瞬間女の子自身が今正しく綠と赤の紙風船であつた。恐怖で夢中になつた群集の上を、その圓い球が、たゞそこだけ明るい日光に輝きながら長閑に昇つて行く。――眞知子は喚鶩して呼び戻さうとした。聲が出なかつた。

誰かゞ彼女を叩いた。眼が覺めた。米子が白い割烹着でのぞき込んでゐた。

「苦しさうな聲出してたから。一時間半眠つてよ。疲れてたのね。」

眞知子は小布團をずらし、緣側に出た。庭の土藏に反射してゐる黄色い光線が眼にしみた。明け方か、日暮れかちよつと分らない。晝寢のあとの變に子供つぽい混亂で、ぼんやりしてゐると、米子は火鉢のそばから笑ひ、やがて御飯だと云つた。

「おなか空いたでせう。」

「此處。」

「その方が都合がいゝのだつて。」

が、食事がすんだら兄が逢ひたがつてゐると云ふことを傳へながら、「足が不自由で挨拶に出られないから、失禮だけれどもあちらへ入らしてほしいつて。え？神經痛。ひとつは娘の問題や、社會的に苦しくなつた立ち場が病氣にさせてるのよ。だから癇癪ばかり起してるの。何か云つても氣にしないでね。」

鶺鴒らしい小鳥が池に下りてゐた。突き出た白い尾を振り、夕燒の伸びた空の綠でなにか氣忙しくあさつてゐるのだつた、

眞知子は眼を成さなかつた。米子の兄を見舞ふことは、客として當然の禮儀であつた。とは云へそんなお義理を果すために、もしくば彼の家庭生活に關する内證話に預るために、わざ〳〵この家を訪ねたのであつたらうか。——話したいことほど容易に口にしない米子の粘液性が、いつも感じさせる親愛な腹立ちで、この時も眞知子を膨れさせた。

それをぶちまける暇はなかつた。食事が運ばれて來た。黑塗の高い膳。二時間前同じ運び手で運ばれた水桶と相通ずる威嚴をもつて、古典的な膳は、二人の膝を壓して肅然と並んだ。

入つて來た二人を、病人は左の膝だけで坐つた床から、肝癪家らしく生え上つた蒼白い額で、うは目にじろりと見た。灰色の毛布が、投げ出した片一方の脚の上にあつた、誰もついてゐなかつた。

高い天井から、電燈がぽつつり、コードの長い垂下線の端にぶら下つてゐた。鈍い十六燭光と安物の皿型の笠、煤けながら青の重々しさを失つてゐない唐紙や、厚い、まつ黑な壁の間で、その不調和が、ある以上に荒涼とわびしげに部屋をさせた。

眞知子は丁寧に見舞の見舞を述べた。

『大したことはないのですが。——どうも斯う云ふ失禮ななりで。』

痩せた、長い頰を禮讓的にかすかに皺ませ、彼は彼女の兄に逢つたことがあると話した。『博士はもう御記憶はないでせうが、丁度洋行なさる前です。××研究所の方へうかがつて。』

林檎についた新らしい蟲のことで、なにか調べて貰つたのださうだ、と米子が言葉を添へた。

『さう。』

眞知子は素ッ氣なく答へた。はじめての人に逢ふ時、父か兄の名前を持ち出されるのは慣例であつた。さうして、ちつとも有り難いことでは今の彼女にはなかつた。

『いや、もう昔話になりましたよ。ざつと十年になりますからね。少くとも私に取つちや皆んな昔話です。その林檎畑から

して疾くにひとのものだと云ふ有様で。』
黄ばんだ齒の根を見せ、彼は咽喉の奥で笑ひ、急にその聲を絕ち、出し拔けに訊いた。『――あなたも無産運動をおやりですか。』
『――』
眞知子は驚くより、質問の持つ發展性を怖れた。とにかく返事は一つしかなかつた。『いゝえ。』
が、否定を信じてはゐない執拗な注視で『もしあなたも無産運動のお仲間なら、博士はどう云ふ態度で臨んでゐられるか、一つ參考のためにうかがひたいものだと思ひましてね。――米子なぞは、長い間私を瞞してゐたのですから。』
『さうでしたか、そりやどうも。』
妥協的な落ちついた微笑が兄に注がれてゐた。彼女は默つてゐたに過ぎないと云つた。
『同じだよ。本統のことを隱してゐた點では。併し僕にはお前がどんなことをしてゐるかぐらゐはちやんと分つてゐた。誰が知らしてくれたと思ふ。まだ云つて聞かせなかつたが警察だ。お前も知つてる△△署長がわざわざ町からやつて來て、どうも米子さんが困つたことに深入りしてますよ、と斯うだ。――誰が尻押ししてるかつてことも、僕にはすぐ見當がついたがね。』
この一言は米子よりも寧ろ眞知子を脅かした。が、名前があげられる前に米子が素早く遮ぎつた。△△氏等は取り越し苦勞をしてゐるのだと。
『みんな餘計な心配ですわ。あの人たちの厄介になるやうなこと私たちはしてやしませんもの。少くとも合法的でないことは――』
『ふん、合法的か。』
高い、段になつた鼻を、嘲りで鳴らした。『結構だ。精々その邊のところでやつて貰ふんだな。――併し

この言葉で、彼は妹から客に轉じながら、『この二三ヶ月病氣のせゐかしきりに氣懸りでしてね。もし刑務所にぶち込まれるやうなことにでもなると、斯んな不自由な身體で駈けつける譯には行かないし、まあ一遍、ことの起らないうち逢つておかう。——で、病氣をかこつけに呼び寄せたのですが、さて、歸るかなと、手紙をやつた後まで常にはしてゐませんでしたよ。むづかしいもんだと思つてゐたのに、よくしたもので、歸つて來てくれましたからね。』

前と同じ、咽喉の奥のかすれた笑といつしよに、一粒の大きな光る涙が、鼻の横の深い皺の溝を流れた。その瞬間、彼は本統に泣き出したかの如く、顏を歪めた。前に投げた脚を毛布の上から壓へつけた。屈めた肩が激しく痙攣した。

米子はあはてて寢床の裾に廻つた。痛み出した脚をさするために、毛布を取らうとした。病人は首を振り、防ぐやうになほ堅く壓へた手を放さず、きれ〴〵に云つた。

『ほかの事ぢや駄目だ。一本やつてくれ、一本。——』

妹は優しいいたはりで、要求に應じないですむやうに、賺さうとした。

『辛抱出來なくて。——出來たらなりたけ注射しない方がいゝのでせう。』

『出來ないよ、出來るものか。——この痛さがひとには分らないんだ。中毒になつたつて構はないよ。あつ。——』

身體ぢうの力が、喰ひしばつた唇に絞り寄せられた。彼は妹を睨みつけたまゝものが云へなかつた。やつと發した聲は號叫に近かつた。『賴まない。お前には賴まない。——お久を呼んで吳れ。お久にやらせる。お久に。——お久、——お久。——』

開つ放しになつた、一と間おいた向の遠い爐端の灯の下で何かしてゐた二三人のひとの中から、お久が急いで駈けて來た。中形を着た、皮膚の美しい、肥つた女であつた。彼女はおづ〳〵した眼で子供つぽく眞知子に笑ひかけ、並んだ米子の贊成してゐない顏に氣兼ねしながら、それでも枕許の床の間においた注射器を取り上げた。

米子の場所がゆづられた。ガーゼにアルコホルが浸され、局部が消毒され、〇・〇三のモルヒネの針が突き刺された。お久は掌のぼうつと紅い小さい、ふくれた手で、敏捷にすべてをやつてのけた。

眞知子は輕い瞬きで米子に合圖した。米子もすぐ應じ、落ちついて眠るやうに云ひ殘し、部屋を去らうとしたが、病人はそれを引き留め、痛みの去つた脚を今度はちやんと折つて坐り直した。

「どうもお騒がせいたして。――時々これがやつて來るので閉口ですが、なあに、一本刺せば直ぐこの通りで、痛みは去る、氣分はせい／＼する、治つたも同じですよ。いや、治つたつて斯んないゝ氣持には滅多になれるものぢやありません。全く何んと云つていゝか、斯うからだぢうが――」

「お久さん。」

米子はわざと兄には構はず、爐ばたに引つ返さうとしてゐるお久を呼びかけた。病人のあの言葉が、本統は彼の死ぬほど苦しむ激痛より怖いのであること。で、決して彼の求むる注射を、求むるまゝしてやつてはならないことを、幾らか當てつけがましい嚴格さで注意した。

お久はなにか惡戯をした子供の當惑から、米子と病人を半分々々に眺め、ぼんやり笑ひ、丸い下脣を窄めた。

「いつもあの通りなんです。米子は注射させまいとする。私はお久に命ずる、お久が説教される。これを一晝夜に七八遍くり返す。――」

「一番いけないのはお兄さんですわ。」

米子は今度は病人に直接ぶつつかつて「幾ら苦しくたつて、それを我慢しないで、自分で自分を滅すやうなことをなさるのは――」

「間違ひだと云ふのかね。」

意地惡く、が、不機嫌ではない遣り方で「併しお前の怖れてゐることはとくに來てる。僕は立派なモヒ中毒だよ。ちようど年一年じりじりと貧乏になつて行つたこの家と同じで、今さら騷ぎ立てて見たところでどうにもなるものぢやない。結句からだも家もこれで朽ちるのだ、が、それにしても僕はお前がおかしいね。からだのことではやつきになつて心配してくれ

る靜に、一方の問題になると、どうだね、斯う云ふ家が滅びることはお前たちから云へば當然の過程であり、それを滅すことが運動の目的なんだからな。」

米子は何か云はうとして止め、兄の顴骨に輝いてゐる赤い斑點を眺めた。注射につゞく麻痺の快感は、多くは飲めない酒が氣持よく發した時のやうな顔いろにいつも彼をさせた。

『お前はおかしくもなければ矛盾もしてないと云ふかも知れない。家が滅びたつて、かうだまで滅ぼす必要はないつて。大きにさうだ。からださへ丈夫であれば、人間乞食したつてどうにか生きて行けるわけだからな。』

ほんとうに醉つた人のやうな愉快な笑ひ方で、眼をすがめ、米子に似たしやくれた顎を突き出し、なにか恍惚と二三秒だまつた後、彼は改まつて眞知子を呼びかけた。『曾根さん。正直なところ私は乞食が羨やましいのです。なれるものなら乞食になつてでもこの家から逃け出したい。斯う思つたことが何度あるか知れないが、それが出來ません。そのくせ私の家は乞食より今では貧乏なくらゐで、借金のほかには何一つ殘つてない、すつからかんで――』

『お兄さん。』

病人の發作的の雄辯を阻む機會を探してゐた妹は、そこで諧謔を裝うて抗辯した。そんな貧乏話は、お客さまに對してあまり氣の利いた持てなし方ではないであらうと。――

『成るほど。ぢや、嘘でもうんと金持らしい話をするのだつたな。』

樂しげな、笛のやうな笑が咽喉の氣管部を震盪させた。お久の入れて來た新しい茶はそこにある今一つの管を洗滌し、黄いろい、尖つた舌を一さう生氣づけた。

彼はしようと思へば、資格だけではたほ十分金持の顔が出來る筈だ、と云つた。

『半分にはなつても、年に二千俵からの小作米がまだ入るのだと云へば、どうして大したものだと人は思つてくれる。昨年のやうな延渡し二十二圓なんて相場でも、ざつと總理大臣の二倍の收入だからな。併し、曾根さん、

そこで切つた言葉を、もう一度取り上げた濃い茶でついで、「それだけの金の正味七割が悉く借金の利子と税金に奪はれて、殘るのはやつと四千圓足らずだと云ふことを考へて見て下さい。これつぽちの金ではこの家はどうにもならないのです。だいち、同じ貧乏仲間になつた親類は、いくら困つても本家の私は彼等を養つてやるべきだと信じてゐるし、村の者は村の者で、道路に新しい杭を一本打つのでも、小學校の瓦を一枚葺き代へるのでも、私の懷をあてにします。それも中々露骨で、昔のやうな旦那顔はさせないが、旦那税だけは取つてやれと云ふやり方ですよ。もと／＼この家の借金は、祖父や父の旦那税が積もつたやうなもので、支那流で云ふといくらか餘慶があつてもい、わけですが、却つてそれが私を壓し潰して、この腐りかけた家に縛りつけてゐるのです。逃げ出さうにも逃げ出せない、――尤も細君だけは上手に逃げ出したのですが――」

乾いた、空虚な笑が再び咽喉に彈けた。が、それ以上は觸れないで、「とにかく斯う云ふ狀態ですからね。それも私の家だけぢやない、よつぽど狡くかき込んででもゐる家でなけりや、大抵の地主は似たりよつたりでぎゆう／＼云つてゐるのです。私はだから思ひますよ。日本が社會主義になつて浮び上るのは小作人や勞働者ばかりぢやない。だいち、斯う云ふ潰れかけの地主連が息を吐くはずだと。――少くとも私なぞは、××でも起つて、家から土地からいつさいがつさい沒收されたら、いつそのう／＼するだらうと思ひますよ。全くさうなれば利子のきり換えで銀行にお百度を踏む世話もなければ、百姓共といがみ合ふこともなくなる。その代り斯んなからだで働いて食ふわけには行かないから、まあ乞食をするくらゐが落ちでせうが、その點は云はゞ望み通りになるわけで、どちみち有りがたいことですよ。多分米子も、私から大いにお說を云つて貰ふつもりで無產運動をはじめたのだと思ひますが、――どうだね。」

彼の顔から輝きが去り、深い悲しみとともに石のやうな憎みが眼にあつた。米子は謙讓に兄の視線を忍んだ。

浸み透る沈默の中を、つぎの部屋の時計が、ねぢの弛んだうつろな音で鳴りはじめた。一、――二、――三、――、――、――九時。お久は丸い顎を二重にし、眠さうな欠伸をした。

蚊帳を吊る必要のない部屋は、明らさまにひろ〲と見えた。隣りの床は空であつた。

眞知子は寢坊したと思ひ、いつもは眼が覺めてもその儘五分間ぐらひぢつとしてゐるのに、すぐはね起きた。雨戸が一枚だけ開き、昨日の赤い水桶が濡椽にあつた。顏を洗ひ、髮を捲き直し、油になつた手をもう一度清潔にしたついでに、ハンケチの洗濯をした。米子がやがて來てくれるであらう。が、庭樹の枝に乾した後まで彼女は姿をあらはさなかつた。小女の足音も聞こえなかつた。どこでも朝の家にある家事的な何かのかすかな物音さへも。――昨夜見たものが思ひ出されてゐた。この家の特殊な寂寥は、悲劇的な裏づけであらたに彼女を壓した。米子を探しに母屋の方へ出掛けて見る。決してそんなことをしてはならない氣がした。

低い木戸を開け、眞知子は庭下駄のまゝ藏と藏との露路を拔けて行つた。雜草の生えた廣場。大きな納屋。多分豚が飼はれた強い臭氣の殘つた細長い牧舍。同じく空つぽらしい開けつ放しになつた藏。立ち腐れのなにかの建物。――つゞく野菜畑は、荒れたまわりの風景の間で十分清新であつた。まだ卷かない甘藍は、黑い土壤に强健に擴がり、縮れた、綠いろの厚葉で、瑞々しい朝の日を反ね返してゐた。根葱は尖銳な青い錐だ。トマトの燦然たる寶玉。胡瓜の白い粉のふいた、突起のある肌は夜の青に濡れてゐた。莖の間で、赤い軸を水平に眠つてゐるとんぼ。――眞知子の肺は、土と野菜と肥料の匂の交り合つたあま青つぽい空氣で、すこやかに膨れた。米子が待つてゐるであらうと思ひながら、すぐ引つ返さうとはしなかつた。

彼女は鷄小舍の金網に沿うて歩いた。そこからでも歸れさうであつた。が、裏に曲がり、つゞく野菜畑を眼にした時、彼女のフーカスに落ちたものが彼女を釘づけにした。畑の向側に並んだ二本の高い胡桃の樹の下に、米子が白い運動帽をかぶつた青年と立つてゐた。彼等は向ひあつて話し込んでゐた。それでも顏をこちらにしてゐた米子は、眞知子が彼等を認めたより三秒とは遲れず、眞知子を認めた。

青年も敏感に胡桃の幹から振り返つた。どこかで見た顏であつた。思ひ出せなかつた。青年は樹を離れ、高い肩でのし掛つて米子に何か囁き、帽子の鍔をぐつと引き、學生らしい大跨で、向ふの裏門へ歩み去つた。

その間、眞知子は間抜けのやうに立つて見てゐたのではは勿論なかつた。寧ろすぐ引つ返さうとした。米子の遠い顔がその必要のないことを知らせた。彼女は青年に別れると急いで歸つて來た。が、途中で不意に立ち止まり、まともに射す光線に翳してゐた手で、眞知子を招いた。

「今の誰だか知つてる。」

「見たやうな氣がしたけれど。」

「山瀨さんに敎はつてる從弟。東京へ行つてたの。」

「私のこと話したつて云ふひと。」

「さう。」

「でも、名前までどうして分つたかと、ちよつと……。」

「ぜんどうこんぱで覺えたのだつて。」

「なんのこと、それ。」

知らない外國語を耳にした時の顔つきを眞知子にさせたのを見ると、米子は反應を期待した笑ひ方で、「分らない、そのテクニク。」

「西藏語。」

「ぢや、斯う云へば。思想善導會食。」

眞知子は頰をゆがめ、稍面はゆく笑つた。その犀利な嘲語に關しては、生徒主事の義妹は當然受け身の筈であつた。それだけ言葉の持つ滑稽な内容に通じてゐた。

日本の文部省は、直轄の各高等學校に對し、金額二千圓内外を新たに交附することに依つて、學生の思想を善導し、所謂赤化運動から彼等を防禦しようとした。使途は自由であつたが、重に敎師と生徒との會食や小旅行にその金は費された。彼

等のより善き結びつきが、目的の完成の第一條件と考へられてゐた。

山瀬の學校は會食組の方であつた。教師と生徒で何かいつしよに食べることは、大して面白くもない場所を歩き廻るよりは遙かに實質的であり、且つ彼等の思想を健全にする標準器を彼等の胃の腑に求めるとすれば、これほど確かなことはなかつた。併しふり當てられた費用は、何百もの胃袋を飽かせるほどに十分ではなかつたから、大抵午後の茶が利用された。

一學期の終り頃、五六人の生徒が交る〴〵山瀬の家にも招待された。彼等は書齋で、やつと人數だけかき集めた椅子に並び、茶菓を取り、デヴィス・カップか神宮の競技に就いて語り——思想問題には決して觸れないで——後半は山瀬の學生時代の昔話に耳傾け、十枚しかないレコードを二三枚蓄音機にかけ、そこへ仕出し屋から屆いたどんぶりを急いで食べ終ると有難う。左樣なら。——

なんとあはただしいぜんどうこんぱ！

人よ、それを咎めてはならない。もし學生たちが彼等の直面してゐる思想的疑惑に就いて教へられようとして、夜になるまで動かなかつたとすれば、教師を困らせるばかりでなく、彼の家事經濟に大恐怖を來させることを賢明な學生は心得てゐた。限定された思想善導費は、餘分の晩飯まで支拂つてはくれないから。

明けの日、一人前五十錢弱になる、菓子屋と仕出し屋の大切な受取を義兄の机の上に載せに行く時、いつも面白がることを眞知子は打ち明けた。

『ねえ、私立學校の學生の思想は、文部省では多分自由に惡化させておくのだとおもふわ。』

『逆説を用ゐれば。』

米子もその滑稽を同程量に咀嚼しながら『直轄學校の生徒の方が、火急に善導を要するほど惡化してる譯になるのね。』

『ぢや、その見本、今のひとも。』

この率直な切り込みを空間的に避けようとするかの如く、米子は二三步步調を早めた後、眼を前方の地上から離さないで

云つた。
『關の傳言を持つて來たの。逢ひたがつてゐらしいの。』
眞知子は友の白いしやくれた顎をのぞいた。この瞬間に對しては、彼女は長く用意してゐた。
『あれからは。』
『一度逢つたきり。その時は喧嘩したのだけれど。――いよいよ入獄ることにきまつたものだから、多分仲直りしようといふのよ。』
『してお上げなさい。』
米子は默つて立ち留まり、鼠つぽく擴がつた眼で眞知子を探つた。
『まだ私のこと氣にしてるの。』
『さうぢやないけれど、たゞあの時はお互ひに興奮してたから――』
『でも、あの時私が云つたのは出鱈目ぢやなかつたのよ。斯うしてあのひとのことをあんたと話してゐると、一さうはつきりそれが分かるの。今までは平氣なつもりでゐても、どの程度に平氣になつてるか分らなかつたから。本統を云ふと少し心配してたの。そのくせ、そのことより外の話をするつもりで來たのぢやなかつたのに。それが自分でもおかしいほど平氣なんですもの。――ね、御覽なさい。』
稍ひようきんに顏を突き出し、眞知子は晴れやかに笑つた。實際彼女の中には、彼女自身でも氣のつかないものが、三月前の激情を完全に過去にしてゐた。『もし私が少しでもあのひとを愛してゐたのなら、斯んな顏出來やしないでせう。ですから決して愛してたのぢやないのよ。あのひとを愛しなかつたばかりぢやない、あのひとたちのイデオロギをも、そのまゝ本統に受け入れようとしてゐたのかどうか、今では疑つてるくらゐだから、』
米子は相手の顏に溢れてゐる輝きがなにを反映してゐるかを知らうとして、注意深く、眺め、重い嘆息でつけ加へた。

『そこまで後戻りさせた責は、私が負はなくちやならないのね。』

『どうして、そんなこと餘計なお世話よ。』

眞知子は快活を誇張さした。自分の正直な打ち明けが、與へようとした悦びを變質させかけたのを、それで救はうとし乍ら。

『私の考のかはつたことが、あんたにだつて誰にだつて、ほかのひとに關係はないもの。殊に後戻りしたなんて簡單に片づけられるの、厭なこつたわ。』

『どちらにしたつて、あの時私が泣き言を云ふ氣にさへならなければ、あんたはまつすぐ進んで行けたのでせう。それを助けることが義務であつたのに、却つて邪魔したのだから。私の取り返しのつかない過失――』

『米子さん。』

急にまじめに突き上る感情で、眞知子は友の手を掴んだ。『なぜあんたは關さんのことは云はないの。あんたは自然なことをしただけだし、過失があれば皆んな關さんが負ふべきぢやない。それだのに、たゞ自分だけに責任があるやうな考へ方をするのは間違つてるわ。』

『關は關で反省させればいゝ。』

『さう思へる。――二度と繰り返さなつて。』

『――』

『聞かして頂戴。もし誰かゞまた、私と似た事情であのひとのところへ飛び込んだとして、――』

この直接すぎる引例で、さすがに少し赤くなりながら、『さう云ふことが決して起らないとは云へないわ。ね、その時はどうするの。ひとりの婦人闘士を成長させるためには、個人的な愛情を犧牲にされると云ふの。』

『人と場合では。――少くともあんたに云つたやうな泣き言は云はない。』

『嘘。出來たつて嘘よ。そんなこと。――ほら斯んなに顫えてるぢやないの。』

眞知子は掌に取つた、米子の冷たい薄い手を、忰急に振りながら、『これが正直なあんたの氣持だわ。それを生かせないのはどんな理論を持つて來たつて不自然よ。――たしかに、私をあんた達について行かれなくしたものも、云はゞその不自然さだわ。あのイデオロギの下で人間がめい〳〵の意欲をどう淸算して、行けるか、――その疑ひが、私を立ち往生させたのだから。』

『後戻りしたとは云はないつもり。』

『決して。』

『でも、あんたの口吻はすつかり反動主義者だから、おかしい。』

さうして、資本主義の社會では、人間がめい〳〵の意欲を生かすのに何等の矛盾も不自然も感じないかの如き云ひ方だと。米子の漸く笑ひの浮かんだ顏には、彼等の仲間がか〻る議論に際して示す高びしやな自負の代りに、深い親愛があつた。

『斯う云つたからつて、私たちのしてることやしようとしてることに、矛盾も不自然もないと云ふのぢやないわ。今の必要はそれを突つきつて進むことだけなのよ。新しい組織さへ出來上れば、めいめいの意欲もちがつた現はれをするだらうし、さうなれば今の矛盾は矛盾でなくなり、不自然も不自然でなくなるから。』

『私はもつと氣が短くなつてるの。――もつと疑り深くなつてるの。――』

『だつて、目の前の社會を例に取つて見たつて、變化は分るぢやないの。私たちの親の時代に不自然であつたことが、私たちにはいま決して不自然ではないし、同じ順序で、私たちにいま不自然であることも、多分私たちの子供には――』

怖ろしい一と言が唇の色を失はせた。内側の小さい齒は、それを通過さした苦痛でかち〳〵鳴つた。米子は泣つてゐられないやうに見えた。下枝を拂はれた落葉松のまつすぐな細い幹が、よろめき、咽びあげた彼女を支へた。――二人は野菜畑から裏の岡へつゞく路へ入つてゐた。

米子が泣いてゐる間、眞知子は惱ましい同情でそばに佇み、何んにも問かうとはしなかつた。停車場で、彼女の細つそり

なつた和裝を、一と目見た時、あらかじめこの悲哀を知つてゐた。

「ね、もういゝぢやないの。――」

眞知子は痙攣してゐる肩に手を置き、優しく慰めた、「時がたてばみんな忘れてよ。」

『いゝえ、どんな時が來たつて、このことだけは忘れはしないわ。時が立てば立つほど悲しくなりさうな氣がするの。それまで關を憎ことが出來ないのだから。この悲しみが、一さう私をあの人に結びつけてゐるのだから。――』

とまらぬ涙と、半分は恥づかしさで赤く濡れた顔を、米子は兩手で蔽うた。『今後だつていろ〳〵なことがあるのよ。あんたの云つたやうなことだつて、起きないとは限らないわ。それでも關の方で思ひ出してくれさへすれば、私はいつでも仲直りする氣になるでせうよ、屹度。』

『それぢや、まるで、――』

眞知子は落葉松の枝から、藻に似た青い葉を腹立たしく引きちぎつた。『關さんをスポイルドさせるんぢやない。そんなことつて――』

『關に關係はないわ。私ひとりのこれは感情だもの。苦しむのは勝手に私が苦しむのだし、關までその中に捲き込みたくはないの。そんなことをすればあのひとは私を輕蔑するわ。あのひとを愛することが絶えずあのひとを束縛することになるのだから。そんな愛され方をする時間は、あのひとには當分ないのだわ。』

彼等の前には稲田がゆるい斜面なりに段々に連なり、黄白くこぼれた謙譲な花で、來るべきゆたかな收穫を前觸れしてゐた。蔦いろの村落は、その擴がりの中で、一列の低い島であつた。――必然的に、そのまゝでは生活線下に沒しなければならない、穀物の海が豐饒であればあるだけ、彼等から食物を奪ひ、より以上の窮乏と貧苦に沈下させる、資本主義的農村經濟の奇妙な錯誤を、それが象徵してゐるかの如く。

『田舍に今度歸つて見たことは、無駄ではなかつたの。』

泣いたあとの、かすかに膨れた米子の眼は涙とは別なもので輝きはじめた。彼女は浴衣の手をまつすぐに伸ばし、その前景に友の注意を呼んだ。『――あの百姓家でも若い者は皆んな眼を覺ましてるわ。ほんの一年足らずだけれど、私のゐた時分とは驚くほど違つてるの。兄も昨晩云つてたけれど。――結句兄のやうなひとたちは、可哀さうでも愚痴をこぼしながらあのまゝ滅びて行くのだし、取つて變る新しい力は、斯んな片隅の土の底まで脈打つてることがはつきり感じられてよ。ぐづぐづしてる暇はないつて氣がするの。』

『それで、あんたの仕事が、――』

どちらにどう向つても突き當る主題に對し、眞知子は念を押さずにはゐられないで、『悲しみも、苦しみも一切の私的なものを克服させるつて云ふのね。それが出來るつて。』

『出來る出來ないよりは、必要なだけ。――私たちのイデオロギを容易に承認しない人たちだつて、こゝまで流れて來た大きな流が決して逆流しないことだけは認めなくちやならないと同じよ。――なにか怖けたり、勇氣を失つたりする時、私はいつもそれを考へるの。斯うすると――』

米子は長い眉の下で、眼を細くして見せ、湧き立つ興奮を制するため、胸に手を組み合せた。『それが見えるやうなの。遠い水上からまつ黒な流が、だん〳〵幅が廣くなり、怖ろしい勢になり、あらゆる邪魔ものを突き崩し、洪水のやうに氾濫して流れて來るのが。――』

その黒い流は、眞知子自身にも感知されなくはなかつた。荒れ狂ふ水の音さへも、聞き洩らしてはゐない彼女であつた。にも拘はらず、なにが彼女の足を岸に釘づけにしてしまつたのか。――關が嘲つたやうに、個人主義の迷妄でそれはあつたか。――また生れながら細胞に浸み込んで來た血の引力か。――眞知子は知らなかつた。分らなかつた。考へようともしなかつた。

その時眞知子は、足もとの草むらに野生の苺を見つけてゐた。まあ、何んて綺麗なのだらう苺は。――細い刺のある草、ぎ

ざく〳〵のある小さいハート形の葉まで、なにか驚くべく美しいものにそれがその瞬間見えた。——朝の涼しい木の間風がふたりのあいだを吹き抜けた。彼女は輝く赤い斑點から眼を離さなかつた。

右も左も落葉松の植林であつた。稜形の正しい重なりで、青黑く盛り上つた樹層が、暮近い曇り陽を吸ひ、行く手に鈍く銀いろに煙つた。谿には溪流の音があつた。亂暴な速力が捲き起す風で、運轉手の派手な縞シャツが母衣のやうに膨らんだ。——昨日と同じ自動車であつた。

晝過ぎ、米子に一つの電報が配られた。彼女はすぐ立たなければならないと云つた。眞知子の來てゐたのが、却つて兄から拔け出すのに都合がよかつた。

眞知子は關の電報だと思つた。米子は小峯から來たのだと云つた。どんな用事がさう遽しく彼女を呼びよせようとしてゐるかは、常例の沈默で、知ることを許されなかつた。

二人はシートの兩端に離れてかけてゐた。ぶつつかり合はないためのみではなかつた。なにかの思考は米子を眞知子から引き離してゐた。彼女は窓の方を向き、必要以外には口を利かないで、重々しい、計畫的な顔で默り込んでゐた。

植林地帶を拔け、ゆるい丘陵の畑地にかゝると米子はふと眞知子に振り返り、考古學に於ける河井は、實際眞摯な研究家として認むべきであらうかと訊ねた。

『評判の方が、あゝ云ふ人たちはえらいのだけれど。』

『さうぢやなさゝうよ、あの人だけは。』

眞知子は公平に味方しながら、『でもどうかしたの。』

『小峯さんの社の重役。あすこは河井系だから。』

『名前だけよ。屹度。』

『だから、あんな會社に餘計なことぢやない。ほんとうの學者で立てるんなら。』

――それこそ餘計な心配ではないか。――が、しづかな黄昏で輪廓づけられ、それだけ氣負ひたつた色を明瞭にした米子の顔を見た時、突然、病院で目にした小峰のしみのある黒い爪が、眞知子の意識を底から引つ掻いた。彼女の潜入。――本所の染料會社――今日の電報。

『何かはじまるの。』

激しい動揺が二人を同時に彈き飛ばした。自動車は火山岩質の丘陵を登り切らうとし、くるま全體で唸り、躍つた。汽罐部が突つ立つた。把手を掴つた運轉手の縞シャツが、彼等の頭上に閃めいた。

『はじまるのぢやない、はじまつちまつたのよ。』

もう隠さうとしないで、米子は坐り直し、活き／＼と眞知子の耳許に叫び、ついでに白いふつくらした耳たぶを引つ張つた。『あんたが、河井夫人でなくてよかつた。』

云ひあらはすことの出來ない昏迷が、その時眞知子にあつた。三日前の河井との邂逅を、何度も打ち明けようと思ひながら、なぜか話せなかつた。今になつては心理的にも時間的にも遅すぎた。燈火になつた町がすでに前にあつた。でなくも、ぼろ自動車の騒々しい疾驅と震動が、彼女の細かい氣持の陰翳を、邪魔しないで傳へさせるであらうか。――眞知子は今度は自分の方からシートの端に避け、運轉手の頭上に反ね廻つてゐる、マスコットの小さいセルロイドの娘を孤獨にぼんやり眺めた。

明けの日の午後。T――驛のプラットホームで、眞知子は乘り換への汽車を待つてゐた。どうして東京へ急に歸らうとしたか、何かその必要があつたかは、分らなかつた。米子を見送つた時までは、勿論反對の汽車に乘るつもりであつた。十五分から間があつた。眞知子は東京の三種の新聞を買つた。ストライキはどの紙上にも威嚇的な活字で報導されてあつた。眞に

小峯のゐる染料會社のみでなく、同じ資本網に屬し、同じ解雇者で脅かされた、纖維工業の一會社との、共同的大爭議であることを知つた。併し、その時眞知子のこゝろを揺り動かしたものは、職工たちの勇敢なデモでもなければ、演說會でもなく、トラックで運び去られたと云ふもの凄い檢束でもなかつた。

爭議團の幹部員は、逃げ廻つてゐる他の重役たちを無益に追求した末、河井に會見することに成功してゐた。河井は適當でもない地位に、たゞ員に備はつてゐた自分の無責任を正直に語り、出來得る限り誠意のある解決法を見出すために努力する旨を約束した。

いつしよに撮つた寫眞が出てゐた。場所は眞知子にも見覺えのある、研究所の階下の部屋であつた。訪問者側の廣い肩や強健な腕にあらはされた、幾らかの擬勢と興奮に對し、彼は自然であつた。丁度眞知子がそこで逢つた時と同じ窓をうしろにして彼は掛け、珍しく少し亂れたまゝの頭と、稍堅い線になつた唇に、わづかに苦惱を洩しながら、しづかな、もの憂げな眼眸で、なにか非常に遠いものを注視してゐるやうな顏をしてゐた。——何を彼は眺めてゐるのか、彼が云つた氷河か、それとも黑い流か。——眞知子はそれを知つてゐる氣がした。下りの列車が來た。眞知子は新聞をひろげたまゝ、ベンチから離れようとしなかつた。

『あら眞知子さんぢやないの。——眞知子さん。——』

かん高い、樂しげな聲が向ふの方から呼びかけた。新しくふえた客で三等客車は一さう混み合ひ、ごたついてゐた。洗面場の前で動きかけてまでもまごくしてゐた眞知子は、どこから聲が來たかとつさには分らなかつた。が、それと見て立ち上り、もう一度大きく呼び、手招きした富美子と、まわりの仲間の目に立つ服裝は、まだ立つたり、歩き廻つたりしてゐるひとの間にも紛れなかつた。

『こちらへ入らつしやいよ。掛けられるのよ。』

この勧め立てといつしよに振り向いた彼女の母や、連れの見知り越しの夫人たちに對し、遠く禮讓的な微笑を送ることに

依つて、眞知子はこゝで澤山だと云ふ意味を示した。それにしても斯んな汽車の中で、殊に二等の客車で、彼等に出逢はうと考へたらうか。

　向側に小なくなつてかけてゐたすみやが迎ひに來た。富美子はまだ立つたまゝで、お氣に入りの小間使が使命を果すかどうか監視するやうに笑つてゐた。眞知子はなによりも乘客から好奇的に見られてゐるのが厭であつた。彼女は床においたバスケットを取り上げた。彼等とても、斯んな場所で彼女が話したくないやうなことを話させはしないであらう。

　この懸念は富美子の待ち構へてゐたお饒舌で救はれた。彼女は母が二等車の室がなかつたために、今日は大怒りに怒つてゐるのだと云ふことからはじめながら。

　『ほらね、まだやつてるでせう。』

　富美子は小間使と入れ代はらした眞知子の膝をつゝき、反對の側の腰掛で仲間の夫人たちとしきりにそれに就いて論じてゐる母を顧み、そばかすの小さい顏を茶目にしやくつて見せた。

　『乘せるばせきがないんなら、はじめからさう斷はつて、二等の切符を賣らなければよろしいぢやございませんか。』

倉子は墨の入つた眉を寄せ、肝癪を起してゐる時いつもするやうに齒を唇の隅で吸つた。『私はそれからして間違つてると申すのですわ。ちやんと二等の切符だけは賣つといて、それで三等の方へ押し込むなんて。』

　『全くでございますよ。』

となりのX——夫人はゴルフで焦げた丸い顎をうなづかした。『少し氣を利かして、車を増すとよろしいんでございますわね。』

　『さよですとも。二等車を一臺つけるのが本統ですよ。輕井澤から三等車に乘るひとのないのは、分かりきつてることでございますからね。』

　X——夫人に向ひ合つてY——夫人は、娘たちだけ二等の方にやつと立たせておるのだと云つた。彼等の特殊な道徳觀

に依り、二等車の便所の前に立つたとしても、三等車よりは恥辱でないことは明白であつたので、倉子は夫人のよい心使ひに賛成しながら云つた。

『――斯んな眼に逢はされるのがいちばん不愉快でございますわね。』

彼女はその不愉快を隱さうとはしなかつた。寧ろそれを誇張することで、自分がゐるべきでない場所に置かれてゐる間違ひを周圍に印象づけようとするかの如く見えた。彼女は明石の胸をふくらませ、仲間以外には眼もくれないで、帶の間から抽き出した象牙ぼねのきやしやな扇子を、氣取つて顎の先で動かした。

しばらく遠ざかつてゐたこれ等の光景は、何より先づ怪異に眞知子には見えた。富美子は違つた意味でなほそれをおかしがつてゐたので、そのおし詰めの列車に彼等が無理にでも乘らなければならなかつたわけを說明しようとした。

「△△さんの御婚禮の御披露が東京會館で今晩あるのでせう。だからこの汽車でなくちや間に合はないの。――多喜子さん從妹さんよ。奧さん。」

『多喜子さんは。』

『あの方も來月お式だわ。海軍の軍人さんにゐらつしやるの。さう云へば――』

ふと重大なことに氣がついたやうに、富美子は子供らしい顏から笑ひを消した。『河井さんのおうち、大變ね。新聞で見たでせう。』

『ストライキ。』

『うゝん、それだけならいゝんだけれど。』

富美子は胃細な頸を振り、細い通路越しに向側の母を呼びかけた。『お母樣、お母樣、河井さんのあの――』

丁度そこでもその噂話がはじまつてゐた。會社の危機に瀕した經濟狀態が暴露された。河井は職工の共同管理で新たに經營させて見るため、研究所だけを殘し、彼の不動產の殆んど全部を投げ出さうとしてゐることを眞知子は知つた。

『□□さん――河井さんの伯父樣ですね、あの方に宮がニュー・グランドで晝御飯にお逢ひした時の話だつて申しますから――』何んでもひとの知らないことをいち早く知つてゐる得意さで、流石に低めた調子で、倉子はつゞけながら『親類ぢや勿論反對なのでございますつて。□□さんもぷん／＼してらして、そんな社會主義かぶれ見たいな、眞似をするんなら勝手にするがいゝ。たゞ俺はそんな馬鹿々々しいことに係り合ふのはまつぴら御免だ。それよりかゴルフの方が大切な問題だつて、すぐ引つ返していらしたのですつて。』

『□□さんはまた、とても御熱心なのでございますものね。』

よく相手をするＸ――夫人は、何か思ひ出し、狐いろの鼻の反つた、西洋人臭い顏で笑つた。Ｙ――夫人も笑ひの意味に通じてゐた。

『それで、いつまでたつてもお下手なんですつて、』

『あの方の仇名、クラブ泣かせ。』

それで三人の中年女は、暑さ汗と人いきれでむんむしてゐる二等車の中で、彼等の婦人室で笑ふやうな笑を爆發させた。この金持のゴルフアが、ヘーゲンの來た時、素破らしい道具を持つて來て貰つたのは、有名な話であつた。

併し彼のゴルフの技倆が輕蔑されたやうには、彼の言葉は輕蔑されなかつた。彼等は河井の行動に對する彼の批評は、人生に經驗のある人の適切な意見であり、實際そんな愚なことで財產を失くしては、今までのやうに誰もちやほやするもの、ないことが河井自身に分らないのは、氣の毒だと云ふことに一致した。

『それでも河井さんは研究とかなんとか、瀬戸つかけでもいぢつてゐらつしやればそれですむでせうが、お母樣が如何にもお可哀さうだと思ひましてね。奥さんのことでも氣をらんでゐらして、私もいろ／＼御相談を受けてゐたのですが。』

今になつて見れば、手を出さないで助かつたと云ひ、急に横の腰掛に誰がゐたかを思ひ出した彼女は、振り返り、開いたまゝの扇子で肩を叩いた。『眞知子さん、あんたは運の强い方よ。』

扇子の輕い感觸は、わな〳〵するほどの怒りを眞知子の全身に傳播させた。決して好きであつたことのない田口夫人が、この時ほど嫌ひであつたことはなかつた。またこの時ほど河井に對する彼女自身の隱されてゐた愛を、はつきり感じたことはなかつた。

眞晝の灼熱した關東平野が、彼女の浪打ち、焦燥するこゝろをよそに、のろ〳〵窓の外にあとしざりした。

——完——



平地蕃人

伊藤永之介

暗い入口から圖體の大きい白服の警官がヌッとからだを屈めて這入つて來た。

「ミカだよ」

土間にひろげた莚に、かけ乾しにする莨の葉を一枚々々並べてゐた媼が呟いた。先刻から不氣嫌な顔をして、彫刻(ほりもの)のある木のキセルで莨を吸つてゐたハバイがキヨトンとして其方を見た。

それは卑南の警官派出所へ寢泊りしてゐる息子のミカだつた。

ミカは包み切れない嬉しさでニコ／＼笑ひながら大股に近づいて來た。 腰の劒がガチヤ／＼鳴つた。

一年振りでやつて來た息子は見上げる大男になつてゐた。星のついた帽子、眞ッ白な服、靴、ピカ／＼光る劒――低い天井に釣り下げたランプの光りがミカの身につけたものを照らした。

「立派になつたなア、誰だと思つた……」

鹿皮の肩かけをした母親は、眼尻に細い皺をためて、輝いた眼をあげた。——これがあの餓ツからを跣足で牛の群を追ひ廻はしてゐた鼻ッ垂れのミカだつたらうか！

「知らせに來う思つてたが、忙しくてぬけられなかつたでなア」

ミカは幅廣い肩を搖つて、見かけ不相應な子供ッぽい聲で、ソク／＼する氣持ちを厭へ／＼言つた。

星のついた眞新しい帽子が、餘計なもののやうにミカの頭蓋にちよこなんと乘つてゐた。眞向からジッと相手を凝視する恐れと疑ひを知らない二重瞼の大きい眼、ガッシリした頰骨、分厚い脣——そのすべてが出來のいい息子として社じゆうから羨やまれてゐる可愛い息子のミカに違ひなかつた。

母親はミカの前へ行つたり、後ろに廻つたり落着かなかつた。彼女は戀人を見る娘のやうにミカを見た。

父親のハバイは凝と身動き一つせず息子を見てゐた。その眼には疑はしさうな光りがあつた。習慣づけられた警官に對する恐怖さへ浮んでゐた。

「どう、劍を見せなよ」

ハバイも流石に息子の變り方に動かされたらしく、やがて大儀さうにからだを起してピカ／＼する劍に觸つて見てゐた。が彼はそれッきり默りこくつた。

ミカは物覺えのいい子供だつた。

蕃童小學校に通つてゐた頃、ミカは何度も金ピカの警官や役人の前で日本語を喋らされた。ほかの子供たちが粟畑を這ひづり廻つてゐるときに、ミカは教會に通ふことを覺えた。東南の教會には彼方此方の社から子供も大人も赤子を背負つた女房も集つて來た。

ミカは彼等に東南製糖會社からの「獻金」で暮らしてゐる牧師の言ふことを通譯して聞かせた。ミカの出世の緒口は、あ

る日、警官派出所で金ピカの警官が、社々から社頭を招集して訓示をした折に、十三の彼が通譯したことにあつた。間もなくミカは警察と教會の兩方から「ミカ〳〵」と重寶がられて、巡査のお古の靴をバタバタ云はせて、始終その間を往つたり來たりしてゐた。ミカは滅多に社に歸つて來なかつた。

この前の粟の收穫期からは息子は土藁戻つて來なかつた。――「あれは變りものだからの――」とハバイは近所のものに聞かれると嬉しさうに言つた。十五のミカはもうがつしりとした青年になつてゐた。ミカは警官派出所に寢泊りして、人夫の狩出しに走つて行つたり、獨身者の巡査のよごれた猿股を洗濯したりすることに急がしかつた。

たうとうミカは出世したのだ。

『一日休み貰つて來たで、泊りだア』

ミカは腰にブラ下つてゐる帶劍のバンドをとつた。

『ミカ、たまに來たのに大儀だがな、ちよツくら手つだつて呉れよ、牛がへたばつたでなア』

大角牛を野放しにしてあつたが、早く仕事終ひにする積りで想思樹の根もとにつないである水牛に牛車をひかせて會社の甘蔗畑に行つた。朝早く出て歸りは夕方だつた。晝から參つてゐた旱天に弱い牛は、社の近くに來て斃れるとそのまゝのびて了つた。

親子は闇の中に出て行つた。その仕事は夜更までかゝつた。

朝から燒けるやうな暑さだつた。

『ミカが洋服を着たよ』

素足の子供たちがバタ〳〵砂塵をあげて彼の後から尾いて來た。そして二、三歩前に出てミカの顏をのぞき込んだ。

彼等は何處までもついて來た。
日本人の役人らしく氣どつた步調につれてガチャ〳〵彈む劍の音——それがミカにはゾク〳〵嬉しかつた。ミカは無理に頰の微笑をかみ殺した。
ライサの家は龍眼の葉にかくまれてゐた。
ミカは家の中を覗いて見た。
誰もゐなかつた。ミカは羽目に棚の樣につくつた、ライサが其處に寢ることになつてゐる釣床を見た。
牛が龍眼の根もとに靜かに尾をふつてゐた。誰も居さうな氣配がない。畑にでも出てゐるのだらう。
永い間つかはないらしい粟を搗く杵が、雨晒らしのまゝ投げ出されて土のなかに埋つてゐた。家は暴風のあとのやうにへしやげて、犬ころが自由に通り拔けられさうな穴が出來てゐた。雜草が此處ぞとばかり伸びてゐた。
人の氣配のまるでない社の中を路が白じろと走つてゐた。
大角牛の鈍い唸聲が聞えた。
路ばたには牛の糞と塵芥が山の樣に積まれてムッといふ臭氣が漂つた。
向ふから十位の男の子がひとり、ポコ〳〵埃りを上げてやつて來た。子供は立停りさうにしてミカの方に不審げな眼を上げた。
ミカは見覺えのある氣がした。その筈だ。眼付がライサにそつくりだつた。
「おッ父何處へ行つた」
「工事場に行つてるよ」
ライサの弟はびく〳〵もので答へた。工事場といふのは日下工事を起してゐる臺東と花蓮港の間を貫く十間幅道路をさすのであつた。其處には日々數千人の平埔がひッぱり出されてゐた。母は甘蔗畑へ行つてゐた。ミカは最後にきいた。

「姉(あね)は何處へ行つた？」

『お母と一緒だよ』

ミカはライサが行つてゐる甘蔗畑の方向をくどくきいてから足を其方に向けた。

ミカの顔に時々バラ／＼と馬側(いなご)がぶツかつた。馬側(いなご)は眼の前をキラ／＼光つて飛んだ。

右手から河の音が聞えて來た。卑南大溪にそゝぐ流れで、河ッペりの雜草の蓬々と生えた處々に粟畑があつた。

近所のカムラライの媼がホー／＼と猶高い聲で叫びながら狂つたやうに畑の中を馳け廻はつてゐるのが見えた。

ミカは行つて見た。

粟畑の出來たのは僅か二年前だつた。以前社の主立つたものは水田を二、三甲（一甲約一町歩）づつもつてゐた。蒙灣人(モーカン)（支那系）が日本人の眞似をして乾田を水田につくり變へると社のものがまたその眞似をした。ある日、警官が來て紙片を出して指判を捺せと言つた。話をきくと砂糖會社に田を貸せばお前等は寢てゐて食へるといふのであつた。日本人のやうに金が慾しくなかつたから誰もきまつて首を振つた。警官は眼玉をむいて、お前等はお上の土地に勝手に田をつくつたのだから文句があつたら何處へでも失せろと言つた。間もなく何處からか内地人の百姓がやつて來て、水田を勝手に甘蔗畑にして了つた。泣く／＼砂糖會社に田を貸したものは粟が口にあはなくなつてゐたので、はじめの間は、會社から金を貰つた戻りには、その金で牛車に米を積んで戻つた。がそれは田から上る米の三分ノ一にも足りなかつた。昔は何處でも畑をつくることが出來たが、今では警官の眼が光つてゐた。一昨年の夏、洪水があつた。水がひくと社のものは鋤子や杷手(つるはし)を牛車に積んで我れ先に洪水が肥料をくれて行つた河ッペりにかけつけた。此處なら大丈夫だ――、此處にはミカの家の粟畑もちよッぴりあつた。

「何したつてよ」

ミカはカムラライの媼に叫んだ。

「ほー、誰たと思つた、えらいものになつたのー」

彼女は汗みづくの顔を雑草のなかゝらのぞけた。

「いなごの畜生、みんな荒らしくさつて、俺ア今年は乾干しになるばかりだア」

馬側が豆粒のやうにミカの頰を打つた。

ミカは畑に飛び込んだ。河原一面の籔と畑が一緒くたになつて、肝心の粟は探さなければ見えなかつた。

昨夜死んだ牛を運びに行つた路々、親父がこぼした。

毎日のやうに會社の賃銀なしの仕事にぼひたくられて畑の草取りも出來なかつた。

一昔前までは誰も草取りなどしなかつた。臺灣人（支那系）の眞似をして草取りをするやうになると暮らしがよくなつた。が、日本人が來たり、砂糖工場が出來たりして、何だ彼だと人夫に狩り立てられるやうになると、折角覺えたことも水の泡になつて了つた。

ホー／＼とカムラライの鳴は粟が折れるのも忘れて滅茶苦茶にあばれ廻つた。

ミカの眼の先が時々サッ／＼と暗くなつた。無限の馬側の大群が低く空を渡つて行くのであつた。それは彼等のみじめな暮らしを呪ふやうにミカの眼の先を遮つた。がミカは一刻も早くライサに會ひたかつた。

野放しの牛の群が遠くで唸つてゐた。

しつかりと地べたを踏みしめることの出來るミカの大きな足は、今日に限つて宙に浮いた。

遠く卑南工場の大煙突が百姓をおどかしつけるやうにあくどい黒煙を吐き出してゐた。

ミカが無限の甘蔗畑に這入つたとき、何時の間にか低い雲が飛んでゐた。

卑南に居る間、ミカは始終ライサを思ひ出してゐた。がミカは自分が「出世」しさうなのを知ると氣永に構へた。ミカは彼女の眼の前に自分の出世した輝やかしい姿が突然現れることに依つてびつくりした眼を瞠るライサを胸に描いてゐた。ミ

カは殆んど一年振りで此方へやつて來たのであつた。その僅かの間に社の様子はすつかり變つて了つてゐた。
三日にあげず自分の社から卑南の教會に通つてゐる頃、ミカは少年公解に寢泊りしてゐた。此處は彼等に早く寢るやうにしつける父母が居なかつた。冬には、小屋の眞中にある大きな石疊みの爐に薪がパッと燃え立つた。少年達はその淺黑い顏を更に煤で染め上げながらそのまわりでガヤ〱話し合つた。ミカは自分が今日どんな風に、立派な洋服を着た偉い牧師の言ふことを通譯したかを得意になつて喋つた。彼等は老人の番人が六つかしい顏をして睨みつけても、ニタ〱龍眼の實を噛んだり叫んだり笑つたり、唄をうたつたり、キャッ〱轉げ廻つたりするのをやめなかつた。夜の重い空氣を柔らかい粟を搗く杵の音がトン〱響いて來ると、ミカは突然喋るのをやめて少年達の間を潛りぬけて外に飛び出した。ミカはライサが月を浴びて母親の粟つきに手つだつてゐるのを何度も見た。哀れつぽい嘴琴の微かな音と一緒に、二、三人の少女と手をつないで突然漆闇のなかゝら姿を見せたライサがミカを飛び上らせたこともあつた。
熟した甘蔗が雨の來ることを知らせるやうに急がしく頭を振つた。その上を雲がせはしく走つた。
卑南の方向はボーと白く烟つてゐた。大きな雨粒が白々と斜めに走つた。
畑は海のやうにざわめいた。
ミカは半時以上も涯知れない甘蔗畑を難破船のやうにさまよひ歩いた。
頭上四、五尺もある甘蔗の間を、二町も三町も歩かなければ方々に散らばつてゐる農夫の一人にも行き會はなかつた。ライサ達が何處に居るか皆目誰も知らなかつた。
泥棒や何かは甘蔗畑に逃げ込めばよかつた。いくら手を分けて探したつて見つかりッこは無かつた。甘蔗泥棒といふものがあつた。砂糖會社の出來る以前は百姓はホンのちょッぴり甘蔗をつくつた。成熟するとそいつを一本二本と切つて來てすりこぎ位に切つて端からガリ〱噛るのであつた。これは甘かつた。甘蔗泥はこれをやるのであつたが甘蔗泥がつかまつたといふことは誰も聞かなかつた。

今にも雨が溶れて來さうな空模様であつた。テカ／＼みがいて來た長さ一尺もある特製の靴、がすつかり土まみれになつてゐた。もう何時間も經つてゐた。ミカは陸地の見えない沖で時化に會つた木ッ葉舟のやうに助けを叫びたかつた。

日本人の百姓が甘蔗の畝から顔をのぞけてピョコンとお辭儀をした。

ミカは巡査補の辭令をもらつてから日本人から幾度もお辭儀をされた。それでもミカはうれしかつた。

『見ろ、俺はちつとも日本人と違はないんだ、ライサがどんなにびつくりするか』

ミカは元氣づいて歩き出した。

苅り上げた奴を、一杯に積んだ牛車が、ゴロン／＼とデコボコの烈しい地べたを飛び上つたり身ぶるひしたりして轉げて行つた。

甘蔗束の上に洟を垂らした六つ七つの男の子が乘つてゐた。子供は齒ぎしりしてユサ／＼する束につかまつてゐた。眼だけは面白さうに光つてゐた。

『おッ父、巡査だア』

子供は首を車の前方に捻ぢ向けて叫んだ。

先を歩いてゐる親父が振向いた。

『この邊りに、ペイポ見なかつたかな』

ミカは追ひついてきいた。

『相憎くな天氣でハア』

顏一杯髯の四十がらみの內地の百姓は、この挨拶の方を先にした。

『……見かけないなア、おらア、此邊はわし等ばかりだよ』

それは吉田村の百姓だつた。ミカの社から北の方向にこの吉田村は眉のやうに見えた。村には五年前三百人も居た百姓が

今では百人足らずしか殘つてゐなかつた。卑南製糖會社は原料を得るのに蔗作に不馴れなペイポだけでは不足した。折角、卑南の三百噸の新式工場が出來ても原料がなければ銹つくばかりだつた。そこで官營の移民事業に失敗した總督府に補助を出させて移民村をつくつた。五六年前、急拵への三百戸ばかりのバラックが出來上つた。「移民の福音」なんかいふ××に乘せられた哀れな内地の百姓たちが、故郷のなけなしの田を賣つてやつて來た。野放しの牛を盜んで食つたり、龍眼樹をひつこぬいて行つたりするのは臺灣人(支那系)であつた。が内地人の百姓も之れと違はなかつた。彼等は社の畑へ來て牛をつかつた。

が彼等のあとには××が尾いてゐるので臺灣人のやうにふんづかまへて半殺しにしてやる譯には行かなかつた。移民村が出來て二、三年目に暴風雨があつた。それは臺灣特有の暴風雨で、石がつッ飛んで彈丸のやうに樹木の幹に突きさゝつた。一年間手にかけた甘蔗が根こそぎへし折れて雨にたゝかれて腐つてしまつた。移民の半分はそれを機會に何處かへ姿を消して了つた。

移民村は水が惡いので病人が絶えなかつた。マラリヤの流行つたときは何人も死人が出た。

會社は移民たちに甘蔗以外はつくらせなかつた。したくても水路がないので田をつくる譯には行かなかつた。作つた甘蔗は「原料採取區域」といふもので會社以外は賣れない仕組みだつた。賣上げ値段は會社の一人ぎめであつた。

甘蔗を安く値切られて、高い米を會社の購買から買はされる、移民費の年賦はかゝさずとられるで、「百姓の天國」の代りに借金が段々つもつて行つた。今では弱い、何處へ行つても暮らせる見込みのないものばかりが村に殘つてゐた。

ちんちくりんな内地人の百姓はミカを見上げて言つた。

「此處にペイポを見かけたがの――」

ミカは甘蔗畑を右に折れた。

と彼は思はず立ちどまつた。

甘蔗がガサ〳〵とざわめいたかと思ふと誰か籔の中から鼠のやうに駈けぬけて、またすぐ甘蔗の中に潛つて行くのを見た。それは若い女だつた。跣足の女は瞬間に彼の眼の前から消えた。逐はれてゐるのだ。と籔の中からヒヨツコリ詰襟を着た內地人が現れた。太つた不恰好な男であつた。昻奮した赤い顏をして、ふくれた腹を波打たせてゐた。籔の中をいい加減、追ひまはしたらしく、甘蔗の枯葉の屑が腕や背中に食ツついてゐた。

『なんてえ太い野郞だ!!』

ミカは胸の中で叫んだ。

內地人はてれかくしにニヤ〳〵變んてこな笑ひかたをした。

ガヤ〳〵いふ話し聲がズツと向ふから聞えた。ミカは其方へふツ飛んで行つた。

五、六人の農夫が畝のなかで何か昻奮して話し合つてゐた。

ミカは帶劍をガチヤ〳〵言はせて近づいた。

彼等は話をやめてミカの方を見た。

みんな知らない顏だつた。

『ミカぢやねか』

そのなかの中年の一人が呟いた。が彼は不氣嫌な顏でさう言つたきり默り込んだ。彼等はジロ〳〵ミカを見た。何か文句を言ひに來たと思つてゐるらしかつた。ミカは押しつけるやうな冷やかな沈默を感じた。

彼等のうしろから、地べたに屈んでゐた若い女が顏をのぞけた。

それは今さき彼女に起つた激動と警官に對する恐怖に歪んだ顏だつた。

ライサだ！　瞬間、ミカは永い間ただそれを思ひ出すことに依つて滿足してゐた二重瞼の大きい眼を見た。寧ろ男のやうにがつしりした肩、しつかり土を踏みしめる足、豐かな心持ち張つた顎——ミカは全るで大人になつた彼女を見た、が何と

いふ變り方だ。それは月光を浴びながら嚊琴をかき鳴らして歩いてゐたライサではなかつた。この一年の間、甘蔗殼に顏を引ッ搔かれ、家畜のやうに燒けた粟畑を這ひづり廻つて歩いてゐたライサに違ひなかつた。ミカはライサの方を見ながら男たちに話しかけた。

『何があつたい、一體――』

『ライサが會社の禿ちやびんに追ひ廻はされただよ』

若い男が答へた。彼等の顏には最うミカに對する警戒と疑ひが無かつた。

『專門だよ、あいつは――』

『リチヤもいつかやられたつけ』

『禿に限つたことぢやないよ』

『××人はみんなだよ』

『去年居た若い男はやらなかつたぜ』

と、之れまで默つてゐた男が遮つた。

『ライサだけはあれだつて追ひかけたぞ、なア、ライサ』

ライサはチラとミカを見上げてから顏を伏せた。その眼はミカの變つた姿に吃驚してゐた。

ミカはライサの巾廣い肩を見た。もう子供ッぽいスラッと恰好のいゝライサではなかつた。ライサは太つちよの內地人に追フかけられたことをひどく氣はづかしく思つてゐるらしく、何時までも顏を上げなかつた。

な處女の魅力で强くひきつけた。ふくれた胸が烈しく息づいてゐた。それはミカを男のやうに健康

『だがの――、××人は助平だぞ、そんなことは普通だつていふからな。』

中年の農夫は怒つたやうな顏をして吐き出した。

「わし等の社も今にさうなるに違ひねえよ、ヤミの娘がこの頃見えないと思つたら、臺東で淫賣をしてるつて話しだ、タロマワタイヒラが醫者に診て貰つたら梅毒だつて言はれたとよ、梅毒なんて、おらア、昔噺にも聞いたことなかつたになア」

「さうよ、みんな内地のやつが惡いことをもつて來たんだ」

若い男は眉を釣り上げて唸つた。

「あの太ッちよはな、盛りのついた犬みてえに娘ッこさへ見れば藪ッからを轉げ廻はつて逐つかけるんだよ、おらいつかリキ〳〵のおまつちよをぼいたくつてゐるのを見かけたよ……」

彼はライサを振り返つた。

ライサ、氣をつけな、ぼや〳〵するでねえぞ、人から離れるぢやねえぞ、誰も居ないで見ろよ、どんなことになるか」

ライサはさも重大さうにマジ〳〵と若い男を見返した。

運搬車が始終ゴロ〳〵轉げたり、甘蔗の葉ッパを背中に食つけた牛どもが唸つたりしてゐる街の砂糖工場の邊りで、ミカはあの太ッちよを何度も見かけたことがあつた。彼は背廣に巻ゲートルをして泥濘に氣をつかひながら農場に時たまやつて來る社員ではなかつた。が兎に角彼は襯衣や袢纏着の運搬人夫たちを、頭からガミつけて「製糖能率」を擧げることに夢中になつてゐる詰襟を着た原料係であつた。現場服を着た大學出の若い男も農場にやつて來てゐたが、さういふ連中は割におとなしかつた。が内地を喰ひつめて、この殖民地の、而も最も邊鄙なところに、永年しけ込んでゐるやうな年輩の奴等と來ては、まるで話しにならなかつた。土民は××と思ひ込んでゐた、おまつちよさへ見れば追ひかける、うまいことを言つてたらし込んでは女中同樣にこきつかひ、勝手にポンと社へ突き返して寄越した。

それでも社のものは文句が言へなかつた。もと砂糖會社にゐたある原料係が會社を馘首になると間もなく、タロマ社の娘をかッさらつて臺東で××させてゐるといふ話をミカはきいたことがあつた。太ッちよもさういふ一人に違ひなかつた。ミカは今さきニャ〳〵てれかくし笑ひをしてゐた太ッちよを憎々しく思ひ浮かべた。

「兎に角ライサの母に會はふ、かまはない、都合でライサとのことを持ち出してやらう」
ミカは甘蔗の波頭から上つてゐる運搬軌道の方に歩き出した。
雨はまだ小降りだつた。
とミカはびつくりして空を見た。
曇つた低い空の一ところが黒く染つてゐた。
最初は汽罐車の煙りかと思つた。が違つてゐた。それは傳染病のやうに無限の甘蔗畑を襲つた馬側の群が移動しつゝあるのだつた。馬側は畑からバツ／＼とうるさく飛び散つた。耳をすますと限りない甘蔗畑を一面に蔽つた馬側の飛んだり跳ねたりする音が一つのブーンといふボイラーの呻めきのやうに聞えた。これは手がつけやうがなかつた。それはただ、馬側の慘害に對して一刻も早く苅取りを終へることを命じられてゐる原料係や運搬人夫どもを、氣狂ひのやうに奔り廻らせたり、喚めかせたり、がなり散らさせたりした。
彼等はまるで、馬側に襲はれたことが彼等の罪だとでもいふやうに、××に嚇されて苅取りに狩出されたペイポと無氣力な哀れな移民を、追ひまくり、いがみつけ、はり飛ばした。
「阿呆ッたれ！　ほら行つた、其方でねえ、逃げてしまつたぞオ、くされ我鬼！」
藪の中で移民のおッ母あが喚めいた。もち網を持つた漢ッたれが、眼を皿にして藪の中を駈け廻はつた。
二百目もありさうなゴロン豚みたいに太つた野鼠がスッとミカの先を飛んで消えた。
チブス菌をバラ撒いたり、砒素薬の團子を轉がしたりしたが野鼠は減らなかつた。こいつは甘蔗の根ッこを嚙つて倒した。倒れると寄つてたかつて喰らひついた。會社は一匹三錢で一日に石油罐に四つ五つも買ひ入れた。甘蔗畑を這ひづり廻つて、それで、借金がたまつて行く移民のおッ母は、つもる借金を一錢でも減らすために、我鬼どもを喚めき立てながら、膝ッ小僧を擦りむき、血眼になつて「三錢」を追ひかけた。ペイポの我鬼は「公學校」に通つたが、移民の漢ッ垂れは日中一杯藪

からを驅け廻つた。

おッ母はミカの方にお辭儀するとまたすぐがなつた。

『うーん、この糞ッ垂れの生れぞくない！　一日かかつて一匹もとれないつてか……』

甘蔗の間から洟ッ垂れ小僧の絶望的な顏がポカンとミカの方を見送つてゐた。

雨は本降りになつて來た。

一町先がボーと白く雨に煙つた。

遙かの製糖工場の黑煙も消え去つた。

ミカは劍の尻を摑んでトットと運搬軌道の方に走つた。

煙突だけピョコンと長い、小さな汽罐車が疲れた生物のやうに甘蔗のなかにうづくまつて、薄い煙りを吐いてゐた。

五、六頭の水牛や大角牛の背中が雨に濡れて光つてゐた。

農夫たちは夢我夢中で牛車と無蓋車の間を驅け廻つてゐた。

『土砂降りだぞ、早くしろーとんま野郎、おい〳〵、うしろから廻つた、チエッ、一度言つたら覺えてろい……』

無蓋車の上に突ッ立つた男がからだを彼方此方に振り向けてがなつた。

安月給とりに似合はず太ッちよなこの日本人の詰襟の胸元はパクンと口をあいてゐた。誰かの古物でも貰つたか、それとも會社のおしきせなのか、ボタンが上から二つどうしてもかゝらないらしかつた。

ミカは無蓋車の下に立つと、ピョコンとその男に御辭儀した。ミカは出世したのだ、がミカは日本人から見れば自分の出世は『破格の榮譽』に過ぎないのを知つてゐた。日本人の氣嫌をそこねたらどんなに損だか？

男は無蓋車の上からミカを見降ろしてニヤッと變な笑ひ方をした。彼はそのお多福耳に小さい鉛筆をはさんでゐた。そして黑いゴワ〳〵した雨合羽をひつかけるとまたすぐがミ〳〵やり出した。

『こいつだ、さつきライサを追つかけたやつは……』

無蓋車は四ツ繋がつてゐた。汽罐車のうしろの一つにライサの母は一生懸命積み込みをやつてゐた。もう彼女の牛車の上にはちよんびり甘蔗の束が殘つてゐるだけだつた。

無蓋車を叩きつける雨がミカの顔に跳ね返つた。

新しい帽子の庇からポタ／＼雫が落ちた。頸がグツシヨリ濡れて雫は腹の方にまで傳つて行つた。

『大儀だなア、雨降りになつて……』

ミカは笑ひながら彼女に近づいた。

大きな濡張つた甘蔗の束を肩車でユサ／＼させて駈けて來ると、ライサの母はその男まさりな頑固な肩をグンと彈ませて束を車の上に投げ上げた。

『ほ——、誰だと思つた……』

彼女は雨でよごれた顔を上げ下げしてミカを見た。去年までの彼女は四十の先といふのになまじツかな若い男より元氣だつた。娘のライサに似て顎の骨の張つた頑丈づくりな顔には墨で描いたやうな深い皺が寄つてゐた。それは彼女をまるで別な人間のやうに見せた。ミカは曾て彼女に見たことのない、意地悪いやうな冷やかさを苦勞のために小さくなつた眼に見出した。

『……えらいもんになつたなア、おらのざまア見て呉れエ』

ミカはグサリと胸を蕃刀でやられたやうな氣がした。

『お前とこア粟つくつたてな。おらとこア、お父ツは毎日々々工事場に引ツ張られて行くし、おらもライサもこの通りだ、お前も今におらども連れに來るべなア……』

彼女は言ひかけて向ふへ行つた。

ミカは以前ライサの父親が牛車をひいてすぐこの近くの畑に毎日通つてゐたのを思ひ出した。それが今では何方を向いても甘蔗の外は何も無かつた。

『おい、こいつア、どいつだ！　積み替えだッ！』

突然頭の上でセメン樽が叫んだ。

『貴様か、くされあまッ！』

ライサの母は恐々戻つて來た。

『どういふ譯でビーアで束ねないんだ、チエッ、こん畜生！』

彼は怒つた猿のやうにギッシリ無蓋車へ積み上げられた束を蹴散らした。

濡れた粘土の上にドサッ〳〵と甘蔗の嵩張つた束が落ちた。雫と泥が跳ね返つた。

『ううッ、何するだよ』

濡れ鼠になつたライサの母は泣き出しさうな顔で落ちて來る甘蔗の束を見てゐた。

『束をほぐすんだッ、掃除して積み替えだッ、見ろい、みんな泥ぐるみだ、枯葉が雜つてらア、なつちやァ居ねえや、こん畜生！』

パクンと口をあいた詰襟の胸もとの盛り上つた肉を痼癖が波打つてゐた。

『おらア、死んだ方がましだァ』

ミカは泥の上に散亂した甘蔗束の上にからだを曲げたライサの母の、悲哀と憤怒とにふるえる顔を見た。

雨はビシャ〳〵と無蓋車を叩いた。

彼女は何處から手をつけていいかまごついてポカーンと突ッ立つてゐた。

『束をほぐすんだ、餘計なものを混ぜこぜにすんな、泥を落すんだ、それぢや機械にかからねえや……』

ライサの母は一つ〳〵線路の枕木に持ち運んで、束をほぐしはじめた。それは厄介な仕事であつた。太ッちよは遠慮會釋もなく無蓋車の上から甘蔗束を滅茶苦茶に長靴で蹴り落した。それはドサッ〳〵と濡れた粘土に落ちて無残に泥にまみれて轉つた。おかげで仕事は二重にも三重にも厄介になつた。

ミカは見てゐられなかつた。

『ライサをつかまへそこなつた腹いせをやつて居るんだ』

彼は眼を大きくみひらいて太ッちよの背中を睨んだ。

太ッちよは無蓋車の上を猿のやうな身輕さで飛び廻はつた。

『チョッ！　なんちうもので結へやがるんでエ、ビーアは何處へやつた、うん、てめえ、ビーアを盗んで行つて役に立てやうてんだらう、悪漢め！』

悪漢といふのはもと〳〵、彼等の社から牛や粟や龍眼樹を掠めて行く臺灣人を言ふのであつた。それを拒んだために社に火をつけて燒き拂はれたことさへあつた。ところがいつの間にか、虐められ掠められてばかりゐる彼等を内地人の奴がバイラン〳〵と呼ぶやうになつてゐた。

ライサの母は束をほぐしてバッバッと餘計な枯草や葉ッぱを投げすてると、兩方の肩にグッと力を入れて束を締めつけ、クル〳〵と器用にビーアで結へた。毎年苅入時に引ッ張り出されるので馴れたものだつた。

『ほー、これア、家に持つて歸るべエ』

彼女は一握りの枯れた胡麻を甘蔗の中から掴み出して、一間向ふの枕木の上に置いた。

『ミカよ、お前巡査になつても内地人には巾がきかんの——』

ライサの母は仕事の手を休めずに呟いた。ミカはポッと顔に血をのぼらせて歯ぎしりした。

巡査補の大部分は過半數の臺灣人と少數の平地蕃であつた。事實、巡査補は内地人には頭が上らなかつた。内地人からお

情けで職務にありついてゐる巡査補は内地人の氣に入らないことがあるとすぐ馘首になつた。ミカは今こそジリ〳〵する焦燥のうちに之れを感じた。

泥は枕木にゴシ〳〵擦りつけて落した。屑を撰り分けて束ねた奴はドン〳〵積み込んだ。ミカもガチャ〳〵帶劒を腰で鳴らして手傳つた。折角の白服もグッショリ雨に濡れて了つてゐた。

『愚圖々々すんな、骨を入れてやるんだぞッ!　工場の機械が空轉りすらァ――』

太ッちよは我鳴り立てた。

牛どもは瞼毛の濡れた眼を心持ち細めて凝と雨のなかに立つてゐた。雨となると元氣の出る水牛が空車をガタゴト云はせてのろ〳〵其處いらをうろつき廻はつた。

太ッちよは錑蒙の人間のやうに無蓋車の上を飛び廻はつた。

雨は無蓋車や枕木や赭土でビシャ〳〵音を立てた。

束を擔いで走るユサ〳〵といふ音と、ドサッ〳〵と投げ降ろしたり積み込んだりする音が其處らぢゆうにひろがつた。濡れ鼠の農夫たちが、蟻の群のやうに無蓋車のまわりをうごめいた。

汽罐車が待ち切れないやうに、ゼー〳〵咽喉を鳴らし始めた。

『まだかョー、日が暮れて夜が明けらァ』運轉手が雨のなかに首だけ突き出して叫んだ。

『遲いぞ!　汽車が出てしまはァ』

向ふの甘蔗畑の牛車がやつと通り拔けるだけの通路で内地人の運搬人夫が叫んだ。

其處から一杯に甘蔗を積んだ褐色の大角牛が何頭も續いて現はれた。

『惡漢、集れッ!』

突然、太ッちよ野郎が無蓋車の甘蔗の山に突ッ立つて叫んだ。

牛車の上に寢轉んだり、運搬車のかげに寄りかゝつたり、ボカーンと雨のなかに彳んだりして、仕事終ひの聲のかゝるのを待つてゐた農夫たちは、不精々々無蓋車の下に群つた。

『十一號の苅取りだッ、もう一ぺん汽車が來るからな、えゝか、みんな聞いたか、聞えなかつたらもう一度言つてやらァ、仕事はこれからだッ!!』

農夫たちはあつけにとられて暫らくぼんやり太ッちよを眺めてゐた。彼等はいい加減けんなりしてゐた。仕事終ひにするのを思つて雨が降り出したのを寧ろ喜んでゐたのだ。雨はみじめな農夫たちをいやが上にビショ〳〵と叩きつけた。彼等は太ッちよの出張つた腹から、のッぺりと曇つて中々あがりさうもない空に眼を移した。そして背中を丸くして機械掃除のボロ屑のやうに散つて行つた。

太ッちよは毎日一番の運搬車の戻りに、彼方此方の畑から二本、三本と甘蔗を引ッこ拔いて汽罐車の石炭の上に乘せて行つた。工場の原料係長がこいつからしぼり出した汁を糖分測定器でのぞいて見て、その日の苅取區域をきめた。きめた區域はどんなことがあつても苅取らせた。「十一號」はこのメーターのおめがねに叶つたのだ。

運搬車はのろ〳〵と動き出した。それは直き甘蔗の海のなかに滑り込んで黒い煙りだけが見えた。

橫しぶきの雨で褐色に枯れた甘蔗は怒髮のやうに亂れた。「十一號」は磯海のやうにざわめいた。

黒い雲が低く甘蔗の葉の先をフッ飛んだ。

テープのやうに太い雨が白く光つてみだれた。

かうなるともう雨やどりするどんな隅ッこもなかつた。吹き曝らしだつた。

腐つた雜巾みていに濡れた農夫たちが甘蔗を切り倒しては鼠のやうに牛車の方に走つて行つた。

グサッ〳〵と太い甘蔗の根もとを掘る音が彼方此方から聞えて來た。

「深掘りだァ!　グァと根もとを掘るんだッ――」

太ッちよが監視を命じて行つた內地人の運搬夫が唸つた。

この雨にドロ／＼の土を掘り起して根こそぎ切り出さなければいけないといふのだ。さうしなければそれだけ糖分が無駄になることになる。

『深掘りも淺掘りもあるけエ』

鍬のかげで誰か吐き出した。

『この分ぢや粟畑がすたるぞなア、川の水がすぐ出るからの――、おッ父も出かけて居ないし……』

牛車まで一運びして戾つて來たライサの母がこぼした。

ライサも仕事をやめてガサ／＼やつて來た。

雨が降り出してから彼女はモーカンの帕布のやうに黑い布で頭を結んでゐた。そのためにライサの悲しさうな眼は餘計美しく見えた。

『おッ母、何時まで仕事やるべなア』

彼等は性分として餘ッ程のことでなければこぼしたりしなかつた。それだけ辛棒强かつた。がもうこんな仕事を續ける氣がしなかつた。むッつり默りこくつて二人、三人と寄り集つた。

『おとやめてしまへ、出來るものでねえ、この降りでよ』

上衣を脫いで腕にかけてゐたミカは、瞬間、自分が巡査だといふことも忘れて、ライサを見ながら吐き出した。

ライサはクルッと母の居る方にうしろ向いた。

『おッ母歸るべ――』

鼠が彼等の足もとをスッと掠めた。

甘蔗の幹に馬側が虱のやうに幾匹も凝つと食ッついてゐた。

『何時までもこの土地に居たら死んぢまふべエ――』

誰かがひとりごつた。

『おめエ逃げ出すつてか？』

タタラ社の日本がその百姓の方を向いた。彼が日本といふ名前だつたところでそれは彼の罪ではなかつた。リツポンがまだそれほど××ことをしない時分に彼は生れたのだ。

『……逃げ出すもえゝが、六匹とられたらどうする氣だア』

相手は眼をみはつた。

『六匹……？』

リツポンは續けた。

『……四匹といふのは昔のこんだぞ、この間もおらの社のバナイが街さ行くべと思つて逃げ出してよ、六匹とられたさうだ』

彼等種族の中でも甘蔗地帶に居るものが一番慘めだつた。誰もこんな土地に居たいと思ふものが無かつた。ところがいくらか増しな土地へ行くには××に牛を四頭出さなければならなかつた。ふんだくつた牛は××がペイポに料理させて内地人にふるまつた。殆んど××で働かせることの出來る彼等に逃げ出されたが最後、卑南製糖會社は上つたりだ。

それでも逃げ出すものが出るのでついこの頃「四頭」が「六頭」になつた。

吹き亂れる甘蔗の雨水が大角牛の頭にうるさく降りかゝつた。牛は何頭も甘蔗の籔が兩側の畑から重なり合つた狹い路に佇んでゐた。

と籔の中から農夫たちがバラ／＼と駈け出して來た。彼等は牛車から甘蔗の束を投げ散らした。

『風出て來たぞ――、甘蔗などみんなヘシ折れて了へ！』

空ッぽの牛車は動き出した。農夫たちはビシヤ／＼竹林で牛の臀をたゝいた。後の方の牛車にはミカカライサも居た。

農夫と牛車の一隊は鎖のやうにつながつて雨のなかを進んだ。

風が強くなると甘蔗畑は暴風（しけ）の海のやうに荒れた。

暗い雨がビシ〳〵と頬ッぺたを打つた。

彼等は一刻も早く此處をぬけたかつた。

が何處まで行つても甘蔗畑だつた。

振り返ると騒然とさゝめく畑の向ふに、卑南へ行つて戻つて來た運搬軌道の汽罐車の煙りがボロ屑のやうにふッ飛んでゐた。

ミカの眼の前を、雨に洗はれたライサの丸ッこい踵が動いてゐた。

彼はガサッといふ音と一緒に横合の籔から誰か飛び出すのを見た。

あの太ッちよの原料係と先刻畑に居た運搬人夫だつた。

『來たア……』

ライサは癇高く叫んで彈かれたやうに走り出した。

太ッちよがライサを追ひかけて突き飛ばした。

『この野郎！　あまちッよの辮しやがつて……』

ミカは自分が突き飛ばされた氣がして立ちどまつたきりだつた。

倒れたライサは恐ろしさに顔を歪めて起き上つた。

太ッちよの細い眼は、彼が牝牛位に思つてゐる女から肱鐵を喰つた男の憎悪でキラッと光つた。

彼は物言はずライサの頬をはり飛ばした。

農夫たちは牛のかげから怯えた眼をのぞかせた。

『何するだア！』

ミカは思はず呻めいて二、三歩前に出た。

太ッちよがミカの方を向いて我鳴つた。

『悪漢(パイラン)々々……畜生ッ！　一體誰にことはつて來た、生蕃め！』

瞬間、いつも眞ッ向から相手を凝視めるミカの大きな眼が怒りに顫いた。普段はおとなしいが、怒つたが最後手がつけられない牛のやうなこの種族特有の底氣味悪い感情が、突然セキを切つた奔流のやうに、ミカの厚い胸板から頭のてッぺんまで突き上げた。

竹の棒が太ッちよの毛の薄い××にメリ込んだ。鈍いピシッといふ音がした。

『やつたな……』

太ッちよは瞬間の後にやつと吐き出した。

がその前にねつちりと棒立ちになつた、白い上衣を腕にかけて巡査の帽子のかげに張り裂けんばかりの怒りに炎えた眼をかゞやかしたミカは、大木の幹のやうに小ゆるぎもしなかつた。シャツ一枚のだゝッ廣い背中を太い雨がたゝきつけた。

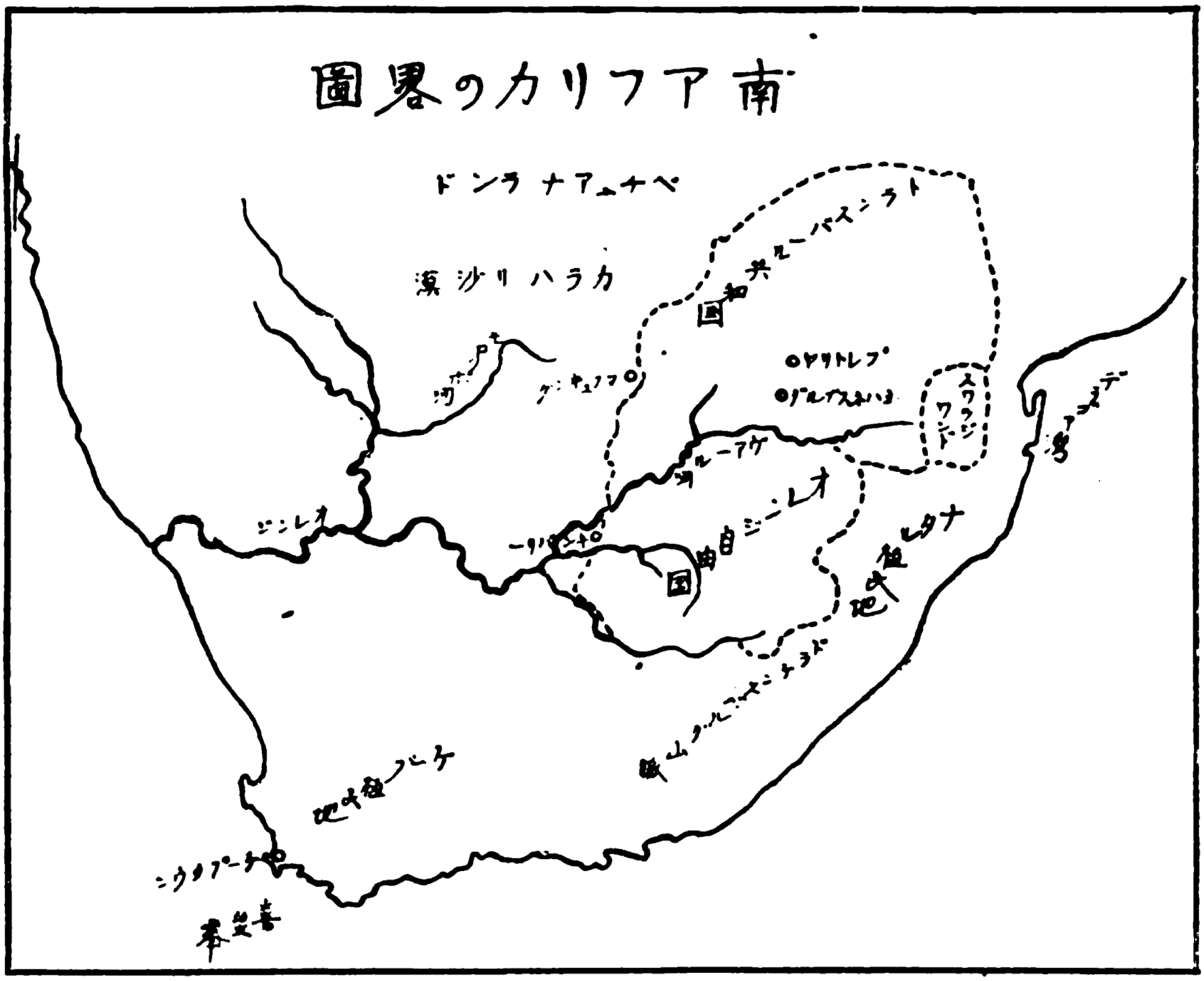
籔の中から卑屈な移民の顔が四つ五つのぞいてゐた。

『ヒッヒッヒ、君は巡査だな……』

太ッちよはニヤ／＼笑つた。

ミカは巡査補を棒に振つたことに氣がついた。と、彼の手に握られた××が滅茶苦茶に太ッちよの内地人に向つて×××。

一九三〇年・十一月



戲曲

南阿戰爭

——九場——

江馬修

第一場、最初のダイヤモンド

人物。

土人の魔法使。（バンツー族。）

幼兒を抱ける土人の女。

ファン・ニエヘカーク。（ボア人の牧羊者。）

ロレンゾオ。（百姓。前者の友達。）

時。一八六九年、春。

場面。

南アフリカなるオレンヂ自由國。

草原の上を細い路が橫ぎり、熱帶性の老樹が一本、鬱蒼として路傍に枝をひろげてゐる。

その陰に、土人の魔法使が、黑い裸體にさま〴〵な異樣な飾を纏ふて立つてゐると、土人の女が幼兒を兩手で差出すやうにして跪いてゐる。魔法使は幼兒の體を撫でながら、いかにも神秘めいた口調で長々と呪文を唱へてゐる。

魔法使。がら〳〵、がら〳〵〳〵、がらがら〳〵〳〵。

それから彼は頸にかけてゐた大粒な光る石をはづして、勿體ぶつた樣子でそれで幼兒の頭をそろ〳〵と撫でる。

魔法使。さあ、之で惡靈は退散した。子供の病氣はぢきなほる。

土人の女。(立上りて。)まことに有難いことで。後でまたお禮に參ります。

左手からニエヘカークとロレンツォが出てくる。ニエヘカークは通りすがりに、魔法使の手にした光る石に目を止めて、思はず立止まる。それから土人の女が去るのを待つて、彼に近づく。

ニエヘカーク。(至つて愛想よく。)今日は、魔法使さん。

魔法使。今日は、ニエヘカークさん。(光る石を大事さうに首にかける。)

ニエヘカーク。大變綺麗な石だね。

魔法使。惡魔よけのお守りぢや。

ニエヘカーク。へえ。どこで手に入れたんだね?

魔法使。オレンヂ河の土手つぷちで拾つたのぢや。

ニエヘカーク。ほゝう、なある程。ちよつと見せておくれよ。(無遠慮に頸にかゝつた光る石をいぢくり廻しながら。)わしは元來こんな光る石が好きでな。以前これによく似た石を持つてた事があるが、でもこいつはわしのよりよつ程大きいわい。ふん、目方も大分かゝりさうぢや。

魔法使。これ〳〵、汚い手でさういぢくつてはいかん。罰が當るぞ。

ニエヘカーク。(媚びるやうに。)どうだね、魔法使さん、ものは相談ぢやが、この石をひとつわしに讓つてくれる氣にならんかね。できるだけ高く買ふがね。

魔法使。(飛んでも無いと云ふやうに。)何を云ひなさる。大事な商賣道具ぢや。賣る譯にやいかん。(去らうとする。)

ニエヘカーク。もし〳〵、わしが上等の羊五十頭と代へては呉れないかね。

魔法使。猶ぢやと云ふたら猶ぢや。

ニエヘカーク。ぢや羊百頭なら! いや、二百頭でも構はんぞ。

魔法使。（立止まりてふしぎさうに、）あんたはこの石を手に入れて、わしのやうに魔法使になるつもりかな？

ニエヘカーク。いや〱、どうしてわしがそんな大(だい)それた野心を持つもんかね。でも、それが惡魔よけのお守りと聞いたら、羊二百どころか、三百とでも取代へて貰ひたいと思ふんぢや。といふのは、わしの家(うち)ぢや誰かしら年ぢう惡魔に取りつかれてゐるのでな。

魔法使。あんたは今羊を三百つて云つたね。

ニエヘカーク。あゝ、云つたとも。確かに三百頭。何なら外に牛を五頭添へてもいゝ。これでも厭とは云ふまい、魔法使さん

ロレンツオ。（呆れて見てゐたが、この時堪りかねて、）おい、ニエヘカーク、お前氣でも狂つたのか。何だい、ちつとばかし光るかつて、たかゞ石つころぢや無えか。羊一匹だつて賭けるやうな代物(しろもの)かい。

ニエヘカーク。默つてすつこんでろ！　なあ魔法使さん、羊三百頭に牛五頭。何の不足があるんだね。しかも牛ときたら、スヰス種のすばらしい奴なんだぜ。

ロレンツオ。（絶對的に、）やれ〱、どうしてもこいつあ本當に氣が狂つたんだな。

魔法使。いや、やつぱし止めぢや。羊や牛がいくらゐたつて、わしの商賣はできやせん。（再び去らうとする。）

ニエヘカーク。（命がけで引きとめる。）ぢや一體わしにどれだけ出せつて云ふんだね。えつ、かうなりやわしも意地ぢや、羊三百五十頭、これならどうぢや。うん、まだいけねえつてのか。ぢや四百頭。これならお前さんは村一番の物持になれると云ふもんぢや。

魔法使。羊四百頭に牛五頭だつて云ふんだね。ふゝむ。（じつと考へこむ。）

ロレンツオ。（友の腕を掴んで、）おい、ニエヘカーク、しつかりせいよ。お前はあいつの魔法にかゝつたんぢや。光る石がそんなに欲しいなら、わしがまた見つけてやるからな。やい、魔法使の猿道め、とつとゝ失せやがれ。

ニエヘカーク。（ロレンツオに、）馬鹿野郎、貴樣こそ餘計な口出ししねえで失せやがれ。（魔法使に、）さあ、これ以上何をぐづぐづしてる事があるんだね。わしにしたら、全財産を投げ出すやうなもんぢや。わしの全財産と云やあ、羊五百頭に牛十頭、それに馬が一頭……

魔法使。（勢こんで、）ぢやお前さんはそれだけの全財産をわしに

よこすと云ふんだね。

ニエヘカーク。(青くなる。しかも彼の目は光る石に不可抗的に吸ひよせられる。)

魔法使。宜しい。取代へてやらう。

ニエヘカーク。(震へる聲で。)ま、待つてくれ。とにかくその石をもう一度よく見せてくれ。(相手から石を受取り、夢中になつていろ／＼と検べてみる。)さうぢや‥‥確かに‥‥あれぢや。魔法使さん、ぢやわしは全財産をやつてもいゝが、この石はこの場でわしに渡すだらうね。(相手の手を堅く握る。)

魔法使。お前さんの財産はいつよこすか。

ニエヘカーク。さうだなあ、夕方にでも人をつれて取りに來たら良からう。

魔法使。嘘はつくまいな。

ニエヘカーク。こゝにゐるわしが仲よしのロレンツオが證人ぢや。

ロレンツオ。おい／＼、わしはこんな氣違ひの取引の證人になるのは御免ぢや。

ニエヘカーク。(小聲で。)承知してくれ、お前にも儲けの分け前はやるぞ。

魔法使。ぢやお前さんの財産は夕方までに貰ひに行く。約束を違へたら、わしの魔法の力は恐ろしいぞ。ぢや、また。(右手へ去りながら。)羊五百頭に牛十頭、それに馬が一頭‥‥

ニエヘカークは右手に小さい光る石をもつて、茫然と見入つてゐる。

ロレンツオ。(友達の肩を強く叩く。)ニエヘカーク、しつかりしないか。お前ほんとにあいつの魔法にかゝつてしまつたのぢや。魔法使め、魔法の力でお前の頭を狂はせてしまつて、全財産を巻きあげやうとしとるのぢや。

ニエヘカーク。(夢みるやうに。)少くも八十カラットはある！‥‥

ロレンツオ。そいつだ。この石に悪魔が宿つてをるんぢや。悪魔よけのお守りだなんて糞くらへ。いつそ路ばた棄てゝしまへ。

ニエヘカーク。ロレンツオ、お前はダイヤモンドつてものを見た事があるか。

ロレンツオ。ダイヤモンド！　そりや話にやいろ／＼聞いた事があるが‥‥

ニエヘカーク。さあ見ろ。どうだ。

ロレンツオ。へえ、これが！　だつてわしやこゝいらからそんなものが出るなんて、子供の時から聞いた事も無いぞ。

ニエヘカーク。もしこれがたゞの石つころで、ダイヤモンドで無かつたら、わしの大山は負けぢや。わしは首をくゝらにやならん。だが、こりや大丈夫ダイヤぢや、おい、お前どこかで星でゞも無けりや、こんなすばらしい光を見た事があるか。

ロレンツオ。ふむ。さうかなあ。でも……わしにや分らん……いくらそいつがダイヤかつて……やつぱし羊一匹の方が……

ニエヘカーク。おい、もう一昨年(おとゝし)の事ぢや。わしやヤコブの所へ用があつて行つたら、そこの子供が小石でおはぢきをして遊んでゐたつけが、その中にとても美しく光る石が交つてゐたんぢや。それがいかにも珍らしいんで、わしが呉れないかと云つて見たら、ヤコブも無雜作に呉れたもんさ。ところがどうぢや、後でわしがいろ／＼と人に頼んで調べて貰つたらまさしくダイヤモンドだと云ふぢやねえか。そして五千圓に賣れたんだよ。それからといふもの、わしは寢ても起きてもこの石の事ばかり夢に見てをつたのさ。考へてもごらん、一つあつたものが二つ無えといふ法は無えと思つたからさ。ところが、こいつぢや。こいつはあれよりやずつと太(でか)くつて、目方も五六倍はあるぞ。

ロレンツオ。お前はそんなものを財産みんなと取代へても儲かるつもりなのかね。

ニエヘカーク。さうさなあ。(空想の歡喜に燃えつゝ)少くも、五萬圓。うまく行つたら十萬圓！……

ロレンツオ。そんな途方も無い値段で一體誰が買ふと思ふかね。

ニエヘカーク。さうぢや、けふの出掛けの用事はもうお止めぢや。わしやこれからすぐに支度して、ケープタウンへ飛んで行かにやならん。あそこにやアーサーストンといふ偉い博士がゐて、この石がどれくらゐ値うちのものか鑑定して貰へる。それにイギリスの金持もどつさりゐる。うへつ、こいつが愈愈さうと極まつたら！　ぢやまた會はうぜ。(彼は小踊りしながら左手へ飛んでゆく。)

ロレンツオ。へん、畜生。あんな小石に何萬圓もの値うちがあるなんて、どんな惡魔がついてやがるのぢや。(足元を見まはして小石を二つ三つ拾つてみる。)ちえつ、碌でも無え小石ばかりぢや。ニエヘカークの野郎、すつかり有頂天になつて飛んで行きやがつたが、あれがたゞの石つころだつたら面白いや。

(から／＼と笑つて右手へ去る。)

——幕——

第二場、若きセシル・ローヅ

人物。

セシル・ローヅ。（十八歳。）

ハーバート。（セシルの兄。）

ニエヘカーク。

外に鑛山勞働者數名。

時。一八七一年一〇月。

場面。

ヴァール河畔のダイヤモンド鑛。

荒れた岩だらけな傾斜地の上で、ボア人、イギリス人、黒人などの五六人が、地に屈んで、採掘器でこつ〳〵石を敲いてゐる。そして石片を手にとつて檢査しながら、またもや作業をつゞける。歌聲。

朝の光。

セシル・ローヅ、深い淀みから這ひ出してくる。十八になつたばかりのまだ蒼白い痩せた少年。泥まみれになつたクリッケット用いフランネルのヅボンを穿いてゐる。

ローヅ。（手にした小石をじつと眺めゐたるが、不意に喜びと昂奮に充ちた聲で。）兄さん、兄さん、ちよつと來て！

兄。（聲だけ聞こえる。）何だい、セシル、頓狂な聲を出しやがつて。

ローヅ。どうもさうらしいんです。早く來て見て下さい。

兄。（汗を拭きながら、やはり泥だらけになつて右手より出てくる。）さうらしいつて！（石を受取つて眺める。）

ローヅ。ねえ、確かにさうでせう、兄さん。

兄。うむ、さうだ。確かにダイヤだ。初陣にしちや大手柄だぞ、セシル！（弟の手を堅く握る。）

周圍のもの振返つて羨しさうに呟く。

――へん、小僧うまくやつてやがる！

――なぜ己にや授からねえのかなあ。

――せつせと掘るこつた。せつせとよ。

ローヅ。（小をどりして。）兄さん、ダイヤつて存分無造作に見つかるんですね。

兄。馬鹿な。要するにお前は運が良いのさ。おい、こいつは少くも十七カラットはある。どうだ、すぐに賣つてしまふか。

ローヅ。いくら位に賣れるでせう？

兄。さうさなあ、八百圓、いや千圓ぐらゐになるかも知れんて。

ローヅ。でも、僕が最初に見つけたダイヤですからね。それに

貰らうと思つたらいつだつて貰れるんでせう。

兄。（パイプに火をつける。）でもあれだぜ、掘り立てのダイヤはぢきに裂ける恐れがあるんだ。早く賣つた方がいゝよ。

ローヅ。ぢや賣つて下さい。それに僕もこゝへやつてくるのに大分使ひましたからね。

ニエヘカーク左手より出てくる。彼は今成功したダイヤモンド商人で、前場よりずつと立派な服裝をしてゐる。

ニエヘカーク。（にこ〲して、）今日は、ハーバートさん。また好運が授かりましたね。

兄。君は相變らず鋭い鼻を持つてるね。ところでけふの好運は僕ぢや無いんだ。紹介しやう、弟のセシルさ。この間までナタールで僕と一緒に綿花栽培をやつてゐたんだが、僕がこつちへ來たもんで、きのふたつた一人で僕の後を追つてやつてきたんだ。

ニエヘカーク。（セシルと握手して、）これは初めて。あなたはきつと勇氣のある立派なお方だとお見受しますよ。

兄。これはダイヤモンド商のニエヘカーク君。セシル、ほら、お前も聞いてるだらう、魔法使から立派なダイヤを手に入れて、ケープタウンで十一萬圓に賣つて大儲けをしたといふ成金さ。

ローヅ。はあ、あの「南阿の星」の事ですか。

兄。さうだよ。我々も少しあやかりたいもんさ。

ニエヘカーク。ところが、ハーバートさん、「南阿の星」ぢや結局私も馬鹿を見てしまつたんですよ。だつて、あれがロンドンへ渡つて、ダアドレーとかいふ百萬長者に二十五萬圓で買ひ取られたつて云ふぢやごわせんか。それを思ふと、わしやどうもくやしくつて・・・

兄。へえ、そいつあ驚いた。ぢや君はまだ十四萬圓儲け損ねた譯だね。ぢや僕たちもこいつをイギリスへ持つて歸つて賣る事にしやうや。少くも五六萬にはなるからな。

ニエヘカーク。へえ、御冗談でせう。一つ拜見させて頂きませう。（ダイヤを受取つて檢べにかゝる。）

兄。弟が初めて掘出した記念のダイヤだ。強ひて賣らうつて氣も無いんだよ。

ニエヘカーク。ごもつともで。さういふ記念品なら勿論特別上値で頂きませう。五百圓ではいかゞで。

兄。おい、からかふのは止めてくれ。千五百以下なら賣らねえよ。

ニエヘカーク。だつてハーバートさん、わしや二十五カラット

のを同じ値で買つたですぜ。

兄。（弟に。）セシル、こいつは記念品としてしまつて置くか、イギリスのお母さんへ送つてやるかした方が良ささうだな。

ニエヘカーク。ぢやいかゞで。七百圓まで奮發しませう。

兄。千二百圓！

ニエヘカーク。話になりませんや。このヴアール河の畔ぢや、五十カラットのダイヤが毎日のやうに出てくるんで、市價はうんと下つてるんですぜ。ぢや、特別でもう百圓奮發しませう。外の方と違ひますからな。

兄。止めだ。（石を取戻して、相手にならぬ風をする。）

ニエヘカーク。殘念ですが、仕方ありませんな。（行きかける。）八百圓（わしや良い値だと思ふんですがね。）

兄。千圓以下で賣るもんか。

ニエヘカーク。飛んでも無い、それなら二つ買へますよ。

兄。外の奴に賣るだけさ。

ニエヘカーク。旦那に會つちや叶はねえ。どれ、もう一遍見せて頂きませう。（戻つてきて、再び石を受取つて檢査する。）

兄。現金だよ。

ニエヘカーク。やれ〳〵、旦那に會つちやいつも負けちや。へい、見て下さいよ。一枚、二枚、三枚……百圓札で十枚。

兄。セシル、お取り。そいつあみんなお前のものだ。

ニエヘカーク。（金を渡す。）弟さんは實に好運な方ぢや。さきざきあなた御自身が「南阿の星」になられますやうに！では、またお願ひ致しますよ。（去る。）

ローヅ。（兄の手を握り、喜びと感激をもつて、）兄さん、有難う！

兄。は、、良かつたね。

ローヅ。兄さん、アフリカつて何て素的な所でせう！僕にはアフリカはイギリス以上のものを與へてくれます。僕が肺病で、醫者からはもう六ヶ月と持たないと宣告された時に、僕をこの地へ呼んで下すつたのは兄さんだつたが、實際このとほり丈夫になつたんですものね。アフリカは第一に僕に命と健康を取戻してくれましたよ。

兄。あの儘オックスフォードにゐたら今頃は疾つくに死んでるだらうよ。

ローヅ。さうですとも。それに、それだけぢや無い、アフリカは今未開拓の大寶庫として、僕達の足もとに無限に擴がつてゐるぢやありませんか。僕はこゝで、まだ、たつた一粒の小さいダイヤを見つけたばかしです。この時黑アフリカのふと

ころに隱れてゐる無限の寶から見たら、文字どほり、ほんの一粒に過ぎないんですものね。あゝ、それを思ふと僕は胸がおどる。さうだ、僕はこの處女地のアフリカで、大いに爲すところが無くちやならんと思ひますね。

兄。はゝ、小さい時からお前は野心家だつたよ。

ローヅ。野心家だつて、僕が？さうかも知れません。だけど兄さん、野心にもいろいろありますからね。少くも僕はさもしい個人的な野心では動かないつもりです。一歩國外へ出たら誰でもさうだと思ふんですが、僕は自分の血と生命がどれほど大英帝國のそれと不可分に結びついてゐるか、ようく知つてゐます。さうです、僕は大英帝國の一市民です。そしてそれを無上の光榮と考へてゐるんです。だからこそ僕がこのアフリカの開拓について、どんな野心を持つたつて、決して單なる個人的野心では無い筈です。あゝ兄さん、この暗黒アフリカを開拓して、せめてザンベジ河から南をわが大英帝國の版圖に加へる事ができたら、どんなに素晴らしいでせうね。

兄。つまりお前はアフリカのクライヴにならうつてんだね。それも良からう、だがダイヤを一つ見つけたくらゐで、そんな空想へ高飛するのはちと氣が早すぎやしないか。

ローヅ。（赤くなる。）兄さんは僕を冷笑してるんですね。

兄。別に冷笑しやしないよ。どうせアフリカくんだりへやつてくるやうな植民者は、誰でもみんな野心と空想でいつぱいなんだからね。どれ、また始めやうか。己もけふは百カラットくらゐな奴を掘出さなくちや。（左手へ去る。）

ローヅ土の上に腰をおろす。そして朝の光の中で、猶じつと燃えあがる空想に自分を委せてゐる。

ローヅ。（急に飛び上る。）さうだ、どんな大事業もまづ第一歩からだ。そして僕の第一歩は、こゝでダイヤをできるだけどつさり掘りあてる事だ。そしてうんと金を儲ける事だ。萬事はそれからだ。（彼は元氣よく再び穴の中へ入つてゆく。）

――幕――

第三場、酒場『南阿の星』にて

人物。

キンバリーの市長。
青年A。
青年B。
女。

老人。
四十男。
土人の踊子、怪しい女、客多勢。

時。一八八二年一月。

場面。

ダイヤモンド産地キンバリーに於ける酒場「南阿の星」。

こゝはオレンヂ自由國の高い國境の上にあつて、窓の外には薄れゆく夕日を浴びた嶮しい山々が近く迫つて見える。酒場の内部はひろ〲としてゐるが、低づくりのバラックなので、卓も椅子も荒木づくりの粗末なもの。壁にはけば〲しい色彩で、思ひきり猥褻な繪が描いてある。例へば數名の若い女が荒くれ男の前で×にされてゐるといふやうな。

幕があがつた時。床の上に坐つて土人の奏する原始的な單純な樂器の音につれて。土人の女が踊つてゐる。乳房の大きな、黒い立派な裸體にさま〲な美しい飾をつけてゐる。客たちはそれ〲の卓で飲んだり、食つたり、カルタをやつたりしてゐる。大部分は土地のボア人である。怪しげな女もちらほら交つてゐる。

ダイヤモンド商人が卓から卓へ渡り歩いてゐる。

踊がすむ。あちこちで拍手。一人の若者が踊子を掻つぱらふやうにして片隅へ連れて行つて、一緒に飲み始める。

部屋が薄暗くなつてくる。給仕がそれぞれの卓へ蠟燭を運んでくる。

青年Aが若い女と腕を組んで上氣嫌で入つてくる。そして知合の誰彼に會釋しながら、前方眞ん中の卓へ行つて腰を掛ける。

女は白人と黒人との混血兒で、肉感的な妖艶な美人である。

青年A。(いきなりポケットから四粒のダイヤモンドを無造作に取出す。)さあ、これがけふの收穫だ。どんなもんだい。

女。まあ、四つね。(一粒を手に取つて、)これは二十カラットくらゐあるわ。これまで私が頂いたどれよりも立派ね。

青年A。どうだい。お氣に召したかね。

女。(嬌美をもつて、)私に下さるつていふの?

青年A。はゝは、お前には僕お命だつてやりかねないんだからね。で、そのかはりお前は僕に何を呉れやうつてんだい?

女。だつてあんたには私の心臟を生きたまゝであげたんぢや無いの。それからこのからだも。ダイヤの十や二十とは代へられなくつてよ。

青年A。さうだ、まさにそのとほりだ、可愛い魔女さん！（女を抱いて接吻する。）

女。（男から徐々に身を離して、）私、これでダイヤが九つになつたわ。六つはあんたから頂いたのよ。

青年A。（烈しい嫉妬を感じて、）おい、外の三つは誰から貰つたんだ？

女。誰だつていゝぢや無いの。こゝぢや誰だつてダイヤくらゐ呉れるんだから。でも、あんたのやうに立派なダイヤを惜しげもなく呉れる人なんか、一外に無いわよ。

青年A。あつて堪るかい。

女。ぢき一ダースになるわ。また頂戴ね。

青年A。やるとも。だが、どこの公爵夫人だつてお前のやうにダイヤをどつさり持つてゐるものはあるまいぜ。

女。私いまにダイヤを胸いつぱいに飾つてロンドンに現はれるのよ。あんたきつと連れてつて下さるわね。

青年A。御意のまゝだ。おい給仕！　それからと、商人はゐないか。このダイヤを賣らなくちや、僕は今文無しなんだ。

左の片隅でボアの百姓が二人、小さい卓を挟んで話し合つてゐる。一人は六十位の老人、もう一人は四十男。

四十男。そりやあわしなんかまだ生れねえうちの事ぢや。でも「移住」の事なら、おつ母からもよく聞いたし、色んな年寄りからも澤山聞いて知つとりますよ。

老人。わしはもう十五になつとつたから、大抵の事はよく知つとる。我々ボアがまだケープ植民に住んどつた時分に、イギリス人のためにどんなに酷い目に會はされたか、どうしてあのなじみ深い土地から追つ拂らはれたか、みんなよく知つとる。思ひ出すと、わしは今でも胸が煮えくり返るほど腹が立つのぢや。

四十男。イギリス人はわしらをホッテントットやブッシュマンと同じなみに、鞭と靴で追ひ廻したつて云ひますな。もつとも今でもそれくらゐの事やり兼ねないんぢや……

老人。神様、いつかきやつらに罰を與へて、ボアの怨みを晴らして下されますやうに！　ぢやが、我々ボアは元來みんな百姓で、（ボアとはオランダ語で、農民といふ意）平和と自由を愛する民ぢや。だから暴動も起さず戰爭もせず、奥地へ、奥地へと北の高原地方へ移住したんぢや。考へて御覧じろ。一八三五年頃の事ぢや、今と違つてこゝいらの森や山には獰猛なズールー族もゐれば、

ブッシュマンのやうな恐ろしい野蠻人もゐる。ライオン、象、犀、ひやう、毒蛇は云ふまでも無い。それでも我々はイギリス人と一緒にゐるよりは、野蠻人や猛獸との方がよつぽど増しだと考へたのぢや。そこで我々は住みなれた家と土地を棄てて、年寄と女子供は、家具や食料と一緒に牛や馬の背に乘せて、男子は歩いて、ぞろぞろ長い列を作つて、文明人の踏みこんだ事のない森や原をとほつて、夜も晝も苦しい旅をつゞけたのぢや。途中でお產がある、病人ができる、野蠻人に襲はれる、それや實に悲慘極まるものぢやつた。

四十男。だけど、お爺さん、そのボアが五十年たらずして今日のこのオレンヂ自由國とトランスバール共和國を建設したんだから、實に豪儀なものぢやごわせんか。

老人。（感慨ぶかく。）そりや全くぢや。

四十男。それにどうですい。こゝいらにダイヤモンドが續々出るやうになつてからのボアは？　一體十年前まで誰がこんなアフリカの奧からダイヤが出るなんて思つたですかね。それが今ぢや、一躍成金になる夢を見て、世界の四方八方からこの土地を目がけて押寄せてくるんですぜ。南アフリカへ、ボアの國へ！つて譯でた。このキンバリーにしてもさ、半年前はろくに人つ子のゐない荒山ぢやつたが、今はどうですい、四萬人からの人間が集まつて、立派な都會になつてしまつたぢやごわせんか。この調子で行くと、我々は今に世界一の金持國になるかも知れんて、はゝは。

老人。分らぬものぢや。ボアはもとよりこんな寶があると思つて移住してきた譯ぢや無いからな。全くこの世では何が幸福になり、何が不幸になるか分つたものぢや無い。

青年Bがすばらしい勢で入つてくる。シャツ、半ズボンは泥に塗れて、採掘場からまつすぐにやつて來たことが分る。

青年B。（立つたまゝ皆に向つて。）おい、すばらしい發見だ。

客達は驚いて口々に聞く。

——何だ、何だ？

——新しいダイヤの山か？

——千カラットの奴を見つけたとよ。

青年B。かうなんだ。さつき己は家の庭を掘返してたんだ。物干臺を作るつもりでね。ところがどうだ。土は見事な藍だ。そしてダイヤが出てきたぢやねえか。驚いて檢へて見ると、己のバラックは藍の上にできてたんだ。つまり住居の下が

ダイヤ鑛なんだ。

――畜生、運の好い奴め！

――ぢや己の家もさうかも知れんぞ。

青年B。さうだよ。己の家だけぢやなく、隣近所みんなさうらしいんだ。だから明日になるのを待つて、己達のバラックを全く叩き壞して、跡を掘つて見るんだ。どうだ、すばらしい發見ぢやないか。

――全くすばらしいぞ。奢れ〳〵。

――未來の百萬長者萬歲！

――ロベルト、こつちへ來いよ。

青年Bは知合の中へ行つて元氣よく酒をひつかける。

青年A。（ダイヤモンド商人と取引をすまして金を取りながら、）へえ、ぢやキンバリーの町はダイヤの上にできてるんだね。よし、己もあしたは自分の庭を掘返して見やうや。

女。（青年Bに向つて、）ロベルトさん、お目出たう。こつちへいらつしやいよ。お祝ひに一杯やりませうよ。

青年A。（女を睨む。）ふざけた眞似をしたら承知しねえよ。

女。（立上りながら、）あゝ、私踊りたくなつちやつた。

青年A。飯を食つたら一緒に踊らうよ。

女。（すつと青年Bの側へゆき、彼の肩に手をかけて甘へかゝるやうに、）ねえ、ロベルトさん、一緒に踊りませうよ。おめでたいんぢや無いの。

青年B。君に會つちや叶はない。さあよし、踊らう。おい、音樂だ。

拍手起る。音樂始まる。青年Bと女は踊り始める。外のものも二三組踊る。

青年Aはやけらしく酒を飲んでゐる。

音樂と踊と酒で酒場の中は沸き立つ。

市長シュヴルツマンが入つてくる。七十ぐらゐな、白髯のある立派なボア人である。騷ぎの中を橫切つて徐ろに左手へゆく。

老人。やあ、これはお珍らしい、市長さん。

四十男。どうぞお掛けなすつて。

市長。いや、お構ひなく。（立つたまゝ騷ぎを見やつて、）困つたもんぢや。

老人。市長さん、どうかなすつたか。

市長。あんたはわしと同樣年寄りぢやからよく御存知ぢやが、わしらは農民（ボア）と呼ばれてゐる位で、みんながみんな百姓ぢや

つた。みんなが百姓で、農業や牧畜をやつて、平和に勤勉に暮らしてきたもんぢや。ところが、こゝいらにダイヤが出るやうになつてから、みんなの氣風ががらり變つてしまつた。この分ぢや、いまにボアは山師とならずものになつてしまひさうぢや。

老人。ほんとに、ごもつともぢや。それにかう他國者が入りこんできてはどうしてもなあ。

四十男。どうです、市長さん、お掛けになりましては。

踊と音樂が止む。盛んな喝采。

青年A。(いきなり女の腕を捕へて。)よくも己を馬鹿にしやがつたな。

女。何をするのさ。痛いぢや無いの。離して頂戴。

青年B。おい、僕は君の女を取らうなんてしないから安心し給へ。

女。ほんとうにあなたは燒餅やきね。さあ、テーブルへ行きませう。ロベルトさんもこつちへいらつしやいな。

市長。(二三歩進み出て。)皆の衆、あんた方がこんなに愉快さうにしてゐられる所をみると、このキンバリーのことで、わしらの國に大事件が起つとるのを御存じないと見えるな。

――國の大事だつて?

――このキンバリーがどうしたつてんだ?

――何だい、あの爺さんは?

――市長さん、その大事件とかを早く聞かせてお呉んなさい。

市長。ぢやお話しやう。南阿特許會社のことは皆衆御存じぢやらう。イギリスが南アフリカを侵略する目的でケープタウンに作つた大植民會社ぢや。その會社がわがオレンヂ自由國に向つて、このキンバリーを割讓しろと強要してきてるんですぞ。

多くのものは思はず立上る。烈しい昂奮と憤慨が皆を支配する。

――キンバリーを割讓しろつて!

――そりや一體どういふ譯なんだ。

――イギリスにどんな權利があるんだ?

――畜生、このキンバリーを今更イギリスに取られて堪るかい。

――お斷はり申上げるまでの事だよ。

老人。市長さん、もしわしらの國でそれを斷はつたらどうなりますかね。

市長。その時は、「國際間に重大な危機をかもす恐れがある」さうぢや、つまりイギリスは戰爭づくで取つてしまふ魂膽なのぢや。

老人。やつぱしさうか。昔からそれがイギリスの手ぢや。やれやれ、ボアの幸運をイギリスがいつまでも默つて見てゐる筈が無いと思つてゐたら！・・・・

四十男。あゝあゝ、イギリスは恐ろしい狼だ、とは聞いてゐたが・・・

青年B。（市長の前へ進み出て、）市長さん、大統領は勿論すぐに拒絶されたんでせうな。

市長。さあ、それがわしの聞くところでは、キンバリーを素直にイギリスに讓つてしまふかも知れん樣子ぢや。

一同騒がしくなる。

——そんなべら棒な！・・・・

——なぜはねつけねえんだ！

青年B。（皆に向つて煽動的に、）諸君、この不當極まる屈辱的な要求に對す我々ボアの返事は分りきつてゐる、拒絶だ！

——さうだ、拒絶だ！

青年B。それで暴慢なイギリスが、もし武力に訴へると云ふなら、我々もまた武器をもつて立つまでだ！

——ボアには男がゐるぞ！

——斷じてキンバリーを渡すものか。

青年B。我々はイギリスに對して、これまで數々の深い怨を忍んでゐる。一體我々ボアをケープタウンからこの奧地へ追ひこんだのは誰だ？ イギリスだ。そして我々が血みどろで築きあげたオレンヂ自由國とトランスバール共和國を、最も卑劣な暴力で、例へ一時でも取りあげたのは誰だ？ イギリスだ。それを二年前に我々が叛亂を起して、やつと獨立と自由を取返したばかりぢやねえか。それだのに、今またこのキンバリーが世界一のダイヤモンド鑛であることが分ると、又もや狼の本性を出してこんな無理難題を持ちかけてくるんだ。我々アフリカ人はどうしてこれを忍ぶことができるか。（ボア人は元來オランダ植民者のアフリカに定住したものであるが、誇をもつて自分達をアフリカ人と呼ぶのだ。）

——もう我慢できないぞ。

——キンバリーからイギリス人を追拂へ！

市長。皆の衆、わしはあんた方の自由を愛する心も勇氣も充分信じてゐるのぢや。イギリス人を追拂ふことだつてできなくはあるまい。ぢやが、わしはあんた方とまるで違つた考へを持つとりますぞ。

——どんな考へか聞かうぢや無いか。

——戰爭は反對だとよ。

市長。さうぢや、わしは戰爭には反對ぢや。例へこのキンバリーをイギリスに讓つても、戰爭は避けた方がいゝ。それに都合の良い事には、キンバリーは國境の山の上ぢやからな。

――何を馬鹿々々しい！

――やい、もうろく爺！

――はゝ、年寄の寢言だよ。

――年をとるととかく臆病にもなるさ。

市長。（聲を勵まして、）皆の衆、わしは實際ひどく年を取つてはゐるが、まだ耄碌もしてゐなけりや、寢言を云つてゐるんでも無い。誰だか臆病ものだと云はれたやうぢやが、それならわしの右肩にある刀傷と、腿にある鐵砲傷を見て貰はう。みんなわしがボアの獨立と自由のためにイギリス人と戰つて受けた傷ぢや。今だつてイギリスがボアの獨立と自由を犯さうと云ふなら、いくら年を取つてゐたつて、わしは武器をとつて最後まで戰ふくらゐの決意は持つてゐるつもりぢや。ところが今度の事件は要するにこのキンバリーにかゝつてゐるのでわれ／＼の民族の獨立とは……

――なぜキンバリーのことが我々の獨立と關係が無いのだ。

――それが大問題ぢやないか。

――世界一のダイヤモンド鑛だぜ。

市長。皆の衆、まあわしにひと通り言はせてくれ。わしらはボアぢや。百姓ぢや。これまでみんな勤勉な百姓として、ボア全體は世界に類のない自由な國家をもつて、このアフリカの土地に自由に平和に暮らしてきたのぢや。これこそ神樣の思召に叶ふ生活といふもんぢや。これ以上わしらに何がいるのか。みんなはダイヤモンドだと云ふかも知れない。ところがそのダイヤモンドが、――いや、早い話、わしはこの土地からこの魔法のやうな石さへ出てくれなかつたらと思つとるのぢや。ダイヤモンドは我々ボアを墮落させる！　さうぢや、わしは敢て云ふが、キンバリーなんか惡魔にやつてしまふが良え。自由と平和、これこそダイヤモンドにも優るわしらの寶ぢや。わしは多ぜいの貴重な命をダイヤモンドに代へる氣にもならんし、我々の自由と平和をダイヤモンドの犧牲にする氣にもならん。皆の衆、どうぢやな？

老人。（深い同感をもつて、）なる程、さうに違ひない。市長さんの云はれるとほりぢや。わしらに一番必要なのはダイヤぢや無い、自由ぢや、平和ぢや、小麥ぢや、羊ぢや、牛ぢや。

青年B。（冷笑的に、）まあ、とにかく尊敬すべき市長さん一人の

御意見として伺つとくさ。

市長。ところが、皆の衆、大統領もわしと同じ意見でおますぞ。

皆の頭上に雷が落ちたるごとき効果。やがて人々が我に返ると同時に、だん〳〵騷がしくなる。中には憤慨のあまり泣くものもある。

――そんな譯の分らない話があるか。

――キンバリーをイギリスにやつてしまふつて!

――大統領はイギリスに買收されたに違ひないぞ。

――キンバリーはあくまで我々のものだ。

――己達の手でイギリス人どもを追つ拂つてしまへ!

――ボアの敵、自由の敵を叩き潰せ!

喧々囂々。この中でひと際高い女の聲。

女。イギリス人はとてもけちよ。キンバリーがイギリスのものになつたら、あゝ私どうしよう!

――幕――

第四場、クリューゲルとクロンイエ

人　物。

クリューゲル。(トランスバール共和國大統領、六十九歳。)

クロンイエ。(百姓で將軍、五十九歳。)

ミルラー。(大統領の秘書官。)

土人の給仕。

時。一八九四年、秋。

場　面。

大統領クリューゲルの事務室。がらんとした質素な廣間。右よりに斜めに大テーブル、前にソーファが置いてある。

クリューゲルは白髪白髯で、もう七十に近い老人であるが、剛毅と果斷の氣性が眉宇の間にも、からだ付全體にもよく表はれてゐる。今しも眼鏡をかけて、部厚な書類を注意深く調べてゐるところ。

左手のドアから秘書官ミルラーが書類をもつて入つてくる。そして大統領のテーブルの端にそつと置いて引退らうとする。

大統領。(顏をあげて、)ミルラー君、現在トランスバール共和國に在留してゐる外國移住民は總數どれだけかな?

秘書官。はい、確か四萬人と記憶してをりますが、精確な事は唯今取調べました上で……

大統領。いや、良い。その中でイギリス人の數は?

秘書官。ざつと三萬人と記憶してをります。でもやはり精確な

ことは……

大統領。ふむ。(眼鏡をはづしながら、獨語するやうに、)これは外國移住民が國民協會の名でわしによこした参政權に對する嘆願書ぢやが、署名者が三萬二千名とある。してみると、イギリス人が全部と、後はドイツ人やスペイン人が少し交つてゐるだけぢやな。

暫く間。

秘書官。閣下、私の考へでは、これはみなあのセシル・ローヅの差金によることに相違ありません。もと〱この國民協會なるものが、セシル・ローヅの差金でできたものでありますし……

大統領。それはわしにも分つてゐる。

秘書官。恐れ入ります。ですが、あのセシル・ローヅといふ奴は、實に惡魔のやうな恐ろしい野心家ではございませんか。以前にはこのトランスバールもオレンジ自由國も含めて、ザンベシ河から南は全部英領植民地にしなければならぬなんてほざいてゐましたつけが、最近はまだ C a C とか云つてエヂプトのカイロからケープタウンまでアフリカの大縱斷鐵道なんかを計畫してゐるんですからね。隨つて何とかして私共の國を自分の統治下に置かうとして躍氣になつてるに違ひありません。

大統領。わしも十年ほど前にセシル・ローヅに一度訪ねて來られた事がある。丁度ランドには大金鑛が發見されるし、ブレーミヤにはダイヤモンド鑛が發見された時ぢやつた。つまりキンバリーと同じに、南阿特許會社へ割讓してくれと云つてきたのぢや。だが、まさかトランスバールの心臟とも云ふべき場所をイギリスに讓る譯には行かないので、セシル・ローヅにはお氣の毒ぢやつたが、素手で歸つてもらつた。

黑人の給仕が名刺を盆にのせて持つて入つてくる。

大統領。(名刺を見て、)ほう、これは珍らしい。黑色クロンイエぢや。早速會はう。ミルラー君、いゝから君がこゝへ案內してくれ。

秘書官。畏りました。

秘書官と給仕退る。まもなくクロンイエが入つてくる。秘書官退場。

クロンイエは六十に垂んとしてゐるが、背高く、頑健で、粗末な百姓の風をしてゐるが實に堂々としてゐる。顏は嚴めしく、黑人のやうに眞つ黑で、殊に眼光が射るやう。彼は片手に綠の

廣い帽子を摑み、泥のついた長靴をはいてゐる。

大統領。(喜ばしげに出迎へる。)やあ、獨立戰爭の英雄、ようこそ！

クロンィエ。お久しぶり。(二人は心から抱き合ふ。それから卓を隔てゝ對座する。)

大統領。いつ町へ出て來られたな。

クロンィエ。二日前ですよ。今度はわしも綿花の栽培を手びろくやらうと思ひましてな、それについて色々町に用ができたもんで。

大統領。ほゝう、それは結構な事ぢや。ほんとによくわしを思ひ出して呉れられた。もう五六年も會はんかつたからなあ。

クロンィエ。クリューゲルさんの事はいつも思ひ出してゐますが、唯會ひたいといふだけの事ぢやつたら、國務で多忙なあんたをかうして煩はしはしなかつたのぢや。

大統領。なる程。ではあんたも近頃イギリス人の騷ぎをるのを心配して來られたと見えるな。

クロンィエ。お察しのとほりぢや。

大統領。クロンィエさん、このイギリス人といふ奴は、いつも畑を食荒らすばつたと同じで、アフリカにとつては一番厄介な災害ぢやよ。(高く笑ふ。)だが、クロンィエさん、今度の件については御心配御無用ぢや。イギリス人は植民者に歸化權を與へろの、參政權をよこせのと騷いでゐるが、わしはきつぱり拒絕するだけぢや。あいつらが經濟的政治的にわが國の支配權を得ようといふ下心は見え透いてをるんぢやから。これまでも保護關稅を設けたり、植民者に納稅と兵役の義務を課したりしてイギリス人の勢力擴大を極力防いではきたが、この際もつと徹底的に壓迫する方針ぢや。

クロンィエ。さうですか。それだけ聞けばわしも安心ぢや。これでもうわしの用は足りたのぢや。

大統領。それから、クロンィエさん、これはまだ機密に屬するから內容をお話する譯に行かんが、わしは今オレンヂ自由國のライツ大統領とより〳〵相談してゐる事があるのぢや。まあ一言で云へば、商業上の相互扶助と、イギリスに對する攻守同盟に關する件ぢや。まあわしの考へでは、オレンヂ自由國とわが國とは同じ民族で、利害が全然一致してゐるのでこの條約は大丈夫成功するつもりぢやが、そしたら我々はイギリスと完全に經濟的に分離できるし、またいざといふ場合にも大丈夫獨立を維持してゆける自信ができると思ふ。

クロンィエ。(いかにも愉快さうに。)わしはやつぱり田舍にひつ

こんで、安心して百姓をやつてをれば良かつたのぢや、は、。

大統領。イギリスが印度でどんな事をやつたか、エヂプトや支那でどんな事をやつたか、あいつらの惨虐無道なやり方をわしらはようく知つてをる。だが、ボアは断じてイギリスのその手には乗らんつもりですぞ。

クロンイエ。(立上る。)クリューゲルさん、昔モーゼがイスラエルの民を率ゐてエヂプトへ渡つたやうに、あんたは我々ボアをこの恵まれた土地へ導き入れて、今日の光榮ある國家を建設された。そしてボアの獨立と自由のために七十年の生涯を獻げて今もよく戰つてゐて下さる。改めてわしに深い敬意と感謝を述べさせて貰ひますぞ。(堅く握手する。)ぢや、さやうなら。

大統領。クロンイエさん、もう歸るんですか。

クロンイエ。これ以上あんたを邪魔したくない。

大統領。(立上つて。)さうですか。ぢや二三日うちにまたゆつくり會ふ時を作りませう。

クロンイエ。わしはこれからすぐに畑の方へ歸るつもりですぢや。

大統領。それは残念な事ぢや。ふむ、それでは……(立つて見送る。)

クロンイエ。(ドアの所で。)クリューゲルさん、總てのボアが百姓であるやうに、今ぢやわしも一介の百姓ぢや。これからまた田舎へ行つたら、せつせと綿花の栽培でもやつて暮らすつもりですぢや。だが、クリューゲルさん、もしイギリス人共がちよつとでもボアの獨立を犯さうとするやうだつたら、わしはいつでも武器を取つて馬で驅けつけますぞ。

大統領。(相手を擁抱くやうにして。)「敵の位置を知ること鷹の如く、敵の弱點を知ること狼の如し」と恐れられたクロンイエさんぢや。先年の獨立戰爭では優勢なイギリス軍をドランケンスベルグで蹴飛ばした黑色クロンイエぢや。ボアは皆あんたを力にしてゐるのぢや。

クロンイエ。では御機嫌よう。(出てゆく。)

大統領は二三度部屋をあちこちしてから、テーブルの側へ行つてベルを鳴らす。

大統領。(入り來るミルラーに。)夕方までに大臣達に會議室へ集まつて貰つてくれ。緊急な議事があるからと云つてな。

秘書官。はい、畏りました。(去る。)

第五場、勞働者の前で帝國主義政策を述べるセシル・ローヅ。

人物。

セシル・ローヅ。
司會者スミス。
外にローヅの秘書官ジーダン、及び多數の男女勞働者。

時。一八九五年八月。

場面。

ロンドンなる或る公園の廣場。正面奥なる夏の樹立を背にして演壇ができてゐる。そして男女の勞働者がいつぱいに廣場を埋めてゐる。群集の中にセシル・ローヅが秘書官ジーダンと共に交つてゐる。

失業者大會が開かれてゐるのだ。「勞働者に食を與へよ、」「勞働者に仕事を與へよ、」等々のスローガンが張出されてゐる。

猛烈な拍手の中に幕が上る。

――政府は己達をひぼしにするつもりなんだ。

――資本家どもをぶつ殺せ！

――××だ！ ××の外に己達の外にもう救はれる道は無えぞ。

――おや、セシル・ローヅぢやねえか。

――どれ、どこだ？

――セシル・ローヅが己達の演説を聞きに來てるぞ。

司會者。（演壇に立つ。）同志諸君、私は諸君に向つて次の事を報告し得ることを非常に光榮に思ひます。我々は偉大なる植民政治家として誰知らぬ者のないセシル・ローヅ氏が、最近南アフリカからロンドンへ歸つてゐられる事を諸君と共に新聞で承知してをりました。然しながら、身に寸暇の無い氏が、我々の失業者大會へ傍聽に來られようとは、全くもつて豫期しなかつた所であります。これは我々勞働者として實に感激に堪へない次第であります。それでこの滅多にない機會を更に有意義たらしめたいために、一場の演説をお願ひしましたところ、セシル・ローヅ氏は早速快諾して下さいました。では、ケープ植民議會の議長であり、デ・ビーア・ダイヤモンド會社及び南阿特許會社の社長であり、近くはギクトリア女皇陛下の樞密顧問官となられたセシル・ローヅ氏を御紹介致します。

群集の盛んな拍手の中から次のやうな聲が聞こえる。

――我々の敵だぞ。

拍手喝采。）
勞働者諸君にしても
りませうや。我々は
大英帝國四千萬の
ない。そしてそれは
してそれが可能であ
へればイギリス帝
くるのです。即ち
——過剩人口を收
ならない。同時に
ために新しい市場
ふ事であるが、決
、恐るべき××を
る必要があるので
のも、必竟そのた
正しい理解と支持
於いては勞働階級

の利益と幸福のために獻身せんことを、こゝに諸君の前に誓ふものであります。

盛んな拍手の中にローヅは靜かに壇を下る。でも、喝采に交つてこんな叫びが聞こえる。

――ローヅに瞞されるな！

――勞働者は植民地××に絶對反對だ！

司會者。（急いで壇に上る。）諸君、我々は失業者が何を求め何を苦しんでゐるかをセシル・ローヅ氏に聞いて頂いたばかりでなく、非常に有益なお話をきく事ができて、これだけでも本日の大會は大成功だつたと云ふ事ができます。諸君、この上は我々がセシル・ローヅ氏に服從と感謝を表するために、示威行列をもつて氏をホテルまで送つて行きたいと思ひますが、勿論異議はございますまいな。

――贊成。異議なし。大贊成！

――セシル・ローヅ萬歲！

司會者。では直ちに行列に移ります。できるだけ靜肅に禮儀正しく願ひます。

司會者はローヅと秘書官ジャーダンを伴つて先頭に立ち、右手に進む。勞働者の群は列をなしてぞろ〳〵後につゞく。

廣場に勞働者が五六人だけ殘る。

若き婦人勞働者。ローヅつてどんな偉い人か知らないけど、あの人の云つた事は私にや一向分りやしない。私達にアフリカへ行つて、黑ん坊の食べ物を掻つ拂つて食べろとでも云ふのかね。

勞働者A。多分さうだらうよ、はゝ。

勞働者B。さうぢや無えよ。イギリスの資本家様はこれからアフリカへ出店を出すから、己達に搾られるためにそこまで出かけて行けつて云ふんだよ。

勞働者C。どうだい、己達の仲間が餓ゑた犬のやうにローヅの後からぞろ〳〵とついてゆく態は！ エンゲルスが云つたとほりだ、イギリスが植民地の搾取に立つてゐる限り、勞働者もほんと自由になれやしねえ。

若き婦人勞働者。あゝ、私にや分らない！ イギリスは世界一の金持國だと云ふのに、私達を養ふ事ができないなんて、まだその上にアフリカまで取つてしまはなくちやならないなんて！

――幕――

第六場、戰爭が始まつた！

人物。

少年兵ヨハンネス。

老年兵。（彼の祖父。）

百姓數名。（女も交る。）

少年少女の群。

黒色土人二名。

時。一八九九年一〇月。

場面。

一筋の田舍路が舞臺を横切つてゐる。背景は廣々とした田野であちこちに農家と、羊の群がゐる牧場とが見える。

少年兵ヨハンネスを取圍んで、男女の子供が五六人、路傍に塊まつてゐる。

少年兵は十五才、半ズボンのふだん着に大きな劍をつけて、銃を持つてゐる。外の男の子たちは羨ましさうにして、彼の劍や銃に觸つて見る。

朝ではあるが、強い烈しい光。

少年一。ヨハンネス、この劍は本當に切れるのかい？

少女一。あんたにこの重い鐵砲が擔がれて？

少年兵。おい、冗談を云ふのは良い加減にしなよ。己あもうお前たちと戰爭ごつこをしようとしてるんぢや無いんだ。己あイギリス人と本當の戰爭をしに行くんだ。

少年二。お前が兵隊になれるのに、どうして己あ成れねえのかなあ。

少年兵。お前は若すぎるんだ。己あ十日前に十五になつたが、お前はやつと十四に成つたか成らねえぢや無いか。

少年二。だつて相撲ならいつも己あお前に勝つてるぢやねえか。

少年三。己あ十二だけど、イギリス人なんかに負けるもんか。ヨハンネス、己も戰爭に行かれるやうに、お前からおぢいさんに頼んで見ておくれよ。

少年兵。何を分らねえ事を云つてるんだな、お前達は？　女と子供は村に殘つて畑と羊を守つてくれりや良いんだ。そのかはりボアの獨立と自由は我々男子が誓つて護つてやる！

少女二。偉いわね、ヨハンネス。あたしあんたをキスしてあげてよ。

少女二は少年兵をキスする。みんな羨ましさうに見てゐる。百姓が二人つれて右手から出てくる。

百姓一。（立止まる。）おや、ヨハンネスが武裝してるでねえか。
百姓二。へえ、いよ〱戰爭か。
少年兵。おぢさん達あまだ何にも知らねえのかい。ボアはけさイギリスに對して愈ゝ宣戰を布告したんだよ。だから己あこれからおぢいさんと一緒にプレトリアへ出かけて行くんだよ。
百姓一。さうかい。そしておぢいさんは？
少年兵。そこいらの農家を廻つてるんだ。みんなに戰爭の譯を話してやつてるんさ。やあ、おぢいさんがやつて來た！

少年少女たちは歡呼して迎へる。

少年兵の祖父は六十四五、鼠緑色の農服に緑の廣い帽子を冠り藥莢を肩から脇へ斜めにかけ、銃と劍を持つてゐる。彼の後から武裝した百姓が二人、武裝しない百姓が二三人ついてくる。子供を抱いた主婦、若い女も交つてゐる。

老年兵。（百姓一、二を認めて、元氣よく。）やあ、お前さん達はまだ支度してゐねえだな。
百姓一。とう〱始まつたゞね。
老年兵。何を云つとるんぢや、お前さん。ボアはこれ以上我慢ができるもんかね。考へても見るが良えよ、五年間トランスバールに居住した外國人には選擧權を與へるの、ヨハネスブルグにイギリスの自治を許して要塞を破壞してしまへの、學校で英語を教へさせるのつて、我々をまるで屬領扱ひぢや。この前ジェームソン博士の侵略事件で大味噌をつけたもんで今度は別の手で來たんぢや。何くそつ、あの時と同じに今度もイギリス軍を全滅させてやらにやならん。お前さん達もすぐに武器を取つて己たちと一緒に行くが良え。
百姓二。それは勿論ぢやが、オレンヂ自由國は己達と一緒になるかね？
老年兵。當り前ぢや。すでに攻守同盟が出來てゐるのぢや。今頃は十五歳以上のあらゆるボアの男子は、鋤や鎌を投げすてて、そのかはりに武器を手にして、馬や汽車で全國の隅々から首府を目がけて一散に驅けつけてゐるのぢや。イギリス軍なんか恐れるもんか。我々の總大將はジューベルトぢや。黒色クロンイエもをるぞ。それに己たちには何よりも神と正義がついてゐるのぢや。さあ、行かう。殘忍横暴なイギリスを倒すんぢや。
少年兵。（飛上つて。）共和軍萬歳！
老年兵。ヨハンネス、さあ汽車に間に合ふやうに。

老年兵、少年兵、武裝した百姓達は元氣よく右手へ去る。少年

少女の群は萬歳を唱へながら送つてゆく。百姓達だけ殘る。老年兵が話してゐた間に黒色土人も二人來て交つてゐる。

百姓一。困つたなあ。己ん所にや鐵砲が無えだ。サーベルはあつた筈ぢやが……

百姓二。己のピストル貸してやらう、己れや鐵砲があるだから

百姓一。さうか、有難え。（二人は急いて去る。）

おかみさん。（百姓の亭主に、）さあ、お前さんもぐづ〱しちやゐられねえよ。

亭主。留守は大丈夫だらうかな。

おかみさん。留守がどうだつてのさ。私が男を作るとでも思つてるのかね。男なんて、子供とよぼ〱爺さんの外、誰も殘りやしないぢや無えか。

亭主。馬鹿な。暮らしの事だよ。

おかみさん。そんな事餘計な心配だよ。私あ二人前ぐらゐ野良で働くからね。

亭主。さうか。とにかく歸つて支度しよう。

この二人も去る。後に土人が二人だけ殘る。

土人一。また戰爭か。己あ厭ぢやなあ。

土人二。やれ〱、また己達もひつ張り出されるか。

土人一。さうぢやらうか。

土人二。極まつとるよ。己あもう覺悟した。

土人一。仕方が無いなあ。（溜息する。）だが、イギリス人をやつつけるのは大賛成ぢやよ。これで、ひよつとイギリスが勝たうもんなら、己達あもつとどえらい目に會ふでな。

土人二。さうとも、己達のためにやどうしてもボアに勝つて貰ひたいものぢや。同じ白人でも、ボアは己達と同じアフリカ人だし、イギリス人のやうに野蠻ぢや無いよ。

土人一。さうぢや、己達もやつぱしボアを助けて、イギリスの奴等を負かしてやらうや。結句その方が己達の得ぢや。

土人二。武器をどうする？

土人一。なあに、プレトリアへ行きや何とかなるよ。とにかく出かけよう。

二人は去る。

——幕——

第七場、モッデル河畔の戰鬪。

人物。
クロンイエ。
副官。
將校。
兵卒多勢。

時。一八九九年一一月二八日、夜。

場面。

モッデル河の畔。右手に破壞された鐵橋の奇怪な形が、それとなく闇の中に浮いて見える。川の流が音高く聞こえる。
正面は河畔の草原で、灌木の叢があり。數門の重砲と輕砲が置いてある。
背景には岩石でできた險峨な丘が闇の中に朦朧と消えてゐる。
鐵橋に近く、川に臨んで歩哨が一人。
草原の上、砲のまはりで數名のボア兵が小さい焚火を圍んで雜談に耽つてゐる。あちこちに眠つてゐるもの數名。今しも一人が暗い所で便をすまして、ヅボンを直しながら仲間の方へ戻つてきながら、

兵卒一。有難えぞ、モッデル河はどん／＼水嵩を增してくる一方だ。
兵卒四。さうでも無かつたら、いくら鐵橋をぶつ壞したつて、イギリスの奴等どん／＼河を渡つてくるからね。己あちやんと知つとるが、この近くに大丈夫二ヶ所は渡瀬があるんだ。
兵卒一。川幅は大丈夫二十四メートルにはなつとる。矢のやうに流れてらあ。
兵卒三。ざつとふだんの倍だな。
兵卒二。神はボアに幸し給ふさ、アーメン。
兵卒四。もうかうなりや、イギリスの奴等に一歩だつて前進させるもんか。キンバリーは完全に袋の鼠だよ。
兵卒二。さう云やあ、キンバリーはもう落ちてもいゝ頃だな。
兵卒三。さうだよ、セシル・ローヅの野郎、もうわが軍の捕虜になつとるかも知れんぞ。
兵卒四。プレトリアぢや、市民は籠を作つて待つてるつて云ふぢや無いか。
兵卒一。何だい、その籠つてのは？
兵卒四。セシル・ローヅを捕虜にしたら、その籠に入れて町ぢゆう引きずり廻すんだとよ。それから私刑にするつもりだらうて。南阿のナポレオンも末路憐むべしさ。

一同哄笑する。そのために大砲の陰に眠つてゐた將校がむつく

りと起上つて、あくびをしながら彼等の側へゆく。

將校。（立つた儘時計を覗いてみて。）もう五時か。おきに夜が明けるな。

兵卒二。大尉殿、けふはイギリス軍が攻擊してきませうか。

將校。さあ、あいつらに攻擊をやる勇氣があるかな。何しろああ連戰連敗ぢやもう戰ふ意志も碎けてしまふぢやらう。だつて考へて見ろ、己達のジューベルトはナタールへ暴れこんでレヂースミスを包圍してしまふし、オレンヂ自由國の友軍はガテークルとかいふ將軍を打敗つてしまふし、己達の軍隊はキンバリーを包圍してよ、おまけに敵の救援軍を遮斷してここに頑張つてゐるんだらう。あいつらだつてちよつとは踏み出せまいよ。

左手の闇の中から、クロンイエ大將が馬に乘つて現はれる。二人の副官を伴つてゐる。

クロンイエは不意にぴたりと馬を留めて、闇をとほして左方の草原の上にじつと目を据ゑる。

クロンイエ。（いきなりピストルを取出しながら大聲をあげて。）打て、野郎共、打て！

同時に彼は發射する。焚火のまはりの兵士達は驚いて銃をとつて驅け出す。眠つてゐた兵士共もあはてゝ起き上り、銃を探しまはる。倒れた誰々が叫ぶ。

——敵だ！　夜襲だ！　打て！

ボアの兵士達は左手に向けて一せいに射擊を開始する。敵も應戰する。

まもなく敵は追ひ散らされる。あたりは漸く明るくなり始める。將校を始め、兵士は皆クロンイエの前に整列する。

クロンイエ。貴樣たちは敵の斥候がこゝまで忍び寄るのも知らんで、一體何をしてゐたんぢや、馬鹿野郎共！

一同恐縮して石のやうに堅くなつてゐる。

クロンイエ。このとほり流の音の高いのを利用して、敵は忍んでくるのぢや。皆川ぶちに立つて、步哨と一緖に見張をしろつ！

將校。はいつ。

クロンイエ。（副官の一人を顧みて。）イギリス軍もけさは愈ゝ始めるつもりぢやな。

殆んど同時に、對岸の敵から轟然たる大砲の音が起る。續いて二發、三發。

クロンイエ。ようし、準備はできてゐる。みんな部署につけ。そして命令を待て。

クロンイエは副官をつれて、急いで後方の岩の丘の方へ登つて見えなくなる。

兵卒達は大砲のまはりで忙がしく働く。

敵の砲撃はだん〱盛んになる。

兵卒一。畜生、ぼん〱やりやがるな。

兵卒四。えつ、こつちはまたなぜ打たせねえんだ。

兵卒三。今に見ろ、今に見ろ！

傳令が馬で飛んできて、將校に何か傳へて去る。

將校。もの共、さあ用意はいゝか。打方始め！

轟々たる砲聲。

曉の光の中に戰は烈しくなつてゆく。

――幕――

第八場。キンバリーのセシル・ローヅ。

人物。

セシル・ローヅ。

祕書官シャーダン。

密使。

イギリス義勇軍將校と兵士多勢。

時。一九〇〇年一月。

場面。

キンバリー市の郊外にあるイギリス軍の堡壘の内部。堡壘は右手の原に向いてゐる。左手には遠景として、嶮しい山かげにあるキンバリーの町の一部が見える。ダイヤモンド會社の特に巨大な建物が目立ち、採掘で荒れたダイヤモンド鑛も見える。

堡壘の中では一人の將校と義勇兵が十人あまり、ごた〱と朝食をやつてゐる。

歩哨が一人朝の光の中を歩き廻つてゐる。

歩哨。（どなる。）我々のナポレオンのおいでだ。

將校。ほう、もう八時になると見える。おい、みんな急いで食べてしまへ。

義勇兵一。我々がどんな食物で我慢してゐるか、一度見て貰ふのも悪くないな。

義勇兵二、三。さうだ、さうだ。

義勇兵四。おい、馬鹿を云ふもんぢや無い。己あ信じるが、セ

シル・ローヅだつて聯隊長だつて、この際己達よりうまい物を食つてるわけでもあるまいぜ。

將校。そのとほりだ。考へても見給へ、我々はもう三ケ月以來ボア軍のために完全に封鎖されてゐるんだ。糧食は缺乏するばかしだ。しかも救援軍はいつやつてくるか分りやしないんだ。こんな時に食物の事をとやかく云ふなんて、まつたくイギリスの體面に關するぞ。

セシル・ローヅが馬に跨がり、秘書官ジャーダンを伴つて左手より現はれる。彼はソフト帽をかぶり、褐色のスコッチ服に、白ヅボンをはいてゐる。

兵士は一同起立、擧手の禮で迎へる。

セシル・ローヅ。お早う、諸君。

將校。お早うございます、ローヅ殿。

ローヅ。どうです、異狀はありませんか。

將校。昨夜一時頃に二百メートル先に敵の斥候らしいものを數名發見しましたが、直ちに射擊して追ひ散らしました。

ローヅ。毎日同じ事の繰返しだな。

將校。ローヅ殿、救援軍はいつやつてくるでせうか。

ローヅ。我輩も何よりそれを知りたいんだが、不幸にして何にも分らん。然し我輩は諸君の前で、これだけは斷言する事ができる。イギリス軍は絶對に我々を放棄する筈が無いから、必ずやあらゆる困難と犧牲を冒して我々を救援にやつてくるに違ひない。そして早ければ一週間、遲くも一ケ月以内にはこゝへやつて來るだらうといふ事だ。(間。)同時に我輩はかう信じてゐる、諸君はまた必ずやあらゆる困苦と缺乏に堪へて、救援軍の到着するまであくまでもこのキンバリーを死守して大英帝國臣民の名を辱めぬだらうといふ事だ。

將校。誓つて、我々は御期待に背かないつもりであります、ローヅ殿。

ローヅ。我輩もあくまでこのキンバリーと、そして諸君と運命を共にする覺悟でゐる。でなかつたら我輩は、開戰の一日前にわざ／＼この地へ乘りこんでくるやうな好奇はしない筈だと諸君も思つてくれるでせう。では、また。

秘書官。社長、今度は次の堡壘へ行かれますか、それとも病院へ？

ローヅ。病院へ廻る事にしよう。あそこの衛生設備にはまだ改善しなくちやならぬ所が多いやうに思ふから。

將校。ちよつとお待ち下さい、ローヅ殿。一つお願ひがあります。

ローヅ。何だな。

將校。御存じのとほり、こゝは敵の陣地から一哩とは離れてをりません。双眼鏡で覗いたら、ローヅ殿の姿は敵の目にすぐ見分けがつきます。殊にさういふ目につく服裝をしてをられますから、かうして朝晩一定の時刻にこゝを見廻はれる事は、非常に危險です。つまり御自分を敵の標的に曝してゐられるやうなものです。今後はどうか前線の巡視は止めて頂きたいと思ひます。これが私の衷心からのお願ひであります。

ローヅ。(微笑して、)我輩はキンバリーが救援軍によつて救はれるまで、いや、南阿統一の大理想が實現されるまで絕對に死なないといふ自信を持つてゐる。安心してゐ給へ。

將校。でも、ローヅ殿……

不意に右方遠くで疎らに射撃の音が起る。

將校。おや、攻撃だ。步哨、何をしてるんか。

步哨。射撃は敵の前線で起つてをりますが、敵の姿は一向に見えません。おや、誰かやつてきます。誰か一人だけこの堡壘を目がけて一散に進んできます。

將校。みんな打つ用意をしろ!

ローヅ。(馬上で双眼鏡を目にあてゝ、)どうも敵では無ささうだな。敵なら一人だけ飛んでくるといふ筈が無い。

步哨。敵の射撃は我々を狙つてゐるのでは無く、あの男を狙つてをります。

ローヅ。さうだ、確かに味方だ。諸君、打つてはいけない。ほら、ハンケチを出してしきりに振りながら呼んでゐる。

步哨。危ないつ! あつ、やられた! あ、起上つた。偉いぞ。(思はず大聲で、)早く、早く、早く!……

暫く間。一人の青年が命がけで堡壘の中へ飛込んでくる。顏は埃まみれて、ぼろ〳〵の服をつけてゐる。

將校。君は一體誰か。

密使。(喘ぎ〳〵辛うじて、)私はイギリス軍總司令官ブラーツ將軍からの密使であります。乞食に化けたり、浮浪人になつたりして、やつとボア軍の封鎖を切り拔けてこゝまで來たのであります。どうか水を下さい。

將校。おい、早く水をやれ。

密使が水を飲んでゐる間にローヅは馬から下りて彼の側へ行く。

ローヅ。我輩はセシル・ローヅだ。(密使の手を堅く握る。)御苦勞だつた。何よりもまづ君の無事な到着をお祝ひします、——君のためにも、我々全體のためにも。ところで勇敢な君は

我々にどんな報知を持つて來られた？　我輩あての書類は？
密使。私は貴下と、こゝの守備隊聯隊長あての書狀を持つてたのでありますが、幾度も敵に奪はれさうになりましたので殘念ながら途中で破棄してしまひました。然し私は傳へるべき事はよく承知してをります。
ローヅ。救援軍の狀態はどうか。いつ頃こゝへくる豫定か。
密使。殘念でありますが、救援軍はモッデル河の戰鬪でクロンイエの軍隊のために大損害を蒙つて、一時退却の止むなきに到つたのであります。そればかりでなく、ガテークル將軍はステルンベルグで、ナタール植民地ではレヂースミスで、ブラーツ大將の軍隊はスピオンスネックで何れも敗北しました。
ローヅ。（失望と憤怒のために青くなる。）何といふこつた！　ぢや我々もキンバリーもボア軍の手に渡してしまふつもりか。君は一體何のための密使なんだ！
密使。まあ終りまで聞いて下さい。本國の議會では、大至急十五萬人の軍隊をこちらへ派遣することを決議しました。そして總司令官としてロバーツ大將、參謀長としてキッチエナー少將が任命されました。この大軍隊はもうケープタウンへ續々到着しつゝあります。
ローヅ。有難い！　さうなくちやならぬ。イギリスは十五萬どころか、五十萬でも派遣する事ができる筈だ。それに、參謀長としてキッチエナー少將を選んだのは素的だ。あの男は植民地戰爭の經驗が豐富だし、我輩の政治上の親友でもある。
密使。長くとももう一ケ月の辛抱であります。救援軍は必らずやつて來ます。だから如何なる事があつても、それまでキンバリーを持ち耐へよ、これが使命であります。
ローヅ。有難う／＼。（にこ／＼して再び密使の手を堅く握る。そして兵士達を見廻しながら。）諸君も聞かれたとほりだ。我々も遠からずして救はれるぞ。（再び密使に向ひ。）君はこれから聯隊長の所へ案内して貰ふがいゝ。そこで我輩はまた君に會つて、いろ／＼委しい情勢を聞かせて貰はう。（馬の側へ行つて、あぶみに足をかけながら。秘書官に。）ふむ、イギリス議會の分らず屋共も、今度といふ今度は南阿問題の重要性に目が醒めたに違ひない。軍事案にも大して反對者は無かつたと見えるよ。
密使。ローヅ殿、ところが一部少壯議員の中には猛烈な反對運動があつたとロンドン・タイムスは書いてをります。
ローヅ。（馬上から。）誰かね、その反對者といふのは？
密使。ロイド・ジョージとかいふ若い議員が先鋒に立つてる

さうであります。

ローヅ。ロイド・ジョージ？　聞いた事の無い名だな。きまつてゐる、賣名のための芝居には成程多少のきゝ目はあるだらう。で、どんな理由で反對なのか。

密使。何でも今度の戰爭は、あくまで正義人道に叛る掠奪と侵略であつて、イギリスの光輝ある歴史に永遠の汚點となる性質のものだと云ふのであります。

ローヅ。なる程、正義人道の敵か。何といふ馬鹿な寢言だ。我我には大英帝國の利害を外にして、正義も人道もありやしない。何ならそのロイド・ジョージとかに南阿特許會社のちよつとした位置を與へてやつてもいゝ。彼はその日から直ちに我我の政策を理解し、有力な味方の一人になること請合だよ。では、また。

（セシル・ローヅと秘書官去る。）

――幕――

第九場、鬪爭か、死か。

人物。

クロンイエ。
クロンイエ夫人。
砲兵長、アルブレヒト。
少年兵ヨハンネス。
若き女の兵士、使者、兵卒多勢。

時。一九〇一年二月二五日。

場面。

左手をそゝり立つ嶮しい岩山、右手はそれにつゞく嶮しい急坂、その間にあるクロンイエ軍の司令部。

司令部と云つても假壕で、右手は堡壘になつてをり、左手は岩壁にいくつも大きな穴を穿ち、隱れ場所にしてある。しかし今堡壘は酷たらしく破壞され、大木は折れ裂け、戰死者はごろごろ折重つて倒れてゐる。その中には婦人や、土人や、子供なぞも交つてゐる。

彼等の中にクロンイエ夫妻が立つて、上を仰向いてゐる。岩山の樹木の梢に若い副官が攀ぢ登つて、片手に鏡をもつて、右手の遙か遠方を眺めてゐる。

正午。烈しい酷暑。

副官。（樹の上で、鏡を日光に反射させて二三度ぴか〳〵やつてから、下へ向いて、）閣下、デ・ウェット將軍からの日光通信でありま

す。こゝを脱出したフェネランの隊は無事に敵の包圍を破つて、デ・ヴェットの軍隊に合したさうであります。

クロンイエ。（大きくうなづいて、）さうか。有難い。

副官。こちらからの通信は何と云つてやりませうか。あ、ちよつと待つて下さい。向ふからまた通信を送つてをります。

暫く間。

副官。（また二三度鏡をぴか〳〵やつてから下へ向つて、）『大統領より電報、持ち耐へよ。救援直ちに到らん。讃美歌六十四の八。』

クロンイエ。（夫人に向ひて、）讃美歌六十四の八は何ぢやつたか。

夫人。『されど神は不意に彼等を討ちて、彼等を痛むべし』だつたと思ひます。

クロンイエ。さうか、ふむ、さうか。（上へ向いて、）おい、返信ぢや。『われらの糧食は缺乏せり。されど予は神の助けによりて、あくまで敵を北方に打散らさんとす』ぢや。あゝ、それからと……（夫人に向ひて、）あれは何番ぢやつたか、『彼等は車馬に身を托したれど、我等はたゞ我らの主なる神の御名のみを思へり』といふ讃美歌は？

夫人。たしか二十の八だつたと覺えてをりますが……

クロンイエ。よいか、讃美歌二十の八ぢや。それがすんだらもう降りて來い。

副官。はい、閣下。

そして彼は樹上で日光を鏡に反射させて、しきりに通信を送つてゐる。

夫人。デ・ヴェットの軍がもう敵の包圍のうしろへ迫つてゐるんですから、私たちもう少しの頑張りですわね。

クロンイエ。（考へつゝ、）ふむ。

夫人。これで、二十四時間の休戰提議を敵が承諾してさへくれれば、味方を休養させて陣容を立て直す事もできませう。使者はまだ戻つて來ないでせうか。

クロンイエは默々として考へてゐる。

樹の梢で盛んに通信をやつてゐた副官が、不意にどさりと彼等の足元へ落ちてくる。

夫人。あつ、副官が！（駈けよる。）死んでゐます。頭を打たれたんです。

クロンイエ。（唸るやうに、）うゝむ。

この時敵側から一せいに射撃の音が起る。つゞいて殷々たる砲聲。廊下から、使者が數名の從卒をつけて、驅け戻つてくる。

そして苦しげに息を彈ませてクロンイエの前に立つ。

クロンイエ。拒絶されて來たな。
使者。左樣でおります、閣下。
クロンイエ。敵の誰と會つたか。
使者。ロバーツ總司令官の前へ連れて行かれました。それで、クロンイエ閣下の使者として參つた事を述べて、ボア軍は戰死者の屍體を埋葬する必要に迫られてゐるから、二十四時間の休戰を提議したいと話しました。するとロバーツ大將はにつこり笑つて、イギリスの軍隊は今どんな理由があるにせよボア軍に少しでも休息を與へる理由は無い、我々として承認する事ができるのは、ボア軍の無條件降伏があるだけだといふ返事でありました。
クロンイエ。さうか。御苦勞だつた。
使者。それで、もし降伏しないならば、百二十門の大砲でもつてボアの最後の一人までも紛碎してやらうと云つてゐました。
クロンイエ。よろしい。ぢや己達も最後の一人になるまで戰ふまでぢや。

砲兵長アルブレヒト、正面奥から崖を傳つて壍壕の中へ飛込んでくる。彼は頭を繃帶してゐる。そしてクロンイエの側に立つても、息がはづんですぐには何にも云ひ得ないでゐる。

クロンイエ。（睨む。）何ぢや？
砲兵長。申あげます、閣下。大砲がまるで役に立たなくなりました。敵の砲彈で五門は完全に破壞されてしまひました。辛うじて使へるのが唯一門殘つてゐるだけであります。
クロンイエ。砲彈はあるか。
砲兵長。二十箇とはありません、閣下。
クロンイエ。それぢや殘つた一門の大砲で、砲彈のあるかぎり打ち續けい。
砲兵長。はいつ。
クロンイエ。まだ用があるのか。
砲兵長。はい。
クロンイエ。早く云へ。
砲兵長。閣下、敵の百二十門の大砲に對して、味方はたつた一門の大砲であります。敵が十萬の大軍をもつて我々を包圍してゐるのに對して、味方は三千人足らずの小勢であります。それさへ大部分は、餓えて、疲れ切つて、病氣になつてをります。それに友軍の形勢にしましても、キンバリーはすでに奪還されるし、到るところ味方は不利な位置に立つてをります。

クロンイエ。だから何だと云ふんぢや？
砲兵長。閣下、私は敢て申あげます。我々は全力をつくして、最早戰へるだけは戰つてきたのであります。例へこゝで降伏したにしても、決して耻辱では無からうと考へるのであります。閣下、これ以上兵士を、兵士ばかりでなく女子供を死なせる事は……
クロンイエ。（眼を怒らして。）臆病者！（そしていきなり夫人の手を堅く握つて。）わしはボアの自由のために戰つてゐるのぢや。ボアはイギリスの壓制に屈服するよりは、むしろ死を選ぶのぢや。
夫人。（呟く。）自由に生きるか、死か。
クロンイエ。さうぢや、それがボアの心ぢや。だからわしは最後まで降伏はしない。さあ、みんな部署につけ！ 戰をつゞける！

塹壕の近くで一箇の砲彈が轟然と破裂する。そして砲兵長と兵卒が一名倒れる。

使者。あ、砲兵長がやられた！
夫人。（倒れた二人を一人々々檢べる。）砲兵長は即死です。兵卒は息があります、腹をやられてゐます。
クロンイエ。負傷者を早く穴へ運べ。（使者に向ひ。）君は砲兵隊へ行つて、砲兵長の代理をやれ。
使者。はつ。（壕づたひに奥へ消える。）

夫人は兵卒の助けを借りて、負傷者を穴へ運ぶ。
クロンイエは、壞れた堡壘に寄りかゝつて双眼鏡で戰況を眺める。敵の砲撃は刻々猛烈さを加へる。
二十歳ぐらゐの娘が右手の崖を攀ぢ登つてくる。彼女は片手に銃をもち、片手に負傷した少年兵ヨハンネスを引づるやうにして抱へてゐる。
彼女は塹壕まで辿りつくと、崩れるやうにヨハンネスをそこに置く。瀕死のヨハンネスはすつかり意識を失つてゐるが、片手になほボアの旗をしつかりと握つてゐる。

娘。（クロンイエ夫人に。）奥さん、ヨハンネスがやられました。胸を打たれたんです。まだ息があるやうです。
クロンイエ。（振返つて。）畜生つ！ そいつを死なすな。
夫人。（驅けよつて。）ヨハンネス、ヨハンネス、分りますか。まあ、旗をしつかりと握つて！……
娘。（泣きながら。）勇敢なヨハンネス、あんたはまだ死なないんだよ。奥さん、この子は下の塹壕で、私が狙撃をしてゐる間

に旗を立てゝずつと立つてゐたんです、そして丸のくる中で愉快さうに口笛を吹いてゐたんです。口笛が止まつたと思つたらこの子は私に寄り掛るやうに倒れかゝつてきたんです。

夫人。（娘の片腕から血が流れてゐるのに目を止めて、）おや、あんたも負傷してる……

娘。何でもありません、何でもありません。それより早くこの子を手當してやりませう。

娘は少年の手から旗を離さうとする。少年は無自覺に旗を奪はれまいとして、悶きながら抵抗する。そして夢中で大聲をあげて叫ぶ。

ヨハンネス。イギリスを、やつつけろ！　イギリスを、やつつけろ！　萬歳！

彼は息絶える。夫人と娘は少年の屍の前に跪いて首を垂れる。

クロンイエ。死んだのか。（少年の屍の前に立つて、ちよつと沈默の後、）ヨハンネス、お前の血にかけてわしは誓ふのぢや。わしはボアの獨立と自由のために、イギリスの暴虐に對して最後まで戰ふぞ。（少年の手から旗を離し、自分で高く揭げる。）この子が最後まで守つたこの旗の下で、さあみんな戰へ！　最後まで戰へ！自由か死かぢや。

兵士等は銃を構へて射擊を開始する。娘は再び銃を取つて塹壕を飛出して坂を驅け下りてゆく。兵士はつぎ／＼と倒れる。クロンイエ夫人は一人で負傷者の間を飛びまはる。

天地の崩るゝ如き敵の一せいの砲擊。

──終幕──

定價			
	一冊	六冊	十二冊
定價	八十錢	四圓八十錢	九圓六十錢
送料	叁錢	送料共	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年十一月十八日印刷

昭和五年十二月一日發行　（禁轉載）

編輯發行人　島中雄作

印刷人　竹内喜太郎

東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング五八八區

中央公論社

電話丸ノ内(23)五三五・五三六・五三七番

振替東京三四番

同長野三二〇五番


赤箱
マツダランプ
マツダランプは強くて上品でいつまでも
明るく電氣も御徳でありますから電球は
マツダランプにお決め下さい。
マツダランプ
マツダ
東京電氣株式會社

UO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**

THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. TOKYO JAPAN.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

